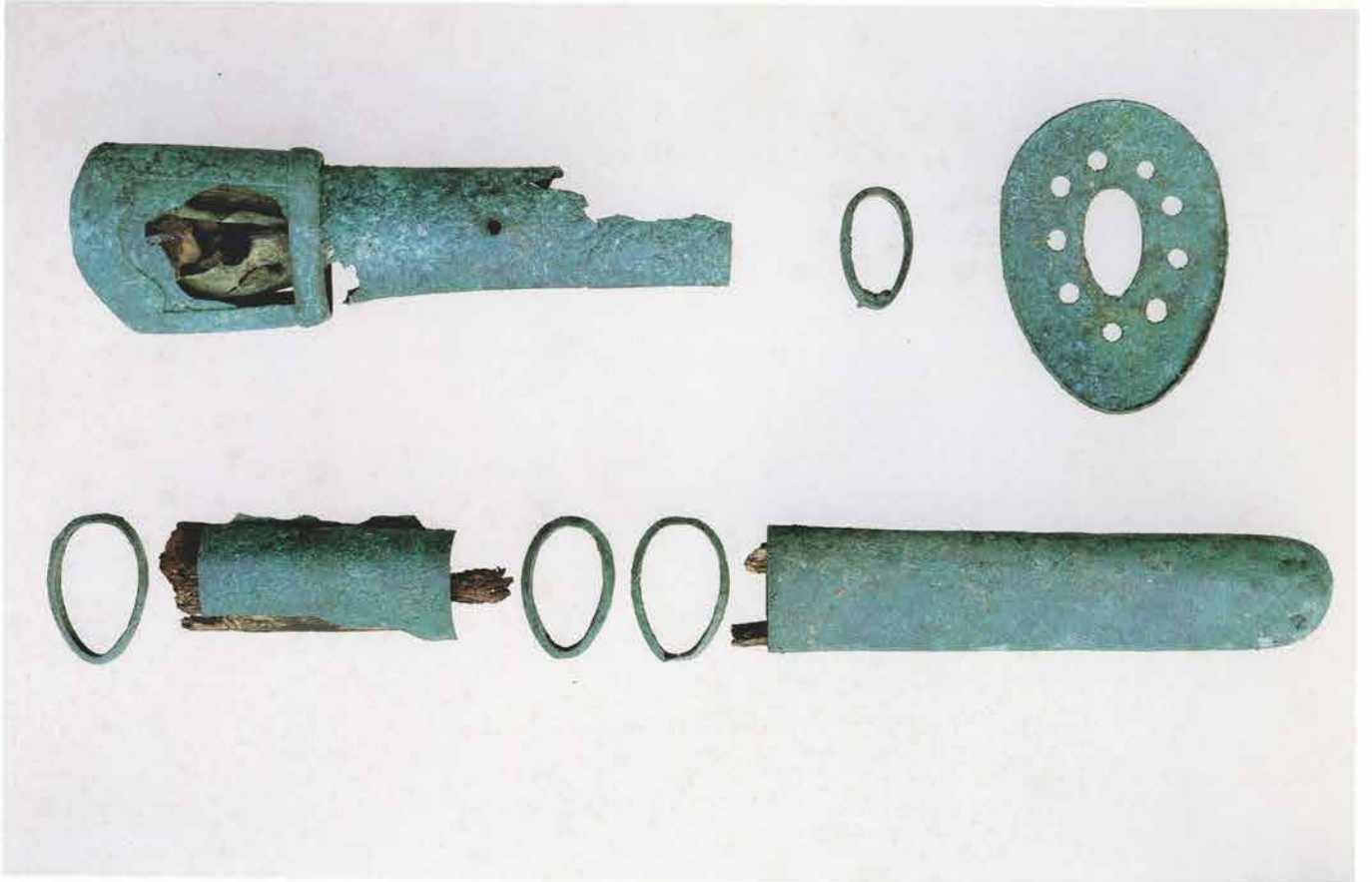


奥原古墳群



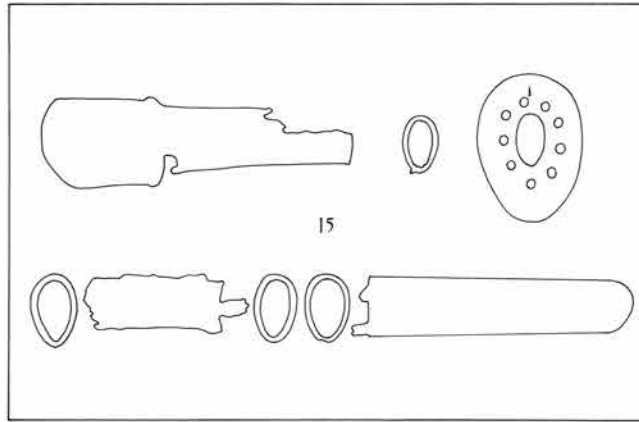
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



刀装具



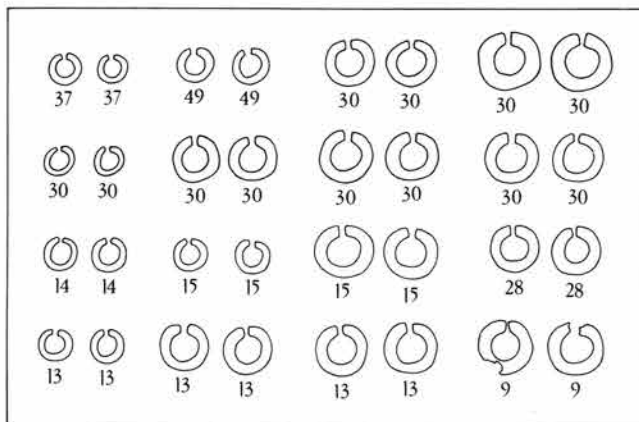
金環



1. 出土遺物

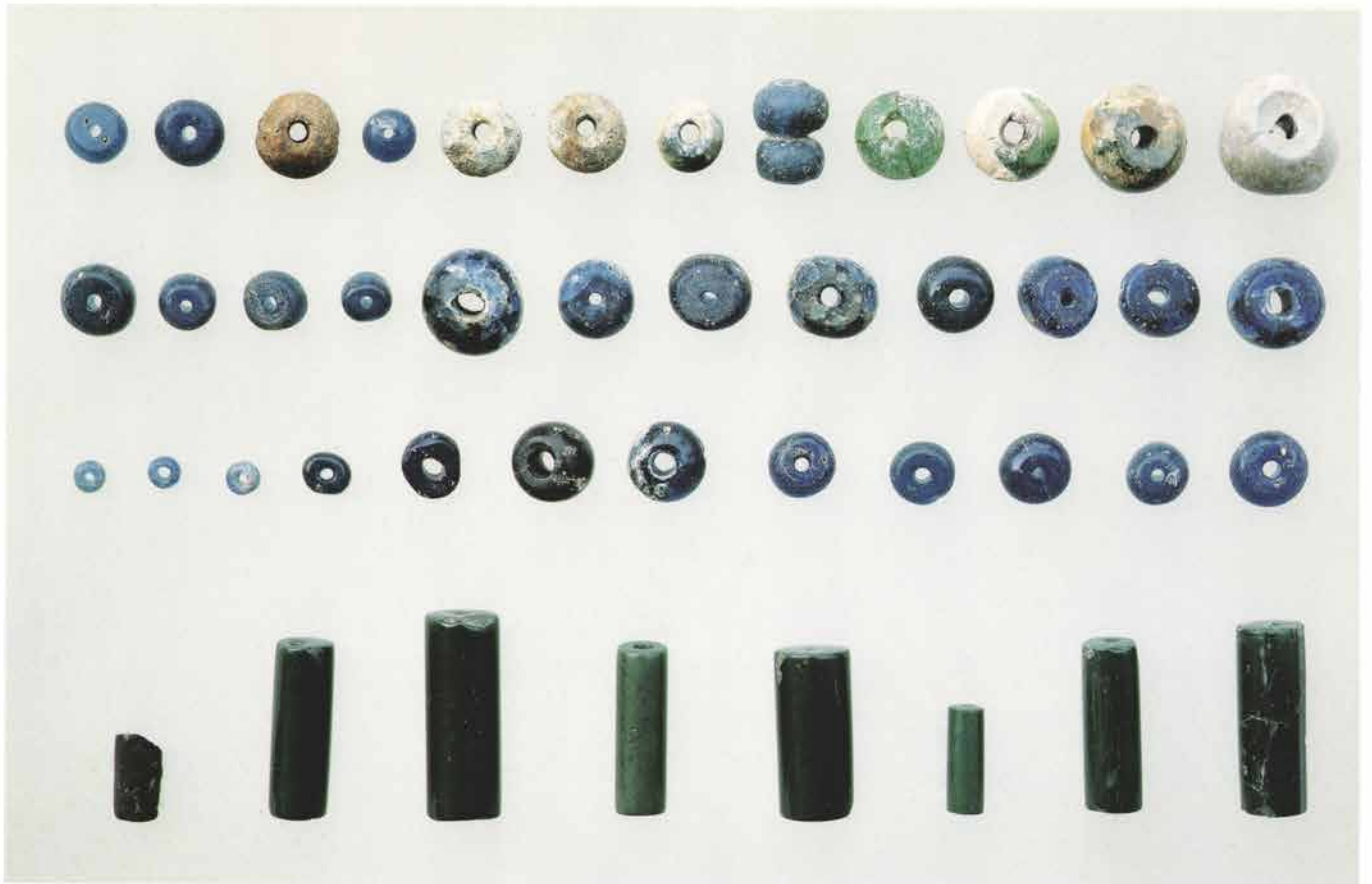
右上の柄の長径は8cmである。

刀装具

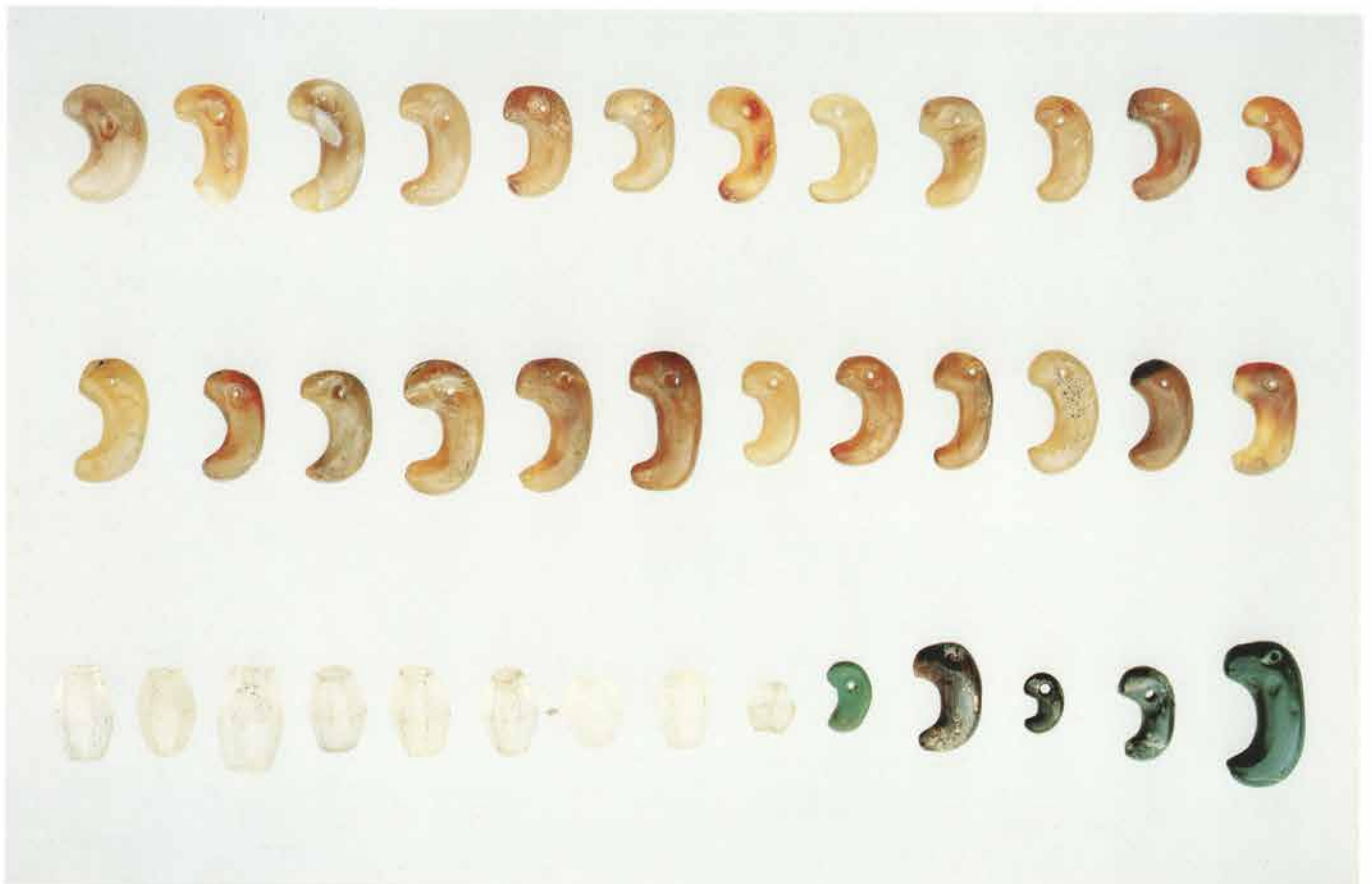


右上の遺物の短径は3cmである。

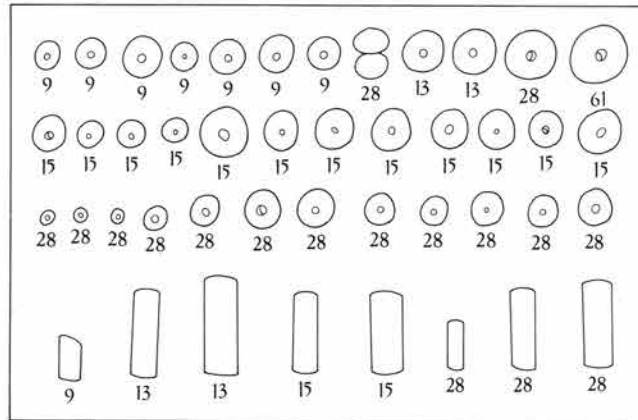
金環



小玉・丸玉・管玉



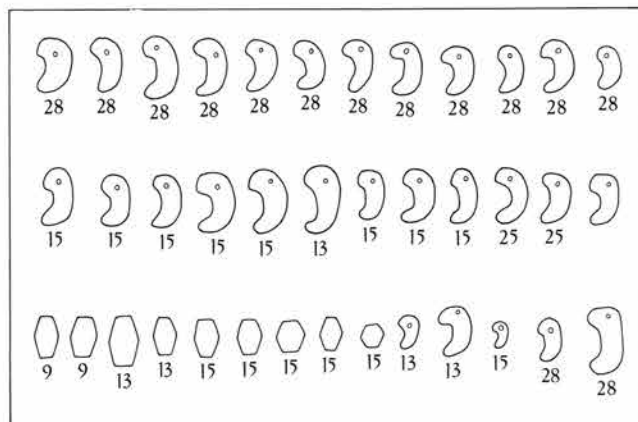
勾玉・切子玉



2. 出土遺物

小玉・丸玉・管玉

右下の管玉の長さは2.3cmである。



勾玉・切子玉

右下の勾玉の長さは3.6cmである。

序

昭和30年代後半に計画され、昭和40年代に入って建設に着手された群馬用水は、昭和における一大灌漑事業であり、これにより赤城・榛名両山麓の水不足も解消され、農業の近代化もすすめられました。

一方、用水の建設工事や、これに関連する地域ですすめられた土地改良事業に伴い、破壊・消滅する可能性のある埋蔵文化財も数多く予想され、これらの保護対策を検討し、早急に対応する必要が生じてきました。その一環として、関連地域での埋蔵文化財の発掘調査が実施され記録保存が計られました。

奥原古墳群の発掘調査もそのうちの一つですが、狭い地域に65基の古墳が現存した典型的な古墳群であり、土地改良に伴う破壊も最少限に止めることが望まれたところでした。幸い、このうちの14基については現状で保存することが事前の調整で了解され、さらに53号墳については調査終了後、関係の方々の御理解をいただき、設計変更の上、保存活用することとなったのはほんとうに喜ばしいことでした。

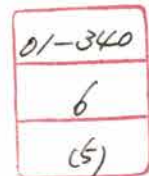
種々の事情が重なって、報告書の刊行も遅れておりましたが、ここによりやく公表するはこびとなりました。古代群馬の古墳研究の資料として活用され、研究の一助にいただければ幸いです。

発掘調査と整理報告を実施するにあたって、御理解と御協力をいただいた関係の方々には改めて厚く感謝の意を表します。

昭和58年3月10日

群馬県教育委員会

教育長 横山 巖



例 言

1. 本書は群馬用土地改良事業に発掘調査された群馬県群馬郡榛名町大字本郷字奥原に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡名は字名をもとに^{おくぼら}奥原古墳群と命名した。
3. 発掘調査は群馬県委員会の指導のもとに「群馬用土地改良地域埋蔵文化財調査委員会」を組織した。梅沢重昭、松本浩一を発掘担当者として昭和45年8月1日から昭和46年4月26日までに三次にわたる調査を実施した。各回の調査員はI章、発掘調査の経緯 に記載し、その他の調査参加者は下記にまとめた。
4. 分布調査で確認された65基の古墳中、発掘調査を実施した古墳は35基でありトレンチ調査を重点に墳丘及び石室部分のみを全面発掘した。それゆえ墳丘及び周堀部分の調査には不十分な点が多い。
5. 発掘資料は調査時より一部分のみ整理作業を行っていたが昭和57年4月から昭和58年3月までの1年間、群馬県埋蔵文化財調査事業団において本格的に報告書作成のための作業を実施した。
6. 報告書の作成は下記の発掘調査参加者が集まって担当者会議をもち報告書の構想と製作手順、執筆について検討した。

▽梅沢重昭	群馬県立歴史博物館	松本浩一	群馬県埋蔵文化財調査事業団
▽原田恒弘	〃	細野雅男	〃
神保侑史	群馬県教育委員会	▽平野進一	〃
鬼形芳夫	群馬町教育委員会	▽石塚久則	〃
7. 本書の執筆分担はつぎのとおりである。

I章—原田 II章—梅沢 III章—2、15、30、37、45、49、50、62、64、65号墳—石塚 3、5、18、23、27、33号墳—神保 6、9、25、26、28、58、61号墳—鬼形 7、8、10、11、13、14号墳—松本 21、22、35、52、63号墳—平野 IV章—石塚 V章—花岡、石塚 VI章—森本、吉田 VII章—石塚 VIII章—松本 IX章—梅沢
8. 須恵器の胎土分析は群馬県工業試験場▽花岡紘一氏に依頼し、その成果を寄稿いただいた。
9. 人骨の鑑定は聖マリアンナ医科大学▽森本岩太郎氏、▽吉田俊爾氏に依頼し、その成果を寄稿いただいた。
10. 本書の編集は松本浩一が統括し、辻口敏子(嘱託員)、石塚久則が協力した。
11. 報告書作成の実質的な整理作業は辻口敏子を中心に下記の者があたった。

宮内菊江	佐藤美代子	小林ふく子	柳井さよ里	樺沢禄子	石田清美
------	-------	-------	-------	------	------
12. 写真図版のうち巻頭及び遺構写真の撮影は原田を中心に各調査員があたった。遺物写真は佐藤元彦氏(群馬県埋蔵文化財調査事業団 写真室)に依頼した。
13. 出土遺物の人骨、金属器、木器などの保存処理は浜野和宗作、関邦一、宮沢健二氏(群馬県埋蔵文化財

調査事業団（保存処理室）に依頼した。

14. 発掘調査の実施にあたっては地元教育委員会、ならびに地域住民の絶大なる御支援をいただき厚く御礼申し上げます。
15. 本古墳群に関する全ての記録類及び出土遺物の全ては群馬県埋蔵文化センターにて保存管理してある。研究及び保護普及面で是非活用していただきたい。
16. 発掘調査に参加いただいた方々は調査員以外は下記の方々である。御名前を記して御協力に感謝します。

石川正之助	原島利枝	東国古文化研究所
石川れい子	樋口秀次郎	榛名町教育委員会
坂井久能	前原照子	高崎経済大学考古学同好会
中沢貞治	茂木允視	群馬大学考古学研究会

17. 報告書をまとめるにあたり下記の方々に御指導をいただいた。御名前を記して御協力に感謝します。

大谷 猛	加部 二生	櫃本 誠一	福田 健司	大江 正行
------	-------	-------	-------	-------

群馬歴史考古同人会

凡 例

本書の記述ならびに図版は以下の基準に従っています。

〔遺 構〕

基準高さは各古墳の墳丘断面図及び石室平面に標高で記入した。

墳丘平面図は発掘調査では $\frac{1}{50}$ の縮尺で実測し、本書では $\frac{1}{200}$ の縮尺に統一した。

墳丘断面図は発掘調査では $\frac{1}{10}$ 又は $\frac{1}{20}$ で実測し、本書では $\frac{1}{100}$ の縮尺に統一した。

石室実測図は発掘調査では $\frac{1}{10}$ と $\frac{1}{20}$ で実測し、本書では $\frac{1}{40}$ の縮尺に統一した。

古墳の主軸は石室の中心線とし主軸方向はその線と磁北とのなす角度で計算表示した。

墳丘実測図、石室実測図、墳丘及び土層断面図の細部の観察基準については次頁に概念図を示した。

〔遺 物〕

遺物番号の呼称は遺物実測図の下に4ケタで表示し、上2ケタは古墳番号、下2ケタは各古墳の通し番号とした。

土器で大形の甕類は $\frac{1}{6}$ 、小形の瓶、杯類は $\frac{1}{3}$ の縮尺に統一した。

埴輪の実測図は $\frac{1}{6}$ の縮尺に統一した。

玉類の実測図は $\frac{1}{2}$ の縮尺に統一した。

馬具、鉄釘、金環、鉄鏃の実測図の縮尺は $\frac{1}{2}$ を基本とした。

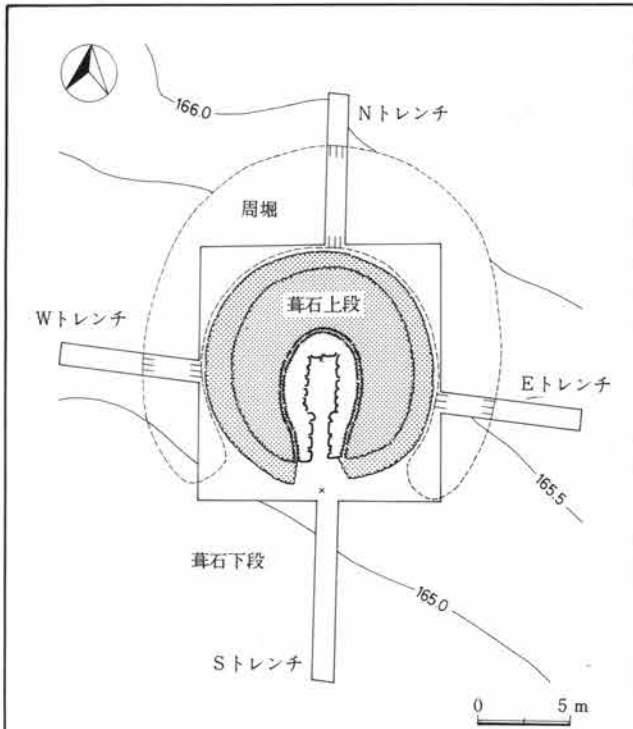
刀子の実測図は $\frac{1}{3}$ の縮尺に統一した。

大刀身については縮尺を $\frac{1}{4}$ に統一し、刀装具など細部の表現の必要なものに関しては縮尺を $\frac{1}{2}$ とした。

遺物出土状態で原位置を保っていたと考えられるものは極力図化することに心がけた。前庭出土の遺物については石室実測図中に入れた。また石室内出土遺物については別に図化した。縮尺率は前庭で $\frac{1}{40}$ 、石室は $\frac{1}{20}$ とし、記入数字は古墳出土遺物の通し番号と合致させた。

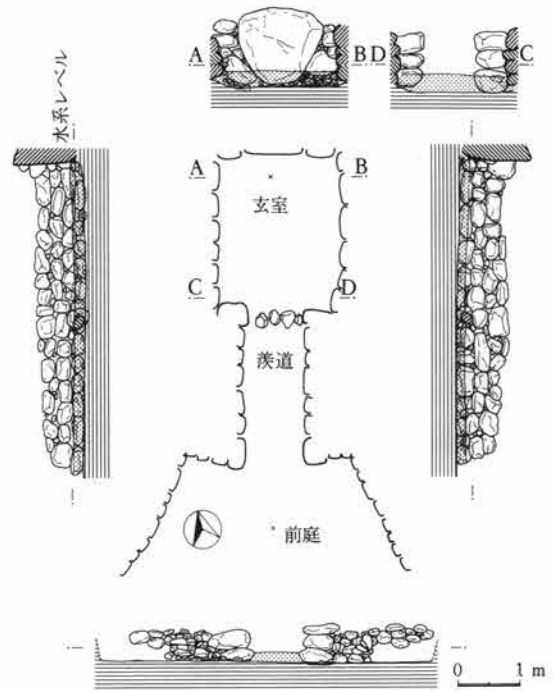
石室遺物出土状態図は次頁に概念図で細部の基準を表示した。

図版中で縮尺が不揃いの場合は遺物番号の次に縮尺の数字を記入した。

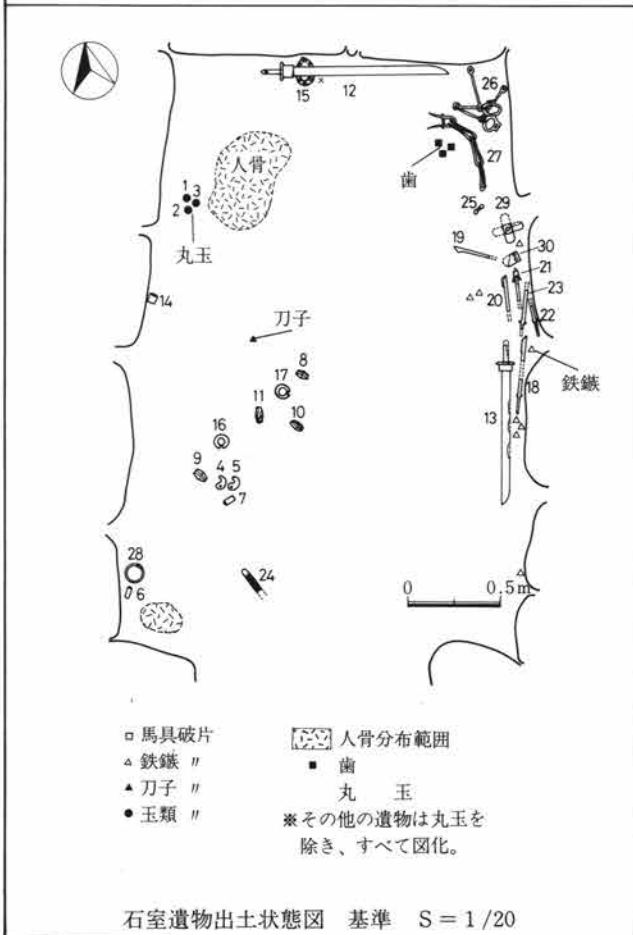


※縮尺はS=1/200を原則とするが、例外としてS=1/300を使用する。

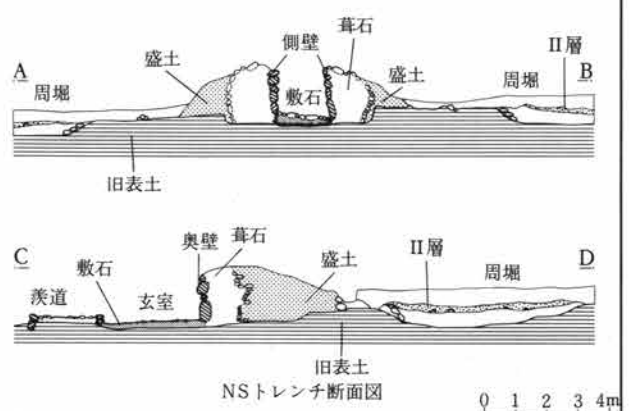
墳丘実測図 基準 S=1/200



石室実測図 基準 S=1/40



石室遺物出土状態図 基準 S=1/20



A-B EWトレンチ断面図
C-D NSトレンチ断面図

II層浅間B軽石
盛土
側・奥壁断面

旧表土
敷石

EW・NSトレンチ断面図 基準 S=1/100

奥原古墳群

目 次

I	発掘調査の経緯	1
II	奥原古墳群の地理的・歴史的環境	4
III	発掘調査を実施した古墳の概要	11
	遺構と遺物	11
	墳丘断面図	141
	石室計測表	153
	出土遺物一覧表	155
	出土遺物観察表	157
IV	奥原遺跡	197
V	奥原古墳群出土須恵器の胎土分析	201
VI	奥原古墳群出土人骨について	208
VII	出土遺物の検討	212
VIII	終末期古墳の石室形態	216
IX	奥原古墳群の歴史的位置	219

図版

卷頭図版

- | | | | |
|--------|-----|--------|----------|
| 1 出土遺物 | 刀装具 | 2 出土遺物 | 小玉・丸玉・管玉 |
| | 金環 | | 勾玉・切子玉 |

表

1 周辺遺跡の概要	4	8 出土遺物観察表 装身具	188～196
2 石室計測表 (1)・(2)	153～154	9 〃 金具	196
3 出土遺物一覧表 (1)・(2)	155～156	10 奥原遺跡関連の瓦	197
4 出土遺物観察表 土器1～17	157～173	11 分析試料の肉眼観察表	203
5 〃 円筒埴輪	174	12 分析条件	204
6 〃 武器	175～185	13 標準試料の分析値	204
7 〃 馬具	186～188	14 分析値一覧表	205

挿 図

1 奥原古墳群の位置と周辺遺跡	5	15 6号墳石室実測図	23
2 発掘調査区域図	7	16 7号墳墳丘図	24
3 奥原古墳群分布図	8	17 〃 石室実測図	25
4 奥原古墳群発掘調査区域全体図	9	18 〃 遺物出土状態図	26
5 2号墳墳丘図	12	19 〃 遺物実測図	26
6 〃 遺物実測図	12	20 8号墳墳丘図	27
7 3号墳墳丘図	14	21 〃 遺物実測図	27
8 〃 遺物実測図	15	22 〃 石室実測図	28
9 〃 石室実測図 (1)・(2)	16～17	23 9号墳墳丘図	29
10 5号墳墳丘図	19	24 〃 石室実測図	30
11 〃 遺物実測図	19	25 〃 遺物出土状態図	31
12 〃 石室実測図	20	26 〃 遺物実測図	31
13 6号墳墳丘図	22	27 10号墳墳丘図	32
14 〃 遺物実測図	22	28 〃 遺物実測図	32

29	10号墳石室実測図	33	63	25号墳墳丘図	65
30	11号墳墳丘図	34	64	〃 石室実測図 (1)・(2)	66~67
31	〃 石室実測図	35	65	〃 遺物出土状態図	68
32	〃 遺物実測図	36	66	〃 遺物実測図 (1)	68
33	13号墳墳丘図	38	67	〃 〃 (2)	69
34	〃 遺物出土状態図	38	68	26号墳墳丘図	70
35	〃 石室実測図	39	69	〃 石室実測図	71
36	〃 遺物実測図 (1)	40	70	27号墳墳丘図	72
37	〃 〃 (2)	41	71	〃 石室実測図	73
38	〃 〃 (3)	42	72	〃 遺物実測図	74
39	14号墳墳丘図	44	73	28号墳墳丘図	76
40	〃 遺物出土状態図	44	74	〃 遺物出土状態図	76
41	〃 石室実測図	45	75	〃 玉類復原予想図 I 型・II 型	77
42	〃 遺物実測図 (1)	46	76	〃 玉類分布図 I 型・II 型	77
43	〃 〃 (2)	47	77	〃 石室実測図	78
44	15号墳墳丘図	48	78	〃 遺物実測図	79
45	〃 石室実測図	49	79	30号墳墳丘図	81
46	〃 遺物出土状態図	50	80	〃 遺物出土状態図	81
47	〃 遺物実測図 (1)	50	81	〃 石室実測図	82
48	〃 〃 (2)	51	82	〃 遺物実測図 (1)	83
49	〃 〃 (3)	52	83	〃 〃 (2)	84
50	〃 〃 (4)	53	84	〃 〃 (3)	85
51	18号墳墳丘図	54	85	〃 〃 (4)	86
52	〃 遺物実測図	54	86	33号墳墳丘図	87
53	〃 石室実測図	55	87	〃 遺物実測図	87
54	21号墳墳丘図	56	88	〃 石室実測図	88
55	〃 遺物実測図	57	89	35号墳墳丘図	89
56	22号墳遺物実測図	58	90	〃 石室実測図	90
57	〃 墳丘図	59	91	37号墳墳丘図	91
58	〃 石室実測図	60	92	〃 遺物実測図 (1)	92
59	23号墳墳丘図	61	93	〃 〃 (2)	93
60	〃 遺物出土状態図	62	94	〃 〃 (3)	94
61	〃 遺物実測図	62	95	45号墳遺物実測図	94
62	〃 石室実測図	63	96	49号墳石室実測図 (1)・(2)	96~97

97	49号墳墳丘図	98	131	62号墳石室実測図	129
98	〃 遺物出土状態図	99	132	63号墳墳丘図	130
99	〃 遺物実測図 (1)	100	133	〃 遺物実測図 (1)	130
100	〃 〃 (2)	101	134	〃 〃 (2)	131
101	〃 〃 (3)	102	135	〃 石室実測図	131
102	〃 〃 (4)	103	136	64号墳墳丘図	133
103	〃 〃 (5)	104	137	〃 遺物出土状態図	133
104	50号墳墳丘図	106	138	〃 石室実測図	134
105	〃 遺物出土状態図	106	139	〃 遺物実測図 (1)	135
106	〃 石室実測図	107	140	〃 〃 (2)	136
107	〃 遺物実測図	108	141	〃 〃 (3)	137
108	52号墳墳丘図	109	142	〃 〃 (4)	138
109	〃 石室実測図	110	143	65号墳墳丘図	139
110	〃 遺物出土状態図	111	144	〃 遺物実測図	139
111	〃 遺物実測図	111	145	〃 石室実測図	140
112	53号墳墳丘図	113	146	EWトレンチ断面図 (1)	141
113	〃 遺物実測図 (1)	114	147	NS 〃 (1)	142
114	〃 〃 (2)	115	148	EW 〃 (2)	143
115	〃 〃 (3)	116	149	NS 〃 (2)	144
116	〃 墳丘復原図	117	150	EW 〃 (3)	145
117	〃 復原図	118	151	NS 〃 (3)	146
118	58号墳墳丘図	119	152	EW 〃 (4)	147
119	59号墳墳丘図	120	153	NS 〃 (4)	148
120	〃 石室実測図	121	154	EW 〃 (5)	149
121	〃 遺物実測図	121	155	NS 〃 (5)	150
122	〃 遺物出土状態図	122	156	EW 〃 (6)	151
123	60号墳墳丘図	123	157	NS 〃 (6)	152
124	〃 遺物出土状態図	123	158	円筒埴輪部位名称	174
125	〃 石室実測図	124	159	直刀・付属品の各部名称模式図	175
126	〃 遺物実測図	125	160	鉄鏃形態別模式図	178
127	61号墳墳丘図	126	161	馬具 (轡) 計測表 (1)	186
128	〃 遺物実測図	127	162	〃 (鎧) 計測表 (2)	187
129	62号墳墳丘図	128	163	〃 (鈴) 模式図	187
130	〃 遺物実測図	128	164	〃 (杏葉) 模式図	187

165	馬具（飾金具）模式図	188	176	太田・金山窯跡群試料	206
166	装身具（金環）模式図	189	177	渥美・常滑焼試料	206
167	玉類形態別模式図	191	178	県内窯跡群の領域	207
168	石製模造品模式図	196	179	出土鉄鏃の全点分類（203本）	212
169	金具（釘・釘かくし・座金具）模式図	196	180	杯・蓋の変遷	214
170	奥原古墳群関連瓦実測図（1）	198	181	搬入された土器	215
171	〃	（2）	182	奥原古墳群石室分類（1）	216
172	〃	（3）	183	〃	（2）
173	胎土分析遺物実測図	202	184	〃	（3）
174	奥原古墳群試料	206	185	横穴式石室の変遷	223
175	秋間窯跡群試料	206			

図 版

P L 1	遺 跡	22号墳 33号墳	23号墳 53号墳	29号墳
2	〃	3号墳 7号墳	5号墳	6号墳
3	〃	7号墳 11号墳	8号墳 13号墳	10号墳
4	〃	14号墳 25号墳	15号墳	22号墳
5	〃	24号墳 29号墳 59号墳	27号墳 30号墳	28号墳 58号墳
6	〃	28号墳 49号墳	33号墳	37号墳
7	〃	49号墳		
8	〃	50号墳	52号墳	53号墳
9	〃	53号墳		
10	〃	60号墳 64号墳	61号墳	62号墳
11	遺 物	大 刀		
12	〃	鉄 鏃		

P L 13	遺 物	鉄 鍬		
14	〃	〃	馬 具	座金具
15	〃	馬 具		
16	〃	〃		
17	〃	〃		
18	〃	須惠器		
19	〃	〃		
20	〃	〃		
21	〃	〃		
22	〃	〃		
23	〃	〃		
24	〃	〃		
25	〃	〃		
26	〃	〃		
27	〃	〃		
28	〃	須惠器施文方法		
29	人 骨			
30	〃			

付 図

奥原古墳群

I 発掘調査の経緯

1 発掘調査に至る経緯

本調査は、群馬用土地改良地域（榛名幹線地域）内に存在する埋蔵文化財の発掘調査である。群馬用土地改良事業と関連してのその経緯についての概要は次のとおりである。

群馬用水建設事業は、昭和38年度から開始され、水資源開発公団により昭和44年度に幹線水路が建設され、赤城・榛名山麓地域の農業改良事業が大規模におしすすめられることになった。水路は沼田市岩本の利根川右岸に取水口を建設し、北群馬郡子持村測上まで隧道により導水され、赤城分水工で赤城・榛名両幹線に分岐される。赤城幹線は赤城南面地域に、榛名幹線は榛名東南面地域にそれぞれ導水され、両幹支線の総延長は約80kmにおよんでいる。

群馬用土地改良事業の目的は、前述した両幹線地域の農業近代化であり、県営事業を主体とし、その主たる事業は、ほ場整備も灌漑水利施設の設置及び新規開田、畑地灌漑とにわけられる。この結果受益地域は、赤城幹線では、赤城村・北橋村・富士見村・前橋市・大胡町・宮城村・粕川村・新里村の8市町村、榛名幹線では子持村・渋川市・吉岡村・榛東村・箕郷町・榛名町の6市町村、合計14市町村が対象となっている。

一方、これら群馬用土地改良地域内に分布する遺跡が破壊される危険があるため、昭和43年度に群馬県教育委員会では、埋蔵文化財の保護について水資源公団に協力を要請し、工事着手以前に発掘調査を実施するための具体的方法について協議し、当該地域については、昭和43年4月～5月にかけて埋蔵文化財発掘調査を実施した。次いで、土地改良区域内に所在する遺跡の分布調査を実施し、その結果赤城幹線地域では471遺跡、榛名幹線地域では208遺跡が確認され、土地改良事業に伴う埋蔵文化財保護との調整の資料としたものである。特に埋蔵文化財に影響を与えるのは新規開田事業で、この場合畦畔の整備と削土、盛土などが施行され、畑地灌漑を中心とした区域では区画整理及び給水管の埋設工事に伴う部分的な遺跡地での影響があり、いずれも遺跡保存の観点から工事内容と併せて、その保存と調整に対応する必要が生じた。

榛名幹線地域内の榛名町本郷奥原地区では、田畑輪換のほ場整備事業が計画され、当該地区における57基の古墳と、本郷的場地区に20基内外の古墳が確認されたことから、これら古墳群の保存について、群馬県教育委員会では群馬県耕地開発課及び群馬用土地改良事業所と協議を重ねた。その結果、的場地区では昭和44年度に4基の古墳について発掘調査を実施し、本郷奥原地区に存在する古墳群については、工事の内容から全体の保存は困難であること、工事の着手が昭和46年度に予定され、調査は昭和45年度内に終了しなければならないこと、当該地区の農作物の収穫の関係から、調査の実施は夏季以降に限定されること、調査に要する経費のこと等種々の問題が提起された。

これらの問題について協議の結果、まず古墳群の中で比較的保存が良好な10基内外の古墳を保存する。工事区域外の古墳については現状保存とする。調査は昭和45年度に実施し、実施主体は群馬県教育委員会、調査は「群馬用土地改良地域埋蔵文化財調査委員会」を設置し実施する。調査及び工事施行にあたっては、実施主体者及び関係機関とで調整を図る等の協議がなされた。

この協議結果にもとずき、群馬県教育委員会では、群馬用土地改良地域に含まれる14市町村教育委員会を核として調査委員会を組織することとし、当該市町村教育長会議の結果これが了承され、次のとおり役員が選出された。

群馬用土地改良地域埋蔵文化財調査委員会

委員長	田村 寧	勢多郡新里村教育委員会教育長
副委員長	田中 善太郎	勢多郡北橋村教育委員会教育長
同	喜美候部 継宗	群馬郡榛名町教育委員会教育長
会計監査	田島 清一郎	勢多郡宮城村教育委員会教育長
同	生方 真治	北群馬郡子持村教育委員会教育長

委員	白石 実三郎	勢多郡粕川村教育委員会教育長
同	井上 宇之助	勢多郡大胡町教育委員会教育長
同	岸 恒 雄	前橋市教育委員会教育長
同	古屋 雅 一	勢多郡富士見村教育委員会教育長
同	栗田 義 雄	北群馬郡吉岡村教育委員会教育長
同	石坂 金 由	北群馬郡榛東村教育委員会教育長
同	清水 藤太郎	群馬郡箕郷町教育委員会教育長
同	藤井 熊 男	群馬郡群馬町教育委員会教育長

本調査委員会の主たる業務は、発掘調査の実施、会計事務、渉外接渉、諸記録の作成等を行うもので、調査費627万円をもって調査を実施することとなった。

一方、土地改良事業に伴う対外接渉や協力体制等の観点から行政レベルでの連絡調整の必要性が生じたため、群馬県教育委員会事務局社会教育課、群馬県耕地開発課、群馬用水土地改良事業所、群馬県中部教育事務所、同西部教育事務所の関係諸機関をもって、「群馬用水土地改良地域埋蔵文化財調査連絡協議会」を組織し、発掘調査並びに土地改良事業が円滑に行えるよう諸業務を行った。

2 発掘調査

群馬用水地域の埋蔵文化財分布調査の一環として実施した奥原地区の古墳群のマッピング調査では57基の古墳が確認された。これらは、東西約230m、南北約320mの範囲に群集し、いずれも円墳と推定された。われわれは、これを群集墳の概念でとらえ、ここに「奥原古墳群」という名称を与え、残存する古墳について1号墳から57号墳とし、このうち、北側に存在する38号墳～43号墳、北東に存在する46号墳～48号墳の9基については、工区外のため調整対象から除外した。また工区内に存在する24号墳、29号墳、32号墳、36号墳、44号墳の5基については保存が良好なため現状保存とし、合計14基について保存措置を講じ、本調査では28基を調査対象とした。これらのほかの残り15基については、いずれも工区外に散在するため、調査対象から除外し現状保存を図ることとした。なお、53号墳については、調査の結果本古墳群の中心的古墳であり、保存状態も良好なため改めて調整の上保存措置を講じた。

調査は、尾崎喜左雄群馬大学名誉教授に顧問をお願いし、担当者に勢多郡宮城村立宮城小学校教諭松本浩一、群馬県教育委員会事務局社会教育課社会教育主事補梅沢重昭がなり、熊谷高校教諭佐藤忠雄、群馬県教育委員会事務局社会教育課社会教育主事補神保侑史、同指導主事岸栄、主事原田恒弘、文化財調査補助員平野進一、同鬼形芳夫、同松尾宜方、同石塚久則が調査員になって実施された。また、調査実施にあたっては、地元榛名町教育委員会事務局教育長戸塚實一氏、同社会教育主事高橋正博氏の協力を得るとともに、発掘調査の作業員として、以下奥原地区の方々への献身的な協力をいただいている。

(1) 第一次発掘調査

調査期間 昭和45年8月1日～8月22日

担当者 松本浩一

調査員 佐藤忠雄、神保侑史、鬼形芳夫、石塚久則、佐藤正男、鈴木 操、細野明子、大江正行、斉木秀雄、江原 清、東京農大第二高等学校郷土部、県立榛名高等学校郷土部

調査古墳 7号墳（8月1日～8月20日） 8号墳（8月5日～8月22日） 10号墳（8月1日～8月22日）
11号墳（8月2日～8月22日） 13号墳（8月1日～8月19日） 14号墳（8月2日～8月20日）

(2) 第二次発掘調査

調査期間 昭和45年9月26日～12月20日

担当者 梅沢重昭

調査員 磯貝福七、神保侑史、原田恒弘、丑木幸男、平野進一、松尾宜方、鬼形芳夫、石塚久則、右島和夫、

鈴木 操、綿貫文子、吉江由美子、県立高崎高等学校郷土部、東京農大第二高等学校郷土部

調査古墳 2号墳(9月26日～10月22日) 3号墳(9月26日～10月23日) 5号墳(10月6日～11月3日)
6号墳(10月4日～11月3日) 9号墳(11月28日～12月12日) 25号墳(11月24日～11月29日)
26号墳(11月28日～12月7日) 27号墳(12月2日～12月7日) 28号墳(11月28日～12月7日)
30号墳(12月2日～12月7日) 33号墳(11月28日～12月7日) 50号墳(10月8日～11月3日)
52号墳(10月10日～10月23日)

(3) 第三次調査

調査期間 昭和46年1月12日～4月26日

担当者 梅沢重昭、松本浩一

調査員 佐藤忠雄、神保侑史、原田恒弘、岸 栄、飯塚喜代子、丑木幸男、平野進一、鬼形芳夫、石塚久則、
綿貫文子、大滝栄一、徳江 洋、笹岡規雄、吉江由美子

調査古墳 15号墳(3月20日～4月18日) 18号墳(3月19日～4月16日) 21号墳(3月12日～4月14日)
22号墳(3月12日～4月18日) 23号墳(3月16日～4月19日) 35号墳(1月27日～3月13日)
37号墳(2月5日～3月10日) 49号墳(1月13日～3月30日) 53号墳(1月13日～4月2日)
58号墳(2月2日～2月27日) 59号墳(2月3日～3月4日) 60号墳(2月3日～3月8日)
61号墳(2月8日～3月15日) 62号墳(3月9日～4月14日) 63号墳(3月10日～3月20日)
64号墳(3月12日～4月20日) 65号墳(2月2日～2月8日)

以上第一次から第三次にいたる調査では、調査古墳の総数は36基となった。なお58号墳から65号墳までの8基は、調査中に新たに発見されたもので、順次番号を付したものである。

本古墳群の調査は、前述のとおり総数36基を数え、当初予定した28基を8基上まわり、49号墳、53号墳など数基の大型古墳と墳丘下より住居跡が確認されるなどの要因も加わり、約7ヶ月間という限定された期間の中で調査は困難を極めたが、終了予定期間を約1ヶ月延長して終了することができた。なお、本古墳群中最大規模を有する53号墳については、榛名町教育委員会より保存措置を講じたい旨協議が出され、関係機関と協議の結果これが了承され、直ちに保存整備の作業に着手した。

3 整 理

調査終了後各古墳の実測図及び写真について基本的な整理に着手したが、各古墳及び住居跡からの出土遺物は数多く、これら遺物の整理に要する期間も長期にわたることから、予算及び整理体制の面で問題もあり、本格的整理への着手も遅れていた。なおこの間にあっても、古墳出土の金属製品については、錆の進行を防止するため、県教育委員会文化財保護課の手で保存処理を施し、保存への対策を講じた。

奥原古墳群の調査と同様に土地改良事業に伴う発掘調査及び県有施設の建設、河川改修等に伴う発掘調査等はこの後も実施されたが、いずれも単年度事業として計画され、その後の整理については、予算面でも支障をきたしていたことから、これら遺跡の整理は、県の事業として予算化し、逐次整理を進めることとなり、昭和56年度から実施に移された。

奥原古墳群の整理は、昭和57年度事業として予算化され、県教育委員会から(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団へ委託され、埋蔵文化財調査事業団の事業の一環として、昭和57年4月から本格的整理に着手された。

出土遺物の復元、実測、整図等は埋蔵文化財事業団の奥原古墳群整理班で作業を進める一方、昭和57年10月以降発掘調査担当者が集まったの担当者会議をもち、報告書作成上の基本方針及び原稿執筆のための検討を重ねてきた。担当者会議出席者・執筆者及び整理担当者については、例言に記したとおりである。

II 奥原古墳群の地理的・歴史的環境

(1) 付近の地形と位置

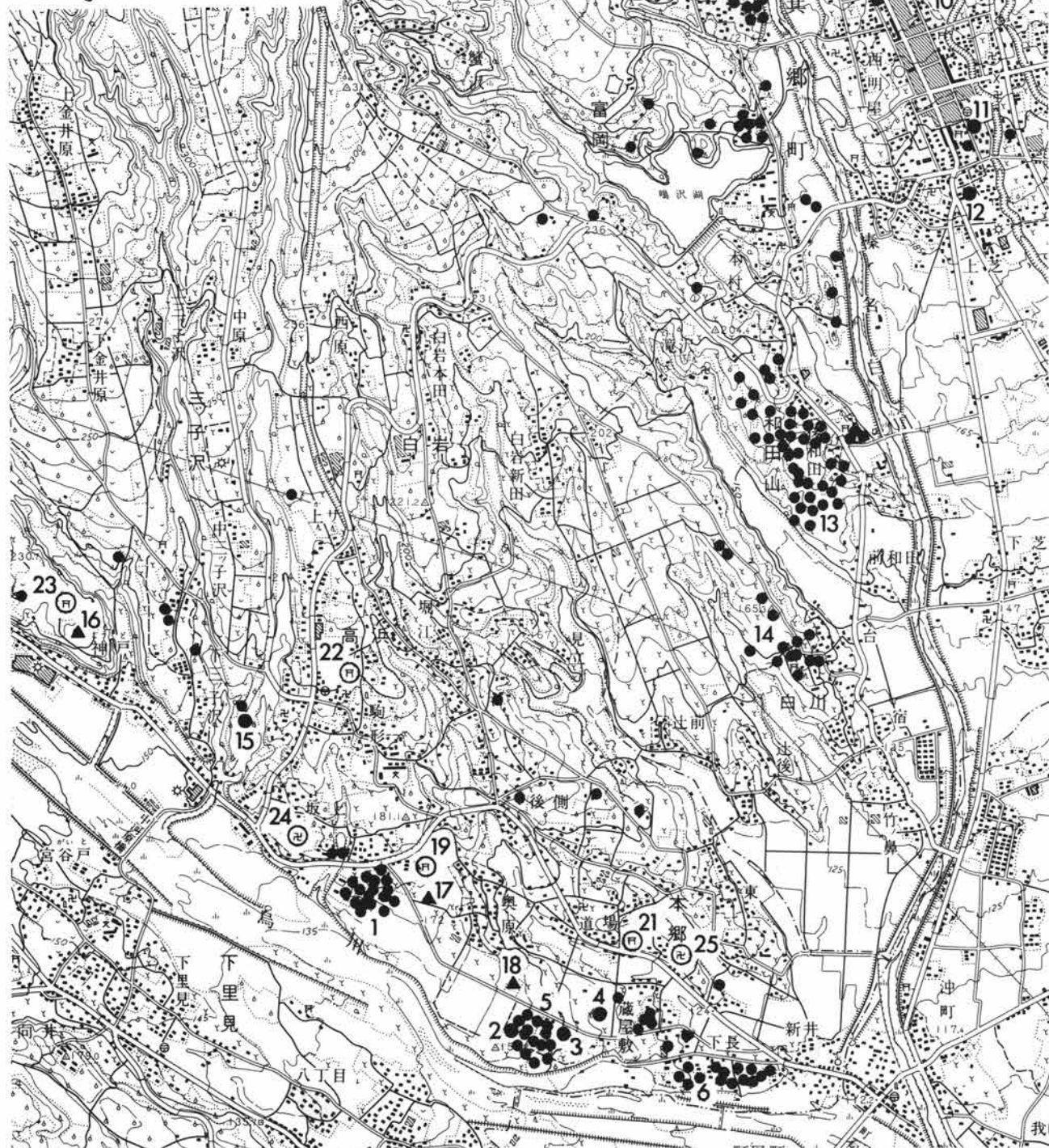
奥原古墳群の位置する地は、群馬郡榛名町大字本郷にある。その名称は本郷の西南部を占める小字奥原の地に集中的に分布する古墳群にたいして本調査において命名したものである。かつて、本古墳群の分布する本郷地区は、群馬郡車郷村で、本郷地区には小字御門の地名が本郷神社付近に残されており、早くから群馬郡域の主要地域であったことが推定される。倭名類聚抄による群馬郡域は上野国ではその中央地域を占める郡で、その高山寺によれば長野・井出・小野・八木・上郊・畔切・嶋名・群馬の8郷を伝えているが、その長野郷を推定できる地域である。

ところで、奥原古墳群の位置する本郷地区は、榛名山南麓の丘陵地形が烏川に終る地である。烏川をはきんでその対岸の地は高崎市町屋町から榛名町下里見であるが、かつては碓氷郡域の地であり、群馬郡西南部の一角を占め、烏川によって碓氷郡域に対向した地を占めていたことになる。そうした本郷地区の地勢について、詳しくたずねれば、

第1表 周辺遺跡の概要

No	名 称	所 在 地	時 代	備 考	註	No	名 称	所 在 地	時 代	備 考	註
1	奥原古墳群	群馬郡榛名町本郷奥原	古 墳 (円墳)	本報告の遺跡 昭和45年全67基	5	14	山口古墳群	群馬郡箕郷町白川山口・台	古 墳 (円墳)		5
2	稲荷塚古墳 (的場E古墳)	群馬郡榛名町本郷的場	古 墳 (帆立)	川原石乱積 上 芝古墳と共通	//	15	伊勢殿山古墳	群馬郡榛名町高浜向原	//		2
3	大塚古墳	群馬郡榛名町本郷大塚	古 墳 (円墳)	最大規模直径45 m 竪穴式石室	//	16	神戸遺跡	群馬郡榛名町神戸	古 墳 (住居址)		//
4	しどめ塚古墳	群馬郡榛名町本郷的場	//		//	17	奥原遺跡	群馬郡榛名町本郷	//		//
5	本郷古墳群	//	//		//	18	本郷遺跡	群馬郡榛名町本郷奥原	//		//
6	下長古墳群	群馬郡榛名町本郷下長	//		//	19	榛名木戸神社	群馬郡榛名町本郷満行原	神 社	従四位 複弁蓮華文の瓦	3
7	車持塚古墳	群馬郡箕郷町善地下善地下ノ原	//		4	20	榛名神社	群馬郡箕郷町東明屋村内北	//		//
8	長者久保古墳群	群馬郡箕郷町金敷平東・西長者久保	//		//	21	本郷神社	群馬郡榛名町本郷伊勢森	//	車持若御子神社 郡衙推定地	//
9	街道東古墳群	群馬郡箕郷町金敷平	//	直径10m、箱式 棺状石室小円墳	//	22	駒形神社	群馬郡榛名町高浜中通	//		6
10	椿山古墳	群馬郡箕郷町西明屋椿山	//		//	23	戸榛名神社	群馬郡榛名町神戸宮山	//	本社登拝入口・ 長野庄万行権現 (曹洞宗)	3
11	上芝古墳	群馬郡箕郷町上芝本町	古 墳 (帆立)		4・10	24	満行山長信寺	群馬郡箕郷町高浜広開戸	寺 院		//
12	四ツ谷古墳	群馬郡箕郷町上芝四ツ谷	古 墳 (円墳)		4	25	満行山景忠寺	群馬郡箕郷町本郷御門	//		//
13	和田山古墳群	群馬郡箕郷町和田山後和田	//	桜塚古墳(旧車郷村49号)を含む	//						

- 註 1 『群馬用水土地改良地区埋蔵文化財発掘調査報告書』(昭和44年度調査概報) 群馬県教育委員会他
 2 『群馬用水事業地域埋蔵文化財分布調査報告書』 1970
 3 尾崎喜左雄『上野国神社名帳の研究』 1974
 4 『箕郷町誌』 歴史編(箕郷町教育委員会) 1975
 5 『群馬県史』 資料編3、原始古代3・古墳(群馬県) 1981
 6 『久留馬村誌』「神社仏閣」(久留馬村誌編集委員会) 1963
 7 『群馬県遺跡地図』(群馬県教育委員会) 1973
 8 『全国遺跡地図』 群馬県(文化庁) 1977
 9 『上毛古墳綜覧』(群馬県) 1938
 10 『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第2輯(群馬県) 1932



第1図 奥原古墳群の位置と周辺遺跡



榛名山南麓の丘陵地帯は烏川によって遮れて、榛名町室田方面から河岸段丘崖を形成し、それは本古墳群の位置する地の東南方の小字下長地区で終わっている。一方、榛名山南麓を流下する白川が本郷地域の東南方で烏川に合流しており、その丘陵地域は、白川に東縁を画され、その東方には榛名山南面の裾野からひろがる関東平野の西北地域を望む位置を占めている。まさに本郷地域は、烏川・白川にはさまれた榛名山南麓の丘陵地帯が終息する地を占めており、その丘陵地域は、烏川・白川に向って開析する小規模な谷地が各所に発達して、起伏に富んだ地形を形成している。そしてその地は東方にひろがる平野部側から見れば、西方に望む一丘陵地域の取っ付に位置しているということになる。

このような地の一角を占めて位置する奥原古墳群は、榛名町高浜方面から南下する榛名山南麓の丘陵が烏川に終る地を占めている。奥原古墳群付近ではこの丘陵の西側は小規模な侵蝕谷が烏川に落ち込んでおり、東側は白岩方面から流下する侵蝕谷が谷地田となって東南方向に延びて下長地区で白川流域の丘陵地に接している。この侵蝕谷と烏川とはさまれて、奥原古墳群の位置するあたりから、丘陵は烏川北岸沿いに延びる地形を形成し、その南腹は烏川によって侵蝕された河崖が連っており、北腹は侵蝕谷に面した傾斜地となって東南方に延びている。奥原古墳群は、そうした丘陵の烏川に向って傾斜する地を占めて分布しているのである。現在、この奥原古墳群の分布地域はその北側部分を県道・高崎～室田線が丘陵を切断する切通しとなって通じておりその切通しの南側には榛名町町営住宅が建ち並んでいる。その住宅の東側はこの丘陵では比較的広い平坦地がひろがり、その地が榛名満行・戸張神社であり、満行原とも呼ばれる地である。木戸神社境内の一角と考えられる地からは、かつて古瓦の散布地があり、そこで採集された瓦類には素弁八葉の蓮花文字瓦の破片があり、その地が自鳳寺院の址地であった可能性が強い。満行原発見の瓦類にはいわゆる法隆寺様式の素弁八葉文蓮花文瓦と布目瓦とである。奥原古墳群分布域の東北外縁にその木戸神社は位置している。(第3図)

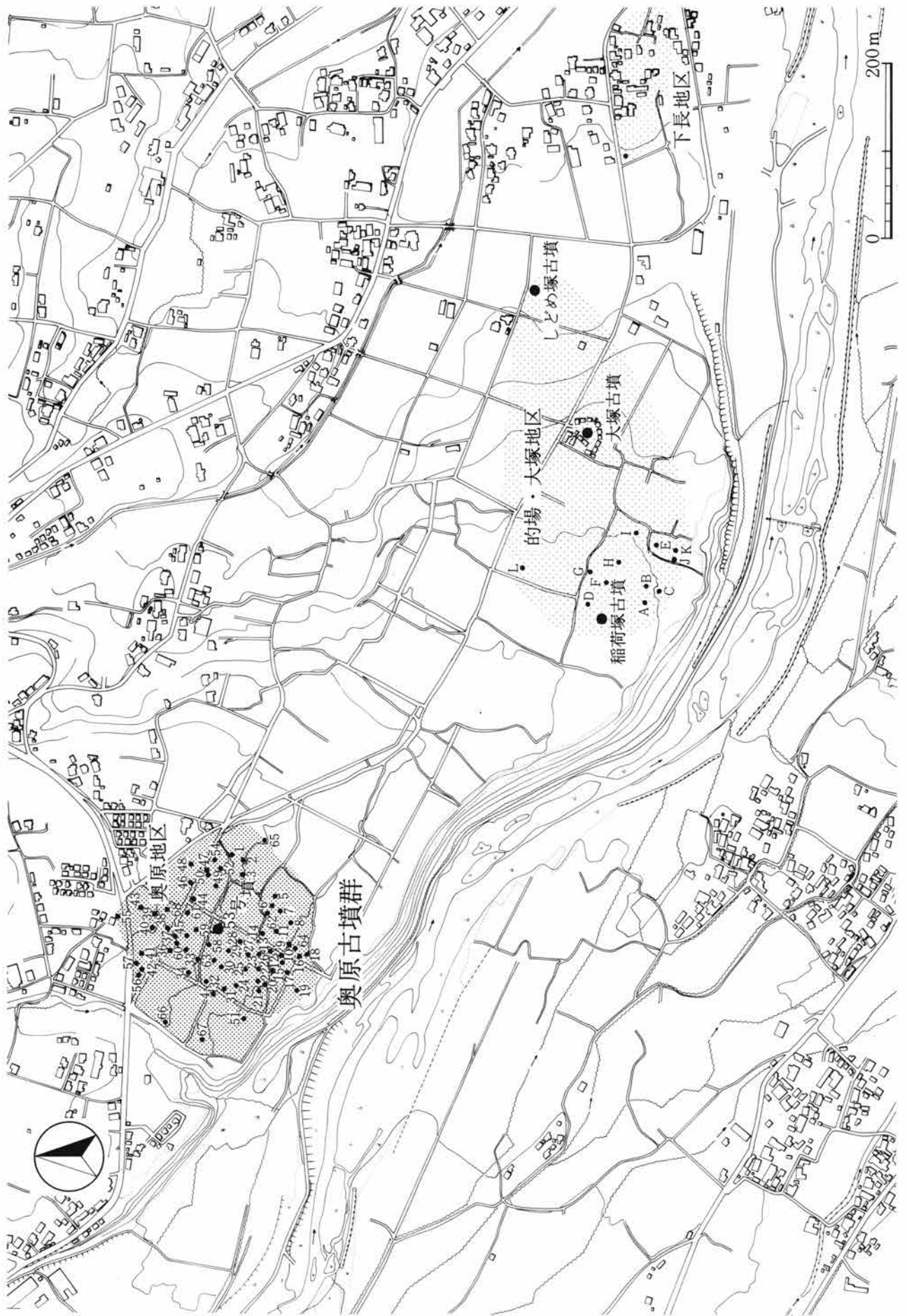
奥原古墳群の位置する地は、まさに本郷地区の西端の地を占め、木戸神社に続く地である。奥原の地名が伝えるように、本郷地域の人々の間には木戸神社と深くかかわっていた地として意識されてきたものであったのであろう。

(2) 奥原古墳群の占地と分布

奥原古墳群の分布は、烏川に向ってほぼ南面する傾斜地に限定されているかのような様相を示している。その分布地は、東西約230m・南北約320mの範囲であるが、烏川の北岸に沿うように延びだしている本郷地区の丘陵地形の全体から見ると、西側に小規模ではあるが烏川に直接落ち込む侵蝕谷があつて、これに西側を境されるかのように特定された範囲に限定している。分布地域の標高は、上限部分で177m、下限部分で161mである。その比高差は16m内外の傾斜地で、下限の部分からはまもなく烏川右岸の断崖に終わっている。その断崖縁辺の現烏川河床面との比高約36mで、垂直に切り立って、地層を露頭している。

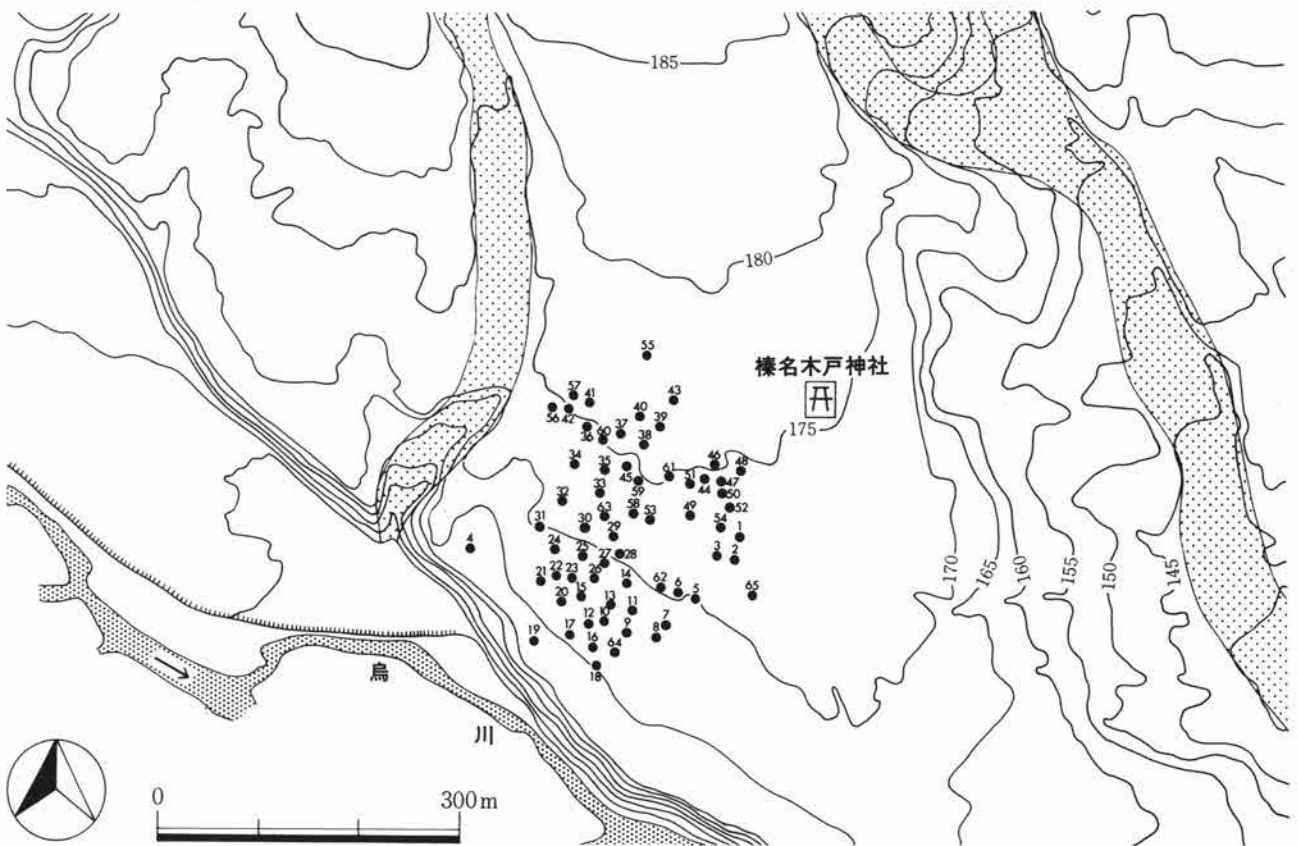
発掘調査時において、すでに、本古墳群の西側の侵蝕谷に面した部分には、大陽誘電株式会社の榛名工場が造成されていて、その敷地内での古墳分布は明らかにするすべもなかった。しかし、同工場敷地内の地形から推定するかぎりでは、現存する奥原古墳群の分布地の西縁には凹地があり、その凹地の東縁に沿うかのような古墳の分布であることから見て、奥原古墳群の分布範囲そのものは、現状をいちじるしく西方に広げるものではなかったと思われる。現在の奥原古墳群の範囲は、ほぼ成立当時のそれを伝えるものではなかったかと推定される。

ところで、上毛古墳総覧によれば、我々の調査の対象とした奥原古墳群に該当する地域内での古墳は、7基としてある。我々の調査における第15号墳(27)、第34号墳(26)、第36号墳(24)、第43号墳(19)、第44号墳(20)、第49号墳(21)、第53号墳(22) = ()内は総覧番号=であり、ほとんどが載録漏れとなっている。これは、古墳としての形状を良く残し、あるいは大形墳丘を持っており目につくもののみ載録されたことによる。我々の調査における事前のマッピング調査では57基が把握されることとなったが、発掘調査を進めていく過程ではそれまで確かめられずにいたものも8基追加することができ、我々の調査で確認した奥原古墳群の古墳数は65基となった。65基のうち、かなりのものが平夷され、石室側壁の根石部分のみを残存したものであったことは、その辺の事情をよく伝えている。

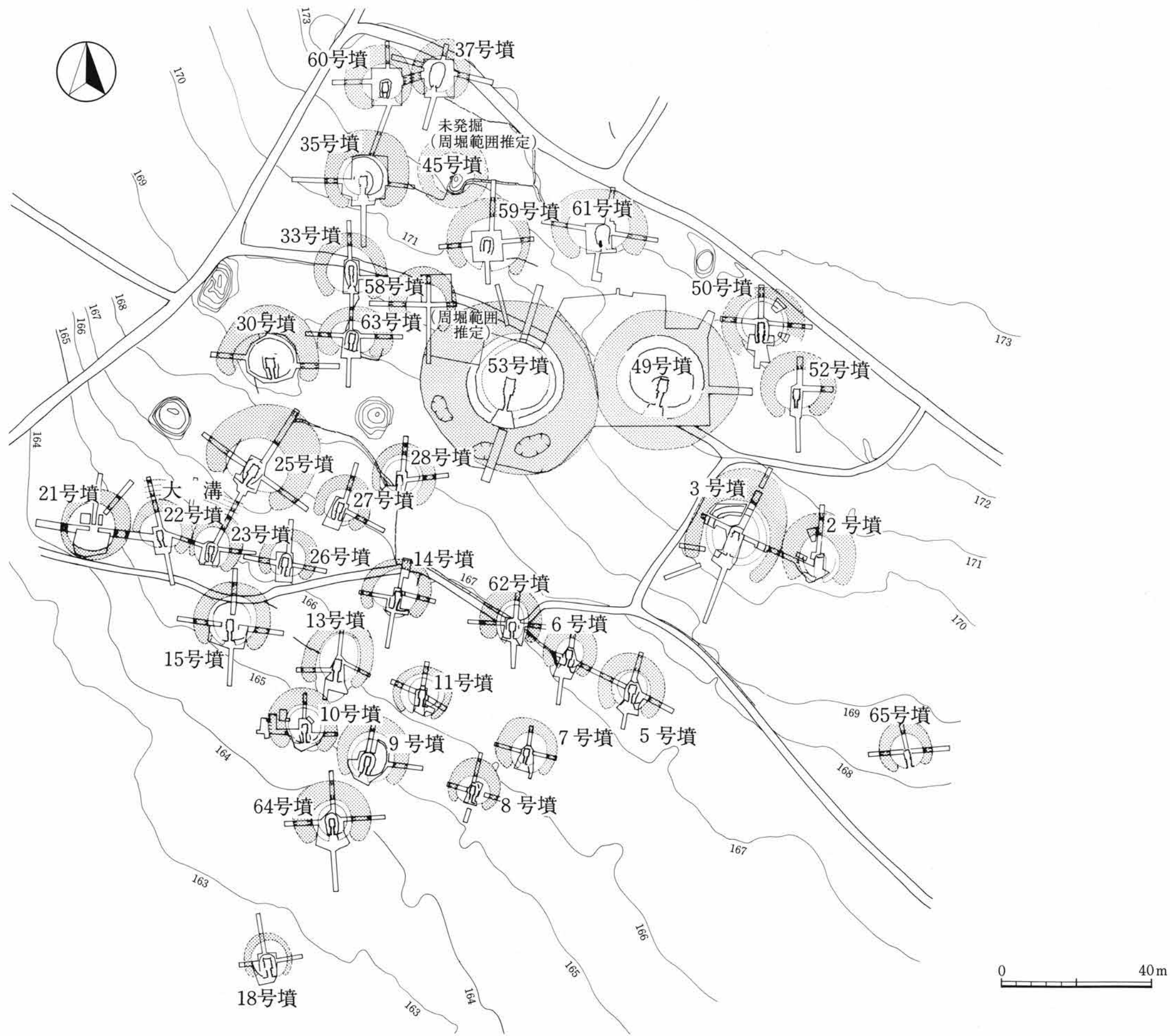


これらの古墳は、いずれも円墳であったが、その最北位にあったのは、県道・高崎一室田線の北側の55号墳で、それが奥原古墳群の北の端であり、南の端は烏川左岸の断崖縁に近く位置する18号墳、19号墳の2基であり、西縁での分布限界は明確ではないが、東の端を画する位置にあったのは4号墳であった。その分布範囲の面積は73,600㎡であった。現存する古墳の外周を結ぶと、奥原古墳群の分布地域は、不整形の楕円形の拡がりをもったものといえるが、その分布は、ほぼ中央位に最大規模の墳丘及び主体部をもつ第53号墳が位置しており、その東方には第2の規模をもつ第49号墳が隣接しており、この2基を中心に分布しているかのような観を呈している。概観すると、この第53号墳・第49号墳の2基は墳丘中心間隔で約38m離れており、第53号墳の南側には、第3号墳・第5号墳・第6号墳・第14号墳・第28号墳に囲まれた約1,250㎡の、まさに広場といってもよいような古墳分布の認められない空地が存在した。古墳の密集した部分は、第53号墳の東方の部分、西南方の部分と、西北方の部分に分けられたが必ずしもそれを単位にグルーピングできるものではないようである。その分布状況を見て特に注意したいのは瓦散布のある木戸神社寄りの地を避けているかのように古墳の分布が見られるという点であった。(第2図)

以上のような分布状況を示していた奥原古墳群を構成する個々の古墳について見ると、圧倒的に主体部を横穴式石室とする円墳が多い。いずれも、その主体部用材は川原石であり、切石等を使用したものは見当たらない。そのようななかであって、唯一第21号墳が埴輪円筒列をもつ堅穴系の円墳であった。その位置した地は、奥原古墳群の西南端であったが、他にこれと同じ種類の古墳は、その範囲内からは確認されず、場合によると、この種の古墳の分布は隣接する太陽誘電株式会社榛名工場敷地方向にかけて分布していたものであったかも知れない。横穴式石室をもつ円墳をもって構成する古墳群として形成されたのが、我々の調査の大部分を占めた古墳であり、それらの横穴式石室の構造・形態にはいくつかの類型があるが、いずれも埴輪類は樹立されてはいない。そうした古墳が最も近接しているものでも墳丘中心間隔で15mを保ち分布したが、墳丘の一部を切り合い、あるいは接して構築されたものはなく、奥原古墳群における各古墳の分布は、第21号墳を除いて短期間の間に、いわば個々の古墳が互いに意識される関係をもって構成された分布を示している。



第3図 奥原古墳群分布図



第4図 奥原古墳群配置図

III 発掘調査を実施した古墳の概要

遺構と遺物

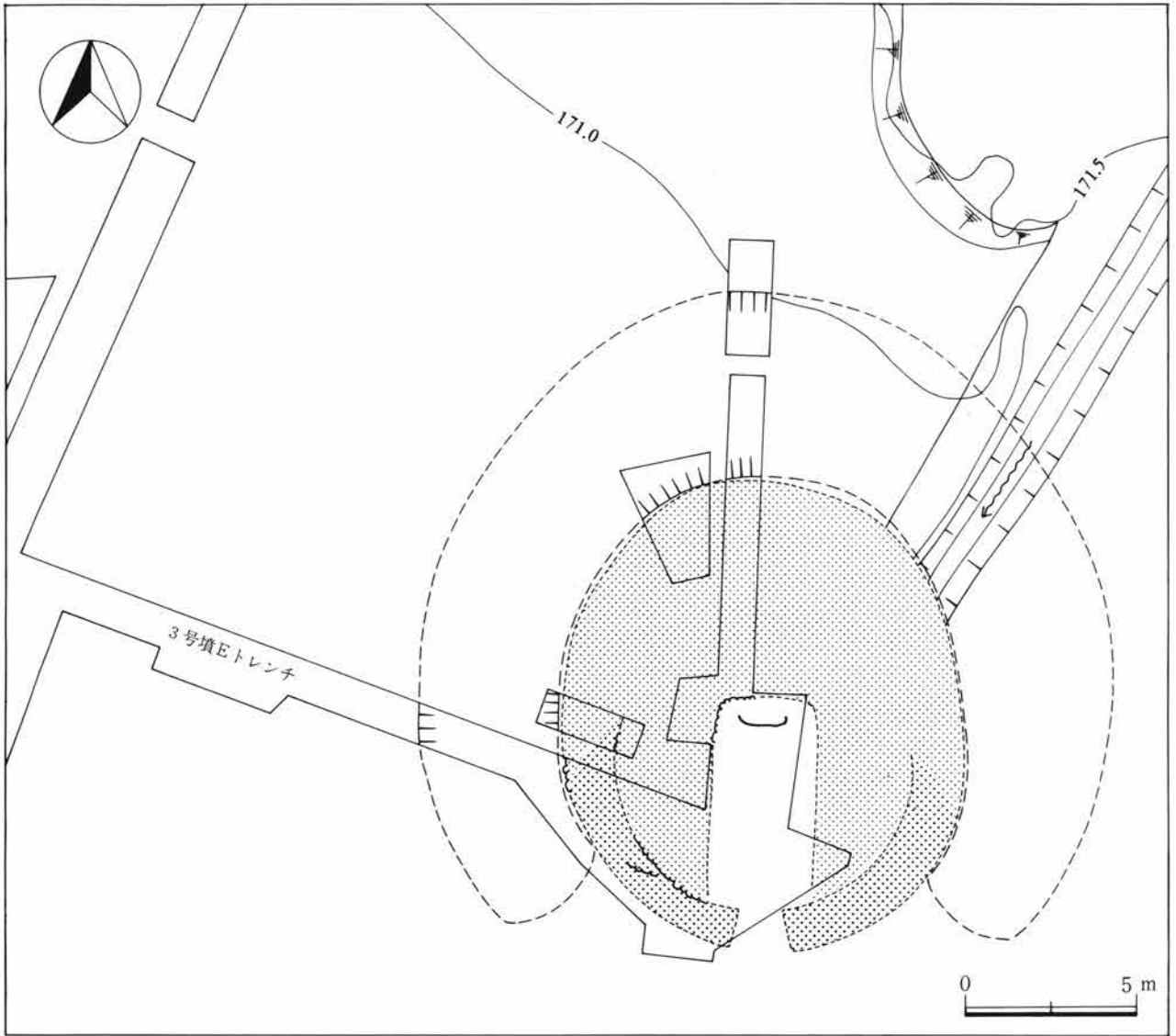
第 2 号 墳

位 置 本古墳群の東端に分布する。標高170mの畑地に位置し東北から南西へ横切る畦によって墳丘の東南部は寸断され変形している。地形測量により径7.5m、高さ2.2mを測り円墳と推定された。主体部と想定される中央部に6×6mの方形トレンチを設定し、周堀確認のために北に15m、西へは接続する3号墳主体部に向けて長さ23mのトレンチを設定して相互の切り合いの状況を確認することにした。南と東方向へは地形の制約からトレンチを設定できなかった。

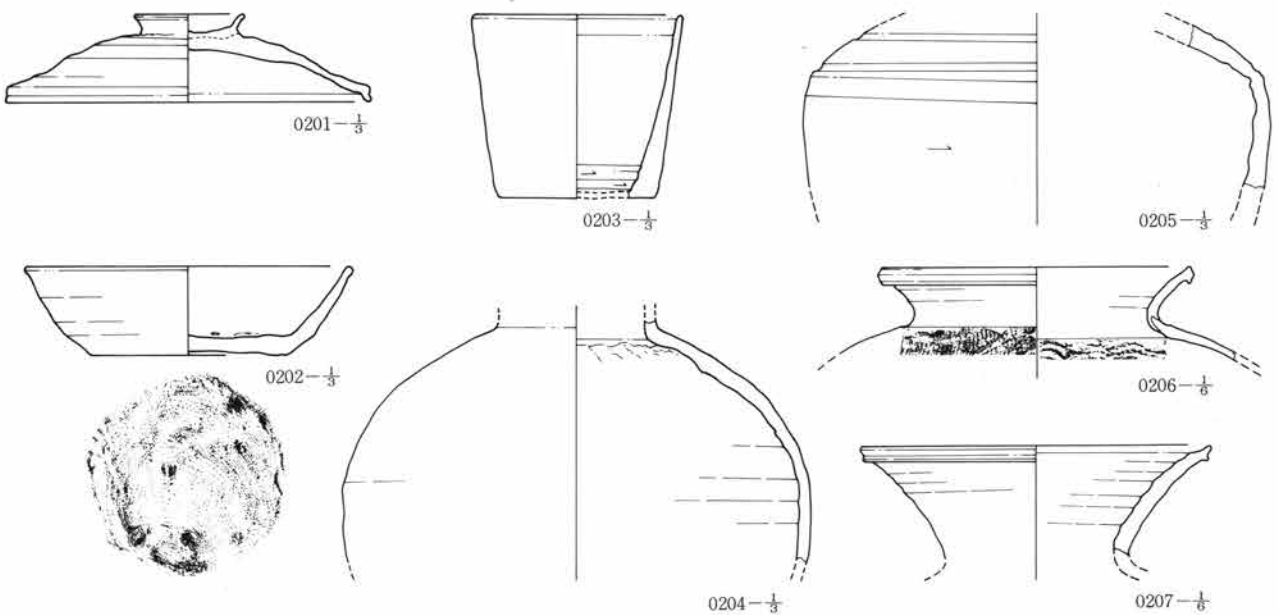
墳丘と外部施設 北トレンチは奥壁付近まで攪乱が及ぶ。周溝の上幅は6.25mを測り、ゆるやかな断面を呈する底面までの深さは0.7mである。西トレンチでは周溝の深さ0.7mを測るが、3号墳との切り合いを示す断面での土層観察はできなかった。葺石の存在は南側に認められるものの後方、北側にまで巡っていたかどうかは不明である。墳形は前庭を付設する横穴式石室を持つ円墳で墳径は南北方向で13.3m、東西方向で11.5m、残存する墳丘高は1.9mを測る。

主体部の構造 両袖型で玄門を備えた横穴式石室である。旧表土面を0.6m土壇状に掘りくぼめてあるが底面は南へ向って5mの間で0.15m傾斜する。この面に玉石を敷きつめ奥壁は安山岩二石を平の面を内側に横積みしている。裏込め被覆の石は少なく薄い。側壁は0.4×0.6×0.4m大の川原石を横積みとして根石を配し、その上に0.15×0.3×0.5m大の小ぶりの川原石で小口積みとし全体的に持ち送り、ドーム状にせり出している。両袖には玄門柱を置き、笠石との不足部分にはそれぞれ2石の小ぶりの石を小口に積み上げている。床面下の構造は石室主軸に直交するように奥壁より0.7m、1.8m、2.6m、5.2mの位置に0.2×0.25×0.05m大の扁平な石を横に敷並べ、奥壁より3.1mの位置には0.05×0.2×0.15大の石を横一列に立てて突き刺し、それぞれの間隙に砂利を敷きつめている。そのため床面使用時にはこれらの石組は隠れて見えない。しかし、2.6mの位置は玄門部、3.1mの位置は閉塞石内側、5.2mの位置は羨道入口に該当することから石室平面に於ける何らかの区画機能を想定させる。石室高は玄室で1.7m、玄門部で0.8m、羨道部で1.0mを推定復原できる。

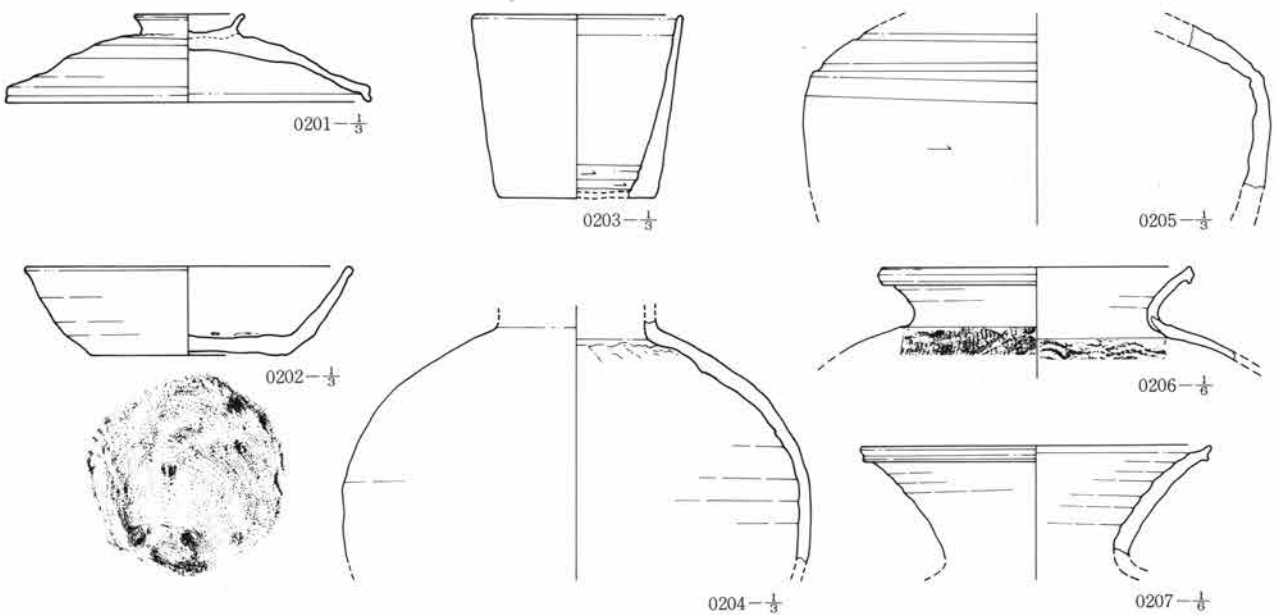
出土遺物 玄室中央部の左壁寄りに須恵器の杯蓋と杯身(0201と0202)の完形品が組み合わさって出土している。杯蓋は径15cm、高さ3.3cm、つまみ径は4.3cmを計測し天井部は扁平で口縁端部は下方に折り曲げただけの単純化したもので、かえりはない。色調は緑灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。杯身は径13.2cm、高さ3.1cmを測る。底部は右回転糸切りで切り離し後調整はない。色調は灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。成形は良好で杯内面に径4cm大の重ね焼き痕を残す。杯蓋を裏がえして焼成したものであろうか。杯身(0203)は墳丘表面より出土している。径8.5cm、高さ7.3cmを測る。底部は欠損しているが底面の調整は回転ヘラケズリで右回転である。色調は褐灰色で胎土、焼成は良好で精緻である。長頸壺(0204)は墳丘表土より出土している。頸部及び胴下半を欠失している。色調は褐灰色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み焼成は良好である。頸部から肩部にかけて自然釉がひろがる。台付長頸壺(0205)の肩部である。須恵器であるが色調はにぶい橙色を呈し胎土中に1～3mmの砂粒を含む。肩部に2筋の条がめぐる。甕(0206)は墳丘表土より出土している。口径は25cmを測り胴上、下半部を欠損した残存高は7.5cmである。色調は褐灰色の須恵器で胎土、焼成とも良好である。胴部外面には平行タタキ目、内面には青海波文の当て工具の圧痕を残す。甕(0207)は墳丘表土より出土している。口径は28cm、胴部は欠損してない。口径残存高は8.5cmを測る。胎土は良好で焼成も良好、堅緻である。色調は灰黄褐色を呈する。自然釉が口縁内外面に付着し暗オリーブの色調を呈する。



第5図 2号墳 墳丘図



第5図 2号墳 墳丘図



第5図 2号墳 墳丘図

第6図 2号墳遺物実測図

第 3 号 墳

位 置 本古墳群の東南隅の一群に属し、当墳の東にある2号墳とは近接している。また、北には52号墳、北東に1号墳、北西に49号墳があるが、南にある65号・5号・6号・62号墳等とはやや離れている。

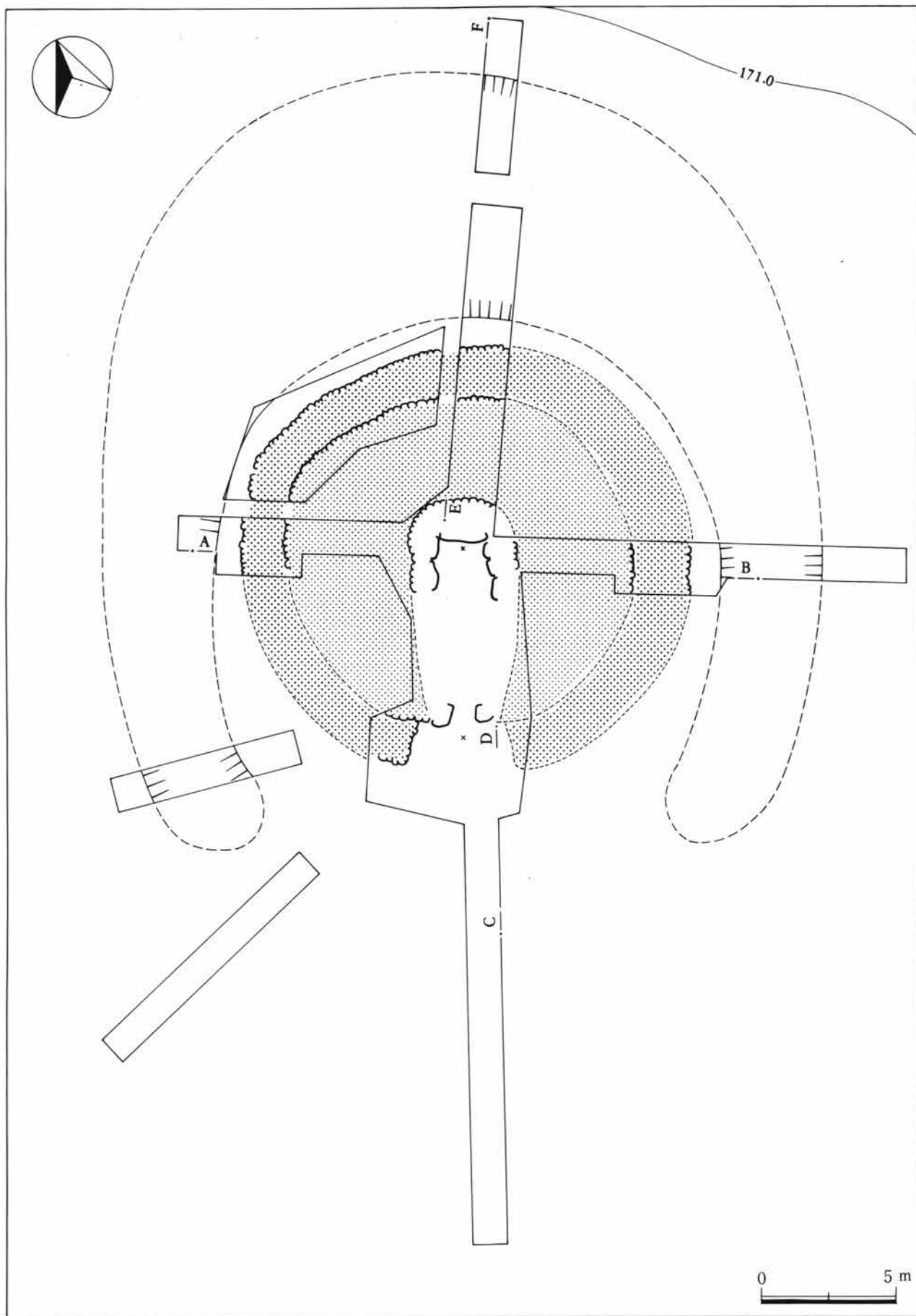
墳丘と外部施設 調査時点においては、わずかに墳丘の形を止めていたにすぎないが、東西・南北にいったトレンチ及びこのトレンチから墳丘裾部に沿って拡張した調査により墳丘葺石の状態が把握され、墳丘規模も確認することができた。墳丘周囲には二重の葺石がめぐり、2段築成を意図して構築している。墳丘東西に入れたトレンチの所見によると、墳丘は、構築時の地表であった黒色土層及びローム漸移層まで60cmほどを削り出して墳丘裾部を整形し、墳丘の見かけの高さを増している。下段葺石は、この整形した法面に葺き上げており、その根石は、構築時地表面から20cm下にすえられ、上端は地表面から20cm前後上になる。上段（内側）の葺石根石は、構築時地表の黒色土層を10cmほど掘り下げて設置し、これから上は墳丘盛土斜面に葺き上げている。下段の葺石根石の設置位置は、上段葺石設置位置に対して10cmほど下がるだけで、両者に大きな高低差はない。すなわち、下段（外側）葺石を上段（内側）葺石との間にみられる幅1m余りの平坦面は、構築時地表上に20cm前後の盛土をして整形したテラス状の平坦面でもある。本墳の場合、旧地表を削り出し、その中ほどに下段葺石根石を設置し、構築時地表面上に上段葺石根石をすえることにより、見かけの上で二段築成の墳丘をつくり出していることに特色があり、その基段も49号墳や53号墳のように、盛土によって構築したものではない。なお、下段葺石根石の下へさらに40cmほど掘り下げて周堀をつくっている。周堀の規模は北周側で深さ60cm、幅10mとかなり大規模なものが確認されている。

石室入口前には、台形に開く前庭が確認された。前庭石組については、向かって左側部分の確認だけにとどまった。前述の二重にめぐる葺石のうち、上段（内側）の根石は石室入口の羨門に接続し、下段（外側）葺石の根石は前述石組の先端に接続する。すなわち、本古墳の前庭は墳丘周囲をめぐるテラス状基段の中に設置されたものである。墳丘規模は東西17.4m、南北16mである。

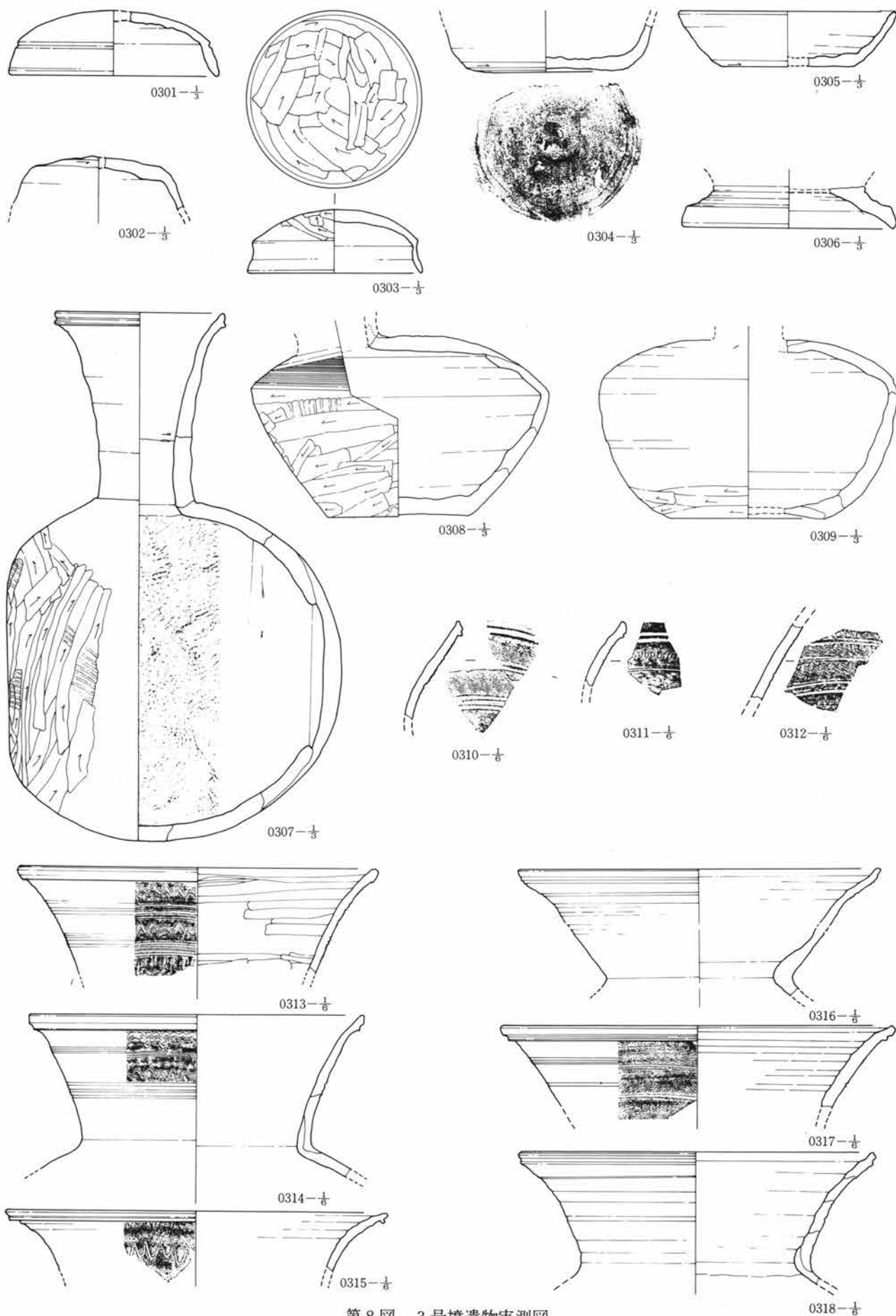
主体部の構造 主体部は自然石を使用した両袖型の横穴式石室であるが、石室の中央部、すなわち、玄室前半部から羨道奥の部分の壁石がすべて取り去られていた。右壁にあっては、羨道部の石は入口の一石を残すのみであり、玄室長、羨道長等については不明である。石室は、古墳構築時地表から40cmほどの深さに掘り下げた「掘り方」の中に構築している。「掘り方」の規模は、東西約4m、南北約8mである。「掘り方」の底面には一面に川原石を敷きつめており、石室壁石はこの敷方の上に設置している。石室壁石の裏込めは、側壁裏では下端で約1m、上端で60cm（推定）ほどの厚さに、奥壁裏では約60cmの厚さで礫をいっぱいにつめ、その外周はきちんと石を積み上げてその崩落を防ぎ、これをおおって墳丘の盛土がなされている。なお、「掘り方」内にあっては、「掘り方」法面に接して石組がなされていた。石室壁として残った石は、玄室奥の一部であるが、奥壁には、幅1.6m余、高さ1m余の大石を設置するとともに、両側壁にも1m×1mほどの大石を使用し、この石の最大面を壁面に出す平積みとしているところに特色がある。羨道では、一部残った壁で見える限り、これほどの大石は使用していない。本古墳群の他の石室にもみられるように、羨道壁は小形の川原石を小口積にしていたものと考えられる。石室（玄室）の床は、前述の「掘り方」底部に敷かれた敷石の上に20cm前後の厚さに小礫を敷き上げて構成されていた。玄室プランには左右両壁ともに胴張りの傾向がみられるが、玄門の有無については不明であるが、羨門は設置されている。

出土遺物 石室の石は抜き取られ、玄室内の攪乱も著しいため石室内に残された遺物はないが、前庭部からは須恵器が出土している。いずれも破片となっていたが、前庭左右の石組に近いところに集中する傾向がみられた。前庭出土の須恵器には、杯蓋、フラスコ形瓶、平瓶等がある。

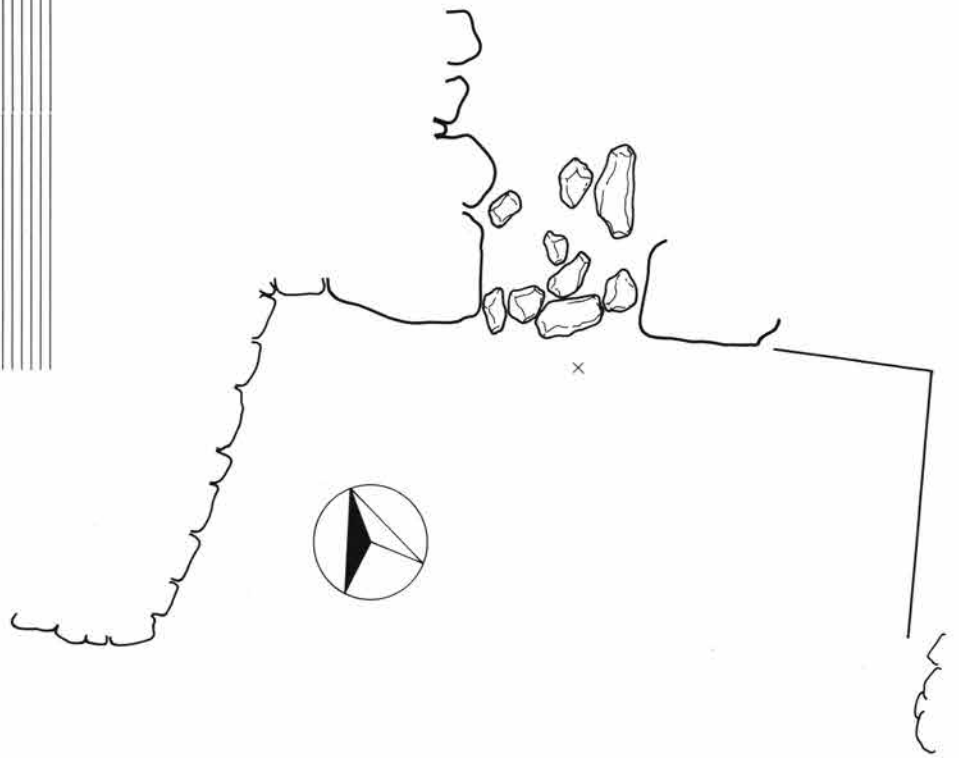
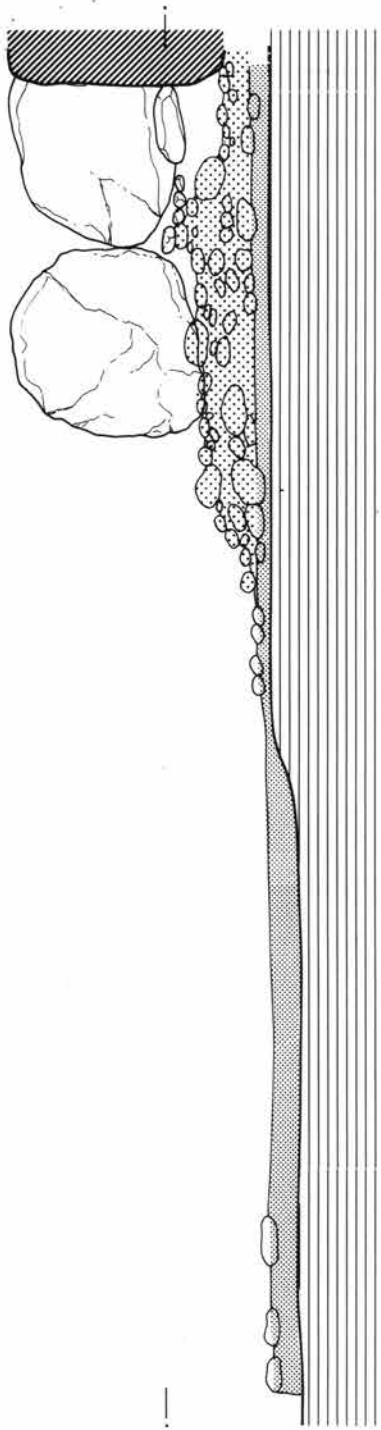
小 結 本古墳の場合墳丘は構築時地表を削り出して墳丘裾部を整形し、この整形面に下段葺石を葺き上げた後、地表面上に上段葺石根石を設置することによって、見かけの上で二段築成の墳丘に仕上げていること、石室前に台形状に開く前庭が設置されていること、この前庭部から各種須恵器が出土していること、主体部の石室では、玄室に比較的大形の石を使用していることなどをその特色としてあげることができる。



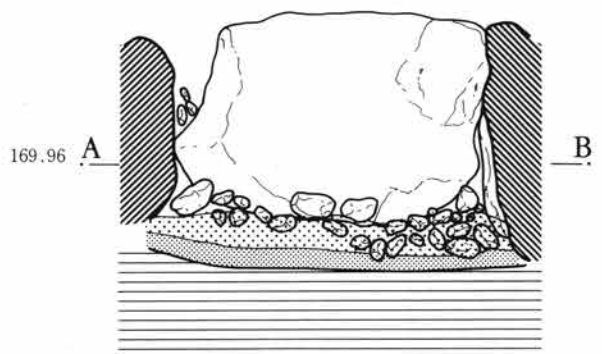
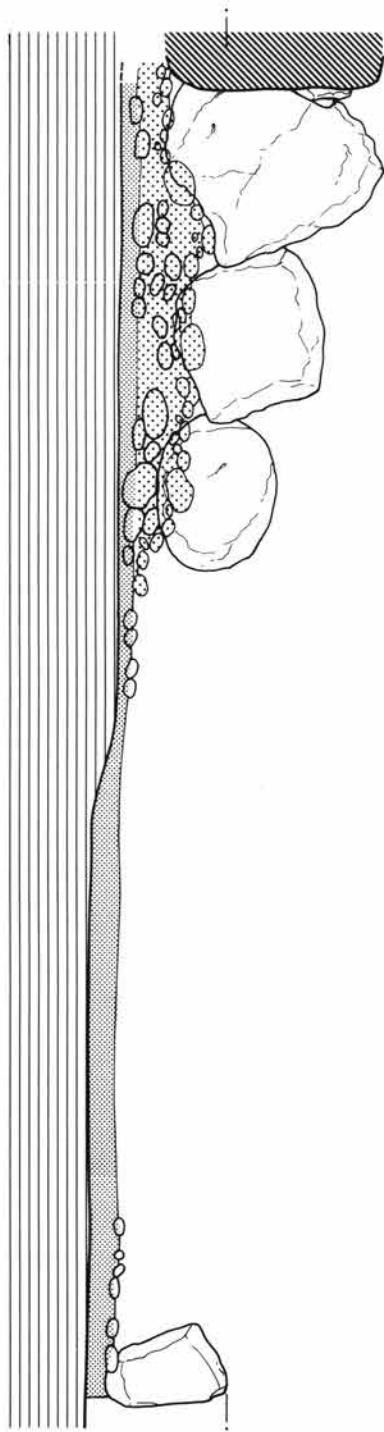
第7図 3号墳 墳丘図



第8图 3号墳遺物実測図



第9图 3号墳石室实测图(1)



「掘り方」ほりかた

横穴式石室の主体部を構築するにあたって、その石室の構造と規模に応じた土木工学的な技術が駆使される。

それらのうちで最も基本的な技術に石室構築のため安定した基盤作りと水平面の設定がある。この技術は「地形」じぎょうと呼ばれるが、前述の作業要素のみにとどまらず、その後の石室用材の使用法や裏込め被覆の方法などに深くかかわることにもなる。

本古墳群に普遍的にみられる旧地表面を土壌状に穿つ、いわゆる「掘り方」も地形の一種である。基本的には前庭部分の旧表土面を基準に山寄りに水平面を設定する。平面形は石室平面と相似形で、壁石根石の用材はその「掘り方」の中にゆとりを持って納まる。開口方向は立地する傾斜方向とは異なる場合もあるために「掘り方」の上面は一定とならない。

形状は箱状の土壌、三角形又は不定形で谷側が開放するもの、谷側が開口方向と一致するために土壌の谷側の短辺が開放するものなどが考えられるが、完掘していないため、確認されなかった。

本古墳群の立地する丘陵の傾斜面は3度を測る。前庭部は旧表土そのままに生かし、山側を10m水平に削平して「掘り方」を穿つ場合、奥壁寄りの土壌の掘り込みの深さは55cmとなる。このことは発掘時のいくつかの古墳で奥壁側の試掘溝の土層断面図からも肯定されている。

造墓する首長層のランクづけや葬送地の選定による地理的な条件、築造技術の伝統と革新などが「地形」といった細部の技術までも規定すると考えられる。

この考え方を古墳研究の墳丘構築論にまで高めるためにも、今後このような視点からの発掘調査の蓄積も必要である。

第9図 3号墳石室実測図(2)

第 5 号 墳

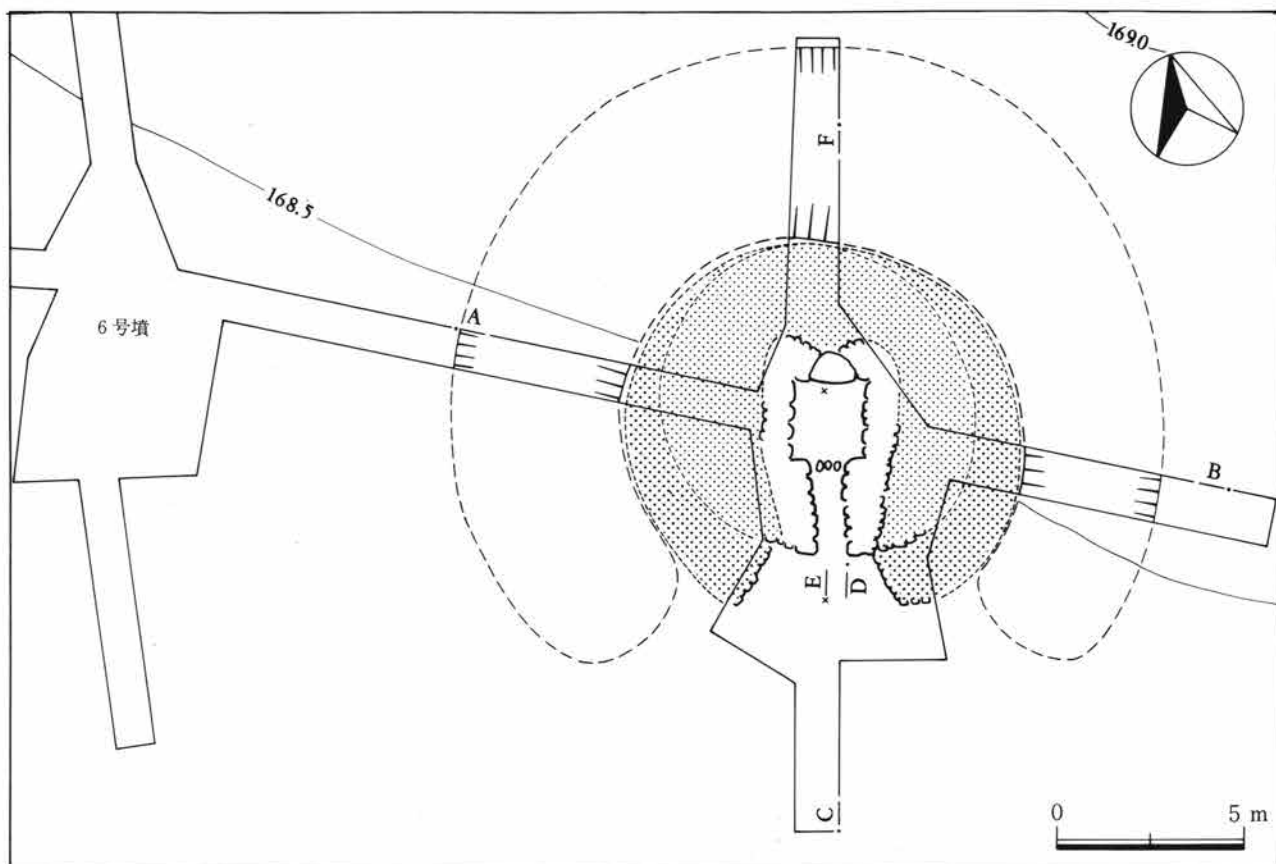
位 置 6号墳の東18m、3号墳の南40mに位置する。

墳丘と外部施設 調査時点においては南北径4.1m、東西径4.5m、高さ0.5m内外の墳丘を残していた。トレンチ調査の結果、墳丘は、現地表面より80cm程下の構築時の地表面であった浮石を含む黒色土層上に構築された径13.4m内外と推定される円墳であることが明らかとなった。周堀は、墳丘東において黒色土層を幅2.5m、深さ40cmほど掘り下げたものが確認された。西側トレンチにおいては隣接する6号墳との関係を知るために主体部に合わせて発掘を行った。その結果お互いに切り合うことなく周堀はめぐっていた。上幅4.1mで深さ60cmで外側に向かってゆるやかに立ち上がる。南トレンチでは石室前8mの長さで確認したものの周堀は検出されなかった。北トレンチは周堀の存在は確認できたもののトレンチは短かく外側の立ち上がりは検出していない。本古墳の周堀は南へ開放した馬蹄形と推定される。墳丘盛土は周堀縁辺まで盛り上げており残存高は40cmである。葺石は入口及び前庭部周辺、墳丘の一部に確認されたが、墳丘全体を覆っていたか否かは不明である。前庭左右壁先端の根石は、墳裾を圍繞するが如くに見られたが、東・西トレンチでは根石が確認できなかった。前庭部は、奥行1.8m、前幅4.41m、奥幅2.6mで、台形をなしており、比較的残存状態がよかった。埴輪配列はない。

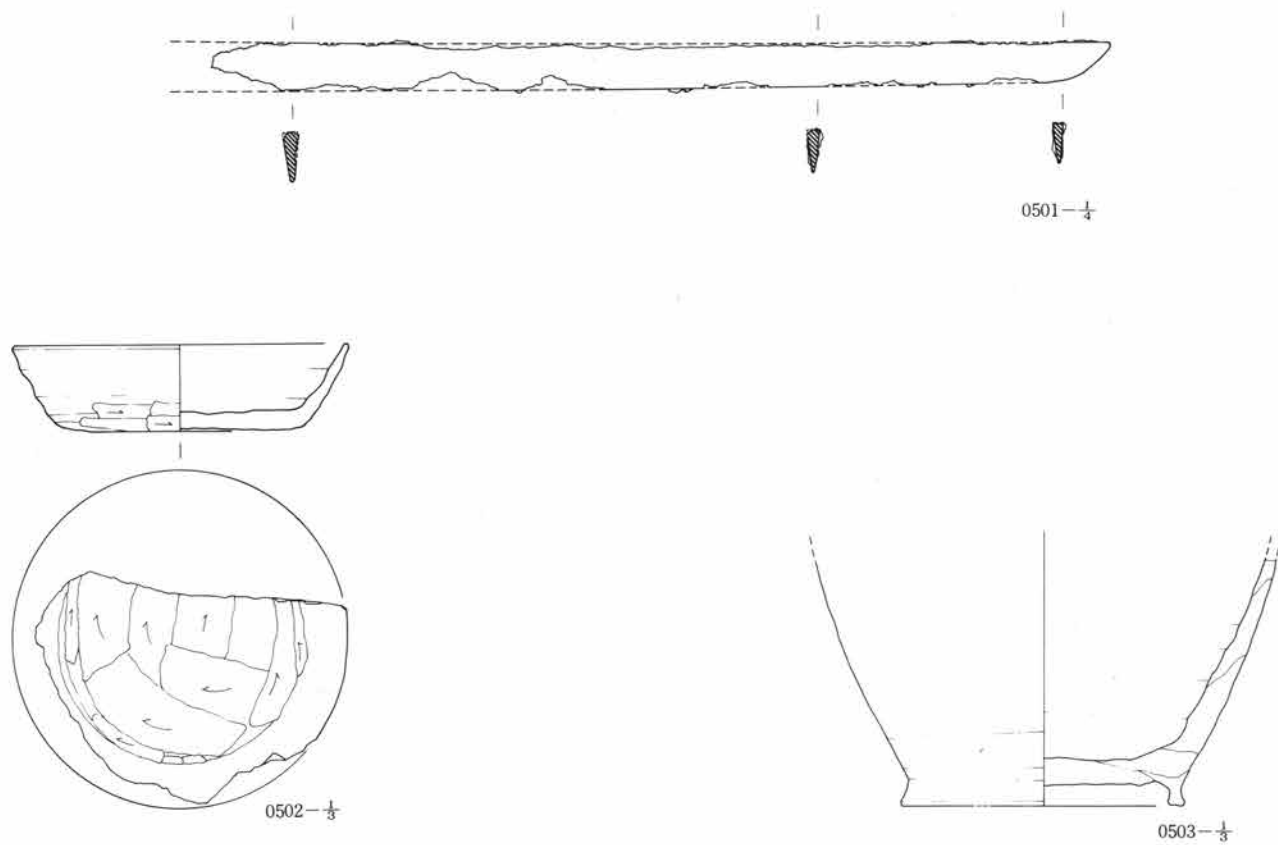
主体部の構造 主体部は西袖型の横穴式石室である。石室の全長は4.75mで、南よりやや西偏して開口している。石室各部分の計測値は別表のとおりであるが、玄室と羨道の長さの比がほぼ1：1に近いことが注意される。石室は、石室の形なりに、黒色土層を南北7.9m、東西5.2mの範囲を30cm内外掘り下げた「掘り方」の中に構築している。その方法は、東壁は「掘り方」東法面より内側へ1.2～1.4m、西壁は西法面より内側へ1.4～1.7mの位置に根石を置いている。各根石と法面との間は、東西両法面から80cm内側に裏ごめの外縁の根石を置いている。裏ごめ根石と「掘り方」法面の間は、裏ごめの根石を基準にして高さ1mほど盛土を行い、しかる後に裏ごめ外縁の石積を行ったようである。西壁とも石材は、安山岩製の川原石を利用しており、乱石積の方法をとっている。一方、奥壁は、奥壁「掘り方」法面より1～1.4mほど内側に入ったところの中心に、幅1m、高さ1m、厚さ50cmの大形の石を根石として置き、更にもその左右に各々40cm×50cm程の石を置いている。法面と奥壁との間は、法面から70～80cmほどの内側に、裏ごめの根石を置いているが、中心の奥壁の裏には裏ごめの石はなく、盛土がなされている。奥壁左右の石の裏は、法面との間が川原石でもって裏ごめされていた。玄室は、方形に近い形をしている。側壁・奥壁を「掘り方」に据えた後に、両壁の間に玉石を厚さ20cmほど敷きならべ、その上に小礫を敷いて床面としている。天井石は既に失われていた。奥壁より80cm付近には、川原石でもって「間仕切り」がしてあった。羨道は、玄室同様に側壁の間に玉石を敷き、その上は川原石でもって填塞してあった。袖石のところには、川原石4個が框石として置かれていた。

出土遺物 石室内は既に盗掘・攪乱されており、副葬品の遺存状態は悪かったが、奥壁より1.5m付近の左壁寄り、茎を奥壁に向け、左壁に並行した形で直刀1振、またその南10～20cm付近より鉄鏃3点が出土している。前庭部からは、須恵器杯1点が出土している。墳丘からは須恵器片、土師器片が出土している。直刀は茎部分を欠損している。切先はふくらみである。杯身は須恵器で灰白色を呈し、径13.5cm、高さ3.5cmを測り切り離し後手持ちのヘラ調整を施す。トレンチにかかった住居址出土の遺物と考えられる地点より出土した台付の長頸壺の胴下半部である。色調は灰色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。成形、調整ともに良好で内面下部に深緑色の自然釉がかかる。

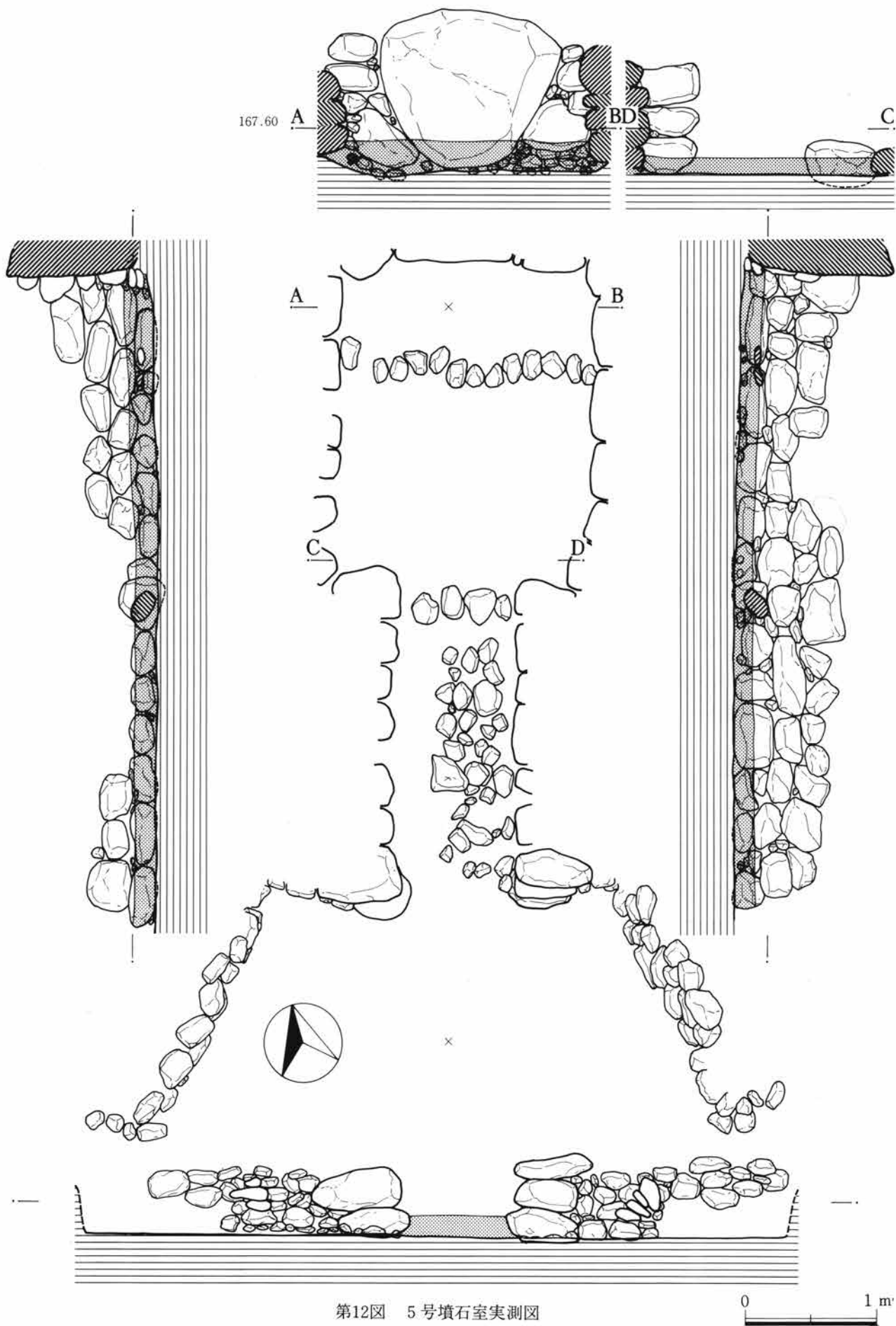
小 結 本墳の特色としては、石室が両袖型横穴式石室であること、その石室は「掘り方」の中に構築され、しかもその方法は側壁・奥壁・裏ごめの外縁の根石を「掘り方」内部に据えた後に、「掘り方」を含めて盛土を行いながら石室を構築していること、前庭部を有すること、埴輪列がないこと等が指摘できる。



第10图 5号墳 墳丘図



第11图 5号墳遺物实测图



第12图 5号填石室实测图

第 6 号 墳

位 置 周辺には62・7・5号墳があり、本墳は62号墳と5号墳のほぼ中間に位置する。

墳丘と外部施設 調査前の古墳の状況は直径6m、比高差1m余のなだらかな小山であった。石室前および墳丘をたち割った北・西トレンチの所見から、本墳は直径7m余の小形円墳で、構築時の外観は、石室入口部周囲は葺石が封土を被覆するが、背面は封土を寄せかけただけで、墳丘施設が簡略化されている。北トレンチでは裏込め被覆石から1.9mの範囲内に封土が残存するが、葺石の痕跡はない。封土の上面から旧表土上面との比高差わずか20cm、幅4mの底面がほとんど平坦な掘削面が認められるが周堀跡であろう。西トレンチでも同様な地層を観察できるが、周堀は幅3.2m、旧表土上面との比高差50cmと深く、北側とは対照的である。

石室前には前庭墳構が残存していた。左壁側は除石されているが、右壁側は比較的構築当初の状態を保っている。前庭石組みは石室入口部から40cmの位置からで、石室中軸線方向に対し30度の広がりをもつ。前庭石組み長さは1.4mが計測でき、外周は墳丘のカーブに比べて大きく内傾している。石組みは黒色土の傾斜面にもたせて川原石を寄せかけるように積み重ねている。すなわち、根石には偏平な川原石を間隔をおいて置き、根石の端にもたせかけるように川原石を重ねていて、壁石の扱い方に比べて余りにも雑である。また、石室前の入口部および葺石は入口部を底面とした比高差60cm、幅2.8mのなだらかな「掘り方」面上から構築されているが、前庭石組みは、石室構築後、「掘り方」のくぼみに60cm程の土を盛り整地して設置している。

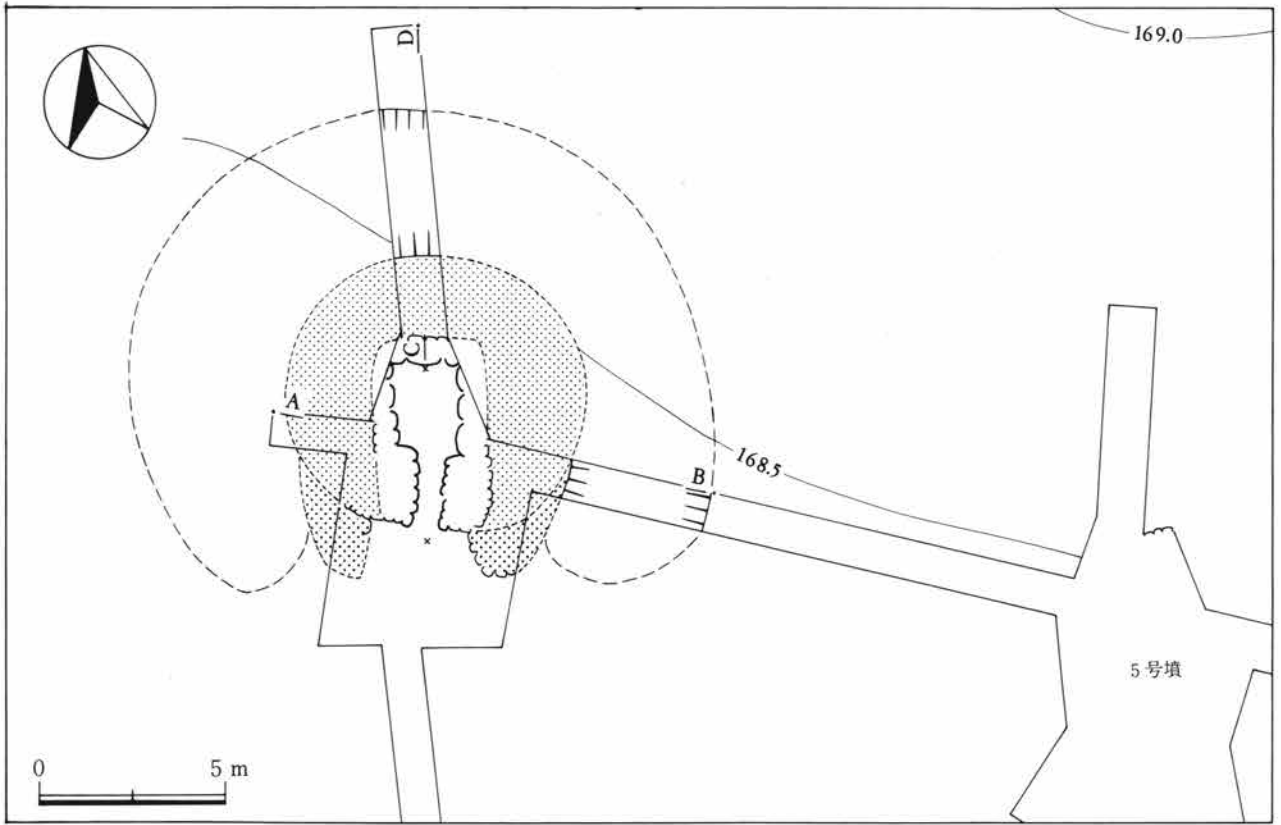
主体部の構造 川原石を使用した両袖型横穴式石室で全長4.4mが計測できる。玄室平面形は奥幅1.6m、前幅1.3mでやや台形状を呈す。石室は玄室天井石がぬかれているが、羨道部天井石が原位置を保つものもあって、崩落・除石をよくまぬかれている。羨道高80cm、玄室高1.4m、石室上面部で見ると、裏込め被覆石は南北長5.2m、東西長で隅丸形状に石室を被覆していて、南側では葺石とかみ合って連結されている。

壁石は川原石を用いた自然石乱石積みで、特に玄室部羨道寄りに「ころび」の傾向が著しい。奥壁は多石構成、中心部に川原石大石の平坦面を壁面にして二石重ね、左右壁との間を川原石の小口積みで補っている。両袖部および入口部は柱状の長大な川原石を立てた玄門および羨門が設置され、玄門および羨門と冠石の間は川原石を横ないし小口に積んで補っている。右壁の根石の大きさには統一性がない。玄室・羨道壁の根石は大振りの川原石の平坦面を壁面にして整然と並べていることを基本とするにもかかわらず、玄門・羨門との間は小振りな川原石の小口積みで補っている。その傾向は左壁も同様で、用石の不足と、奥壁・玄門・羨門を先に固定させた結果であろうか。玄門部の栞石は両袖角から10cm入口側に設置されているが、明らかな閉塞石は羨道床面までには残存しなかった。床面は攪乱をうけているが、厚さ30cmの礫敷上に玉砂利が敷きつめられた状態がところどころに残存している。石室部は旧表土上面を約50cm掘り込んだ「掘り方」内に構築される。「掘り方」の形状および石室平面との関係までは調査が至らなかったが、壁石根石は「掘り方」面に直接据え、小石をつめて固定させたようすはうかがえる。また、「掘り方」掘り込み面と壁石の間は、底面から北側で40cm、西側で60cmまでは黒色土と黄褐色土の混土層で補い、その上から川原石の裏込め石をあてていることが注目される。

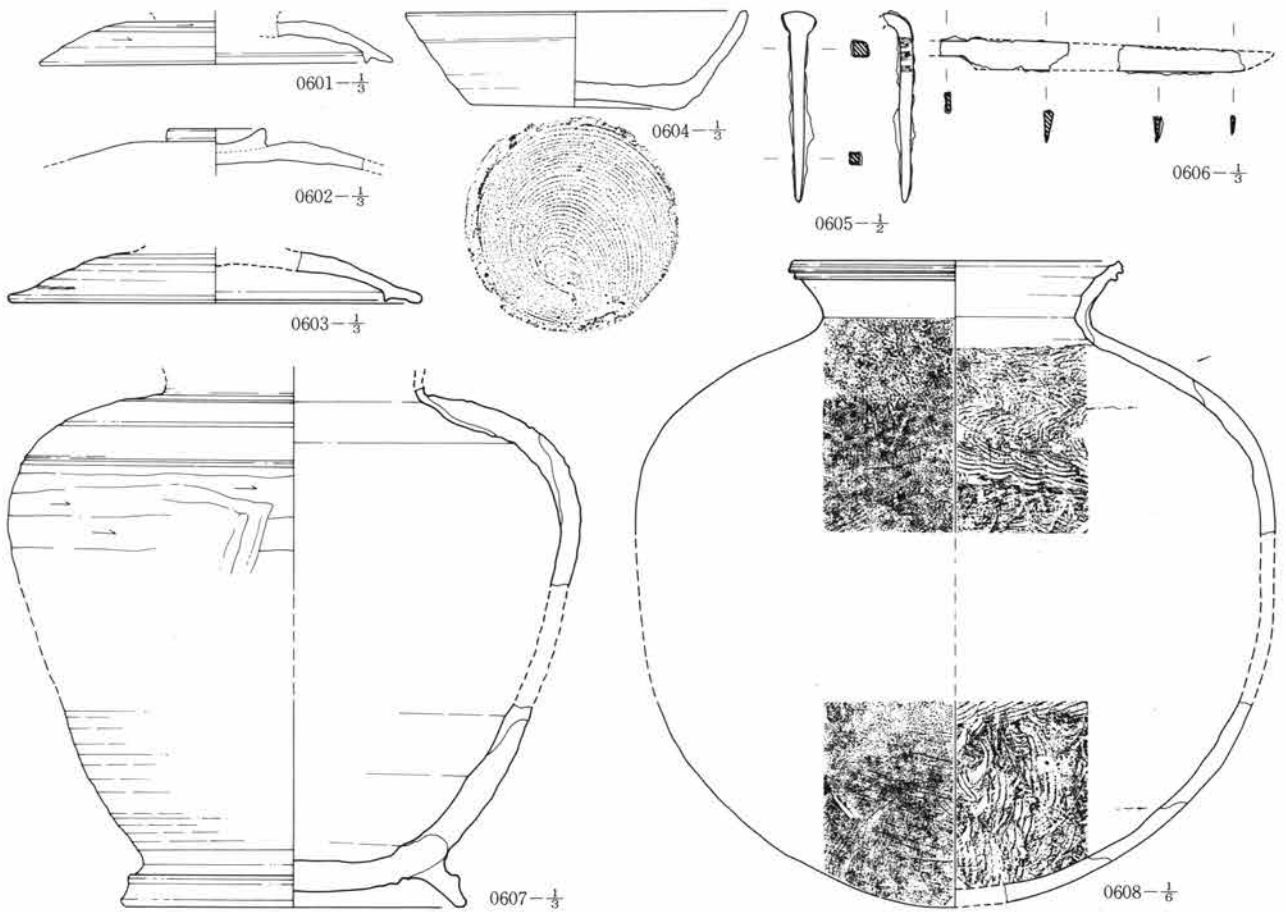
出土遺物 石室内はかなり攪乱をうけ、石室内に残る遺物は非常に少なく、副葬時の原位置を保っていると考えられるものはなかった。わずかに釘1本と刀子破片が残存していた。

前庭部には須恵器及び土師器が出土しているが、遺物の出土する面やレベルが一定していないとともに、本古墳の築造時には合致しない新しい時期の遺物も混入している。本古墳群では、古墳周辺に平安時代の竪穴住居が多く確認されており、これに関係する遺物が混入した可能性も考えられる。

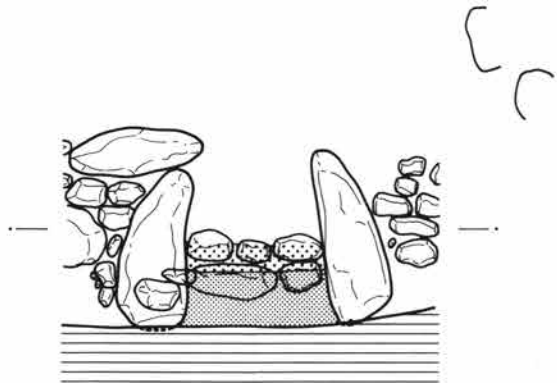
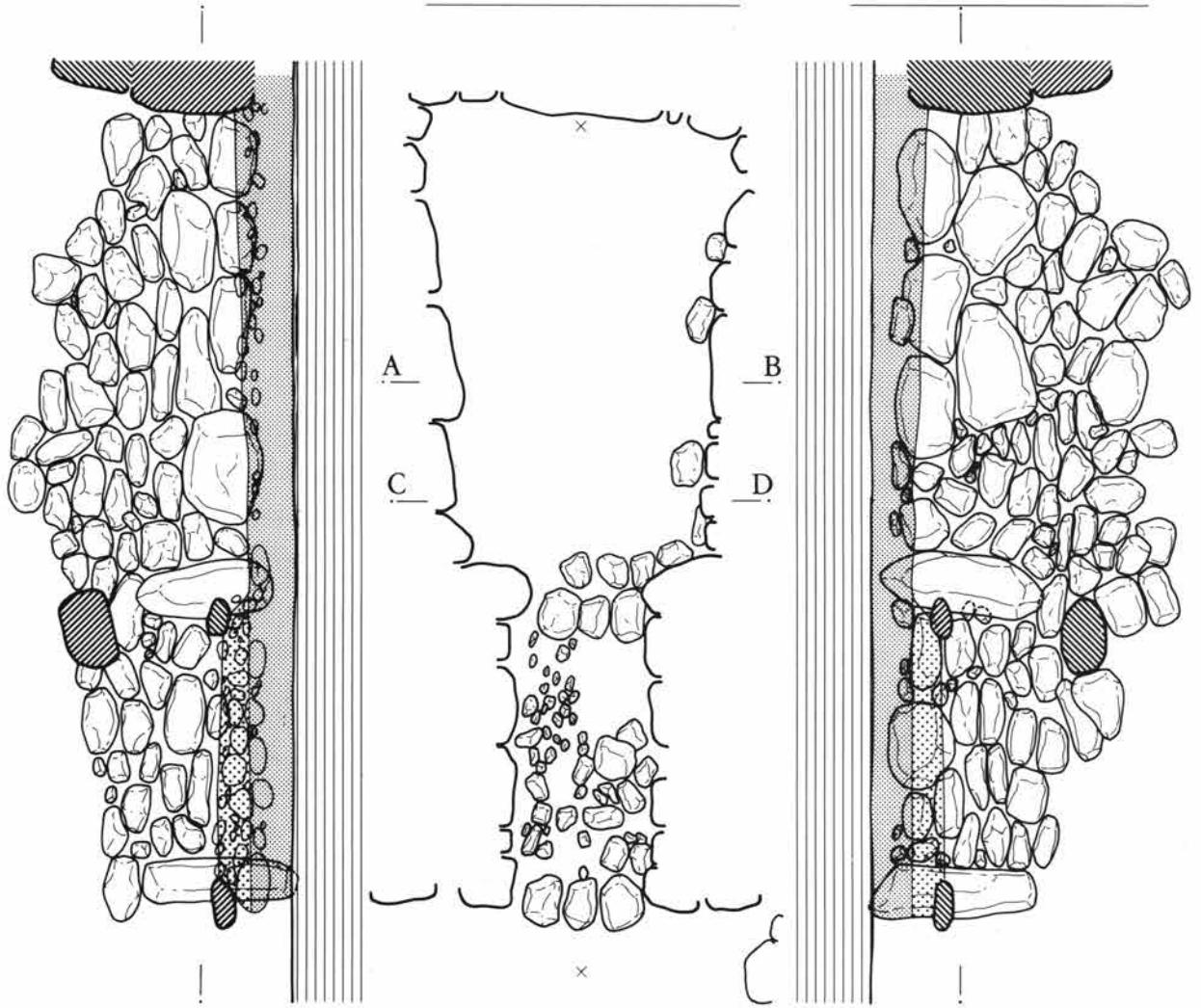
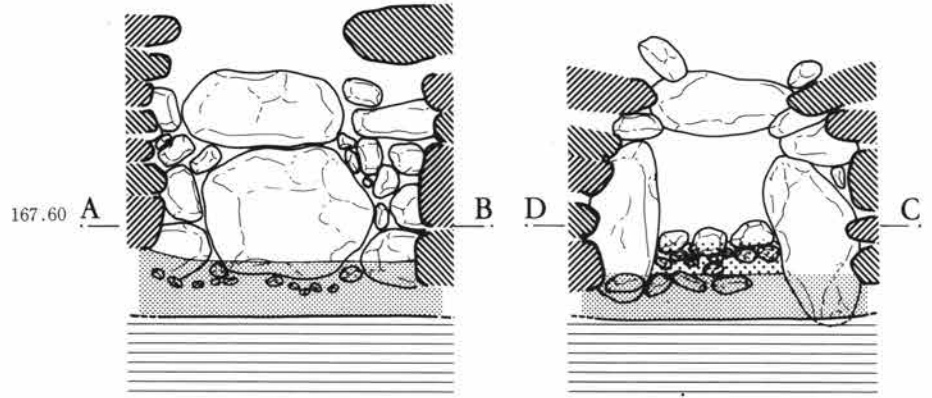
小 結 本古墳は直径7m余の小形の円墳で、比較的小形の両袖型横穴式石室を主体部とすること、玄室入口には玄門、石室入口には羨門が設置されていること、石室入口前には石積みをもって構成した台形状に開く前庭が設置されていること、この前庭は、石室前に前庭設置のための局部的に盛土をして構成していることなどが特色としてあげられる。



第13图 6号墳 墳丘図



第14图 6号墳遺物実測図



第15图 6号墳石室实测图



第 7 号 墳

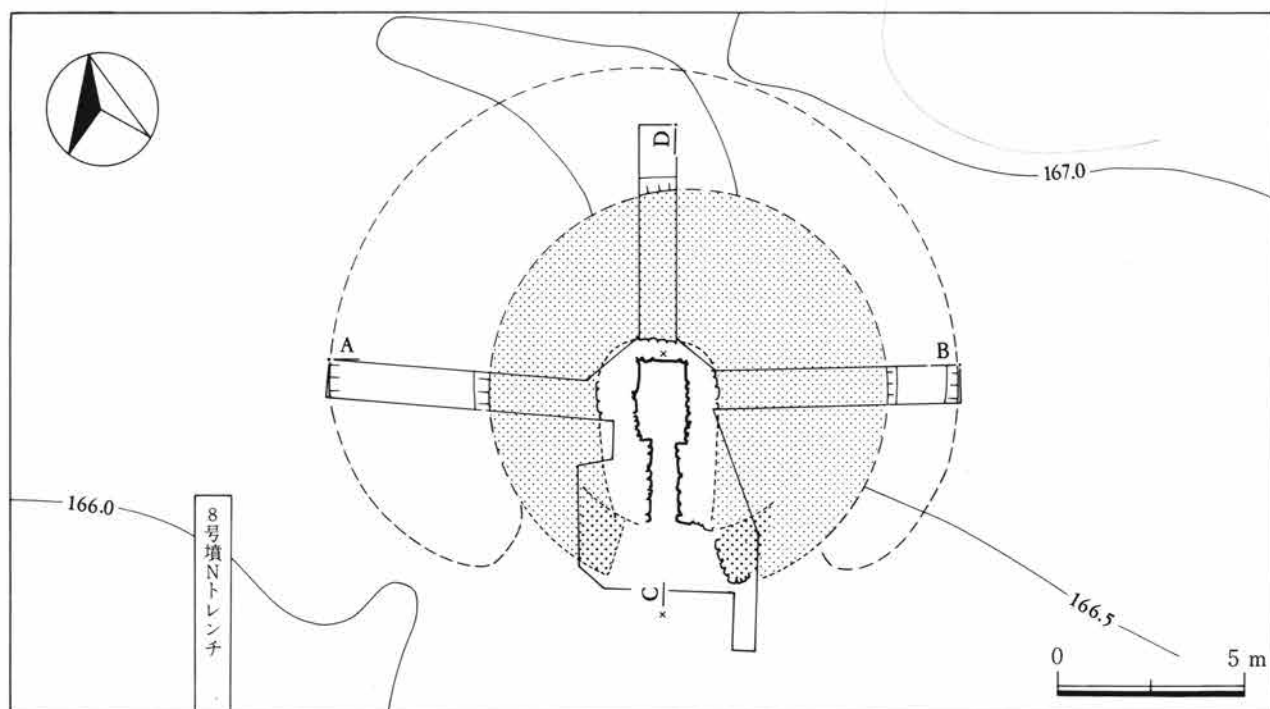
位 置 古墳群西南端に位置し、北に5号、6号、南に8号墳がある。

墳丘と外部施設 直径10.5mほどの円墳。調査時点では墳丘はほとんど削平されていたが、現地表より35cm下に盛土の一部及び周堀が確認された。墳丘は構築時の地表である黒色土及び下のローム層上部にかけて20~25cmほど削り出して整形している。整形した墳丘裾部には幅20~30cmほどのテラス状の緩傾斜面がめぐり、その外側に幅約2mの周堀がめぐるが石室前には確認できない。石室入口前には、台形プランの前庭が設置されていたようで、右側及び奥部分の石組が確認された。前庭石組の先端から北側周堀内周までの南北の径が約10.3mで、墳丘東西径と一致するところから、前庭は墳丘内に包含されていたものと考えられる。前庭中央部床面には、T字形に小礫が敷きつめられていた。なお、葺石は石室入口両側に認められのみである。また周堀も前庭前面には認められず全周はしない。埴輪配列もない。

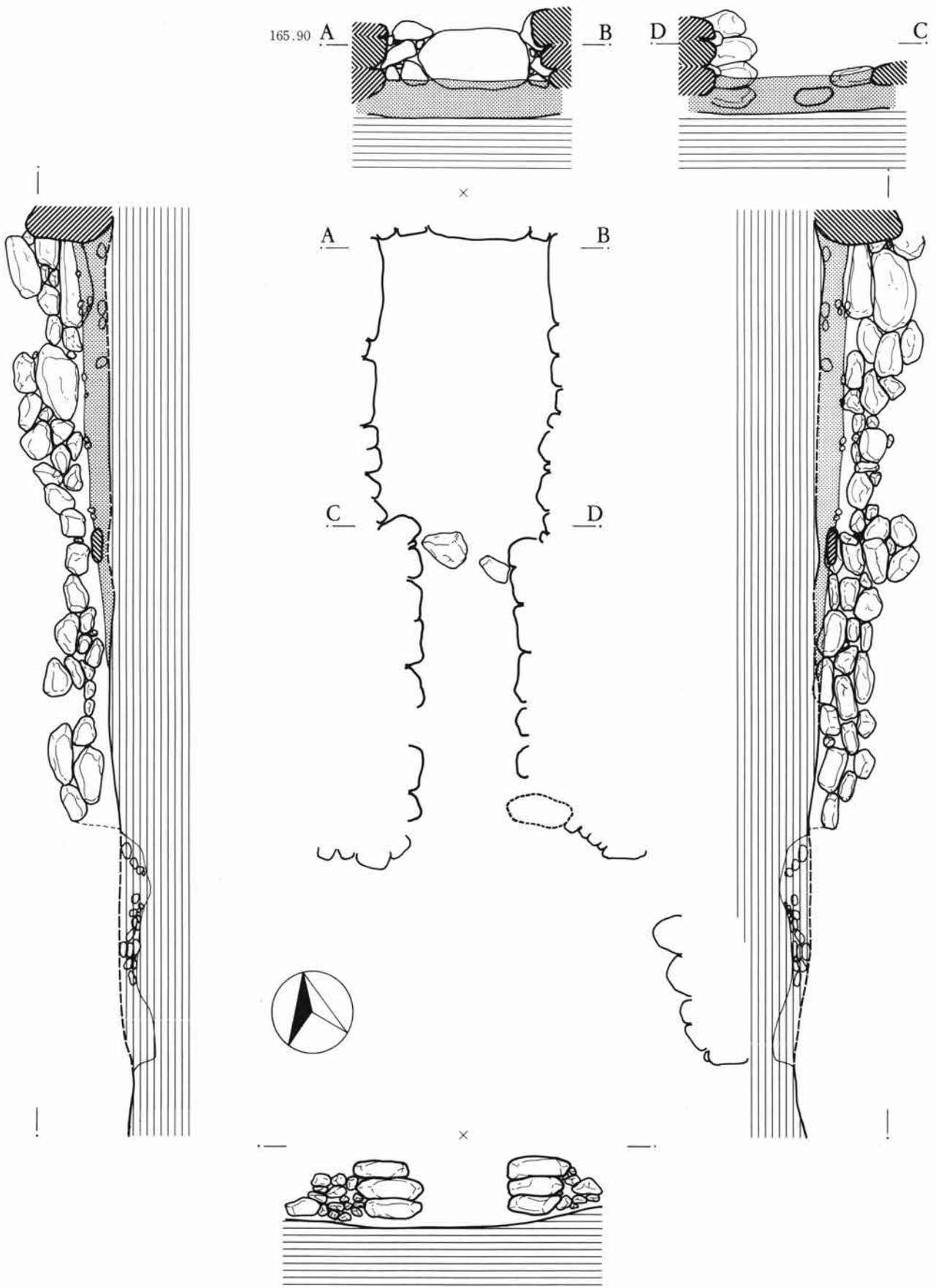
主体部の構造 川原石を使用した両袖型の横穴式石室である。石室は深さ10~15cmほどに掘り下げた比較的浅い「掘り方」の中に構築している。「掘り方」底部への敷石は無く、壁石は土の上に直接置いている。左右側壁、奥壁とも上半部はすでに崩され一部は根石を残すのみであった。両側壁は川原石を小口積にして構築しているが、奥壁には大石を使用している。玄室のプランは胴張りの傾向を示すが、玄門と見られる柱石の設置はない。石室床面は厚さ10cmほどに敷きつめた小円礫であり、この下に敷石はない。なお玄室床面は羨道床面より一段(10cm)高い。石室の裏込めは「掘り方」内いっばいに石をつめ、その外周は楕円形とはならず、石室の形なりにになっている。

出土遺物 玄室中軸線より左半分に集中して出土している。特に左袖壁前及び奥壁左隅に鉄鏃が集中して出土した。また、玄室中央近くには直刀が1本切先を羨道部に向けて出土している。一方、前庭部では、右石組先端に接して須恵器が破片となって出土している。なお、図版に示した遺物のうちNo.11~14は墳丘東西及び北にいたれたトレンチ攪乱層中から出土したものであり、本古墳に伴う遺物と断定し難い物もあるが、参考までにあげておく。

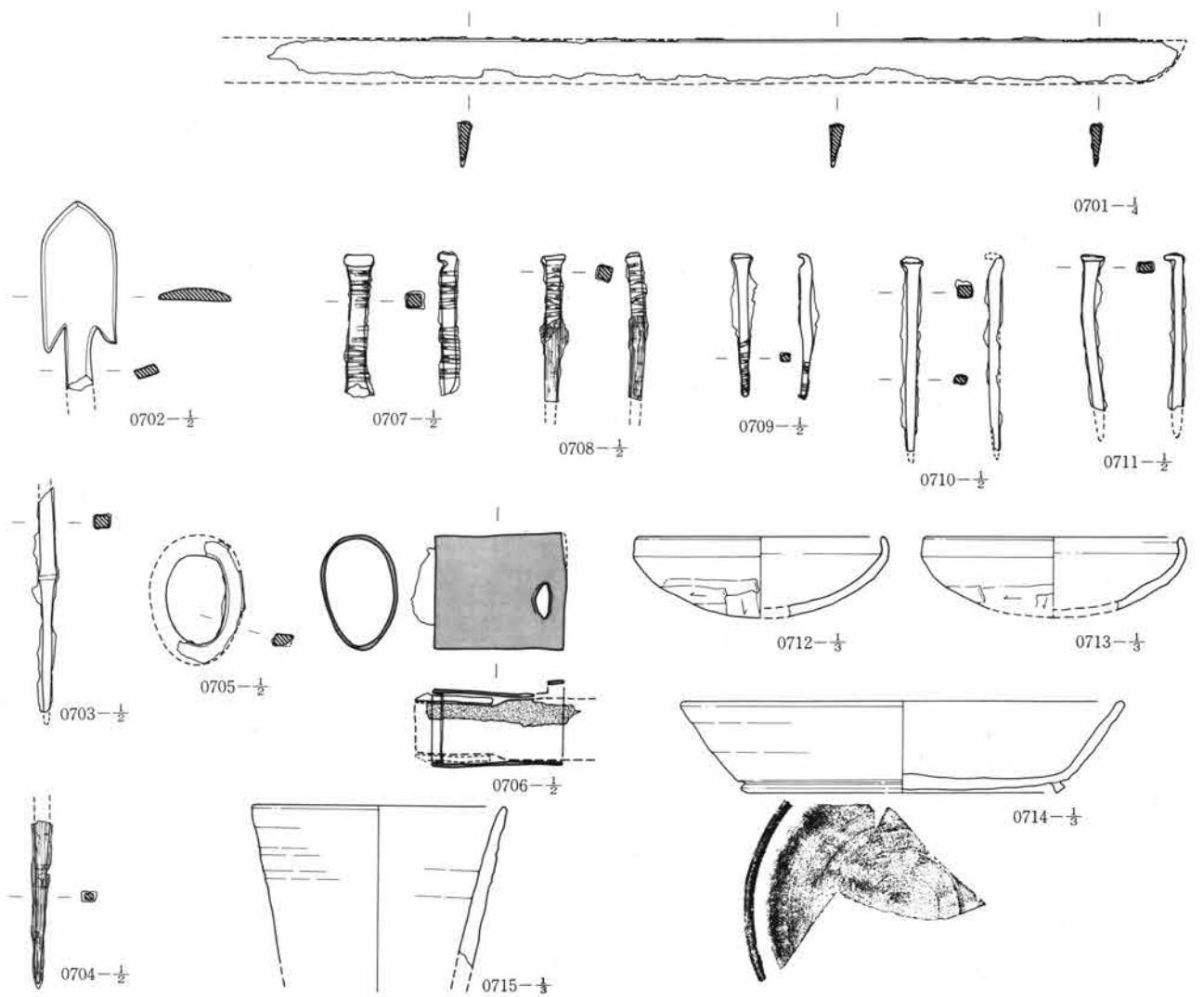
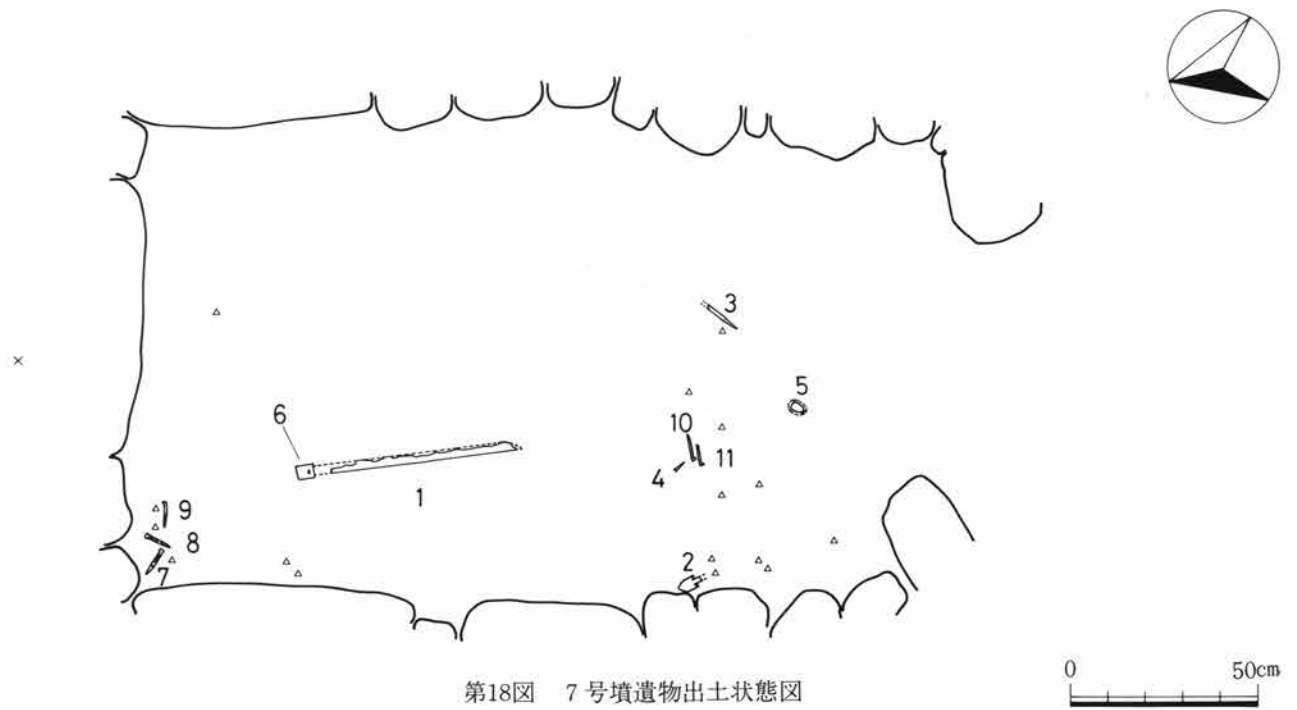
小 結 本古墳は、直径10m余の小形円墳で墳丘裾部は旧地表を削り出して見かけの高さを増していること、台形状に開く前庭が設置されていること、石室は石室の形なりに掘った「掘り方」の中に構築され、比較的小形であること、玄室右壁に胴張りが認められることなどが特色としてあげられる。



第16図 7号墳 墳丘図



第17图 7号填石室实测图



第19图 7号墳遺物実測図

第 8 号 墳

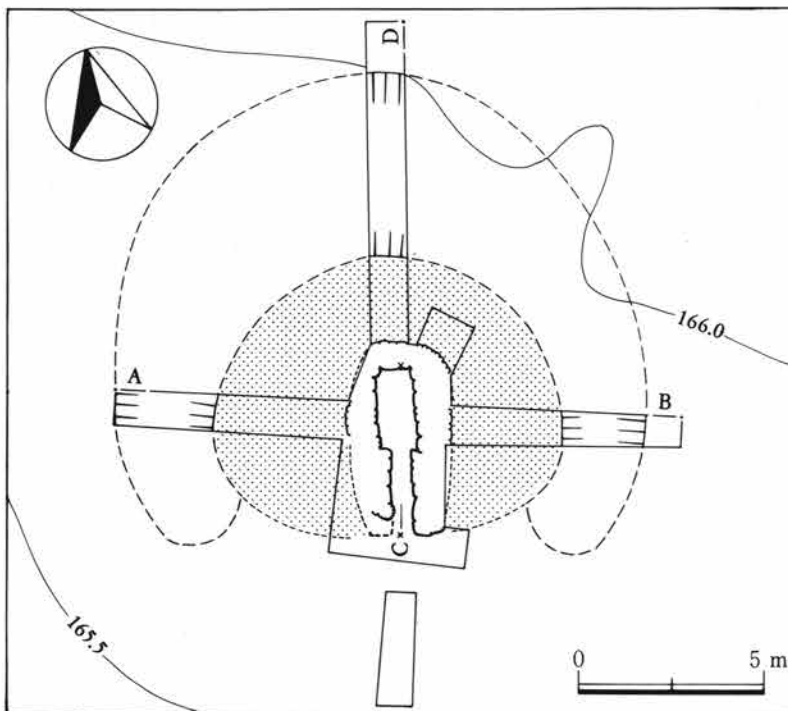
位 置 古墳群の南端にあり、北東約12mのところに7号墳がある。

墳丘と外部施設 直径9mほどの円墳。調査時点では墳丘の大半は削平されていたが、現地表下に下半部は残り、規模等の確認はできた。墳丘は、構築時の地表であった黒色土層及びその下のローム漸移層を20~30cmほど削り出して墳裾部を整形した後に盛土をしている。墳丘外周には、東・西・北の三方に幅約1.5m、深さ20cm前後の周堀が確認されたが、石室入口前の南側では確認できない。周堀は全周しなかったものとみられる。なお、周堀外側においても、当時の地表であった黒色土層約20cmを排土の上平坦化しており、先の墳裾部の整形と合わせて、墳丘の見かけの高さを壊す配慮が見受けられる。葺石は、石室入口の左右両側、後述の石室裏込めの範囲内（右側で羨道壁面から1.1m）に見られるだけで全周はしない。埴輪の配列、前庭はない。

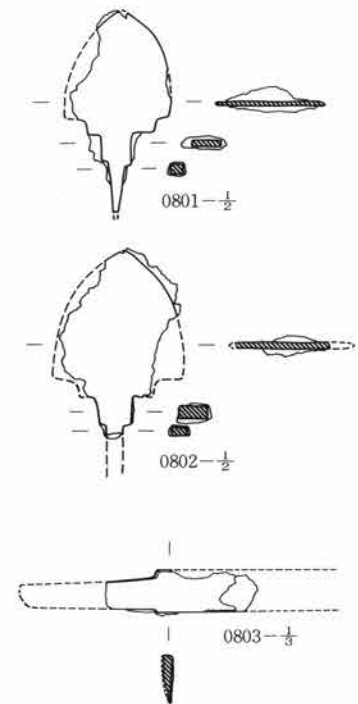
主体部の構造 川原石を使用した両袖型の横穴式石室。全長4.4mと小形であるが、玄室入口には左右ともに玄門を設置している。石室は奥壁裏で50cm、石室入口部で25cmの深さで、石室の形なりに掘り下げた「掘り方」の中に構築している。「掘り方」底部には川原石を敷き並べ、この上に壁石を設置している。左右側壁は比較的小ぶりな川原石を小口積としているが、奥壁は玄室幅いっぱいの大石二石を二段に積んでいる。石室の床は、「掘り方」底部の敷石の上に、小さな円礫を敷きつめている。裏込めは礫を主体とし、厚さ30~40cmであるがその外周は最下端から石組みをして止めている。なお「掘り方」法面と葺石石組の間にできた間隙には、2~3層に分けて土をつめており、壁石の積み上げ、裏込め、盛土等についての工程、順序が観察できる。

出土遺物 石室内はすでに攪乱され、副葬品等の遺存状態は悪く、玄室奥壁から1.4mのところ、右側壁に接して出土した鉄鏃等と、奥壁から70cmの玄室ほぼ中央部寄りに骨片がわずかに残っていたにすぎない。

小 結 本古墳は直径9mほどの小円墳であること、石室の形なりに掘り下げた「掘り方」の中に構築された比較的小形な石室であること、左右両側壁には小ぶりの石を使用して構築していること、玄室入口には柱状の石をたてた玄門を設置していることなどの特色があげられる。



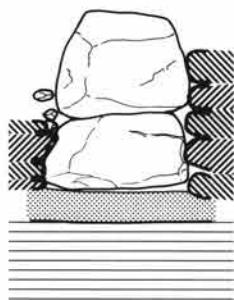
第20図 8号墳 墳丘図



第21図 8号墳遺物実測図

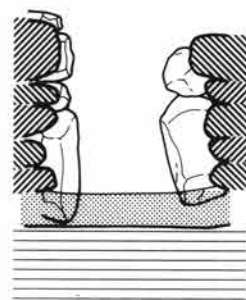
165.17

A

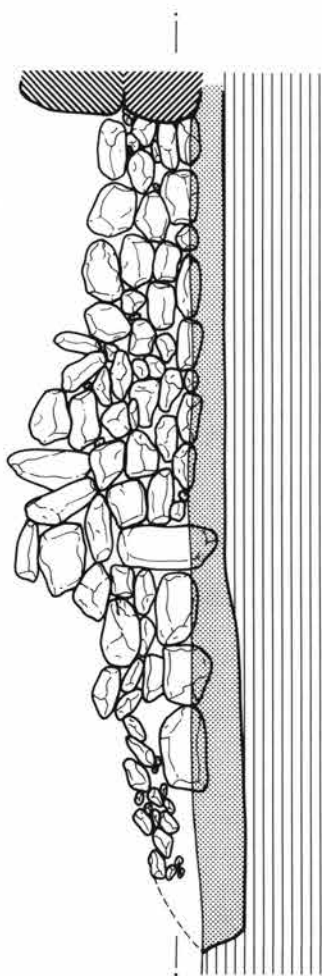


B

D



C

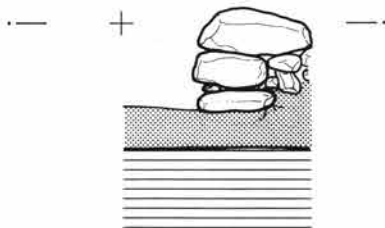
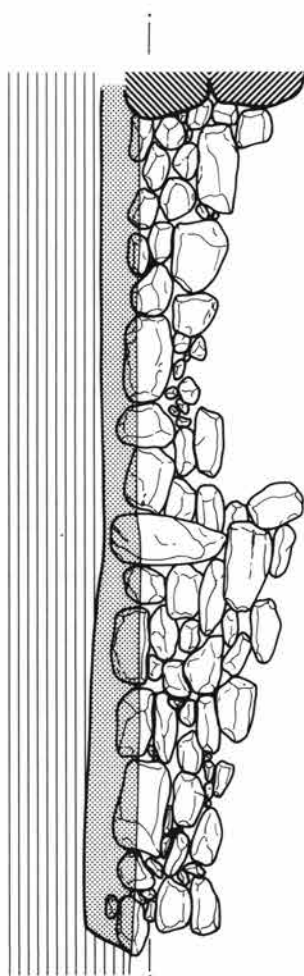
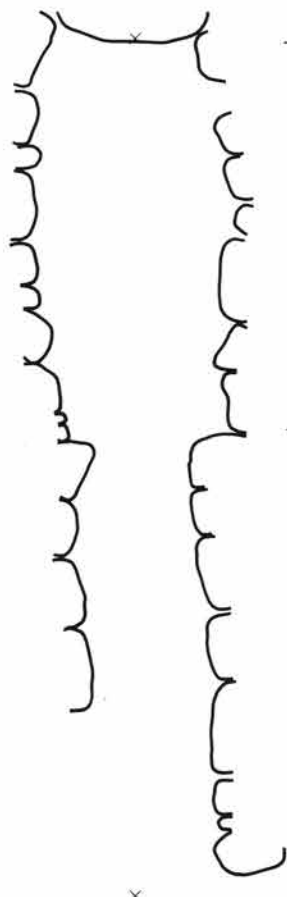


A

B

C

D



第22图 8号墳石室実測图

0 1 m

第 9 号 墳

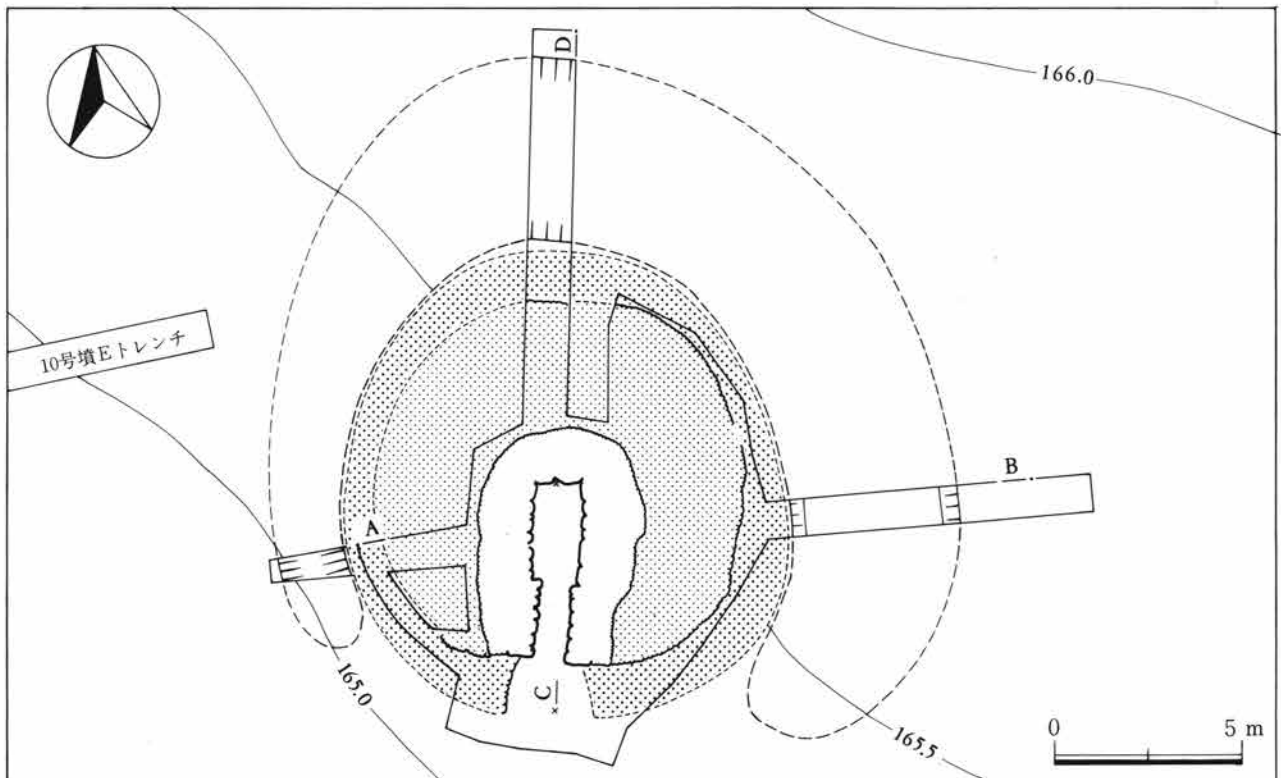
位 置 周囲には11・13・10・64・8号墳があり、本墳は64号墳の北15mに位置する。

墳丘と外部施設 調査前の古墳は比高差2m程の細長い雑草地で、わずかに古墳の痕跡をとどめるばかりであったが、墳丘下半部の残存は比較的良好であった。葺石根石付近の石組みが、ほぼ墳丘全体に残存し、その形状はやや南北長が長い直径約9.5mの円墳である。南・北トレンチによると、葺石は黒色土面に設置されているが、周堀掘り込み部は葺石根石から1.4mの距離があり、葺石と周堀の間に中段状の平坦面が配されている。平坦面には、埴輪の配列や遺物の存在はない。また、葺石内側は石室に寄せて盛土を重ねた状態が観察できる。石室入口前には前庭がある。石室入口部より25cmの位置からゆるやかな傾斜角をもつ前庭石組みの方向は石室中軸線方向とほぼ平行に近い傾向を呈すが、右壁側はすでになく、出土遺物もないため、細部は不明である。

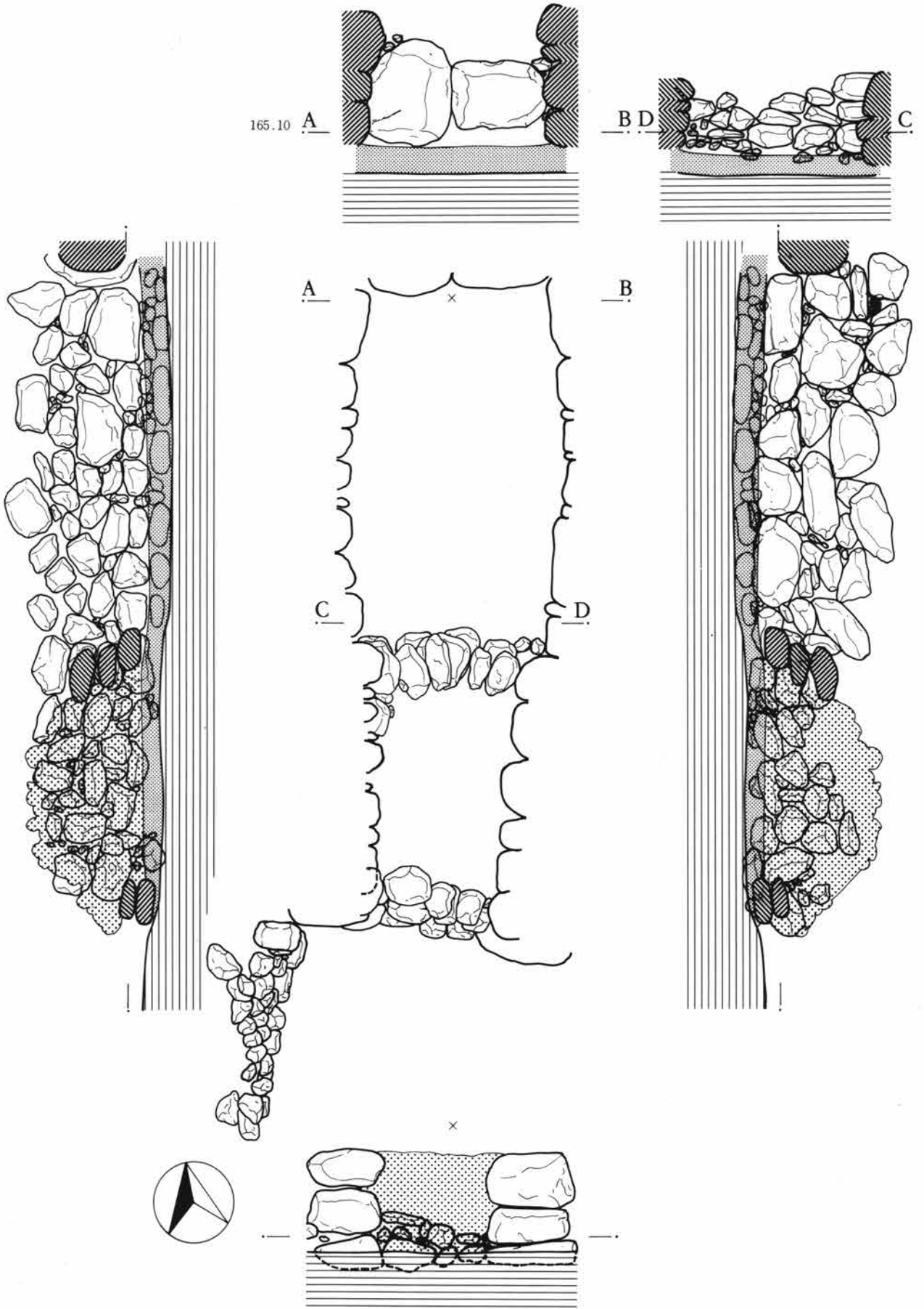
主体部の構造 川原石を主体にした両袖型横穴式石室で、全長4.76mが計測でき、やや小形である。各壁の用石は小口積みを基調とし、その間隙に小石を補填している。奥壁、袖石、入口部は用石を選択し整然としているが、他はやや粗雑である。石室は黒色土を30cm程掘り下げた「掘り方」の底面にやや大振りの川原石を敷きつめ、その上に壁石根石を裾えて構築している。また、石室周囲は幅1mの裏込め石が楕円形状におおひ、裏込め被覆石の断面では、石積みと盛土が互に関連しつつ順次構築された工程が顕著に観察できる。玄室床面には玉砂利が残存したが、羨道部には墳塞石がつめこまれているものの床面の識別が容易ではなかった。

出土遺物 石室内かなり攪乱されており、残された副葬品も少なかったが、石室奥半部に鉄鏃片、小玉11、切子玉2、管玉1、金環3対計6個、大刀金具1及び散乱した骨片が認められた。

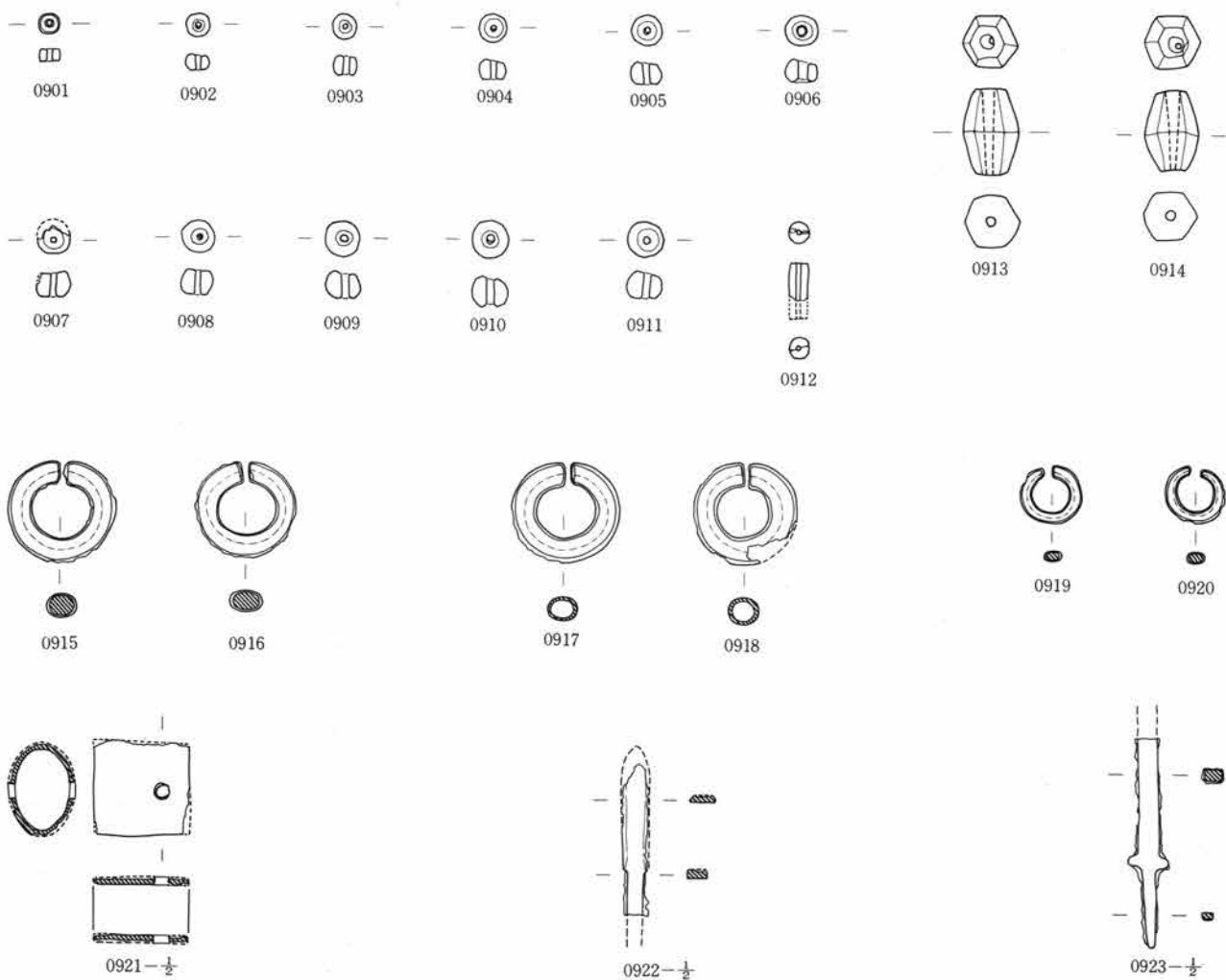
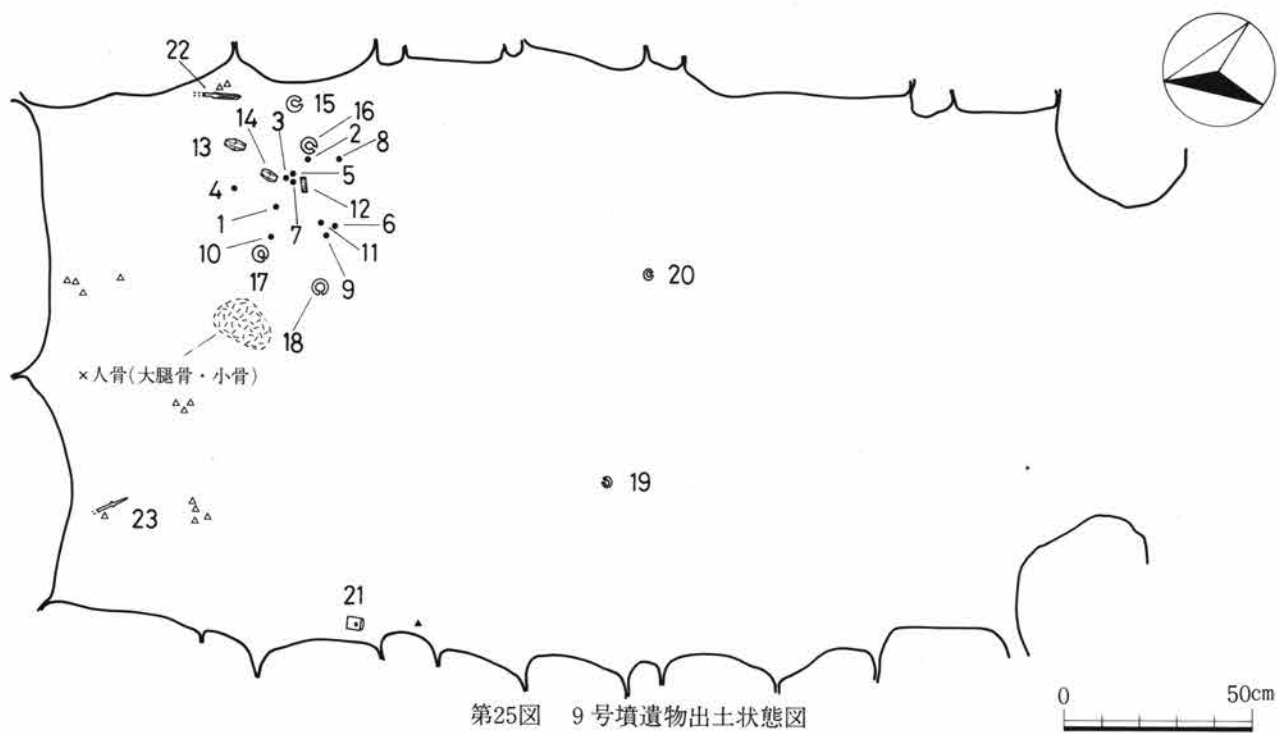
小 結 本古墳は、直径9m余の小円墳であること、石室は「掘り方」の中に構築した比較的小形のものであること、石室に使用している石も比較的小ぶりであり、奥壁も2石を並列させていること、本文ではふれなかったが、玄室のプランに左右両壁ともに胴張りが認められ、いずれも石室長を半径とした円弧に合致する曲線を示すことなどの特色をあげることができる。



第23図 9号墳 墳丘図



第24图 9号填石室实测图



第 10 号 墳

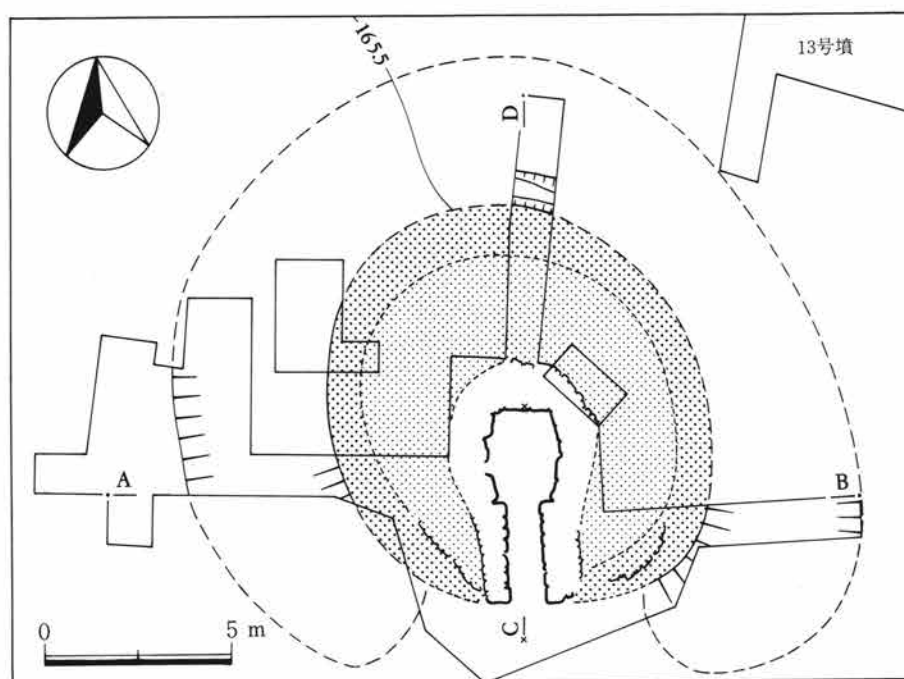
位 置 古墳群南端にあり、西は12号墳と接し、南に16号墳、北及び北東は13号、11号墳と近接する。

墳丘と外部施設 直径（南北）約9mの円墳。構築時の地表から30cm前後削って墳丘裾部として整形し、その外側に幅30～70cm前後のテラス状平坦部を設けている。葺石は、整形した墳丘裾部に根石を設置しており、盛土部分を合わせた墳丘の見かけの高さを増している。墳丘の高さは、調査時で1m前後を残すのみであり正確なところは不明であるが、石室の高さ等からみて3m前後であったろうか。東・北・西の三方にはテラス外周に幅1m前後の周堀をまわしたとみられるが、西側墳丘裾部は住居跡によって明らかでない。埴輪はない。

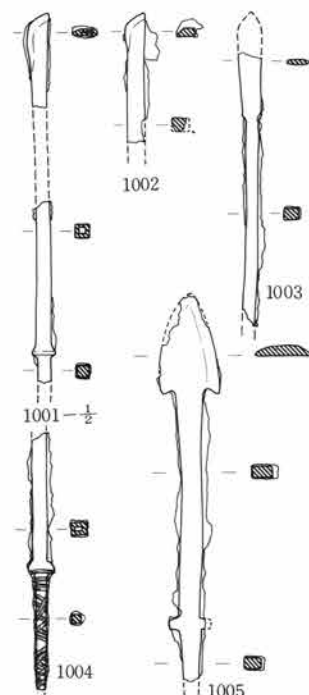
主体部の構造 川原石を使用した両袖型の横穴式石室。石室は北の奥壁近くで40cm、南の石室入口近くで30cm前後の深さに掘り込んだ「掘り方」内に構築している。「掘り方」の規模は長さ約6.5m、幅は羨道のところで2.6m前後、玄室のところで4m（推定）であり、石室の形なりに形どられている。石室の壁石は、「掘り方」底面に直接設置している。玄室両側壁は、根石にはやや大ぶりの石を使用しているが、羨道側壁とともに全体に小ぶりの川原石を小口積にしている。奥壁は、中央に大石を3段積み、その両側を川原石で補填している。玄門とみられる柱状の石の設置はないが、この部分の壁石がプランで見ると羨道壁面より1段前に突出していること、ほぼ同大の石を直列に積み上げているところから、玄門を意図した構造ともみられる。石室プランは、玄室左右両側に胴張りが認められるとともに、奥壁から50、1.6mのところ2個所に、川原石を配列した間仕切が認められ、玄室を前後に三分している。石室の床面は、石室内いっばいに人頭大の川原石を敷き並べた上に15cmほどの厚さに小さな礫を敷きつめて構成している。なお、下の敷石は石室壁石の下には築かれていない。壁石裏側には、厚さ約1mの裏込めがなされている。裏込めは「掘り方」内いっばいになされているため、裏込め外周の石組は「掘り方」上面より上に認められる。この外周石組も「掘り方」同様石室の形なりに羨道部の幅が狭くなる。石室は、羨道内いっばいに礫をつめて閉塞し、その両端を石組で止めている。この石組の根石が柵石となっている。

出土遺物 石室内の攪乱もあり残された遺物は少ないが、一部に原位置での遺物が確認された。まず、玄室西南隅、左袖石の前に鉄鏃が出土し、また、石室中軸線より東、前後二列の間仕切石に挟まれた中央部に骨片、骨粉の散布が見られ、右壁に近接して鉄鏃が認められた。

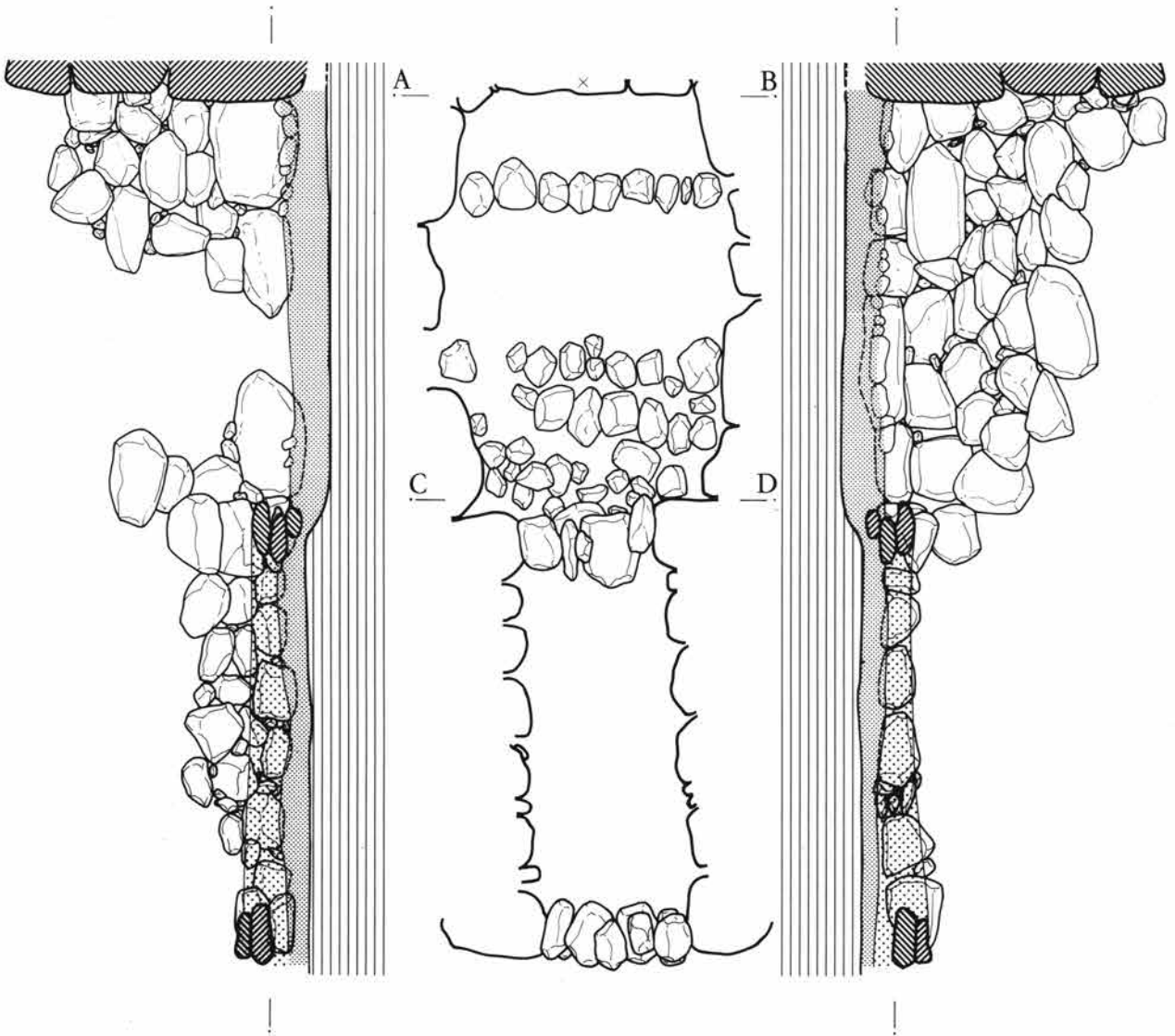
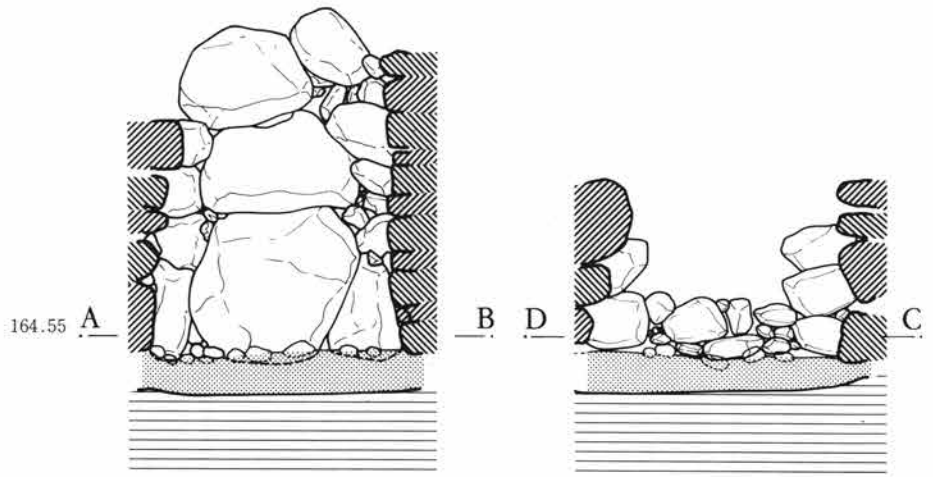
小 結 本古墳の石室は、玄室に胴張りがあり、配石によって三分しているといった特色が認められる。



第27図 10号墳 墳丘図



第28図 10号墳遺物実測図



x

第29图 10号填石室实测图



第 11 号 墳

位 置 本古墳群南端の一群中にあり、南は 8 号、9 号、東は 7 号、西は 13 号、北は 14 号、62 号に近接している。

墳丘と外部施設 直径（東西）10.5m ほどの円墳。墳丘の削平はかなりすすんでいたが、現地表下に墳丘下半部が残っていた。墳丘は構築時の地表であった黒色土層を 20cm 前後削り出して裾部を整形している。整形裾部の外周には平坦面をまわし、その外側に周堀がめぐる。周堀は南には認められず全周はしていない。その幅は 1.1~1.4m、深さ 30cm 前後である。葺石は石室入口部左右に一部認められるだけである。埴輪はない。石室入口前には、構築時地表から 10cm 前後の深さで平面台形状に掘りくぼめた前庭状の「掘り方」が確認された。この「掘り方」は後述の石室「掘り方」に連続する。「掘り方」内には多数の石が転落しており、前庭石組の崩落と考えられる。埴輪なし。

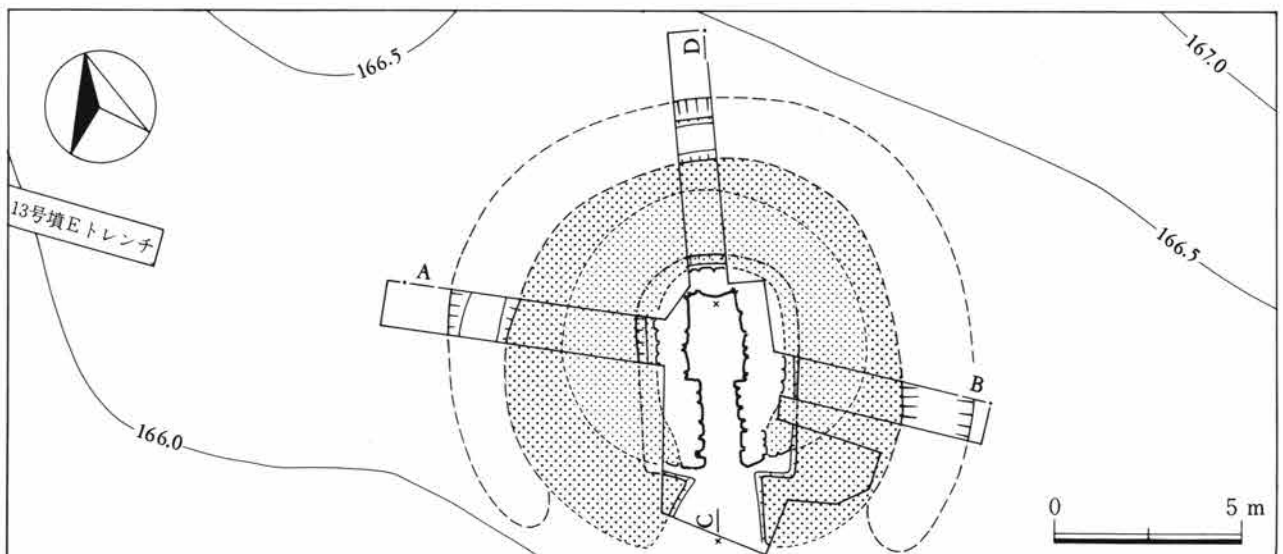
主体部の構造 川原石を使用した両袖型の横穴式石室。石室は東西約 4.2m、南北約 5.7m、深さ北（奥）で 70cm、南（前）で 30cm ほどに掘り下げた「掘り方」内に構築しており、玄室の下半部はこの中に納まる。「掘り方」の底部は、ローム層直上まで掘り下げた後に、黒褐色土層を盛って整地し、この上に人頭大の川原石を敷き並べている。石室壁石は、この敷石の上に根石を据え積み上げている。石室の左右側壁及び奥壁にはかなりの大石（1.2×0.8m）を使用し、これらの石の最大面を壁面に出して積み上げた平積の部分が多い。特に玄室壁に大石の使用が目立つ。

石室裏込は約 60cm ほどの厚さで礫を主体としてなし、その外周は「掘り方」底面に根石を置いた石組で止められている。裏込外周の石組は石室を馬蹄形に囲んでいる。また、この石組と「掘り方」法面との空間（30~50cm）には土をつめているが、これは数層に分けることができ、壁石を積み、裏込めをし、外側を土で固めるといった構築工程をみることができる。なお、玄室プランでは、右壁に胴張りが認められる。

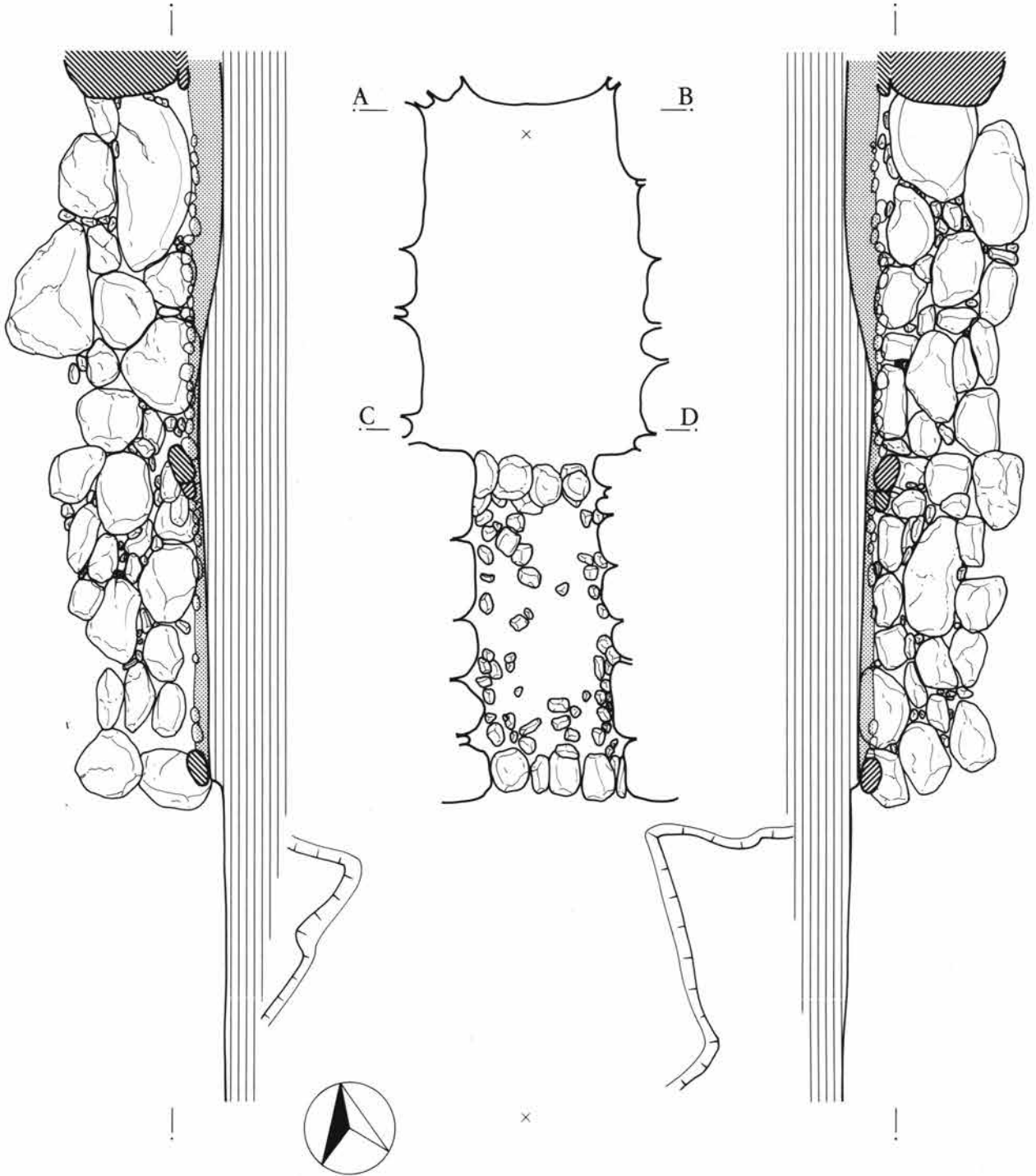
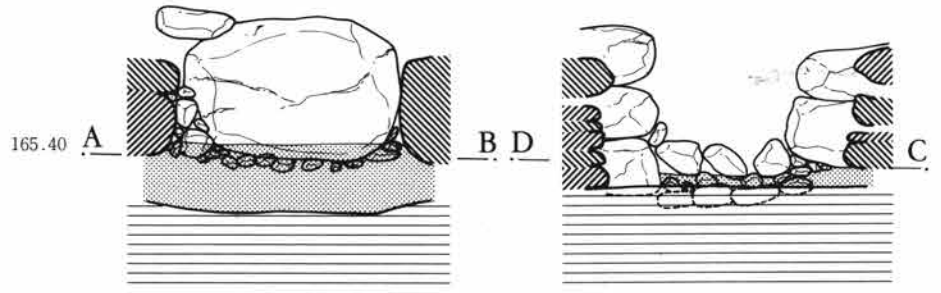
出土遺物 石室は相当に攪乱され、石室内の遺物の残存状態は非常に悪く、玄室西南隅の左袖壁前に刀子片、鉄鏃片がわずかに残っていたにすぎない。

前庭「掘り方」の崩落した石の下及び石に混入して須恵器の出土が多い。これら遺物は出土するレベルにも差があり、かなり雑然としている。さらに、第 32 図に示した出土遺物のうち No. 3・No. 6・No. 8、No. 9 は石室前に出土した破片と他のトレンチから出土した破片、さらには南に近接する 8 号古墳のトレンチから出土した破片等と一緒に復元されるといった状態であり、ただちに本古墳に関連させて考えるには問題があるが、参考までにかかげたものである。No. 5、No. 10 については前庭部、羨道部出土の破片が接合されたものである。

なお、墳丘東側のトレンチでは、墳裾に近いところで竪穴住居に伴う羽釜片が出土している。10 号墳墳裾には後の竪穴住居とその出土品が確認されており、ここが後に集落として再利用されたことが明らかになっている。本古墳の前庭の混乱もこれと関連してのものとも考えられる。

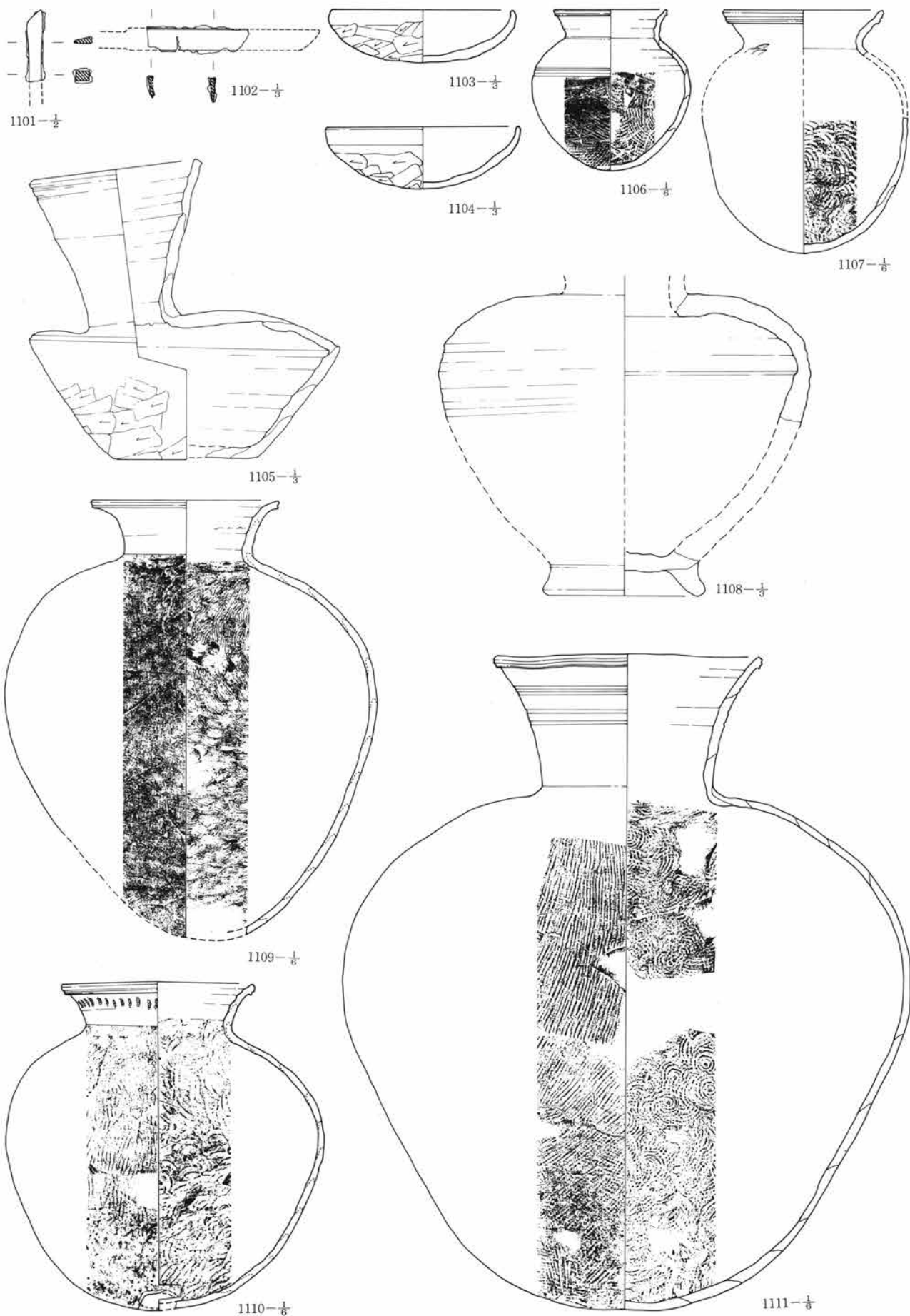


第30図 11号墳 墳丘図



第31图 11号墳石室実測図

0 1 m



第32图 11号墳遺物実測図

第 13 号 墳

位 置 古墳群南端の一群にあり、西の15号、東の11号、南の10号・12号、北の14号の各古墳に囲まれて位置している。

墳丘と外部施設 南北径12.3mほどの円墳。調査時点では南北約5.5m、東西3m、高さ1mほどの墳丘をとどめていた。墳丘東側前半部に入れた東西トレンチでみると、古墳構築時の地表面を40cmほど削って墳丘を整えた様子は明確であるが、その裾部から3.7mのところまでは削平した平坦が続き立ち上りは見られず、周堀は確認できない。一方、墳丘西側後半部に入れた東西トレンチでは、幅約1m、深さ20cmの堀跡が確認できる。ここでも、周堀外側では、構築時の地表を20cmほど削平し平坦化しており、地表を削り出して墳丘を高く見せんとする意図が確認できる。石室入口前には周堀跡は一切確認できない。南傾斜面につくられた古墳であり、周堀は、墳丘後半部にまわし、前半部にはなかったものと考えられる。

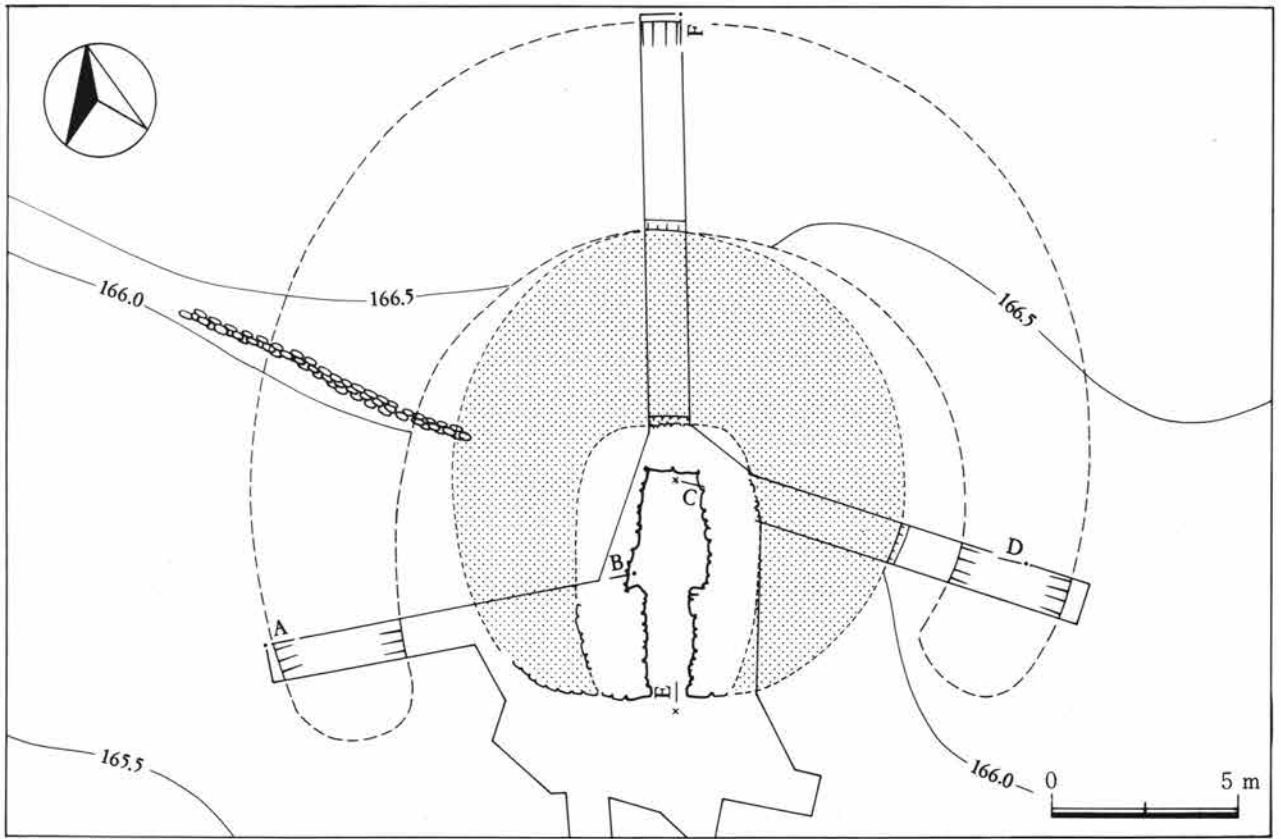
葺石は、石室入口両側に認められ、西側では墳丘裾部をまわり始めたところまで根石が確認できたが、各トレンチでは、葺石とみられる石組は確認できない。墳丘裾部より外側には、転落した川原石も出ており、葺石の可能性も否定できないが量的には少ない。葺石は墳丘前面に限定されたものであろうか。埴輪の配列はない。

主体部の構造 川原石を使用した両袖型の横穴式石室である。石室は構築時の地表下を北の奥壁部分で40cm、南の石室前半部で20cmまで掘り下げた「掘り方」内に構築している。本古墳では、この「掘り方」は旧地表の上30～40cmほど盛土をした後に、盛土部分から旧地表下まで50cm前後の深さに掘り下げている。平坦に整えた「掘り方」底面には人頭大の川原石敷石を石室構築範囲内に敷きつめ、この上に壁石を設置している。

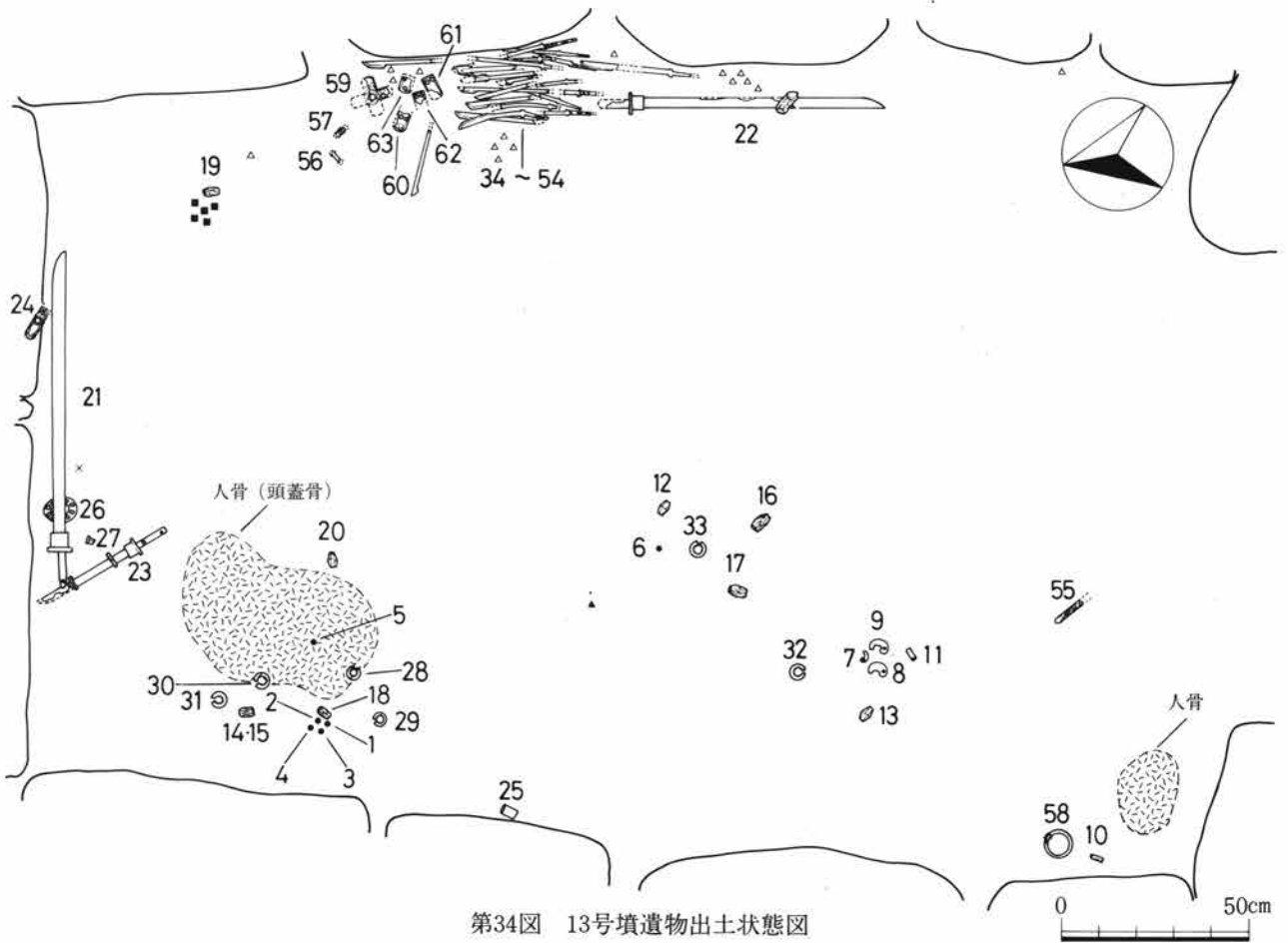
玄室両側壁及び奥壁は90×50cm前後のかなりの大石を使用し、平積の傾向が強いのに対し、羨道はこれよりやや小ぶりの石を小口積にしている傾向が目立つ。玄門の設置はない。玄室のプランは奥幅に比べて前幅が広がり、やや胴張りの傾向を示す。なお、玄室奥寄り3分の1のところの間仕切状の石列が1列認められる。石室は羨道いっぱいにつめ込まれた川原石で閉塞され、その両端は石組みによって止めている。玄室の床面は「掘り方」底部の敷石の上に15cmほどの厚さに小さな礫を敷きつめている。石室の裏込めは、「掘り方」内いっぱい（厚さ80cm前後）に礫をつめ、「掘り方」上端より上は裏込め外周を石組みをもって補強している。この外周は石室の三方を楕円形にめぐる。

出土遺物 石室。玄室内に天井石等の転落があり、石室内の攪乱をまぬがれたためほぼ原位置で確認できたものが多い。玄室での遺物は大きく3ブロックに集中する。第1は間仕切石列より奥の一群である。奥壁寄りには大刀2本、内1本は刃部を東に向け奥壁に接してある。また、西壁寄りでは、頭蓋骨片を中心に、金環4個の他切子玉等玉類が集中して出土した。第2は、間仕切石列より前で東壁に接した一群である。ここでは、玄室ほぼ中央、東壁に接し刃部を南に向けて置かれた大刀を中心にして鉄鏃類が集中して出土している。特に大刀の北30cmのところには鉄鏃多数が先端を北に向けて束ねて置かれていた。第3は間仕切石列より前で玄室西半分に集中する一群である。このうち、玄室東南隅、袖壁に接したところには、少量の骨片と管玉、鉄鏃がみられた。また、間仕切石と袖壁までのほぼ中央には、金環の他管玉、勾玉等玉類が集中していた。

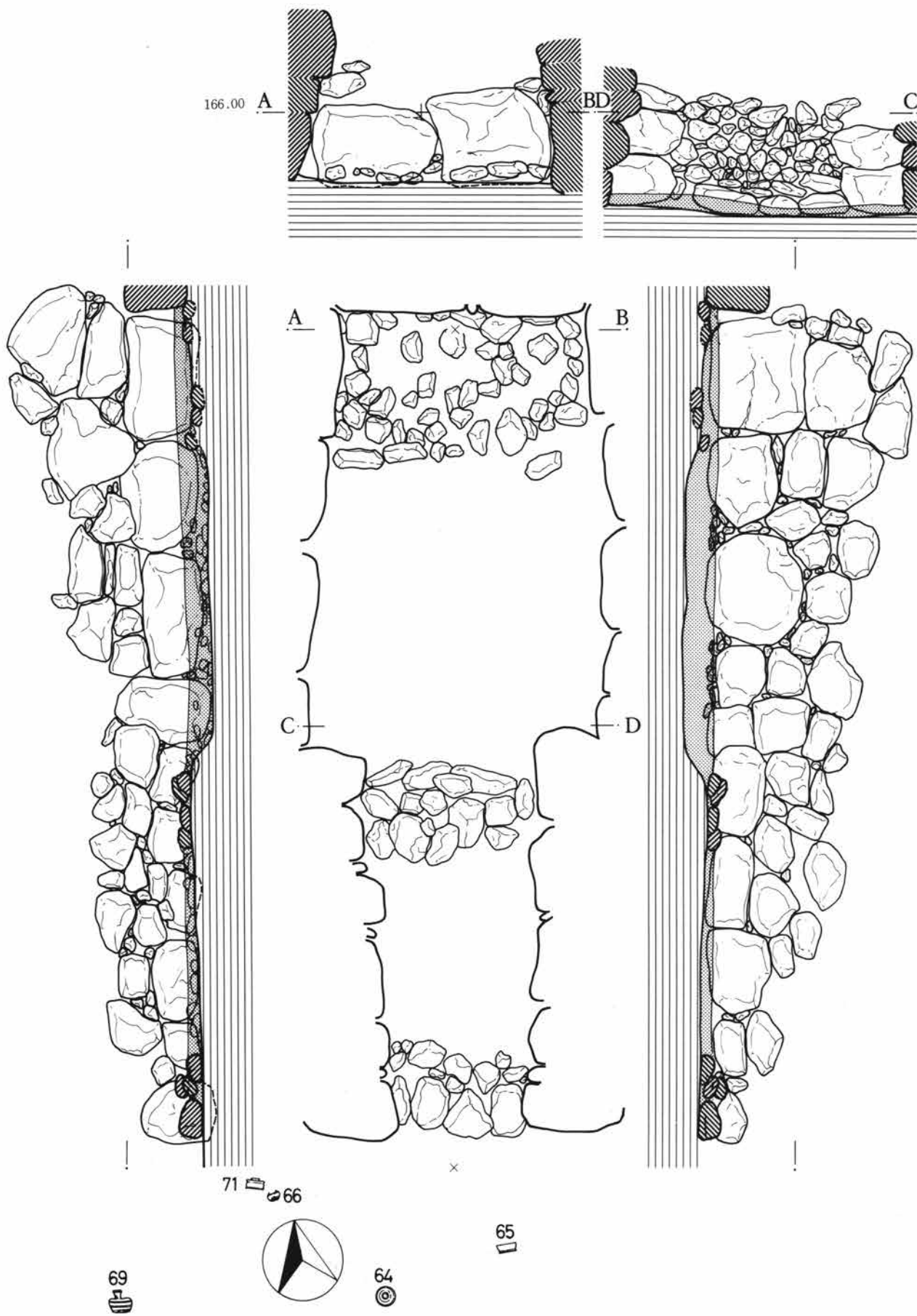
石室入口前。ここには石組みを伴う前庭遺構は確認できなかったが、石室正面及び石室中軸線から西3m、墳丘葺石より前方1.5mの範囲内に、須恵器甕、蓋等須恵器片が集中的に出土している。以上、出土遺物をまとめてみる。小玉6個、勾玉3個、管玉2個、切子玉2個、琥珀製裏玉7個、金環6個の装身具。直刀は3振で、大刀が1振、小刀が2振である。いずれも細身で鍔と喰出鐔は1体物もある。鉄鏃は25本を数え、片刃鏃で長脚のものが多い。土器類は全て須恵器である。古墳の攪乱がひどく明確に原位置を確認しえたものはない。大甕は墳頂部への供献である。杯蓋は灰色を呈しておりカエリを残す。杯身は盤皿で底径13cmを測る大形品で高台のふんばりは弱く底面と同じレベルにある。高杯は無蓋で脚部の透しはない。追葬であろう葬壺形の有脚短頸壺と蓋の組み合わせがみられる。骨蔵器であろうか。平瓶は胴部天井のふくらみも弱く3条の沈線がめぐる。



第33図 13号墳 墳丘図

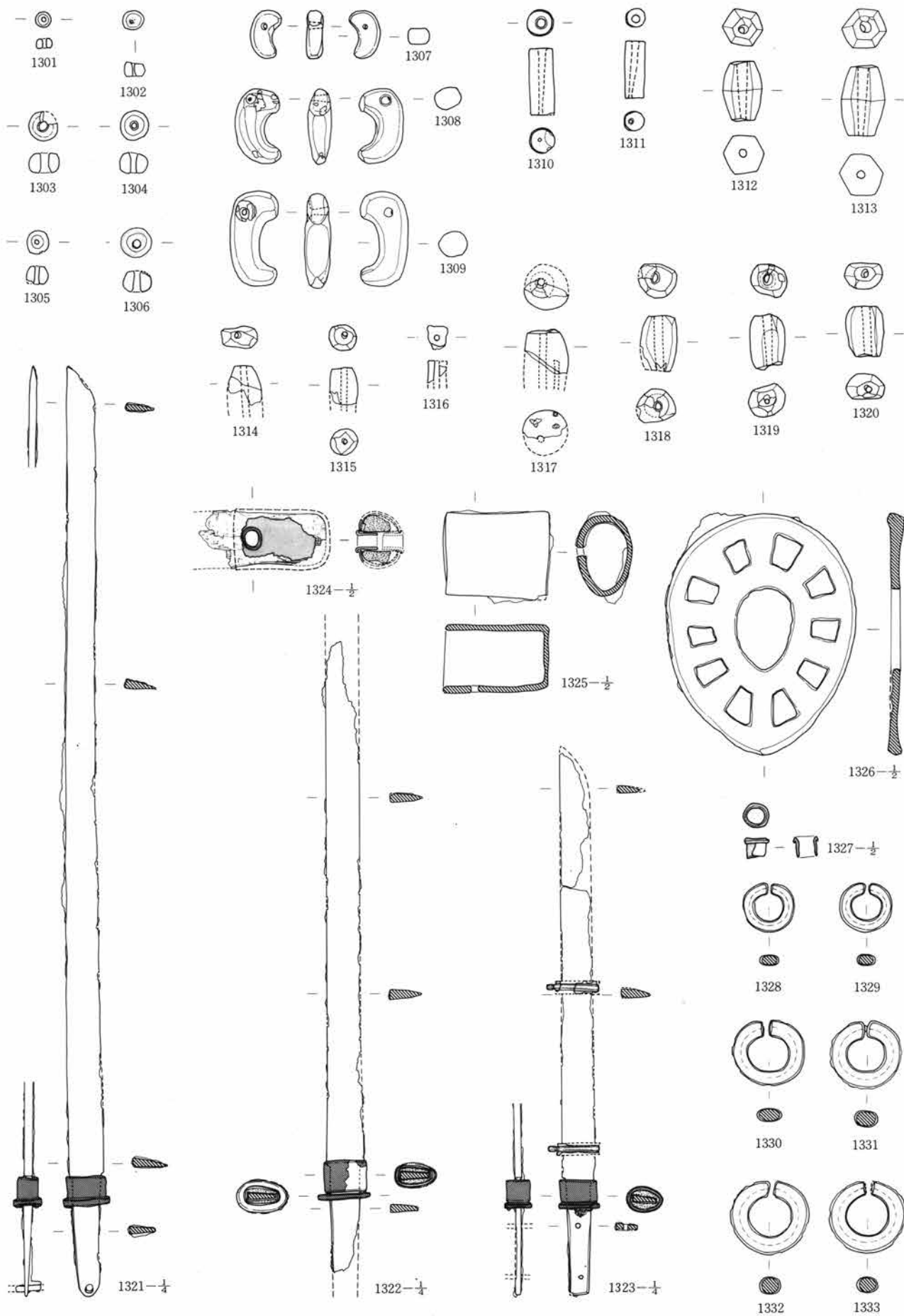


第34図 13号墳遺物出土状態図

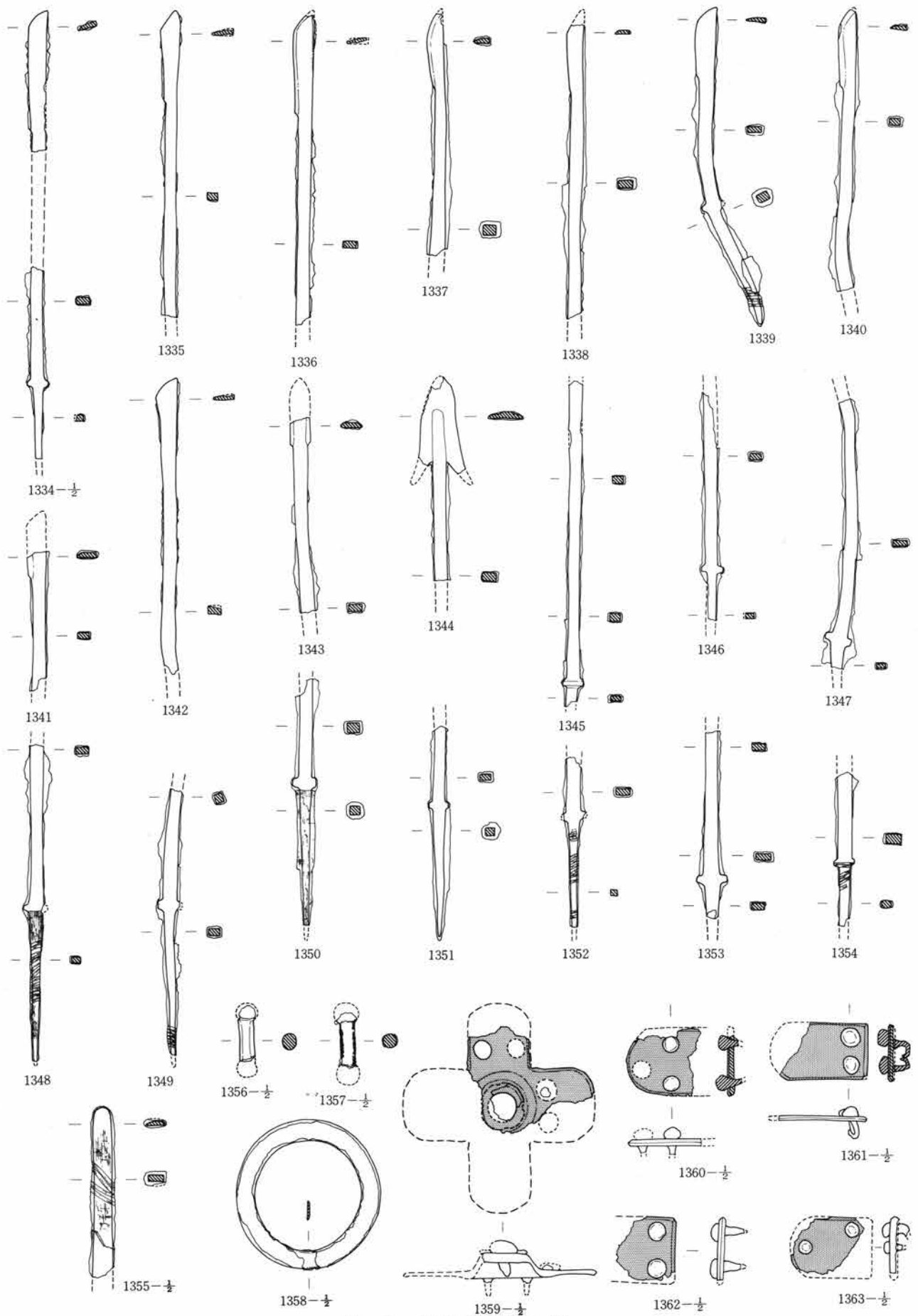


第35图 13号填石室实测图

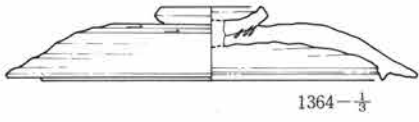
0 1 m



第36图 13号墳遺物実測図(1)



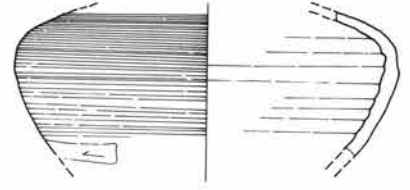
第37图 13号填遗物实测图(2)



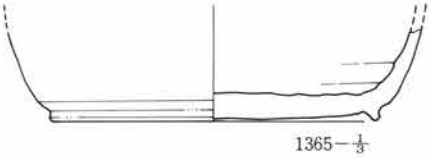
1364- $\frac{1}{2}$



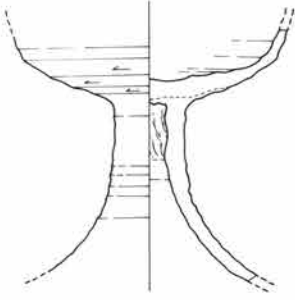
1366- $\frac{1}{2}$



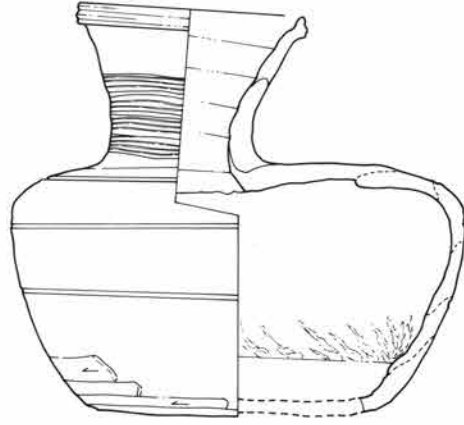
1368- $\frac{1}{2}$



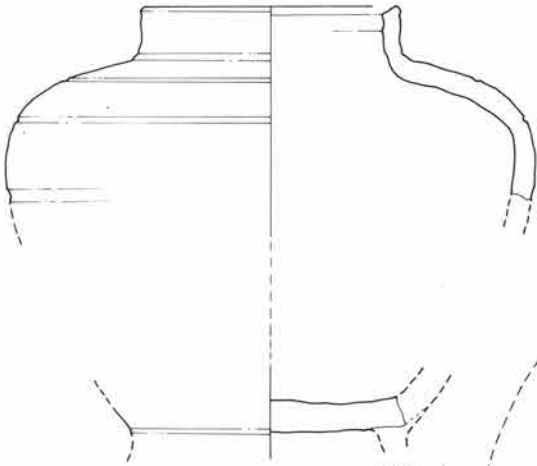
1365- $\frac{1}{2}$



1367- $\frac{1}{2}$



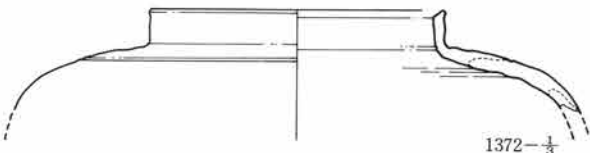
1369- $\frac{1}{2}$



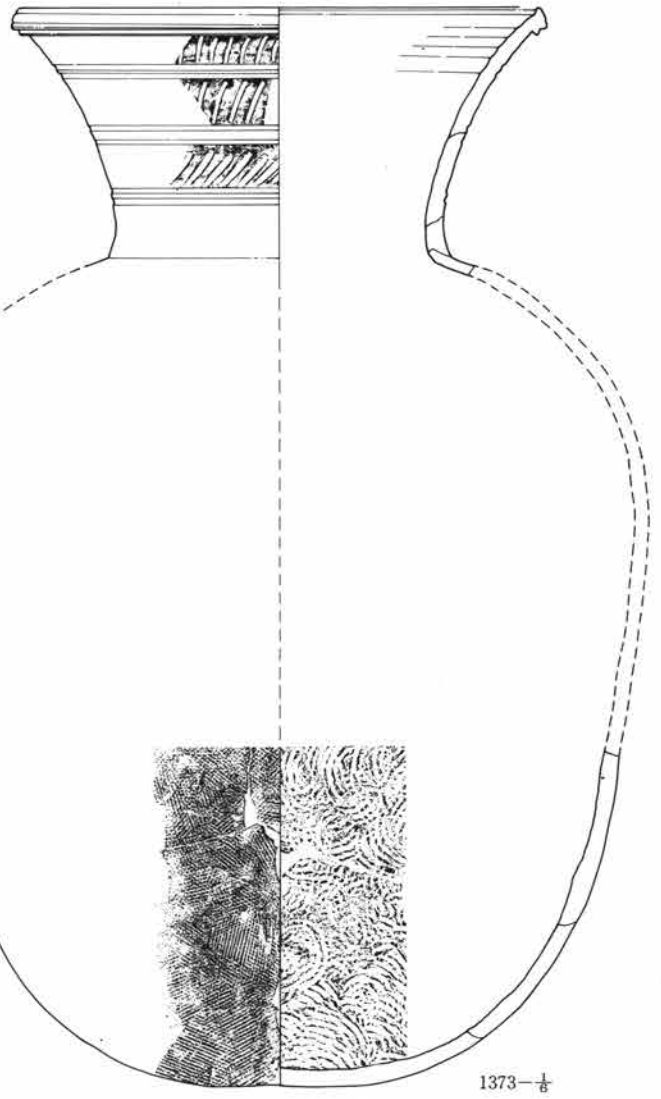
1370- $\frac{1}{2}$



1371- $\frac{1}{2}$



1372- $\frac{1}{2}$



1373- $\frac{1}{2}$

第38图 13号填遺物実測図(3)

第 14 号 墳

位 置 古墳群中央に占地。標高は167mである。

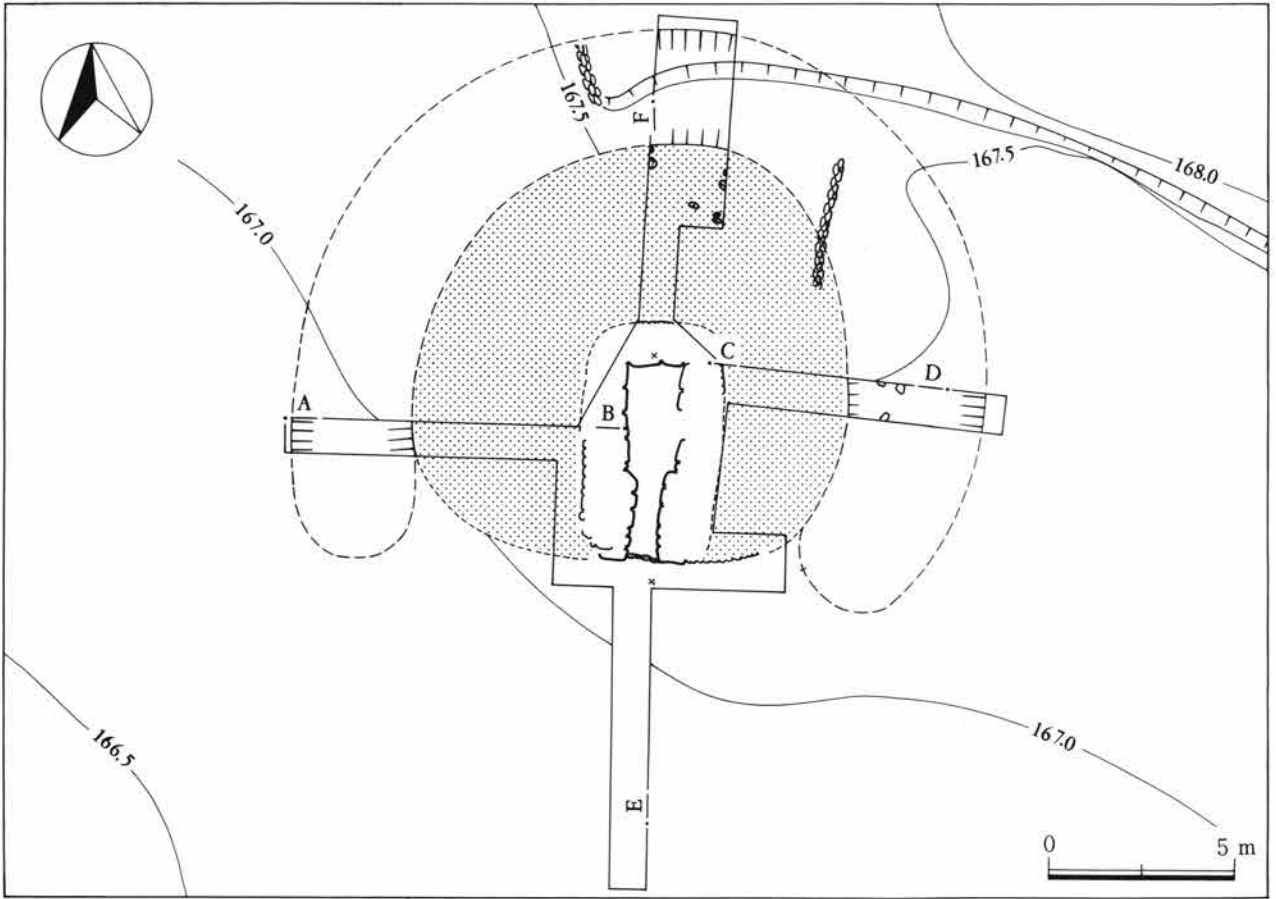
墳丘と外部施設 南北径約11mの円墳。調査時点では墳丘の大半は削平され、径約4m、高さ0.5mほどの高まりをわずかにとどめているにすぎなかった。他の古墳同様に構築時地表から30cm前後削って墳丘を整え、墳丘周辺も30cm低い面ではほぼ平に整えているが、これの立ち上りはトレンチ内では確認されていない。周堀は東トレンチでは墳丘盛土の末端で移行している。西トレンチでは盛土はほとんど削平されているが、ゆるやかな傾斜を持って周底に至るようである。南トレンチは石室前を10m発掘したが周堀は検出できなかった。北トレンチでは周堀に移行する箇所に葺石根石と考えられる石組がみられ、これが墳丘盛土の末端ともなっている。周堀全体を完掘できなかったものの南方に開放した馬蹄形の周堀の存在が考えられる。墳丘盛土は残存高で90cmを測る。葺石は石室入口部西側に一部分延長しており、特に両側部分では葺石根石の遺存状態が良好であり、円弧を描く部分もみられる。その他のトレンチ部分でも葺石根石が原位置を保っていると考えられるものはなかったが、その周辺には多量の川原石の流れ込みは観察できた。これらの所見から少なくとも墳丘盛土の末端が周堀と兼ねることから葺石根石の列は全周をめぐるせていたと考えることができよう。埴輪の樹立はない。

主体部の構造 川原石を使用した両袖型の横穴式石室である。石室は北で50cm、南で10cm前後に掘り下げた「掘り方」内に構築している。「掘り方」底部には、石室構築範囲内に拳大の石を敷きこの上に壁石を設置したのと考えられる。壁石もその大半はすでに崩落し、根石を残すのみの部分が多い状況であったが、これに残った石をみると玄室の奥壁・側壁にはかなり大きな石を使用しているのに対し、羨道ではこれに比較して小ぶりの石を使用していることがわかる。玄門はない。玄室プランはほぼ長方形である。「掘り方」底面に敷かれた拳大の石は、石室内では厚さ30cmほどになり、この上面が石室の床面となっている。石室は、石室入口から1.5mのところまでで一部確認できた様子から、羨道いっぱいには大小の礫を入れて閉塞していたものとみられる。

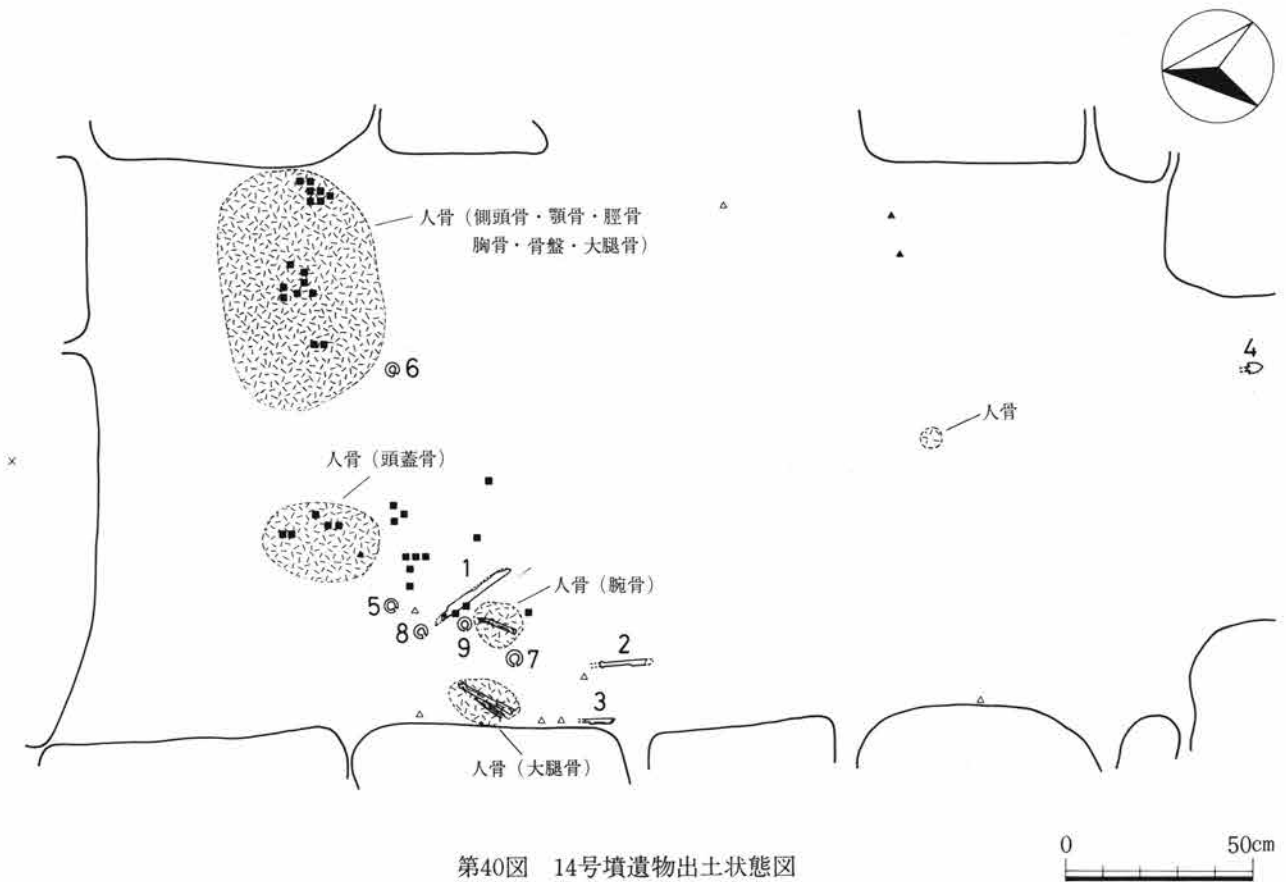
石室壁石裏側には、厚さ70cm前後に大小の礫を使用して裏込めをしている。これは「掘り方」内ではその法面までいっぱいにつめているため、特に石組は見られないが、「掘り方」上面より上は、裏込め外周を石組みによって止めている。裏込め外周は、石室周辺を楕円形にまわる。

出土遺物 石室の破壊はかなりすすんでいたが、石室内への落石が多いため攪乱をまぬがれ、骨片、鉄鏃等ほぼ原位置で確認できたものも多い。石室内の遺物は、石室軸線を中心にして、東西の二ヶ所に集中している。軸線より東では、奥壁から80cmほどのところに頭蓋骨片、その周辺に12本の歯及び耳環1個がほぼまとまってある他、右袖壁の近くに直刀1、鉄鏃1が出土している。一方、軸線より西では、奥壁から80cm、軸線寄りのところに頭蓋骨及び歯が、さらにここから西壁に接するところまでの範囲に歯、大腿骨片、金環4、鉄鏃、刀子等が集中して出土している。埋葬個体は金環の数等からみて、少なくとも軸線より西に2体、東に1体はあったものと考えられる。

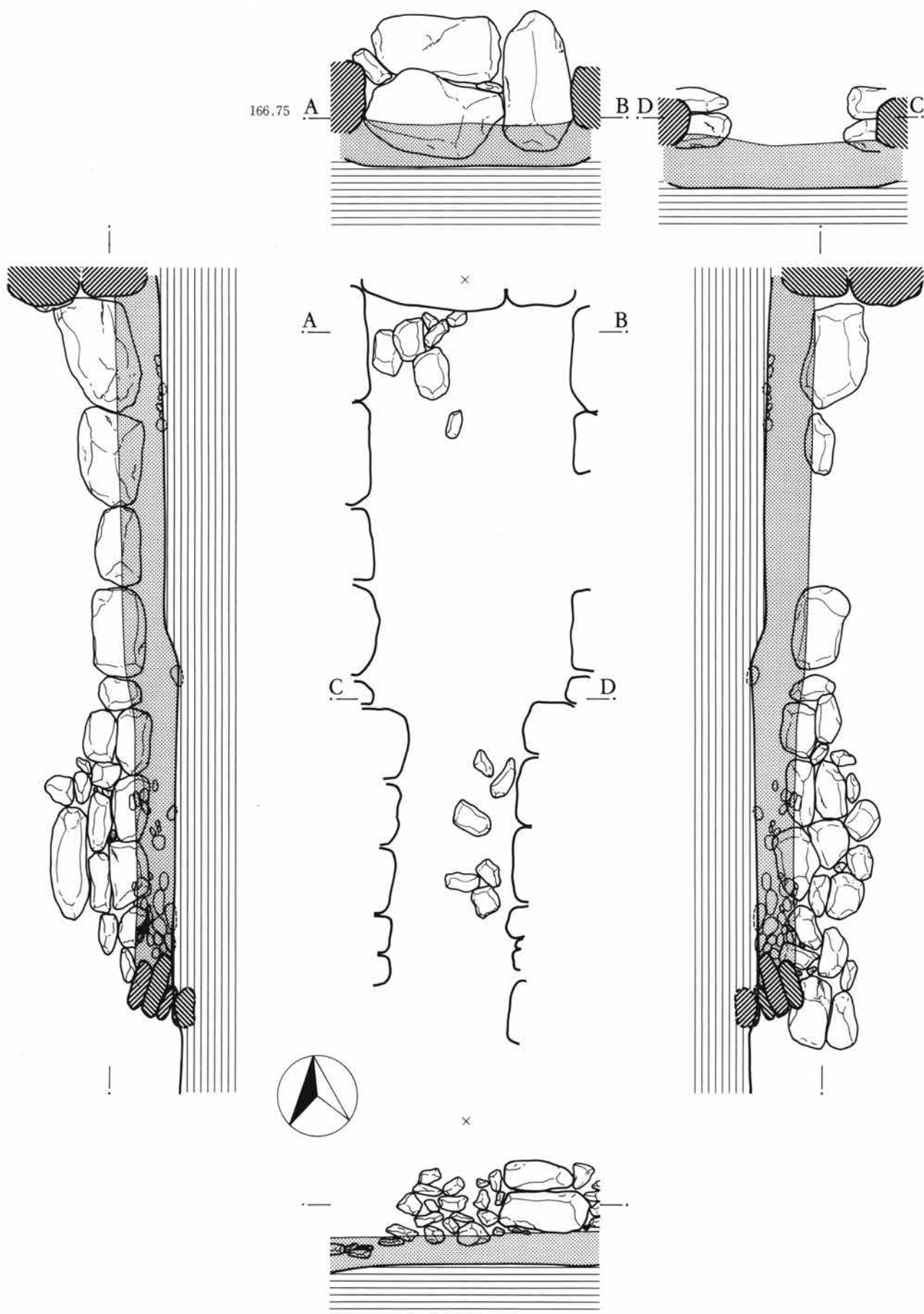
なお、石室外では、石室入口前に須恵器破片が出土しているが、墳丘からの転落ともみられるものもあり、原位置からの出土と確認できるものはほとんどない。しかし、他の古墳同様、石室入口前に須恵器片が置かれた可能性も強い。直刀は小刀の部類に属し目釘穴が茎の刃部寄りに穿孔される。刀子は遺存が悪く刃部の一部分のため凶化していない。鏃は3本でそのうちの1本は有茎腹扶三角鏃である。金環は前述の如く5個出土している。平瓶は3個出土している。1411の平瓶は前庭部より出土、他の2個体は天井石の崩落した埋土中より出土しており墳頂部供献土器の転落したものであろう。天井部に沈線又はカキ目がめぐりふくらはみは低い。口縁部のつくりは近似する。1413は長頸壺で胴上半部に4条の沈線を加える。提瓶2個体は胴上部にカキ目を施し肩部に1対の吊り環を貼布する。大形須恵器甕はいずれも墳頂部からの転落と考えられる。



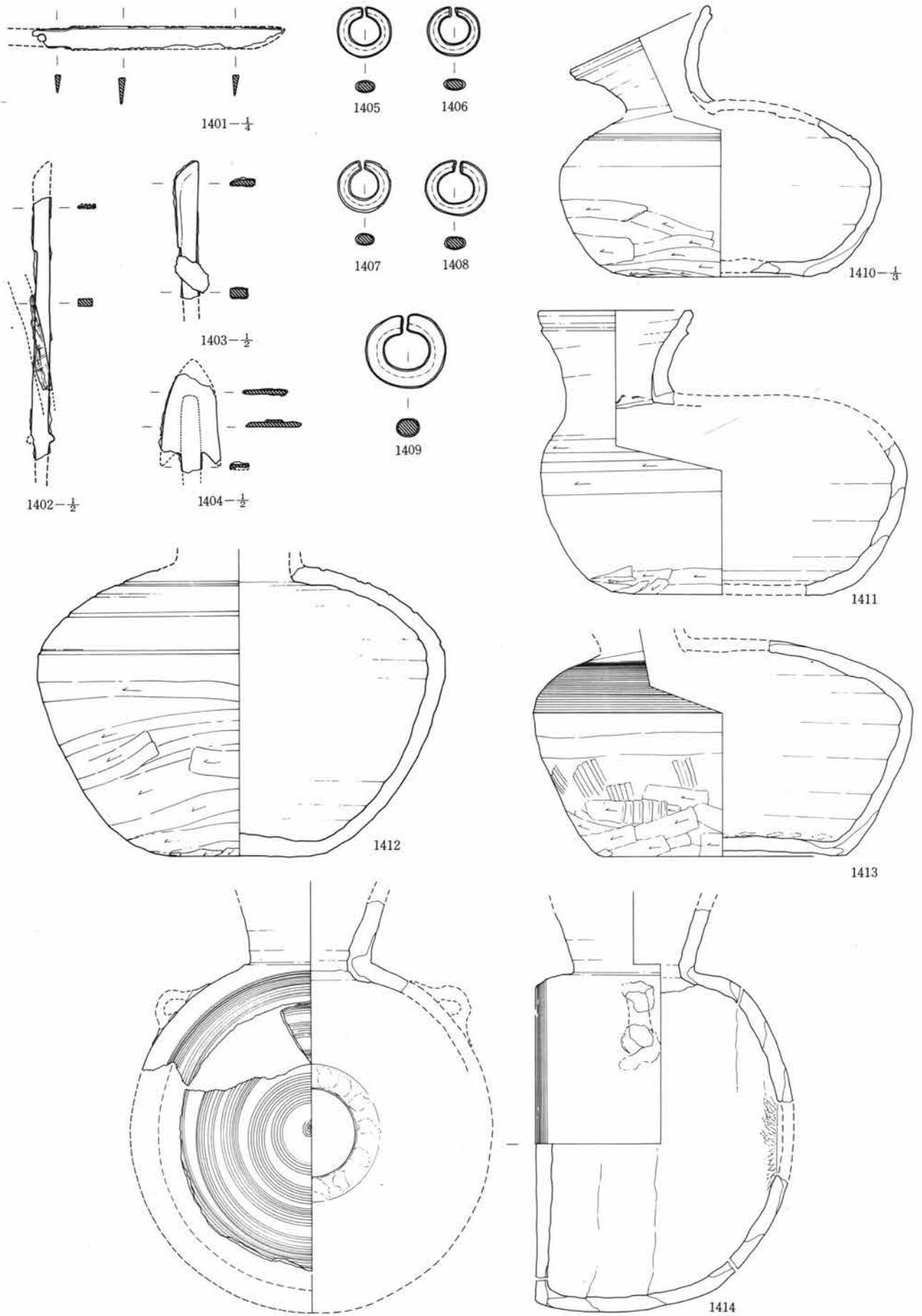
第39図 14号墳 墳丘図



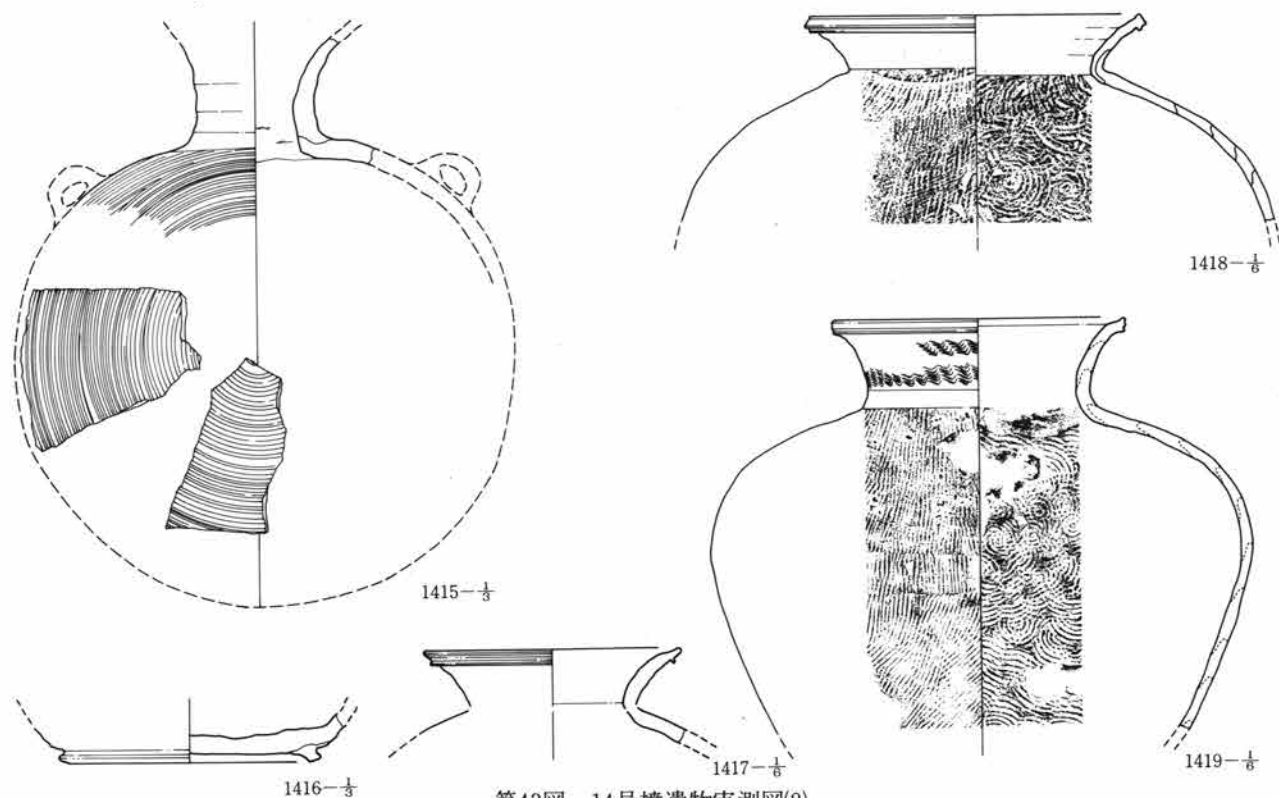
第40図 14号墳遺物出土状態図



第41图 14号墳石室実測図



第42图 14号墳遺物実測図(1)



第43図 14号墳遺物実測図(2)

第 15 号 墳

位 置 古墳群全体では南側のグループに属し更にその中央部に占地する円墳である。

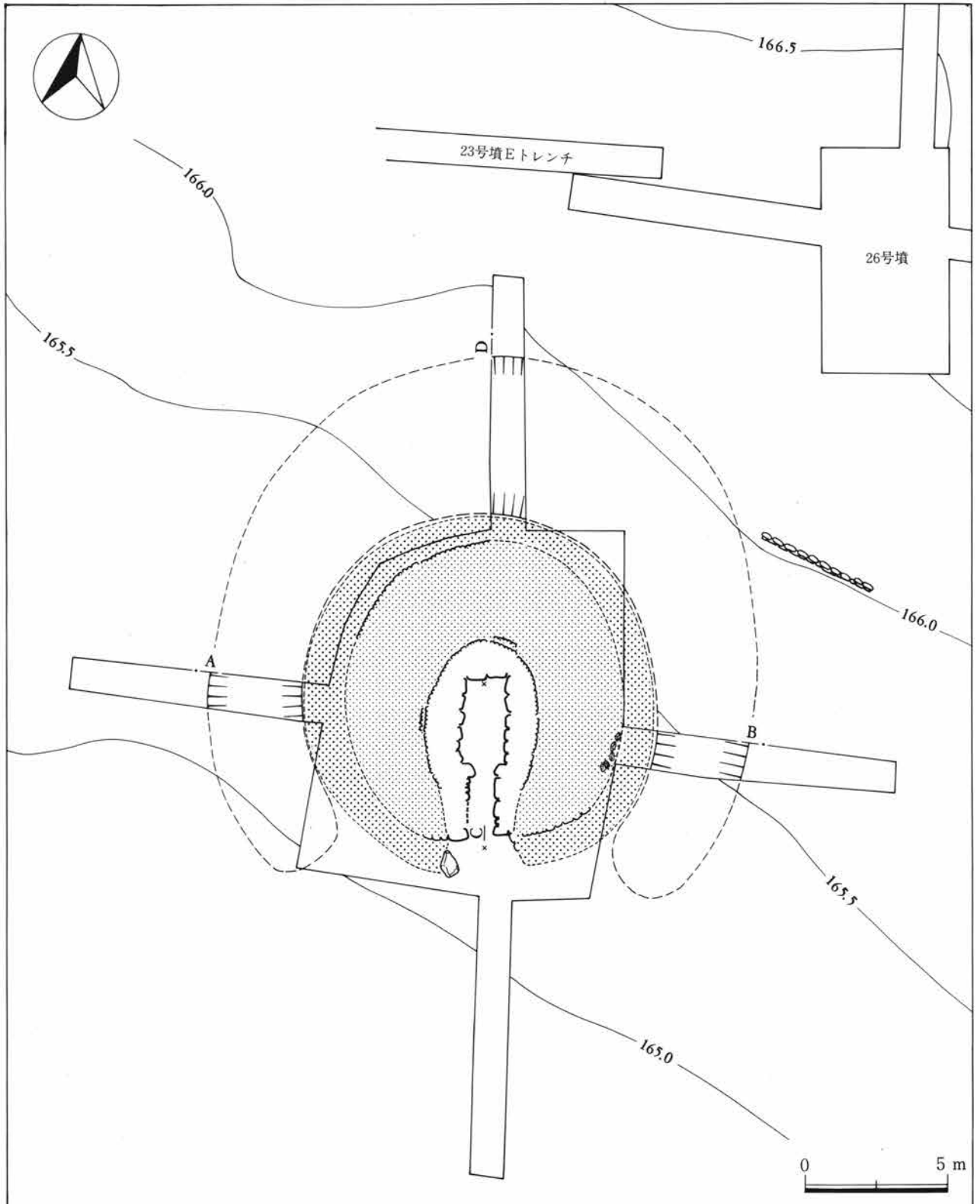
墳丘と外部施設 墳丘全体の $\frac{3}{4}$ を発掘して主体部の調査を実施した。周堀は東西南北四方にトレンチを設定して確認した。墳丘は先ず13mの基段面を作りその上に径10mの墳丘を盛土する。盛土の残存高は最高1.3mを測り墳裾は川原石で積む。所謂、葺石といわれるものの存在は確認していない。周堀の幅は南トレンチでは確認できず北・西トレンチでは立ち上がりは確認していない。東トレンチでは更に東側の古墳（13号墳）の周堀との切り合いを思わせる形状を観察している。強いて周堀直径を測るならば26m位であろう。前庭石組は右側に2石2段の残存が認められた。

主体部の構造 川原石を使用した両袖型の横穴式石室である。石室全長5.46mを測る。石室構築は先ず主軸方向に9m、左右に4.7m、深さ0.3~0.5mの「掘り方」を作り、底面に砂利を敷きつめている。その上に石室根石を配置する。奥壁は大石2石を平の面を内側に立てて並べ玄室側石も平の面を壁に立てて並べる。玄室袖石も左右とも立て石に使い「玄門」的である。羨道部は川原石の横面を壁面に使用しており羨道入口左右は重ね積みである。この上に玄室は大ぶりの、羨道は小ぶりの川原石を小口積みに積んでいる。天井石は羨道部に玄室寄りに2石残存していた。玄室は羨道部全体に閉塞の石が配置され封鎖してあった。玄室と羨道入口両側には大ぶりの川原石を小口積みに配しその中に砂利を詰めている。なお、壁石裏側は砂利を幅0.5m程度据え盛土で積み上げる順序のくりかえしで天井部まで構築すると考えられる。結果的には裏込め被覆の形状は卵形を呈し左右4m主軸方向6.5mを測る。

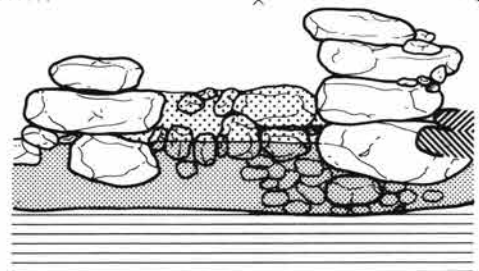
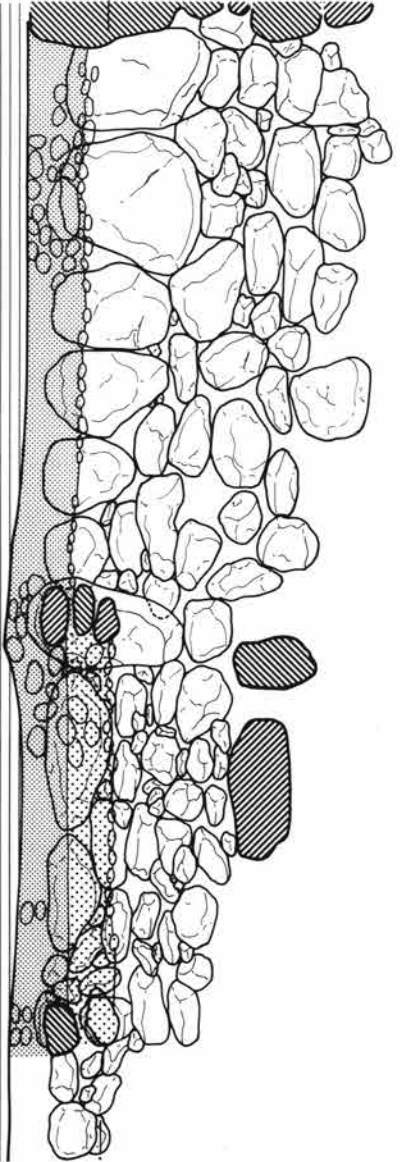
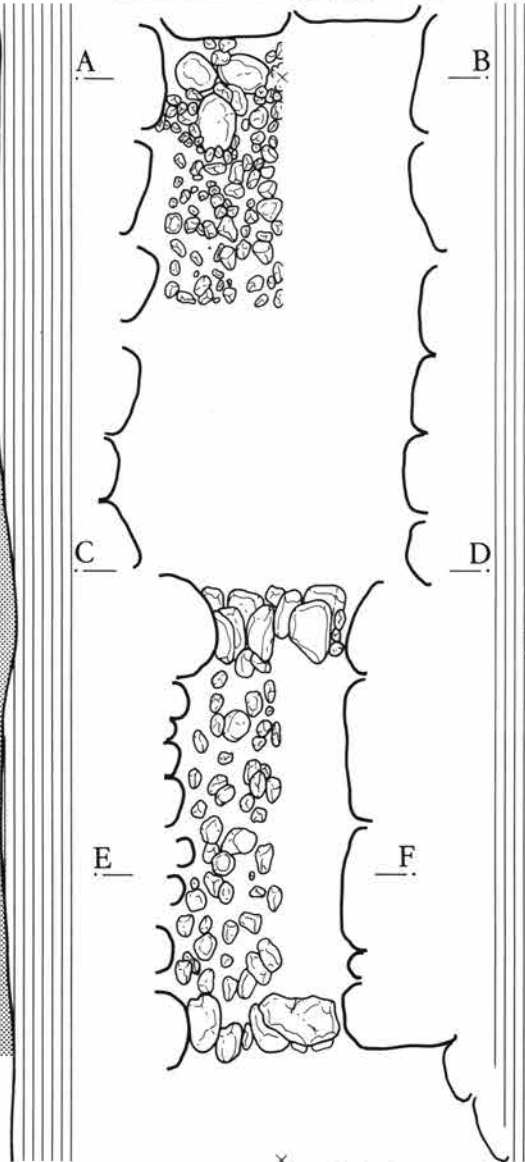
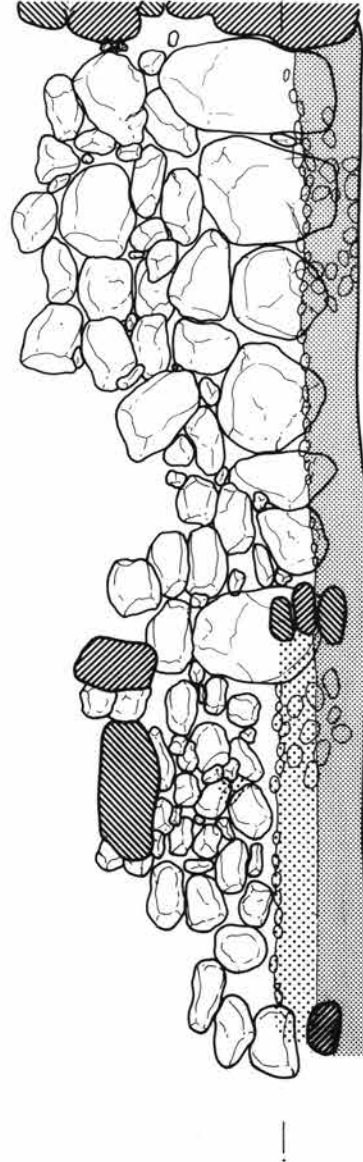
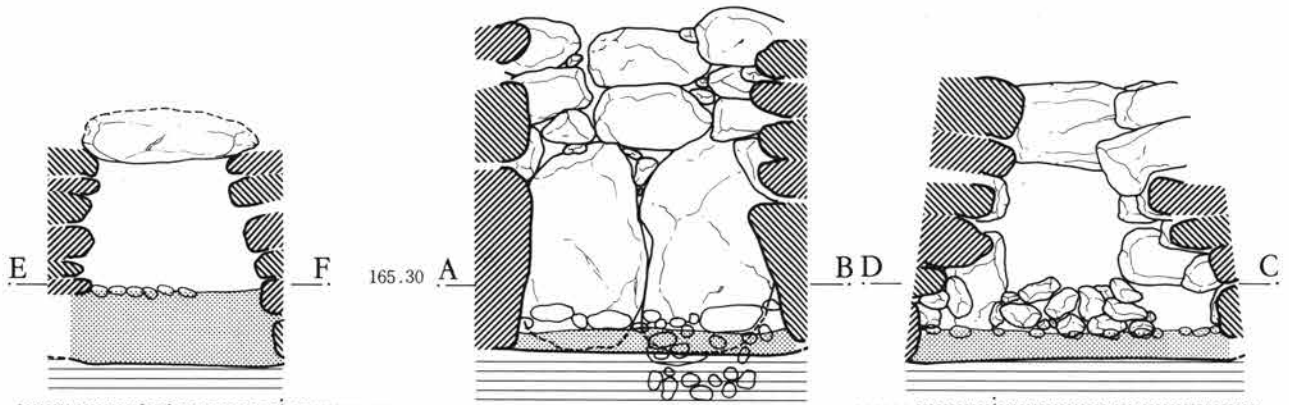
出土遺物 石室内はすでに攪乱されていたにもかかわらず大量の副葬品が遺存していた。服装品類は奥壁寄りに武器は羨道部左寄りに検出されており攪乱、追葬は当然としても埋葬時の頭位は奥壁側であることは想像できる。管玉2個、勾玉9個、小玉23個、切子玉5個、琥珀製棗玉3個は2ヶ所に分かれて出土している。また金環も9個出土してあり2個一組を考えるならば被葬者は5人以上と考えることもできよう。大刀4振の内、1振は圭頭大刀で壁に立てかけられていたような出土状態を示す。鉄鏃は11本検出された。いずれも長脚鏃で棘被がつく。土師器の杯は須恵器杯蓋を模倣したものである。須恵器杯蓋も出土している。これらの杯類は前庭からの出土である。他に平瓶が1

点、甕類4点が墳頂部より出土している。特に大甕の底部は焼成後穿孔されている。

小 結 本古墳は主体部に自然石乱石積両袖型の横穴式石室を持つ。遺存状態が他の古墳より良好であったために副葬品も多かった。墳丘は約直径10mの円墳で前庭を持つ。埴輪は存在しないが墳頂部には須恵器の供献、前庭部には土師器、須恵器の杯類の供献がみられた。

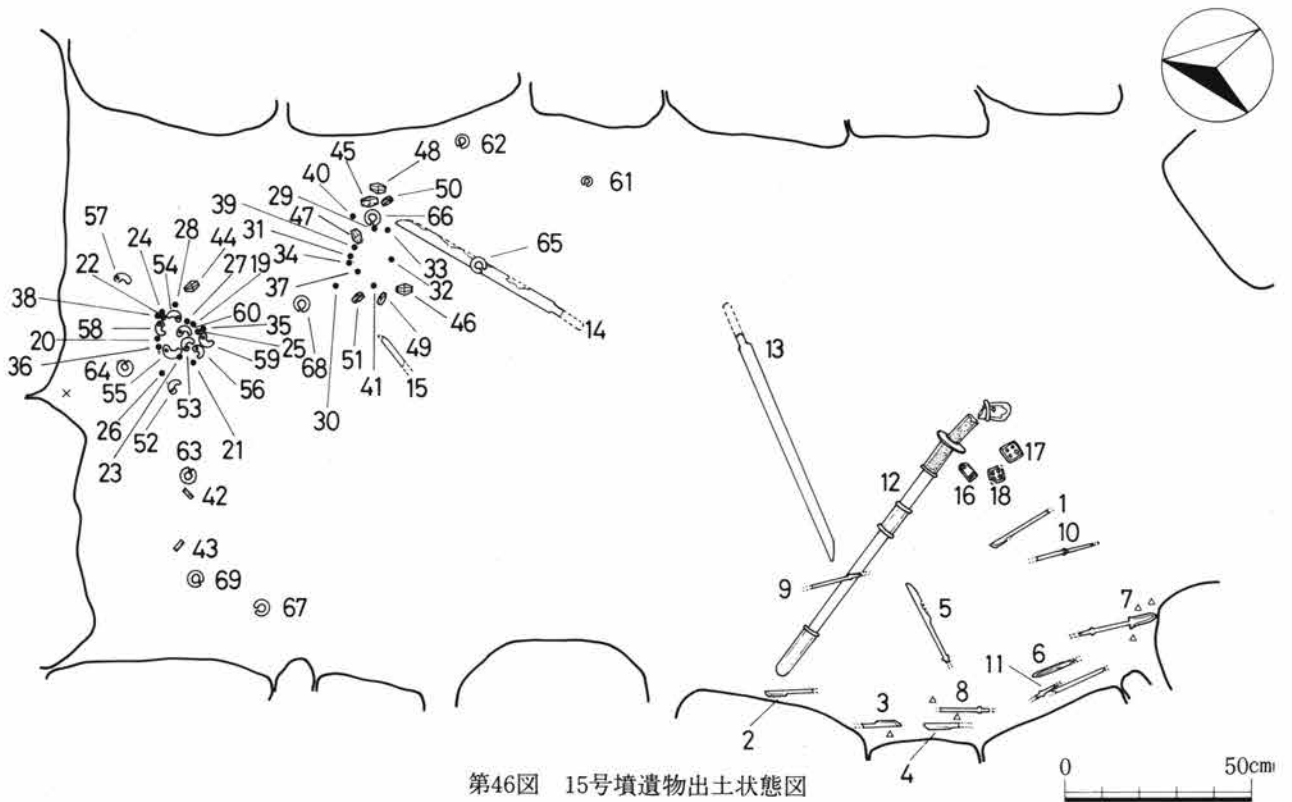


第44図 15号墳 墳丘図

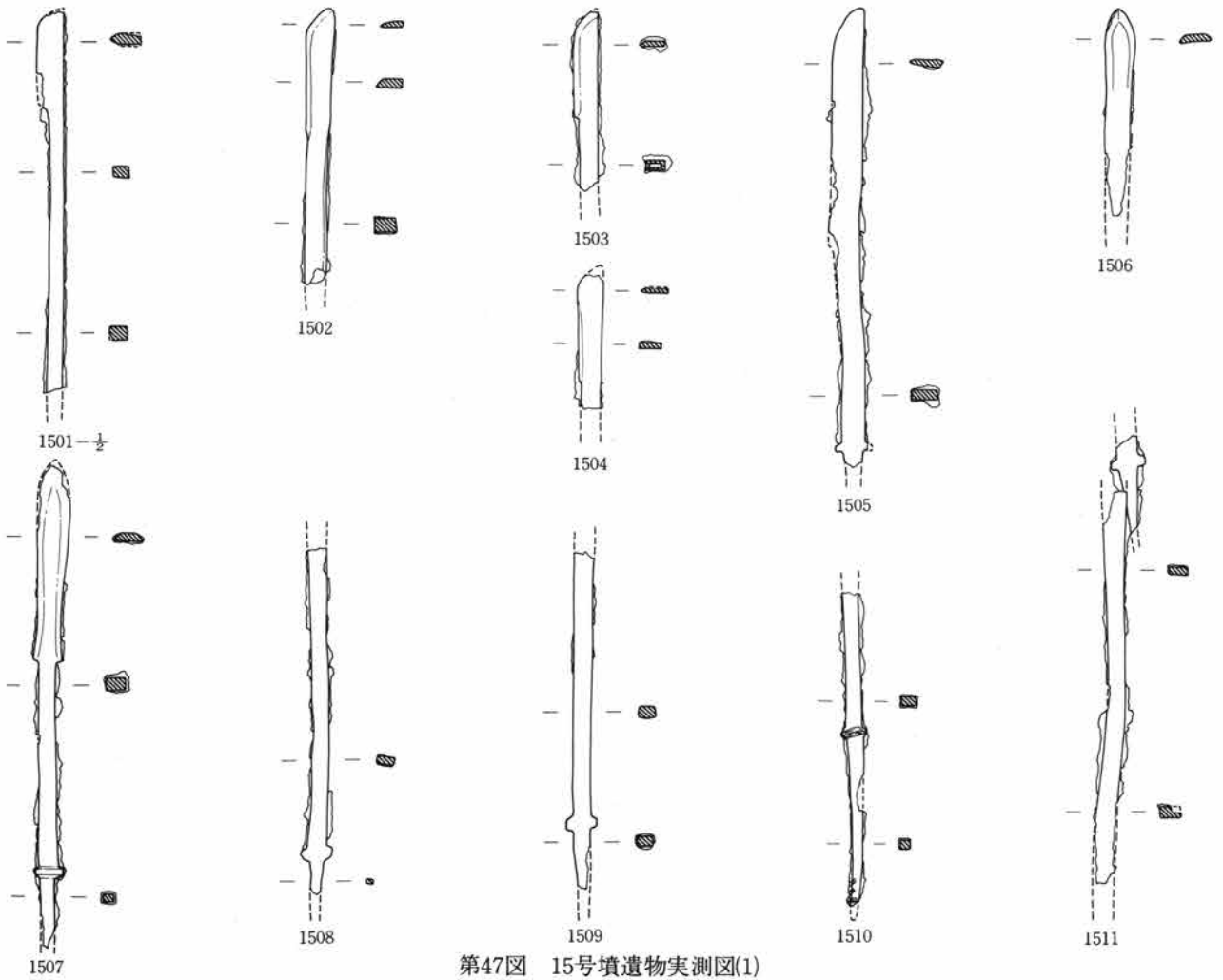


第45图 15号填石室实测图

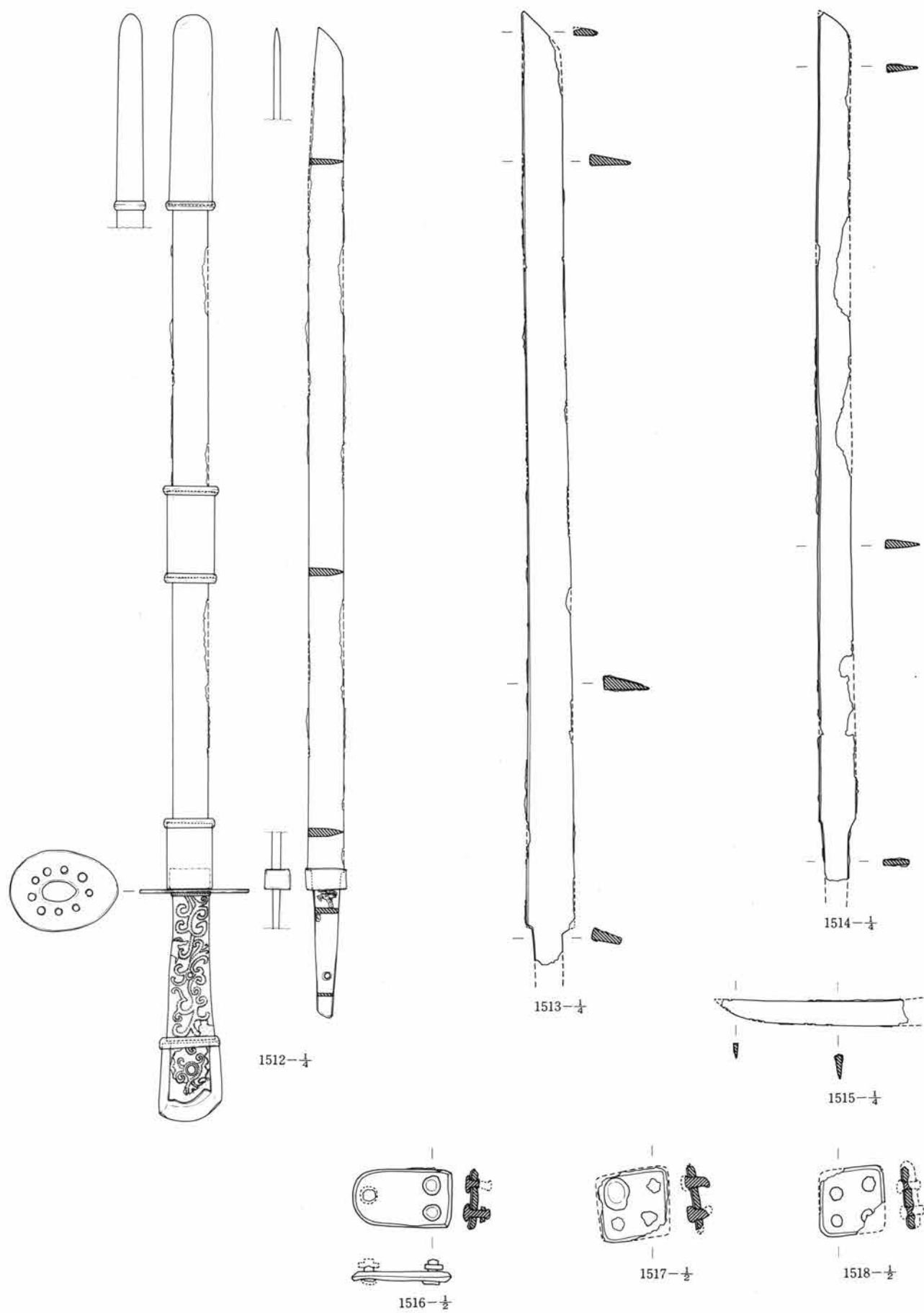




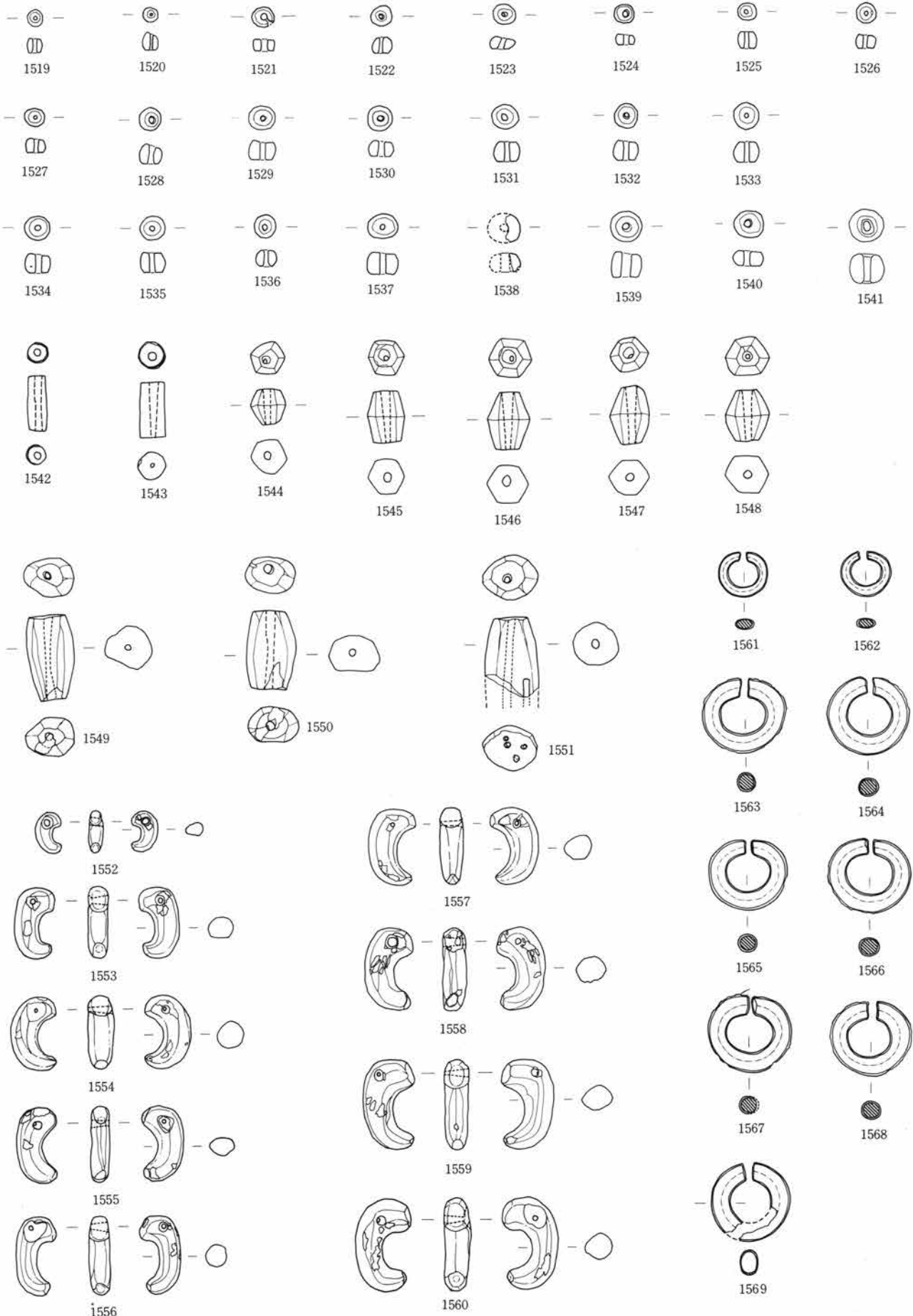
第46图 15号墳遺物出土状態図



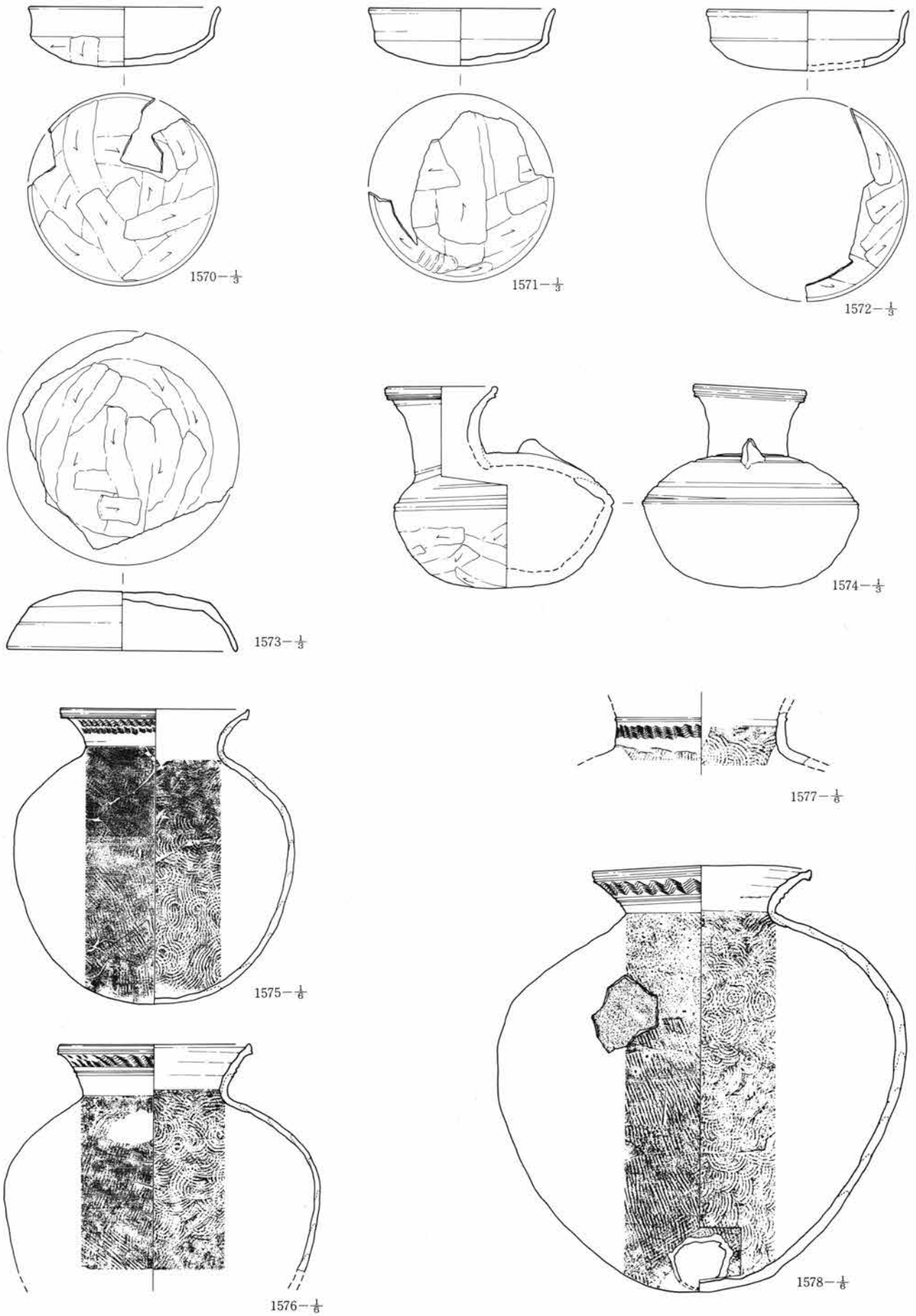
第47图 15号墳遺物実測図(1)



第48图 15号墳遺物実測図(2)



第49图 15号填遗物实测图(3)



第50图 15号墳遺物実測図(4)

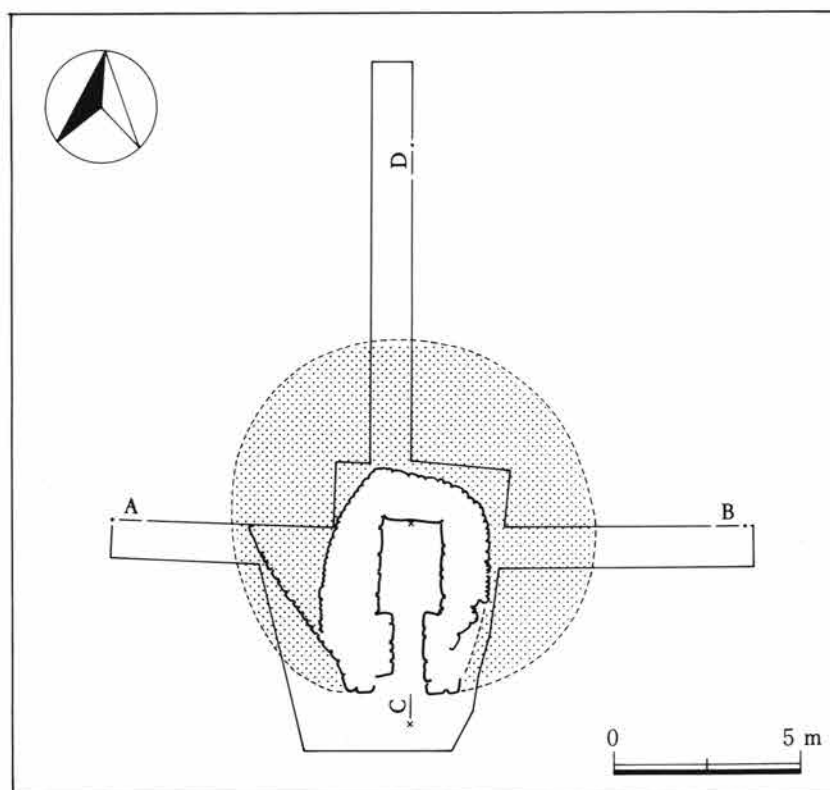
第 18 号 墳

位 置 烏川左岸に近接し、奥原古墳群中最南端に位置する。64号墳の西南25mに位置する。

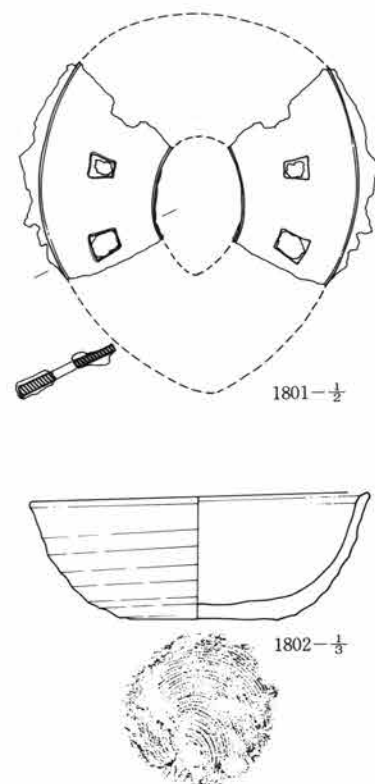
墳丘と外部施設 調査時点においては、高さ1mほどの墳丘をわずかに残していた円墳であった。トレンチ調査の結果、墳丘は、構築時の地表面であった浮石を含む黒色土層を、墳丘築造のため造成し、整地して構築していることが明らかとなった。この整地は、当時の西南斜面する地表面を墳丘の東西南北を同レベルにするため、墳丘東の黒色土層を基準にして、北は石室奥壁より2.8m北に寄った付近より黒色土層をローム層下まで掘り下げ、掘り下げた土は南及び西に盛土して盛成・整地を行っている。かかる整地された上に、墳丘が構築されているのであるが、その規模は明らかにしがたい。西トレンチに見られる石を墳裾の根石と考えるなら、東トレンチに根石が見られないものの、8.6m内外の墳丘を推定し得る。周堀・前庭部はない。葺石は存在する。

主体部の構造 主体部には南に開口する乱石積みの両袖型横穴式石室である。石室の全長は約4.2mであり、石室各部分の計測値は別表のとおりである。石室は、墳丘構築面造成整地に合せて、南北8.5m、東西5.3mの「掘り方」をつくり、その中に構築している。「掘り方」の北・東は法面を2段にしており、下位法面上端は墳丘西の黒色土層の高さと同レベルである。石室は、「掘り方」法面より80cm内側に玉石を敷き並べ、その上に側壁の根石を置いている。裏ごめは西の法面下端、東の下位法面より50cm内側に根石を置いて、東は根石を外縁として石積を行い、上位・下位法面との空間は盛土している。西は法面上端より外縁の石積がされている。奥壁は、下位法面下に裏ごめの根石を置き、玉石の上に比較的大形の石を奥壁根石として置いている。下位法面と上位法面の空間は盛土している。玄室は矩形であり、床面は、玉石の上に小礫が敷いてある。袖石は左壁が抜かれていたが、川原石2個が框石としてあった。羨道は、填塞石が大部分抜かれていた。

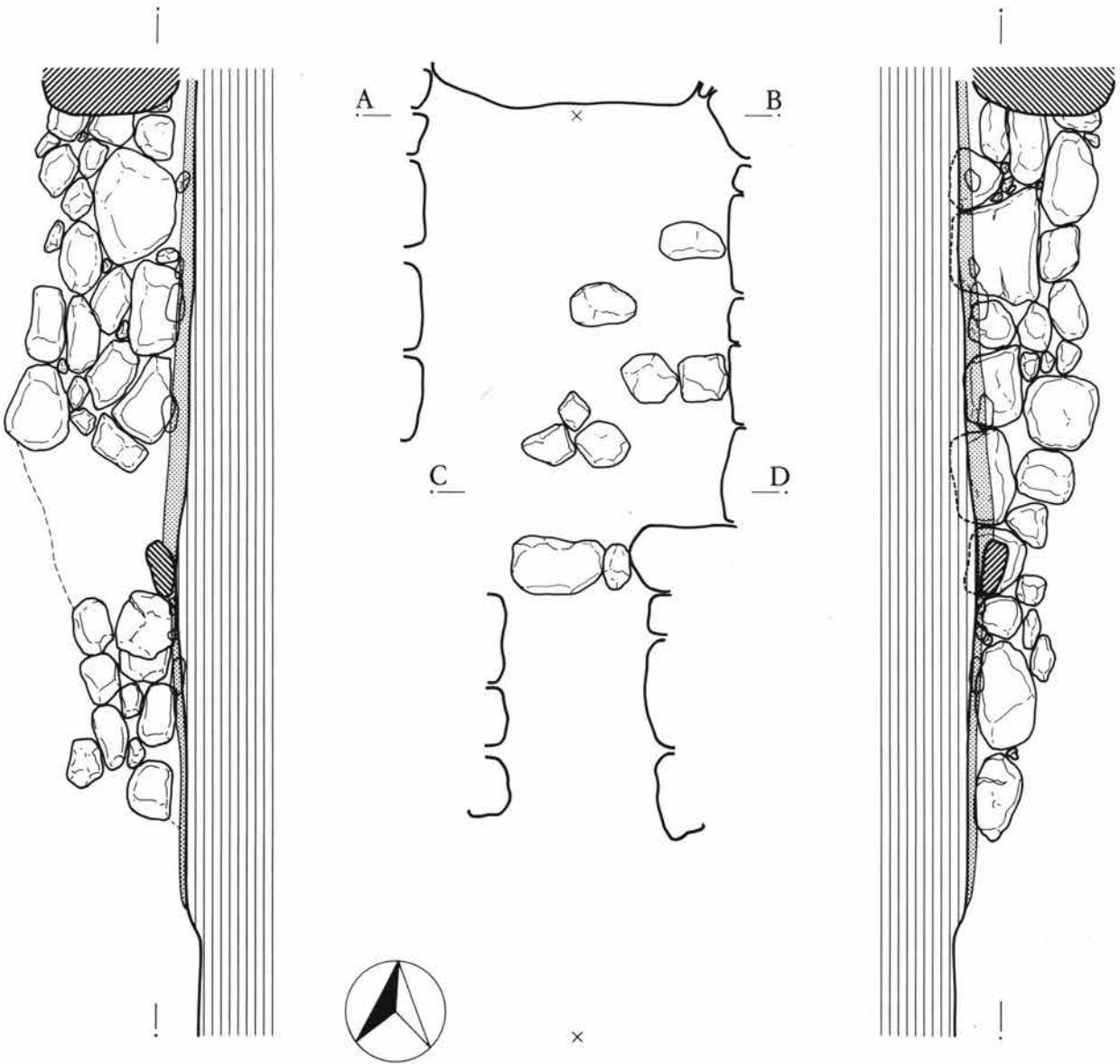
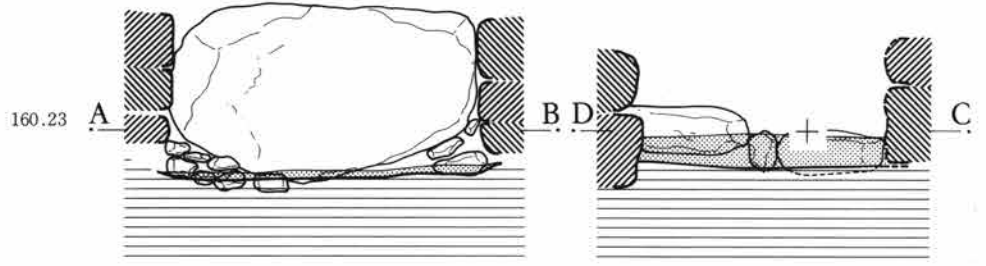
出土遺物 石室は既に盗掘・攪乱されており、副葬品は8及至10孔の鐸とトレンチより出土した平安時代の杯が出土している。



第51図 18号墳 墳丘図



第52図 18号墳遺物実測図



第53图 18号填石室实测图

0 1 m

第 21 号 墳

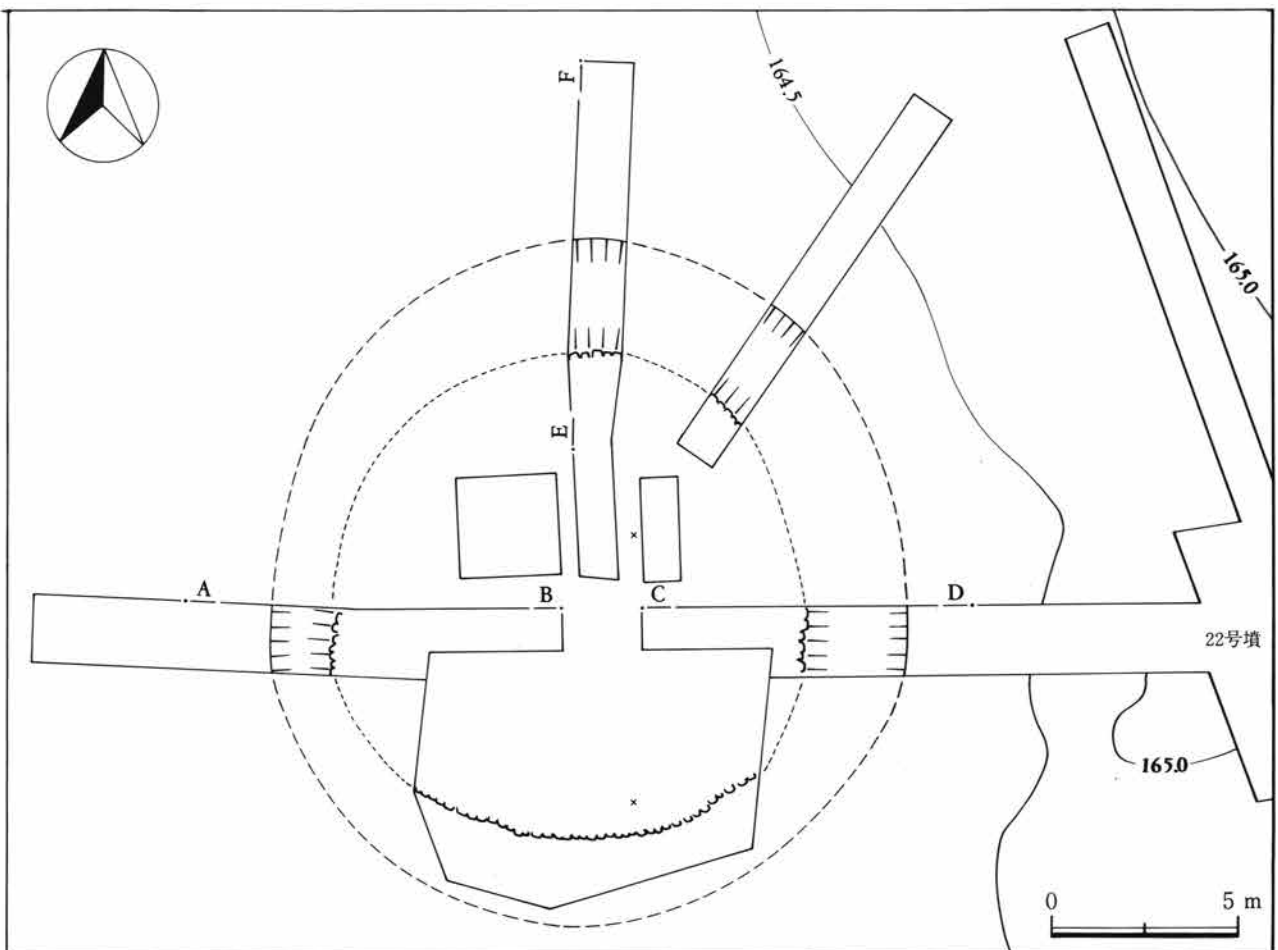
位 置 本古墳は、奥原古墳群の南西端、22号墳の西約18mほどの所に位置する。

墳丘と外部施設 直径12.8mほどの円墳である。調査時点では南西にわずかに50cmほどの高さに墳丘をとどめるにすぎず、その形状はほとんど破壊されている。トレンチ調査では、墳丘は構築時の地表である黒色土層の上に周堀部より掘り下げたローム塊等を含む盛土をもって整形され、調査時点では3層ほど区分される。葺石は墳丘裾部から周堀部にかけて直径20cm前後の川原石を用いほぼ墳丘を全周している。西側裾付近では、後世抜き取られたものと思われる、あまり明確ではない。周堀は墳丘裾部、葺石の配されている面からそのまま周堀へとつながり、その内径は墳丘とほぼ同じ12.8m、外径は16.9mで、北側部分では幅5.0m、西側部分では3.5m、南側では2.30mで、墳丘を全周している。また本古墳南側より埴輪の設置が確認され、埴輪を伴う古墳は本古墳群唯一のものである。

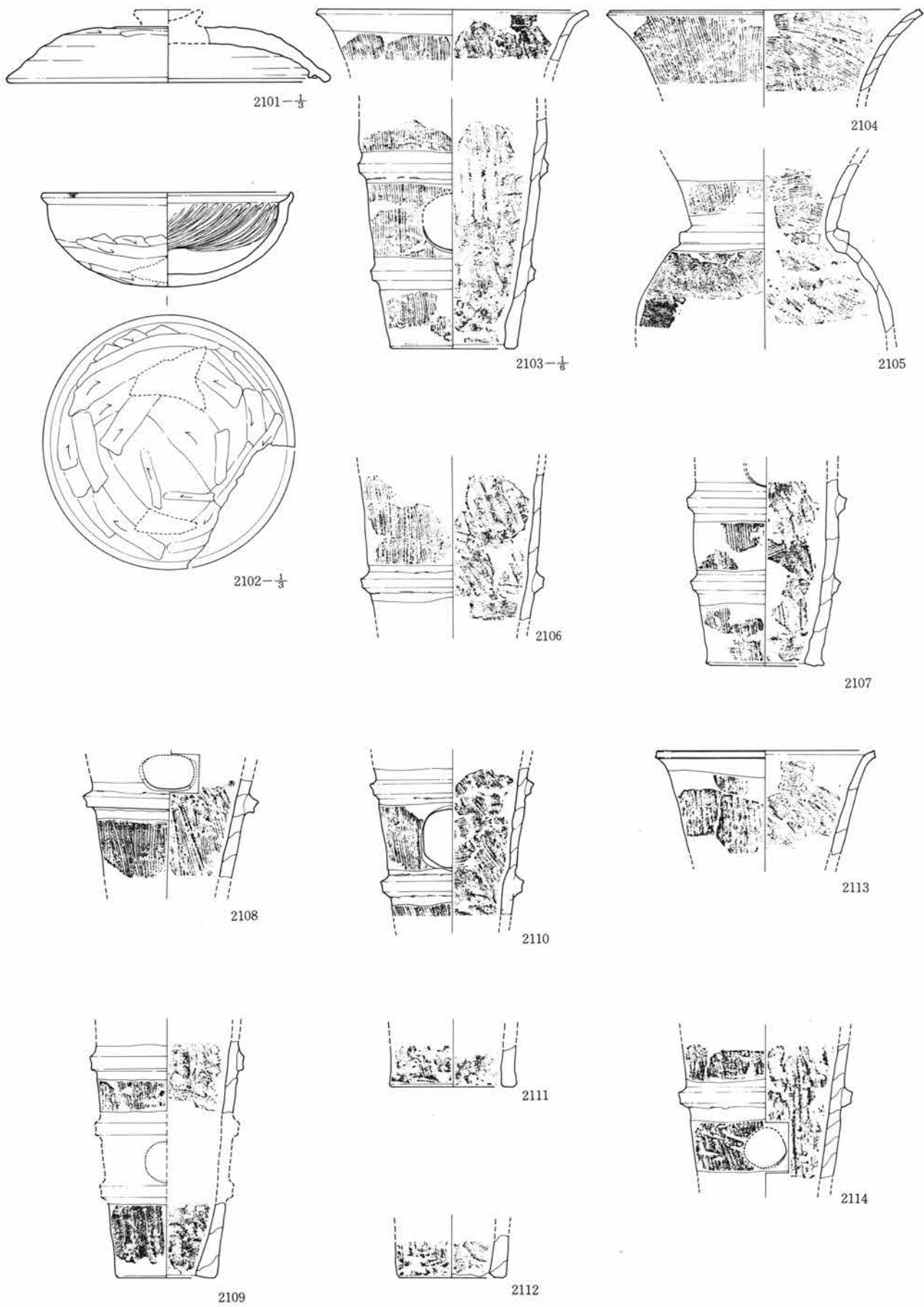
主体部の構造 本古墳の主体部は明確でなく、横穴式石室を構成する「掘り方」等は確認されない。盛土の状況から本古墳の主体部は竪穴系の可能性も考えられる。前述の墳丘全体の削平が著しく断定し難い面もあるが、一応竪穴式古墳と考えるとよいであろう。また本古墳群の中では、竪穴系主体部を有する古墳は他に存在しない。

出土遺物 本古墳の南東裾部に円筒埴輪の配列がみられ葺石の外側約60cmほどの所に設置されている。埴輪は、南東部に3個体、南部に1個体、いずれも破片であるが、ほぼ原位置に設置されたものと考えられる。他に土師器杯（鬼高）及び北側トレンチ内より鉄製品1点、トレンチ中央部より須恵器蓋が1点出土している。

小 結 本古墳の主体部は竪穴系のものであると思われる。副葬品の出土及び石室の構造等明確でない面もあるが、埴輪を伴う事などからその構築の年代は6世紀中頃と考えられる。本古墳群の中では、本古墳の構築は最も古いものである。



第54図 21号墳 墳丘図



第55图 21号墳遺物实测图

第 22 号 墳

位 置 本古墳群の南西隅のグループに属する。21号墳、22号墳、23号墳、26号墳と横一列に近接して並ぶ。

墳丘と外部施設 墳丘全体が削平され僅かに1mほどの高さに墳丘が認められる程度であった。墳形も歪んで形をとどめていない。そこで残存丘最高点を中心に21号墳に向けてトレンチを設定した。更にコンターに沿う形に石室主軸方向にトレンチを設定した。発掘の結果、東トレンチでは幅3m、深さ30cmの浅い溝が検出され、23号墳を明らかにさせていることがわかる。西トレンチでは21号墳を意識しているのか、明確な周堀を検出することができなかった。南トレンチでは石室前9mのトレンチを発掘したものの周堀は検出できなかった。北トレンチでは上幅4.7m、深さ1.2mのやや「コ」の字状の断面を持つ周堀が検出された。これらのことから本古墳の西側の周堀は、21古墳の古い時期の古墳を意識的に避けており、北は大きく周堀を計定し、周時期の東側は23号墳側を意識してか浅く掘りくぼめている。その結果、本古墳は石室前方を開放した変形した馬蹄型の周堀をめぐらせている。また葺石及び埴輪の配列はない。前庭も設置されていない。

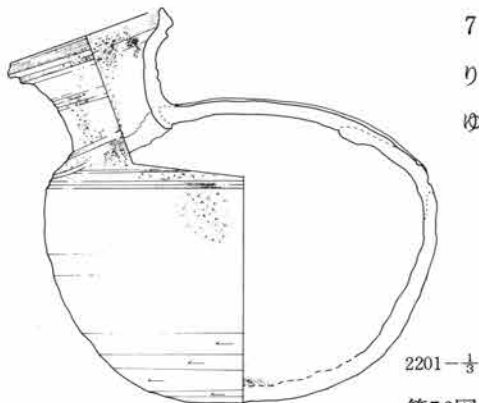
主体部の構造 川原石を使用した両袖型の横穴式石室である。石室全長4.35mと小型である。平の面の内側に2石立て並べた奥壁が残存し側壁も根石1石を残す程度で非常に遺存状態は悪い。石室構築は旧表土面を深さ60cmほど掘り下げて長方形の「掘り方」を設定する長軸方向で5.5m、短軸方向で2.5mを測る。「掘り方」底部には小円礫を敷き、この上に両壁石を積み上げている。壁石は川原石の小口積を主体とし、各壁の裏側には30~40cmほどの幅で小礫を挿入し、その外側には更に礫を使用して全体を隅丸長方形に整形している。また、羨道入口部分は一たん掘り下げた「掘り方」の底部にローム塊を含む黒色土で内面からつき固めて補強している痕跡が観察できる。主体部の構造は石室左壁が「胴張り」を呈する平面形である。羨道部の最大長さ2.05m、最大幅0.8m、玄室長最大2.36m、最大幅1.27mを測る。

出土遺物 石室内玄室の右壁中央下部から須恵器の平瓶がほぼ完形で出土した。また墳頂部に供献されていたと考えられる須恵器の甕の口縁部が出土している。平瓶は粘土紐を積み上げ、巻き上げて体部を成形したのち、粘土円板で口を完全にふさいでいる。次に体部天井の肩部近くへ円孔を穿っている。この部分に口頸部を接合している。体部天井部分は球面を呈し、肩部に沈線を2条めぐらせる。体部下半より底部にかけては篋ケズリで調整している。口頸部から天井部にかけての深緑色の釉調や、口頸部に巡らせた一条の凸帯などから、東海地方独特の器形と考えてよい。墳頂部出土の甕の口縁は口径22cmを測る直立気味のもので、全面に自然釉がかかっている。

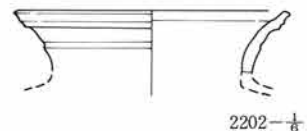
小 結 東海地方独特の器形とのべた平瓶が焼成においても胎土においても確実に猿投窯を代表とする東海地方の窯業地の製品であると決定するには困難な問題が多いようである。そこでV章において胎土の分析によって産地の割り出しを試みた。製品の供給圏などを確認するためにもこの方面での研究が重ねられることを期待したい。本古墳群へのこれら他地方からの製品は長期間にわたって持ち運ばれたと考えるより、各器種1点づつがセットになって短期間（一時期）に搬入されたと考える。共通した胎土、釉調、技法などがそのことを裏づける。供膳用の容器であ

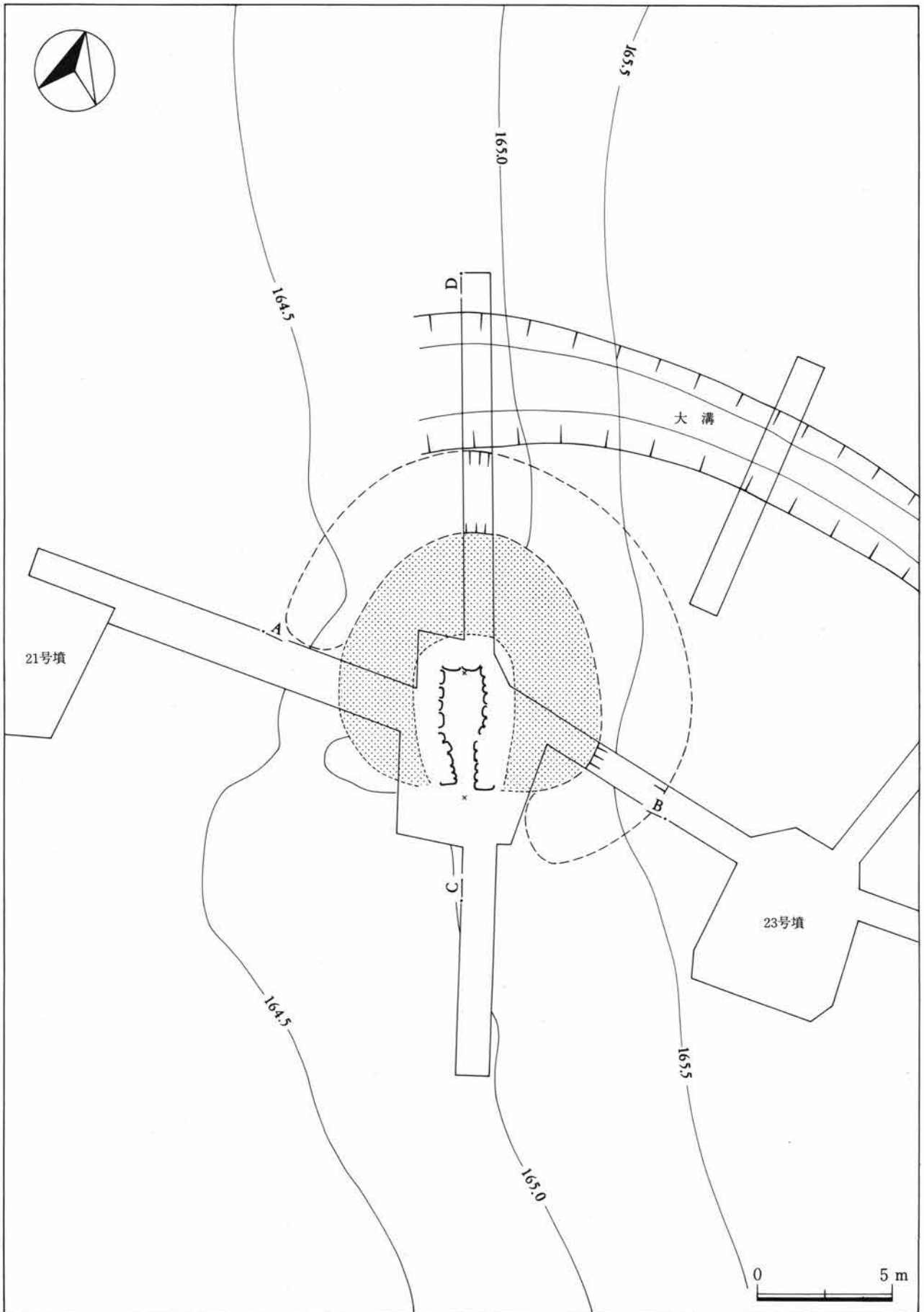
る平瓶は液体を注ぐのに適した形をしている。

7世紀前半に出現するといわれる初期のものは器体が丸味をもっており奈良時代以降になると肩部に明瞭な稜が作られ体部は偏平になってゆく。本例はその形から7世紀代に属することが理解される。

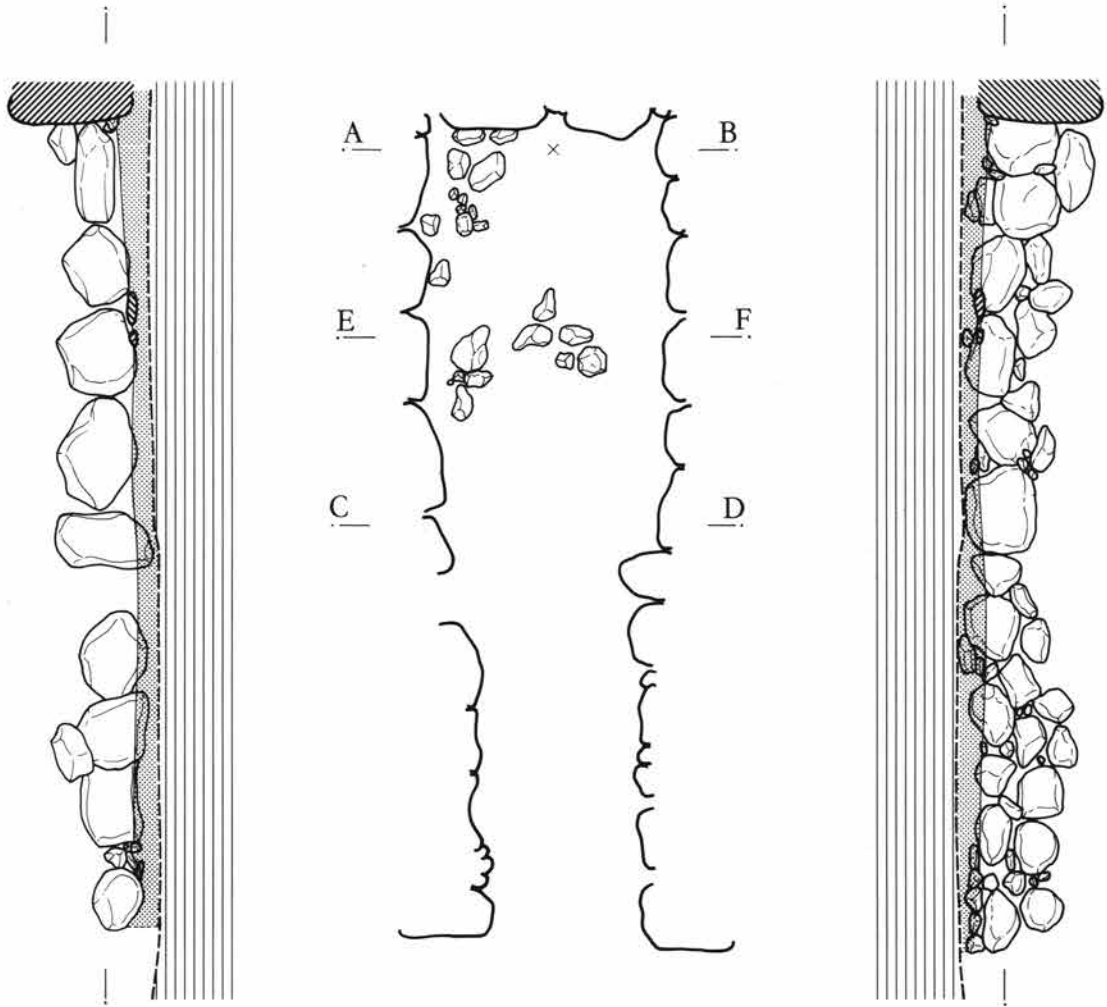
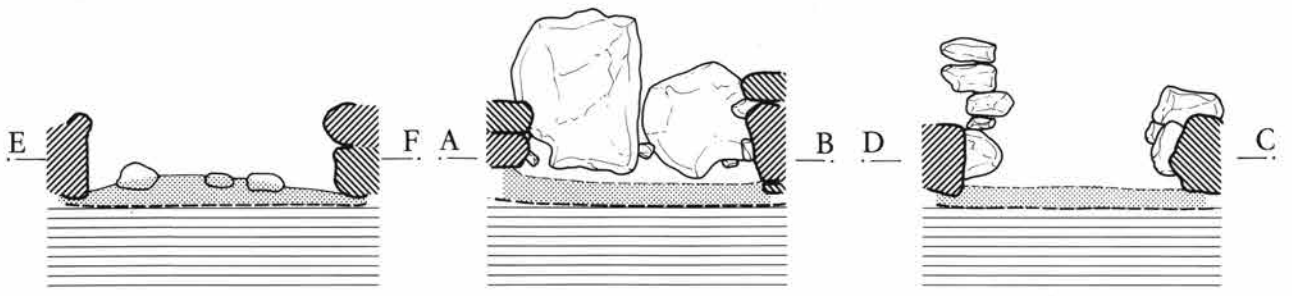


第56図 22号墳遺物実測図



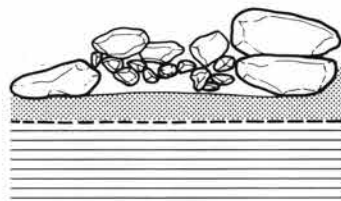


第57図 22号墳 墳丘図



×

165.11



第58图 22号填石室实测图

0 1 m

第 23 号 墳

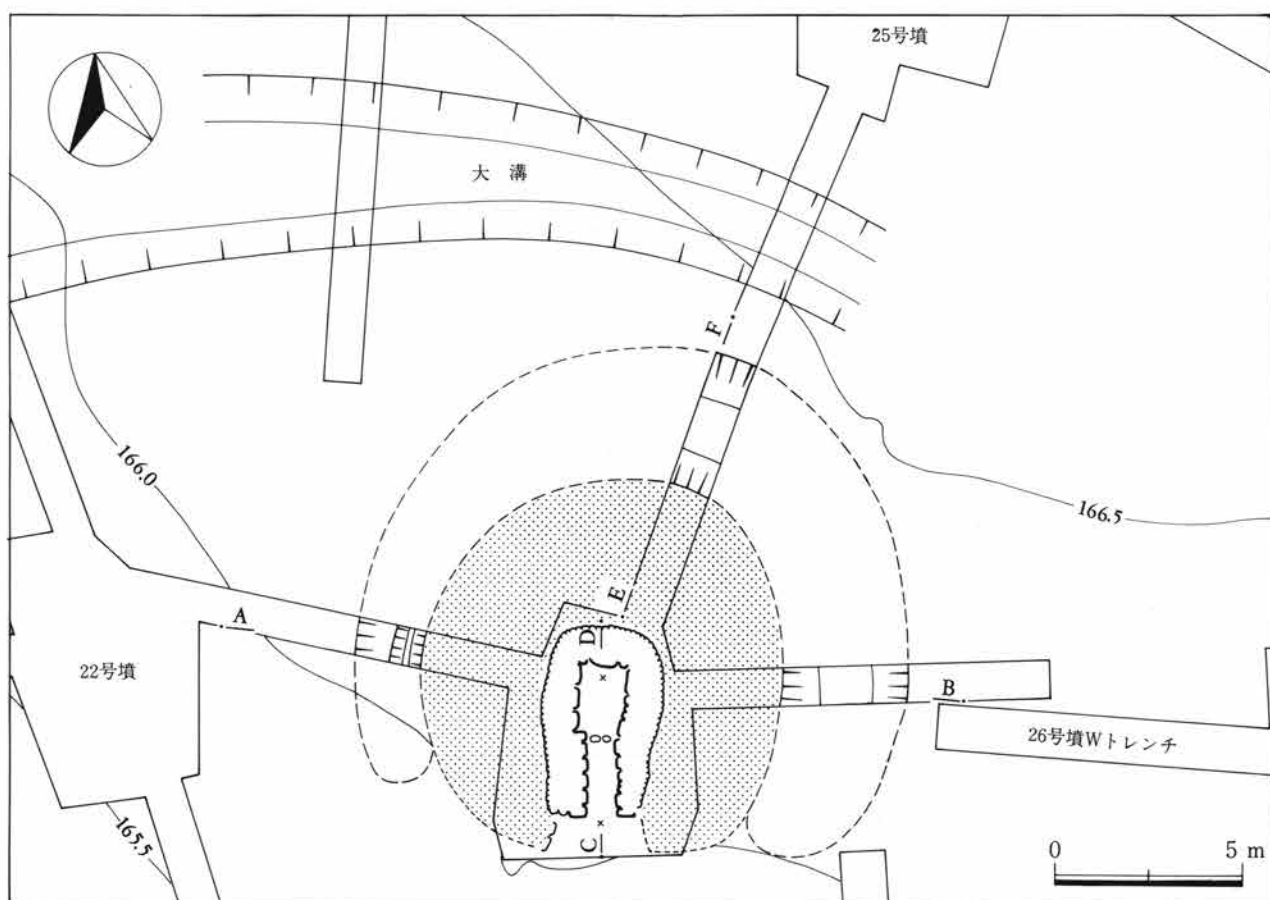
位 置 25号墳の南方約20m、26号墳の西方約18m、22号墳の東12mに位置する。

墳丘と外部施設 調査時点においては、わずかに現地表面に墳丘を残していた。墳丘は、構築時の地表面である浮石を含む黒色土層上に構築されている。周堀は、墳丘の南を除いた部分に幅3.6m、深さ60cm内外で馬蹄形に圍繞している。葺石は、墳丘上部が平夷されていたため確認し得なかった。墳丘は、周堀の状況等からして径9.44m内外の円墳と推定される。墳丘の高さは、後述するところの石室が現地表面下1mに構築されていることを考慮すると、当時の地表面の黒色土層から1.5m内外の高さではなかったかと考えられる。前庭施設・埴輪配列はない。

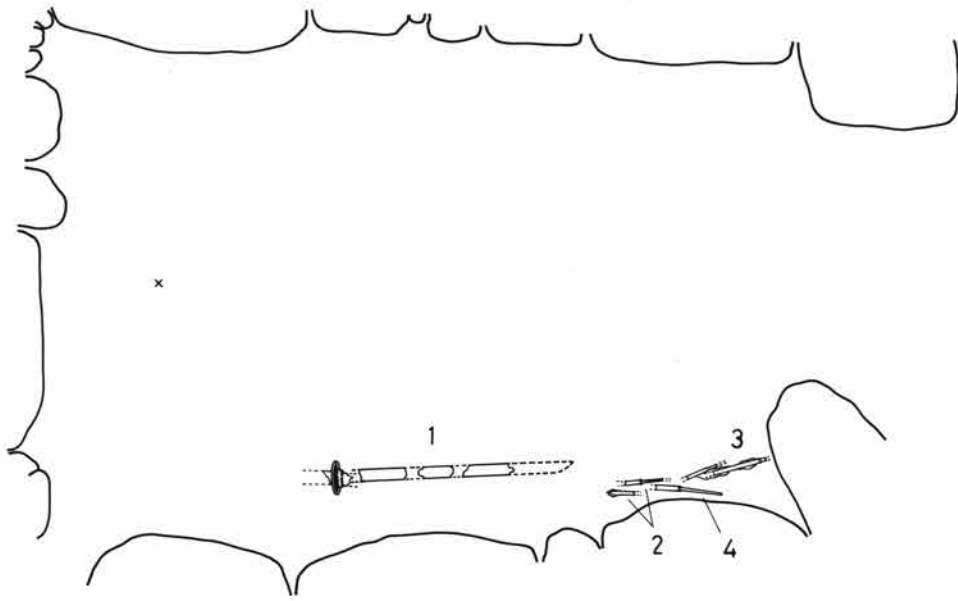
主体部の構造 主体部は川原石を乱石積みにした両袖型の横穴式石室である。全長は4.1mで、石室はほぼ南に開口している。石室各部分の計測値は別表のとおりである。石室は、黒色土層を南北長6m、東西長3.5mの範囲の周囲を幅1.5m、深さ20cm内外掘り下げた「掘り方」に構築している。石室の根石は、「掘り方」法面より1.5m程入った位置に据えられ、根石と法面との中間は裏込めされている。玄室床面は、構築時の黒色土層がそのまま残され、この上に小礫を敷いて床面としていた。羨道部は、玄室床面より10cm程黒色土層を掘り下げ、玉石を敷き、その上に川原石を填塞している。袖石のところには框石として径25cm内外の川原石3個があった。

出土遺物 石室内は、玄室奥壁より1m付近の左壁寄りより、茎を奥壁に向けた状態で直刀1振、その南40cm付近より鉄鏃4点が出土。羨道部入口付近よりは須恵器短頸壺1点、同須恵器片等が出土。

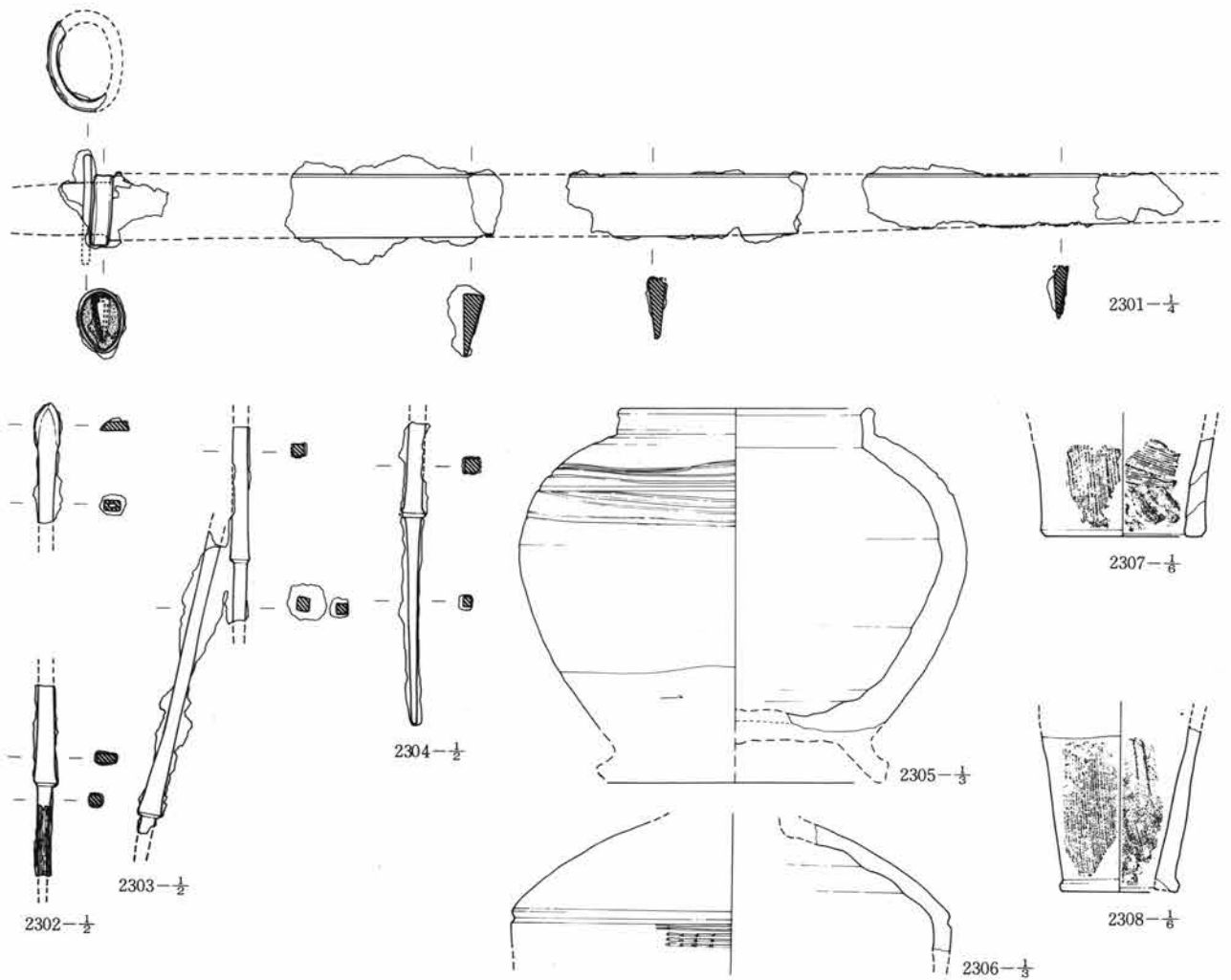
小 結 本墳の特色は、主体部が両袖型の横穴式石室であること、石室は「掘り方」の中に構築されていること、埴輪が存在しないこと等が指摘できる。



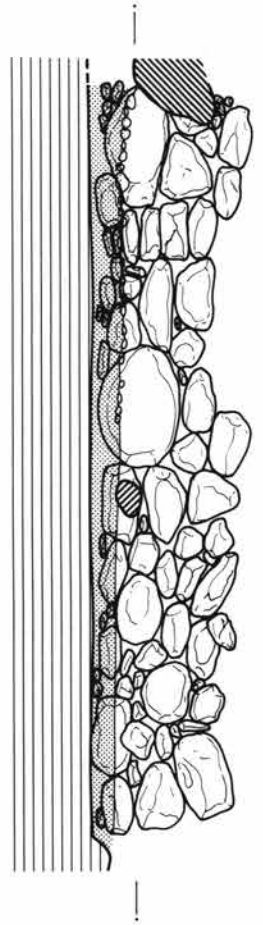
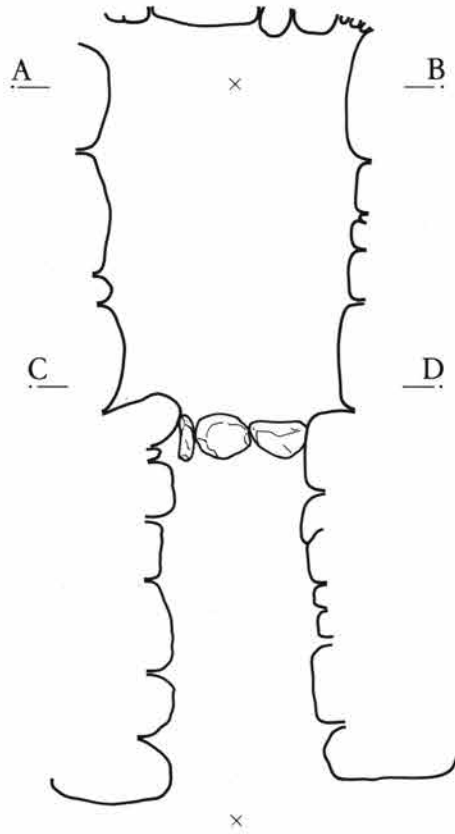
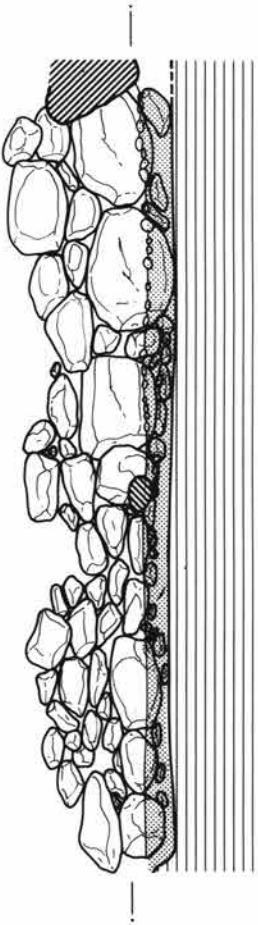
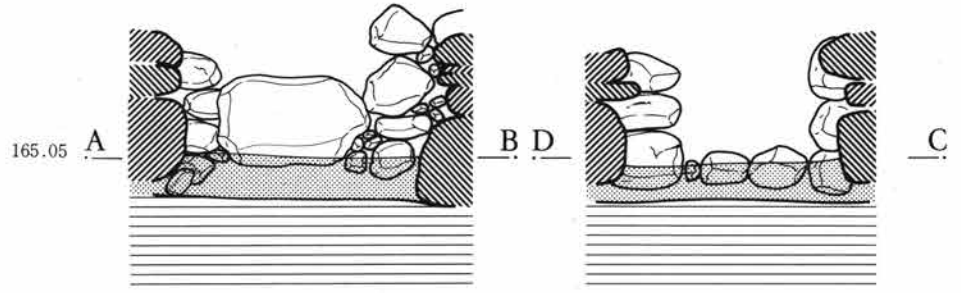
第59図 23号墳 墳丘図



第60图 23号墳遺物出土状態図



第61图 23号墳遺物実測図



第62图 23号墳石室実測図

0 1 m

第 25 号 墳

位 置 周囲には63・30・24・22・23・26・27・29号墳があり、本墳は24・25号墳のほぼ中間に位置する。

墳丘と外部施設 調査前の古墳は、周辺がかなり削平されているものの直径11m、比高差1.8mの円墳状に墳丘が残っていて、墳頂部には安山岩の大石が二石露出していた。墳丘の形状および構造は東・西・北に設定したトレンチによって概要を知り得る。墳丘裾部には葺石用石が散乱しており、その分布状況から墳丘の形状は直径16.6mの円墳で、周囲には幅6mの周堀がめぐらされている。

墳丘の構築段階は西トレンチの地層断面で良く観察できる。すなわち、石室裏込め被覆の石組みは「掘り方」部では掘り方面に沿って川原石を粗雑に積み重ねているが、黒色土上の中段部は小振りな川原石を用いた堅固な石組みなのに対し、上半部はやや大振りな川原石をなだらかな傾斜をもたせて設置しており、少なくとも三段階にわたる順序が顕著である。それに関連して、中段部をおおう盛土は墳丘半ばから石室部に寄せて積み重ねられ、ほぼ水平で緻密な層序をなし、細かな作業が加えられているのに上半部のそれとは対照的である。そうした傾向は各トレンチでも同様である。また、葺石は盛土裾の黒色土面付近に散乱するが、石室入口部周辺の葺石構造に比べて形ばかりになっているようである。周堀は葺石裾から掘りこまれている。各トレンチからは埴輪等本墳に伴う遺物は皆無で、石室前にも前庭遺構等はない。

主体部の構造 主体部は南々西に開口する川原石使用の両袖型横穴式石室で、全長5.77mが計測できる。玄室部の天井石はすでに取り除かれていたが羨道部には三石の天井石が原位置を保っていた。石室内は盗掘を受けているが壁石の残存状態は良い。調査し得た石室上面部を見ると、羨道部奥にかけられた天井石の両端に玄室壁石がかぶり、羨道高より玄室高が高かったようすがうかがえる。石室上面部の裏込め被覆石は玄室部を中心に楕円形状を呈し、南北長6.6m、東西幅5mが計測でき、このレベルでは石室前の石組みまでは達していない。

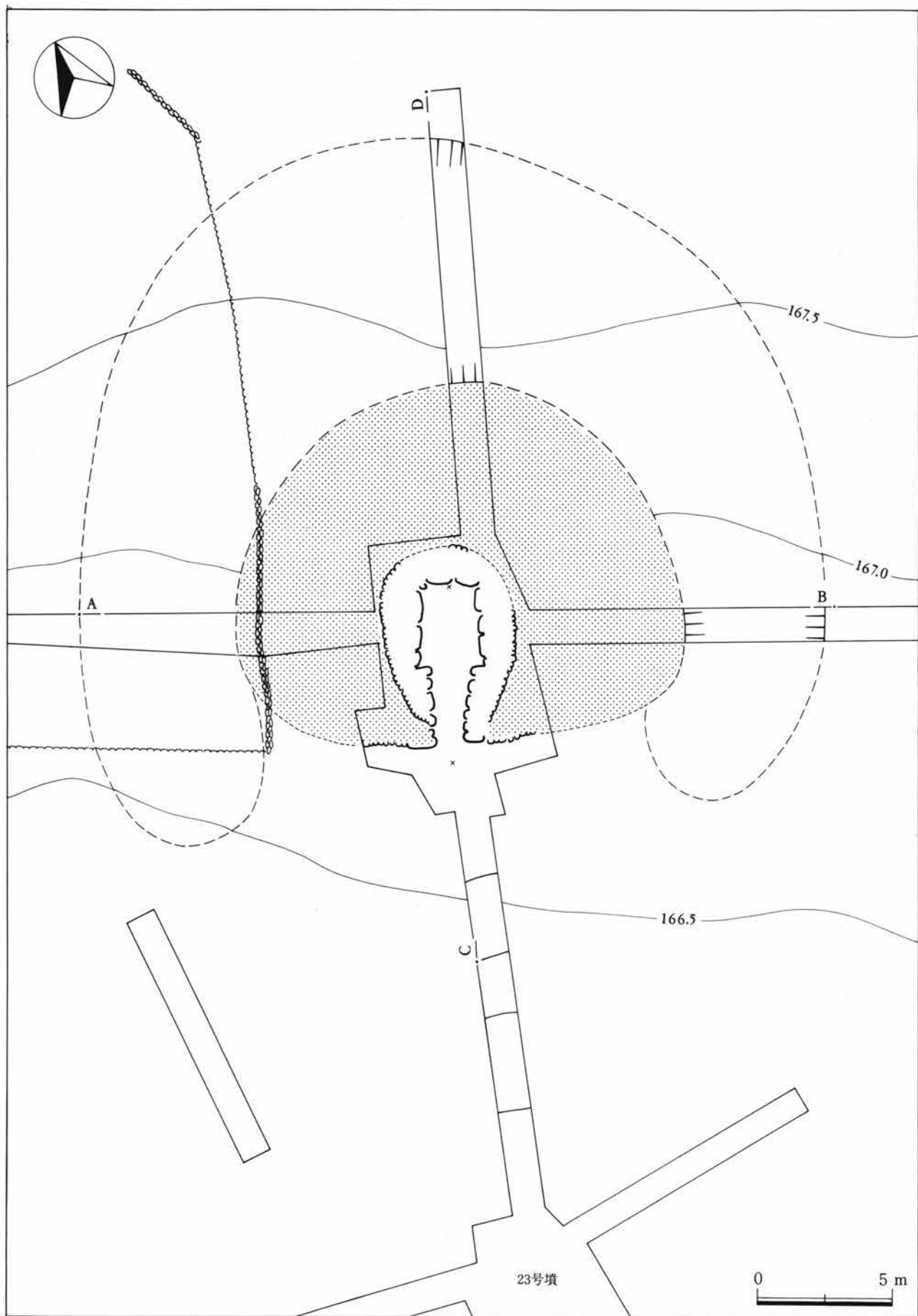
壁面は「ころび」が顕著で、特に上半部の内傾傾斜が著しい。壁石根石は大振りの川原石の平坦面を壁面にして平積とし、上部壁石は既存壁石間のくぼみに使用石材が合致し固定できるように、間隙に小石を補填して壁石を積み上げていった様子が良くうかがえる。用石の大きさは多様だが、両袖部および石室入口部の石組みは用石をそろえ整然さが目立つ。奥壁は安山岩山石の大石と川原石を並用した多石構成で、2石の大石平坦面が奥壁空間の大部分を補う。また、左壁奥の壁石は奥壁の一部を兼ねている如く設置されているため、石室角の平面形がやや弧を描いている。羨道部には閉塞石が天井まで満つ。柵石は袖石角から40cm入口寄りに施設される。川原石を小口積みにした石組が天井石まで達していたが、その間に用石の扱い方に相異が認められない。羨道部で石室高は75cmが計測できるが、玄室高1.6m以上といえる。玄室床面には厚さ30cmの礫敷上に玉砂利を敷きつめている。

石室の構築方法について、壁石を取り除き構築面の状況を調査するに至らなかったが、各トレンチの所見と石室床面下の状況およびレベル差等から、本墳の石室は黒色土面を40cmほど「掘り方」内の礫敷上に構築されたものと推定できる。

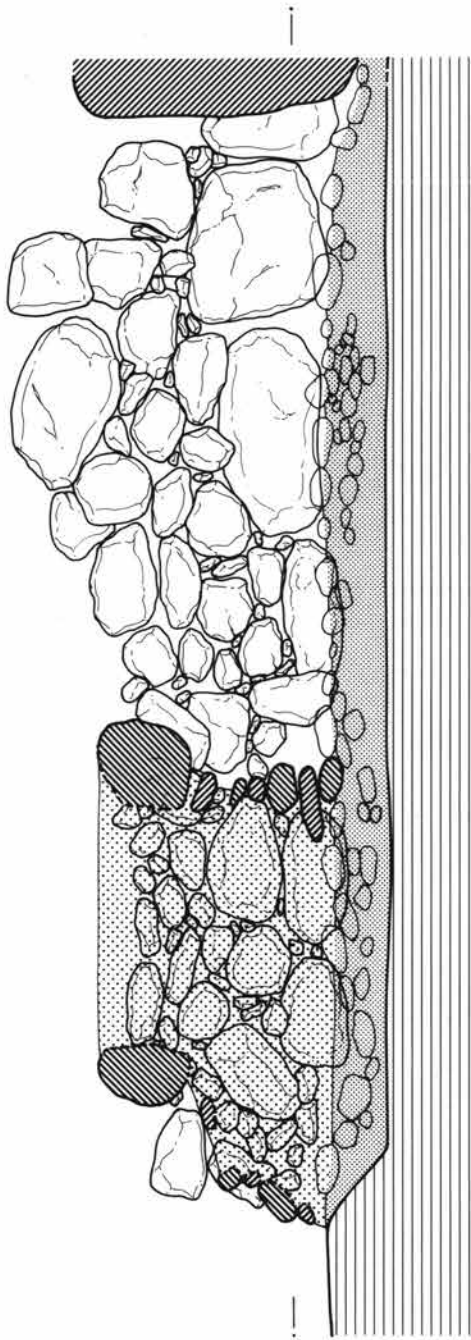
出土遺物 石室内はすでに盗掘をうけ、副葬品も散乱していて原位置にとどまるものは少ない。玄室内から、刀子片1、鉄鏃5、馬具3、勾玉3、金銅製鈴6、金銅製品4、滑石製品4、提瓶1が出土している。

全体的には玄室右半部の壁石下に集中して残存する傾向があるが、鉄鏃は有茎鉄鏃以外に扁平な無茎鉄鏃や刃部が片刃なものも含まれる。馬具類は鉄製轡が羨道内の石壁袖石寄りに勾玉と滑石製刀子片と重なりあうようにして2点、他の1点は右壁下のほぼ中央部に出土し、金銅製鈴は玄室右半部に点々と出土するが、出土状態からすると原位置にとどまる様子は少ない。提瓶は右壁下奥に出土。

小 結 本墳は直径16.6m余の円墳で両袖型横穴式石室を主体部にもつ。墳丘の破壊に比べて石室部の保存状態が良い。壁石は川原石を使用した自然石乱石積みで、「ころび」の傾向が顕著であること、石室前には前庭遺構等はなく、石室前の葺石は整然と組まれているが周囲は形式化していること、石室部は「掘り方」内に構築されていること、副葬品に馬具や金銅製品が目立つことが特長的だが、築造年代は7世紀後半と概略的に推定できる。

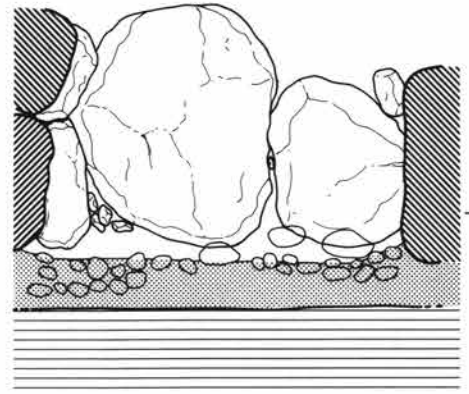


第63図 25号墳 墳丘図



165.30

A



B

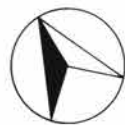
A

C



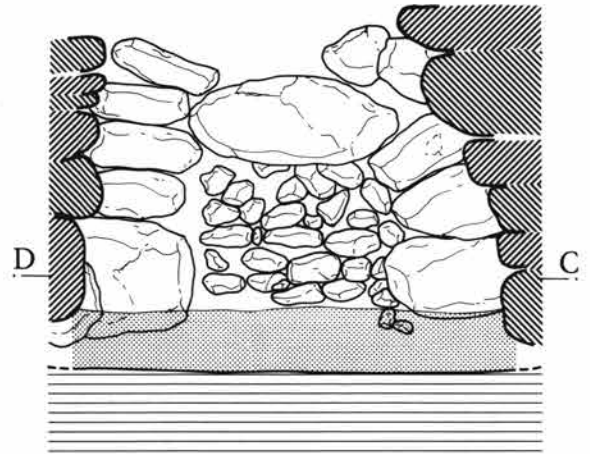
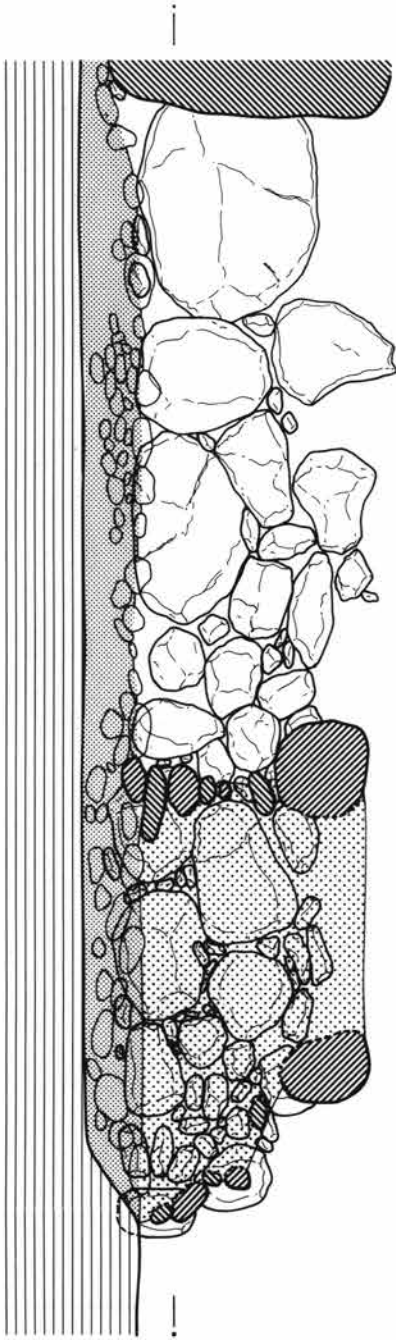
B

D



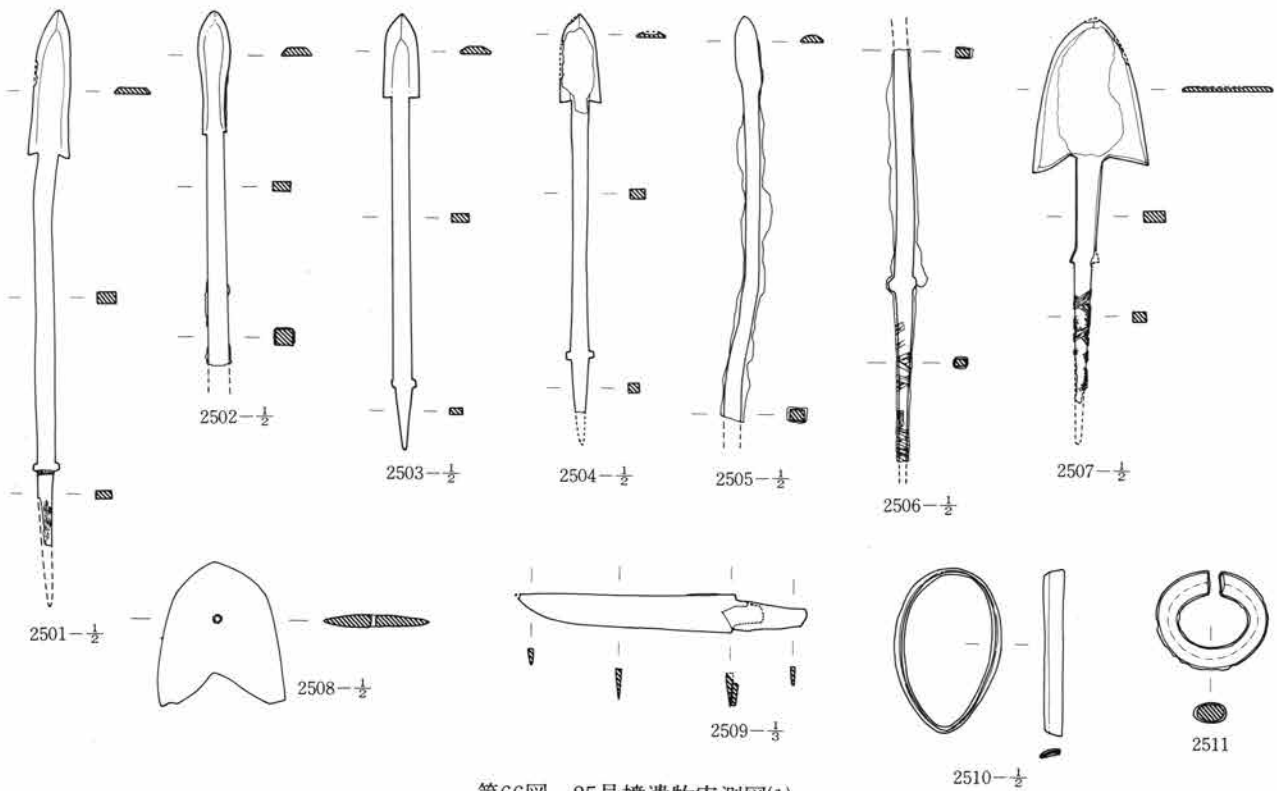
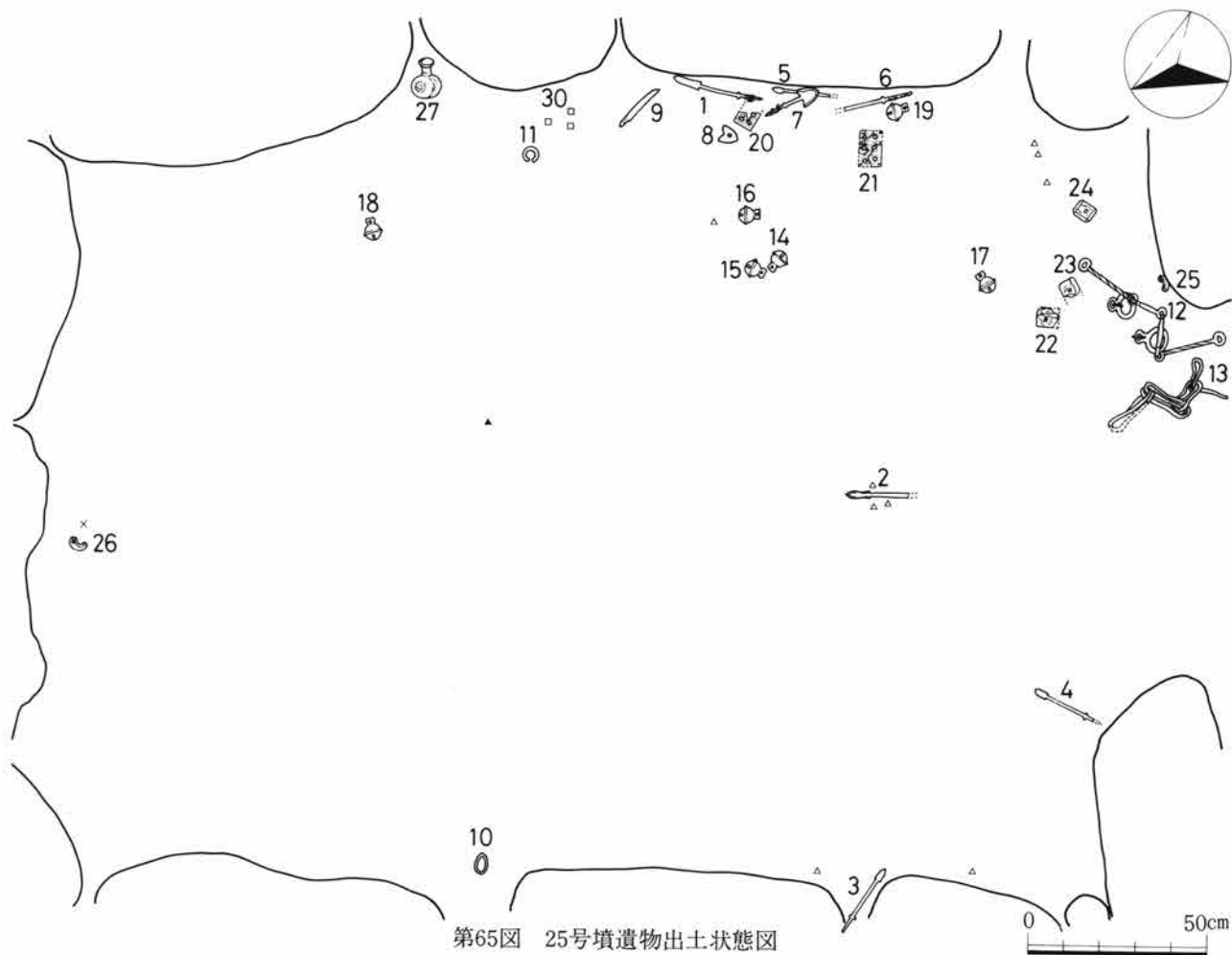
x

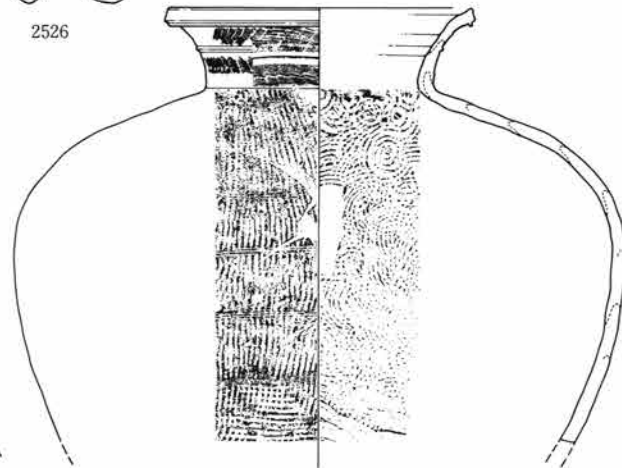
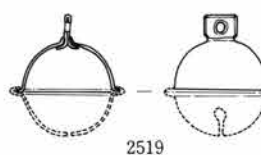
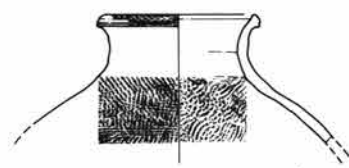
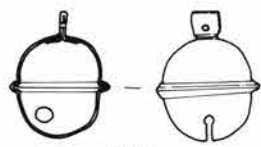
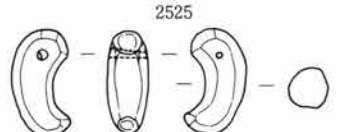
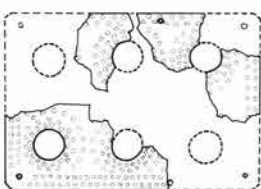
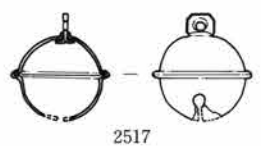
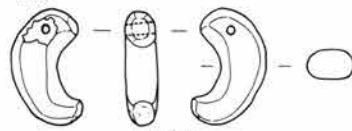
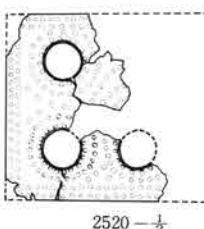
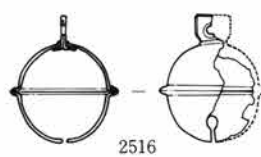
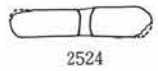
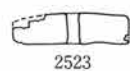
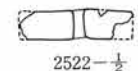
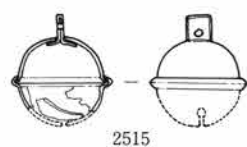
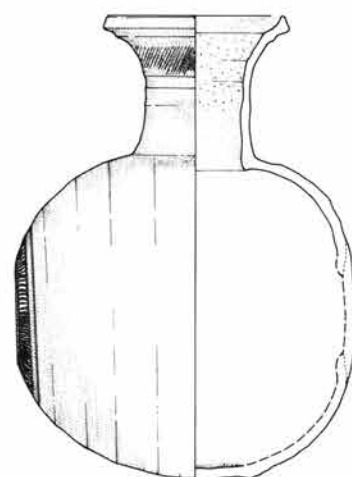
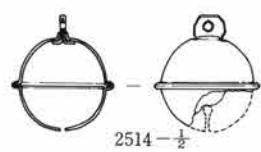
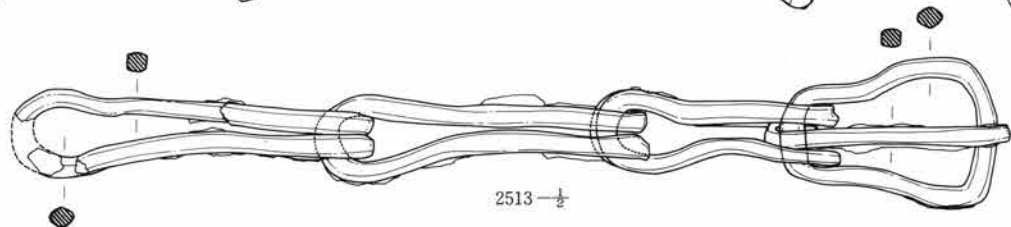
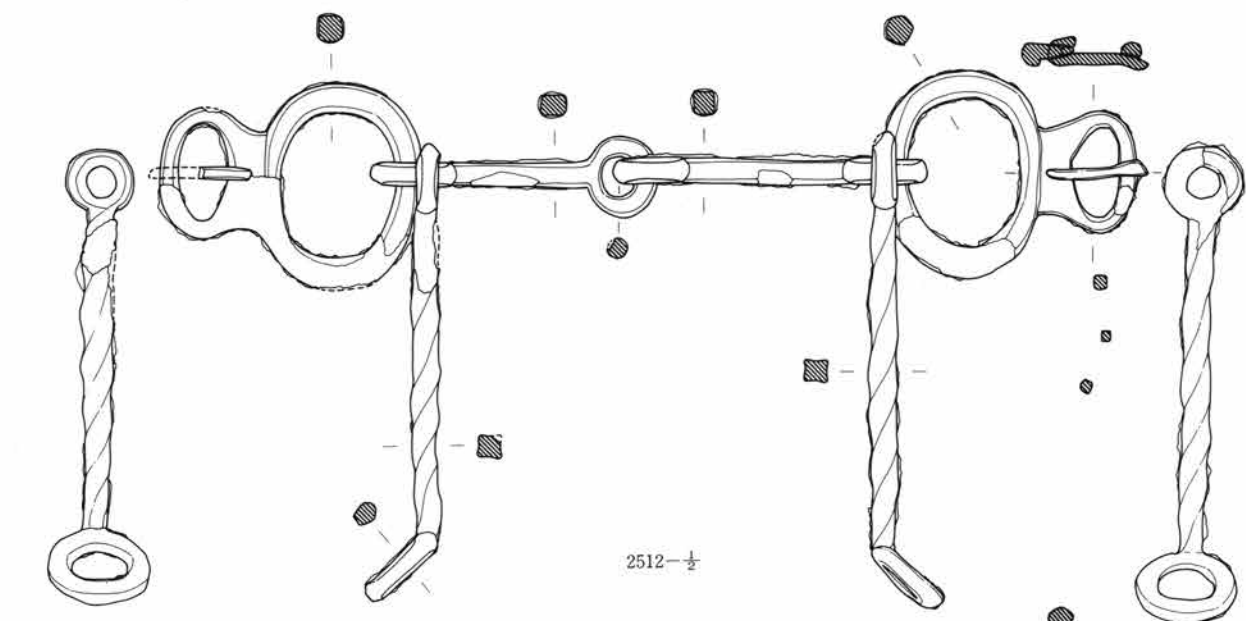
第64图 25号填石室实测图(1)



第64图 25号墳石室実測図(2)

0 1 m





第67图 25号填遺物实测图(2)

第 26 号 墳

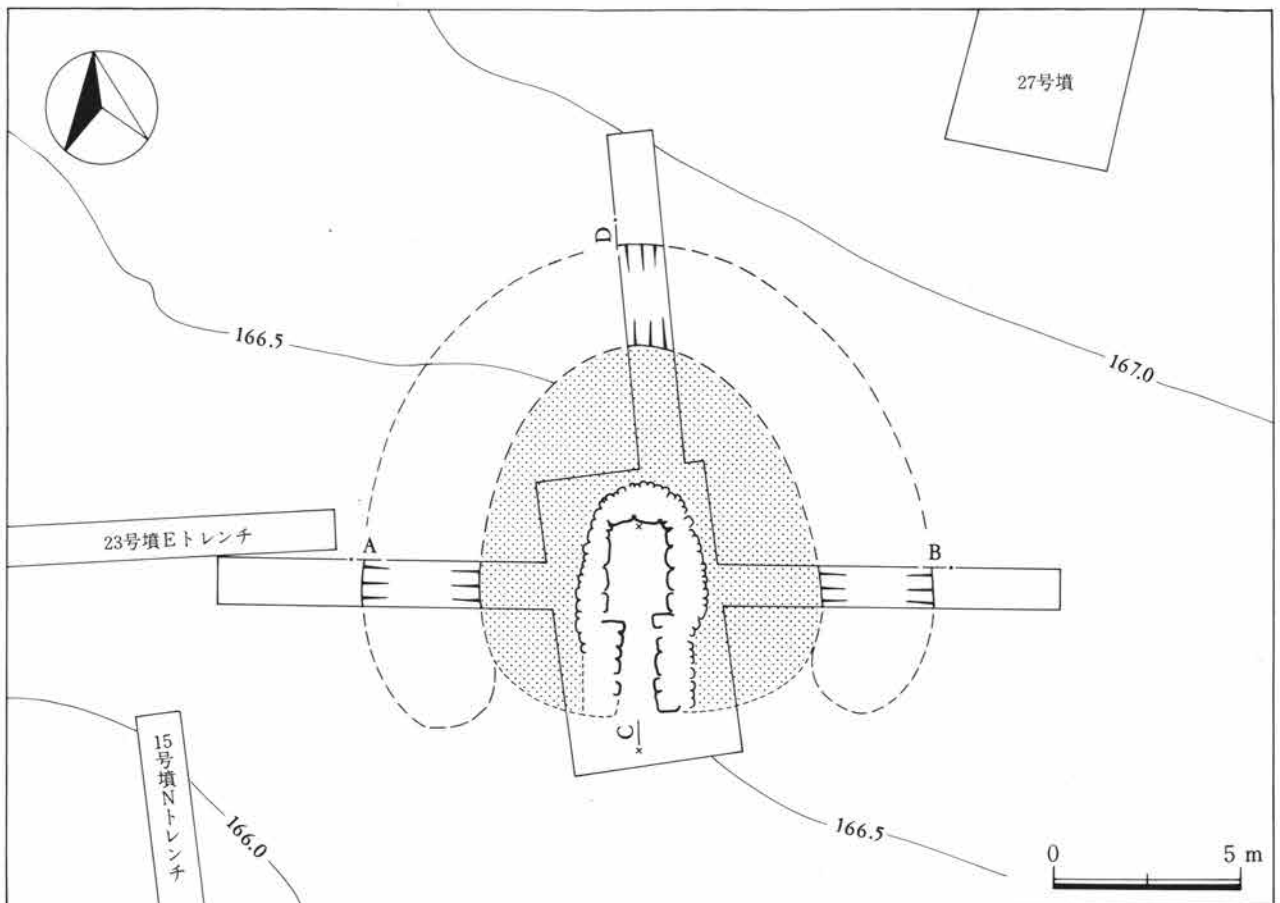
位 置 周囲には27・25・23・15・13・14号墳があり、本墳は23・14号墳のほぼ中間に位置する。

墳丘と外部施設 調査前の状況は、墳丘がほとんど平夷され石室部が畑地面に盛り上がりを残す程度であった。しかし、墳丘の北側と東側に設定したトレンチの観察から墳丘の規模および形態を知ることができた。西トレンチでは、現地表下60cmで黒色土面に達するが、黒色土上にはところどころに厚さ20cm程の盛土が残存し、石室裏込め被覆石から7mの位置で黒色土面から周堀が掘り込まれている。周堀への傾斜面上半部に葺石用石が数石散乱するが、いずれも原位置にとどまるものはない。周堀の墳丘内側傾斜面は明瞭に識別できる。外側はなだらかに地山面に移行しているが、幅2.6m前後、黒色土面との比高差60cmの周堀の存在が確認できる。北トレンチでも同様な状況が観察できる。両トレンチから、本墳の形状および規模は直径20cm内外の円墳と推定できる。トレンチから本墳に伴う出土遺物はなく石室入口前にも前庭遺構は存在しない。

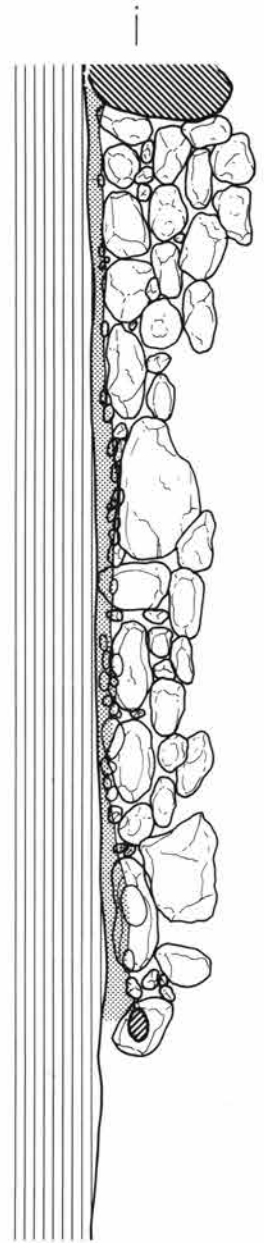
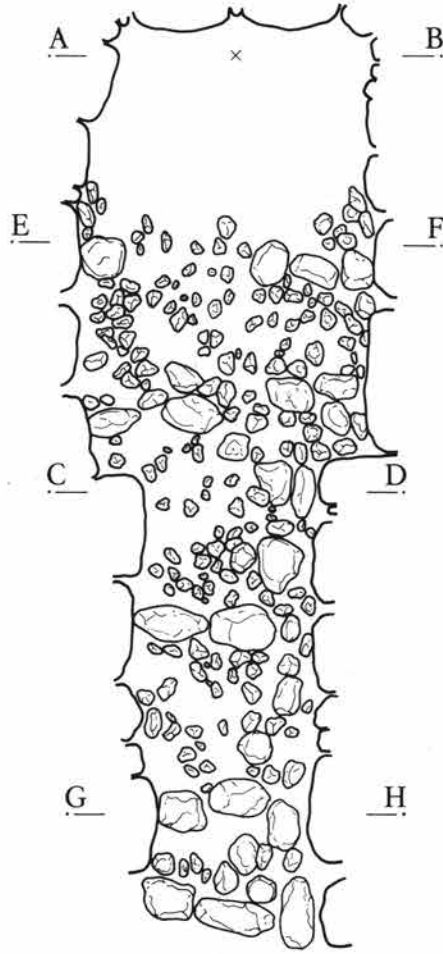
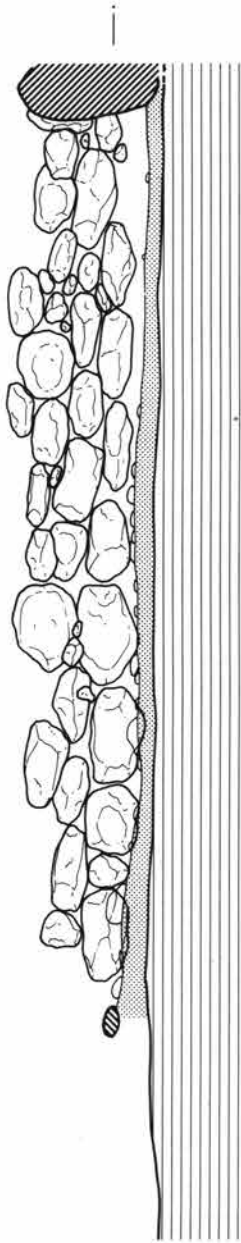
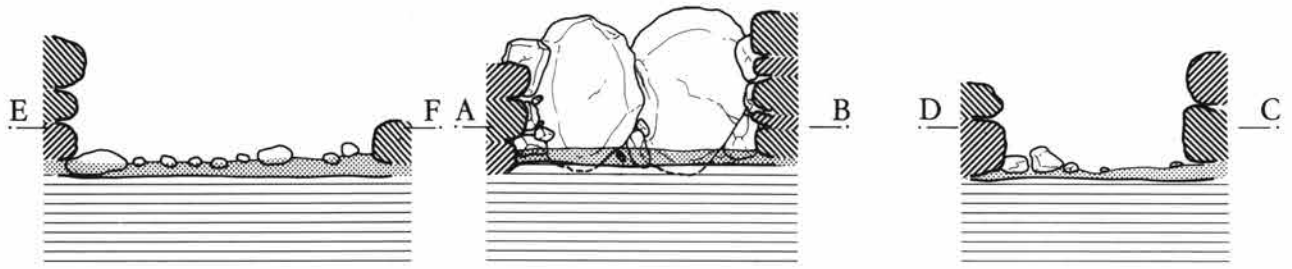
主体部の構造 石材は川原石を主体とした両袖型横穴式石室。奥壁は2石の安山岩山石を、平坦面と壁面にして根石にすえ、左右壁はつぶのそろった川原石を礎敷上に小口にならべて固定し、壁石をほぼ直立に積みあげている。玄室左壁平面には胴張りの傾向が認められる。床面は礎敷の下面付近まで攪乱をうけている。羨道部には閉塞石がいっぱいにつき、石室入口部には栴石の石列が認められなかった。本墳の構築状況まで調査は至らなかったが、トレンチの黒色土面と石室内のレベル差等から、石室は黒色土中に掘り込まれた「掘り方」内に構築されているといえる。

出土遺物 石室内からは副葬品の残存はなく、また、トレンチからも本墳に伴う遺物出土はなかった。

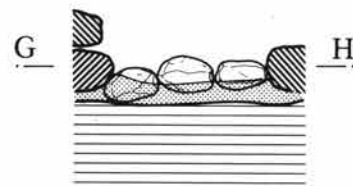
小 結 比較的小ぶりな川原石を使用した小石室をもち、左壁の胴張りは石室長を半径とした円弧の一部に合致するという特色が認められる。



第68図 26号墳 墳丘図



165.90



第69图 26号填石室实测图

0 1 m

第 27 号 墳

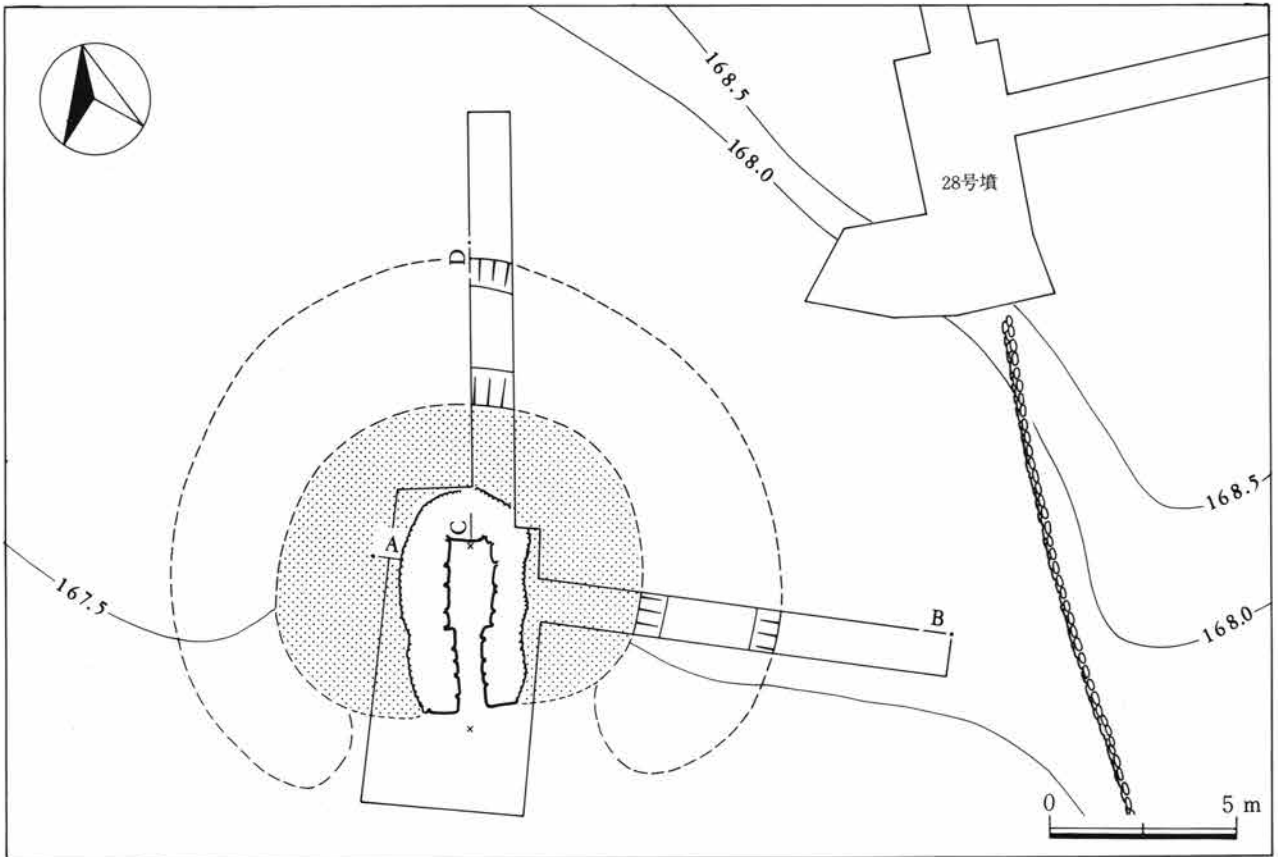
位 置 25号墳の東23m、29号墳の南22m、28号墳の西南16m付近に位置する。

墳丘と外部施設 調査時点においては6m×3.4mの楕円形の墳丘を、わずかに留めていた。墳丘は、構築時の地表面である浮石を含む黒色土層上に構築されている。周堀は、黒色土層をローム層下まで掘り下げた幅3.7m内外のものが北、東で確認された。西・南は未調査であるが、周堀は南を除いた形で馬蹄形に圍繞していたものと考えられる。北の周堀は地形の関係からか二段に掘られているのが注意される。葺石は現状では確認できなかった。墳丘は、周堀の状況からして径9m内外の円墳と推定される。前庭施設・埴輪配列はない。

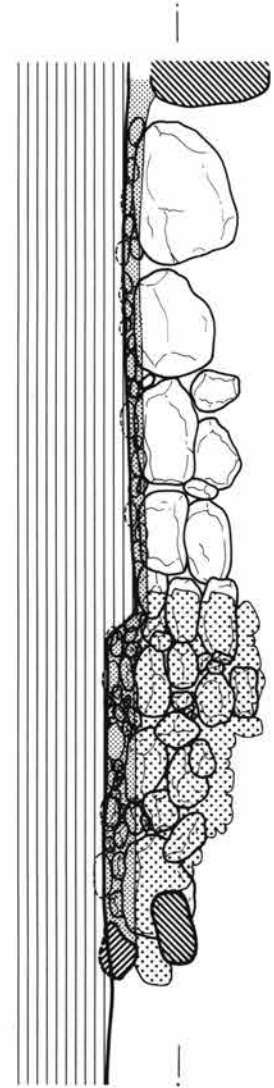
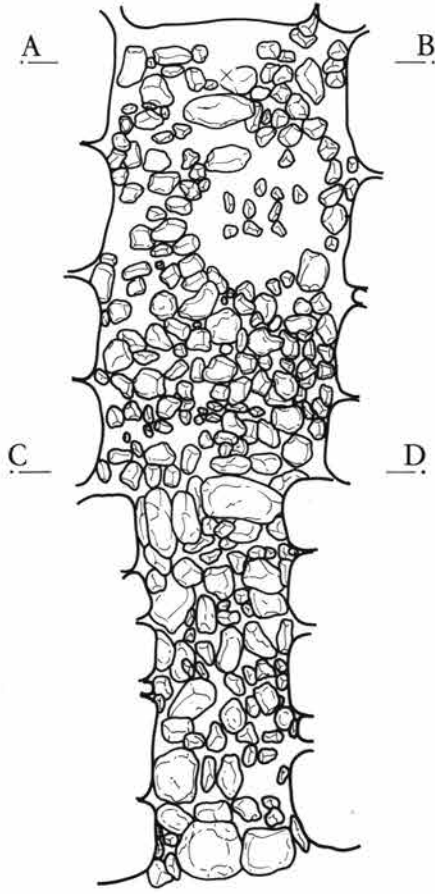
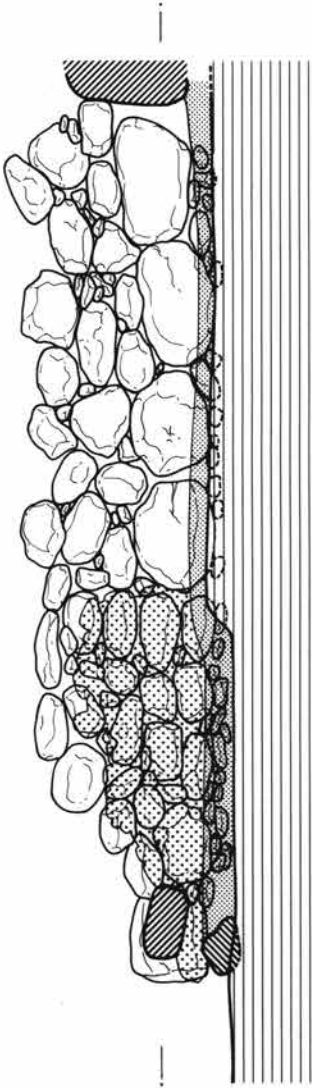
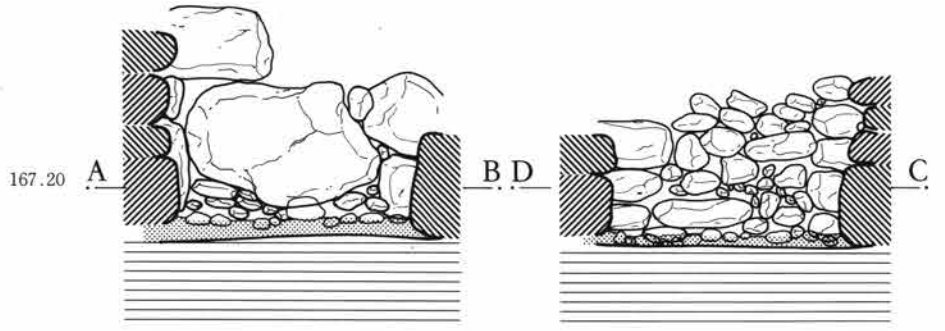
主体部の構造 主体部は、川原石を乱石積みにした両袖型の横穴式石室である。全長は4.56mで、南よりやや西に偏して開口している。石室各部分の計測値は別表のとおりである。石室は、石室の形なりに黒色土層を50cm内外掘り下げた「掘り方」の中に構築されている。「掘り方」の底部には玉石を敷き並べ、この上に側壁奥壁の根石がのっている。石室床面は、床面全体に玉石を敷き、その上に砂利を敷きつめていたようである。羨道部は玉石の上を、川原石でもって填塞してあった。袖石のところには長大な川原石が榧石として据えてあった。

出土遺物 石室内は、玄室奥壁より1.0m付近の左壁にて片刃の鉄鏃2点、奥壁より1.5m付近の右壁にて両刃の鉄鏃2点が出土。その他、墳丘より須恵器甕1点、長頸瓶が1点出土している。鉄鏃は4点でいずれも長脚鏃で有棘篋被を持つ。長頸瓶はふんばりの効いた高台をつけ、肩部に1条の沈線をめぐらしている。長頸の下部に近く2条の沈線がめぐる。自然釉が、胴部、口頸内外面、底部内側にかかる。甕は完形に近く口縁部径は38cm、胴径65cm、器高75cmを測る。口頸部には波状文が段をなし、胴部外面には加き目、内面には当て具の青海波文の圧痕が残る。底部は、穿孔されて抜ける。

小 結 本墳の特色は、主体部が両袖型の横穴式石室であること。石室は「掘り方」の中に構築されていること。埴輪が存在しないこと。また墳丘が石室の全長を半径とした規模を有すること等が指摘できる。

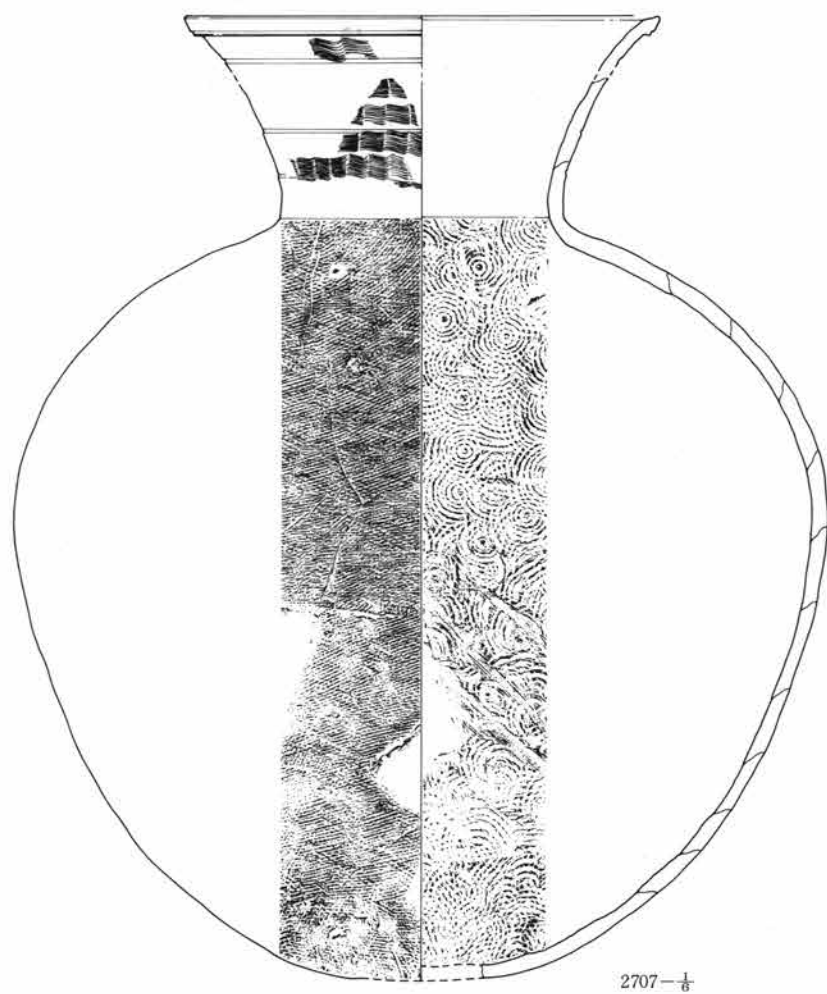
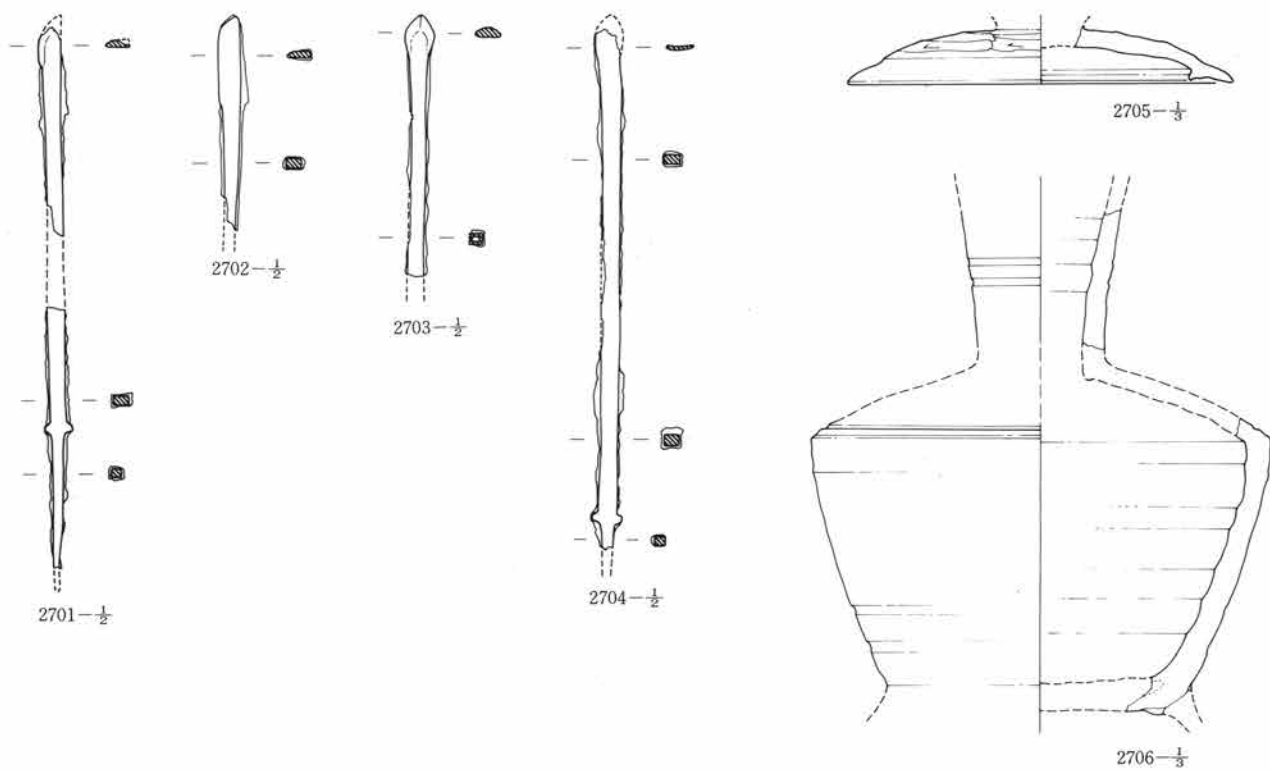


第70図 27号墳 墳丘図



第71图 27号墳石室实测图

0 1 m



第72图 27号填遗物实测图

第 28 号 墳

位 置 周囲には53・29・27・14・62号墳があり、本墳は53号墳の南西25mに位置する。

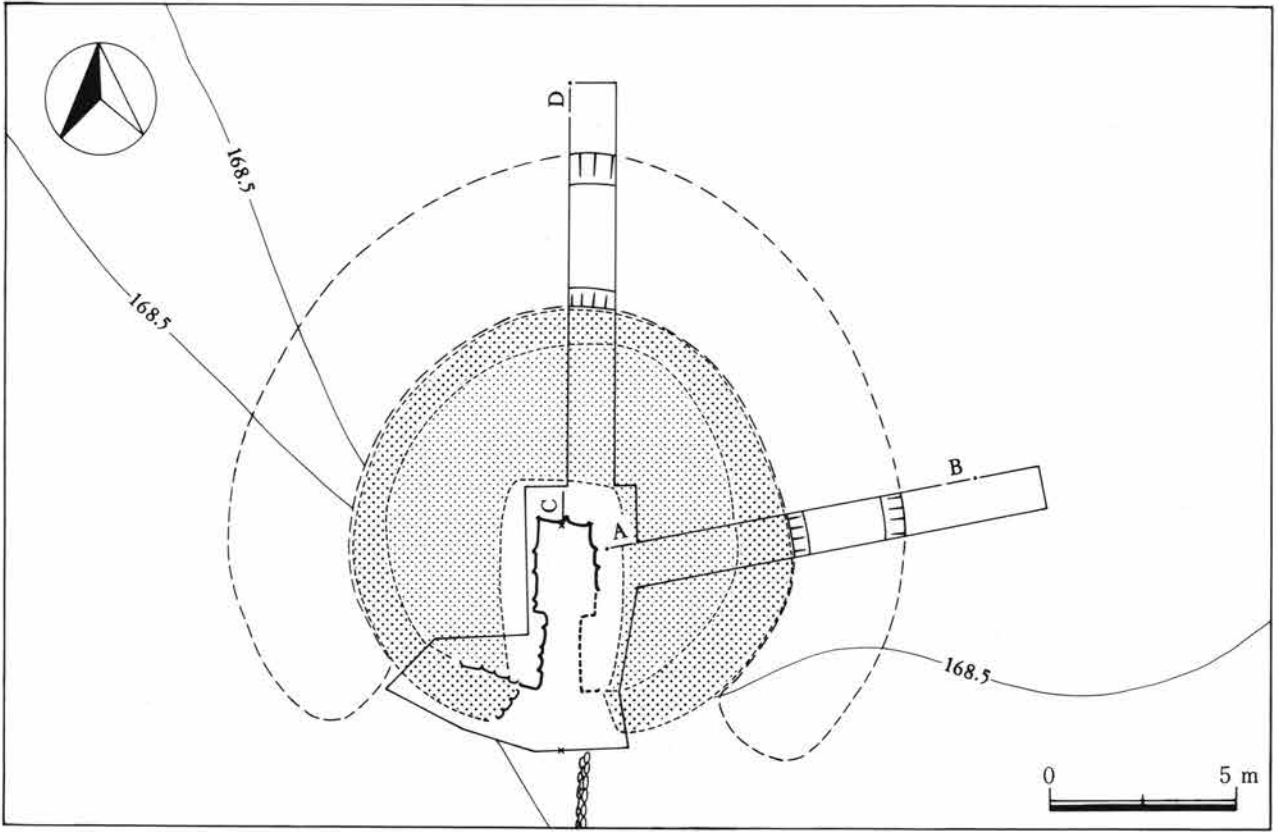
墳丘と外部施設 調査前の古墳は墳丘周辺がほとんど削平されていて、石室部を中心に比高差1.5m、東西長4.5m、南北長8mの楕円形状に墳丘をとどめていた。調査は主体部の位置を確認したのちトレンチを設定して墳丘の規模を確認することとした。墳丘の規模はトレンチからうかがえる。盛土の大半はすでに削平されている。北トレンチでは現地表下50cmで黒色土面に達するが、黒色土上に厚さ20cmの盛土が残存する。盛土は石室裏込被覆石に寄せて上方傾斜の層位を呈す。黒色土面は石室裏込被覆石から4.5mの位置で周堀に移行し、移行地点付近には川原石の葺石用石が散乱するが原位置にとどまるものはない。裏込被覆石の石組みは黒色土面を20cm掘りこんだ「掘り方」内から組まれている。西トレンチでもほぼ同様な地層断面を観察できるが、裏込被覆石の石組みは比高差40cmの「掘り方」内からで、西側で深くなる傾向が認められる。以上、トレンチの状況から、本墳の形状および規模は直径12m前後の小形円墳で、幅3m余の周堀をめぐらしたものといえる。石室入口前には前庭の残存がある。前庭左壁は、石室入口部から左へ56cmの位置より、石室中軸線に対し37度の広がりをもって川原石4石が1.1mあまりの石組が残存していた。根石レベルは不統一で、残存する二～三段分の石組はゆるやかな傾斜面にもたせて組ませている。石の扱い方はやや粗雑である。前庭石組みは壁石根石および葺石根石のレベルより40cm上面に施設されている。すなわち、石室前の葺石は石室壁石根石とほぼ同レベルの高さに30～50cmの大振りの川原石を横に並べて根石とし、根石上に小振りの川原石を横ないし小口に積んで葺石としているが、石室前では既存葺石にかぶせて40cmの土を積みかためて前庭石組みを付設としている。右壁側は壁石を含めて、すでに除石されていた。前庭内からは出土遺物はなく、各トレンチからも本墳に伴う遺物出土はない。

主体部の構造 川原石を使用した両袖型横穴式石室で全長4.38mが計測できる。玄室右壁から羨道右壁まで除石されているため、石室各部の正確な規模は計測できないが、左壁袖幅が20cmと狭く、玄室幅に比して羨道幅の広い平面構成が特徴的である。奥壁は床面からの現存高1.2mで多石構成。大振りの川原石の平坦面を壁面にそろえた平積とし、左右壁との間隙を小石で補填している。右壁根石は大振りの川原石を平積とし、礫敷上に面をそろえて整然と裾え、川原石を間につめて固定している。二段目からよりは川原石の小口積みを基本とし、その間隙に小石を補填しているが、石の積み方に根石ほどの整然さはない。壁面上方にしたがい用石が小振りになる傾向があり、「ころび」も認められる。特に壁面上半部の内傾傾斜が著しい。袖部および石室入口部の石組みは用石の大きさも一定で、整然と羨道壁・玄室壁に組みこまれている。羨道奥玄室入口には梱石があり、羨道は閉塞石のための石で満たされていた。玄室床面は、20×10×10cm程の川原石を40cmの厚さに敷きつめた礫敷上の玉砂利で構成されている。

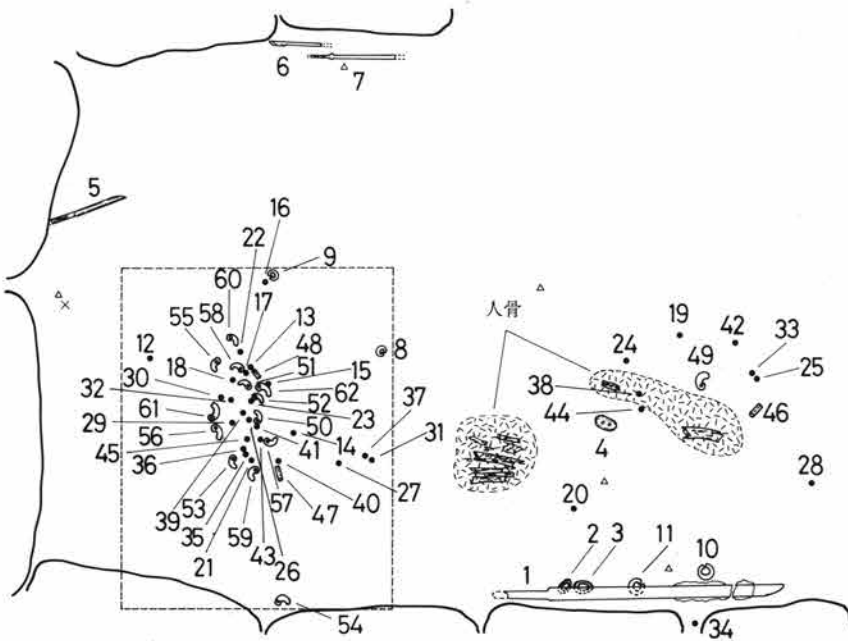
石室構築方法までの調査は実施できなかったが、墳丘トレンチと石室内のレベル差等から、石室は黒色土面を40cmほど掘り下げた「掘り方」内に構築されているものといえる。

出土遺物 墳丘の平夷および壁石の除石にかかわらず、残された床面上には比較的多量の副葬品が残存していた。人骨片をはじめ、直刀1、刀装身具3、鉄鏃2、刀子1、金環4、勾玉14、管玉3、玉類34で、特に勾玉、玉類の豊富さが特徴的である。直刀は左壁直下の袖部寄りに刃部を壁側にむけて副葬され、直刀下に金環1が重なっている。勾玉・玉類は床面ほぼ中央部の左壁寄りに、人骨片を中心とした60cm四方内に集中して出土している。刀子は奥壁下・鉄鏃は右壁下で、盗掘の影響を受けているが原位置を保つものが多い。直刀は小刀に属しふくらは枯れる。

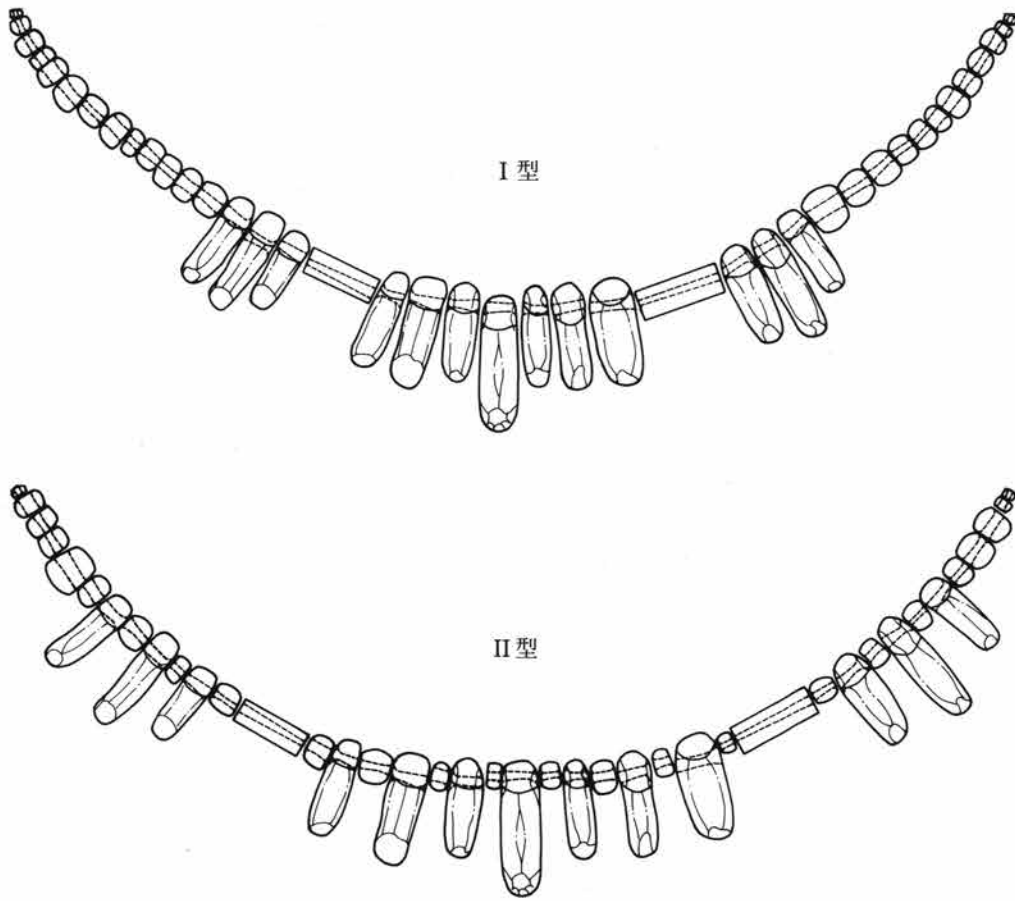
小 結 本古墳の特色は直径9m内外の円墳で、主体部は川原石使用の両袖型横穴式石室であること、石室前等前庭を具備すること、石室は「掘り方」内に構築されていること、石室の一部は破壊されていたが副葬品の保存状態が良く、勾玉をはじめとする玉類の出土が豊富なこと等があげられた。そこで、出土状態から、首飾りの組み合わせについて積極的に復原してみた。図示した2例である。



第73図 28号墳 墳丘図

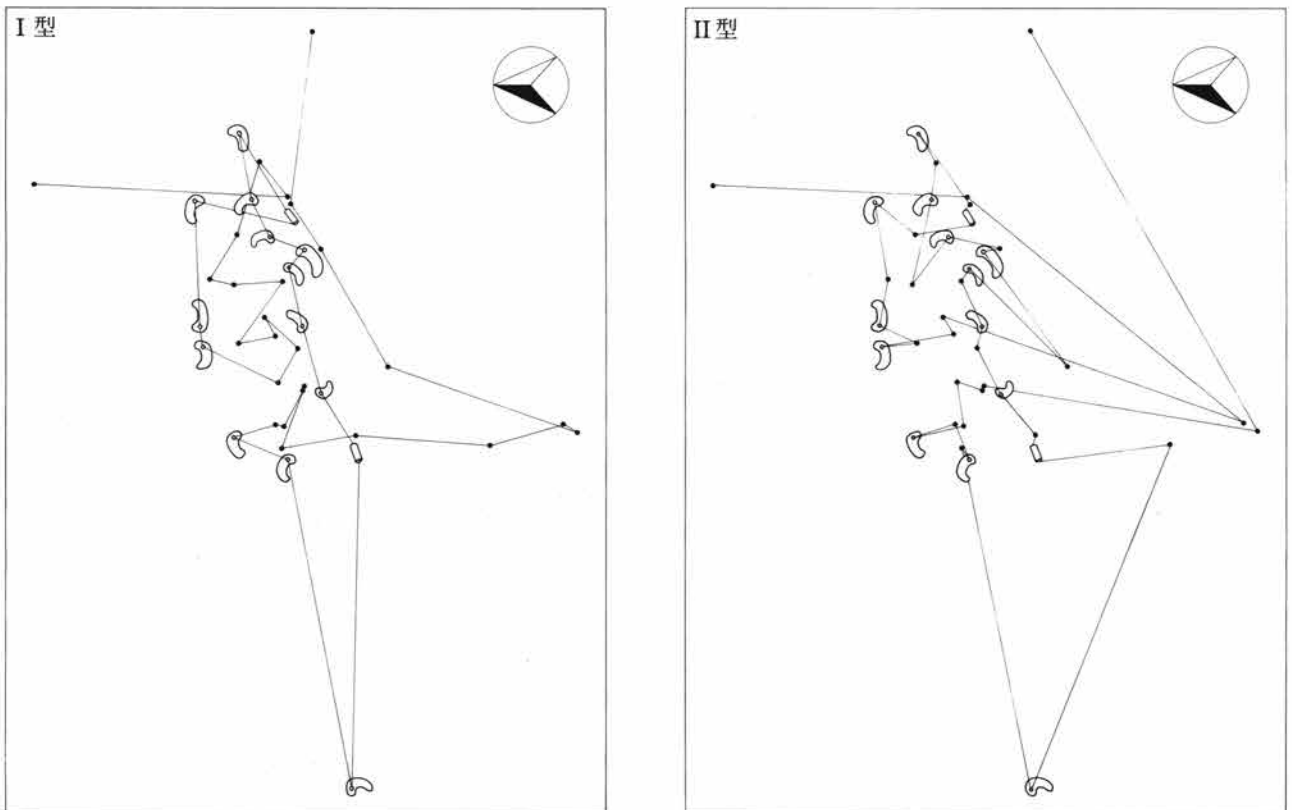


第74図 28号墳遺物出土状態圖

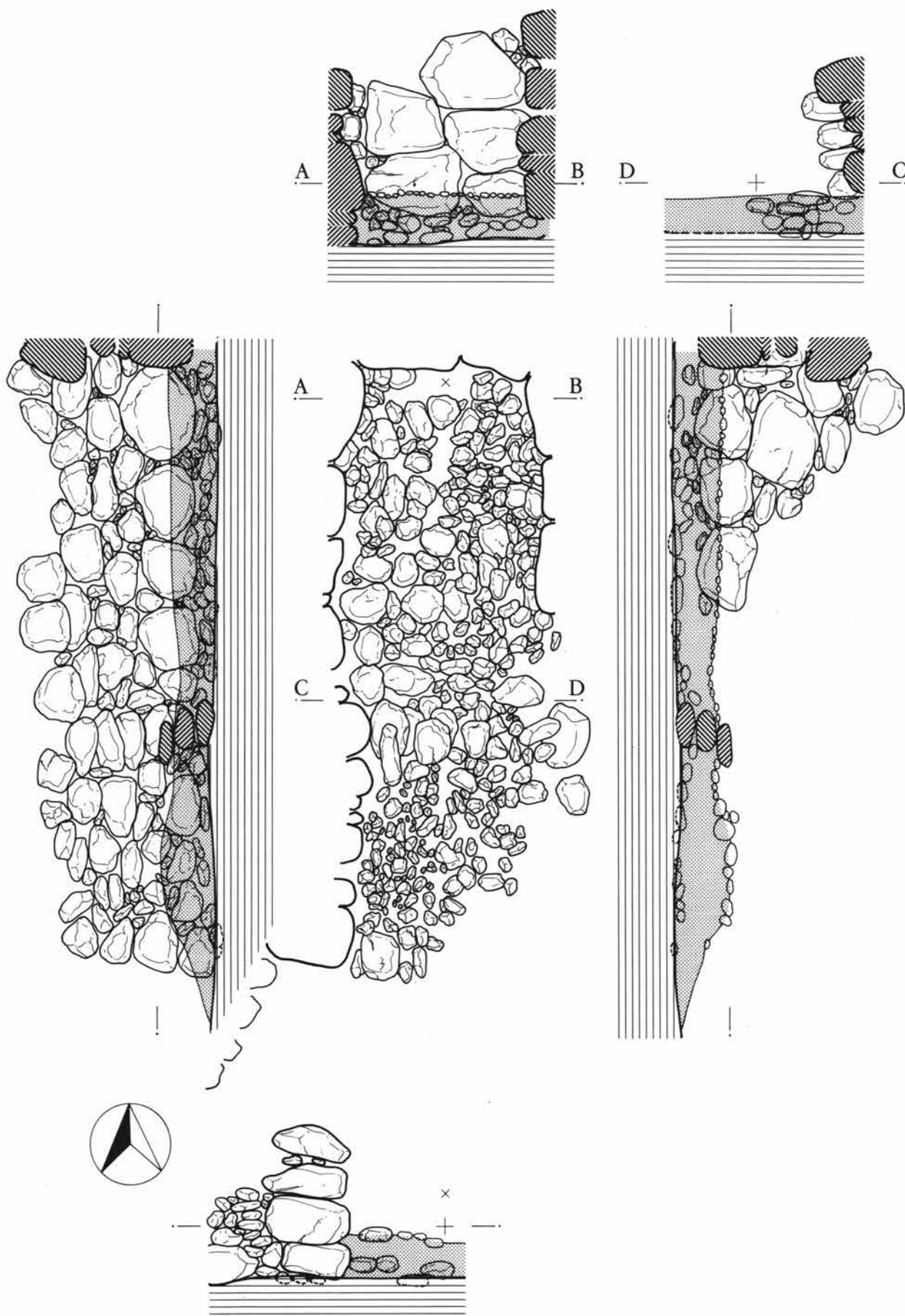


頸玉の復原 頸飾を構成する玉は有機質等の紐で繋ぐ。したがってその紐の腐朽ともなつて遺体に緊索されていたであろう飾玉は散乱し、旧態は復しえない。綿密な発掘調査によつても砂利を床面に敷く石室内においては更に復原は困難となる。本古墳出土の飾玉は頸巻式の着装法で中央に碧玉、左右に瑪瑙の勾玉を管玉、小玉で連繋する。これを出土位置に無理のないように復原したのが左図のI型、II型である。

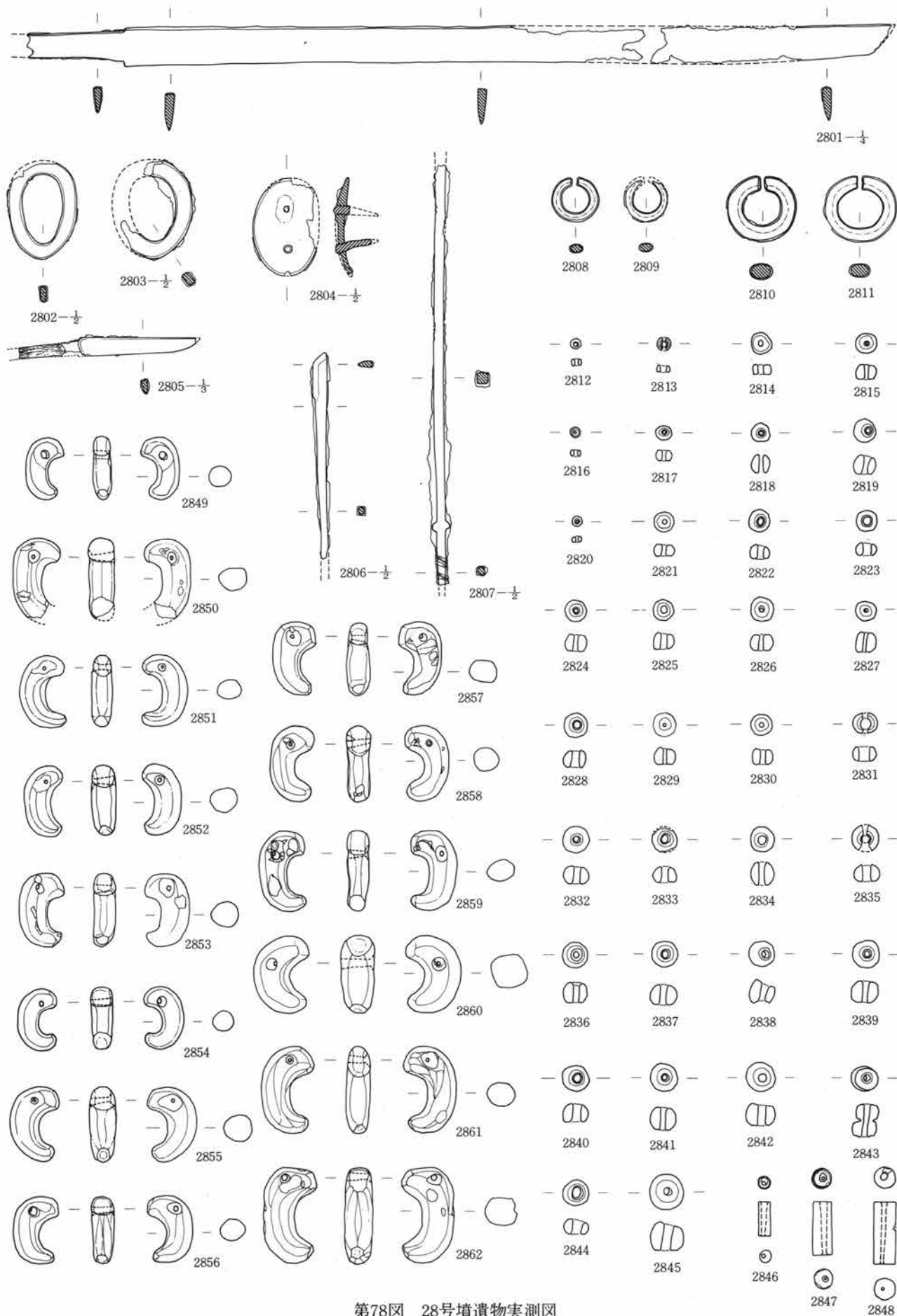
第75図 28号墳玉類復原子想図



第76図 28号墳玉類分布図



第77图 28号填石室实测图



第78图 28号填遺物实测图

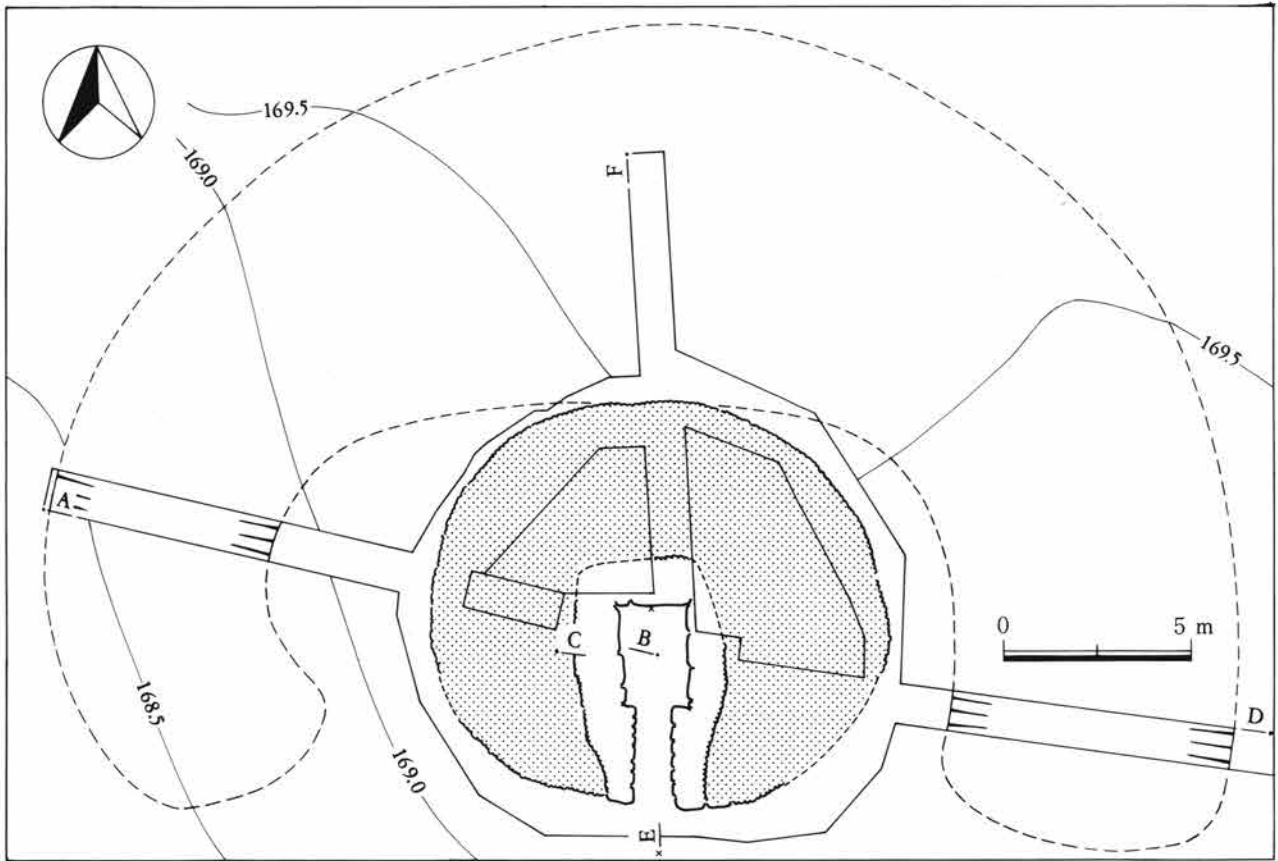
第 30 号 墳

位 置 本古墳群中西側のグループに属しており東に63号墳が接し、西には浅い谷が刻み込む。

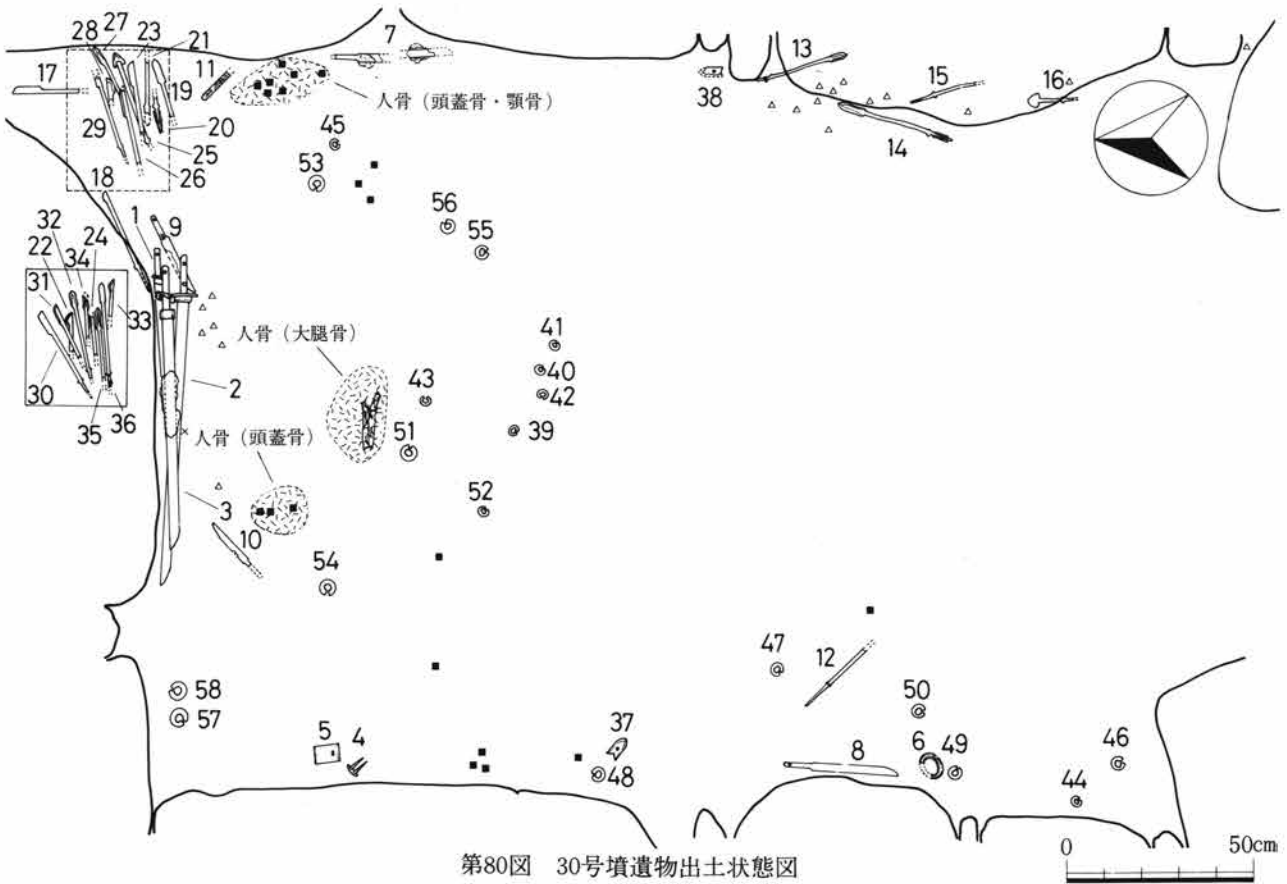
墳丘と外部施設 発掘調査前の古墳は径8m、比高1.5m程度の変形した小丘状を呈していた。発掘は地形に沿う形で東西方向にトレンチを設定した。ここで石室の形状、主軸方向を確認したのちに南北方向のトレンチを設定した。各トレンチでの所見で、葺石の圍繞状態が良好と認められたため墳丘全体の発掘を実施した。各トレンチの土層観察結果をまとめると以下の如くである。東トレンチではなだらかに両方に立ち上がる深さ40cmほどの浅い堀で幅は7.4mを測る。墳丘盛土は周堀立ち上がり面まで築く。西トレンチでは、東トレンチと同様な断面形を持ち上幅6.7m、深さ70cmを測る。南トレンチ、石室前面の発掘は実施していない。北トレンチでは墳丘側周堀立ち上がり面に葺石が築かれている。周堀の南方向は確認していないが、他の古墳と同様石室前面の開放する馬蹄形の平面を呈することが予想される。墳丘盛土の状態は東トレンチの遺存が良好で、高さは2mを残す。土層断面は石室構築時に裏込め被覆する傾斜を持つものと、墳丘成形のための水平面の層に分類できる。葺石は、周堀の裾に圍繞する葺石と、盛土中段に置かれた葺石がある。これらの所見を総合すると本古墳は東西18.5mを長軸に南北を短かくした楕円形を墳丘基段面として計画していると考えられる。その上に直径が墳裾根石までの12mで盛土する。東西方向での周堀外側での径は約32mを測る。墳丘規模に比較して周堀の大きさが目立つ。前庭の施設や、埴輪の樹立は全くない。

主体部の構造 主軸長5.2mを測る両袖型の横穴式石室である。旧表土面を奥壁側で40cm掘り下げた「掘り方」を設定してその中に砂利を10cm程度敷き、壁石根石を配している。石室の奥壁は2石の石を横長にして平の面を室内に向けている。玄室の側壁はそれぞれ平の面を横積みにしてその上に小口積みに組み上げている。両側壁とも奥壁寄りが最大の石を使い手前にゆくにしがいが大きさは減少してゆく。3石積みあげたものが遺存しており、壁の高さは2mに近い。玄室袖はそれぞれ2石重ねている。右袖石の根石は不安定である。羨道は玄室側壁と積み方は近似しており壁石根石は横長で平の面を内側に据えている。2石以上は小ぶりである。羨道入口部分は壁面側を小口積みに重ねている。前庭施設はない。埴輪の樹立もない。石室の玄室長に対して羨道長の長さが短い。

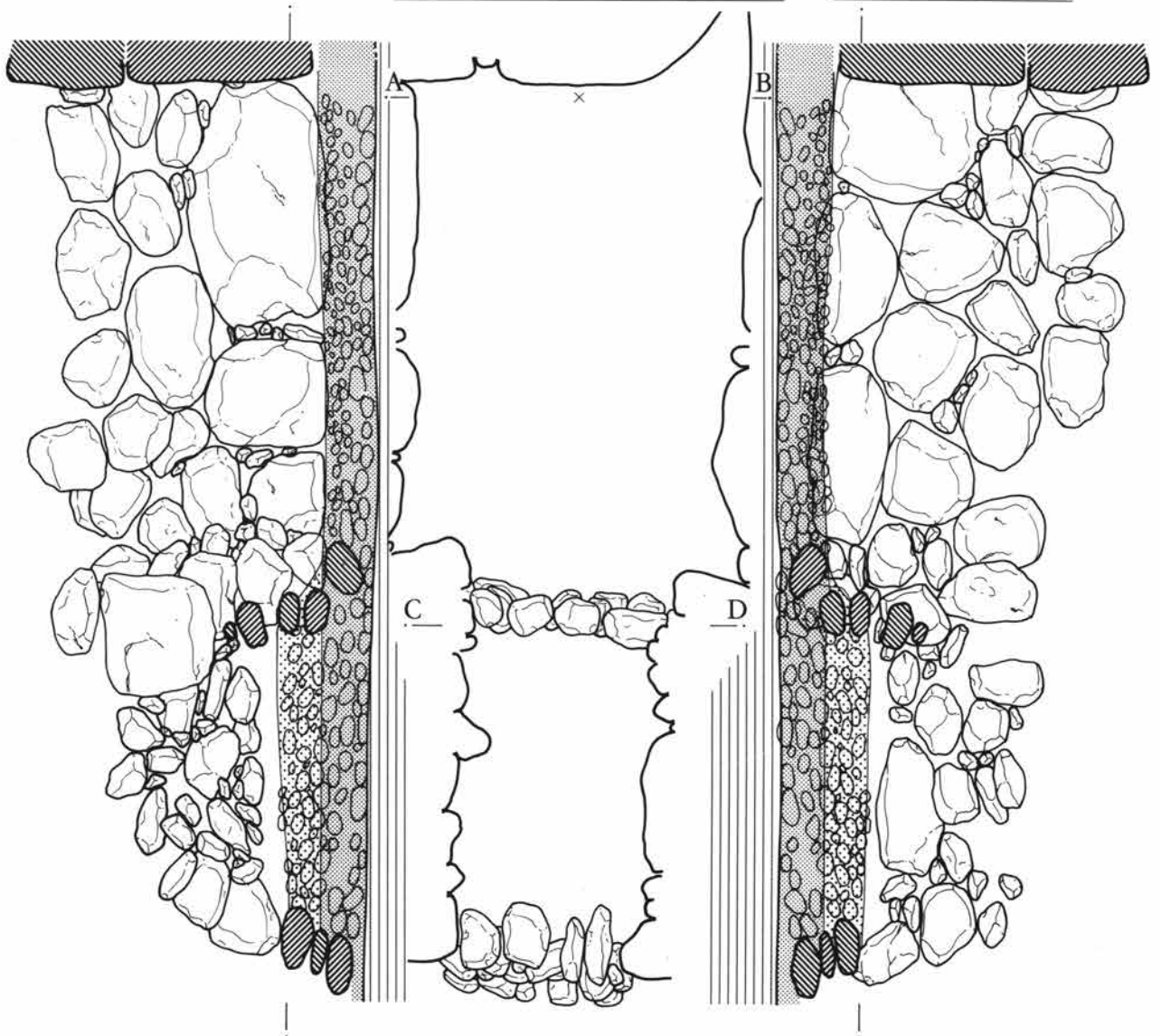
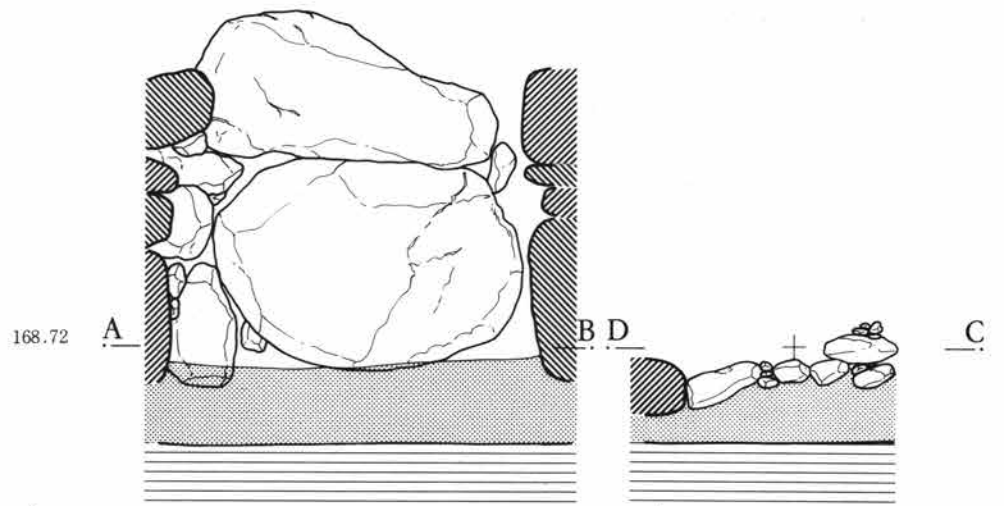
出土遺物 墳丘の崩壊とそれに伴う天井石の落下などにより墳丘頂上に供献されたであろう須恵器の甕類は周辺に広く散乱している。石室前面には土器類の供献がみられ、墓前祭的な性格もうかがわれる。石室内、特に玄室へは、天井石も転落していて、埋葬遺物の出土量の多さにもかかわらず、当時の原位置を積極的に復原し得る材料が少ないのは残念であった。墳頂部へは底部穿孔の須恵器大甕が多く出土している。石室前面からは須恵器、土師器の小形器種が多く出土しており、杯、平瓶、長頸壺、提瓶、短頸壺など多様である。石室内では直刀類は奥壁寄りに平行に置かれ、鏃類は側壁左右に分かれて多い。装身具の金環は玄室の奥壁寄り半分に散乱するように多く出土している。出土遺物をまとめると以下の如くである。直刀3振、3004は鞘尻底板である。刀子は4本出土しており、目釘を有するもの2本である。鉄鏃は26本、ほとんどは長脚棘筥被鏃であるが、なかには無茎腸快五角形式の鏃もある。金環は20個出土しており2個一組となる。10人以上の埋葬が考えられようか。3055～3057は土師器で大形の杯2点と高杯脚部である。これ以下は全て須恵器である。3058は小形短頸壺、3059、3060は甕と考えている。3061は短頸壺で肩部に一条の沈線がめぐる。3062は平瓶、3063、3065は長頸瓶である。特に3065は東海産と考えてよい。3066は提瓶であり肩部の把手はつかない。3067は、長頸瓶で沈線区画の中に波状文をめぐらせる。甕は大形品が多く3070、3072、3073は底部を焼成後に打ち抜いて穿孔している。器形は長短2種の口縁部を持ち、肩は強く張って短かめの胴となる。口縁端部は波状文をめぐらせるものもある(3070、3072)頸部には沈線で区画し波状文を充填するもの、刺突するもの、無文のものがみられる。胴部は外面は平行タタキ目が施こされ内面には青海波文の当て具の圧痕を残す。3074は口縁部、肩部に濃緑色の釉がかかり美しい。



第79図 30号墳 墳丘図

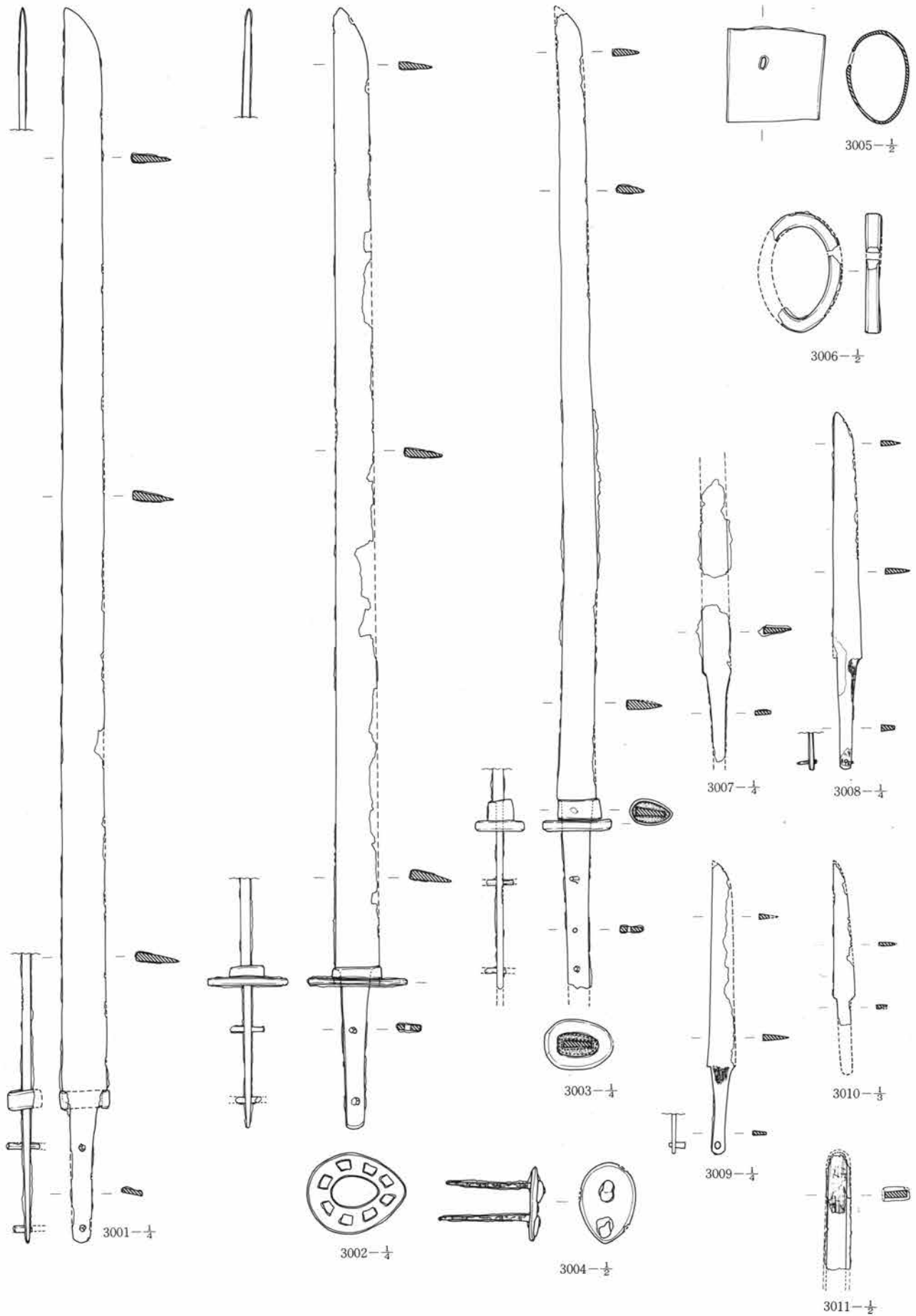


第80図 30号墳遺物出土状態図

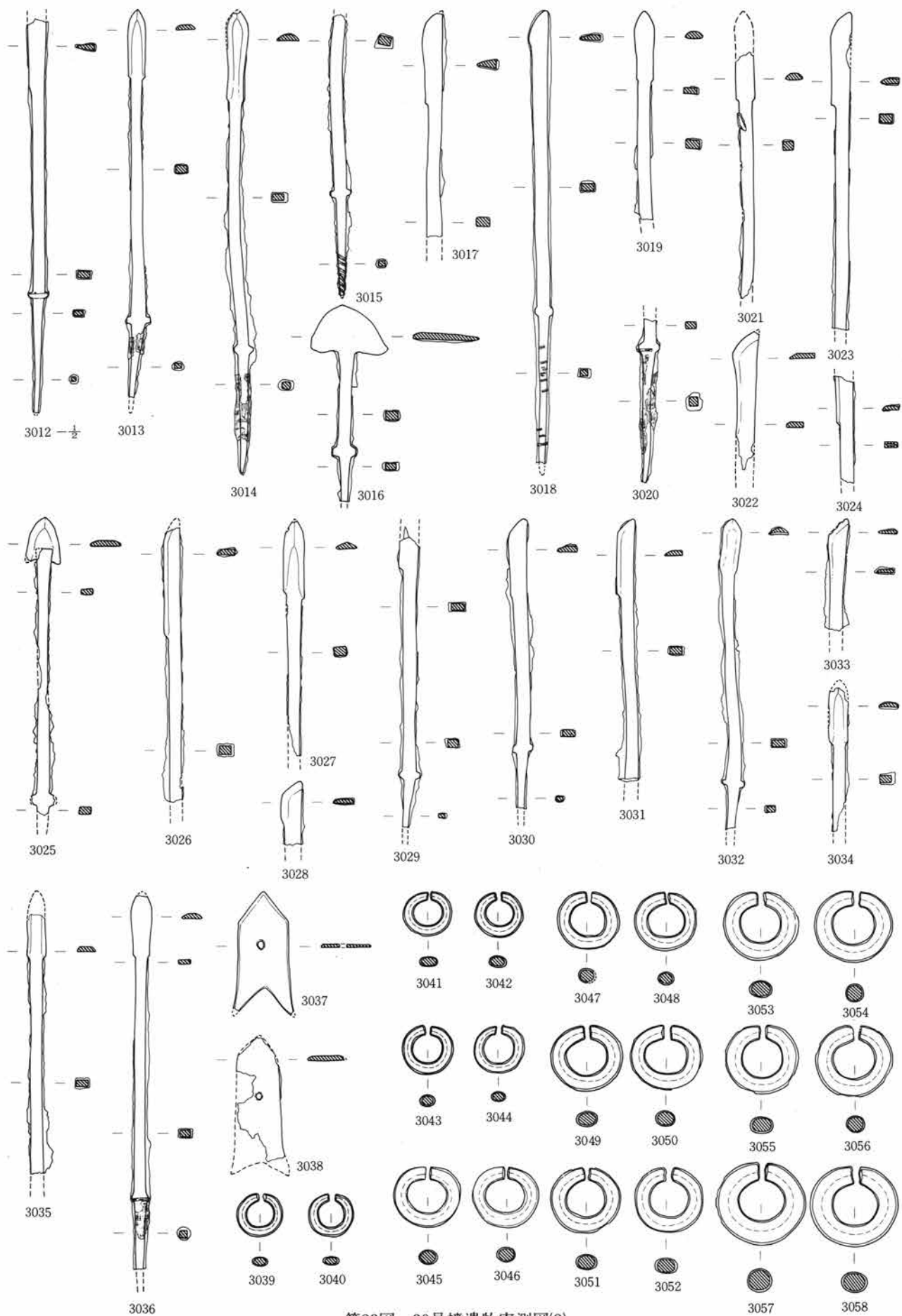


第81图 30号填石室实测图

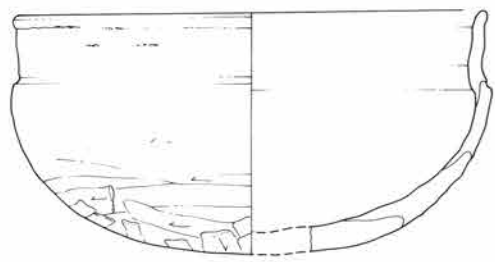
0 1 m



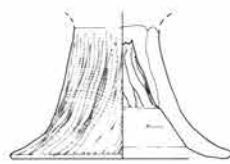
第82图 30号墳遺物実測図(1)



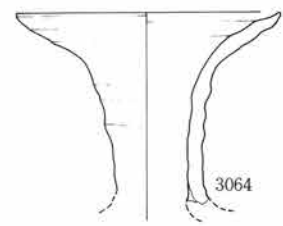
第83图 30号填遗物实测图(2)



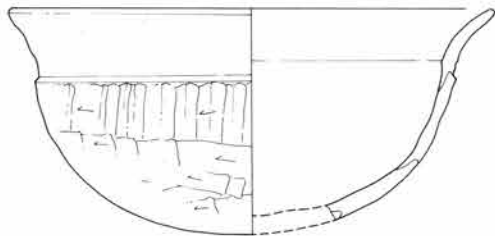
3059- $\frac{1}{3}$



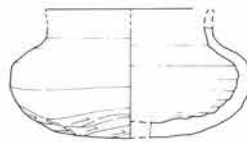
3061



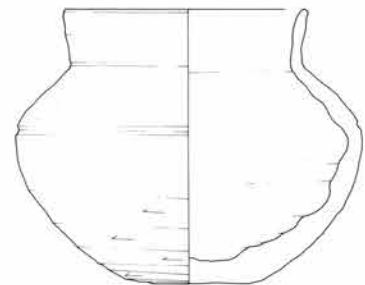
3064



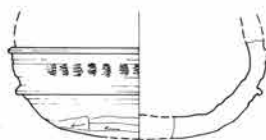
3060



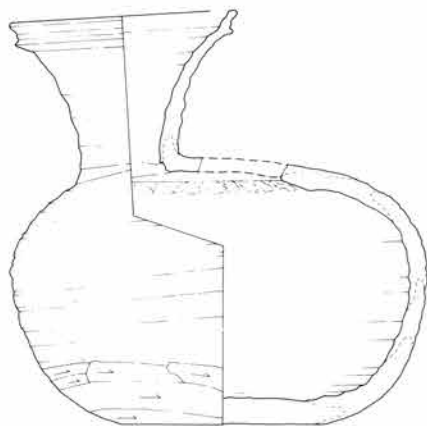
3062



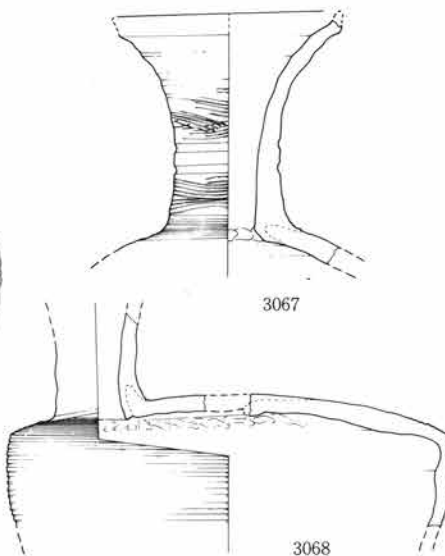
3065



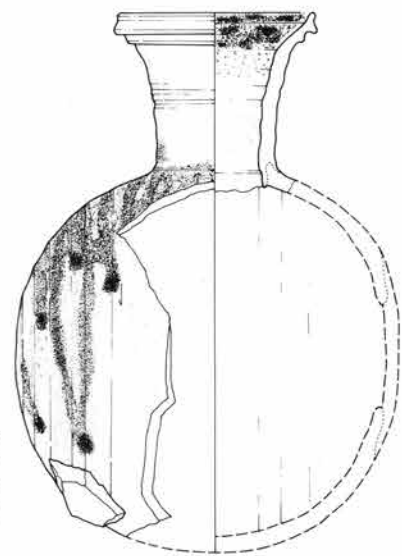
3063



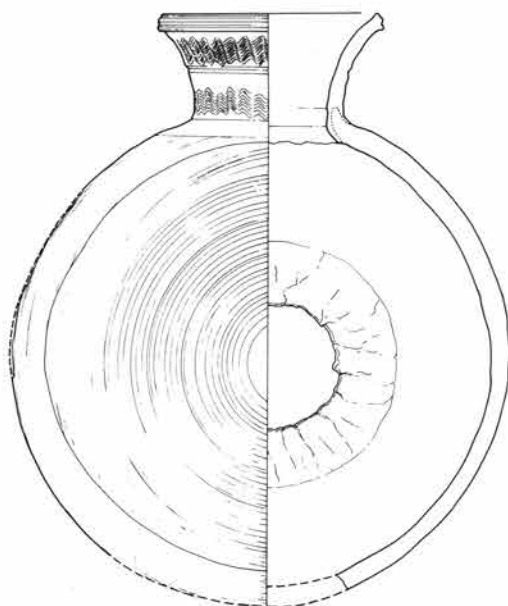
3066



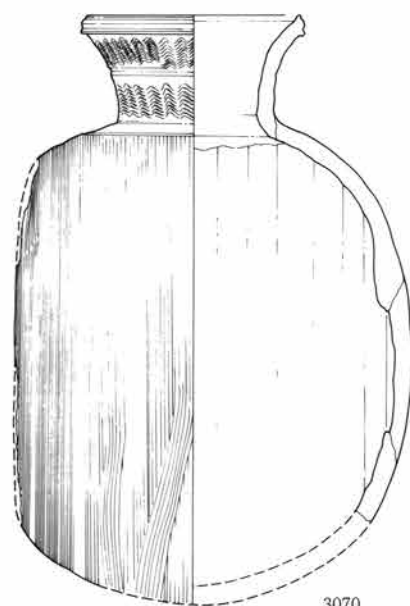
3067



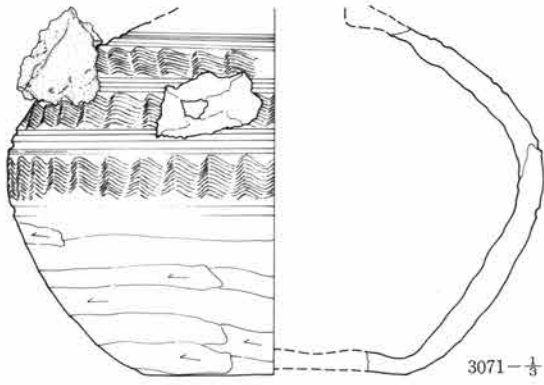
3069



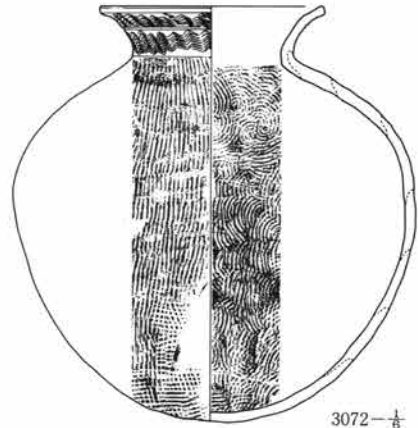
3070



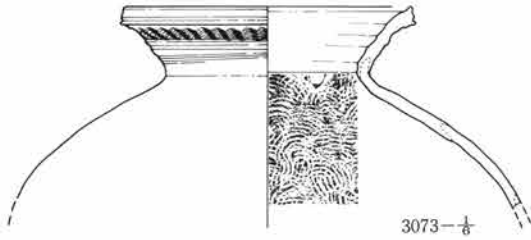
第84图 30号墳遺物実測図(3)



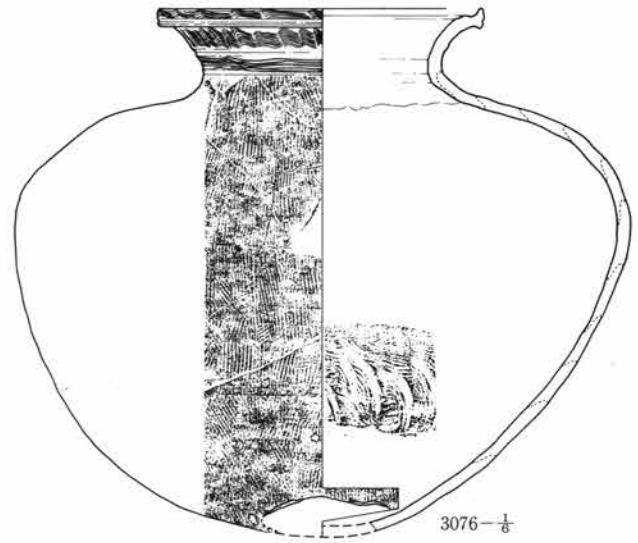
3071- $\frac{1}{8}$



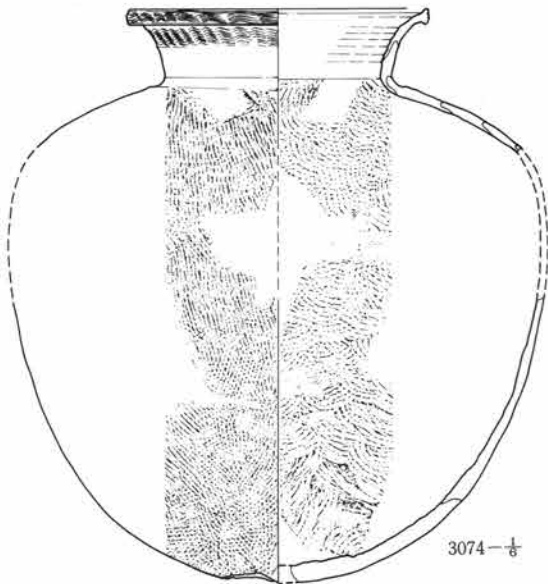
3072- $\frac{1}{8}$



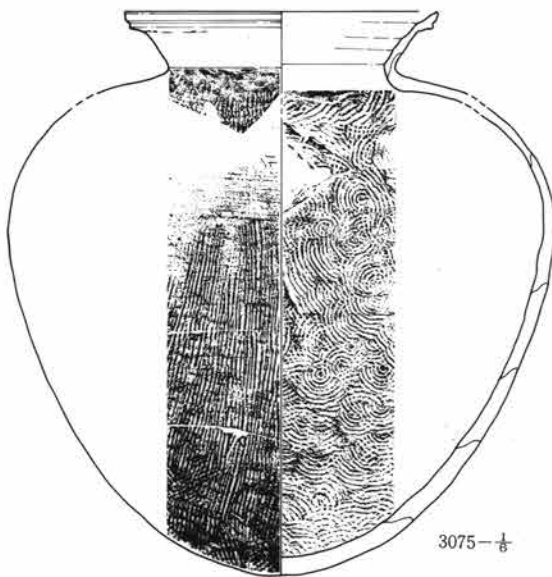
3073- $\frac{1}{8}$



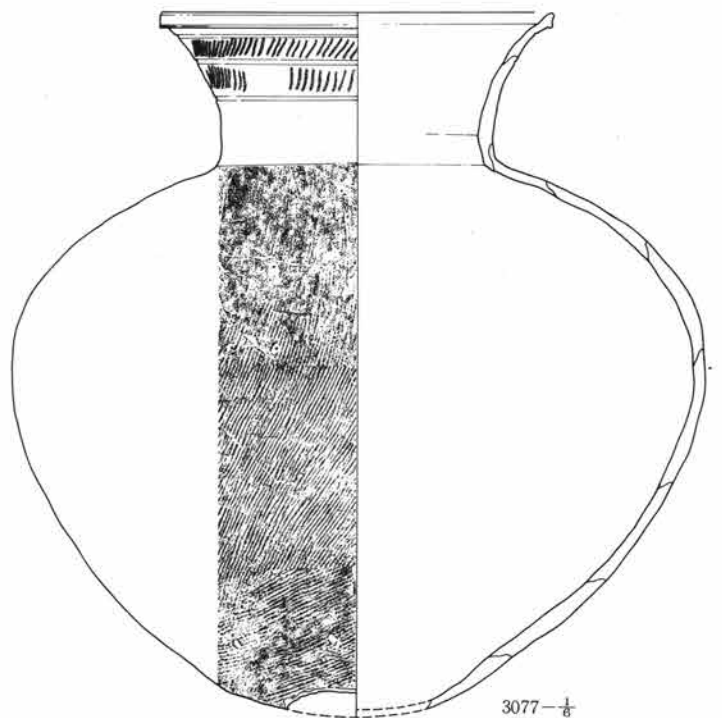
3076- $\frac{1}{8}$



3074- $\frac{1}{8}$



3075- $\frac{1}{8}$



3077- $\frac{1}{8}$

第85図 30号墳遺物実測図(4)

第 33 号 墳

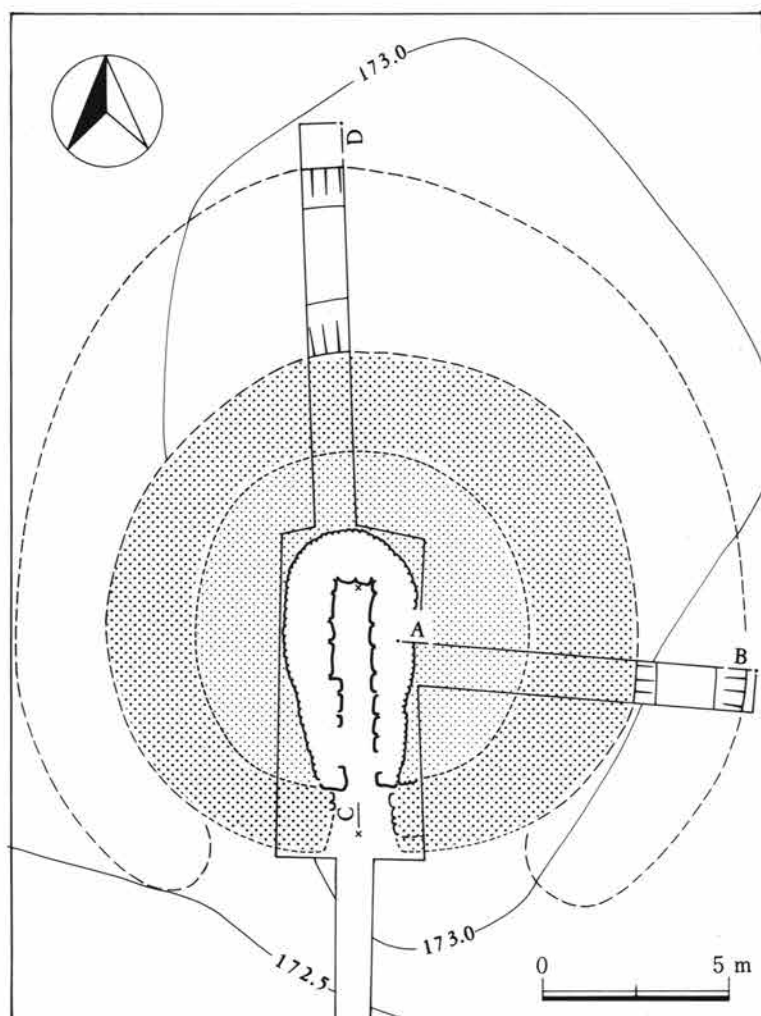
位 置 35号墳の南20m、63号墳の北15mに位置する。

墳丘と外部施設 調査時点においては南北径18m、東西径14.5m、高さ1m程の墳丘を留めていた。墳丘は構築時の地表面である黒色土層上に構築されている。周堀は、南の部分を除いた形で馬蹄形に圍繞していたようである。葺石は、石室の入口左右両壁、後述する石室の「掘り方」の範囲、墳裾に見られたが、墳丘全体に存在していた否かは不明である。墳裾の葺石は黒色土層上にあり、墳丘の根石と考えられる。この根石よりして、本墳の墳丘規模は径14.2mの円墳を推定できる。前庭を有しており、その規模は現状で奥行約0.9m、前幅約1.7m、奥幅約1.5mである。埴輪配列はない。

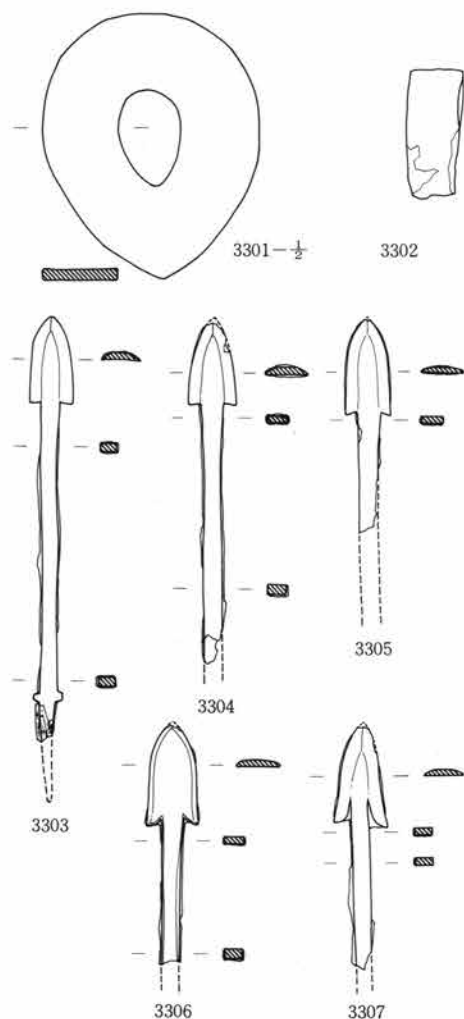
主体部の構造 主体部は、川原石を乱石積みにした両袖型の横穴式石室である。全長は5.66mで、石室は南に開口している。石室各部分の計測値は別表のとおりである。石室は、石室の形なりに黒色土層を60cm内外掘り下げた「掘り方」の中に構築している。「掘り方」の底部には、玉石が敷き並べられ、この上に奥壁、側壁の根石がのっている。石室の裏ごめは「掘り方」の範囲内で石積みをし、川原石を裏ごめとしている。玄室床面は、玉石の上に砂利を敷きつめてあった。石室床面と前庭底面のレベルは、ほぼ同一である。

出土遺物 石室内では、玄室の奥壁から60cmの左壁にそって鉄鏃9本及び鞘留1点、鏢1点が出土。

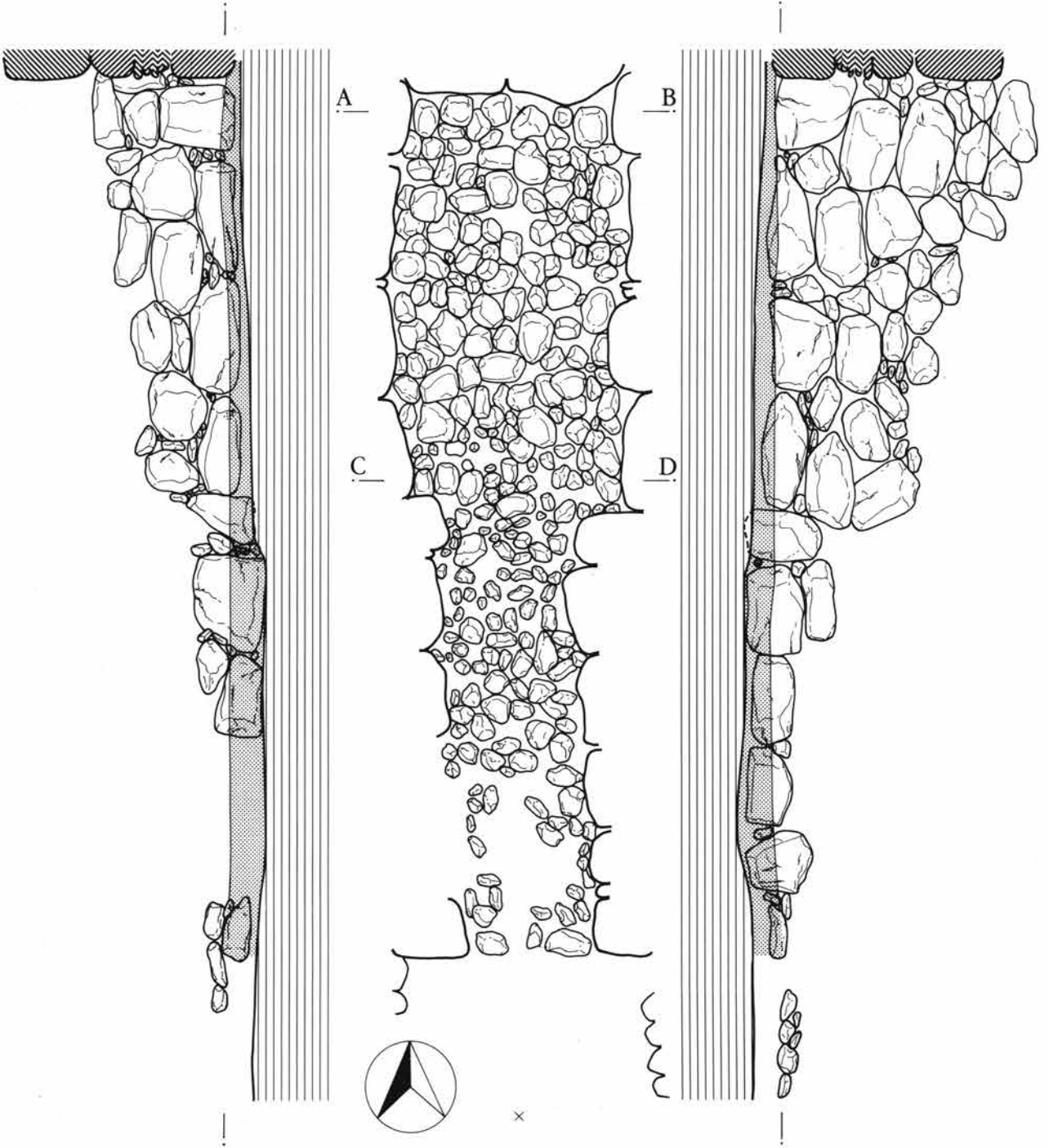
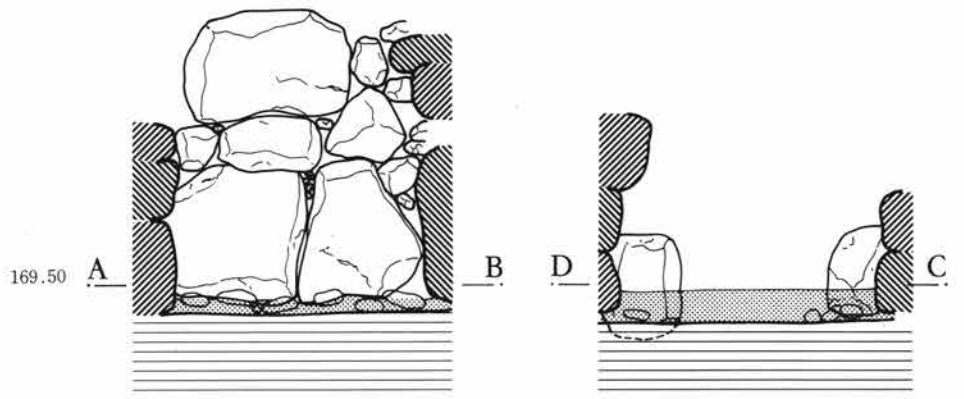
小 結 本墳の特色は、主体部が両袖型の横穴式石室であること、その石室は「掘り方」の中に構築されていること、前庭があること、埴輪配列が存在しないこと等があげられる。



第86図 33号墳 墳丘図



第87図 33号墳遺物実測図



第88图 33号墳石室実測図

第 35 号 墳

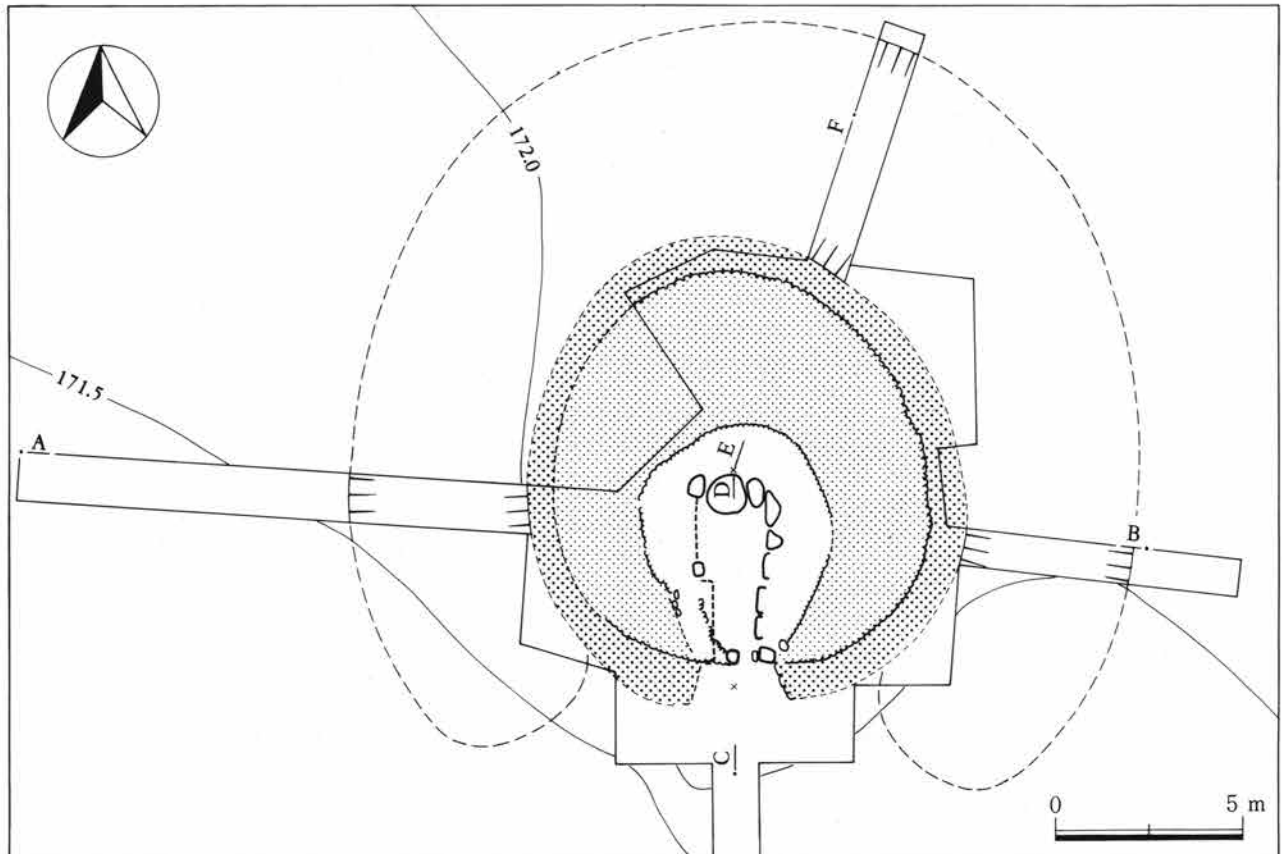
位 置 本古墳群の北西、60号墳の南約20mほどの所に位置する。

墳丘と外部施設 直径約10mほどの円墳。墳丘は約1.5mほどの高さを有し、保存は比較的良好であった。墳丘裾部は構築時の地表である黒色土層を約20cm程度に掘り下げて整形している。周堀は、トレンチ調査の結果では北側に巾4.5m、深さ35cm程度のものが認められ、南側では巾1.7m、深さ20cm程である。葺石は、西側部分では一部分耕作で抜き取られているが、ほぼ全周しているものと思われる。本古墳の葺石の直径は10.4mである。石室入口部分には「前庭」が設けられ、構築時葺石並びに石室裏込めと一体で設置されたものと思われる。前庭の規模は、西側部分は破壊されているが、東側部分では奥行約1.0m、前幅約2.5m、奥巾約1.5mほどの規模を有するものと思われる。

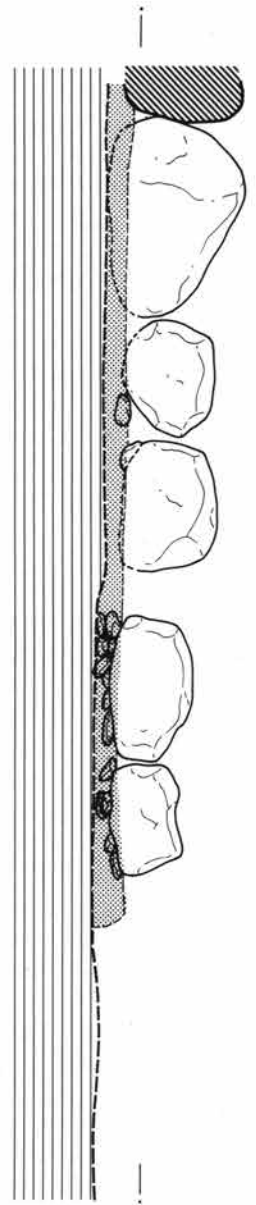
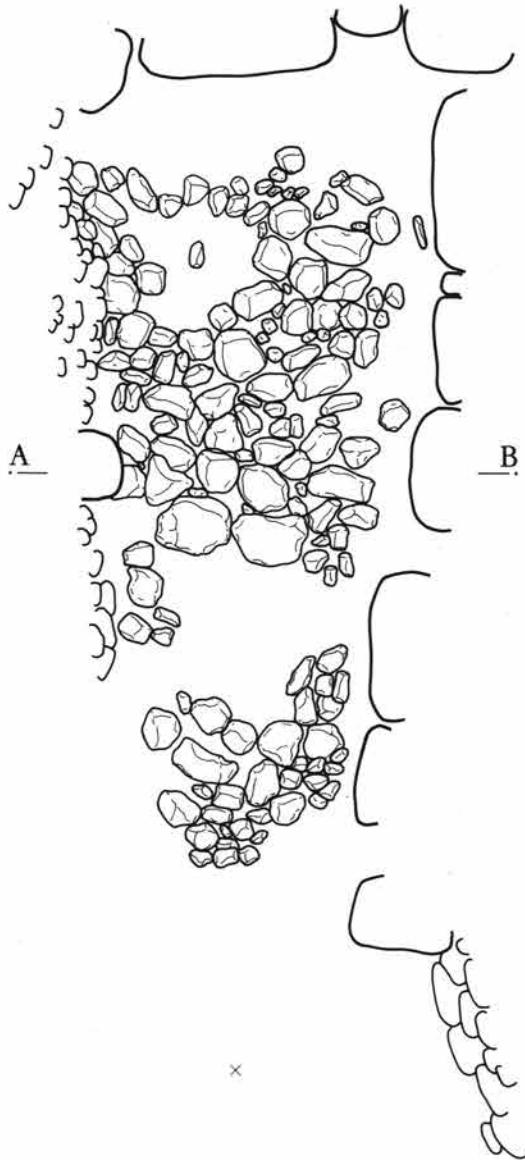
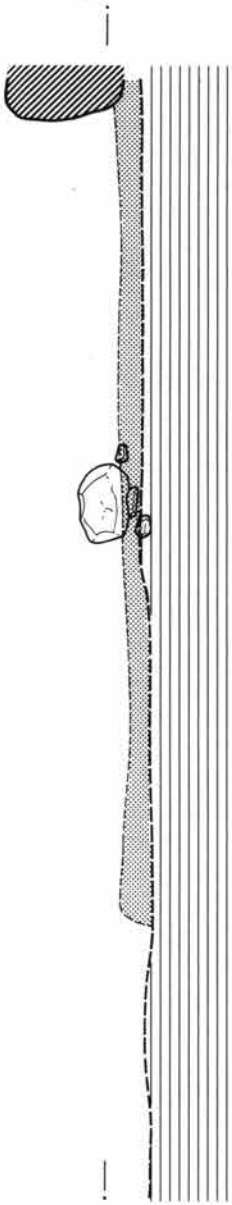
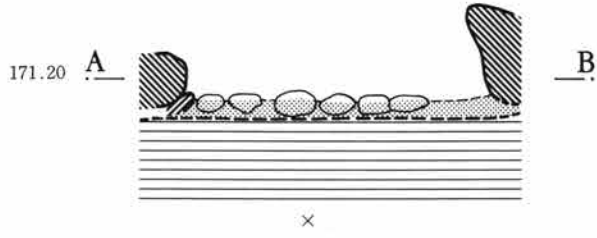
主体部の構造 90cm前後の比較的大形の川原石を平積みにした横穴式石室である。西側部分は耕作時に抜き取られ規模は不明であるが、両袖型の石室で、全長は4.65m、羨道部の長さ2.0m、玄室の長さ2.65m、奥壁の巾1.7mである。石室は、約40cm前後掘り下げた「掘り方」の中に構築されており、石室下部はこの中に納まる。側壁及び奥壁の裏には20~30cmほどの礫を巾1m前後配して裏込めとし、前庭部にかけて楕円形に配している。本古墳の北側トレンチ断面からみると構築過程は当時の地表面にほぼ同一レベルに土を盛り、裏込被覆の根石をセットする事から始め、裏込被覆の状態と盛り土の関係から4段階以上の過程が認められる。また裏込被覆では、石を順次下から積み上げたものでなく、石と石との間隙に土をつめている事が確認されている。

出土遺物 石室内部はすでに攪乱され、須恵器破片が若干出土しているのみである。

小 結 本古墳は比較的小形で、葺石がほぼ全周している事、小規模ながら前庭を有する事、また主体部にも大形の石を利用している事などの特色があげられる。



第89図 35号墳 墳丘図



第90图 35号墳石室実測図



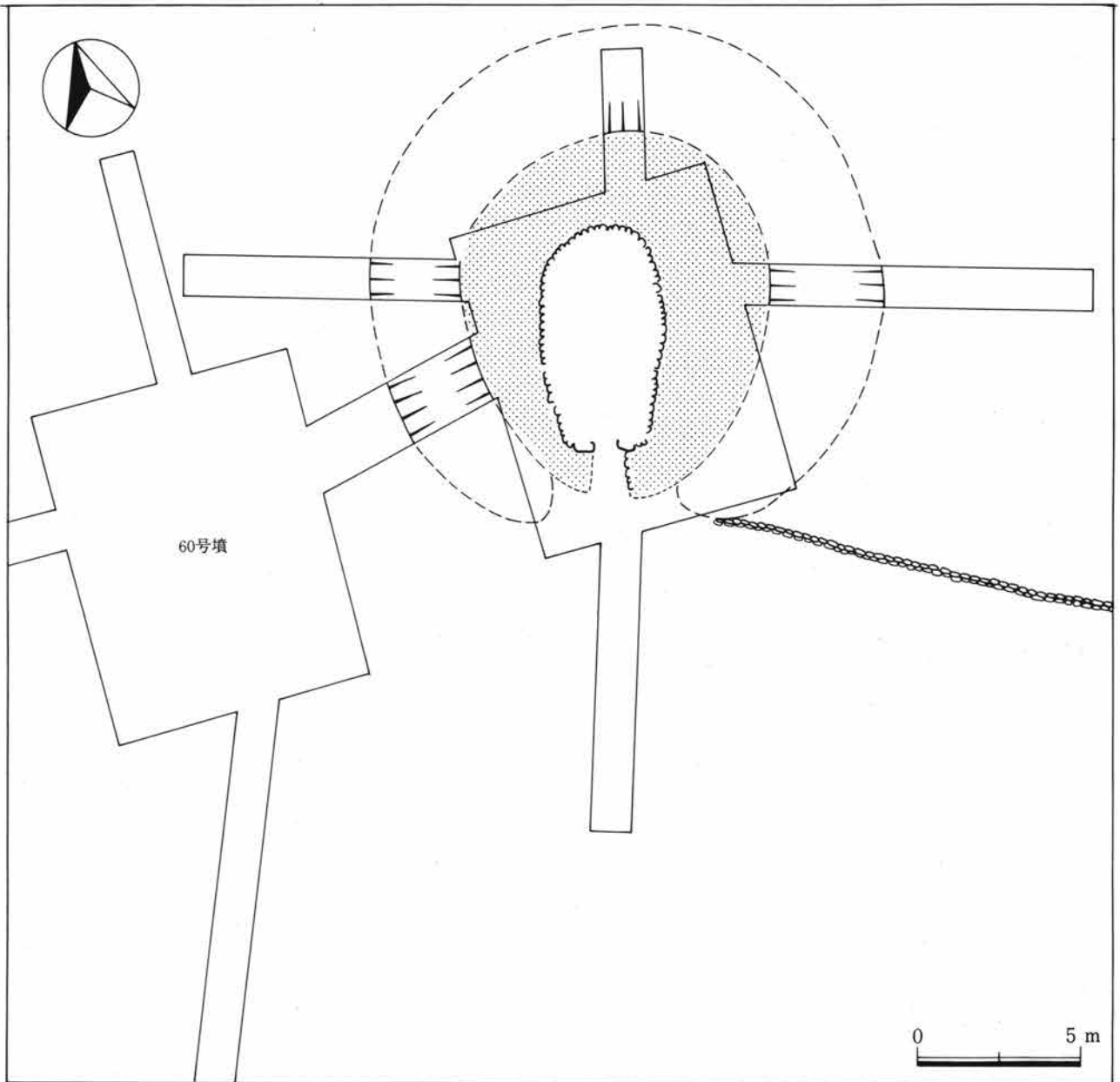
第 37 号 墳

位 置 60号墳の東に位置しており主体部の中心距離は15m弱を測る。

墳丘と外部施設 調査前の状況では径6m、高さ1.6mを測り円墳と考えられ墳頂部に天井石らしい川原石が1石残っていた。石室主体部へは8×8mの方形トレンチを設定し東に3.5m、西に60号墳直結トレンチを、更にもう1本その北側へ設定した。主体部前面には7mのトレンチ北側へは道路に左右されて2.5mにとどまった。

東トレンチでは周堀は上幅3.8m、深さ70cm掘り込んで船底状を呈する。西トレンチでは上幅2.6m、深さは70cmを測り船底状の断面を呈する。南トレンチでは周堀の存在は認められない。北トレンチでは周堀への傾斜は確認出来るものの短かすぎて全体は追求できなかった。本古墳は馬蹄型を呈する周堀を持ち石室前方を開放している。

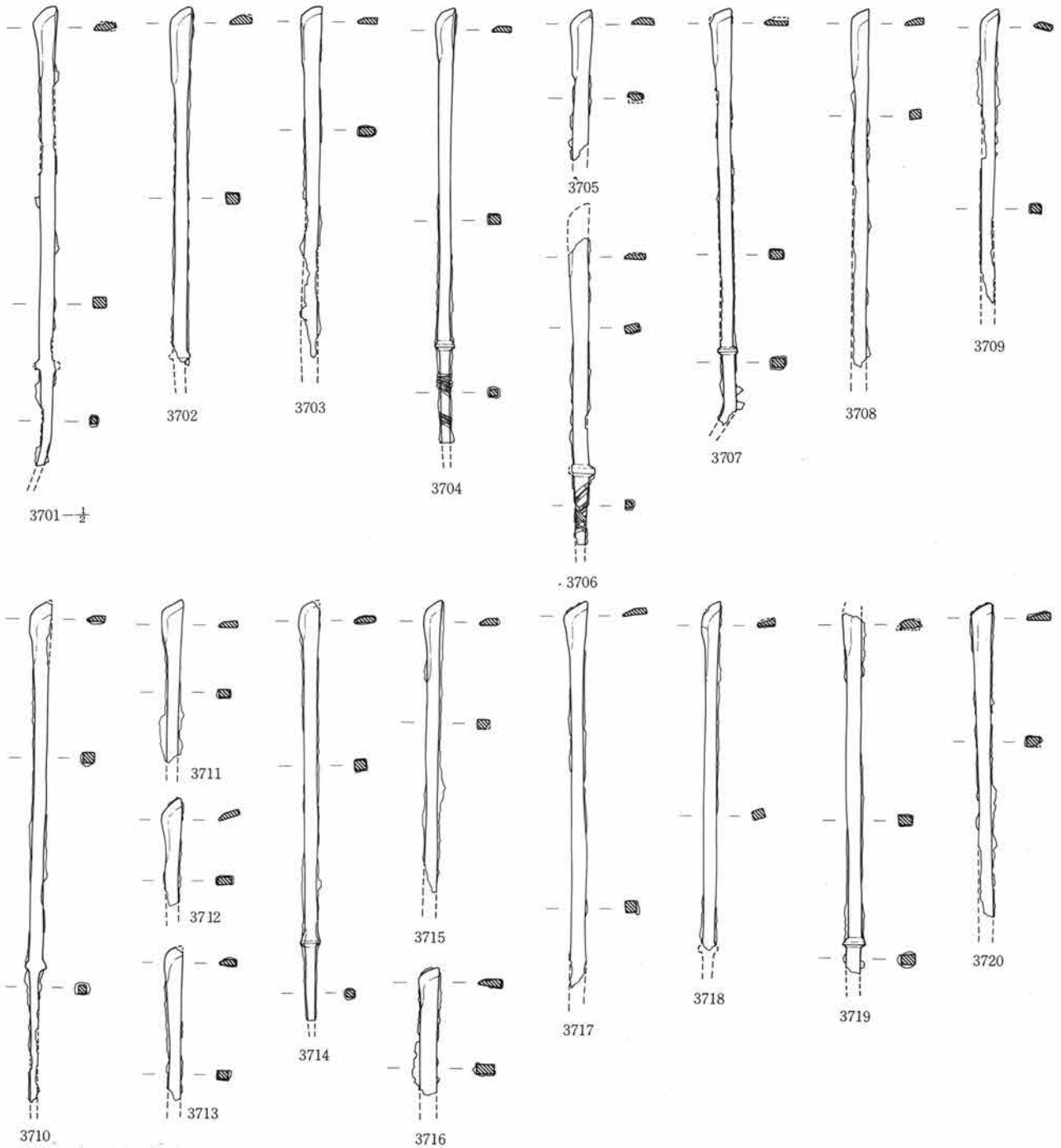
主体部の構造 主体部は前庭を持つ両袖型の横穴式石室で自然石乱石積である。石室の構築は先づ旧表土面を東西3.1m、南北8.3mの長方形に50cm掘り下げ玉砂利で地業したのち壁石根石を配置している。奥壁は安山岩1石が残り、80×110×60cmを横積みにし、間に川原石の長大なものを小口に詰めている。裏込めの被覆は奥壁が倒れない程



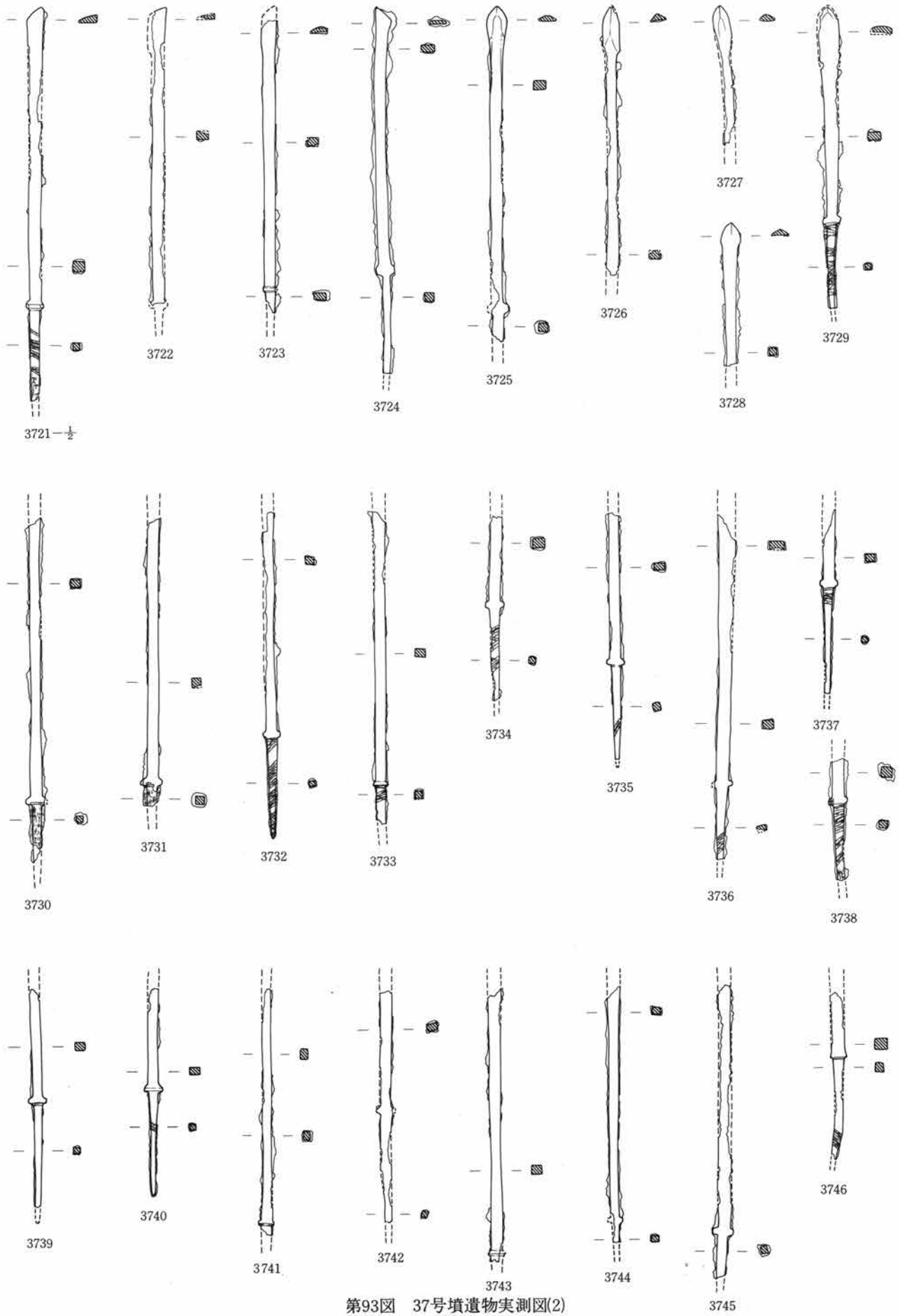
第91図 37号墳 墳丘図

度に砂利を詰めたのちに「掘り方」との間に土を充填している。側壁にはそれぞれ30×60×40cm大の川原石を横積みにしたのち上段1mあたりまで同様な組み方をし、それ以上は川原石の20×40×50cm大の石を小口に組んでいる。尚、床面は掘り方より20cm上にあり羨道と玄室の高低差はない。閉塞石は玄室側に川原石の小口石組みが残存しており入口側には拳大の石が無造作に詰め込まれていた。

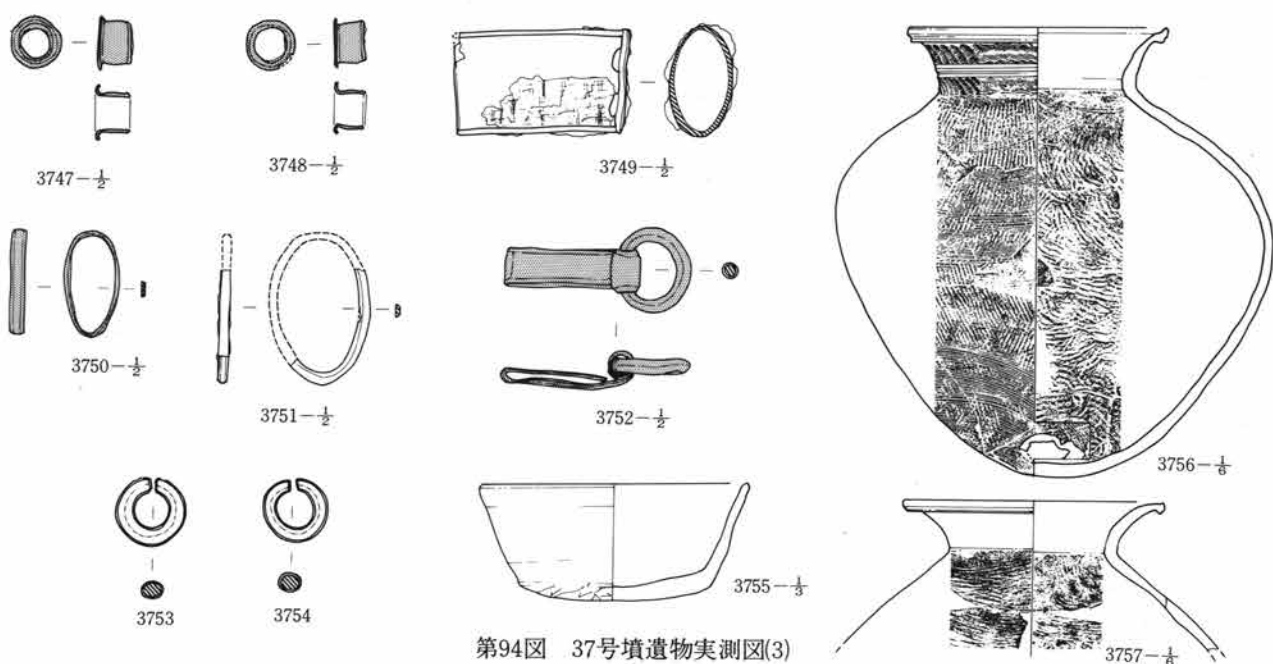
出土遺物 天井石の崩落していた玄室左壁中央部に出土の遺物は集中していた。その他須恵器の大甕類は墳頂部に供献されていたと考えられ大破片となって散乱していた。出土した遺物をまとめると以下の如くである。鉄鏃46本で、両刃、片刃の棘筈被長脚鏃に分類される。刀装具として鴉目1組、鞘尻金具1、責金具2、足間佩裏に取りつく小環付佩用金具、金環2、須恵器甕3が出土している。



第92図 37号墳遺物実測図(1)



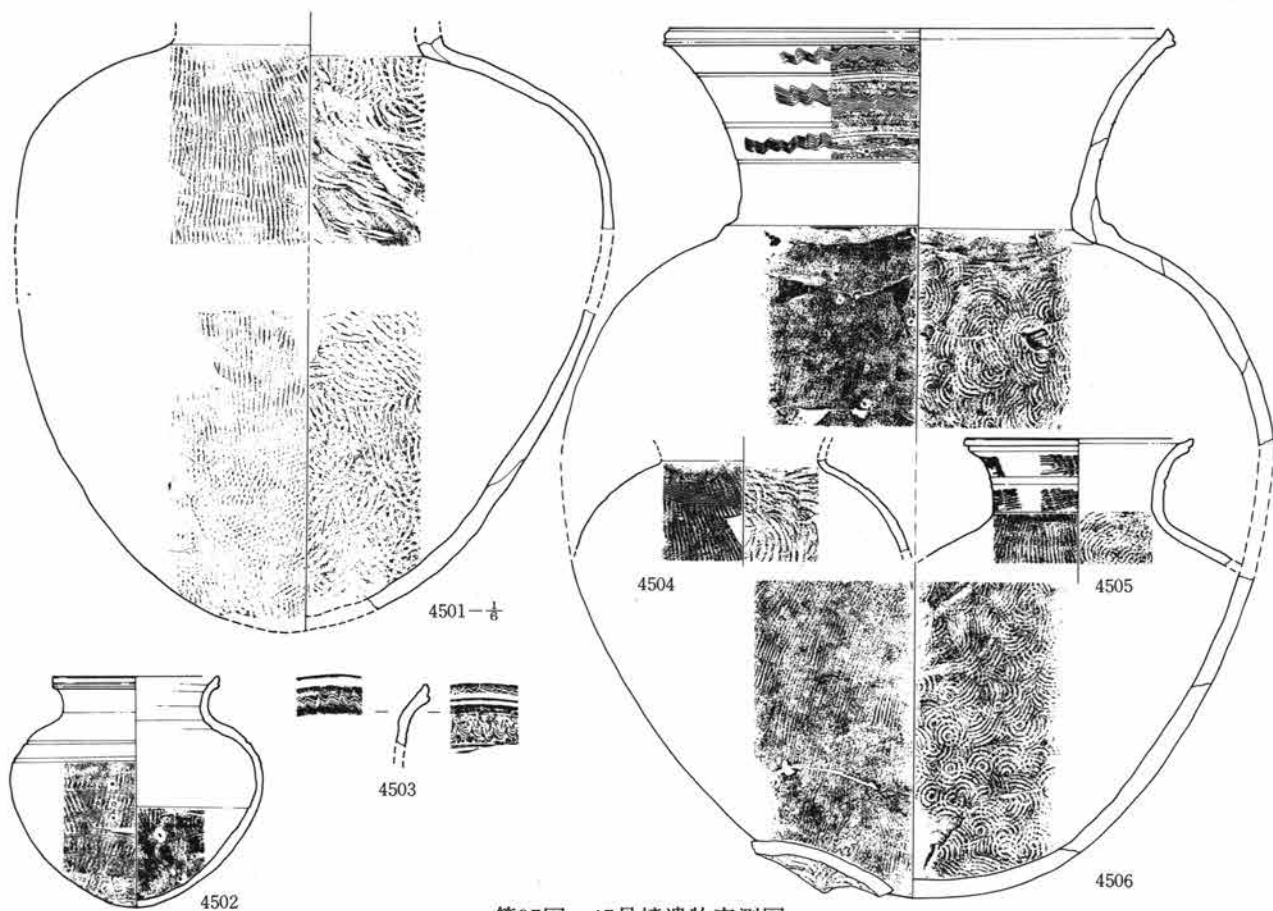
第93图 37号墳遺物実測図(2)



第94図 37号墳遺物実測図(3)

第 45 号 墳

古墳群の西北グループに属する。東に61号墳、西に35号墳の中央に位置する。保存された古墳であるが、墳頂部より須恵器甕類が散乱しており、採集品として図化した。長頸壺1、小形甕4、大形甕1である。



第95図 45号墳遺物実測図

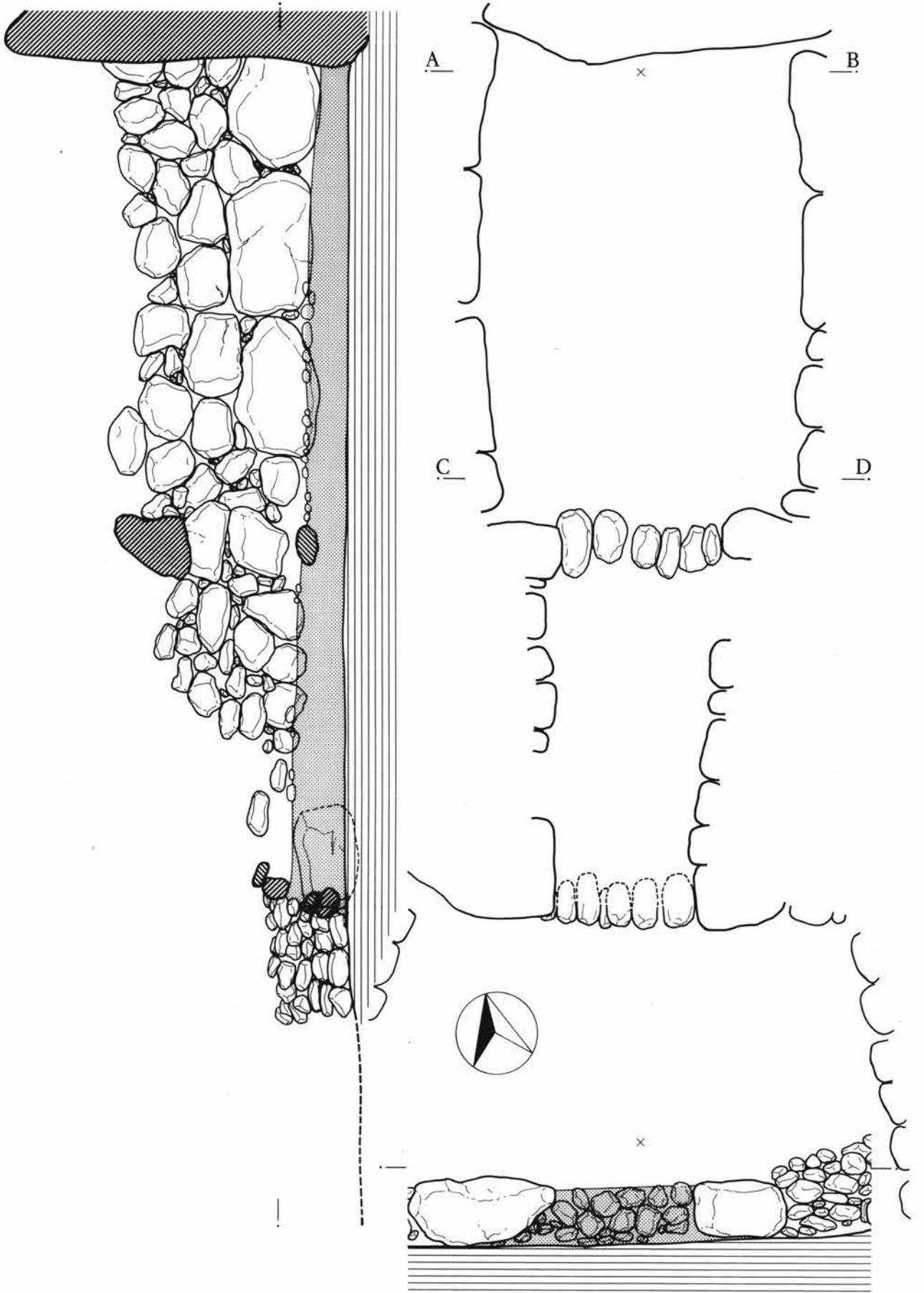
第 49 号 墳

位 置 古墳群中最大規模の53号墳の東側に接して位置する。分布的にみてもその中核的な位置に占地していることがわかる。

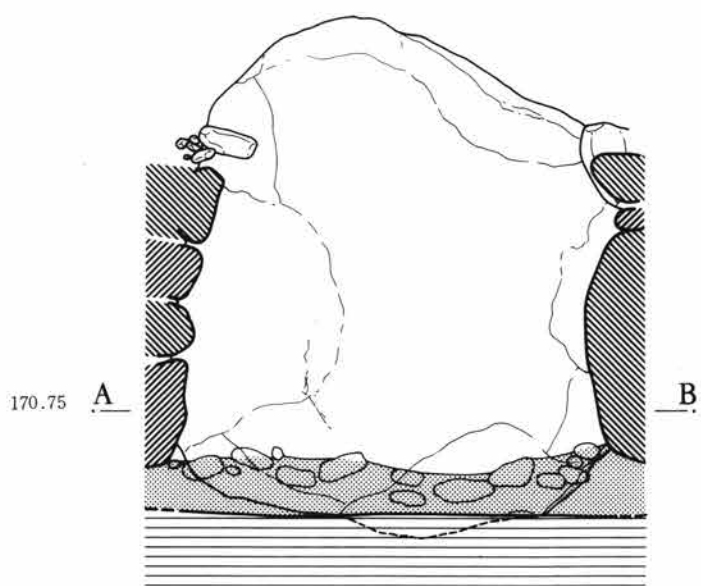
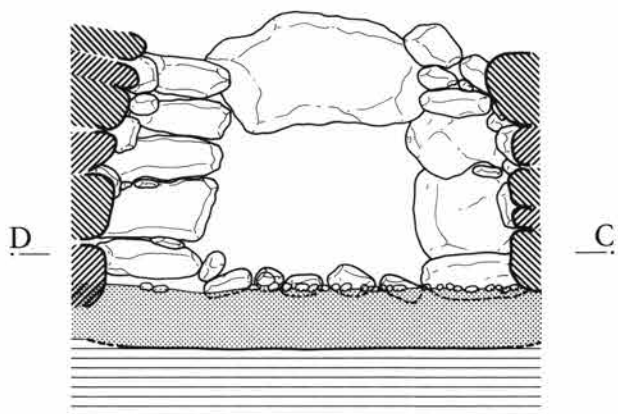
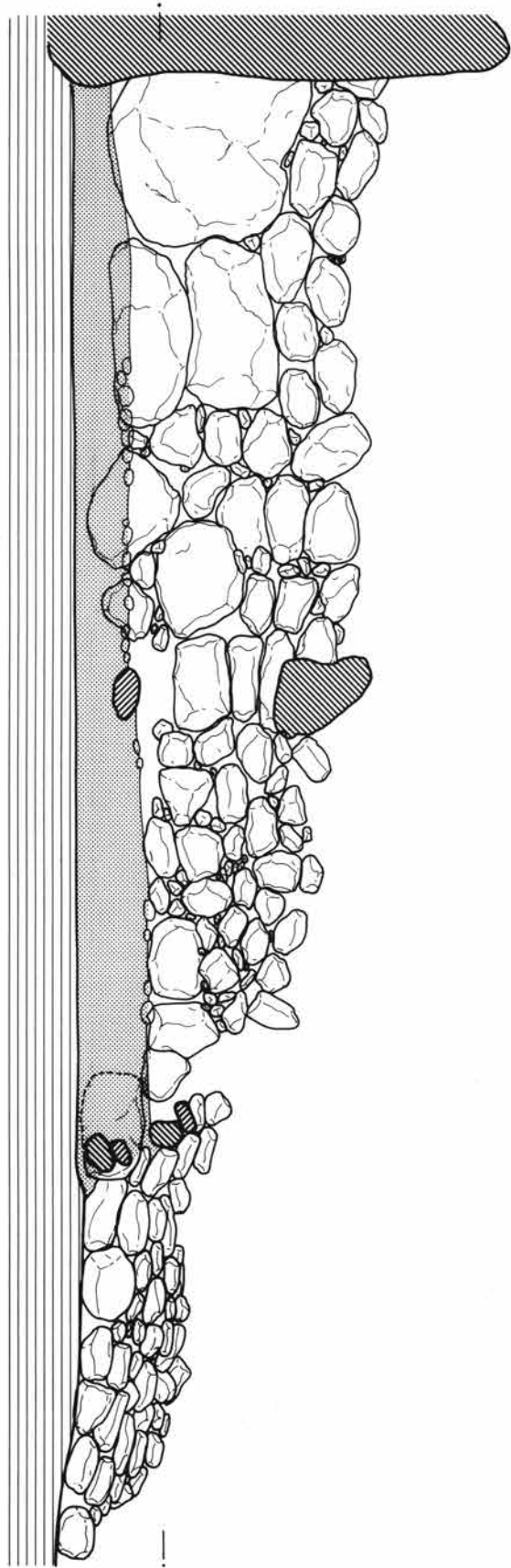
墳丘と外部施設 調査前に本古墳は墳丘南側前面を横切る農道によって寸断され、崩落部分は墳丘より転落した大量の葦石で新しく石垣が築かれ1辺8×9mで高さ1.5mの台形に墳丘が変形していた。このため最高点に1石だけ露出していた奥壁と考えられる石を中心に発掘区を設定することにした。西トレンチについては53号墳との新旧の切り合いを検討するために相手墳頂部に向けて設定した。東、南、北方向トレンチは磁北に合わせて設定した。東トレンチは墳丘上面に浅間山A軽石が攪乱土層として厚く堆積し、墳丘の旧形状を元に復することは難かしい。上段の葦石列は上層からの崩落石も多く現位置を保つと考えられるものはこのトレンチ内では確認不可能であった。西トレンチの53号墳との切り合い状態は周堀の比高差の違いと鍵層となるべき浅間山B軽石の不連続、トレンチ途中に存在した後世の石垣による攪乱などによって両者の新旧関係は、土層観察では追求不可能となってしまった。しかし平面調査では、53号墳の周堀の囲繞に対して、やや意識的にその幅を狭めているかのようにみられる。墳丘内側の立ち上がりは旧表土面を削り出してその斜面に下段の葦石を据える。上段の葦石は下段より2.5m石室寄りに据えそれより高さは80cm上に位置する。南トレンチは耕作土によって旧表土面は全く存在しない。地形は自然に流れる南への緩傾斜面で周堀と考えられる人為的な痕跡は認められない。北トレンチは旧表土面を削り込んだなだらかな周堀が認められている。深いところで50cmを測る。墳丘盛土な内側周堀立ち上がり部分から積み上げている。この部分に下段の葦石根石が配置され、さらに上段の根石はこれより石室寄りに2.5m、高さ50cm上に据えられている。盛土の残存高は1.9mを測り、土層断面からは石室構築にかかわる裏込め土層と墳丘成形仕上げに必要な土層の2種類に大きく分層することができる。これらのデータをもとに遺存状態良好な古墳と判断して、全面発掘を実施した。その結果墳丘径28m(下段葦石根石)の円墳で、上段葦石での直径21mを測ることがわかった。周堀は53号墳と切り合うことなくむしろ幅が狭められているかのようなことや、東側部分では明瞭な立ち上がりを持つことなどから53号墳が先行して築造され、その後49号墳が続いたものであろうと推測された。しかし全体配置からみると頭初より築造位置は決定されていたかの感強い。前庭部は石組施設で良好に遺存していた。埴輪の樹立はない。

主体部の構造 自然石(川原石)と安山岩の割石を使用した両袖型の横穴式石室である。石室全長は6.46mを計り本古墳群中では中形である。石室主体部の遺存状態が良好なため、かえって「掘り方」構造の検討は充分にできなかったうらみが残る。しかし奥壁裏側の敷石面と旧表土面との比高差は50cm以上あることから「掘り方」は存在する。玄室奥壁は1石で安山岩の偏平な割石の平の面を壁に使う。玄室左右壁の根石は奥壁寄りが大きく手前に小さく使っている。いずれも横積みである。2石以上は小ぶりの石を小口積みに重ねてゆく。玄室の袖は右壁3段、左壁4段を横積みにして重ねてゆきその上に天井石を構築する。羨道部でも壁石根石は横積み、その上は小ぶりの石を小口に積みあげてゆく。羨道部入口は壁面側に小口積みとして重ねて積む。石室床面の構成は、羨道部入口と玄室入口にそれぞれ主軸方向に小口積みに重ねた石を配し、その間に砂利を敷きつめて床面をつくる。羨道部にこの石組とは関係なく閉塞の石組が存在する。前庭石組の袖は地形傾斜に沿って根石を小口に据え、さらにその上に同様な石を積み上げてゆく。構築当時の高さは確かめることはできなかった。

出土遺物 墳頂部に置かれていたと考えられる大甕類、前庭部の墓前祭祀に使われたと考えられる杯蓋、短頸壺、長頸壺、平瓶、提瓶などの須恵器の小形器種と土師器杯が出土している。玄室内は盗掘に使用したと考えられるジョレンが奥壁寄りに柄が折れて発見され、難をのがれた副葬品も全体に散乱するような状態で出土している。それらを列挙すれば以上の如くである。馬具、鉄鏃、金銅製品、鉄製品、刀子、金環である。羨道部の閉塞石を排除した床面から杏葉が出土している。これは追葬時における片付け作業によるもので、当時の埋納遺物の全てが石室内に残存するのかどうかを考える資料である。

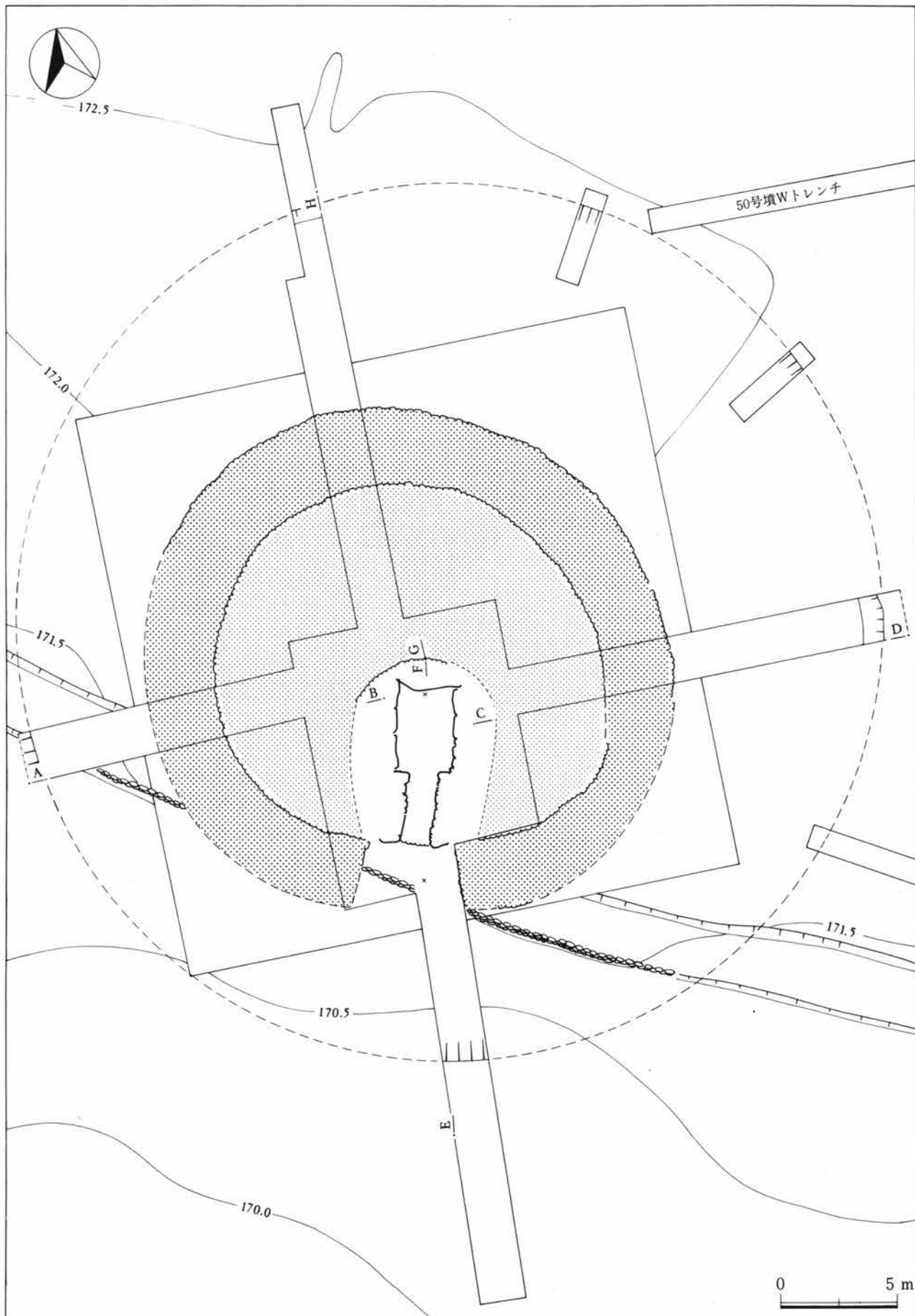


第96图 49号墳石室実測图(1)

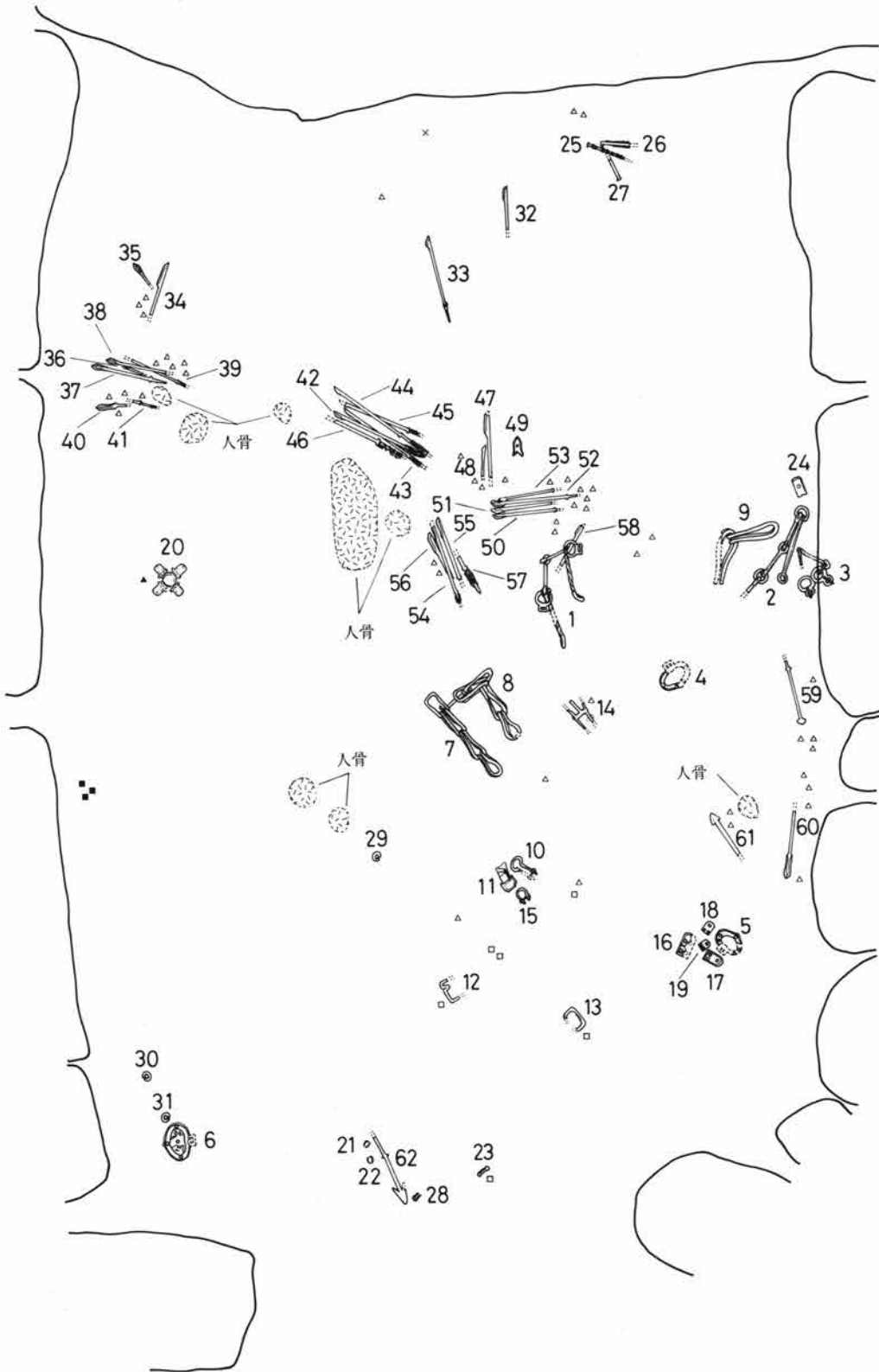


第96図 49号墳石室実測図(2)



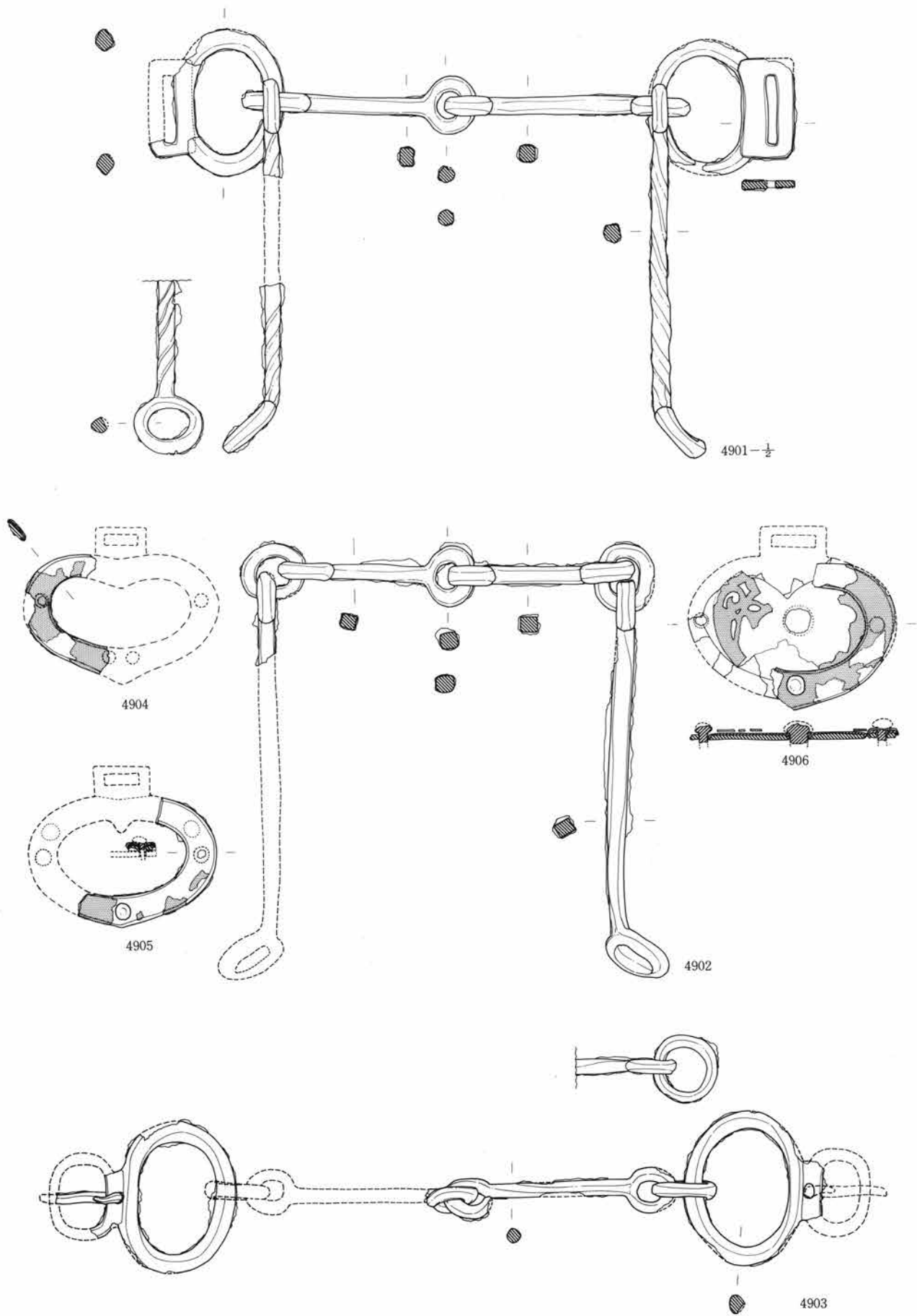


第97図 49号墳 墳丘図

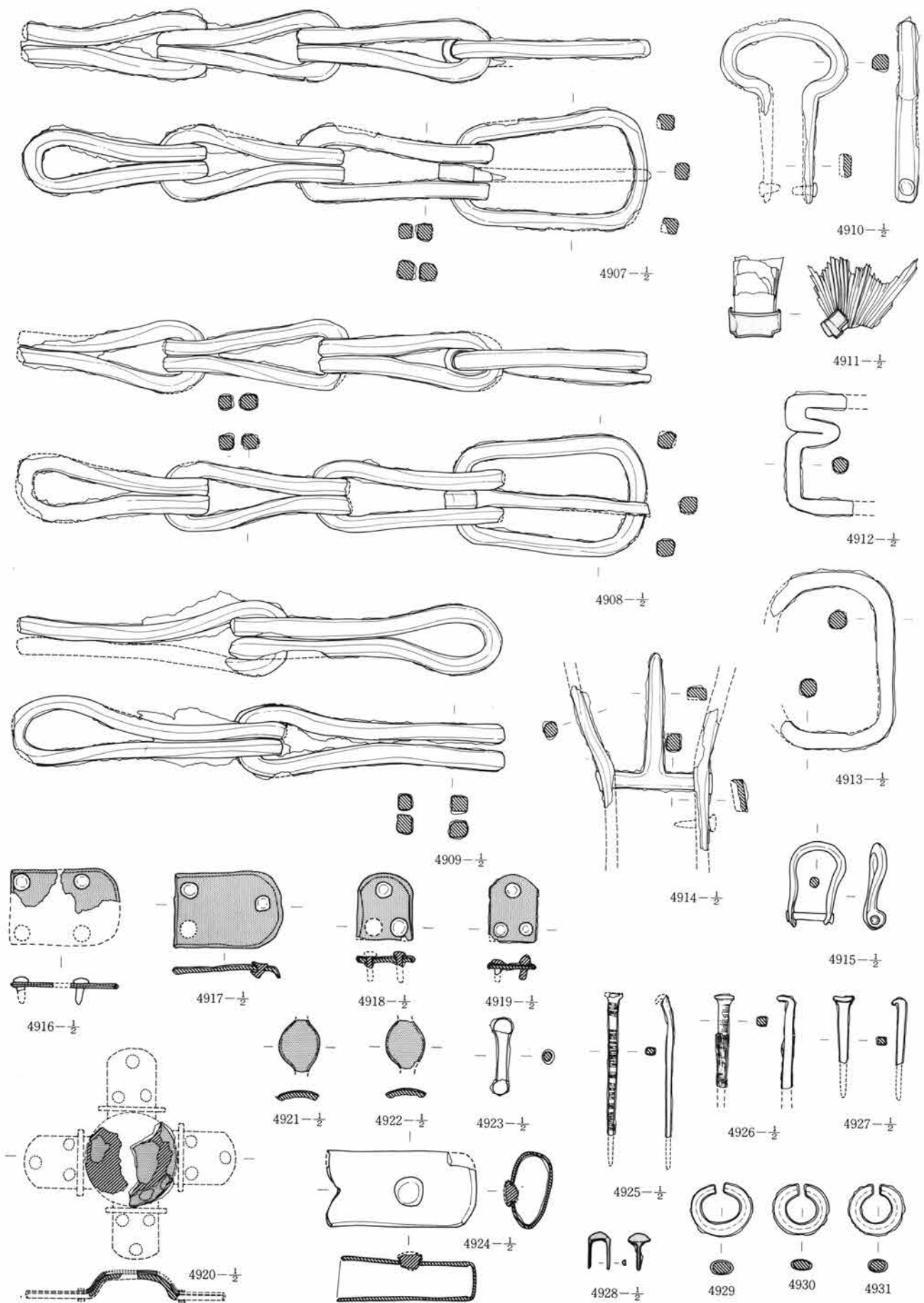


第98図 49号墳遺物出土状態図

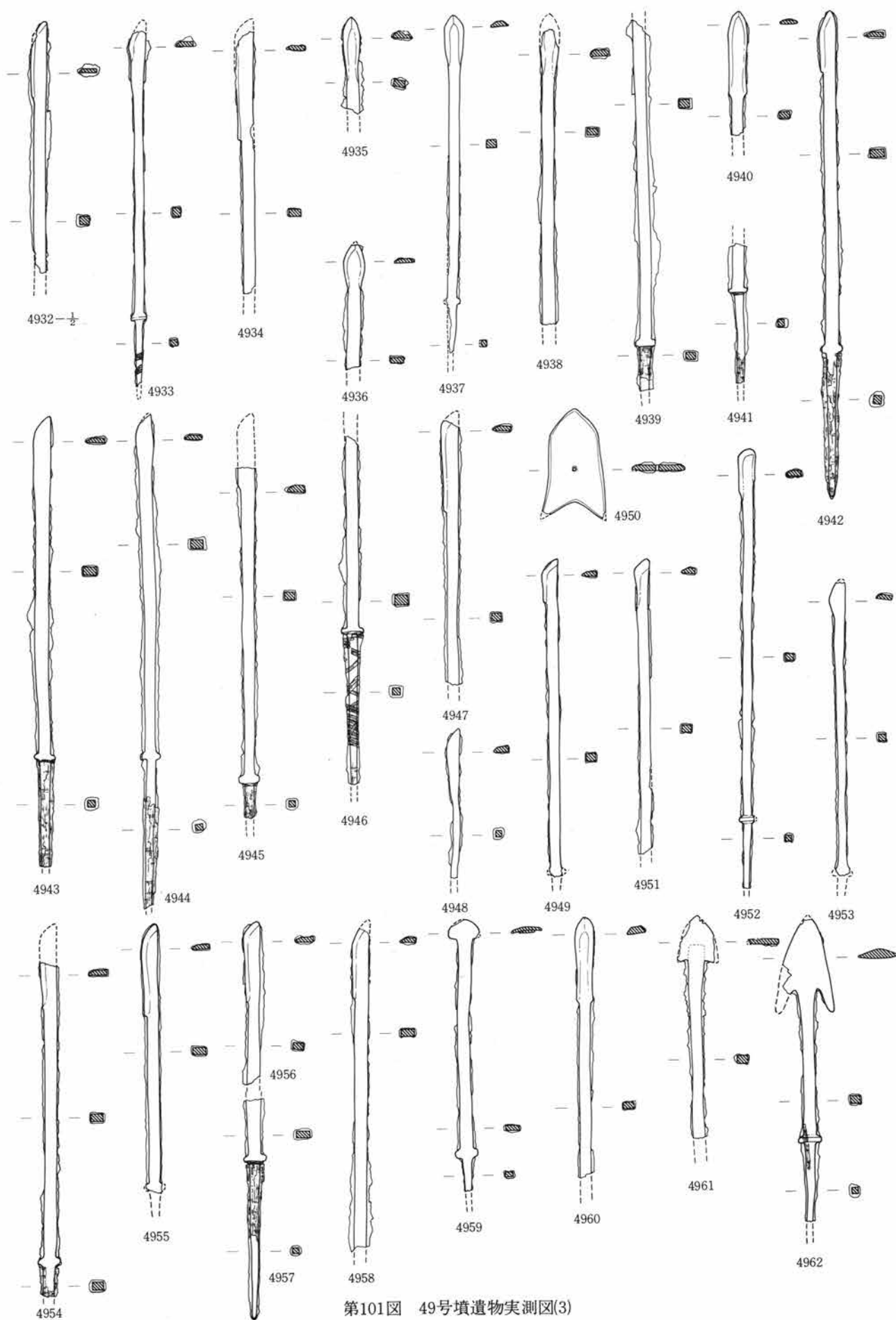
0 50cm



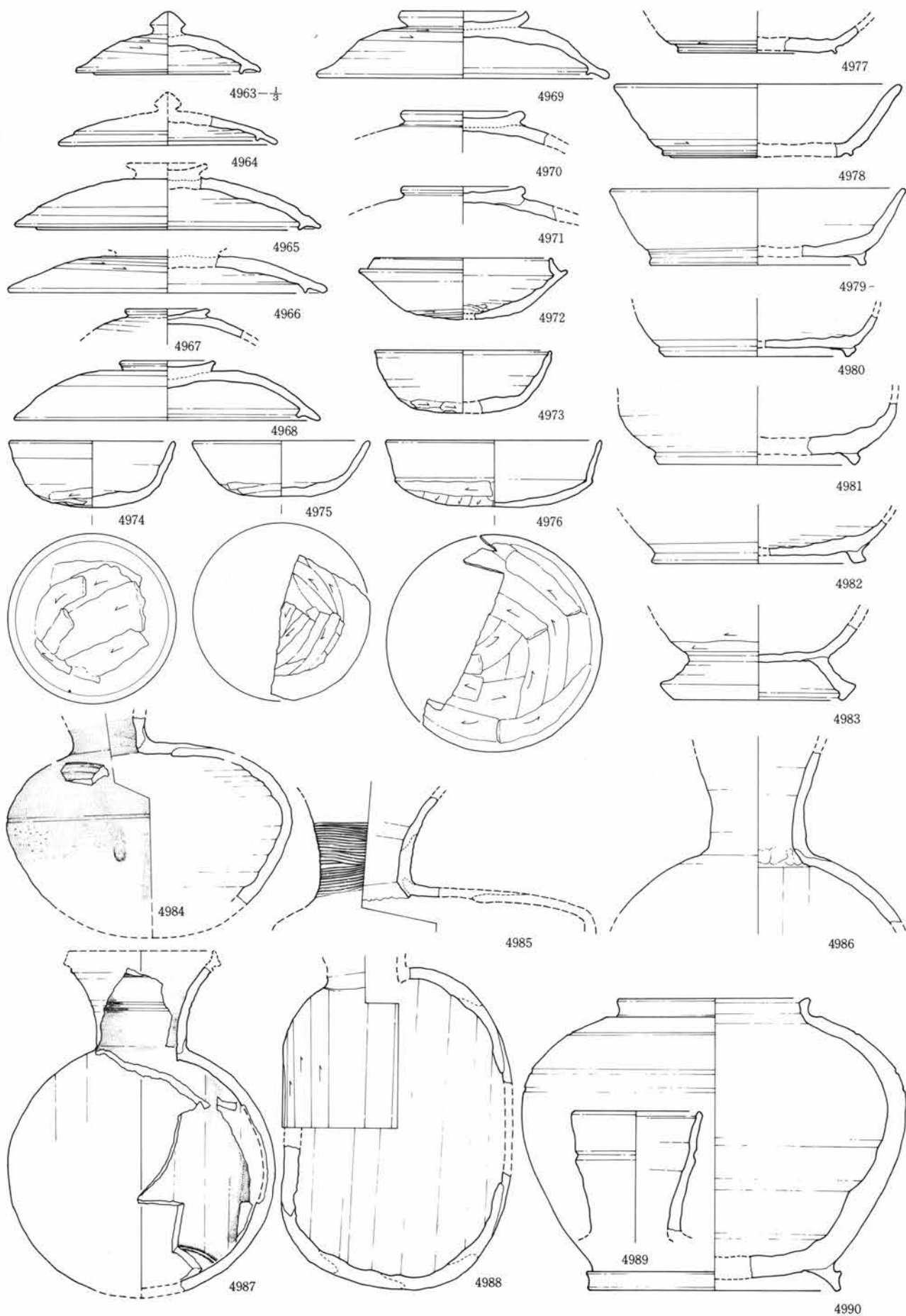
第99图 49号填遗物实测图(1)



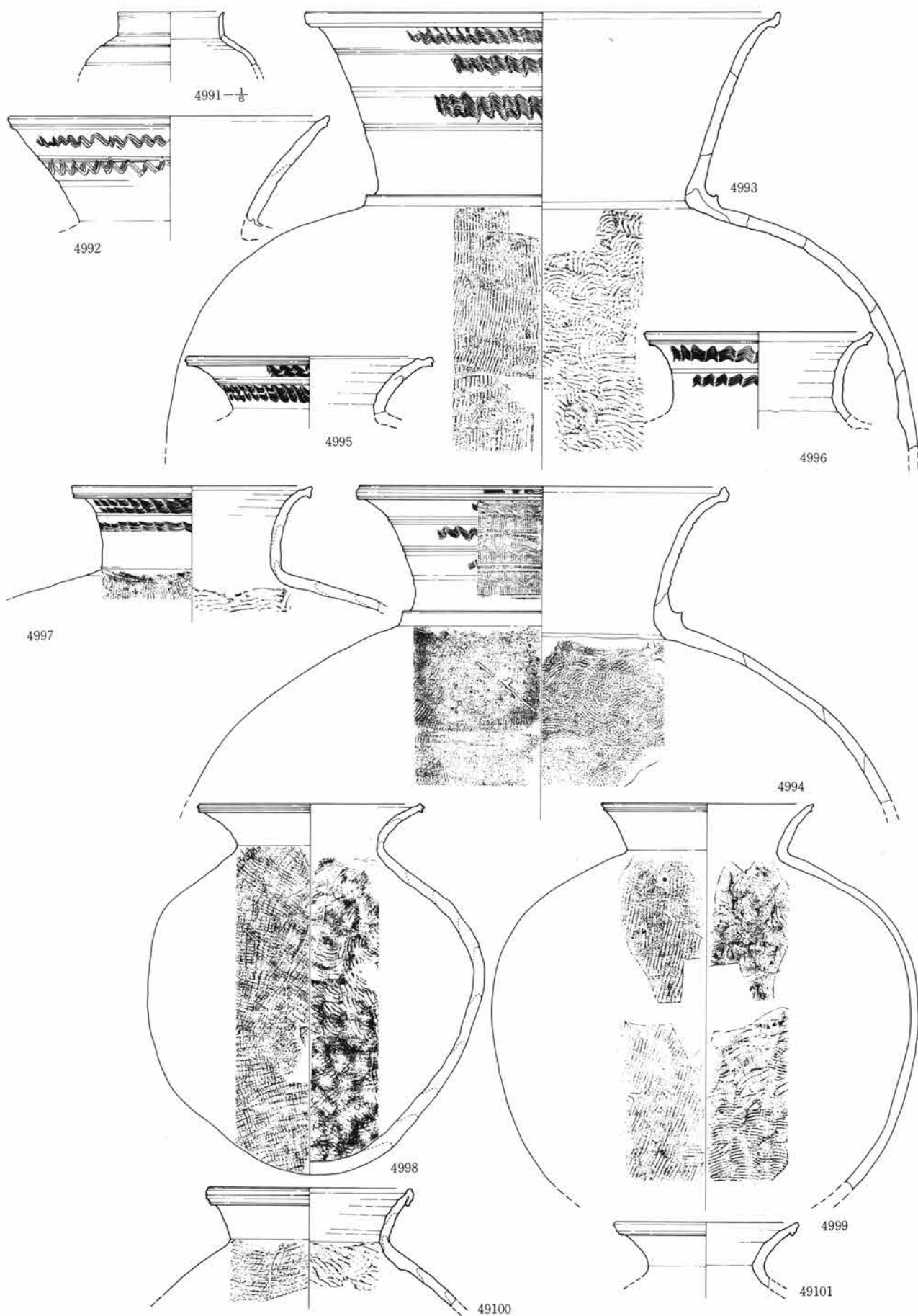
第100图 49号填遗物实测图(2)



第101图 49号墳遺物実測図(3)



第102图 49号墳遺物実測図(4)



第103图 49号墳遺物実測図(5)

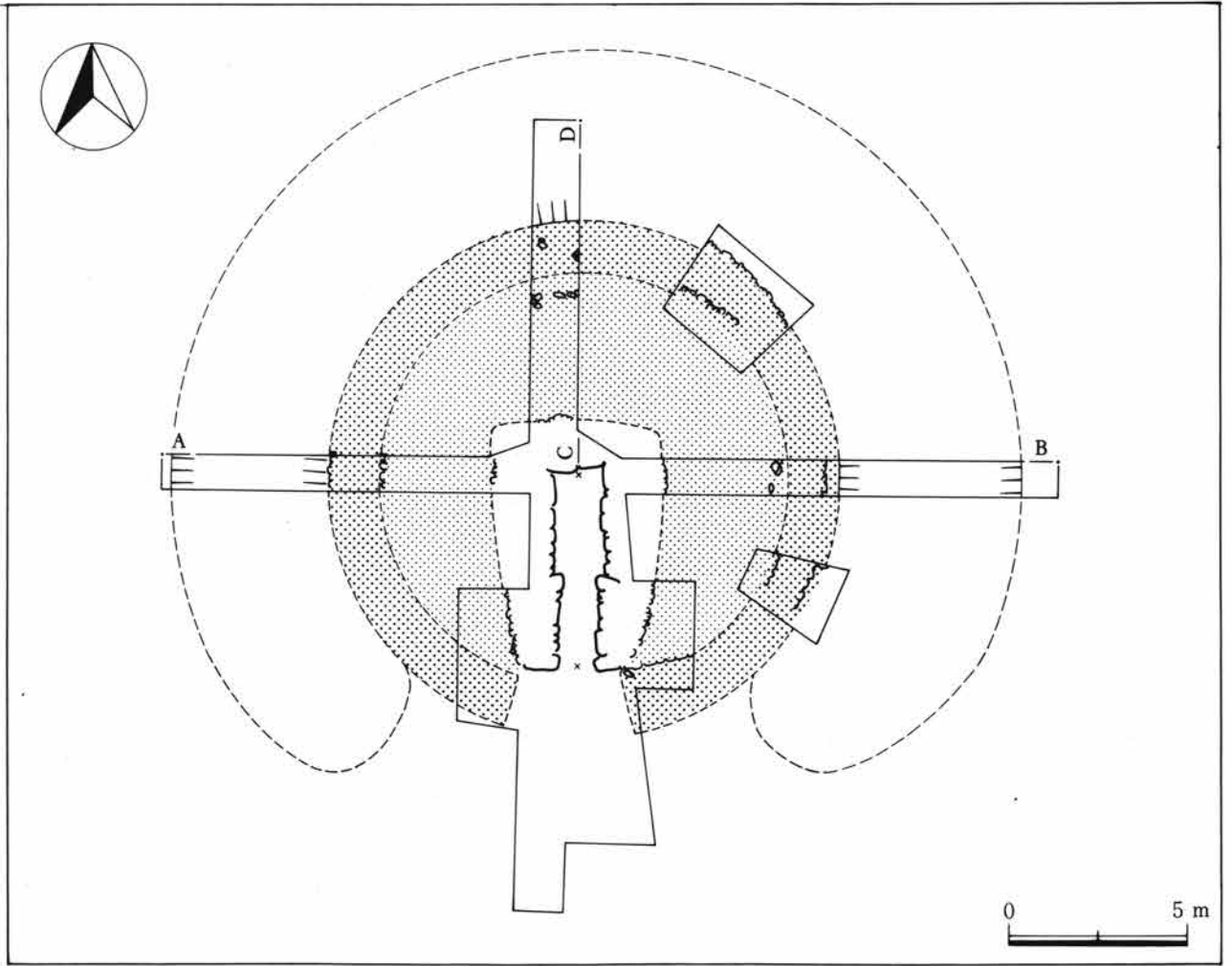
第 50 号 墳

位 置 古墳群東北端に近いグループに属する。南西方向30mの位置に49号墳が位置している。後背をめぐる44号、46号、47号の各古墳は未調査のまま保存された。

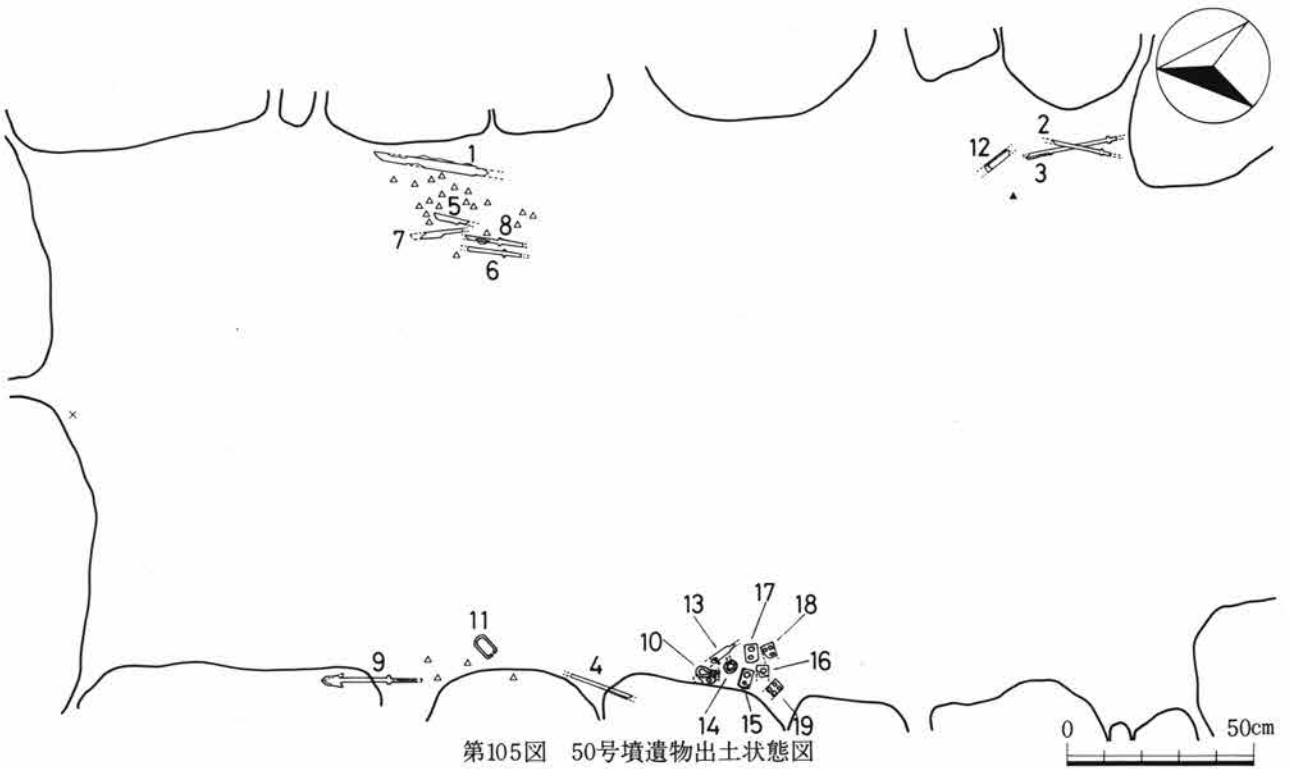
墳丘と外部施設 調査前は周囲より1m強の比高差を持つ偏楕円形を呈する小丘状の形をとどめ、頂上部に天井石と考えられる大石が1石残されていた。この大石を中心に磁北を基準として東西南北4本のトレンチを設定して墳丘規模と周堀の確認調査を実施した。その結果、残されていた墳丘は攪乱がひどく、天井石と考えていた石も現位置を保ってはいなかった。しかし上下2段の葺石の存在が認められ、その圍繞状態を調査するべく、地形的にも安定している東南及び東北方向へトレンチを基準に拡張区を設定した。その結果葺石の方向と石組状態をある程度確認することができた。各トレンチの土層断面の観察結果は次のようである。東トレンチは旧表土面を削り込んで周堀を作り、盛土して墳丘を形成している。葺石は2重にめぐり下段は周堀に移行する斜面に貼るように並ぶ。とりたてて下段を根石として大ぶりの石を使用はしていない。上段の葺石は旧表土より30cmの厚さに盛られた土中に根石部分は据えられている。周堀幅は旧表土面からの削り込み上幅で6mを測る。西トレンチでも東トレンチに近い断面を呈するが外側立ち上がり部分は確認していない。周堀の深さは旧表土面から約90cmで、他のトレンチより30cmほど深い。南トレンチでは下段の葺石が前庭石組と連続するものと考え石室前面を拡張したが周囲の攪乱がひどく確認することができなかった。北トレンチでも周堀外側立ち上がりについて、トレンチが短かいために確認することができなかった。残存する墳丘盛土の厚さは60cmを測る。各トレンチとも浅間B軽石層下に大量の葺石の崩落が認められた。以上の結果をまとめると本古墳の墳形は円墳で墳丘規模は上段葺石で11m、下段葺石根石部分まで、すなわち墳丘径は14.3mを測る。周堀外側立ち上がり径は23mである。前庭部施設は確認できなかったものの葺石の流れから存在の可能性は大である。埴輪の樹立はない。

主体部の構造 石室主軸全長5.68mの自然石を使用した両袖型の横穴式石室である。石室は旧表土面を石室形状に近いバチ形の「掘り方」に掘削する。奥壁寄りでは約50cmを測る。この平坦面に比較的大粒の砂利を敷きその上に壁石根石を置く。玄室の奥壁は平の面を使用した石を2石を左右に立てて根石としている。裏込め被覆の石積も用石の関係から1mと厚く支える。その上に乗るべき壁石は欠けてない。両側壁は奥壁寄りに高さ1.5mほど残り羨道部近くでは根石を残すほどに数は減る。側壁は50×70cm大の大石を横積みに根石として据えてその上に小ぶりの石を小口積みに乗せる手法である。袖石は小ぶりの石を安定の良い横積みに重ねて3石を残す。羨道部は玄室と同様、根石に大ぶりの石を横積みに据えその上に小ぶりの石を乗せている。羨道入口は石室内側に小口積になる通有の積み方である。敷石面では羨道入口と両袖部分に長さ40cm大の長方形で偏平な石を石室主軸方向に小口積に2石重ねて柵石とし、その間に砂利を詰めている。さらに玄室床面上には小砂利の粒の揃ったものが綺麗に敷かれていた。天井石は1石も残っていなかった。裏込被覆は石室の形状に相似し、主軸方向で長さ7m、玄室での幅5m、羨道部での幅3.5mのバチ形を呈する。

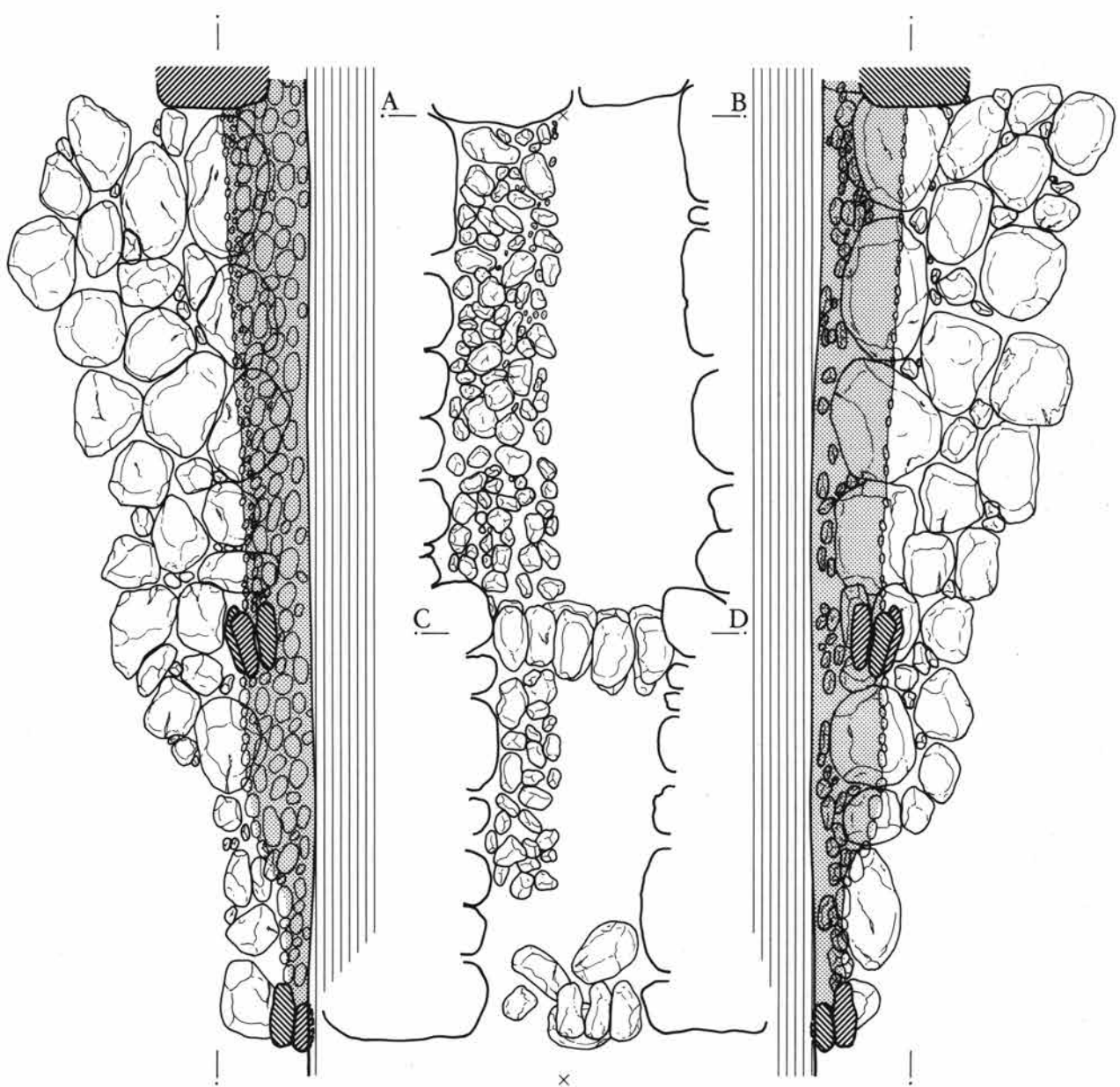
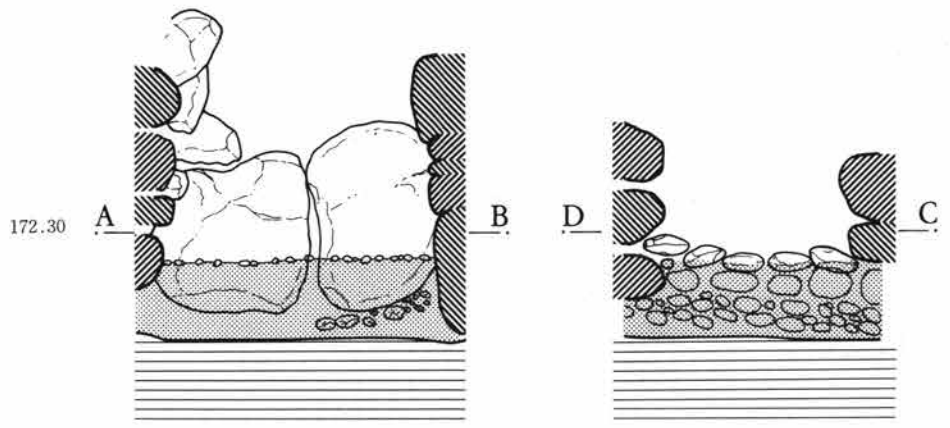
出土遺物 天井石の抜けた崩落土が石室内に充満していたがその中に中形の須恵器甕が出土している。墳丘に据えてあったものが転落したものであろう。石室内の攪乱はひどく玄室の左右壁寄りと玄室右袖部分の床面がかろうじて残りが良く遺物が出土した。左壁寄りには馬具と鉄鏃、右壁寄りには大刀、鉄鏃が出土した。玄室右袖付近からは刀子と鉄鏃が出土した。大刀は切先部分の残欠である。切先はふくらみである。鉄鏃はいづれも長脚鏃で2種類である。棘篋被片関片刃箭式と棘篋被腸袂三角形式である。馬具は5010、5013は鍔で木製壺鍔の頭部金具と兵庫鎖である。5014は轡の引手部分である。5011、5015～5019は皮帯の飾金具である。須恵器墳丘の攪乱部分から出土している。杯身は蓋受部は短かく内傾し、底部の削りは少ない。高台付皿は時期は新しく古墳に伴うものではない。甕は大小2種類で口縁部は直立して受け口状に口唇部は開く。大甕は4条の沈線をめぐらしその間に各1本ずつの波状を描く。肩部は補強の帯を1条めぐらせる。これは6110の大甕に類似するものである。



第104图 50号墳 墳丘图

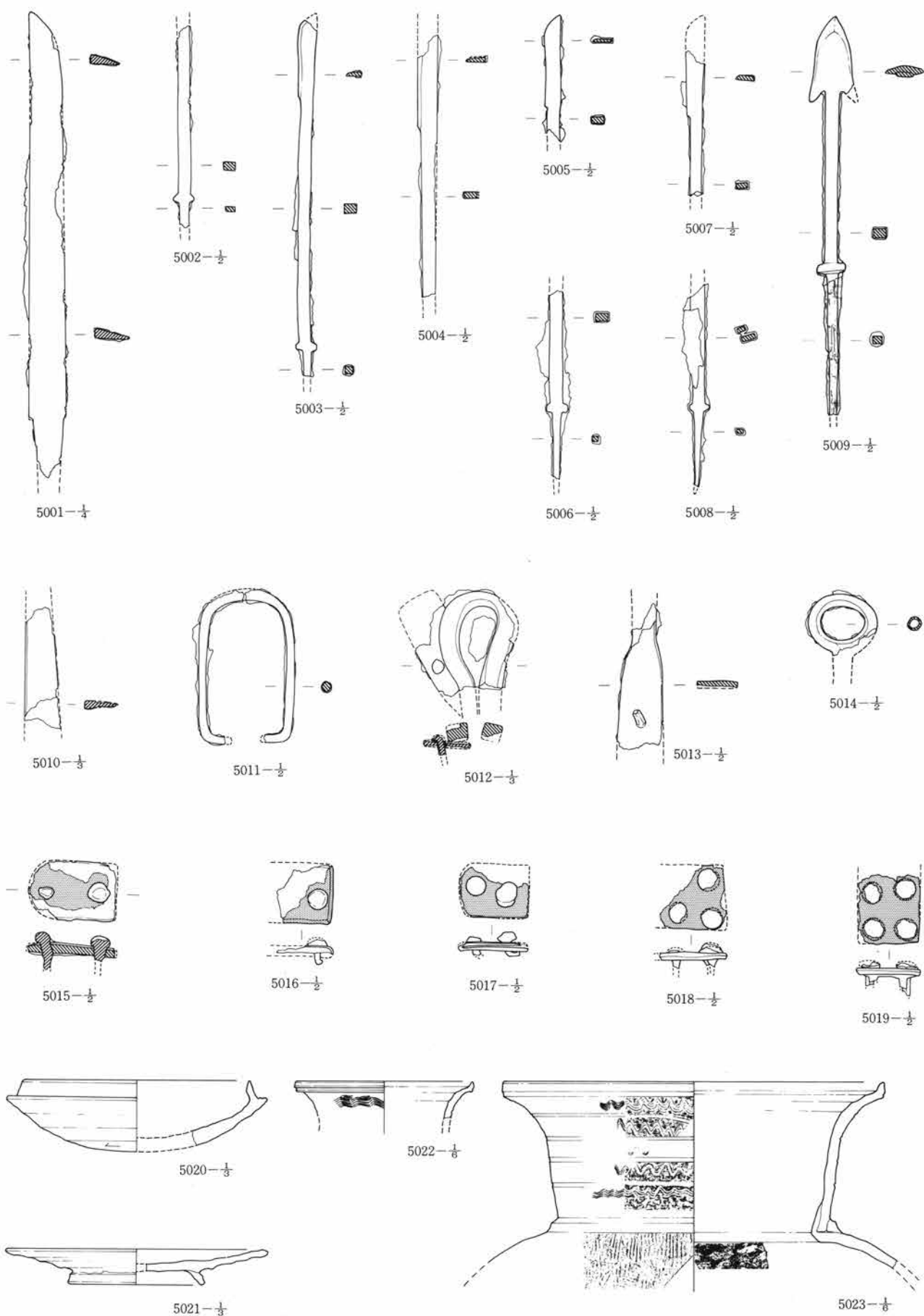


第105图 50号墳遺物出土状態图



第106图 50号填石室实测图





第107图 50号墳遺物実測図

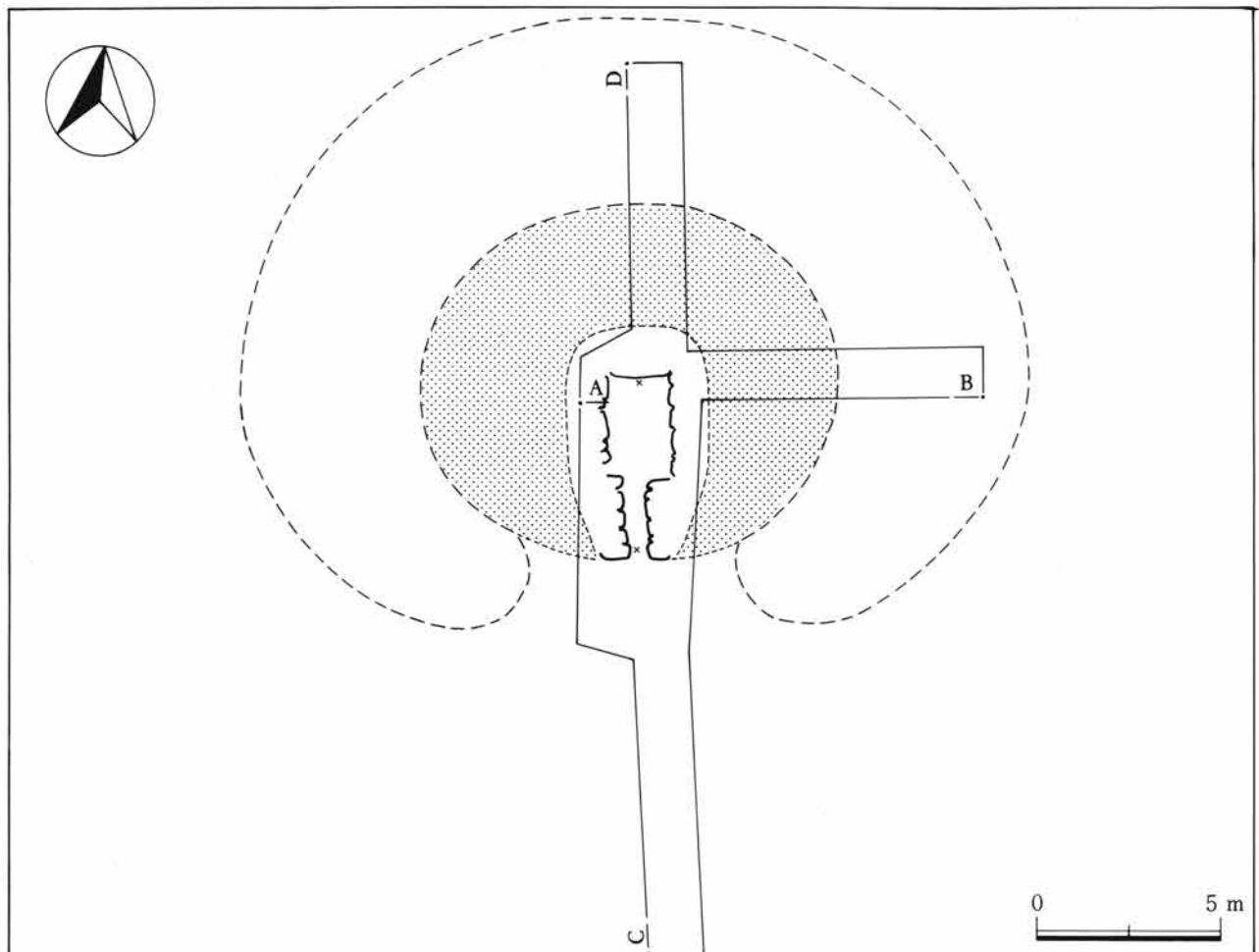
第 52 号 墳

位 置 本古墳群の中でも最も北東部にあって、49号墳の北東約30mほどの所に位置する。

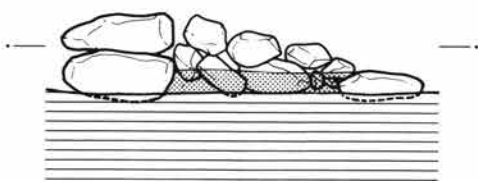
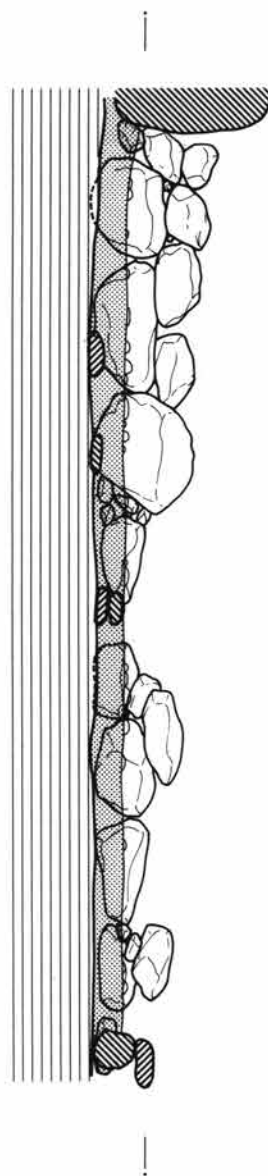
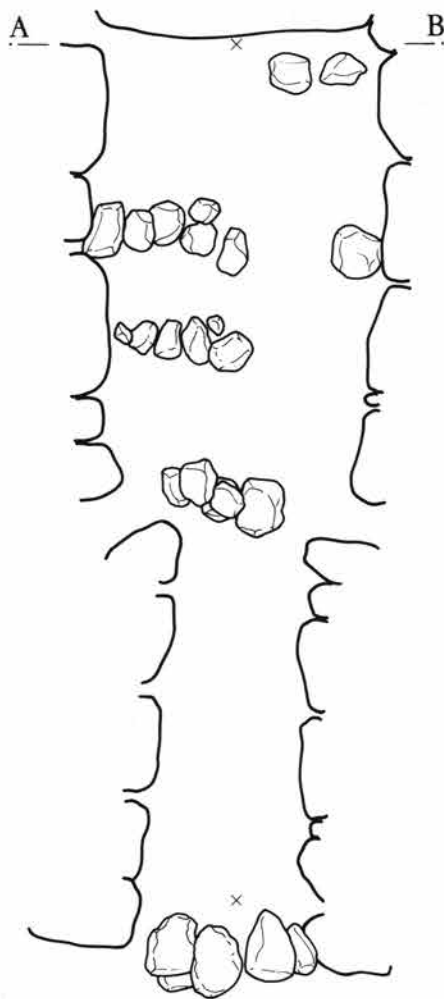
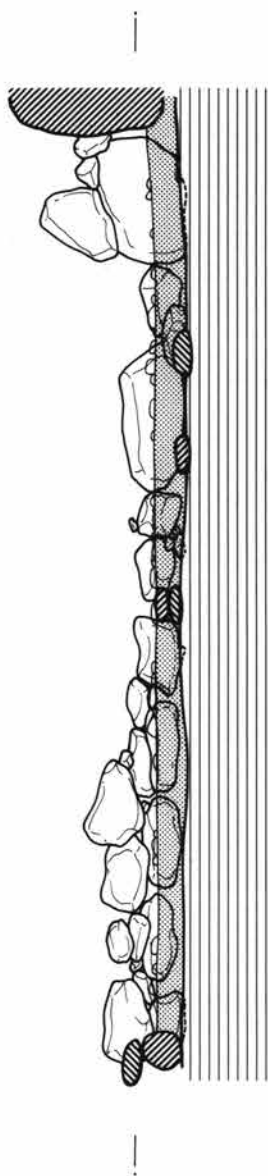
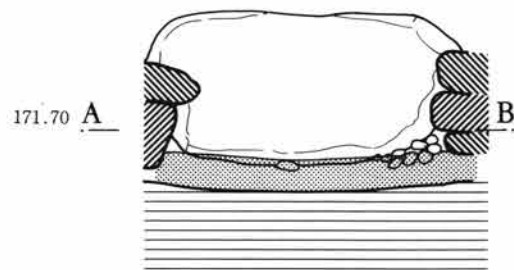
墳丘と外部施設 墳丘全体が削平され、わずかに地表面に天井石が3個ほど露出しているのみで、その規模は約11mである。トレンチ調査では、墳丘は構築当時の地表であった黒色土層及びその下の暗褐色土層を30~40cmほど掘り下げて整形している。また周堀は、西側で幅2.5m、深さ20cm、北側では幅2.0m、深さ30cm、南側では墳丘裾部から下部にかけて平坦に削平しゆるやかに上昇し、周堀か否か判定し難いが浅間B降下軽石層が墳丘裾部から周堀部分にかけて堆積している状況からほぼ周堀の存在を推定できよう。したがって周堀はほぼ全周しているとみて良いであろう。また本古墳には葺石及び埴輪の配列はみられない。

主体部の構造 50~70cmほどの比較的大形の川原石を使用した両袖型の横穴式石室である。全長は5.01m、羨道の長さ2.28m、最大巾90cm、玄室の長さ最大2.73m、最大巾1.56m、奥壁巾1.41mである。石室は隅丸長方形の「掘り方」内に構築しており、石室下部はこの中に納まる。また各壁面裏側には40~50cmの巾にわたって裏込めがなされている。「掘り方」の底部には掘り下げた面に人頭大の川原石を敷き、石室各壁はこの石敷の上に根石を据え積み上げている。奥壁は1.7m、厚さ60cmほどの1枚石を使用している。また石室の床面は「掘り方」底面にも人頭大の敷石を置き、更にその上部に小円礫を厚さ20cmほど敷き平坦化している。

出土遺物 玄室の東壁に接し奥壁から110cmほどの所から金銅製大刀1点、並びに鏃8点が出土した。大刀は「カマス切先」と呼ばれるもので、鞘当金具には透彫りが施されている。

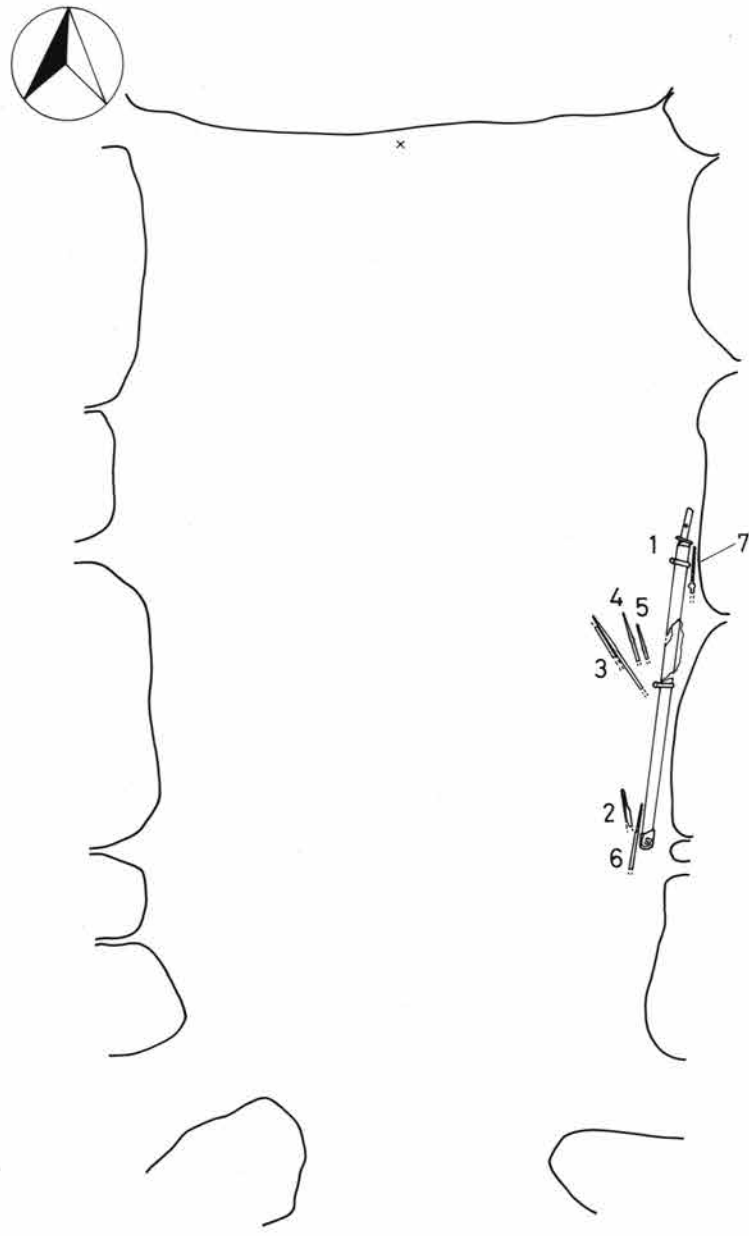
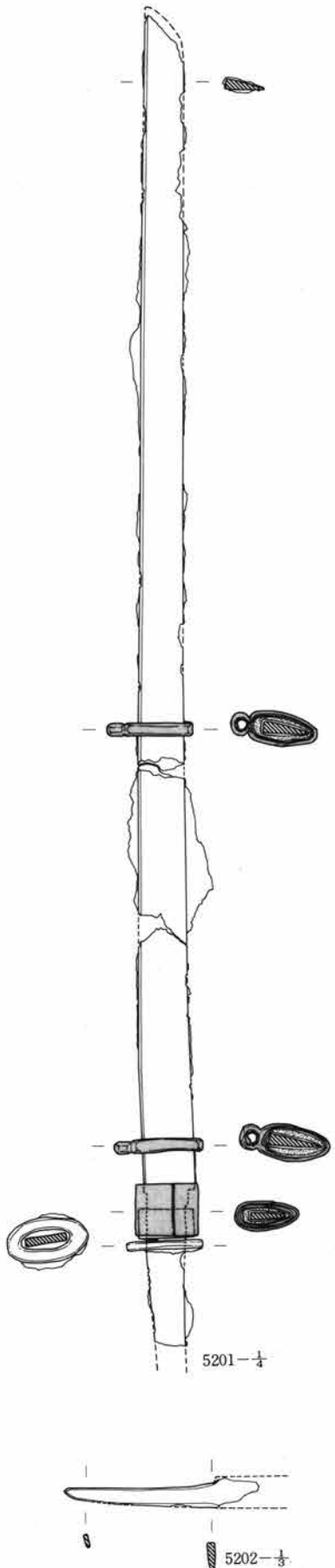


第108図 52号墳 墳丘図

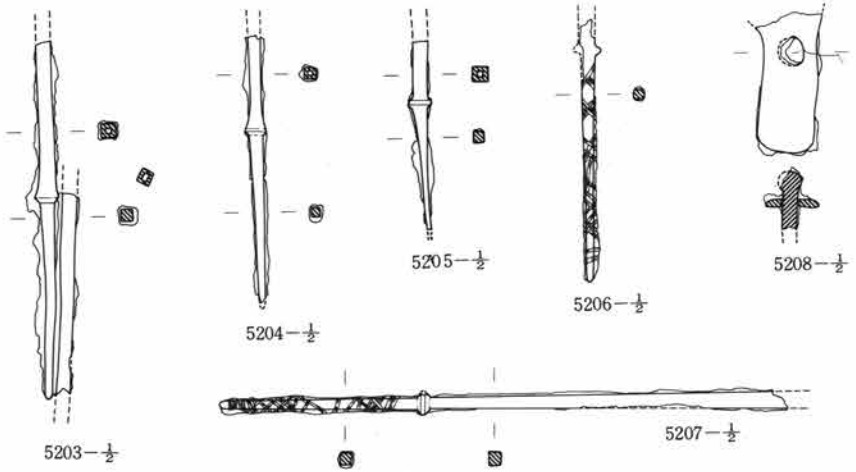


第109图 52号墳石室実測図





第110图 52号墳遺物出土状態図



第111图 52号墳遺物実測図

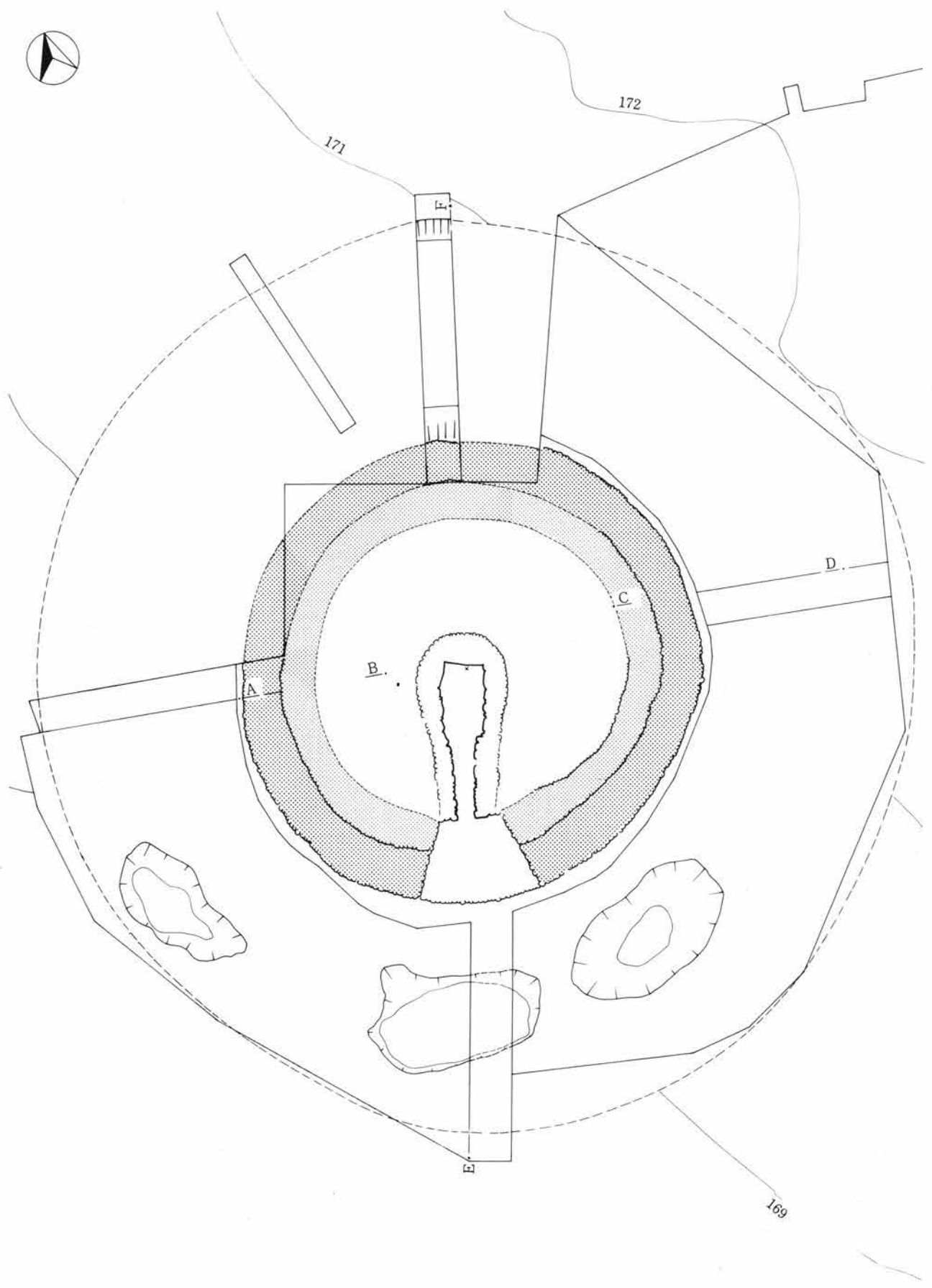
第 53 号 墳

墳径28mと古墳群中最大規模をもつ本墳は、古墳群の中央標高が170～171mほどのゆるやかな傾斜地上に占地する。その東側には群中 2 番目の構造規模をもつ48号墳を始め、28号、59号、29号、58号墳が本墳をめぐるように位置し、その規模・構造等から本古墳群中の中核的存在であったことを示している。

墳丘と外部施設 調査時においては高さ3mほどの墳形を留め、その墳頂部南側には玄室天井部に置えた巨石3個が露出した状態にあり、明らかに横穴式石室を内部主体とする大形墳であることがうかがわれた。墳頂部は天井石が露出する如く、盛土が削平されていたが、その遺存状態は比較的良好であった。南側前庭相当部分は周囲と比べ1段低く、その存在を推定させるものであった。墳丘は実測図作成の結果、高さ3m、直径27mほどの不正円形状を呈していた。調査にあたっては墳丘を八分割し、西北部を除いて幅1.5mほどの7本のトレンチを墳丘から周堀推定部分に設定し、その形状・規模を把握した後、西北部を除くほぼ全面的な発掘調査に入った。調査の結果、その概要は次のとおりである。墳丘は直径25.3mのほぼ正円形状の墳丘プランを呈している。墳丘上部は削平、消失しているが葺石等の遺存状態からして3段築成と思わせる墳形を呈している。

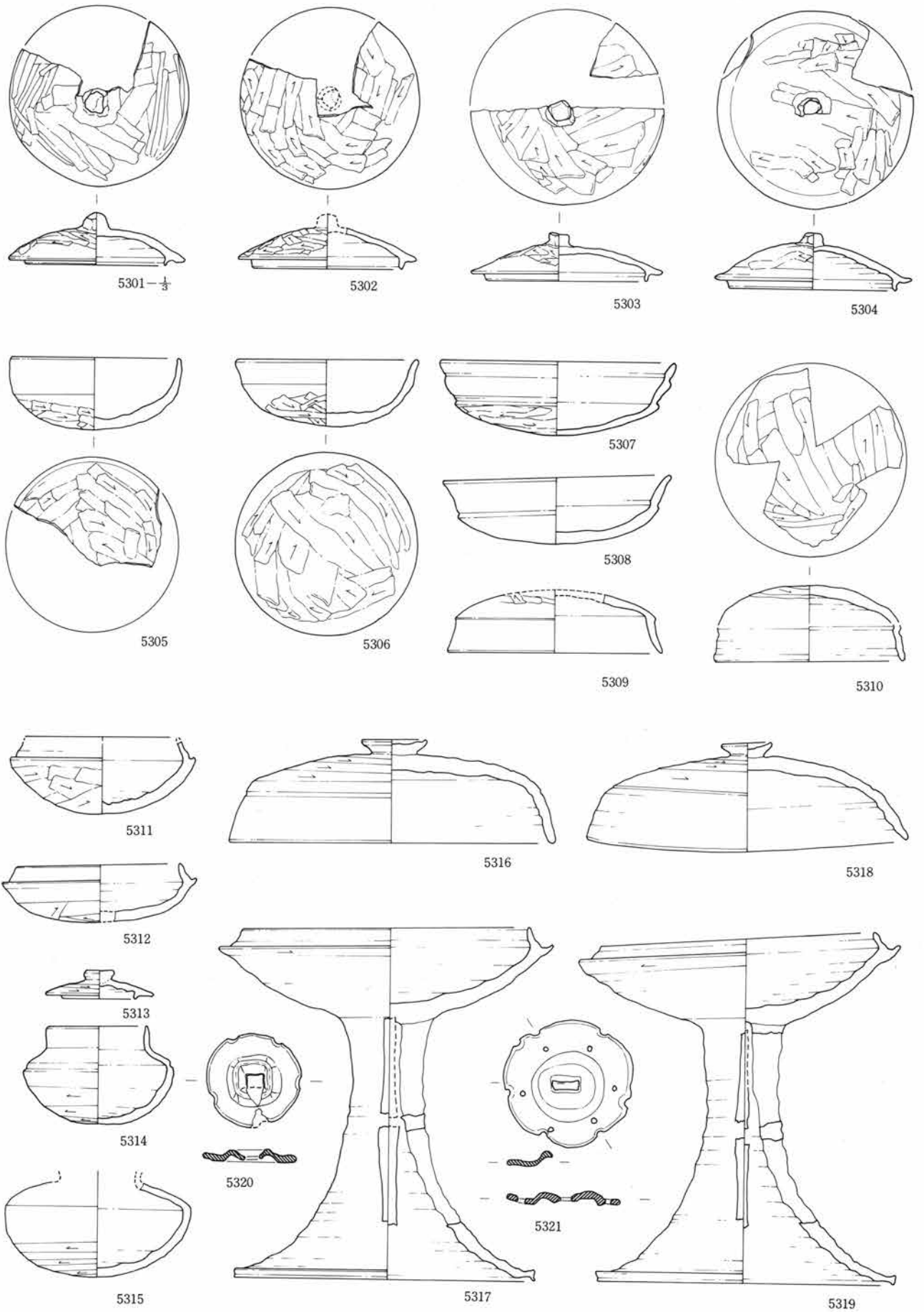
内部構造 自然石川原石を使用した両袖型の横穴式石室で西へ17度とやや南西方向に開口している。石室全長8.76mと本古墳群中最も長く、大規模な石室である。玄室は長さ4.28m、奥幅2.2m、中央幅2.4m、前幅2mを計測し、中央部がややふくらみをもつプランを示している。玄室長と幅の比はほぼ1対1.8である。玄室の右壁根石は0.8～1.6mほどの大形な3石を、左壁根石には0.9～1.5mほどの大形な4石を横積みを主に置えている。両側壁は2段までは大形の石を、3段目以上を30～50cmほどの川原石を小口積状に天井石まで積上げており、側壁の構築過程がうかがわせるものであった。奥壁は2.4×2.5mをこえる1枚岩を置えたもので、その間は小石によりおぎなっている。玄室天井部は3石の巨岩で覆い、玄室高は羨道部の高さとは比べ、1.2mほど高くその差が著しい。その境は、天井石より遊離させて1段下げた自然石によるいわゆる疑似帽を加設している。羨道部は全長4.58m、幅0.9～1.48mと開口方向に向って狭くなる傾向を示している。また床面より天井石までの高さ50cmでやっと通れるほどの幅狭く低い羨道部であり、玄室部との差が著しい。羨道両壁は20～50cmほどの川原石を積み上げているが根石の確認はなし得なかった。羨道部奥部には30～40cmほどの偏平な川原石を5石平列し梱石としている。梱石より羨門の間は10～30cmほどの転石を充填し閉塞しているが入口部、奥部では面を整えて積み込んでいる。玄室床面は攪乱が著しく、奥壁に接する左側部分で一部残存するのみである。また玄室、羨道部の一部立割りに床面の構築状態をうかがうことができる。まず地行面より60cmほどに小円礫を積み込んだ上に2～5cmほどの小円礫を5cmほどの厚さにしきならべて床面としている。羨道部床面についてもほぼ同様の構築方法で床面としているが玄室部・羨道部ともほぼ水平か、玄室部が若干低くなる程度と思われる。

本墳は調査時において保存が約束されたため、石室の構築過程については石室内の部分的な立割りのみに留めたため十分な追求はなし得なかったが、その立割り断面観察等から本墳についても同様に石室に合せた掘り方を穿った後に小礫を積み込み地業としている。石室はその上に根石をすえ石室を構築した事がうかがわれる。前庭部は石室開口部前に台形プラン状に付設される。その計測値は次表のとおりである。計測値でみるとおり右壁が左壁と比べ、やや大きく広いため、両壁の延長線の交点は羨道部東側に位置することになる。左右両壁は10～20cm程度の小ぶりの小石を積み上げているが、その上端部分は失われている。前庭床面は偏平な小石を全面にしきならべている。周堀は墳丘を全周している。周堀外縁部は耕作等の削平によりその立上りが不明瞭であったが、トレンチ調査に続く全面的な発掘により、その断面はいわゆる2重船底状を呈することが確認された。その規模は南側で幅7.4m、深さ2m(旧地表土より復原)、北側では幅11.6m、深さ1.2m(旧地表土より復原)ほどで、石室開口部の南側が幅広で深く、石室裏の北側では幅12m、深さ1mほどで幅狭く浅い形状を示している。周堀底部には封土の土取りの痕跡を思わせる径5×8mほど、深さ1mほどの不整形の掘り込み部分が6ヶ所ほどに認められ、凹凸のはげしい底部となっている。また周堀最深部は南側で標高169.4m、北側で標高170mほどで、その比高差が2.6mと南側が深く、その形状・周

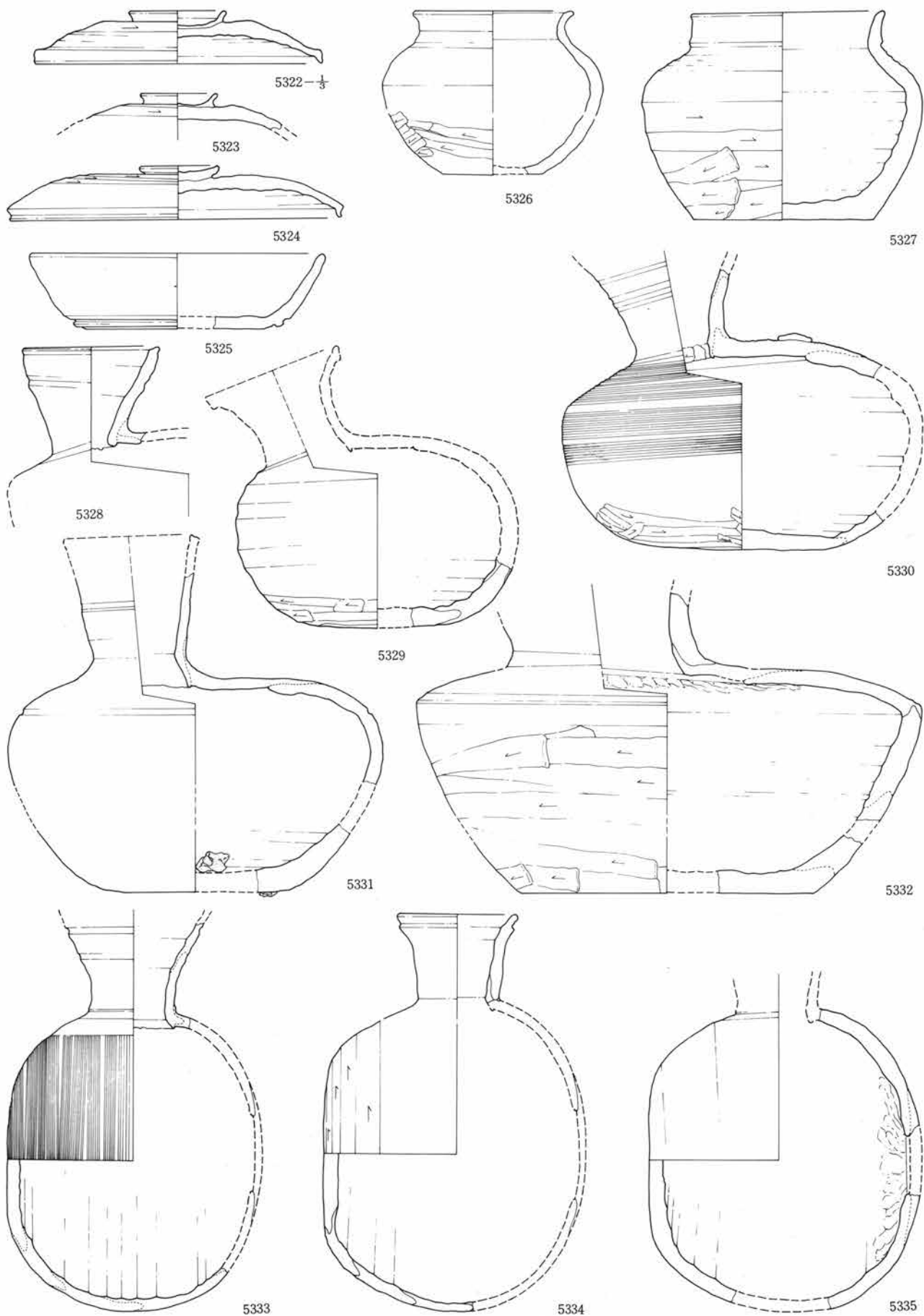


第112図 53号墳 墳丘図

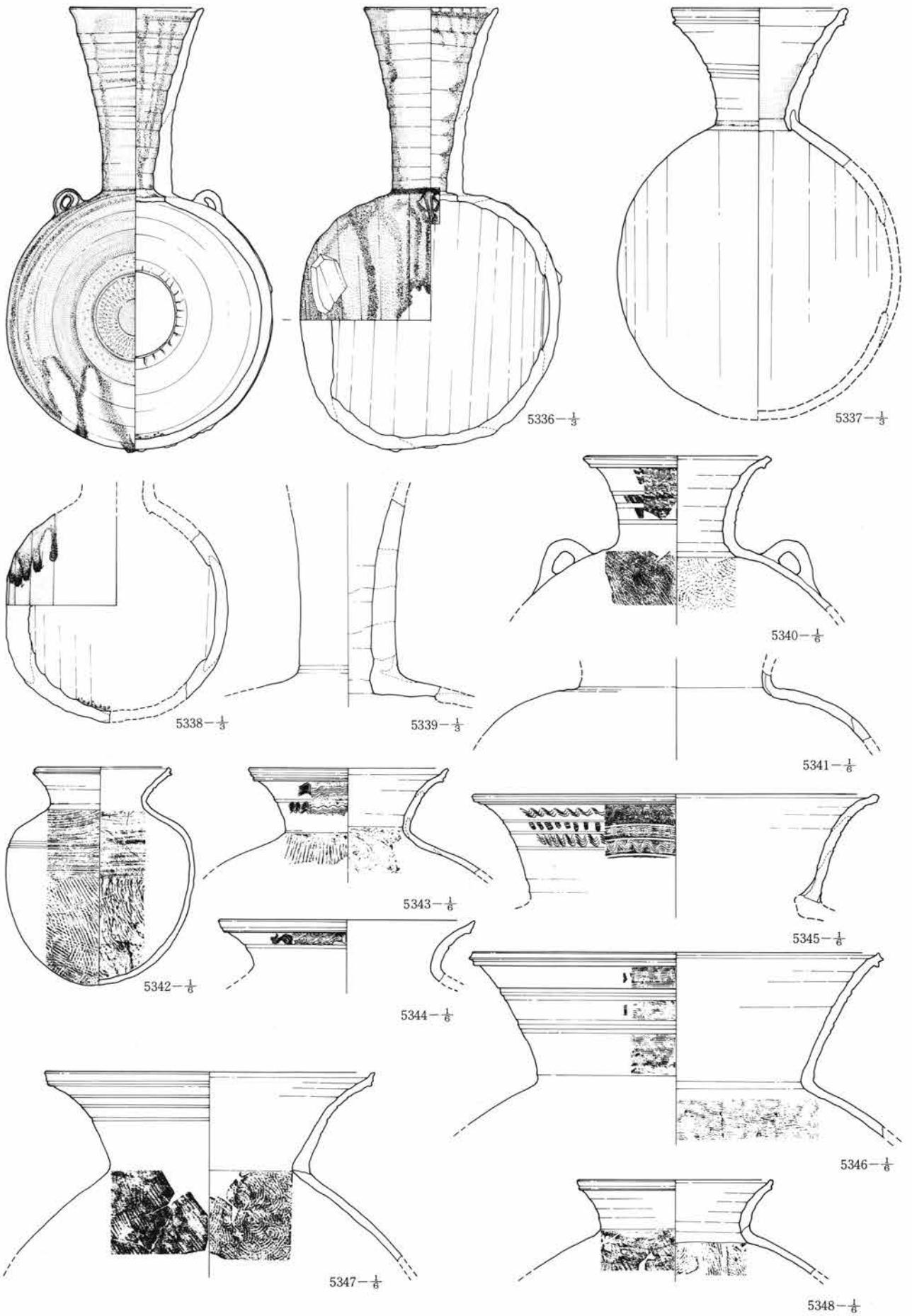
0 5 m



第113图 53号墳遺物実測図(1)



第114图 53号墳遺物実測図(2)



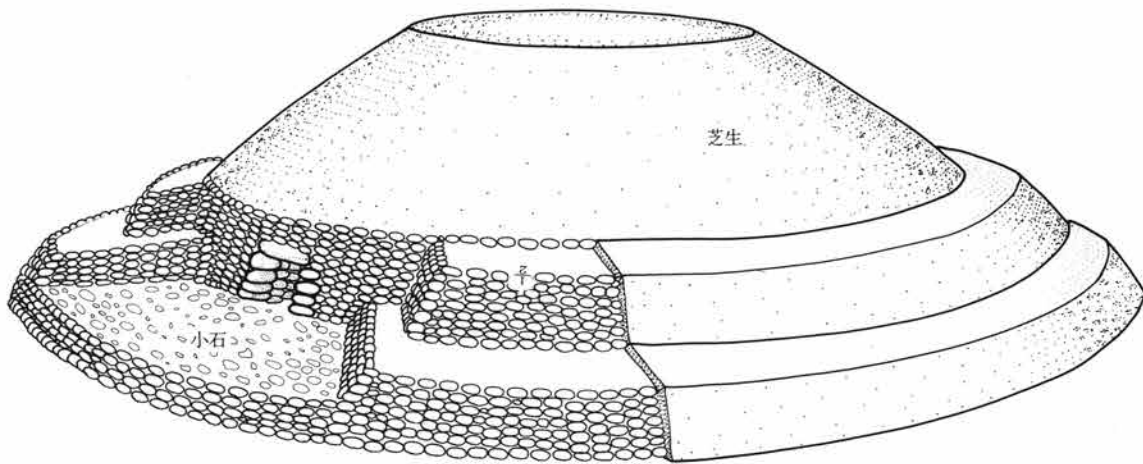
第115图 53号墳遺物実測図(3)

堀堆積土からみて、明らかに、水堀でなかったことを示している。周堀堆積土は周堀外縁部を削平した第1層耕作土、第2層は浅間山BPを多量に含む褐色土層、第3層褐色土層、第4層は浅間BPの純堆積層で周堀中央部分に20mの堆積を示している。最下層の第6層は黒色土層で、水の痕跡、榛名二ツ岳FAの降灰層の堆積は認められない。葦石は第6層の黒色土中に少量、第3層の褐色土中には多量に存在し、特に浅間BP降下以降には葦石の崩落の著しかったことがうかがわれる。

出土遺物 床面の原状を留める箇所も奥壁部分にわずかに認められるのみで攪乱も著しい状態にあった。攪乱土中より1点の鉄鏃破片が出土したにすぎない。羨道部においては奥部右よりに閉塞石に接して耳付きフラスコ形瓶を出土している。

小 結 本古墳群中その中央部分に位置する本墳は直径25.3mと最大規模をもつ円墳である。群中では正円状を呈する唯一の古墳と思われるもので、葦石を全周させる3段築成と考えられる墳形を有し、周堀を全周させている。主体部は、やや南西方向に開口する全長8.76mほどの自然石乱石積の横穴式石室であり、その平面構成は両袖型であるが袖の張りはゆるやかに羨道部に移行する。その構成比は1対1.8と羨道部が玄室部と比較して狭く長い。石材は川原石を使用しているが奥壁については巨石1枚を使用しており山石を思わせるものであった。

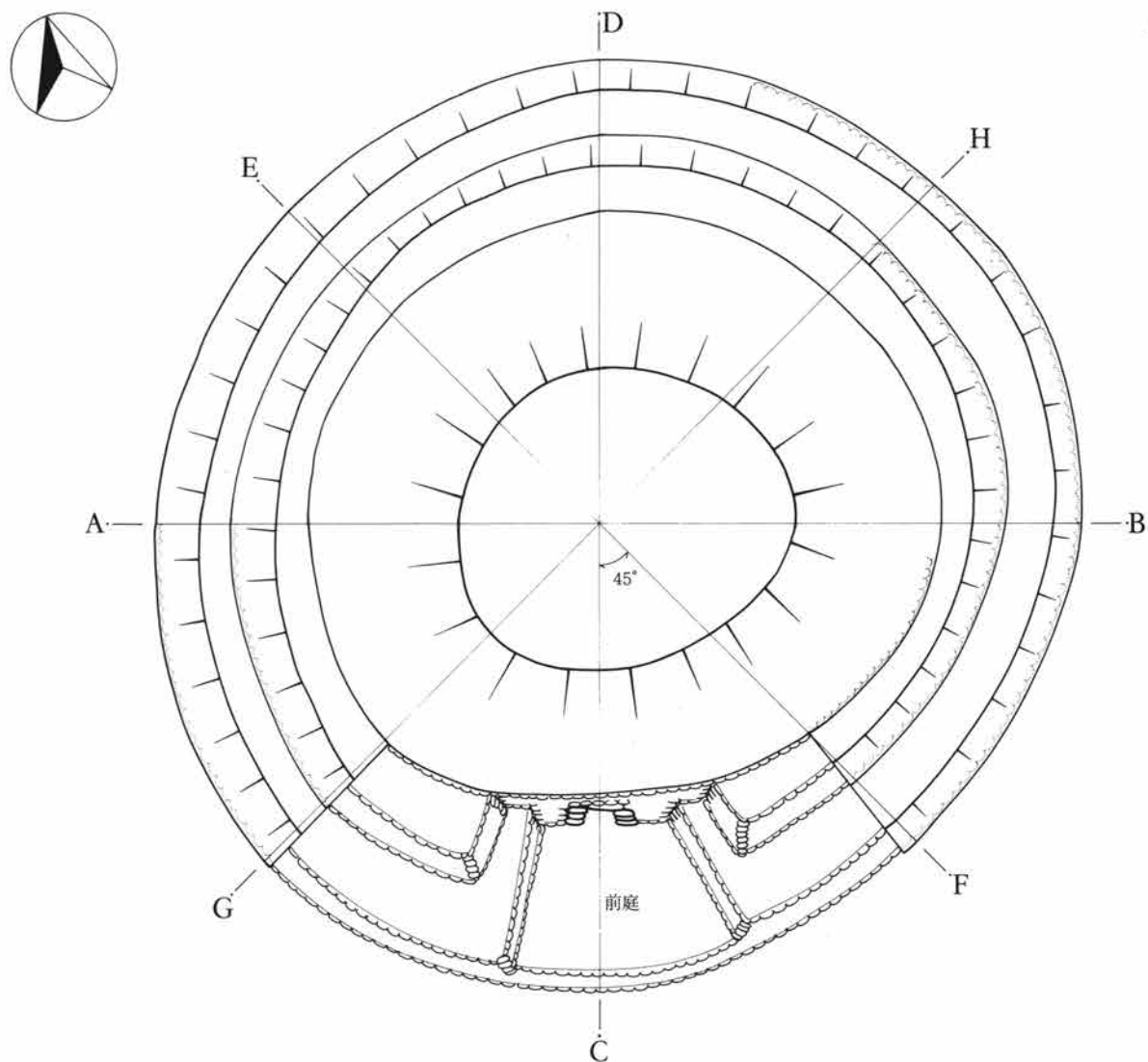
以上本墳は古墳群中の横穴式石室を有する古墳の中で最も古い様相を示すものと思われ、本群の中核的古墳として存在し本墳を取り巻くように多くの小規模横穴式古墳が形成されていったものと思料されよう。



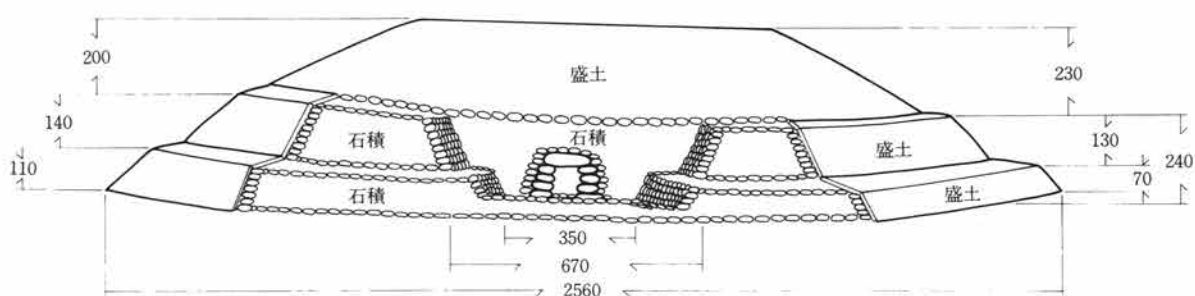
第116図 53号墳 墳丘復原図

保存整備 本古墳は群中で最も規模が大きく中核的位置を占める。調査中よりその遺存状態の良好さと、この古墳のもつ優美さは調査関係者より認識され強い保存の熱意と地元および事業関係者の協力によって整備され保存、活用されることになった。調査は周堀を含めた全面の7割以上を発掘することができ復原作業にもより正確な記録が提供できた。

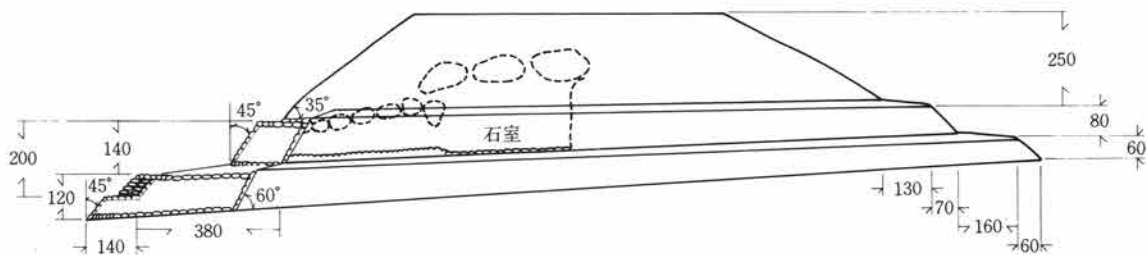
墳形は東南隅のやせた円形である。葦石で全面がおおわれ三段に築かれ截頭錐体を呈する。墳径は葦石根石を測点とすると東西(A-B)25.6m、南北(C-D)25.4mを測る。高さは正面から見ると5.4mに復原できる。一段、二段までの葦石の積み上げ角度は45°と急である。一段目までの径は21.5m(G-H)、二段目までの径は16.5m(G-H)を測る。墳頂部分は削平されていたが残存した天井石より1.5m盛大を推定して復原してある。その結果、墳頂径は8m(E-F)となった。前庭部は石室主軸線と前庭主軸線は合致しない。前庭部の開放角度は41度である。なお前庭部両脇の石積みの上段、下段の始末が必ずしも調査では明確にできなかったため復原図のように段差をもたせた。以上のような要点にもとずき構築当時の状態を生かしつつ復原図を作成し保存作業を慎重に実施した。



正面图



侧面图



第117图 53号墳復原图



第 58 号 墳

位 置 周囲には59、33、63、29、53号墳があり、本墳は53号墳の北西20mの位置にある。

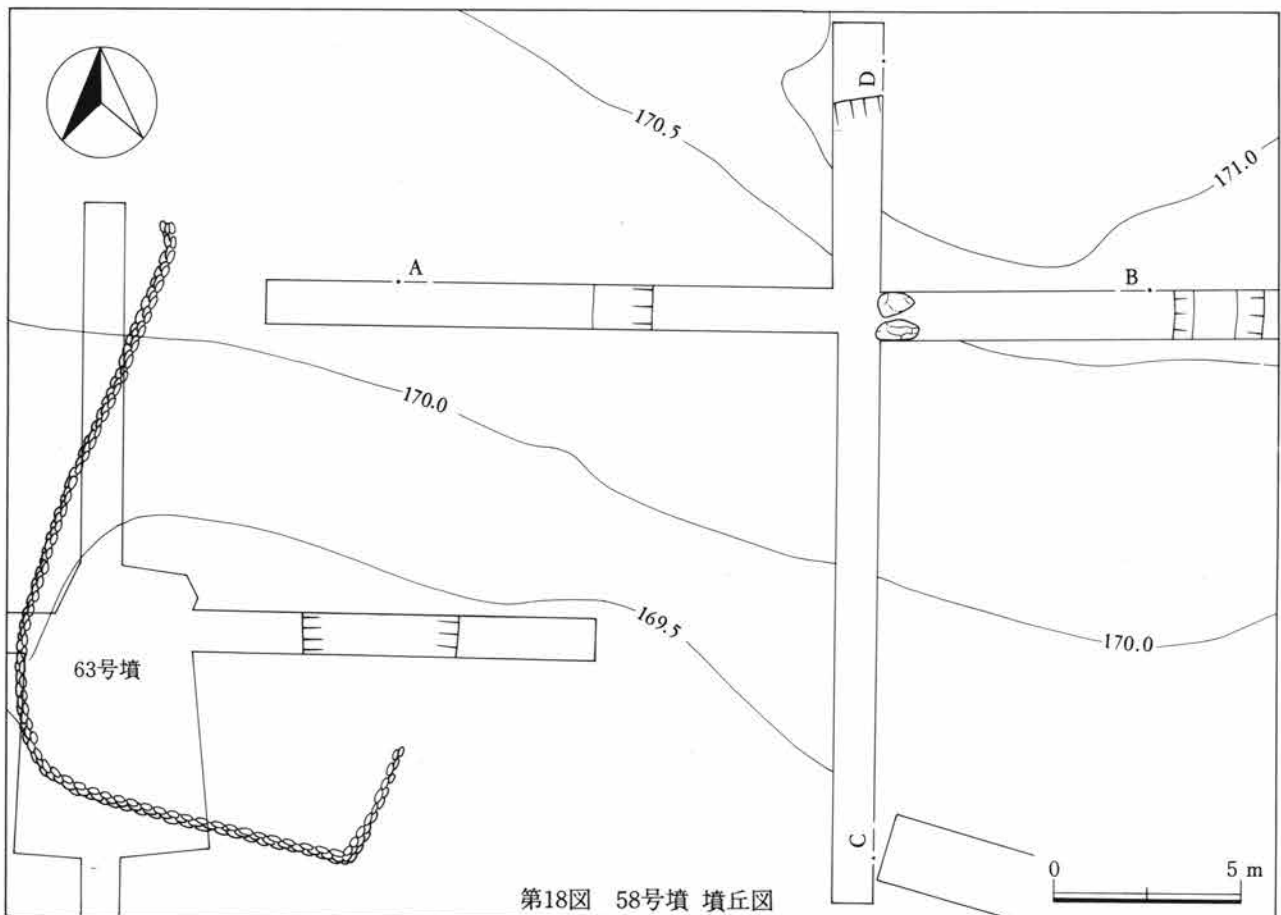
墳丘と外部施設 本墳の調査前の状況は平坦地形で、古墳の存在は予想されなかった。しかし、地主が穴を掘って古墳の石を埋めたという情報を得たことから、その位置を確定し、その周辺のボーリング調査の結果、古墳があった可能性が生じたため、南北35m、東西30mの十字状トレンチを設定して確認調査を行なった。

南北トレンチでは、現地表面から黒色土面まで50cmと浅く、地山を含めて攪乱されている箇所が大半であったが、墳丘北側でわずかに黒色土面と盛土、葺石の状態が残存している。盛土は基盤付近に厚いところで30cm程残るが主体部に向けて上方傾斜の層位を示す。葺石の残存状態から、二段築造のようすがうかがわれる。すなわち、上段葺石は20cmの盛土上に、葺石根石と二石の石組みが原位置を保っている。葺石根石から1.2mの位置から、盛土面は傾斜し、黒色土層をけずって周堀掘り込み面に連なっている。傾斜面上半部には葺石用石がかぶっているが下段葺石の残存はない。東西トレンチでは、攪乱されていて確めようもないが、構築時の墳丘は二段築造と推定できる。周堀は、東側で黒色土面からの比高差50cm、巾2m50、西側で比高差90cm、巾3m50なのに対し、北側は比高差50cm、巾9mと計測でき、周堀の深さや巾が一定でない。以上のように、葺石の残存状況や周堀の位置関係から、墳丘の形状および規模は直径14m内外の円墳で二段築造の外観を呈していたものと推定できる。

主体部の構造 主体部付近は攪乱土におおわれている。構築時の状態はまったくとどまらない。しかし、攪乱土の範囲から、本墳の主体部には横穴式石室が開口していたと思われる。

出土遺物 本墳に伴う副葬品やその他の遺物は残存していない。

小 結 本墳は、すでに平夷され、その痕跡をほとんど残さなかったが、二段築造の小形円墳で、主体部は横穴式石室と推定できる根拠を確認したにとどまる。

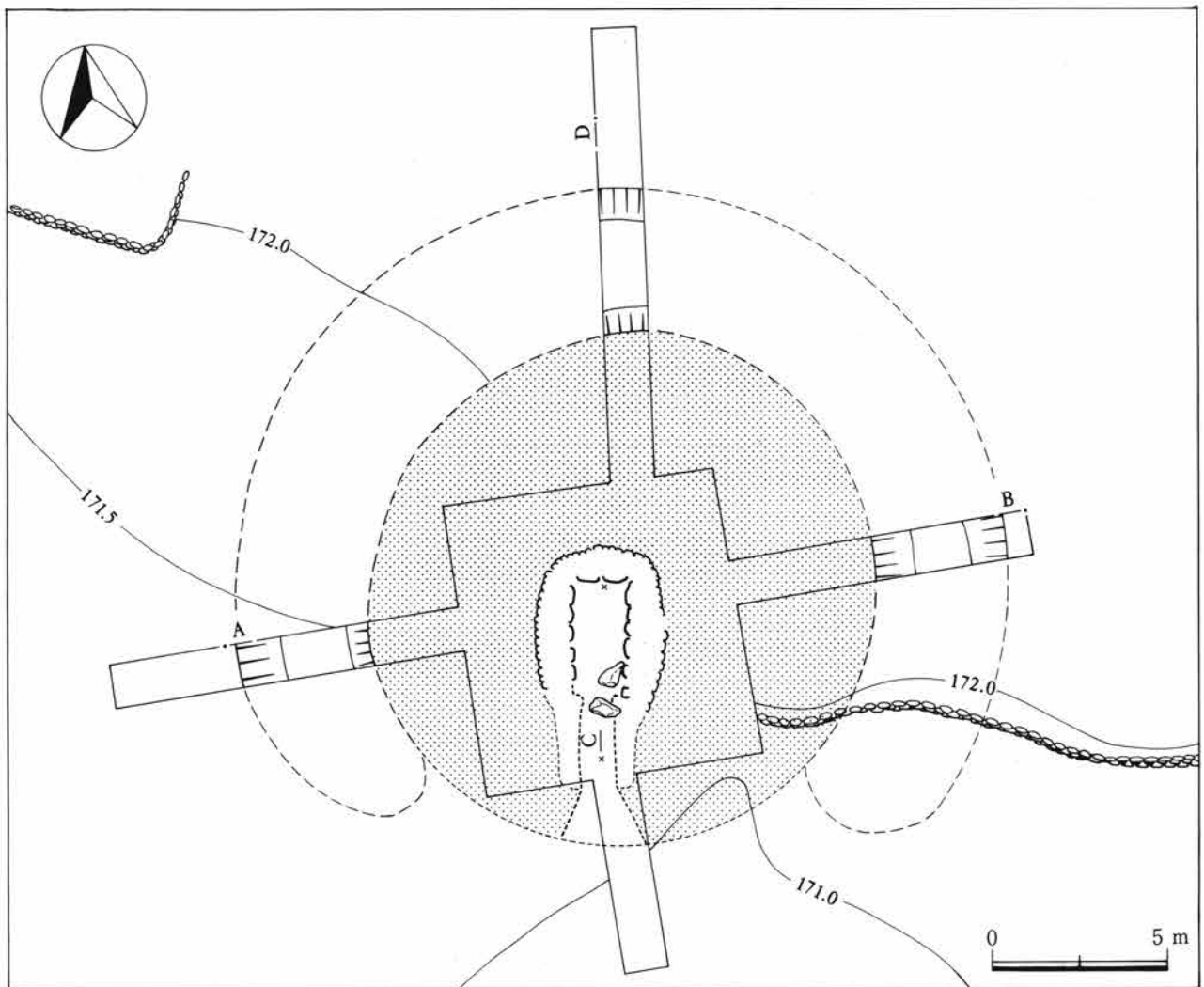


第 59 号 墳

位 置 本古墳群中の最大規模をもつ53号墳の北側、標高172mに位置する。東側は61号墳、北側に45号墳が西側に58号墳が近接する。

墳丘と外部施設 直径12～13mほどの円墳と推定される。調査時においては、わずか50cmほど高まりを残すのみで、その周囲は削平が進み、現状からは古墳と推定し得ぬ状態にあったが、南側に天井石かと考えられる1mほどの川原石が露出し、古墳の存在を知ることができた。墳丘は旧地表土といえる黒色土層上に積み上げた黒色土を主体とする盛土が50cmほどの高さで認められるにすぎない。周堀は4～6mの幅で、その断面は弓状を呈し、石室前面を除く東・西・北側に認められ、馬蹄形状に囲んでいたことがうかがわれる。南に向うゆるやかな傾斜地に立地するため、北側が東・西の堀と比べ、約0.8～1mの深さがあるが、石室入口の南側に向って浅くなっている。墳丘盛土は黒色土（旧地表土）上に約50cmほどの厚さで残っており、黒色土を中心に黄褐色土を含む盛土が中心部に向って層状に積みあげられている。葺石についてはすでに石室羨道部分が消失しており、またトレンチによっても明確な葺石は確認できず、全周していた可能性はないものと思われる。前庭は羨道部が消失しているため不明である。埴輪配列はない。

主体部の構造 自然石（川原石）を使用した横穴式石室であるが、羨道部分が消失している。玄室部残長2.4m、奥壁部の幅1.4m、玄室部南側の幅1.2mと入口部分に向って、その幅をせばめているため、袖無型石室の可能性を思わせる平面プランを呈している。石室の構築にあたっては旧地表土である黒色土より50cmほどの深さに「掘り方」を掘

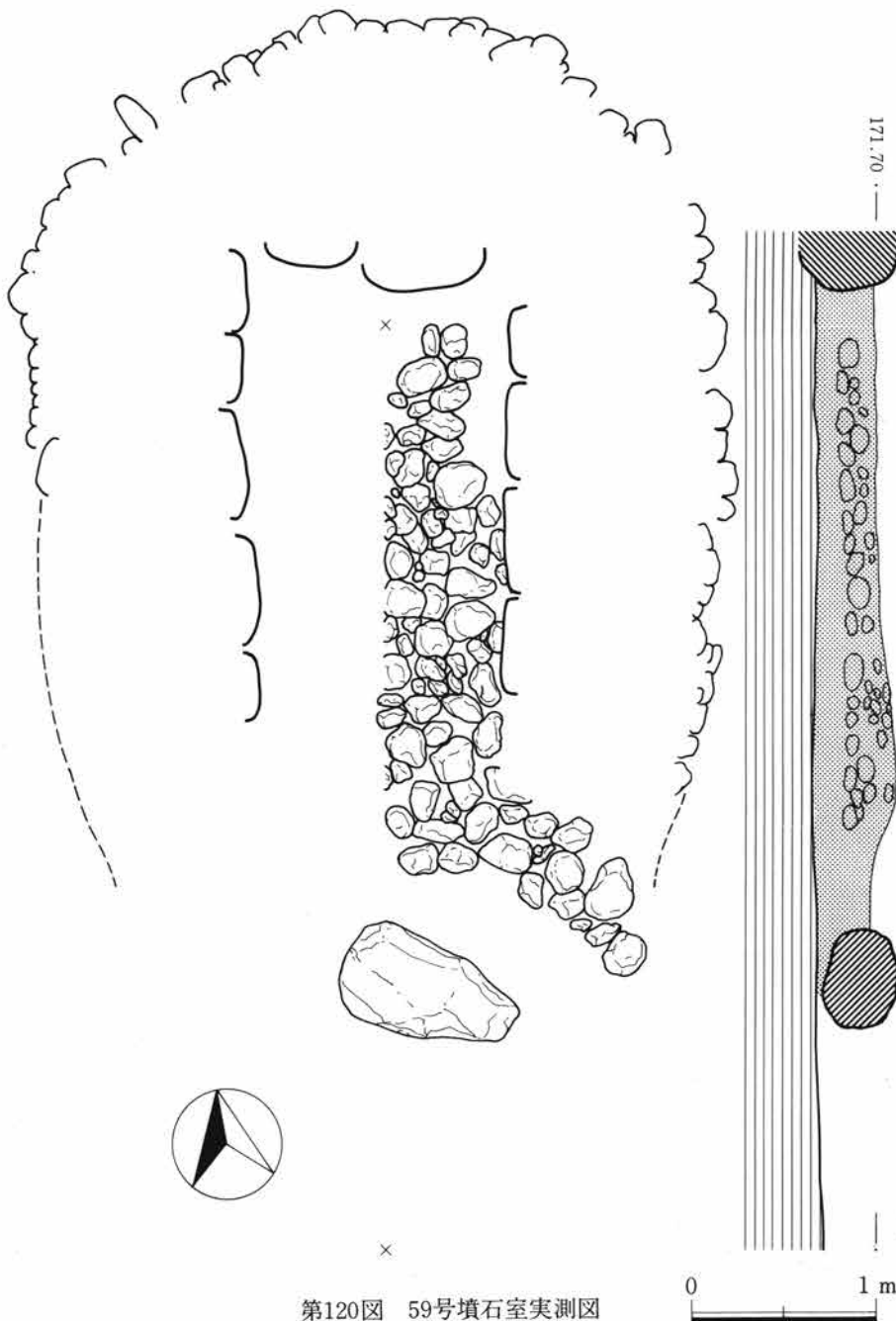


第119図 59号墳 墳丘図

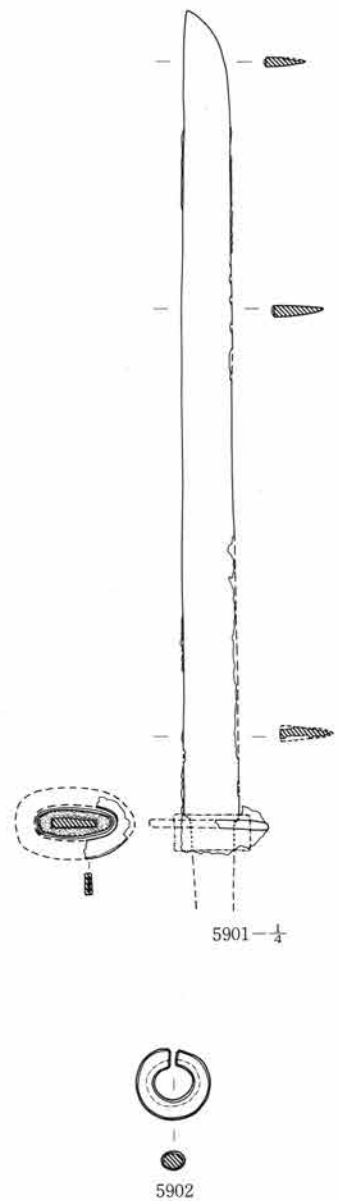
り込み、その底部に10~30cmほどの平らな川原石を敷き並べた上に、両壁部分の根石をすえている。奥壁根石は2面の大石を横積みにすえているが、この部分では直接地面にすえていることを確認している。左右側壁では20~50cmほどの川原石を使用し、大形の石は横積みに、小形の石は小口積みにすえた後に、主に小口積みに側壁を積み上げていく。石室はさらに小礫を敷き詰め床面としているがその厚さは20cmほどである。玄室を裏側には小礫、小石を詰め込み幅60~70cmほど裏込めが認められ、その外側はやや不整然に積み上げられている。その形状は馬蹄形状に外周している。

出土遺物 玄室内床面には奥壁に近い、西壁根石に接するように刃先を奥壁に向けて直刀1振りだが、同じく中央に近い西壁近くに大腿骨と考えられる成人骨片1、右壁の南側に耳環1点の出土をみている。

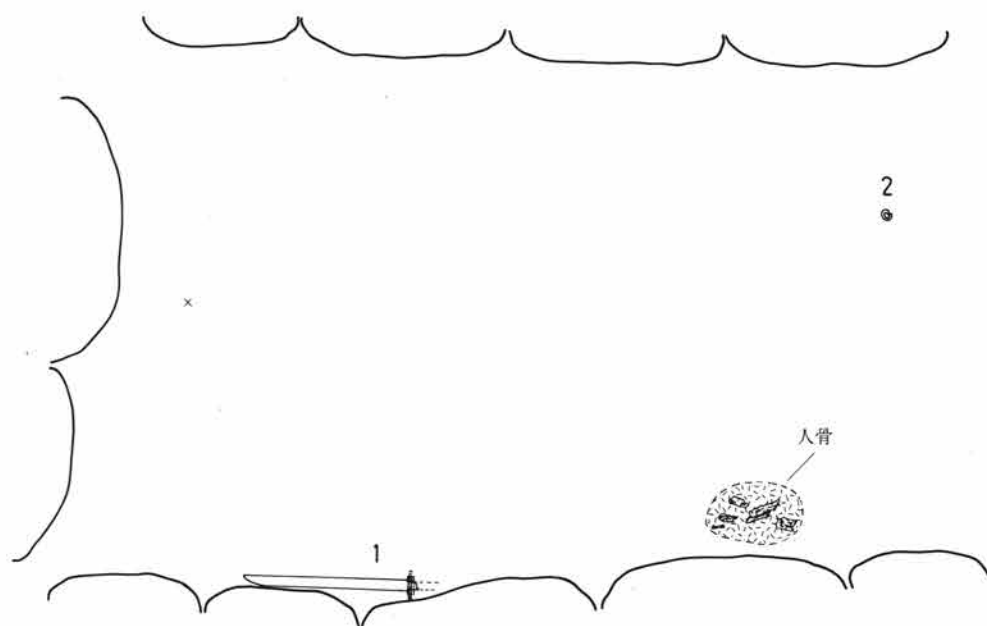
小 結 本古墳は川原石使用の横穴式石室であり、羨道部は消失しているが、残存する玄室部は開口方向に向けてやや幅をせばめる傾向がある。



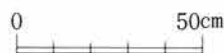
第120図 59号墳石室実測図



第121図 59号墳遺物実測図



第122図 59号墳遺物出土状態図



第 60 号 墳

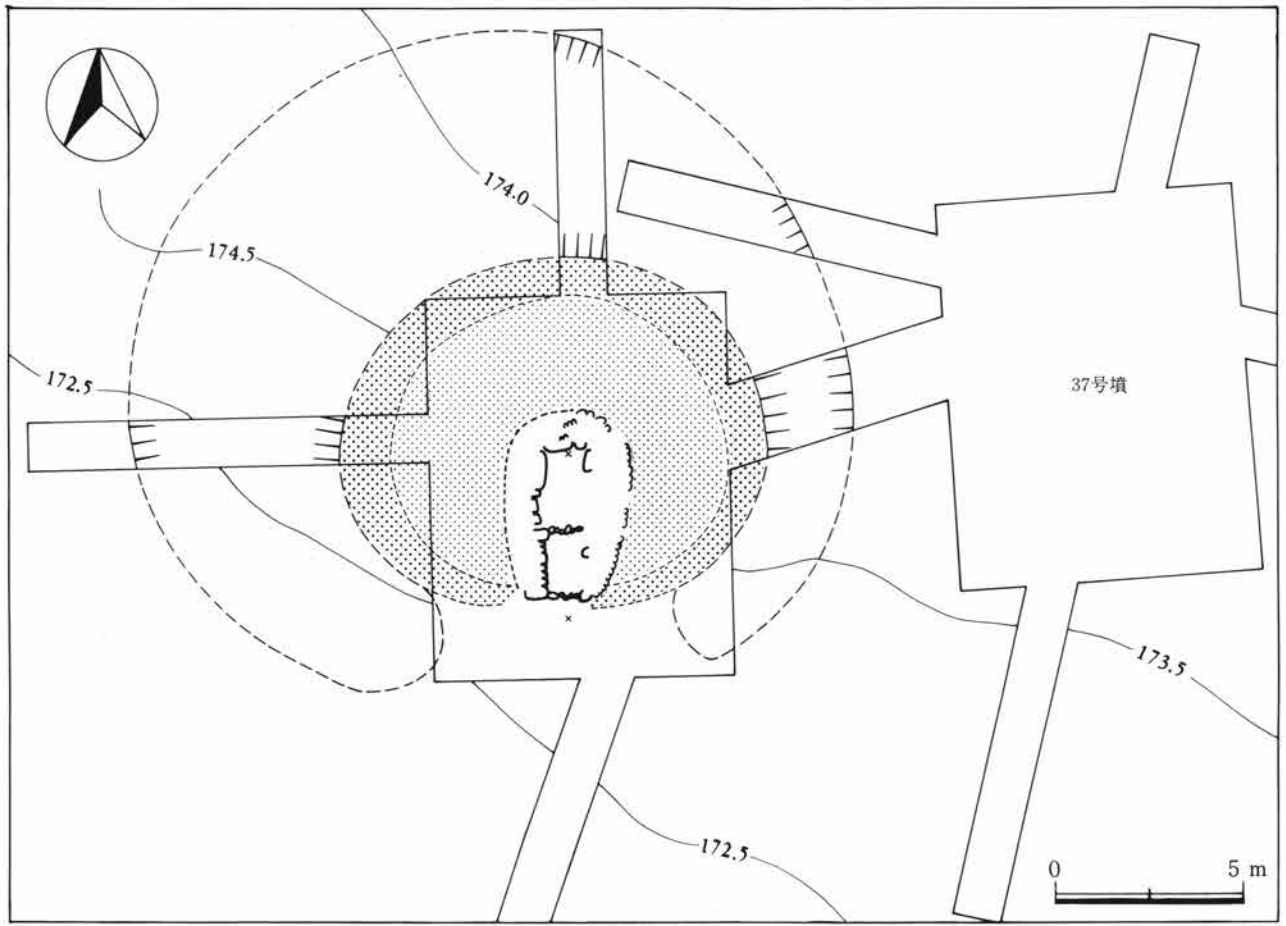
位 置 本墳は古墳群中の西北部、標高173mほどに位置し、その南側は35号墳が、西側は保存措置が講ぜられた36号墳が近接している。

墳丘と外部施設 調査時においては、高さ1mほどの残丘を留めていたにすぎなかったが、発掘調査によって径8mほどの円墳が推定される。墳丘外側は北、西側の周堀は浅く6mの幅を測り、東側では37号墳と近接しており、その幅は狭く2.5mである。南側では確定し得ないが周堀は他の円墳と同様、石室前面の南側を除く、墳丘外周にめぐらしていたものと推定されよう。葺石は、石室入口の左右約1.0~1.5mほどの範囲に積み上げているのみで、全周していなかったものと思われる。埴輪配列、前庭は認められない。

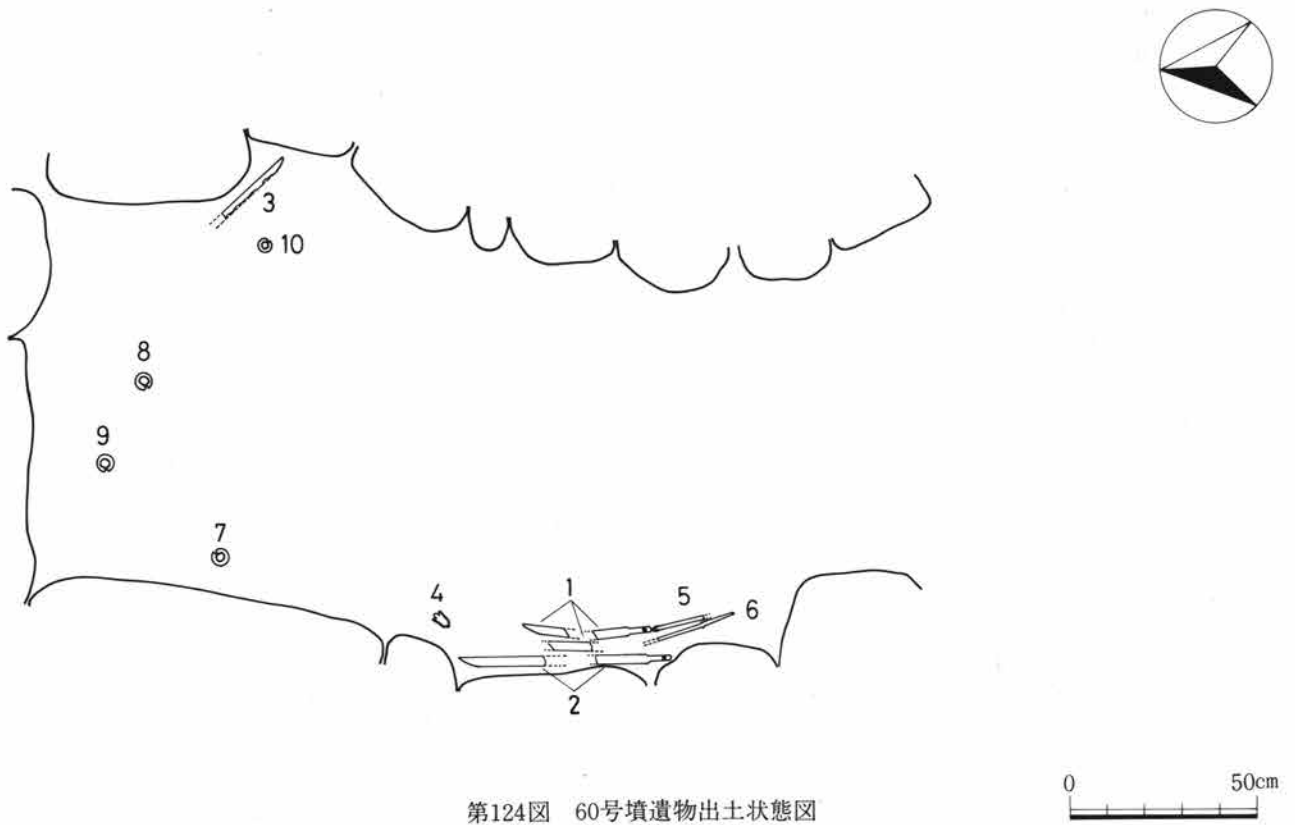
主体部の構造 自然石(川原石)を使用した両袖型の横穴式石室である。全長4mほどの小規模な石室であり、玄室部の長さ2.1m、幅1.2~1.4m、羨道部1.9m、幅80cmを計測する。石室は旧地表土を掘込んだ「掘り方」に構築しており、石室根石はこの中に納まる。奥壁に接する左壁は1.2mほどの大形な川原石を根石にすえているが、他は比較的小さく、小口積みを主に側壁を積み上げている。奥壁は大石2個を横積みに並べ根石としている。石室内は10~20cmほどの川原石を並べた上に小礫を敷き詰て床面とし、羨道部内には10cm~20cmほどの小石を満して閉口している。側壁、奥壁の裏側には小礫、小石を積み込み、その外側を不整然に小石を積み上げて裏込めとしており、その形状は石室を楕円状に外周している。

出土遺物 大刀は3振でいずれも完存しない。6002の切先はふくら枯れる。鉄鏃は3本でうち2本は長脚鏃である。金環は4個で同じ寸法の組み合わせならば3組分となる。須恵器は5個体で杯蓋、提瓶、長頸壺の台部、小型壺、大甕である。甕は口唇部は折り返し状につくる。口頸は胴部より外反気味に開き、3本の沈線区画を描き上段3本に波状文をうめる。なお、発掘調査中の大刀3振が盗難に遭う。本古墳出土の大刀は6振となる。

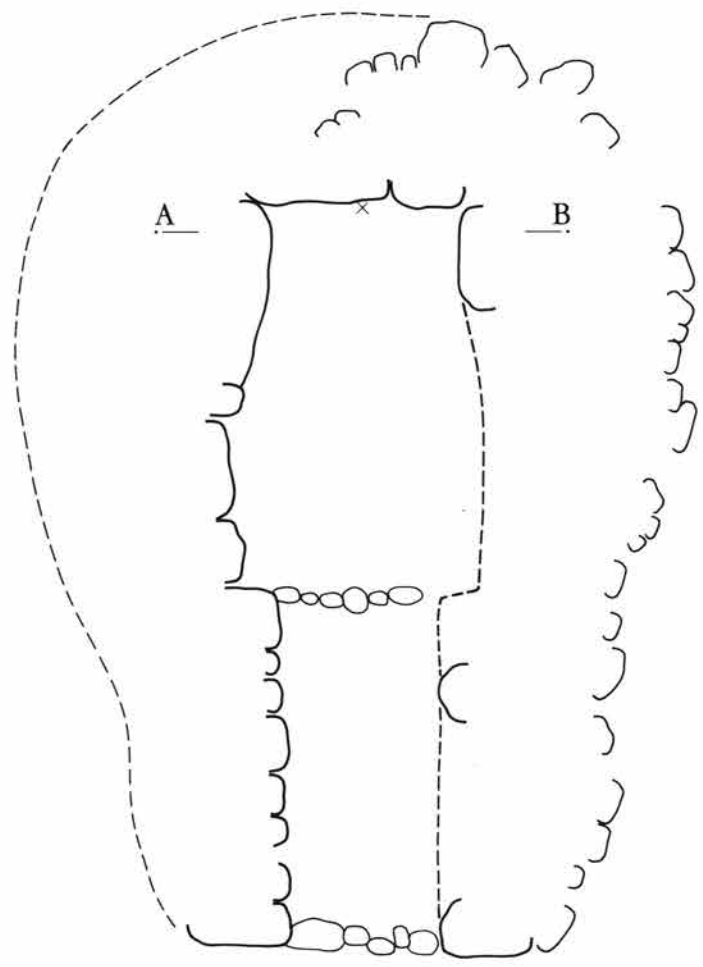
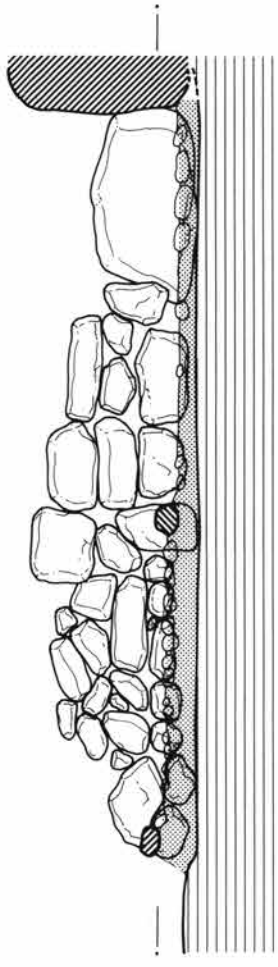
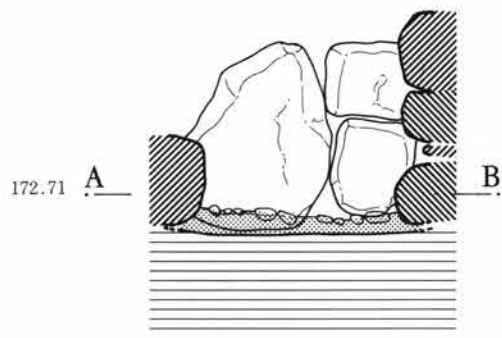
小 結 本墳は前庭をもたない川原石使用による両袖型横穴式石室を主体部とする径8mほどの小円墳である。



第123图 60号墳 墳丘図



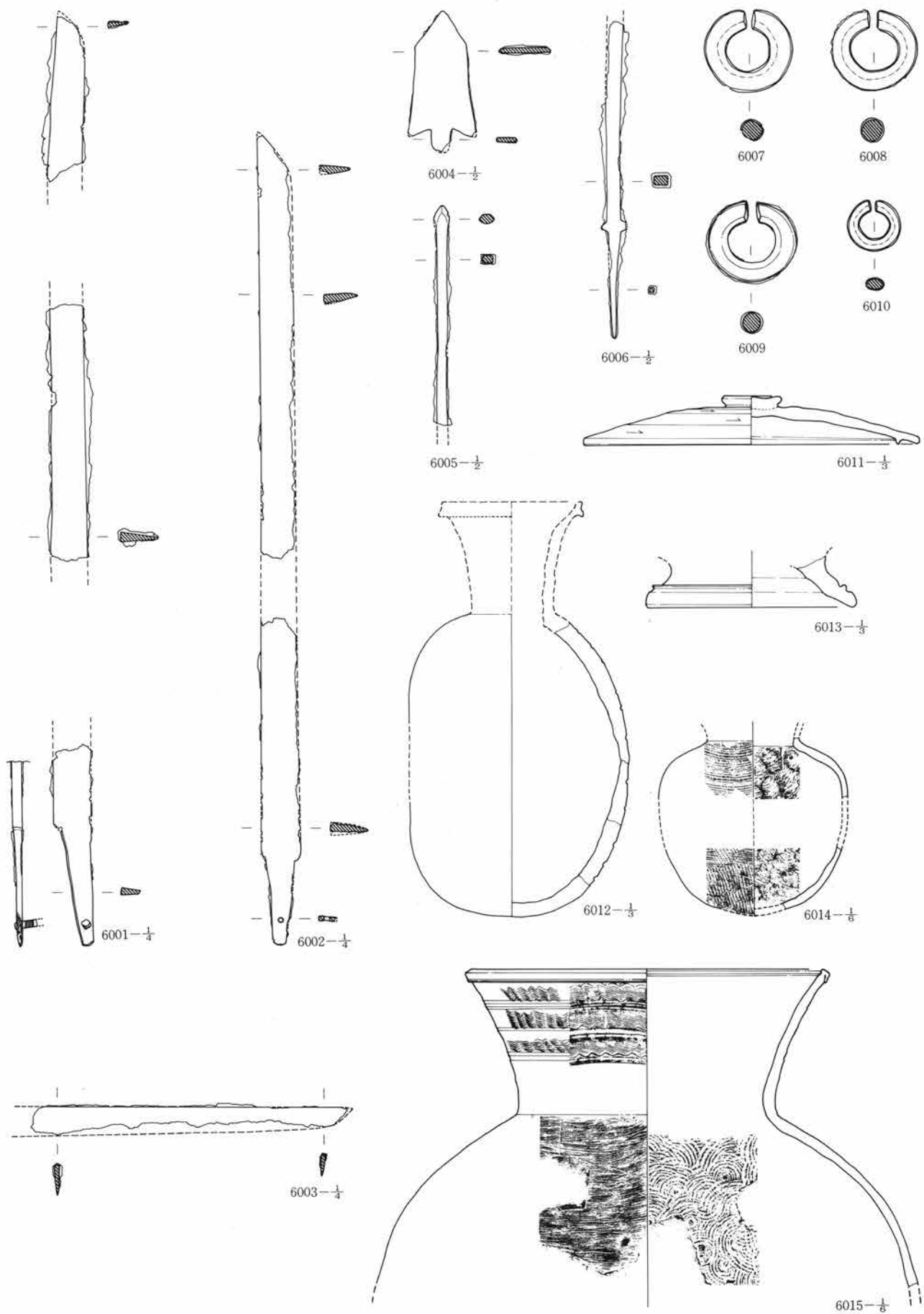
第124图 60号墳遺物出土状態図



x

第125图 60号墳石室実測図





第126图 60号墳遺物実測図

第 61 号 墳

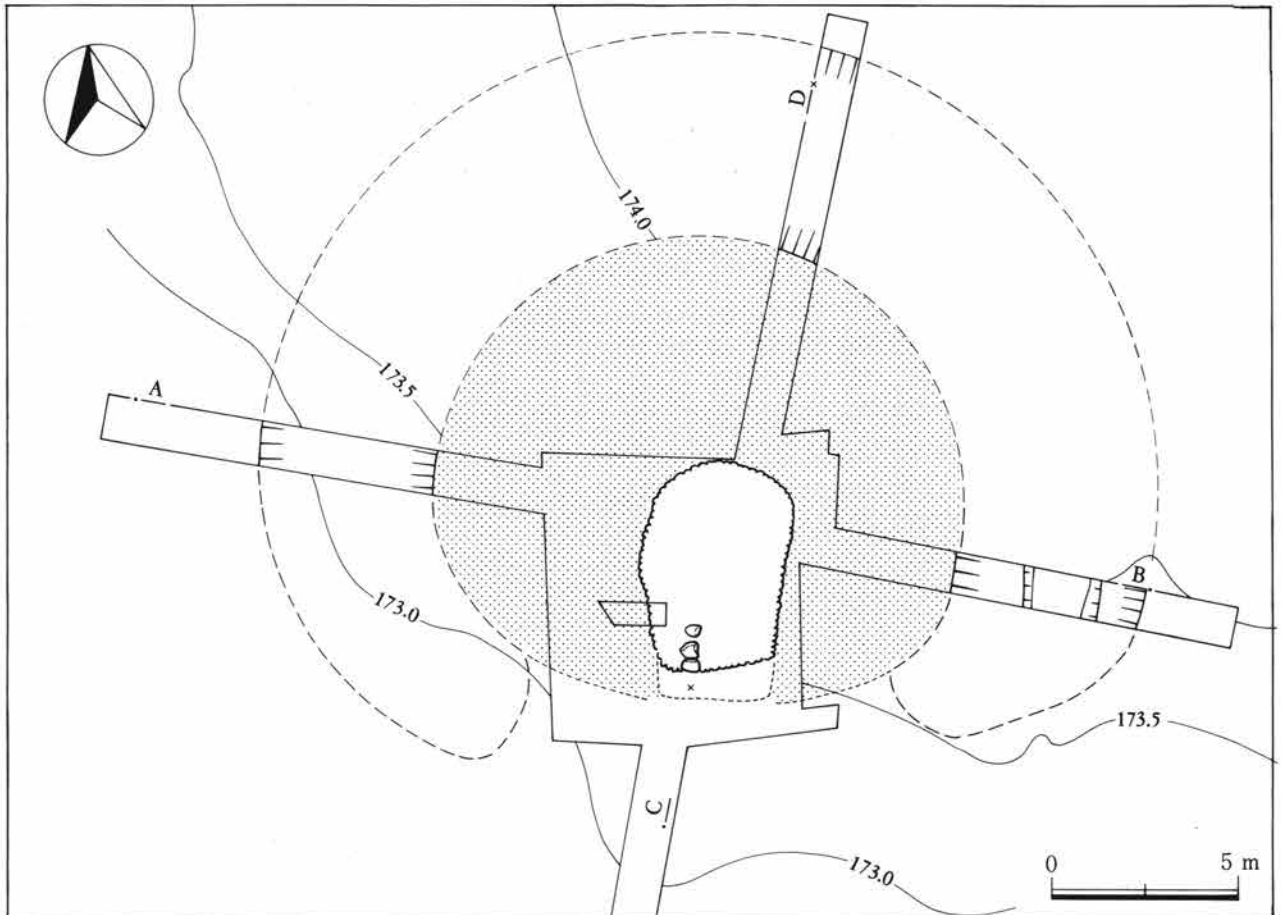
位 置 本墳の周囲には38、39、45、59、53、49、44号墳があり、44号墳と59号墳のほぼ中間に位置する。

墳丘と外部施設 本墳の調査前の状況は、畑地に若干の盛り上がり認められ、ボーリングの結果古墳の存在が推定でき、トレンチをいれて確認したものである。そのため保存状態は極めて悪い。主体部の位置と範囲、墳丘の規模を知り得たのみであった。

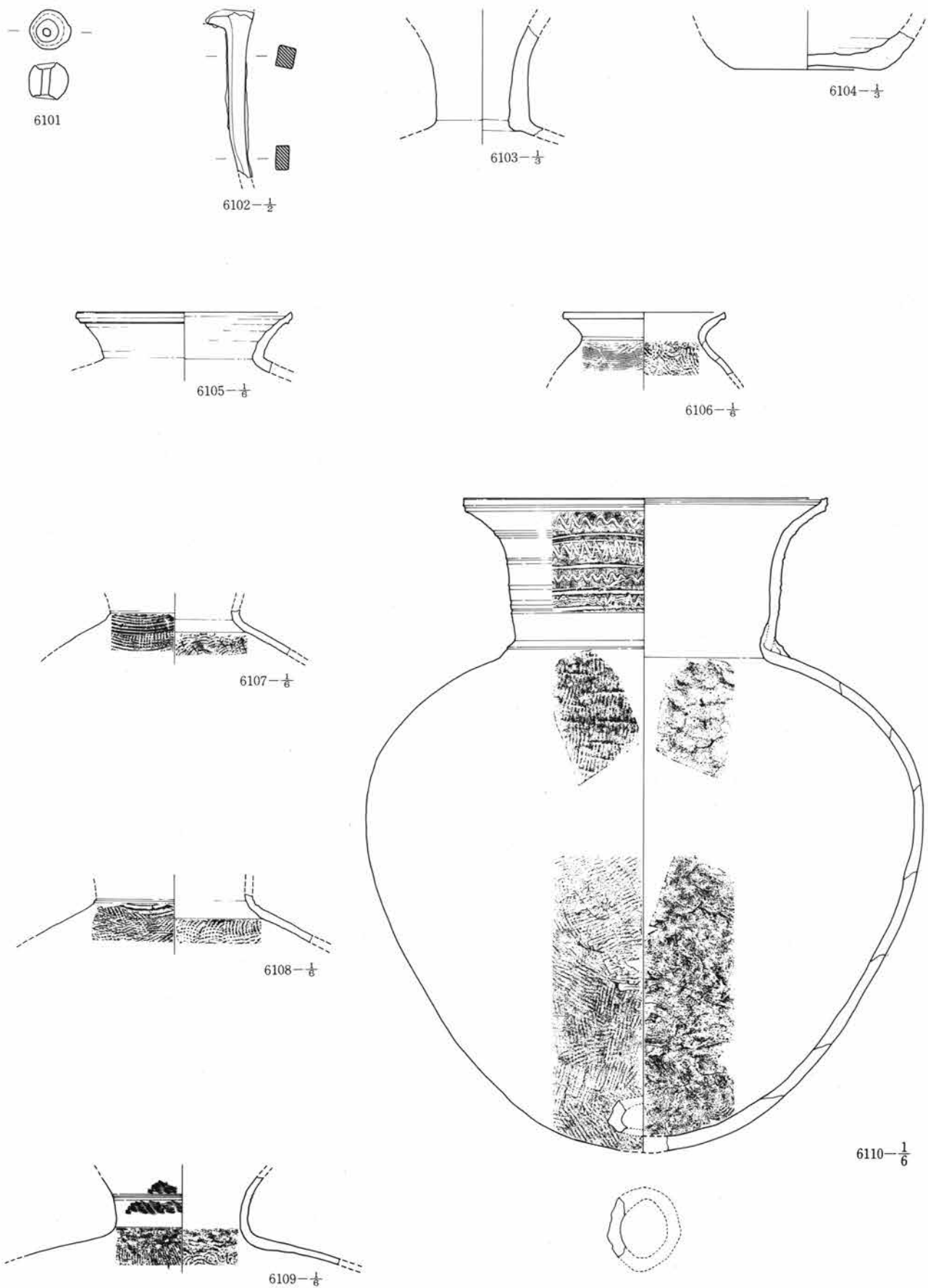
各トレンチでは、当時の地表面である黒色土上にわずかに盛土が残るが、削平が著しく、盛土の堆積範囲も明瞭でない。しかし、黒色土面から周堀に至る地層的变化から、本墳は直径14m内外の円墳であるといえる。周堀もめぐらされている。しかし、墳丘東側では、巾6m、黒色土面からの比高差1.6mの周堀が確認できるが、その他のトレンチでは、比高差も乏しく、現地表面から浅いため範囲の識別が難しい。石室前部も削平されているため、前庭等の施設の有無は不明である。

主体部の構造 削平と除石がくり返されているため、主体部はわずかにその痕跡をとどめている程度である。裏込石の分布範囲と羨道部に川原石の壁石根石三石が残存するが、本墳の主体部は川原石使用の両袖型横穴式石室で比較的小形なものと推定できる。石室各部の規模を計測できる根拠はない。石室は黒色土面を40cm程掘りこんだ「掘り方」内から構築されている。掘り方面に30cmの厚さに礫を敷きつめ、礫敷上に壁石根石を据えている。「掘り方」の形状は左右壁の方向が平行でなく、石室入口側でせばまる傾向が認められる。

出土遺物 攪乱がひどくほとんど原位置はとどめていない。出土遺物の内訳は玉1点、鉄釘1点、須恵器長頸壺1点、杯1点、甕6点である。6110の大甕は主体部攪乱層より壊れて出土したものである。肩が張り底部にすぼまる胴部に径の大きな直立する口頸部をのせる。頸部は直立して口縁部で急に開き口唇部で短かく立ち上がる。頸部に4本の沈線区画をめぐらせその間を波状文でうめる。頸部と胴部の接合には帯状の凸帯を圍繞する。胴外面は平行タキ目が段状にめぐり、内面は青海波文の当て工具の圧痕を残す。底部付近に焼成後の穿孔がある。



第127図 61号墳 墳丘図



第128图 61号填遺物实测图

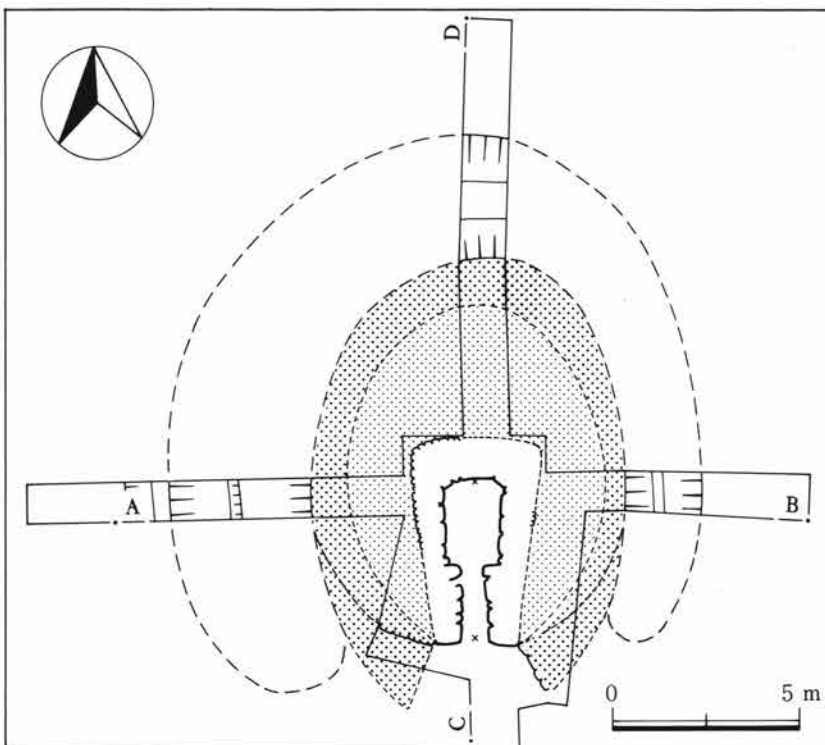
第 62 号 墳

位 置 本古墳群の南東グループに属している。農道の下敷きとなっていたために当初の古墳分布調査には確認がされておらず、周辺調査の進む途中で分布の不自然さなどからその存在が予想されて調査に到ったものである。

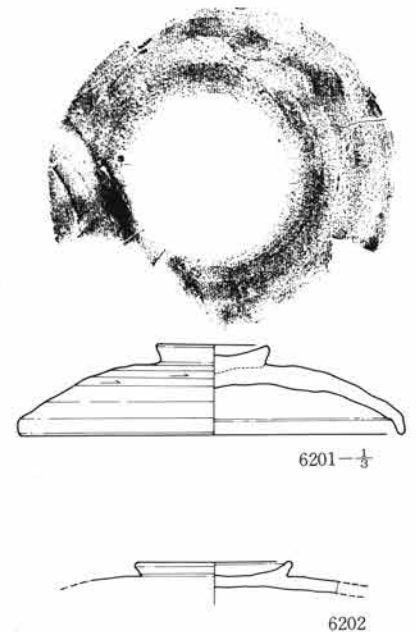
墳丘と外部施設 調査は先づ主体部検出のための発掘区を設けその位置確認後東西南北4方向に墳丘規模と同溝堆積状態を知るトレンチを設定、発掘した。東トレンチでは周溝は短かく深く立ち上がり墳丘盛土は周溝内側の立ち上がり面から盛土されている。立ち上がり面より内側1.2mのところでは葺石根石が検出されている。西トレンチでは周溝はなだらかに幅広い古墳構築以後で、B軽石降下前に住居址の存在が確認されている。石室前の南トレンチは徐々に傾斜を持って南へ下降してゆくが周溝などの存在は認められない。北トレンチは西トレンチに近似してたなだらかで幅広い周溝を持つもので周溝内側立ち上がり面より1.5m内側の盛土を削って葺石根石を配石している。墳丘盛土の厚さは北トレンチが最高を測るが30cm程度しか遺存していない。その結果本古墳の墳形は円墳で葺石までの墳丘規模は6m、周溝内側の立ち上がり部分までは8mを測る。周溝まで含めた規模は14mである。前庭石組は右袖が検出された。埴輪は存在しない。発掘区の中では前庭と葺石列との関係についてまで追求していない。

主体部の構造 壁石のほとんどが削平されていた。主体部は自然石使用の両袖型横穴式石室で石室長4.3mを測る。石室構築は旧表土面から奥壁寄り70cmを掘り下げて長さ5m幅3mの「掘り方」を穿つ。その下の面に砂利を敷きつめて壁石根石を据えている。玄室奥壁は大ぶりの自然石で平の面を横位置に積んで左右を小ぶりの石で小口積にする。玄室左右両側壁根石はその上に積まれる壁石とほとんど変わらない石を横積みないしは平の面を横積みしている。両袖は長さ90cmの石を玄門柱として立てている。羨道左右側壁は大ぶりの石を横積みにしてその上に小ぶりの石を積み上げている。羨道入口部も大石を壁側には小口積みで重ねている。玄室内の補石はほとんどが抜かれて掘り方底面が露出している。羨道部では上面を削られてはいるものの閉塞石の存在が確認されている。

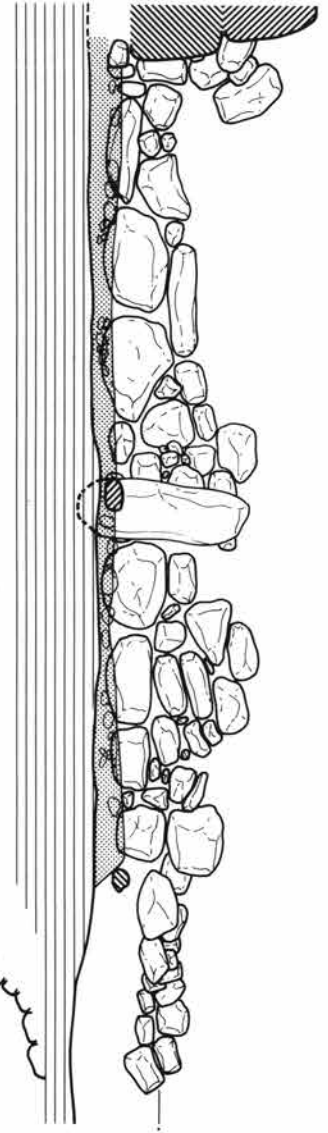
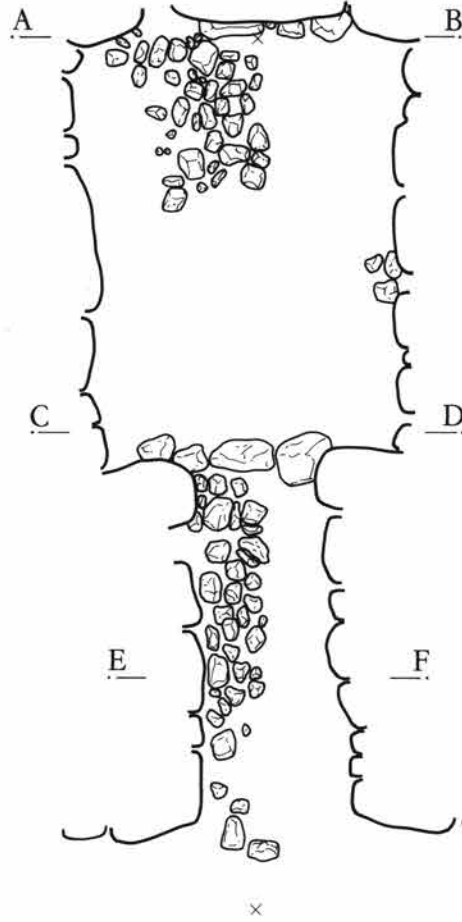
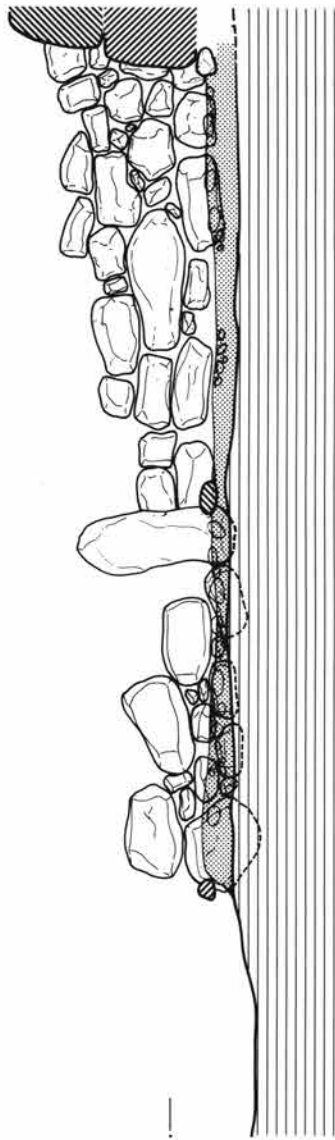
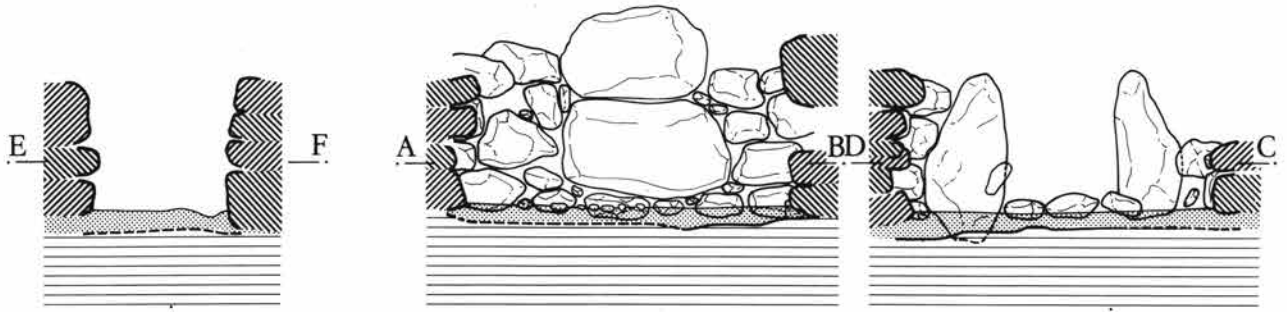
出土遺物 前庭右袖に接して杯と蓋が組み合わされて出土している。玄室内からは破壊をまぬかれた右壁の奥と袖内側から刀子が各1本、中間の部分から骨片の散布が若干認められた。刀子の遺存度は悪く図示できない。他に須恵器杯蓋2点が出土している。環状の大きなつまみを持つ。



第129図 62号墳 墳丘図



第130図 62号墳遺物実測図



168.00



第131图 62号填石室实测图

0 1 m

第 63 号 墳

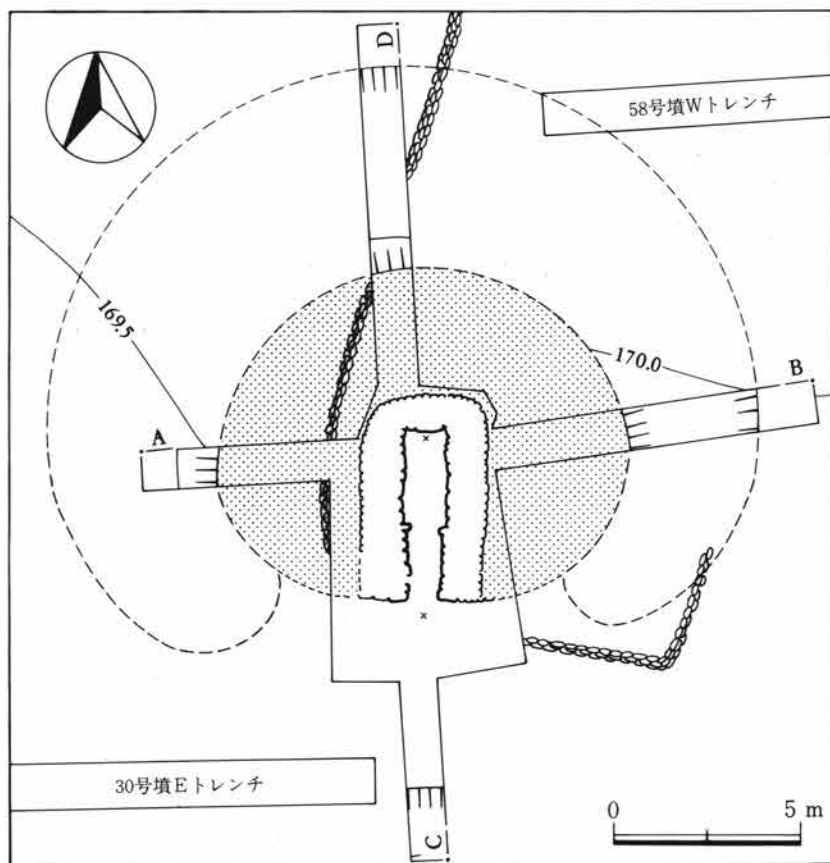
位 置 本古墳は、古墳群の中央部西側に位置し、53号墳の西約30mほどのところにある。

墳丘と外部施設 本古墳の墳丘は、その形状をほとんど止めないほどに削平され、調査時点で新たに発見されたものである。調査の結果、墳丘は旧地表面の黒色土層及びその下部の暗褐色土層を20～30cmほど掘り下げて墳丘裾部を成形しており、東西径約11mほどの円墳であることが確認された。墳丘の東・北・西の三方には幅約1.5m、深さ30cm前後の周溝がめぐる。葺石は、石室入口部左右にその一部が残り、墳丘北側及び西側にも葺石の一部とみられる石の配列が残るが、その大半はすでに抜き取られ、全周していたか否かは不明である。なお、後述の石室裏込めの外周石組と石室入口部右側に残る葺石とが合致する部分で、前庭とみられる配石が確認されたが、その石組の大半は抜き取られ形状、規模は不明である。なお、本古墳には埴輪の配列は見られない。

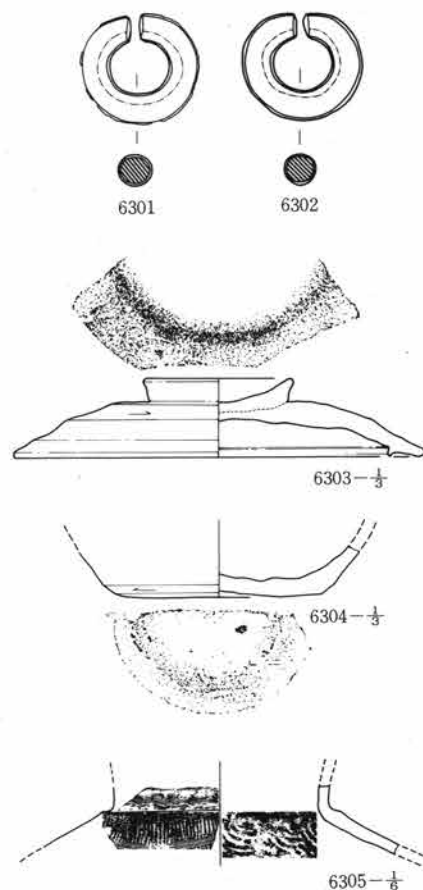
主体部の構造 川原石を使用した両袖型の横穴式石室。全長4.64m、奥幅1.17mと比較的小形である。石室は北側の最も深いところで60cmほどに掘り下げた幅3.5m、長さ5.5mの隅丸長方形の「掘り方」の中に構築している。「掘り方」底部には小礫を敷きつめ、その上に壁石根石を設置している。床はこの小礫の上に10cm前後の厚さに小円礫を敷きつめて構成し、石室入口部と玄室入口部には川原石数個を並べて梱石とし、羨道いっぱいには閉塞している。左右側壁は比較的小さな川原石を小口積とし、奥壁にはやや大きめの石を使用している。壁の裏側には50cmほどの厚さに裏込めをし、その外周の石組はほぼ隅丸長方形にめぐる。玄門はない。

出土遺物 本古墳からは、須恵器甕、杯蓋、杯身が出土している。杯蓋は大ぶりの環状つまみで身受部はかえりが残る。金環は2個1組出土している。

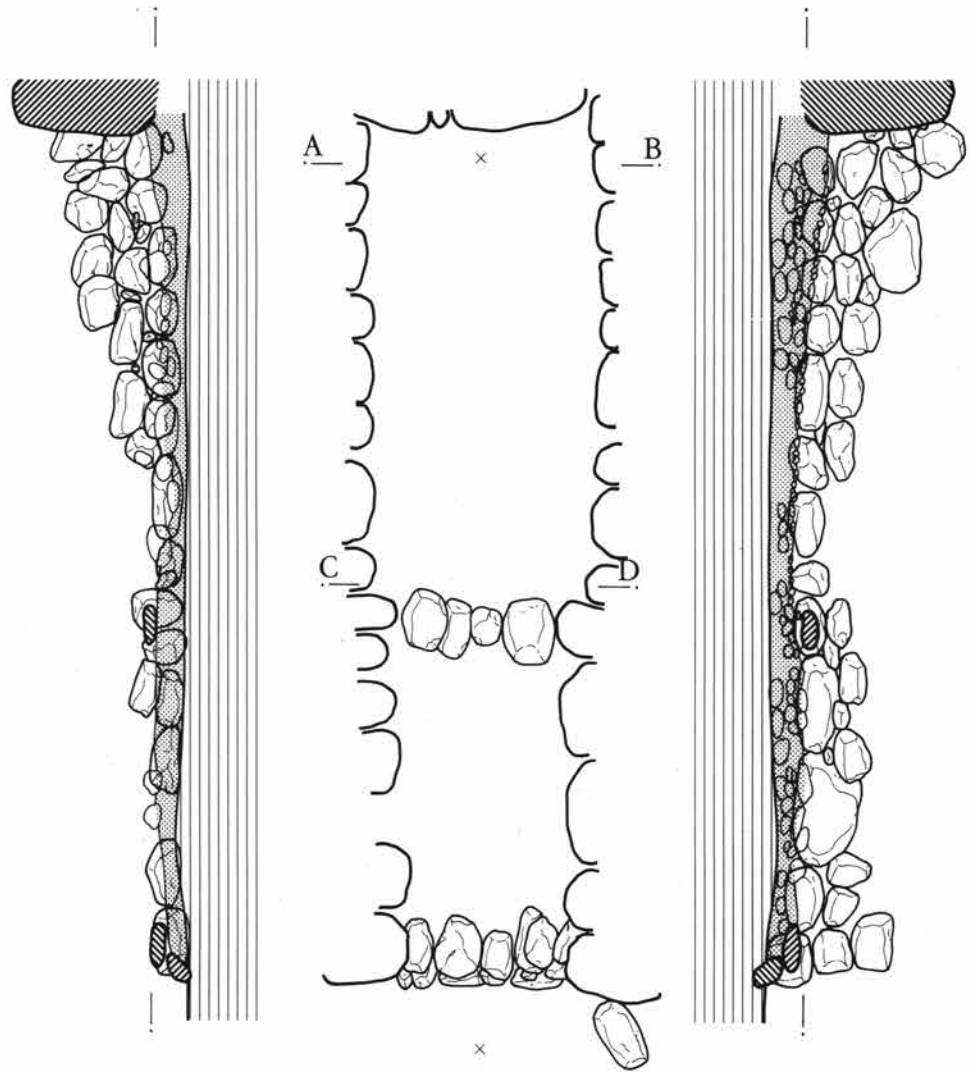
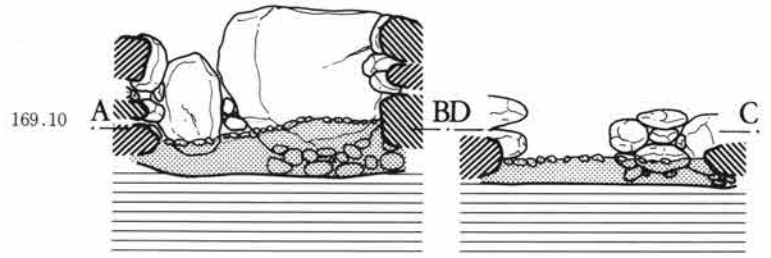
小 結 本古墳は部分的に葺石を残す偏平な円墳で、墳形からは、前庭部分について積極的な存在は推定できない。南西部分の30号墳を意識的に避けて周溝がめぐるような位置関係にある。



第132図 63号墳 墳丘図



第133図 63号墳遺物実測図(1)



第134图 63号墳
遺物実測図(2)

第135图 63号墳石室実測図



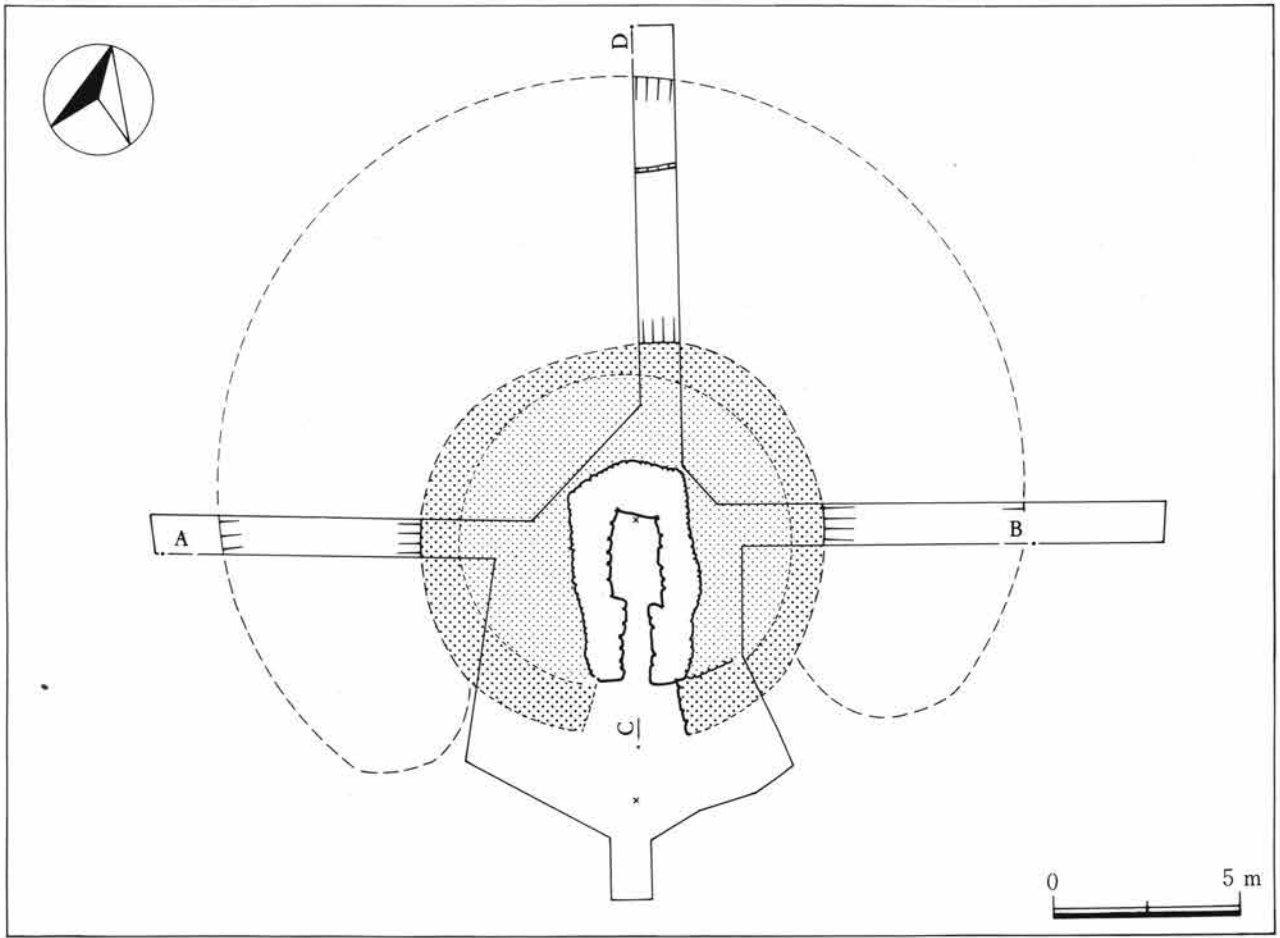
第 64 号 墳

位 置 古墳群中南端グループに属する小円墳である。近接する北側に9号墳、南西側に16号墳が位置する。

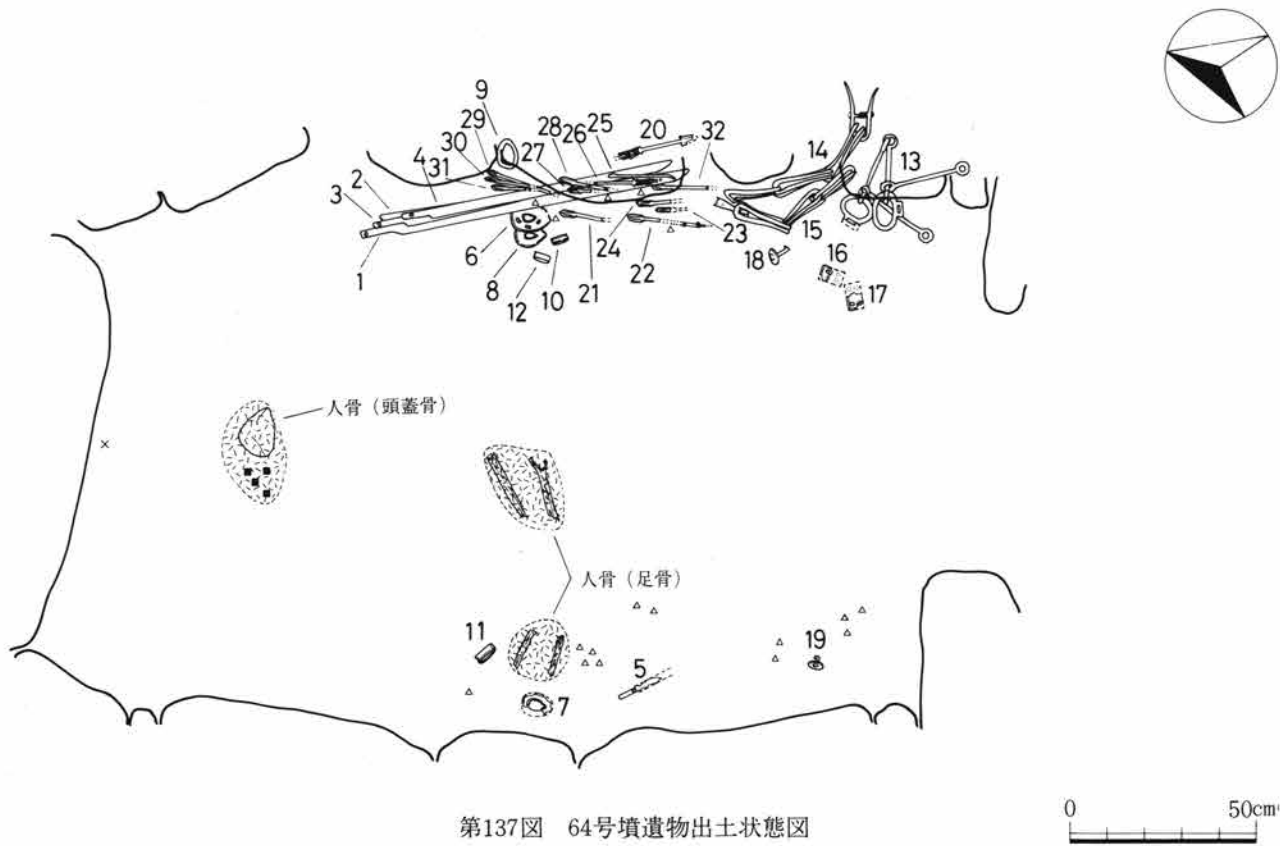
墳丘と外部施設 東西南北方向へ4本のトレンチを設定して墳丘と周堀を確認し、主体部は全掘した。東トレンチでは旧表土面より40cmの厚さに墳丘盛土が残存しており、周堀の端まで続く。周堀はなだらかな曲線を描き深さは堀中央で40cm、幅は5.3mを推定させる。トレンチ東端では更に逆傾斜を持つ掘り込みが確認されており、もう1基の古墳の存在を推定させる。西トレンチでは現耕土面をブルドーザーにより大規模に削平されている。西傾斜で旧表土面より30cmの深さのなだらかな周堀を持つが外側の立ち上がりは検出していない。南トレンチでは羨道前面より南12mの位置に平安時代の住居址が2軒確認されている。周堀はない。北トレンチでは奥壁後方9mの位置から北へ旧表土面下にまで達する大規模な攪乱を受けている。墳丘盛土は30cmの厚さを残すのみで、盛土範囲は周堀の落ち込み部分にまで達する。周堀は後方の10号墳との間に古墳が存在しないと考えるならば、2段の掘り込みを持つと考えられ、深さは50cm、幅は6.4mを測る。各トレンチの観察結果をまとめると以下のように考えられる。墳丘盛土は残存高50cmを測り周堀立ち上がり部分にまで盛土が積まれている。葺石や墳据根石も認めることはできず埴輪の樹立も認められない。前庭は存在する。墳丘径は10.5mの円墳で周堀は南面の切れる馬蹄形を呈する。周堀外側までの立ち上がり径は18.5mを測る。

主体部の構造 右側に前庭袖を残し両側壁に胴張りを持つ両袖型横穴式石室である。奥壁は平の面を立てて根石としておりその上にも同様な石組が2石並んで乗せられている。玄室左壁は長さ50cm大の石を横に並べて根石とし、その上に長さ80cm大の大き目な石を乗せて壁面を構成する。玄室右壁は長さ40cm大の石を横に並べ根石とし、更に同様な石を3～4石上に積み上げてゆく。羨道部は左右同様に長さ40cm大の石を根石に据えて横積み、小口積みに混ぜて壁面としている。羨門部、玄門部ともに同規模な石を積み重ねたのみである。前庭部は右袖を検出した。羨道入口の袖石外側より5石並んでおり、外周をめぐるラインとの関係は不明である。これらの石室石組は幅3.3m長さ6.7mの楕円形の平面形で奥壁側で約60cm掘り込んだ土壌の中に組み込まれている。裏込めの厚さは壁石内側より約1mを測る。石室内の床面敷石は玄室内は30cmの厚さに、羨道内は50cmの厚さを測る。敷石の大きさは15～20cm大の扁平な石である。当然羨道部が20cmほど高くなっており羨道両口には大きめな石を横または小口に組んでいる。なお玄室床面の敷石上には玉砂利が薄く敷かれている。羨道部はこの床面上にも閉塞の石組が存在していた。

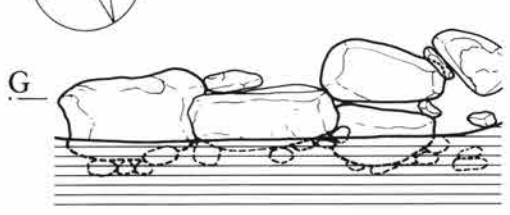
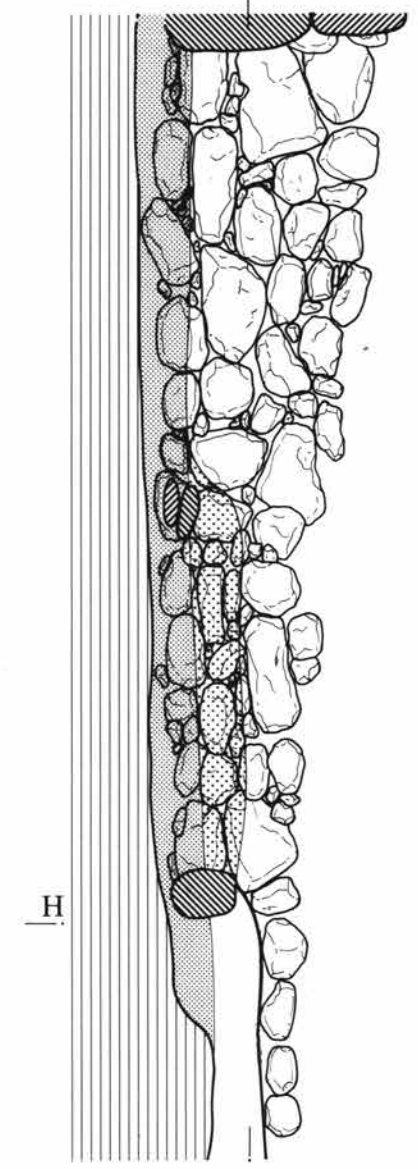
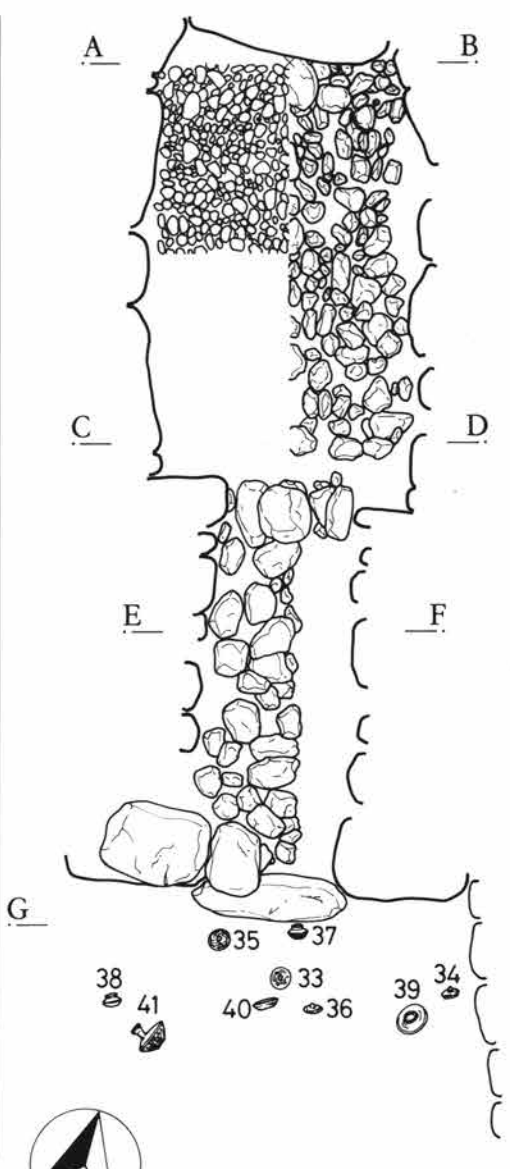
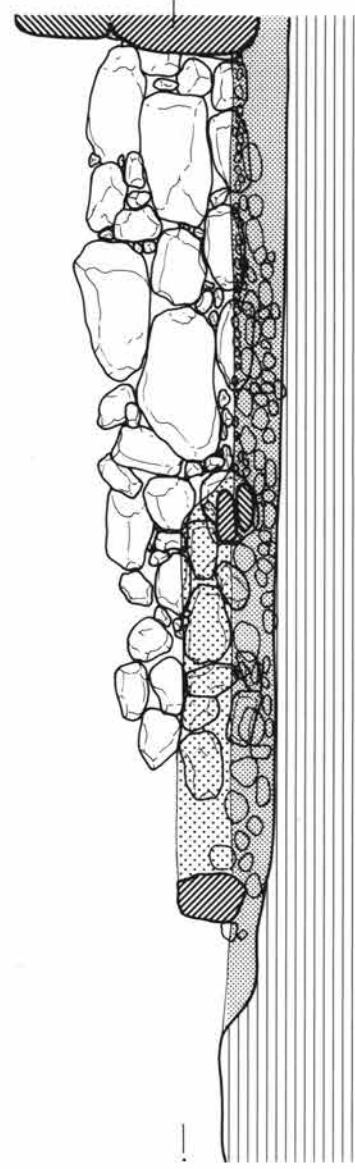
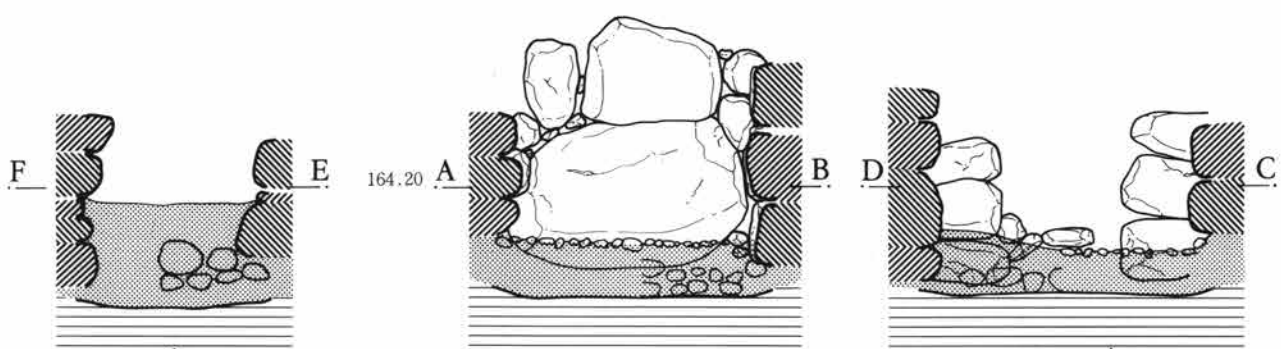
出土遺物 閉塞石組の遺存も良好で玄室内の出土状況も大いに期待されたが遺物は比較的少なかった。玄室奥壁中央寄りに人骨で頭蓋骨を中心に、玄室中央に大腿骨、左壁中央に大腿骨とそれぞれ分散して出土している。これらは追葬による「かたづけ」を考えることができる。石室内への副葬品は玄室左壁寄りに切先を羨道方向に向けて大刀が4本出土している。また付近から鉄鏃が出土している。左袖部分には馬具が出土している。1組の鎧と轡である。その他左壁寄りには鉄製品の若干の出土がみられた。前庭からは杯蓋を主体とした小形須恵器、墳丘表土からは須恵器甕が出土している。大刀は4本出土しており平棟平造で切先は3本がふくら切先、1本はふくらが枯れる。鏢は4個、多孔で8窓と考えるもの1個、無窓のもの2個、喰出鏢1個である。幅木は3個出土している。幅広の鉄板を環状にしたものである。馬具の轡は2連の銜で鉄棒の断面は角である。引手は断面角の素棒で両端は大小の環状で終わる。鏡板は半円形の環状を呈し、直線部に長方形で板状の立間が取りつく。鎧は断面角の鉄棒でつくられている。鉸具の刺金も同質のものである。鎖は兵庫鎖である。鎧は木製で頂部の部分に「ハ」の字状にひらく金具を装着するものと考えられる。他に帯金具が2種出土している。鉄鏃は大きく4種類に分類できる。両刃と片刃剪式で逆刺があるものとなないものに大別できる。他に刀子の茎部分が1点出土している。前庭からは須恵器が出土している。小形の直口壺とこれに組むと考えられる杯蓋である。蓋は宝珠のつまみを持ち、かえりはしっかりと立つ。平瓶は天井部は扁平で体部との境に稜を持つ。口頸部はラッパ状にひらき口唇部は退化した折り返しを持つ。その他、短頸壺2点、壺上半部2点が出土している。



第136図 64号墳 墳丘図



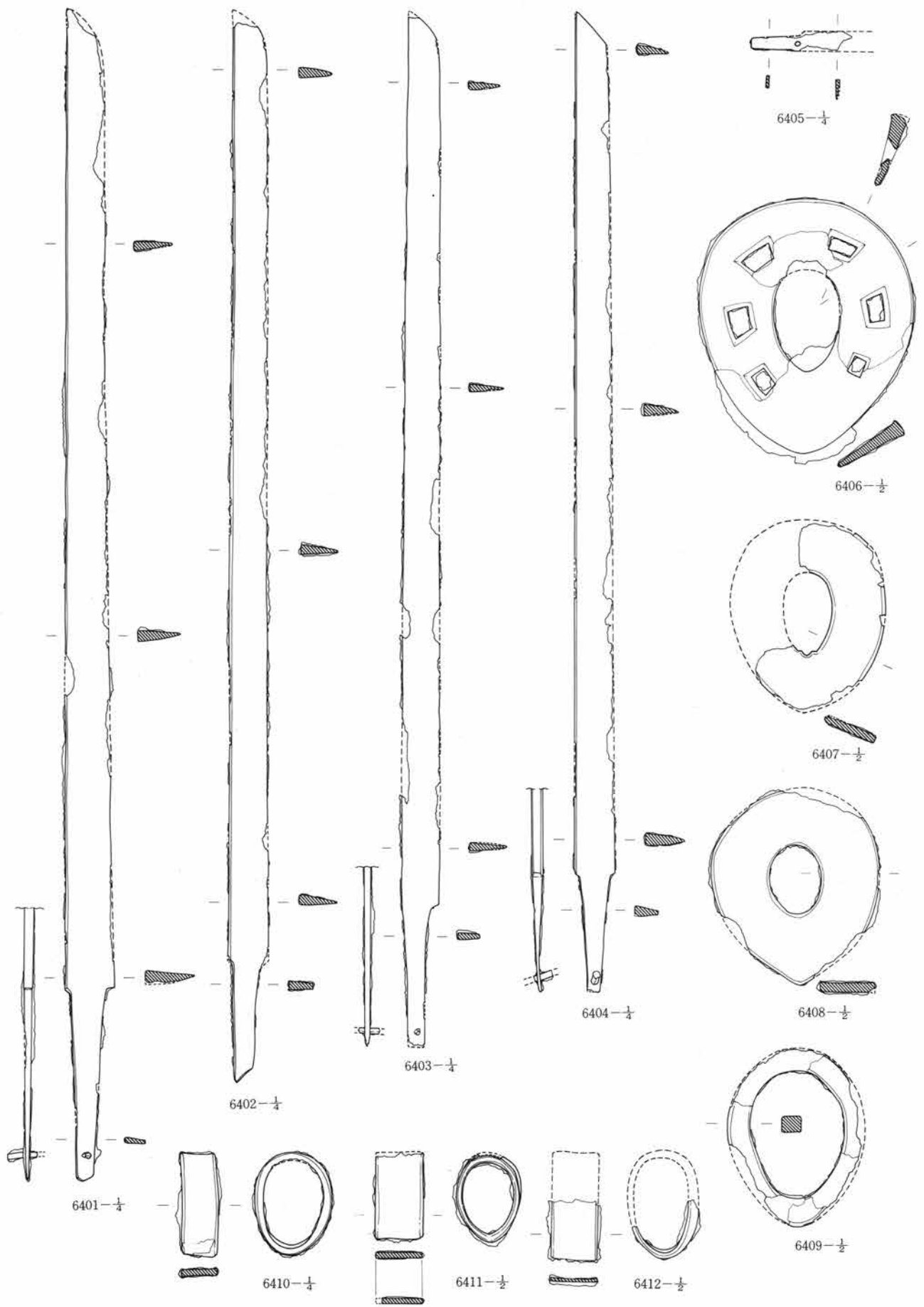
第137図 64号墳遺物出土状態図



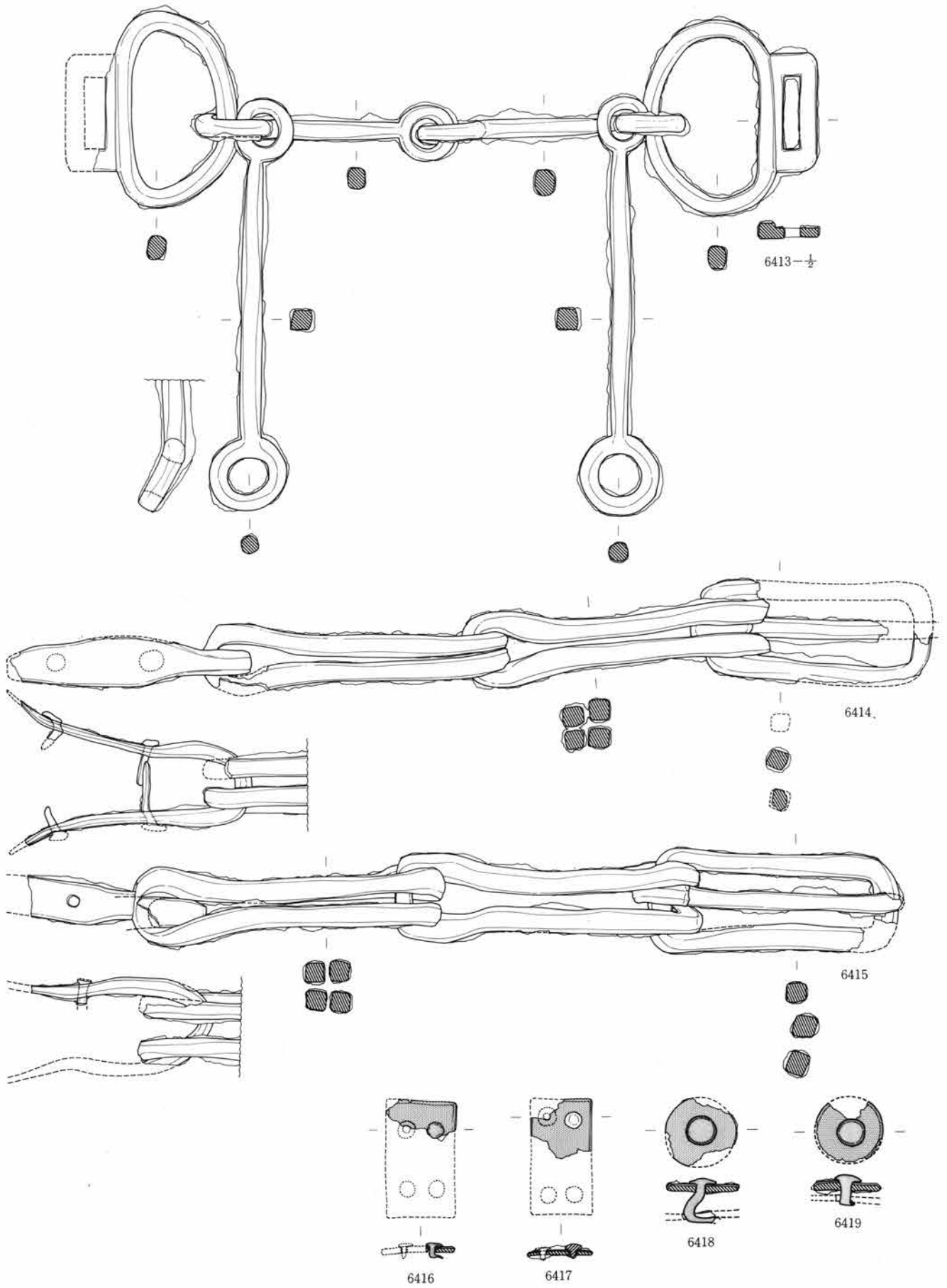
×

第138图 64号填石室实测图

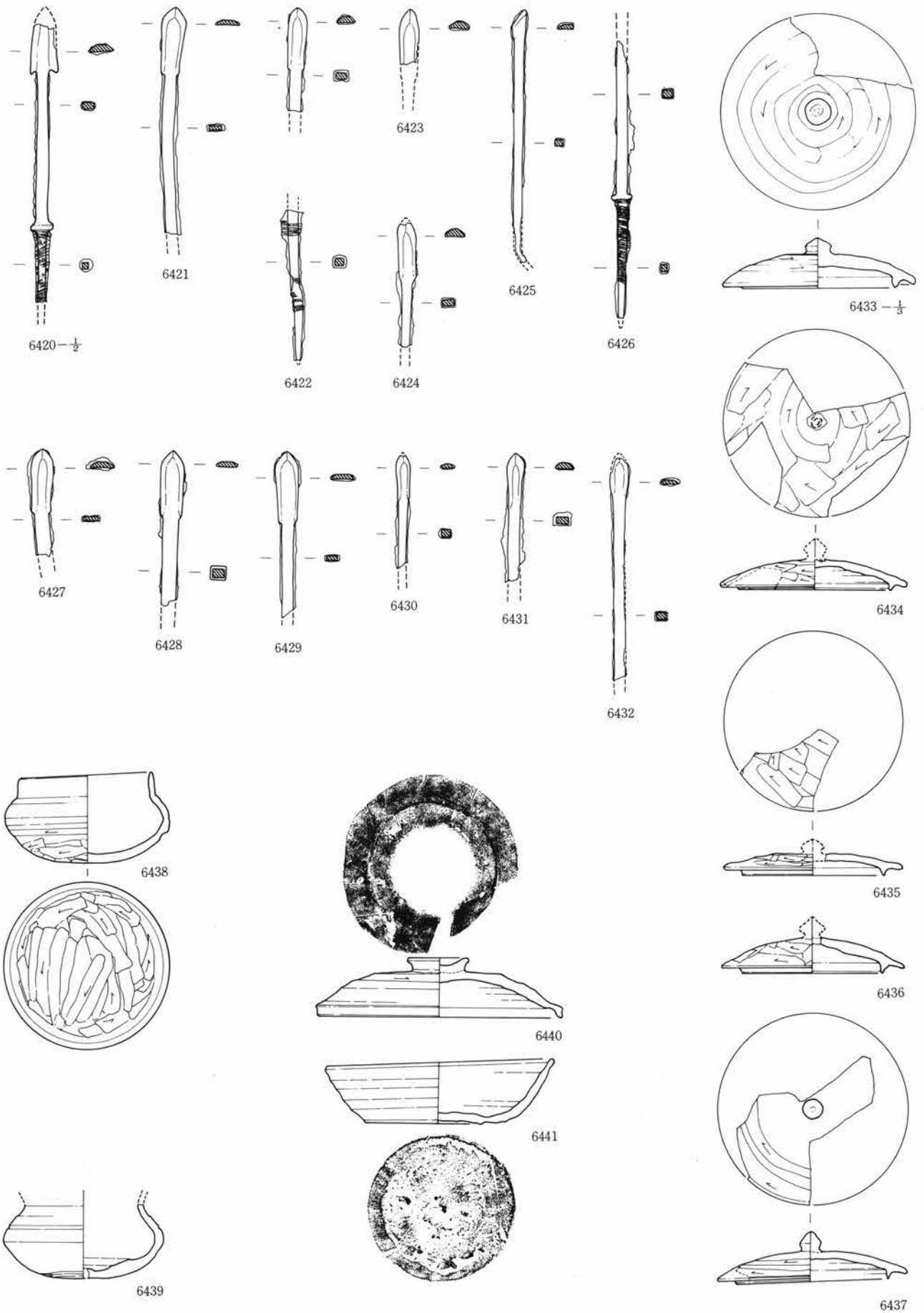




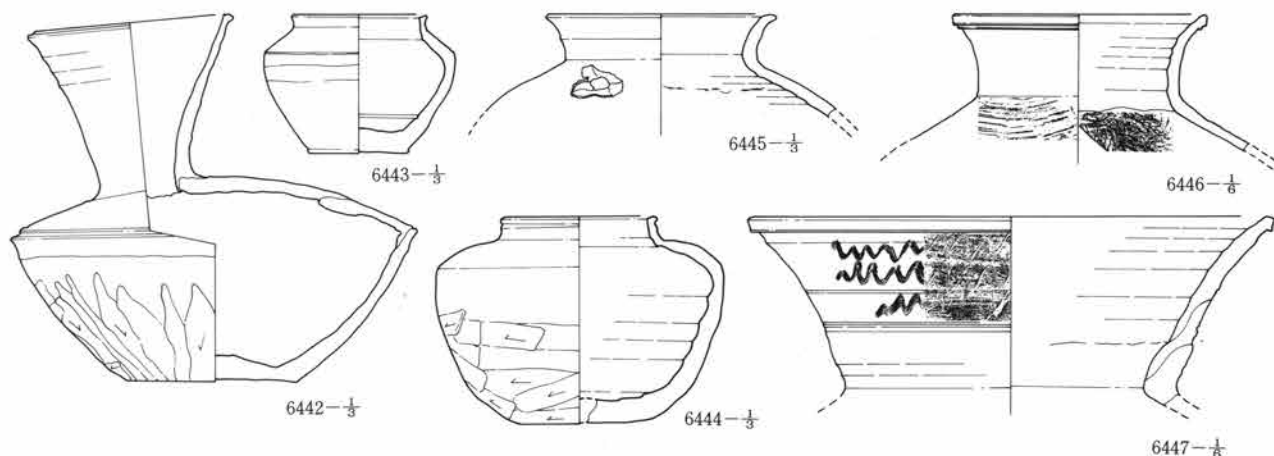
第139图 64号填遺物实测图(1)



第140图 64号填遺物实测图(2)



第141图 64号填遗物实测图(3)



第142図 64号墳遺物実測図(4)

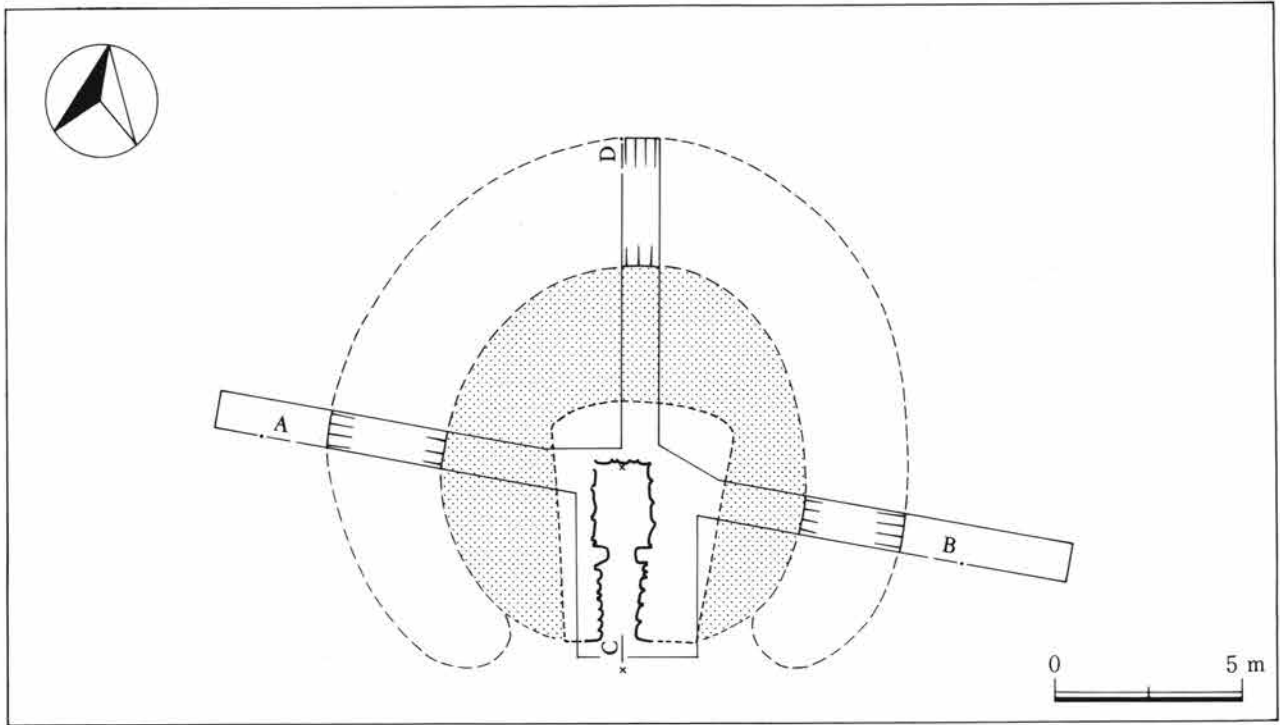
第 65 号 墳

位 置 古墳群中最東端に位置する。周辺と約1m程度の比高差を持つ低台地上に位置し奥壁と考えられる1石のみが突出し墳丘はすでに平夷されていた。

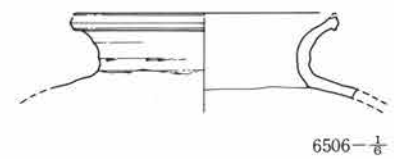
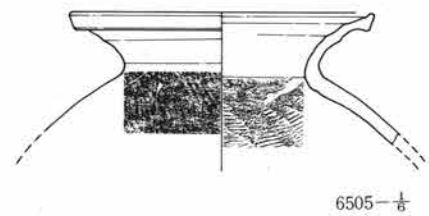
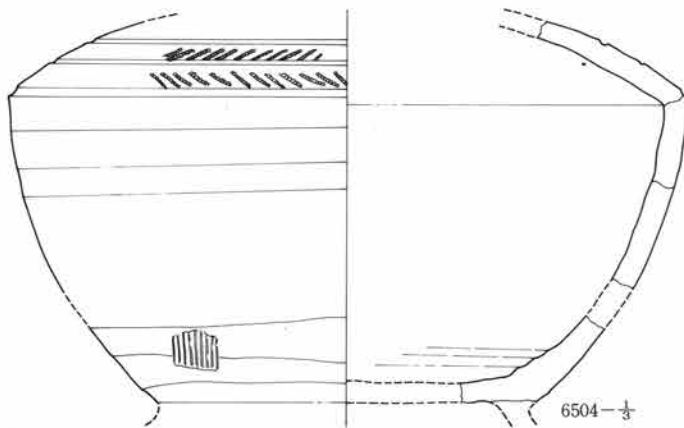
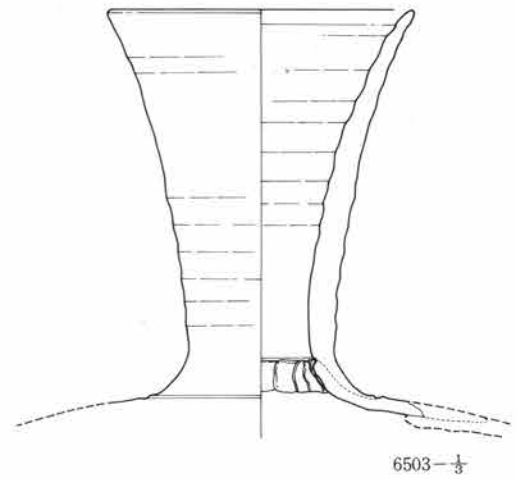
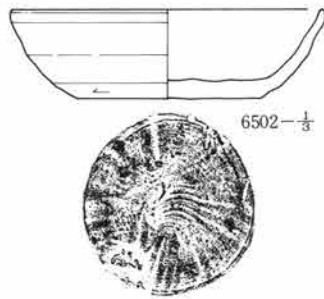
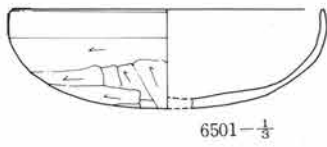
墳丘と外部施設 主体部を確認するべく奥壁と考えられる立石を中心に磁北に合わせて東西トレンチを設定し発掘にかかった。主体部の位置を確かめたのち北トレンチを奥壁背面に設定、発掘した。東トレンチの土層観察の所見では墳丘盛土は石室裏込め付近に10cmほどの厚さで残るのみでほとんど攪乱層と現耕作土層で占められる。周堀は旧表土面を40cm掘り下げており堀幅は2.7mを測る。西トレンチでも表土部分は平夷されており、盛土がわずか40cmの厚さで残り、平面的な盛土範囲は周堀立ち上がり部分まで及ぶ。周堀の断面形は盛土の切れる部分に葺石根石が据えられ、ゆるやかに周底に到る。反対側の立ち上がり面は確定できないが旧表土面より深さ70cm、幅3.1mを復原できる。更にこの立ち上がり面より凹凸を持ちながら西への傾斜がみられる。本古墳の西側へもう1基古墳が存在していることも考えられる。北トレンチでも墳丘のほとんどは平夷されてはいたが盛土の残存厚さ30cmを測る。周堀は盛土の終わる部分より幅3.4mを測り、旧表土面からの掘り込み深さは40cmを測る。これらの結果をまとめると墳丘規模は径9.6mの円墳で周堀を含めた規模は15.6mを測ることがわかった。前庭施設や埴輪の樹立などは認められない。

主体部の構造 全長4.65mの両袖型横穴式石室を主体部に持つ古墳である。主体部は長さ6mで玄室側で幅4.5m、羨道側で幅3.5mのバチ型の「掘り方」を持ち奥壁寄りでの掘り込み深さは旧表土面から0.5mを測る。壁石はこの「掘り方」底面に敷かれた葉書大の偏平な石敷の上に配置される。奥壁は安山岩の割石を立て、左右を川原石を小口積で押えている。玄室の側壁根石は川原石の大石を横積み、又は小口積みとして2段目以上はやや小ぶりの川原石を用いている。両袖石には川原石を玄門柱として立てて使用する。1石のみ原位置を保つ天井石はこの玄門柱上に架構される。羨道部側壁は根石とほとんど大きさの変わらない大きさのものを全体に小口積として積み上羨道部入口は他の羨道部壁石と変わらない大きさのものを小口積に積み重ねている。羨道部入口と玄門部には壁石の倒れを防ぐ目的なのか、「掘り方」面に平の石を数石配して組み込む。床面は「掘り方」底面には大ぶりの平石を、上面には小粒の砂利を敷いて構成する。閉塞は羨道部の前後に主軸方向に長い石を小口積みに組んでその中に径10~20cm大の石を充填している。

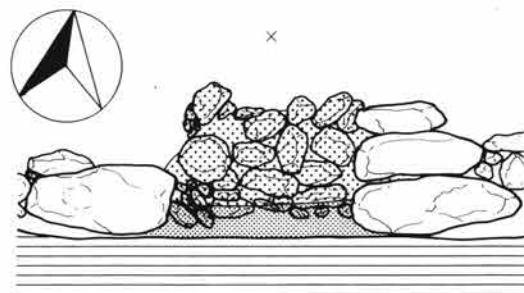
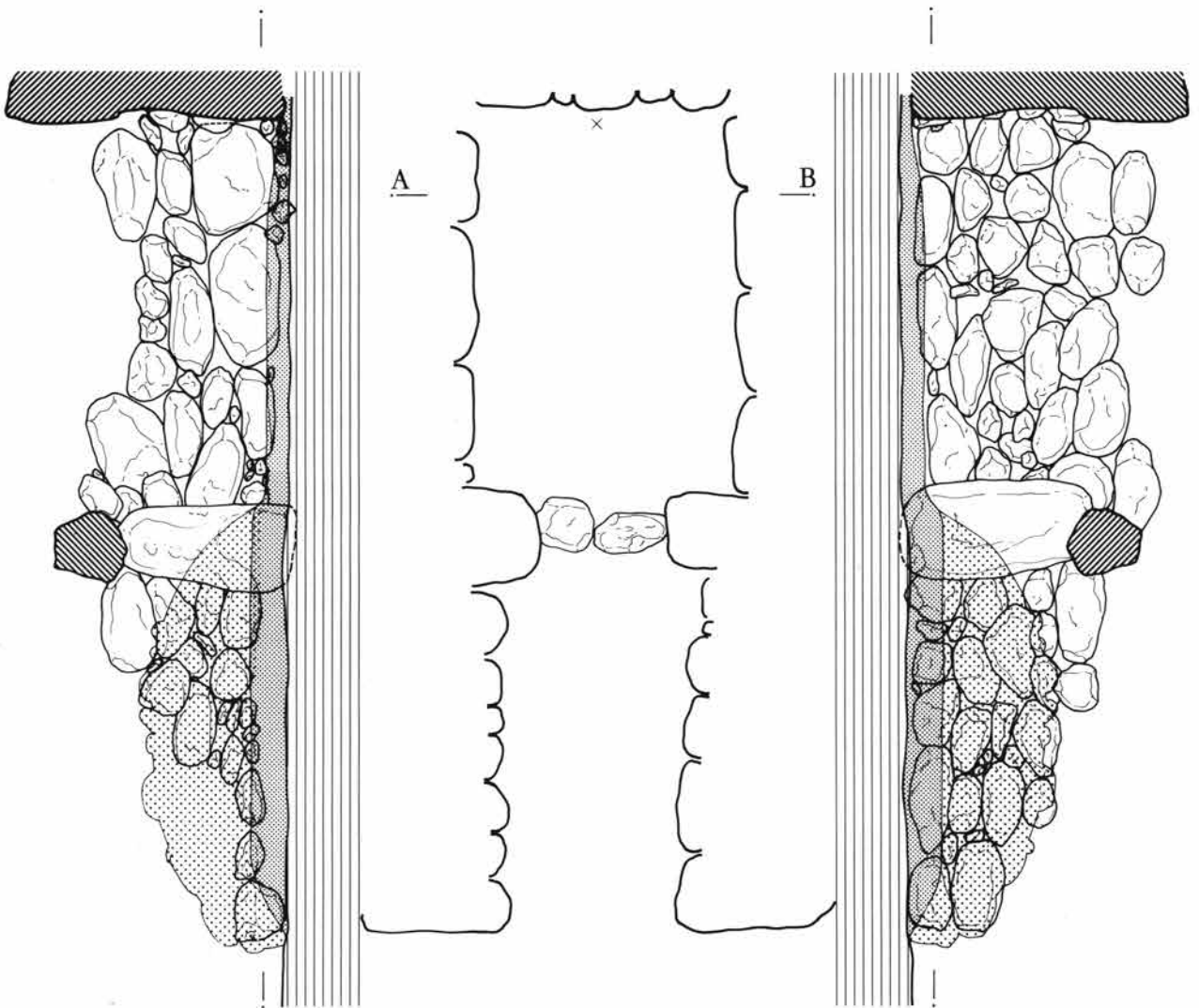
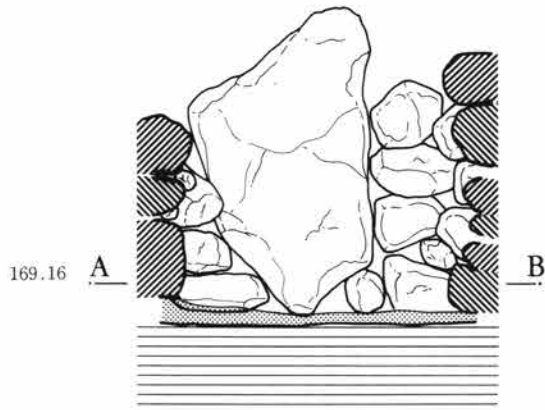
出土遺物 墳丘表面から須恵器、石室埋土中から土師器が出土した。石室埋土中下部より鉄鏃も出土している。しかし鉄鏃は遺存が悪く図示できない。土師器は杯、須恵器は杯身、長頸壺、台付長頸壺、壺2点が出土している。



第143図 65号墳 墳丘図



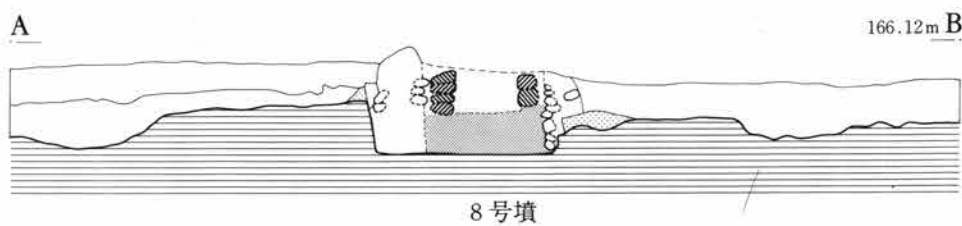
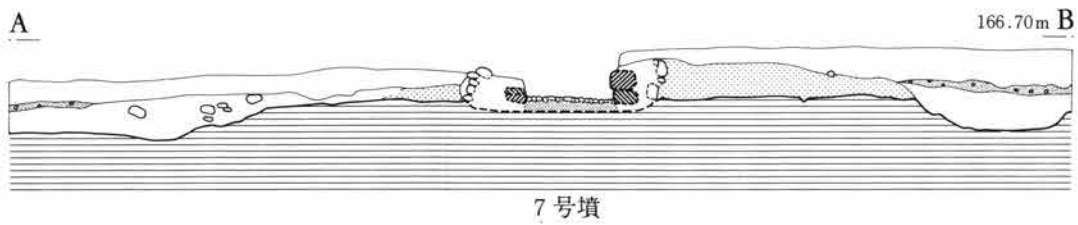
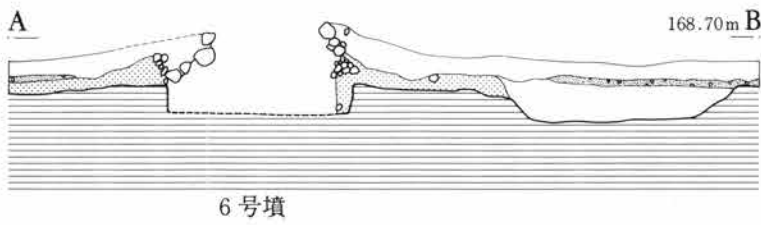
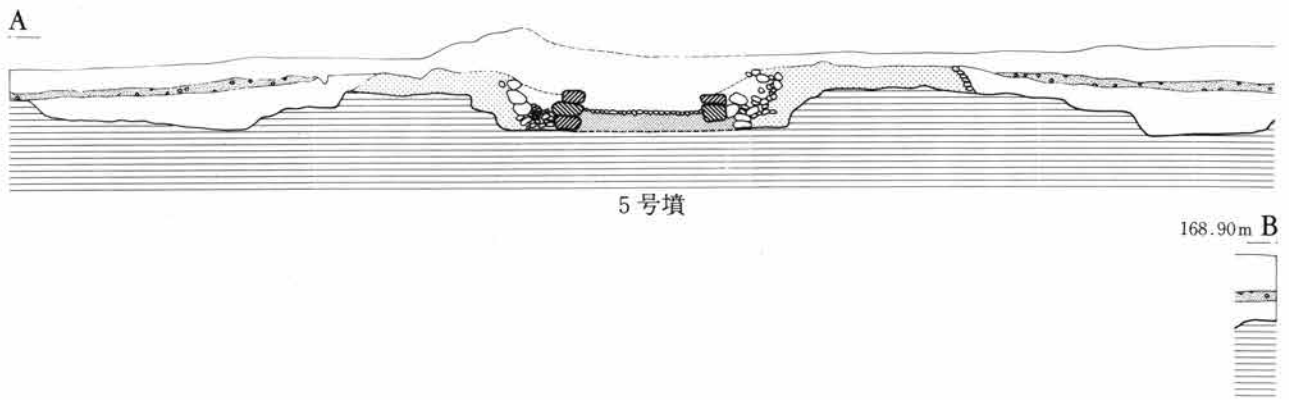
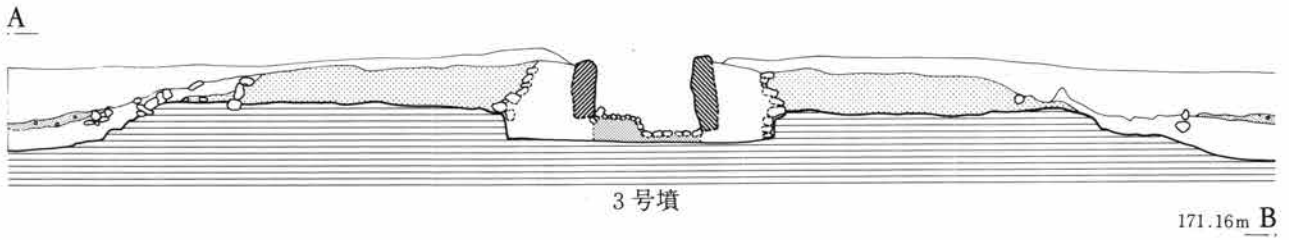
第144図 65号墳遺物実測図



第145图 65号填石室实测图

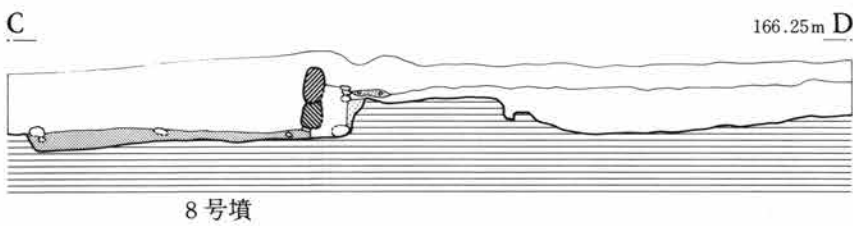
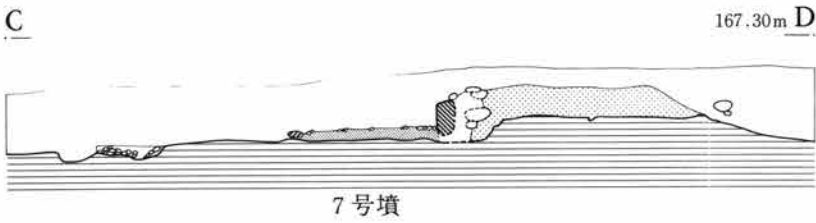
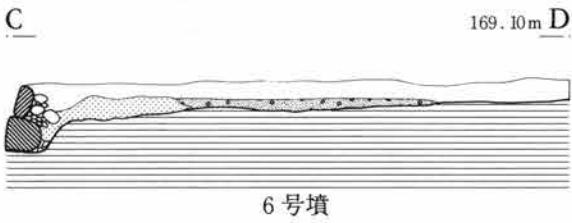
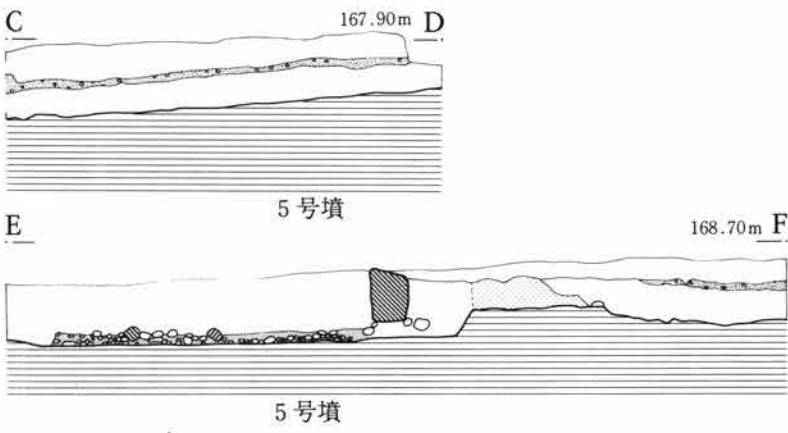
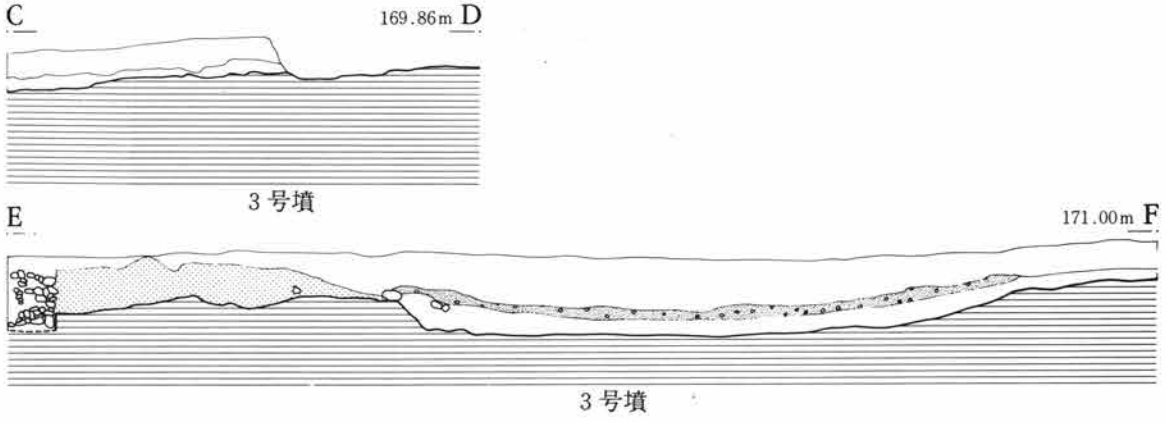
0 1 m

墳丘断面図



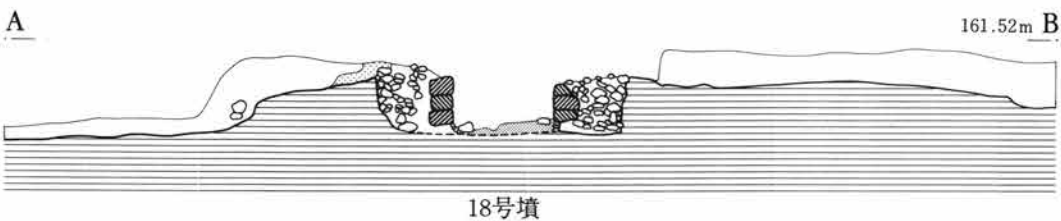
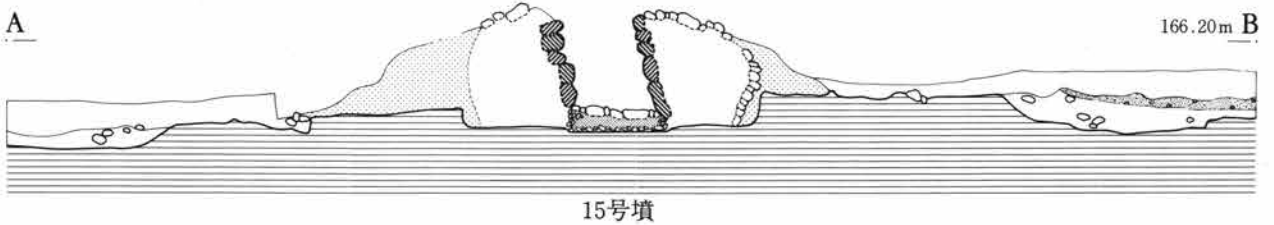
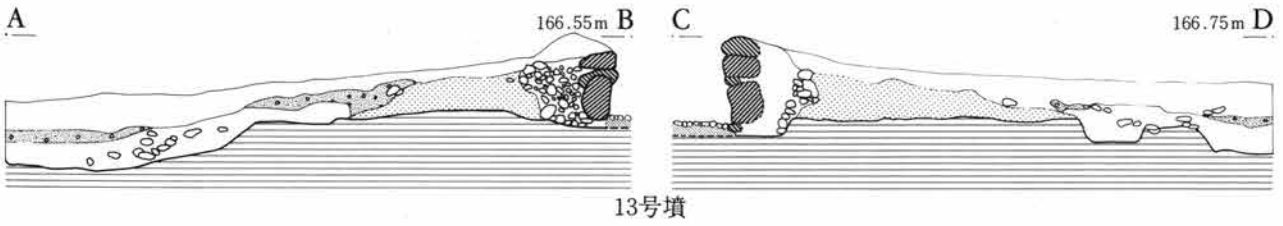
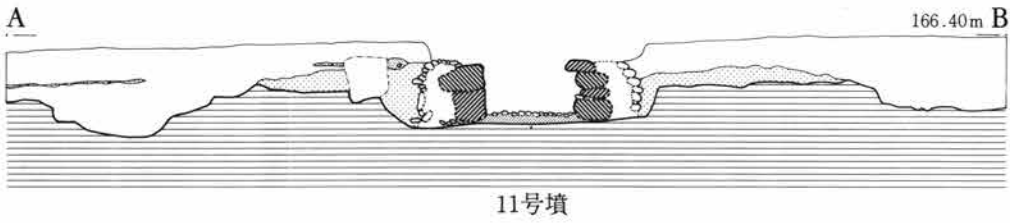
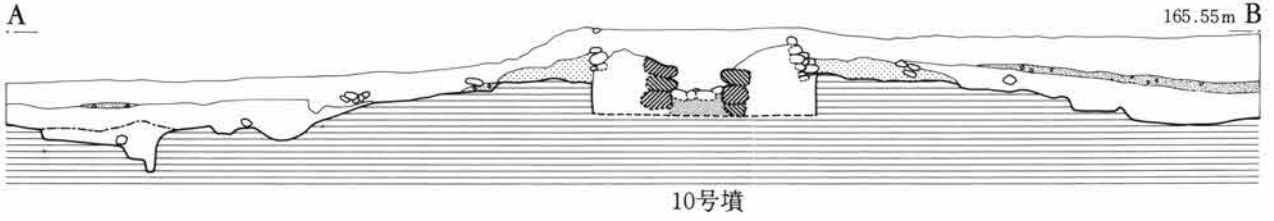
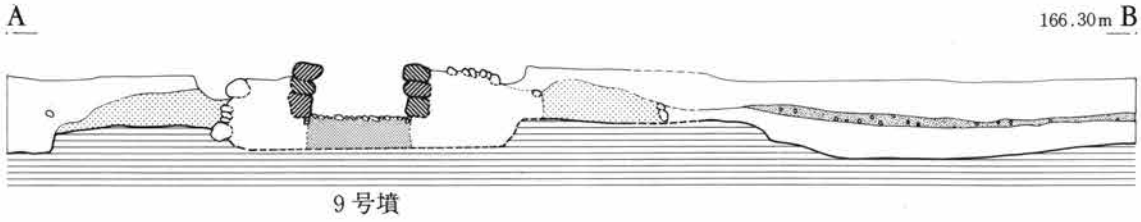
第146図 EWトレンチ断面図(1)





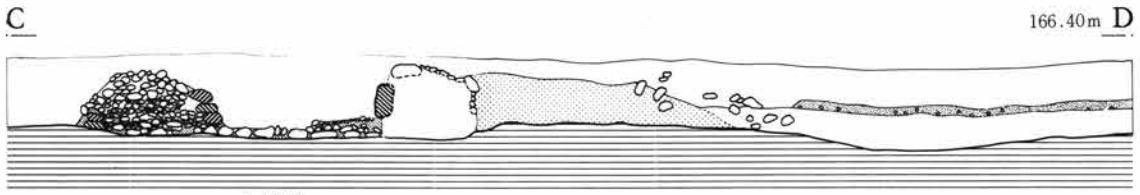
第147図 NSトレンチ断面図(1)



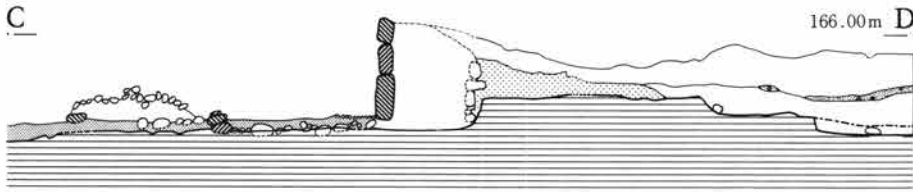


第148図 EWトレンチ断面図(2)

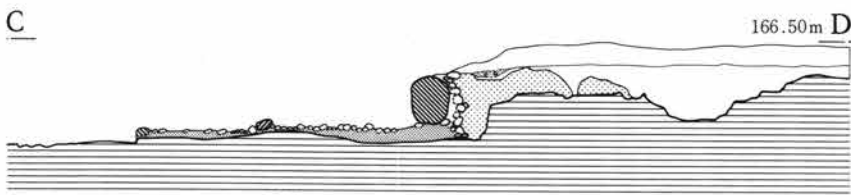




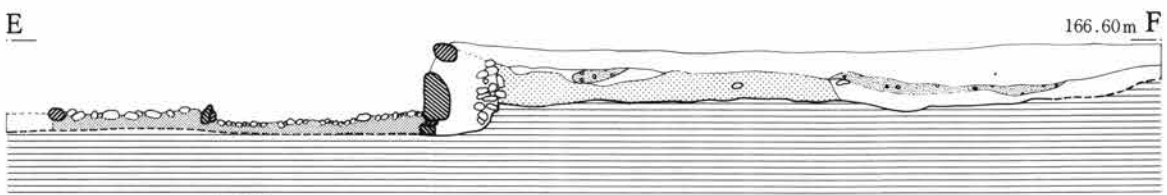
9号墳



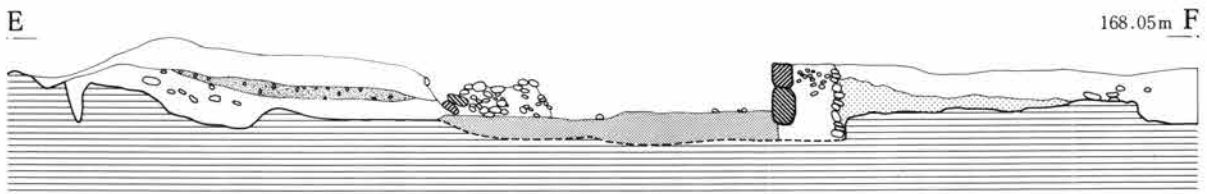
10号墳



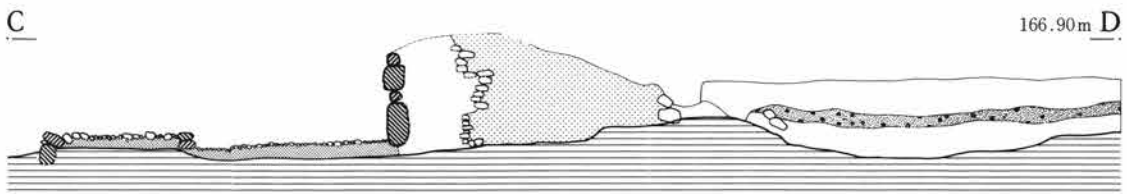
11号墳



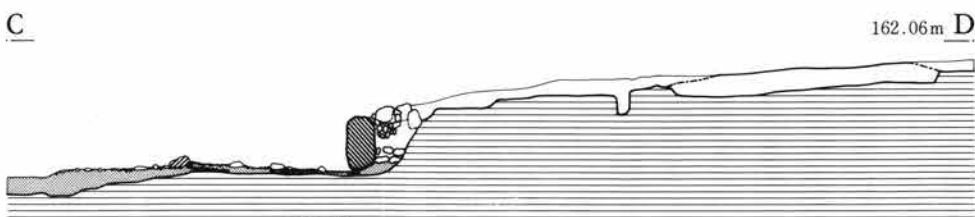
13号墳



14号墳



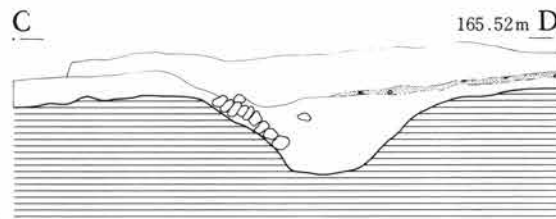
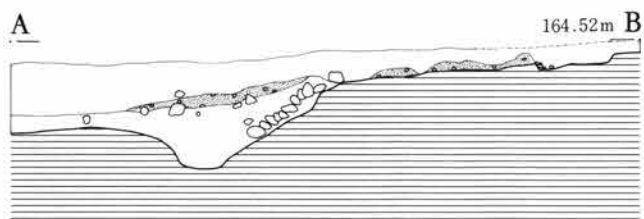
15号墳



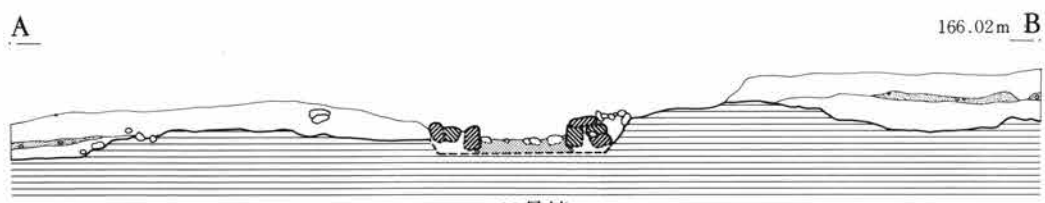
18号墳

第149図 NSトレンチ断面図(2)

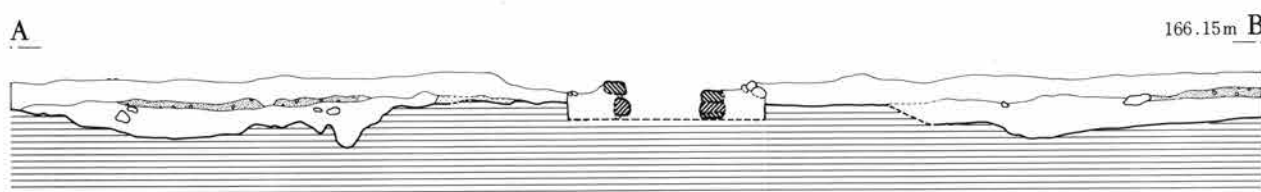




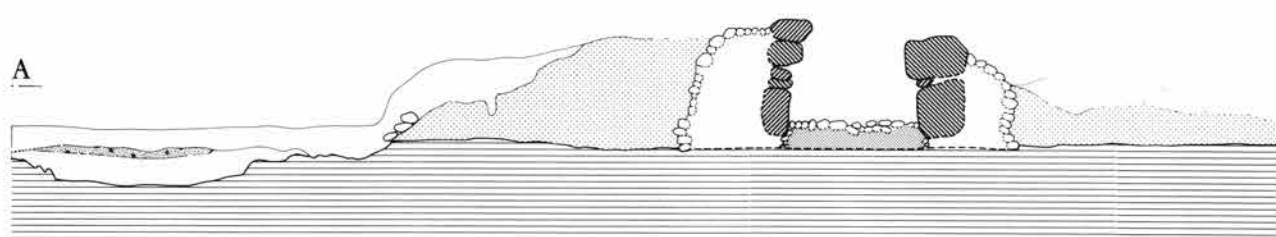
21号墳



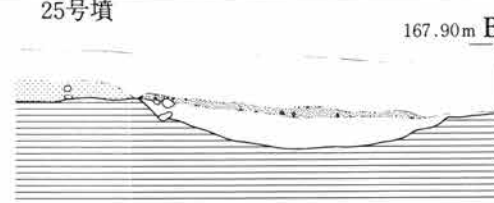
22号墳



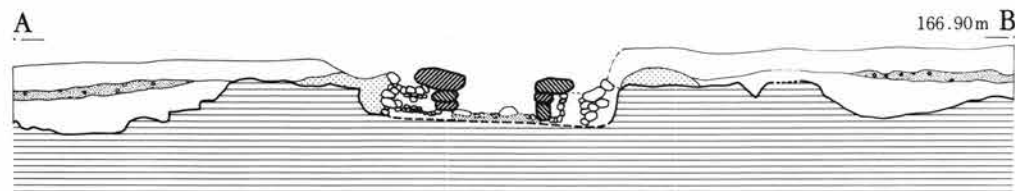
23号墳



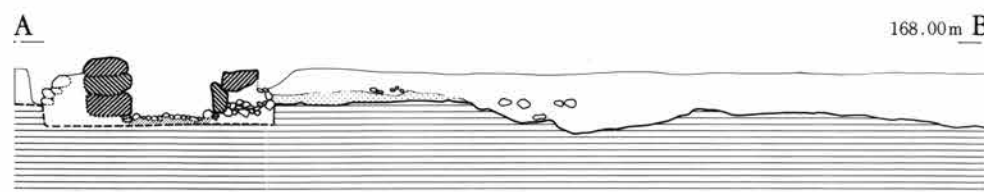
25号墳



167.90m B



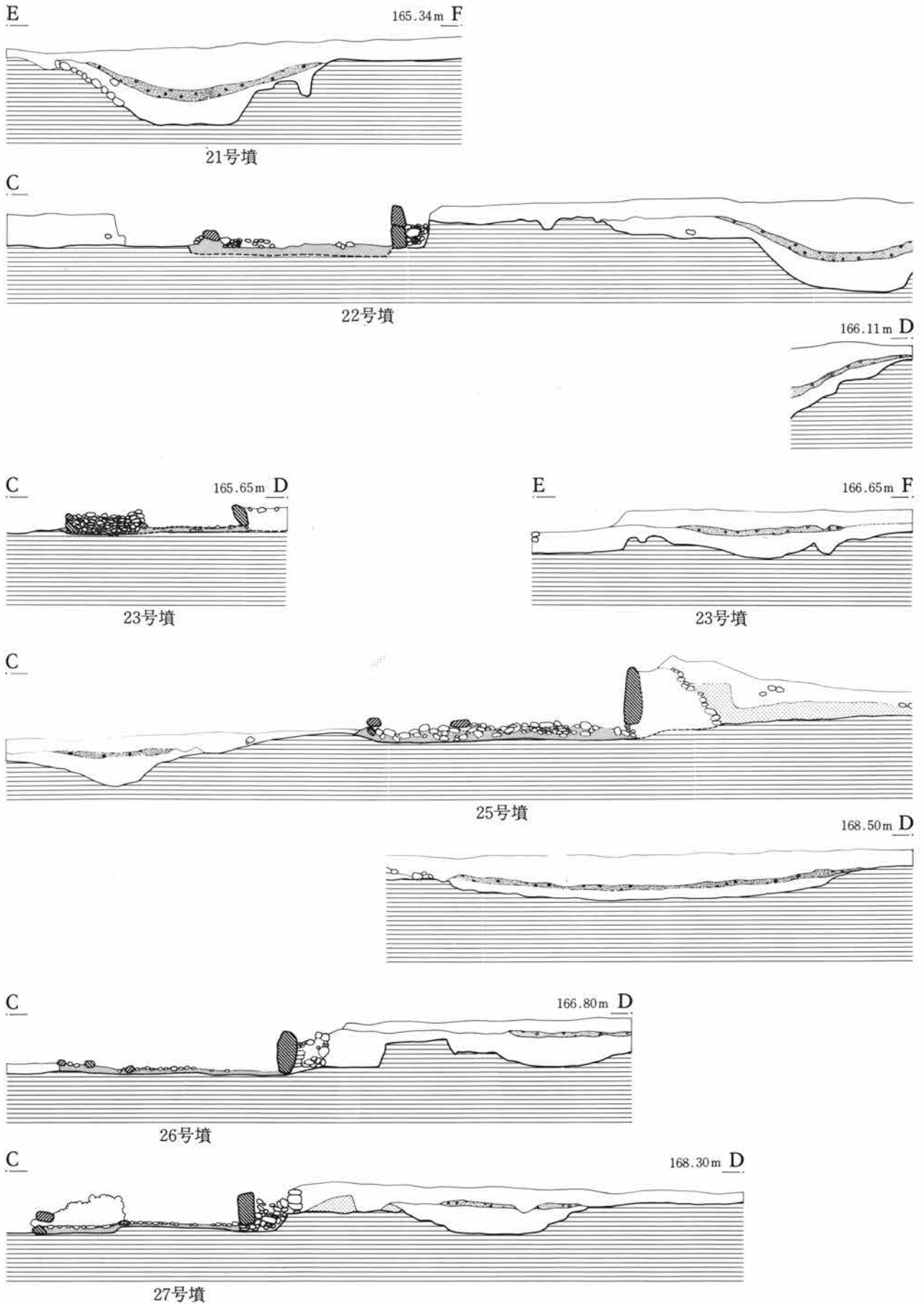
26号墳



27号墳

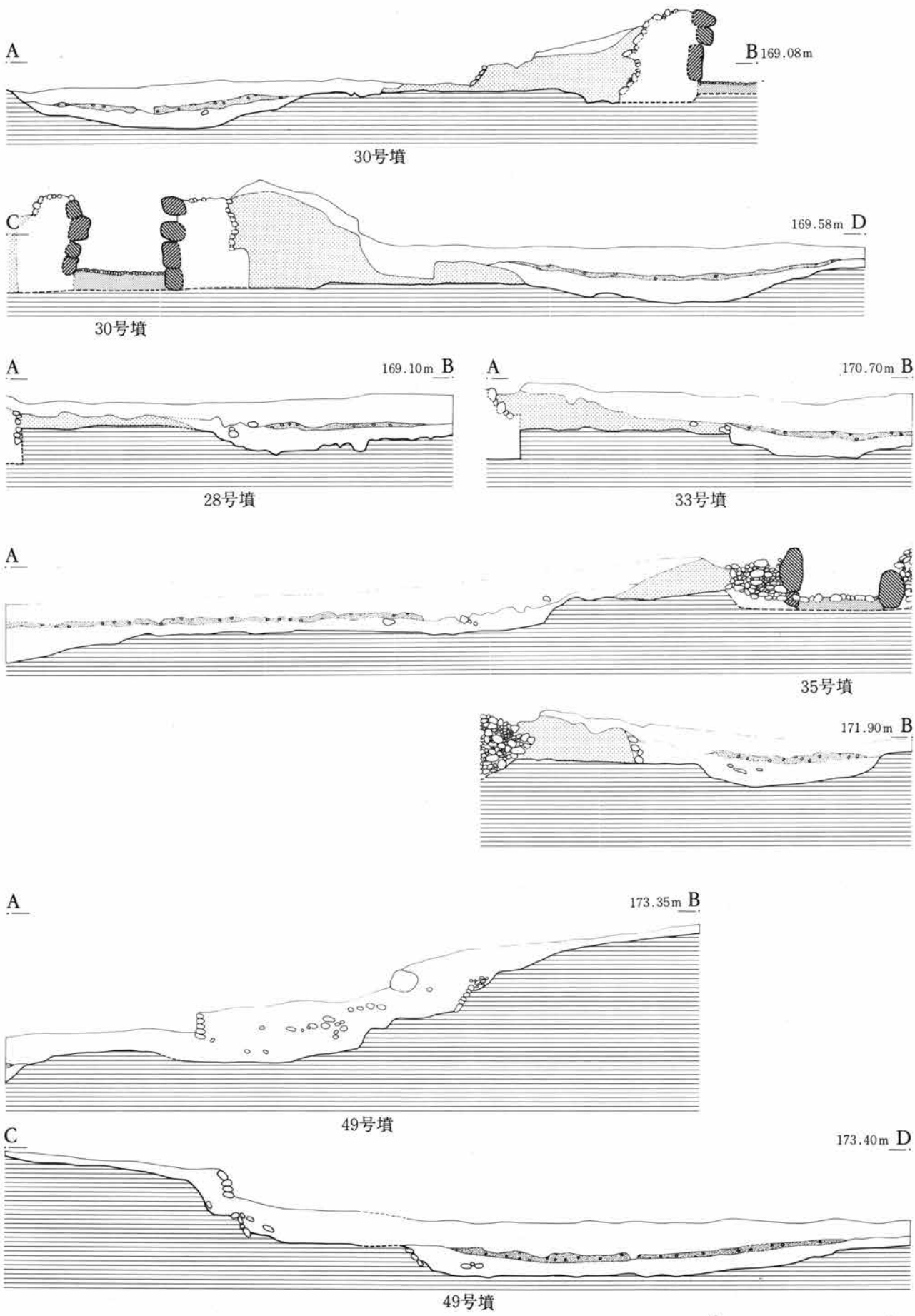
第150図 E-Wトレンチ断面図(3)



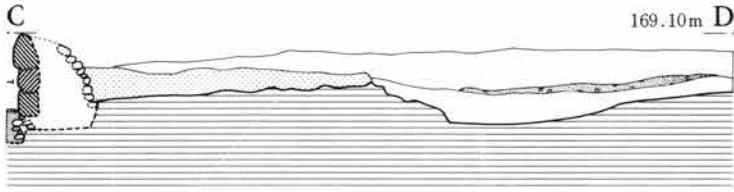


第151図 NSトレンチ断面図(3)

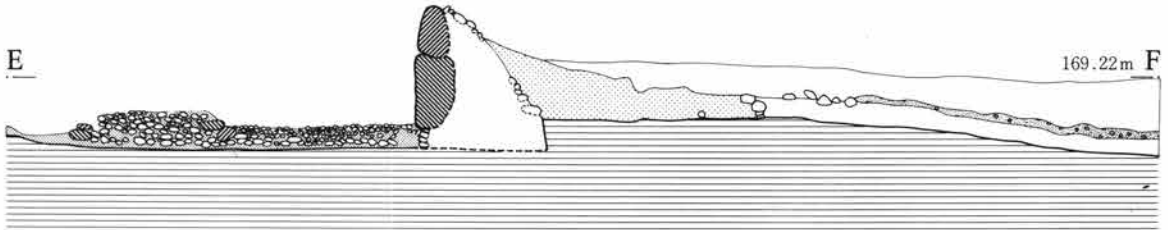




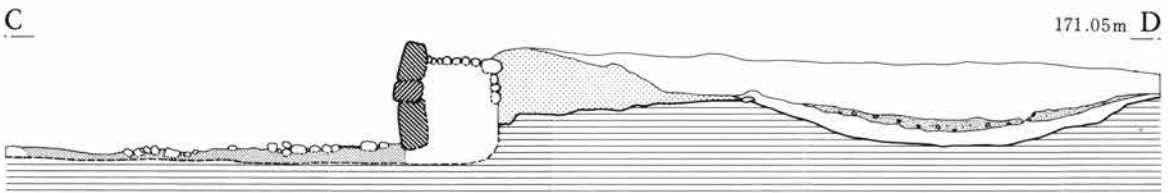
第152図 EWトレンチ断面図(4)



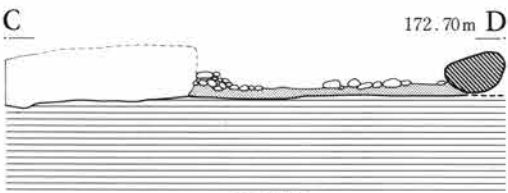
28号墳



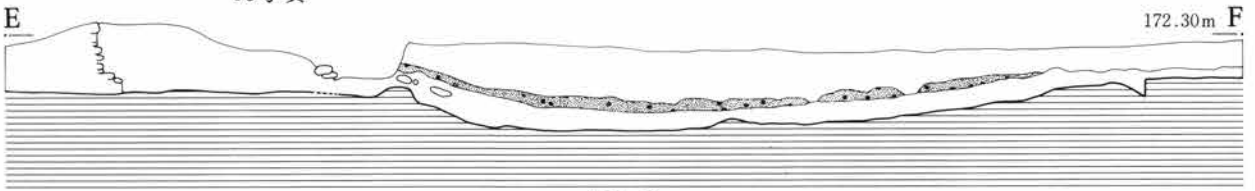
30号墳



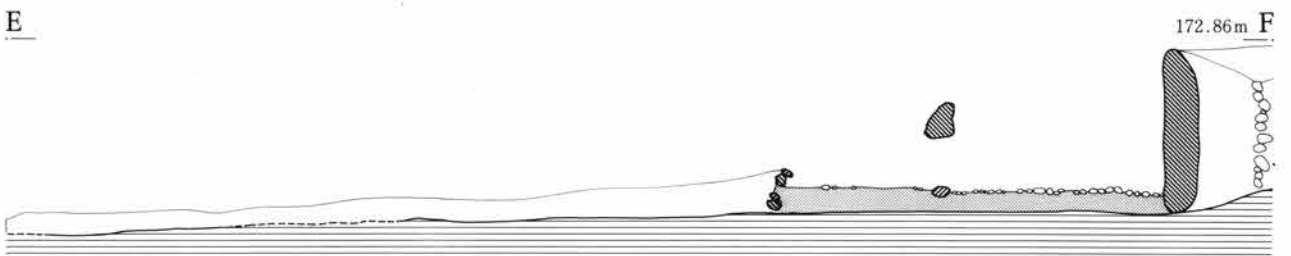
33号墳



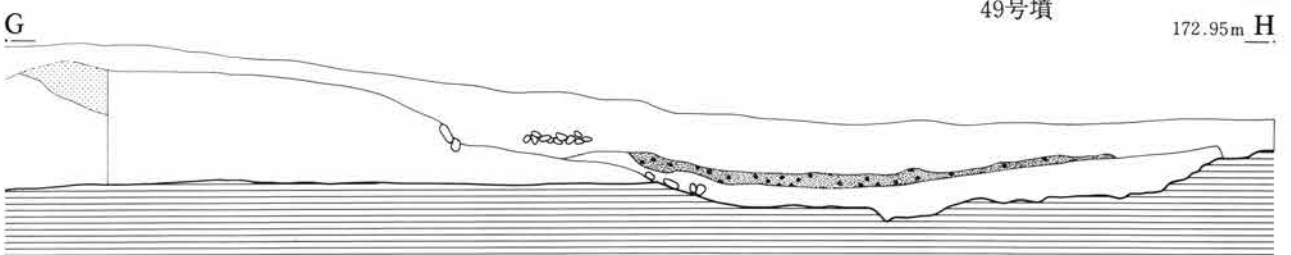
35号墳



35号墳

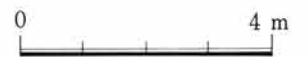


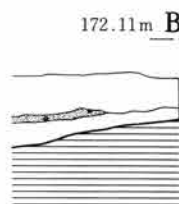
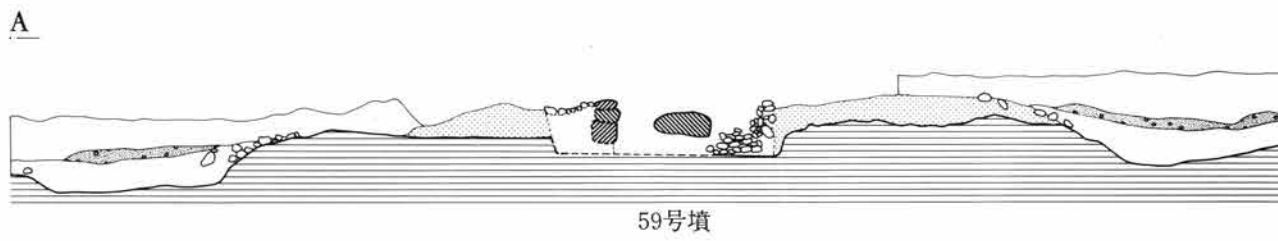
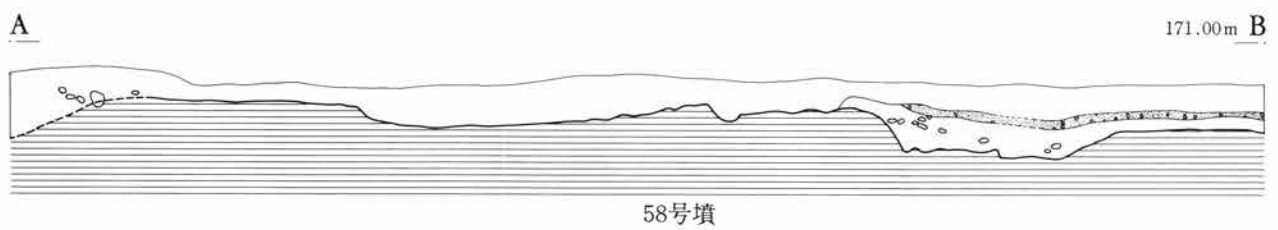
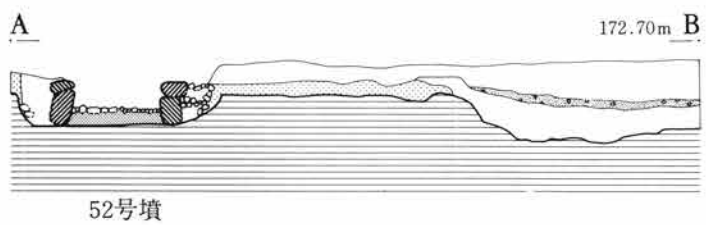
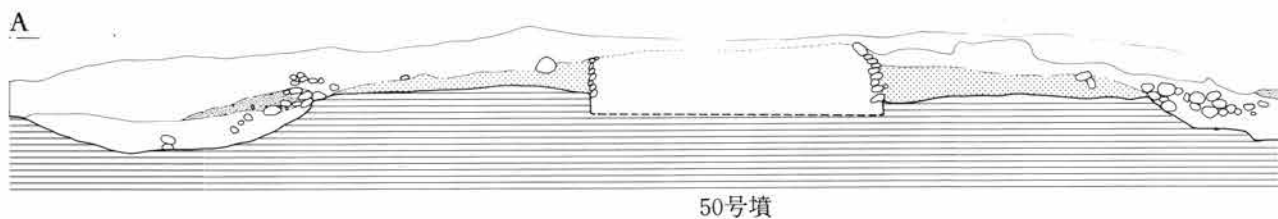
49号墳



49号墳

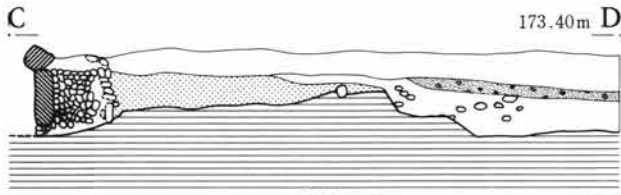
第153図 NSトレンチ断面図(4)



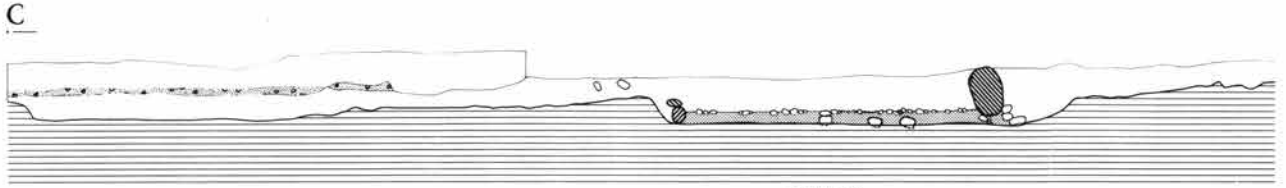


第154図 EWトレンチ断面図(5)

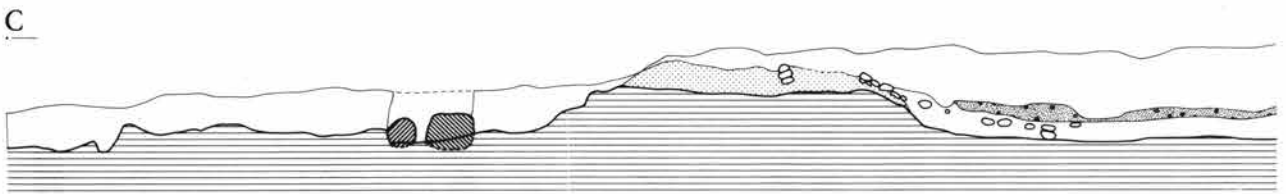
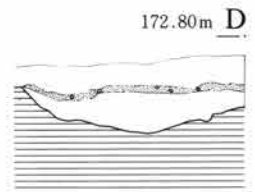




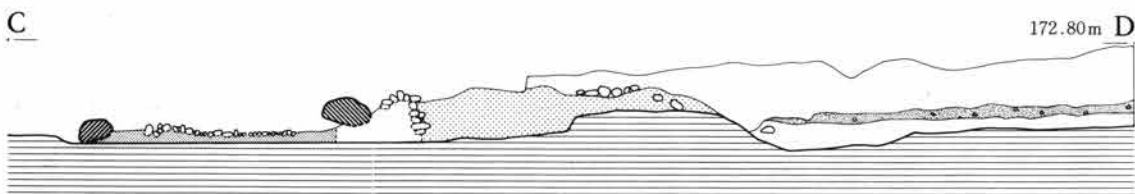
50号墳



52号墳



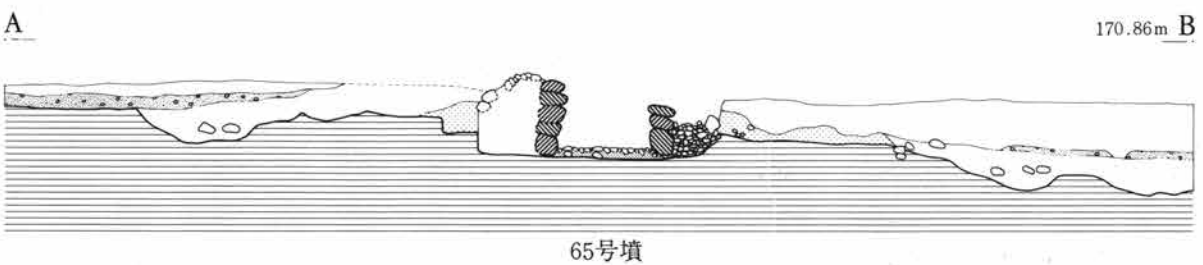
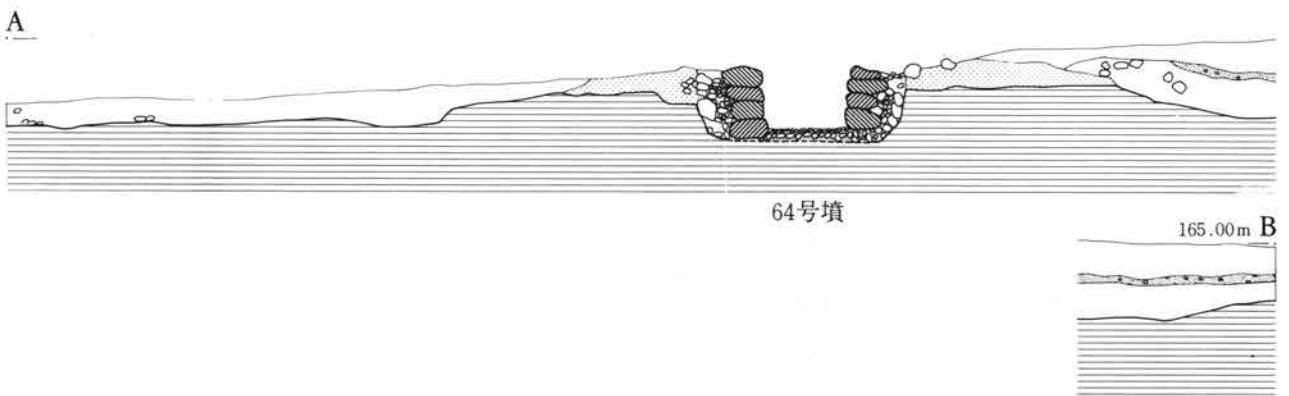
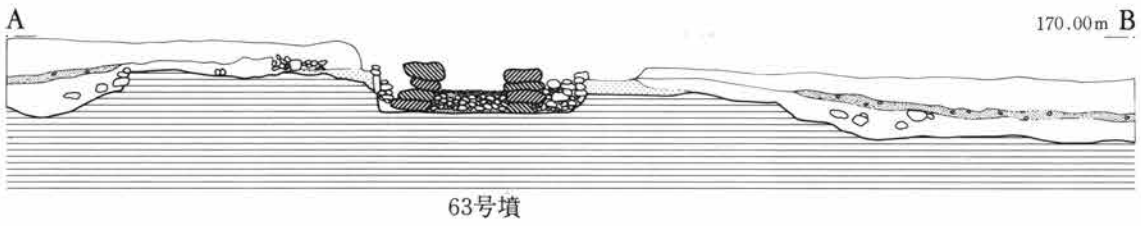
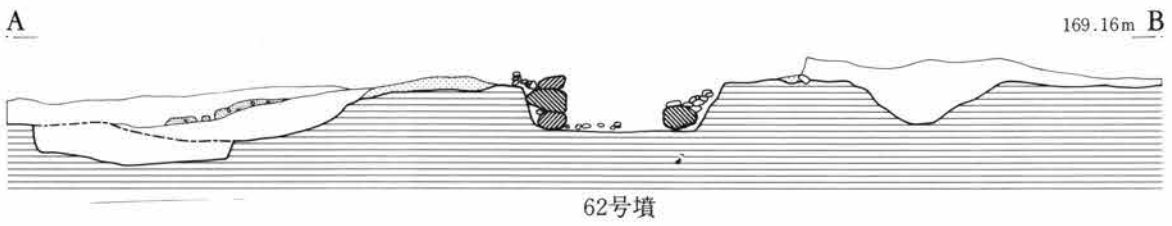
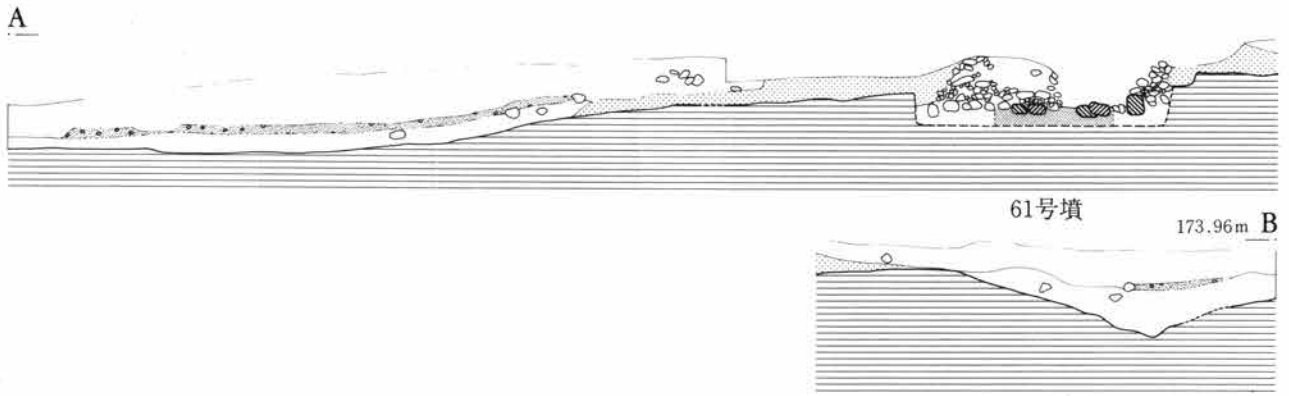
58号墳



59号墳

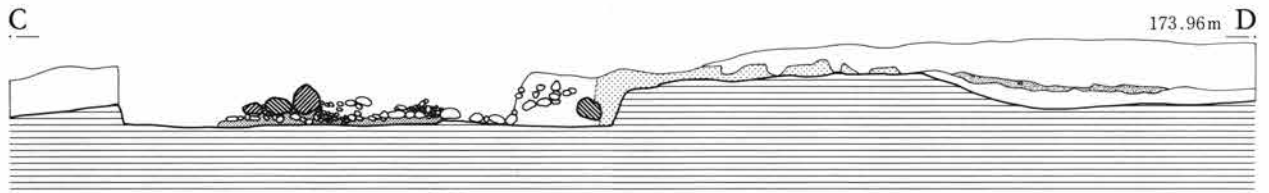
第155図 NSトレンチ断面図(5)



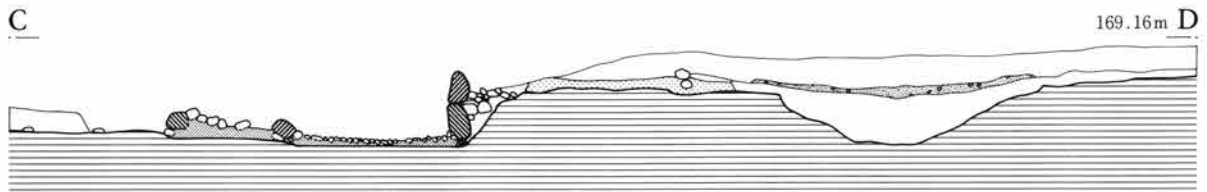


第156図 EWトレンチ断面図(6)

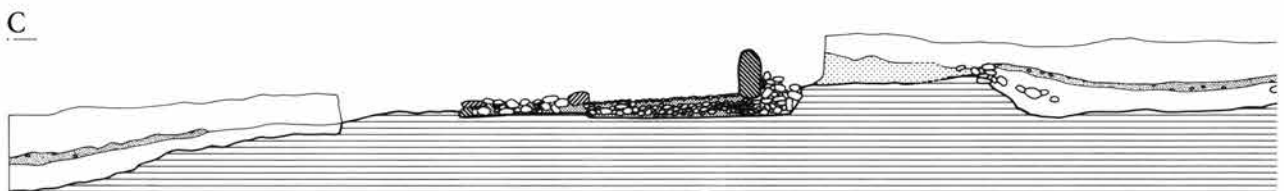




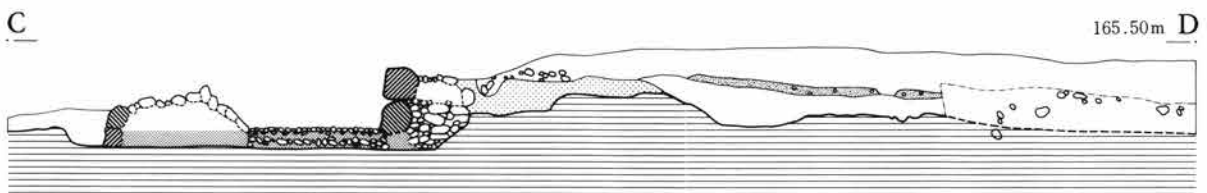
61号墳



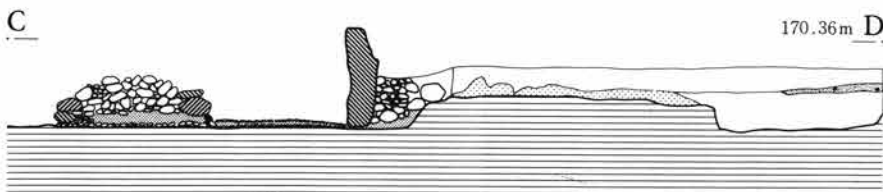
62号墳



63号墳



64号墳



65号墳

第157図 N Sトレンチ断面図(6)



第2表 石室計測表 (1)

単位 m

古墳名	墳		丘		石室全長		石室長		石室幅			女門幅		羨道長		羨道幅		前庭部		石室開口方 向南から	
	葦石径 (13.3)	周堀内径 (13.4)	周堀外径 (18.8)	右	左	右	左	前	中央	奥	右長	左長	幅	右	左	前	奥	奥行	前幅		奥幅
2号墳	11.5 (13.3)	11.8 (13.4)	20.2 (18.8)	(5.3)	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	0
3号墳	16.7 (15.5)	18.7 (16.4)	26.6 (28.0)	6.68	6.76	?	?	?	?	1.61	?	?	?	?	?	0.85	?	1.84	(4.15)	(3.57)	西へ20°
5号墳	?	10.8 (9.8)	19.0 (16.2)	4.75	4.65	2.4	2.26	1.74	1.90	1.87	—	—	—	2.4	2.43	0.85	0.86	1.8	4.41	2.6	西へ16°
6号墳	—	8.0 (8.5)	(15.5) (12.5)	4.38	4.4	2.35	2.48	1.22	1.62	1.62	0.2	0.3	0.6	1.6	1.58	0.73	0.78	1.3	?	(2.5)	西へ12°
7号墳	—	10.5 (10.3)	16.7 (13.3)	4.2	4.27	2.1	2.01	1.14	1.32	1.21	—	—	—	2.06	2.27	0.61	0.63	1.47	?	(2.2)	西へ12.5°
8号墳	—	9.1 7.5	14.2 (12.6)	4.4	3.6	2.09	2.11	0.86	1.07	0.79	0.2	0.14	0.51	2.31	1.43	?	0.51	—	—	—	西へ12.5°
9号墳	—	12.0 (12.5)	18.3 (18.0)	4.76	4.66	2.76	2.58	1.36	1.6	1.32	—	—	—	2.06	2.1	0.82	8.74	1.54	(2.2)	(1.6)	西へ12.5°
10号墳	—	10.1 10.5	18.0 (16.3)	4.92	4.81	2.31	2.3	1.3	1.68	1.32	—	—	—	(2.2)	(2.16)	0.81	0.84	—	—	—	西へ3°
11号墳	—	10.5 (10.4)	14.0 (12.0)	4.53	4.41	2.33	2.06	1.44	1.5	1.26	—	—	—	2.2	2.25	0.88	0.76	(1.1)	(2.82)	(2.15)	西へ10.5°
13号墳	—	12.0 12.3	22.3 (17.8)	5.92	5.99	2.99	3.13	2.08	2.12	1.81	—	—	—	2.92	2.77	0.9	1.25	—	—	—	西へ12.5°
14号墳	—	11.8 11.0	18.4 (14.7)	5.44	5.11	2.92	3.07	1.41	1.52	1.54	—	—	—	2.52	(2.04)	(0.89)	0.85	—	—	—	西へ7°
15号墳	—	12.5 (12.3)	19.0 (18.2)	5.46	5.48	3.14	2.9	1.24	1.3	1.42	0.48	0.5	0.67	1.97	2.08	0.82	0.84	(0.3)	?	?	東へ4.3°
18号墳	—	9.7 (9.3)	? ?	(4.24)	4.91	2.42	(2.58)	(1.61)	1.69	1.52	—	—	—	(1.83)	2.33	(0.7)	0.66	—	—	—	東へ2°
21号墳	12.8 12.8	—	16.9 (18.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
22号墳	—	9.3 (9.4)	(15.5) (15.0)	4.42	4.35	2.36	(2.33)	1.1	1.27	1.24	—	—	—	2.05	(1.65)	0.8	(0.78)	—	—	—	東へ19°
23号墳	—	9.44 (9.8)	14.7 (13.3)	3.95	4.1	2.01	1.95	1.16	1.3	1.27	0.15	0.3	0.7	1.92	2.16	0.82	(0.68)	?	?	?	西へ4.5°
25号墳	16.6 13.2	—	(27.7) (24.8)	5.65	5.71	3.01	2.86	2.12	2.15	1.92	0.5	0.58	1.05	2.64	2.85	1.01	(1.06)	—	—	—	西へ29°
26号墳	—	9.1 9.8	15.2 (12.6)	4.91	4.5	2.33	2.4	1.48	1.58	1.34	—	—	—	2.58	(2.1)	(0.95)	(0.94)	—	—	—	西へ4.5°

石室計測表 (2)

古墳名	墳		丘		石室全長		石室幅		竪道長		竪道幅		前庭部		石室開口方 向南から		
	葺石径	周堀内径	周堀外径	左	右	左	右	中央	奥	右長	左長	前	奥	行		幅	奥
27号墳	—	9.7 8.1	(16.5) (13.7)	4.56	2.35	2.5	1.25	1.29	1.25	—	—	0.75	(0.77)	—	—	—	西へ13°
28号墳	—	11.9 11.1	18.0 (15.8)	4.38	(1.69)	2.44	(1.3)	1.45	1.19	—	—	?	?	?	?	?	西へ3°
30号墳	12.2 10.7	—	(32.0) (21.0)	5.14	3.07	2.73	2.02	1.96	1.98	—	—	0.96	(1.19)	—	—	—	東へ2°
33号墳	14.2 13.2	—	19.5 19.3	5.62	2.78	2.64	1.35	1.55	1.32	0.32	0.22	0.83	0.82	(0.9)	(1.7)	(1.5)	西へ2.5°
35号墳	—	11.8 (12.3)	21.0 (19.9)	4.65	?	?	?	?	1.7	—	—	?	?	(1.1)	?	?	西へ2°
37号墳	—	9.5 (11.0)	15.8 (15.0)	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	(1.2)	?	?	(西へ14.5°)
49号墳	22.5 21.0	22.5 21.0	(37.0) (37.0)	(6.58)	3.32	(3.60)	2.25	2.43	2.2	0.56	0.44	?	(1.15)	(2.12)	(2.80)	(3.14)	西へ13°
50号墳	14.3 (14.0)	—	23.8 (20.0)	5.5	2.94	2.77	1.64	1.45	1.37	—	—	1.03	1.03	?	?	?	西へ1°
52号墳	—	11.3 9.5	(21.4) (16.4)	4.89	2.73	2.61	1.21	1.56	1.41	—	—	0.9	0.66	—	—	—	東へ4°
53号墳	25.3 25.3	26.5 26.5	45.5 49.0	8.76	3.94	4.28	2.0	2.40	2.2	0.2	—	0.9	1.48	2.68	5.48	3.48	西へ17°
59号墳	—	14.3 (14.4)	22.0 (17.8)	?	?	?	?	1.36	1.42	?	?	?	?	—	—	—	西へ13°
60号墳	11.4 9.3	—	19.4 (17.0)	4.0	?	?	?	?	1.2	—	—	?	0.8	—	—	—	西へ1.5°
61号墳	—	14.2 12.4	24.0 (19.0)	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	—	—	—	西へ3°
62号墳	—	8.4 (11.6)	14.2 (14.0)	4.2	2.15	2.2	1.4	?	1.6	—	—	—	—	(1.2)	?	?	西へ6°
63号墳	11.0 8.8	—	(19.0) (15.5)	4.64	2.56	2.5	1.1	1.2	1.17	—	—	0.86	0.82	—	—	—	西へ10°
64号墳	—	10.8 (10.3)	21.5 (17.7)	4.66	2.2	2.14	1.46	1.5	1.4	—	—	0.94	1.1	(1.3)	?	?	東へ15.5°
65号墳	9.8 9.9	—	15.6 (14.0)	4.6	2.15	2.18	1.47	1.48	1.4	0.39	0.38	—	—	—	—	—	東へ10°

註(1) 本表は横穴式石室の計測値一覧表である。

(2) 表中一は該当なし、?は該当すれども計測不可能を意味する。

(3) 墳丘欄の2段の数字は上段が東西方向、下段が南北方向の計測値を示す。

第3表 出土遺物一覽表(1)

古墳名	須惠器	土師器	武器			馬具	装身具						備考	
			鉄 鍔	刀 子	大 刀		金 環	小 玉	切子玉	勾 玉	管 玉	棗 玉		
2	○													瓦
3	○													瓦
5	○		△		○									
6	○	△		○										釘
7	○	○	○		○									針
8	△	△	○	○										人骨
9	△	△	○		○		○	○	○			○		瓦・人骨
10	△	△	○											瓦・人骨
11	○	○	○	○										
13	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	鉄製工具・人骨
14	○	△	○		○		○							人骨
15	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	瓦
18	△	○			○									瓦・人骨
21	○	○												埴輪
22	○													
23	○		○		○									埴輪
25	○		○	○	○	○	○			○				滑石製品
27	○		○											

(2)

古墳名	須恵器	土師器	武器			馬具	装身具						備考	
			鉄 鍔	刀 子	大 刀		金 環	小 玉	切子玉	勾 玉	管 玉	棗 玉		
28	△		○	○	○		○	○			○	○		瓦・人骨
30	○	○	○	○	○		○							鉄製工具・人骨
33			○		○									
35	△													
37	○		○		○		○							
45	○	△		△										
49	○	○	○		○	○	○							瓦・釘・人骨
50	○		○	○	○	○								
52			○	○	○	○								
53	○	○												瓦・座金具・人骨
58	△													
59					○		○							人骨
60	○	△	○		○		○							
61	○													丸玉・釘
62	○													
63	○				○		○							
64	○	△	○		○	○								人骨
65	○	○	△											

註 表中の△印は出土したが実測不可能、又は、錆による破砕、紛失等によるものを示す。

出土遺物観察表

第4表 土器 1

番号	遺物No	器 種 形	法 量 (cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
1	0201	須恵器 蓋	14.6・ — ・ 3.5 つまみ径・4.4	玄 室 内	①精選良好。中 粒の長石②還元 ③緑灰色④完形	蓋内面にかえりのない蓋で、つまみは薄くボタン状 を呈する。天井部は、つまみ周辺に2段回転ヘラケ ズリ調整。口縁部は垂直に屈曲し端部は僅かに外反。	
2	0202	須恵器 杯	13.2・ 7.7・ 3.5	玄 室 内	①精選良好 ②還元 ③灰色 ④完形	底部切り離し技法は右回転糸切りで、その後の調整 は施されていない。体部は僅かに丸味をもち、口唇 部は小さく外反する。底径は口径の½より大きい。	内面、底部に重ね 焼き痕が残る
3	0203	須恵器 杯	(8.4)・ (6.0)・ 7.3	裏込石内 表 土	①精選良好 ②環元 ③灰色 ④½・底部欠損	小形で器高の深い杯。底部切り離し技法は右回転ヘ ラケズリ成形。口唇部内側にロクロ調整による稜が 残る。	
4	0204	須恵器 細頸壺	— ・ — ・ — 頸部径・(6.3) 胴部径・(18.7)	裏込石内 羨 道	①細砂含む ②還元 ③灰色 ④½口縁部欠損	粘土紐巻き上げ成形。ロクロ成形によるヨコナデを 施し、胴端部径は細い。その後口縁部を接合する。 胴部は丸味をもち、頸部内面にしぼり痕を呈する。	
5	0205	須恵器 長頸壺	— ・ — ・ — 肩 径・18.2	北方向葺 石 部	①中砂含む ②還元 ③にぶ い橙色 ④¼	胴部内面に、粘土塊ひきあげの際指先でついた稜が 残る。肩部外面に沈線2条、胴上部ヨコ方向に回転 ヘラケズリを施す。	
6	0206	須恵器 中形甕	24.5・ — ・ — 頸部径・19.3 口縁高・4.0	裏込部東 表 土	①中砂少量含む ②還元③灰色④ ½。	粘土紐巻き上げ成形で胴部内面は同心円文、外面は 平行文の叩き目文が残る。口唇部は短い。大きく外 反する。	
7	0207	須恵器 中形甕	(28.0)・ — ・ —	表 土	①良好 ②還元 ・堅微 ③灰色 ④¼	口縁部の器高は高い。体部の形態は不明。口唇部 には1条の凹線を呈す。	
8	0301	須恵器 蓋	(12.0)・ — ・ 3.6	前 庭 前 庭 左	①粗粒の白色・ 黒色鉍物含む② 還元③灰色④¼	天井部は細かく手持ちヘラケズリをしており、丸い がやや扁平で、口辺とわかる沈線を1条施す。口辺 端部は稜をもち丸く整えている。	
9	0302	須恵器 蓋	— ・ — ・ —	前庭No2 Aトレ西	①中砂少量含む ②還元 ③灰色 ④½	天井部はヘラによって切り離している。	
10	0303	須恵器 蓋	10.0・ — ・ 3.6	Aトレ南	①中〜粗砂多く 含む②還元③灰 色④完形	天井部は手持ちヘラケズリで調整しており、丸く口 辺部は上半が垂直で、下半部が外反する。口唇端部 は稜をもち丸い。	
11	0304	須恵器 杯	— ・ 9.4・ —	前 庭	①中〜粗砂含む ②還元・ 軟質③灰色④½	体部内・外面共にロクロ成形。底部は回転ヘラケズ リ調整で、底部周辺も回転を伴うヘラケズリを施 している。	
12	0305	須恵器 杯	12.4・ (7.4)・ 3.2	前 庭	①精選良好②還 元③灰白色④½	ロクロ成形の杯で、内面に稜が数本残る。底部は回 転糸切りで切り離れた後、周辺を回転ヘラケズリ調 整している。	
13	0306	須恵器 台付壺	— ・ — ・ — 高台径・12.2	石 室 前	①精選良好 ②還元 ③灰白 色 ④¼	台付長頸の台部か。接合部分には底部の回転糸切り 痕残る。	
14	0307	須恵器 長頸瓶	9.7・ — ・ 29.7 頸部径・5.6 胴部径・19.0	前庭No2 A 東 // 西	①中粒の白色・ 黒色鉍物含む鉍 物多い。炭化物 ②還元③灰色 ④¼	胴部は粘土紐巻き上げ成形で、天井部は円形粘土板 で覆い側面に穴を穿ち口縁部を接合。胴部は内面に 同心円叩き目文が残り、外面は丁寧にナデを施す。	フラスコ形

番号	遺物No.	器 種 形	法 量 (cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
15	0308	須恵器 平 瓶	—・ 8.0・ — 頸部径・ 4.8 肩 径・ 17.0	前庭No.2 Aトレ東 〃 西	①中粒の白色・ 黒色鉱物含む② 還元③灰色④%	胴部は粘土紐巻きあげ成形で端部を整えた後、天井部に円形粘土板を覆い、中央より肩側に穴を穿つ。胴部外面は手持ちヘラケズリ。肩部はハケメを施す。	
16	0309	須恵器 細頸瓶	—・ (8.8)・ — 肩 径・ 16.5	Aトレ東	①粗砂。中粒の 白色鉱物含む② 還元③褐灰色	胴部成形は版組No.0308と同一で、天井部は中央に穴を穿ち口縁部を接合する。胴部はロクロ成形の後、外面下部にヨコ方向ヘラケズリを施す。	④½・口縁部欠損
17	0310	須恵器 大形甕	—・ —・ —	玄室内 羨道付近 前庭付近	①中砂含む②還 元 ③灰色④口 縁部少破片	口唇部は上に引き出し、その下は凸部とする。口縁部1条の沈線に分けて、波状文を上下2段にめぐらしている。	
18	0311	須恵器 大形甕	—・ —・ —	玄室内	①精選良好 ② 還元 ③灰白色 ④口縁部少破片	口唇部は版組0310より丸みを帯びるが成形は同様。口縁部外面は沈線1条と口唇部との間に列点文を1段めぐらす。	
19	0312	須恵器 大形甕	—・ —・ —	玄室内 羨道付近	①中砂含む②還 元 ③灰色④口 縁部少破片	口唇部欠損。口縁部外面には1~2条の沈線で4段に区画する。上3段にクシ状工具で波状文を施す。	
20	0313	須恵器 大形甕	(41.2)・ —・ —	玄室内 Aトレ西	①中~粗砂含む ②還元③灰白色 ④%	口唇部は折りがえしている。口唇部はヨコナデ調整。沈線によって区画する。上・中段は波状文、下段は列点文をめぐらす。内面は、指によるヨコナデ。	
21	0314	須恵器 大形甕	38.0・ —・ — 頸部径・ 25.8 口縁高・ 14.0	玄室内 羨道付近 前 庭	①精選良好 ② 還元 ③灰白色 ④%	口唇部は版組No.0311と同様の成形。口縁部外面は2~3条の沈線で分ける。上下2段に巾7mmで沈線5本の波状文を施す。	
22	0315	須恵器 大形甕	43.4・ —・ —	石室前	①多量の中砂含 む②還元③灰色 ④少破片	口縁部は中央で外反する。口唇部は版組No.0310と同様。口縁部の内・外面はロクロの稜が明瞭に残る。外面には1段粗く波状文がめぐる。	
23	0316	須恵器 大形甕	41.2・ —・ — 頸部径・ 21.0 口縁高・ 12.3	玄室内	①中砂含む②還 元③灰白色④口 縁部%	口縁部は上部%で更に外反し口唇部で内傾。内外面はロクロ成形で無文である。	
24	0317	須恵器 大形甕	(44.0)・ —・ —	石室前	①細~中砂含む ②還元③灰色④ 少破片	口唇部は中央部の沈線で下部に凸線を引き出している。口縁部内面はロクロ成形の稜線が明瞭に残り、外面は1~2条の沈線で区画し3段の波状文を施す。	
25	0318	須恵器 大形甕	(40.0)・ —・ — 頸部径・ (25.9) 口縁高・ 12.5	玄室内 前 庭	①中~粗砂含む ②還元③灰白色 ④%	粘土紐巻き上げにより成形した後、ロクロ成形で口唇部を引き出している。口縁部内外面は版組No.0316と同様に無文である。	
26	0502	須恵器 杯	(13.4)・ 9.9・ 3.4	前 庭	①多量の中砂・ 黒色鉱物含む②還 元③灰白色④%	ロクロ成形の杯で、底部切り離し技法は不明である。底部は全面に手持ちヘラケズリを行い、口辺下部には横方向にヘラケズリ調整を施している。	
27	0503	須恵器 台付 長頸壺	—・ (10.5)・ — 高台径・ 11.3	石室内	①中~粗い白色 鉱物含む②還元 ③青灰色④%	粘土紐巻きあげ成形で高台部を接合している。高台は端部の中央にわずかなくぼみを呈するがほぼ平らである。	
28	0601	須恵器 蓋	(14.2)・ —・ — かえり径・ (12.0) かえり高・ 0.4	前 庭	①中粒の黒色鉱 物少量含む②還 元③灰色④%	偏平な天井部に続く口唇部の内側にかえりをもつ。器高は低い。ロクロ成形の後、天井部回転ヘラケズリ調整を施している。	
29	0602	須恵器 蓋	—・ —・ — つまみ径・ 4.0	前 庭	①中~粗砂含む ②還元③灰白色 ④%	つまみは偏平なボタン状である。口唇端部は欠損の為かえりの有無については不明である。天井部はつまみを付けた後周縁回転ヘラケズリ調整している。	

番号	遺物No.	器 種 形	法 量 (cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
30	0603	須恵器 蓋	(16.6)・ — ・ — かえり径・(13.6) かえり高・ 0.5	前庭前攪 乱層 表 採	①中粒の白色鈹 物含む②還元③ 灰色 ④%	口唇端部にかえりを持つ。外面に重ね焼き痕が残る。 天井部中央はつまみも含めて欠損する。	
31	0604	須恵器 杯	13.7・ 8.4・ 3.9	前 庭	①中粒の白色鈹 物含む ②還元 ③灰色 ④完形	ロクロ成形で、底部回転糸切りによる切り離し調整 の杯。	
32	0607	須恵器 台付壺	— ・ 11.0・ — 頸部径・(10.4) 胴部径・(22.9)	前庭・前 庭前攪乱 層・表採	①精選良好 ② 還元 ③青灰色 ④口縁欠損・½	粘土紐巻き上げ成形の後、回転を伴うヨコナデ調 整を行ない肩部外面はヨコ方向のヘラケズリを施す。 器厚は頸部が薄く、胴部～高台部はほぼ等しい厚み。	
33	0608	須恵器 中形甕	(26.0)・ — ・ — 頸部径・(21.3) 口縁高・ 4.5	N ト レ 表 土	①中粒の黒色鈹 物多量に含む② 還元③灰色④¼	粘土紐巻き上げ成形。胴部～底部の外面が平行、内 面は同心円叩き目文。口縁部内面、肩部外面に自然 釉付着。	
34	0712	土師器 杯	(10.8)・ 10.9・ (3.5)	羨道入口 A ト レ	①中砂含む②酸 化③橙色④ほぼ 完形	口唇部は僅かに内湾し、底部は偏平な丸底。口辺は ヨコナデ、底部は手持ちヘラケズリを施す。	
35	0713	土師器 杯	(11.2)・(11.4)・ —	A ト レ	①中砂・金雲母 含む②酸化③橙 色④½	同 上	
36	0714	須恵器 高台付 杯	(19.2)・(14.0)・ 3.9 高台径・(14.4) 高台高・ 0.5	羨道入口 攪 乱 層 B ト レ	①中粒白色鈹物 含む②還元・軟 質③灰色④¼	ロクロ成形の杯。底部切り離し技法は右回転糸切り を行なう。体部と比較すれば、細い付け高台を施す。 口径が大きく奈良時代を特徴づける杯。	
37	0715	須恵器 長頸壺	(11.0)・ — ・ —	A ト レ 攪 乱層 B ト レ	①精選良好 ② 還元 ③灰色 ④¼	器厚は口唇部が薄い頸部に向って厚みをもつ。ロ クロ成形によるヨコナデが残る小破片。	
38	1103	土師器 杯	(10.2)・(10.3)・ 3.0	石 室 前 8号墳主 体部トレ	①粗砂多量含む ②酸化③橙色 ④½	口唇部は内湾し底部径に最大幅がある。内面には成 形時の凹凸があり器厚は平均して薄い。口辺部はヨ コナデ、底部外面は手持ちヘラケズリ調整を施す。	
39	1104	土師器 杯	(11.0)・(10.6)・ 3.4	羨 道	①中砂含む ② 酸化 ③橙色 ④¼	同 上	
40	1105	須恵器 平 瓶	9.8・ 8.2・ 16.7 頸部径・ 5.2 肩 径・17.5	石 室 前 羨道前主 体部トレ	①精選良好②還 元③灰白色・黒 斑有④ほぼ完形	肩部端部を丁寧に調整した後、天井部に円形粘土板 で覆う。口縁部は天井部の中央肩部寄りに穴を穿ち 接合。調整はヨコナデ。胴部・底部外面ヘラケズリ。	8号墳出土の破片 と接合
41	1106	須恵器 広 口 小形甕	12.9・ — ・ 17.9 頸部径・10.6 胴部径・18.1	石 室 前 羨道前主 体部トレ	①精選良好 ②還元・軟質 ③灰白色 ④¼	粘土紐巻き上げ成形の後、胴部内面同心円、外面平 行叩き目文で調整。口縁部～肩部はヨコナデを行ない 丁寧に調整。口唇部に1条、肩部に2条の沈線。	8号墳出土の破片 と接合
42	1107	須恵器 広 口 小形甕	(18.0)・ — ・(27.0) 頸径(13.2)・胴径 (23.0)・口縁高3.5	羨通前主 体部トレ B ト レ	①細～粗砂を含 む②還元③灰色 ④%	粘土紐巻き上げ成形。胴部内面、同心円、外面は平 行叩き目文が残る。口縁部～胴部はヨコナデ調整。 頸部外面ヘラケズリ。口唇部に沈線2条施す。	
43	1108	須恵器 長頸壺	— ・ 7.2・ — 胴部径・20.8 高台径・ 9.1	石 室 前 羨道入口 主体トレ	①中粒の黒色鈹 物含む ②還元 ③灰色 ④¼	粘土紐巻き上げ成形。頸部は細く最大幅は肩部にあ る。底部に器厚は厚いが粗雑なつくりの高台を接合。 肩部と底部が接合しない為、図面上復元を行う。	器面にタールの細 かな黒点付着
44	1109	須恵器 中形甕	21.0・ — ・(48.6) 頸部径14.3・胴径41.4 ・口縁高6.0	石 室 内 主体部ト レ	①細粒の白色鈹 物含む②還元③ 灰色 ④¼	4cm幅の粘土紐接合痕が明瞭。胴部が他の甕と比較 し長い。胴部内面同心円、外面は平行叩き目文を格 子状に施す。口唇部の沈線1条はヨコナデを施す。	器形に歪みをも つ。8号墳出土の 破片を接合

番号	遺物No	器 種 形	法 量 (cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
45	1110	須恵器 中形甕	21.6・ — ・ 36.3 頸部径16.2・ 胴径35.7 ・ 口縁高4.9	羨道入口 前庭・主 体部トレ	①粗砂含む ②還元③灰白色 ④ほぼ完形	3.5cm幅の粘土紐成形。器高と最大幅は1:1で胴部はほぼ球状。口縁部外面に列点文、1条巡る。胴部内面同心円、外面平行叩き目文を施す。	焼成後、底部中央付近に5cm位の穴を穿つ。東海産?
46	1111	須恵器 大形甕	30.0・ — ・ 72.2 頸部径19.2・ 胴径63.3 ・ 口縁高14.5	石室前 主体部ト レ	①中～粗砂含む ②還元③灰色④ ほぼ完形	6cm前後の粘土紐成形。円器高と最大幅は1:1、口縁部が長い為胴部は楕円。胴部内面同心円、外面平行叩き目文。口縁部は沈線2条対4条でヨコナデ。	
47	1364	須恵器 蓋	(16.6)・ — ・ 2.9 つまみ径・4.5 かえり高・0.5	SトレNo 2 10号墳	①細粒の白色・ 黒色鉱物含む②還 元③青灰色④½	口唇端部内側にかえりをもつ。天井部には接着力強化の為接着部に刻みを施し、ボタン状つまみを接合。つまみ接合の後周辺をヘラケズリ。天井部に自然釉。	
48	1365	須恵器 杯	— ・ (13.0) ・ — 高台径・(13.2)	SトレNo 1 墳頂封土	①精選良好 ②還元・軟質 ③灰白色 ④½	挽出し高台を有する杯。体下部は丸みを有し口辺へ続く。内面にロクロ成形時の稜が残る。底部ヘラナデ。	
49	1366	須恵器 小形 短頸壺	— ・ 6.9・ — 胴部径・7.8	SトレNo 6	①粗砂含む ②還元・軟質 ③灰白色 ④½	ロクロ成形時、肩部に沈線一条。体部内外面に稜が残る。底部外面は手持ちヘラケズリを施し、体下部も手持ちヘラケズリ調整。器厚は底部が厚い。	
50	1367	須恵器 小形 高杯	— ・ 3.0・ —	石室内	①細～中砂含む ②還元 ③灰色 ④½	裾が大きく広がる脚部を、杯部に接合するがホゾを用いずに脚部の粘土によって接着させる。ロクロ成形。脚部上部内面にしぼり痕残る。	
51	1368	須恵器 細頸瓶	— ・ — ・ — 胴部径・15.0	Eトレ	①細砂含む ② 還元 ③青灰色 ④½	肩部が張り呈す。器厚は肩部がやや薄い。頸部～胴上部はクシ状工具による回転を伴うハケ目調整。胴下部はヨコ方向ヘラケズリを施す。	
52	1369	須恵器 平瓶	9.1・ 11.1・ 16.4 頸部径・5.8 肩径・18.2	前庭 Eトレ 14号墳	①精～細砂含む ②還元③灰色④ ほぼ完形	底部に粘土紐巻き上げを行い、天井部は円形粘土板を蓋とする。中央よりわずかに肩部より穴を穿ち口縁部を接合。頸部ハケ目、胴下部ヘラケズリを施す。	
53	1370	須恵器 台付 短頸壺	(10.4)・ — ・ — 頸部径・(10.6) 胴部径・(21.2)	石室内	①精選良好②還 元③灰色④胴・ 高台部欠損、½	肩部が張り、口縁部は垂直に立ち上がる。底部に高台を接合する。器厚はほぼ均一で口唇部は内傾する。肩部外面に沈線2条、口縁部内側に稜を呈す。	
54	1371	須恵器 蓋	12.8・ — ・ 3.7 つまみ径・4.9 かえり高・2.3	SトレNo 5	①粗砂。白色鉱 物含む②還元③ 灰白色④完形	中くぼみ、ボタン状つまみを接合。天井部は平らで肩部から垂直に口唇端部につづく。天井部に稜を1本、肩部は張り出す。端部は円側で稜を呈する。	
55	1372	須恵器 短頸壺	11.8・ — ・ — 頸部径・11.9	墳頂封土	①細粒の黒色鉱 物、器面に付着 ③灰色 ④½	粘土紐による巻き上げ。肩部は張り、口縁部は内傾ぎみに立ち上がる。器厚は頸部～口縁部が薄い。口唇部は内傾する。肩部に沈線1条。ヨコナデを施す。	
56	1373	須恵器 大形甕	41.3・ — ・ — 頸部径・26.9 口縁高・19.7	前庭 墳頂封土 14号墳	①粗砂含む ② 還元 ③灰白色 ④½	粘土紐による巻き上げ。口縁部は長く、2条1組の沈線3ヶ所所で区画し、中に8mm程の縦方向の沈線を3段施す。胴部外面平行・内面同心円叩き目文。	
57	1410	須恵器 平瓶	8.6・ (9.4)・ (15.1) 頸部径・4.5 肩径・(17.7)	羨道東 埋没土 Eトレ	①中砂含む ②還元 ③灰色 ④½・接点無	成形は天井部肩部寄りに穴を穿ち口縁部を接合する。口唇部はつまみ出しの甘い段を呈す。肩部に沈線2条、胴部はヨコ方向手持ちヘラケズリ。	
58	1411	須恵器 平瓶	8.7・ 12.5・ (16.0) 頸部径・6.0 胴部径・20.6	前庭	①粗砂少量含む ②還元 ③灰白色 ④½	成形は基本的にNo1410と類似する。肩部はヨコ方向の回転ヘラケズリ。胴下部はヨコ方向の手持ちヘラケズリを施す。	
59	1412	須恵器 細頸瓶	— ・ 10.0・ — 胴部径・22.8	羨道部 Eトレ	①精選良好 ②還元③灰白色 ④口縁欠損・½	胴部%に肩部が張る。器厚は頸部・肩部・底部中央に厚みをもつ。肩部に沈線4条を呈す。胴部はヨコ方向、手持ちヘラケズリ。底部は手持ちヘラケズリ。	

番号	遺物No	器種形	法 口径・底径・器高 量(cm)	出土位置	①胎土 ③色調	②焼成 ④残存	成形・調整の特徴	備考
60	1413	須恵器 平瓶	—・(14.0)・— 肩径・(21.3)	玄室入口 羨道東 埋没土	①細砂含む ②還元③暗灰色 ④口縁欠損・½		天井部はなだらか、底径は大きく中くぼみ状の平ら。整形はNo0308と類似する。肩部及び天井部はクシ状工具によるナデ、胴部は手持ちヘラケズリ。	
61	1414	須恵器 提瓶	—・—・— 頸部径・6.8 胴部径・(20.3)	羨道前 前庭左 各トレ	①細粒の白色鈹 物含む②還元 ・軟質③暗灰色		円形粘土版で天井部を覆う際、胴端部にしほり痕残す。側面に5cmの円を穿ち口縁部を接合。天井部は丸く、側面に把手をもつ。平らな底面はハケ目文。	④口唇部欠損・½
62	1415	須恵器 提瓶	—・—・— 頸部径・5.6	前庭 Eトレ	①中砂。細い白 色鈹物含む②還 元③暗灰色④½		口縁部径はNo1414より細いが成形は類似する。胴部～底部にかけてクシ状工具による回転を伴うナデを施す。	
63	1416	須恵器 高台付 碗	—・(10.0)・— 高台径・(10.5)	羨道前	①中砂含む ②還元・軟質 ③暗灰色 ④¼		ロクロ成形による杯。底径が大きく、低い高台部を接合する。底部は、回転糸切りの後、回転ヘラケズリ。	
64	1417	須恵器 中形甕	(20.6)・—・— 頸部径・(13.2) 口縁高・4.4	Eトレ	①細砂含む ②還元・軟質 ③灰白色 ④¼		肩部から大きく外反する口縁部を有する。口唇部は更に外反し、端部で僅かに内傾、外側は引き出し段を呈する。器厚は頸部がわずかに薄い。	
65	1418	須恵器 中形甕	26.3・—・— 頸部径・20.0 口縁高・4.2	石室埋土 羨道前	①細砂含む ②還元・僅軟質 ③灰色 ④¾		粘土紐巻き上げ。口縁部は低く、肩部からの外傾度は大きい傾向を呈す。口唇部は引き出して2ヶ所段を呈す。胴部外面は平行、内面は同心円叩き目文。	
66	1419	須恵器 中形甕	23.4・—・— 頸部径17.6・胴径43.0 ・口縁高7.0	玄室右 羨道前 Eトレ	①細砂少量含む ②還元 ③暗灰色 ④¾		35cm前後の粘土紐による成形。口縁部に、巾8mm・5本の沈線で、クシ状工具による波状文2段施す。胴部外面平行・内面は同心円叩き目文を施す。	
67	1570	土師器 杯	10.8・10.3・3.3	石室前	①細砂。雲母含 む②酸化③橙色 ④¾		外縁の広がり口辺の杯。底部立ち上がりの稜は器高の1:1にある。口辺部ヨコナデ、底部は手持ちヘラケズリ。	
68	1571	土師器 杯	10.6・9.8・3.2	石室前	①同上 ②酸化 ③橙色 ④¾		No1570に近似。口辺と底部の器高比は、僅か口辺部が高い。	
69	1572	土師器 杯	(11.4)・(10.9)・(3.4)	石室前	①同上 ②酸化 ③橙色 ④¾		No1570に近似。	
70	1573	須恵器 蓋	—・—・3.3 端部径・13.0 天井部径・10.2	石室前	①粗砂。細粒の 白色鈹物含む② 還元③灰白色		ロクロ成形。天井部、手持ちヘラケズリ。	④¾
71	1574	須恵器 平瓶	6.4・6.6・11.3 頸部径・4.2 肩径・12.4	墳頂	①細砂含む ②還元 ③灰白色④完形		成形は他の平瓶と同形態。口唇部は甕と同様の引き出しによる段を呈す。天井部に把手を意識した粘土を貼付。外面肩部に沈線、胴部手持ちヘラケズリ。	
72	1575	須恵器 中形甕	21.1・—・32.8 頸部径15.4・胴径31.4 ・口縁高4.2	墳頂 49号墳 64号墳	①中砂含む ②還元・軟質 ③灰白色④½		40mm前後の粘土紐巻き上げ成形。口縁部は低く、粘土帯2段。外面に巾6mm、沈線5条の波状文2条施す。胴部外面平行、内面同心円叩き目文。	
73	1576	須恵器 中形甕	21.4・—・— 頸部径16.5・胴径35.2 ・口縁高5.7	各トレ 64号墳中 央トレ	①細粒の白色鈹 物含む②還元 ③暗灰色④½		32mm前後の粘土紐による巻き上げ成形。口縁部は外面の沈線2本で上下2段に区画。上段は巾18mm程の波状文。胴部内面は同心円、外面は平行叩き目文。	外面の叩き目を施した後、横方向帯状に消す
74	1577	須恵器 中形甕	—・—・— 頸部径・19.4	西トレ	①良好 ②還元 ③暗灰色 ④½		口縁部中央にヨコナデに伴う稜を持ち、下段に巾12mmのクシ状工具による波状文を1条施す。	

番号	遺物No	器 種 形	法 量 (cm) 口 径・底 径・器 高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
75	1578	須恵器 中形甕	24.2・ — ・ 47.2 頸部径16.7・胴部45.5 ・口縁高53.0	墳 頂	①細～中砂含む ②還元 ③暗灰色 ④%	40mm前後の粘土紐による巻きあげ成形。口縁部は、上から%に沈線2条で区画上段に波状文1条巡らす。底部中央を少し離れた位置に焼成後楕円を穿つ。	
76	1802	須恵器 平底碗	13.7・ 6.0・ 7.1	N トレ	①中砂含む ②還元・軟質 ③灰色 ④完形	ロクロ成形。ヨコナデ調整によって体部外面は稜を呈し、内面はなめらか。底部は右回転糸切り。体部は大きく歪みを持ち最少・最大径は8mmの差がある。	
77	2101	須恵器 蓋	(18.0)・ — ・ (4.0) かえり径・(15.6)	中央トレ	①細～中砂含む ②還元③灰白色 ④完形	天井部は偏平で、ゆるやかに端部へつづく。天井部は回転ヘラケズリ調整。(内面はナデ調整を施す。)端部内側にかえりをもつが端部より突出しない。	混入品
78	2102	土師器 杯	14.0・(12.4)・ 5.2 頸部径・13.4	No 2	①中～粗砂含む ②酸化 ③橙色 ④%強	内斜口辺の杯。底部は丸底で、短かく、「く」の字状に外反し、口唇部で内傾する。内面は放射状ヘラケンマ、内面手持ちヘラケズリを施す。	
79	2201	須恵器 平 瓶	6.5・ 9.6・ 15.7 頸部径・4.5 肩 径・15.4	石室右壁 中央下	①中砂含む②還元 ③茶褐色④完形	天井部が丸く、肩部に2条の沈線を巡らす。二段構成の口唇部をもつ口縁部は細く細い。胴部は丸く、底部は回転ヘラケズリ。天井部に緑色自然釉。	東海産? 高蔵1号墳出土に 近似
80	2202	須恵器 中形甕	(22.0)・ — ・ — 頭部径・(16.0) 口縁高・(4.8)	石 室 前	①中砂含む ②還元 ③灰色 ④口縁部少破片	頸部付近は直立ぎみで口縁上部で外反する。口唇部は内傾する。外面の中央部に沈線1条、内面はヨコナデ調整を施している。	
81	2305	須恵器 台 付 短頸壺	10.8・ — ・ — 頸部径・10.8 胴部径・18.8	羨道入口	①粗粒の黒色鉱物 含む ②還元 ③灰白色④%	胴部最大径は、底部～頸部の%に位置する。口縁部は僅かに内傾するが短く直立する。器厚は胴部が厚く、口縁部は薄い。肩部は沈線2本とハケ目を施す。	
82	2306	須恵器 台 付 長頸瓶	— ・ — ・ — 肩 径・(18.2)	N トレ	①細～中砂含む ②還元③灰色 ④%	粘土紐巻き上げの後、ロクロ成形によるナデを施す。なだらかな肩部に沈線1条、胴部上端に巾15mmの刺突文を一条巡らす。	
83	2527	須恵器 長頸瓶	7.0・ — ・ 18.4 頸部径・5.0 胴部径・13.5	石 室 内	①細砂含む②還元 ③灰白色④完形	成形は平瓶と同様。胴部に穴を穿ち二段構成の口唇部を持つ口縁を接合する。底部は丸い。口縁上部・平瓶における底部に巾12mmの刺突文を各1条巡らす。	東海産? フラスコ形
84	2528	須恵器 小形甕	12.0・ — ・ — 頸部径・11.0 口縁高・4.0	石室前ト レ・石室 埋没土	①細砂含む②還元 ③灰白色④% ⑤%	肩部はなだらかで細い口縁部は直立ぎみに立ち上がり、口縁上部で外反、口唇部は内傾する。口唇部外面、縄目を転がす。胴部の叩き目にヨコナデを施す。	
85	2529	須恵器 中形甕	(24.0)・ — ・ — 頸径(18.0)・胴径49.2 ・口縁高6.3	石室埋没 土 N トレ	①中砂少量含む ②還元③灰白色 ④%	30mm前後の粘土帯の巻き上げ成形。No1419と類似する。口縁部は中央部の稜で上下2段に区画し波状文2条巡す。胴部外面は平行叩き目の後ヨコナデ。	出土位置 石室前 トレ
86	2705	須恵器 蓋	(15.4)・ — ・ — かえり径・12.0 かえり高・0.4	石 室 内	①細砂含む②還元 ③灰白④つ まみ欠損%	天井部はやや偏平で、ゆるやかに端部へつづく。端部内側にかえりをもつが、端部から僅かに上がる。ヨコナデ調整の後、天井部は手持ちヘラケズリ。	
87	2706	須恵器 台 付 長頸壺	— ・ 9.8・ — 肩 径・18.3	石 室 内	①細～中砂含む ②還元③灰色 ④%	粘土紐巻き上げの後、ロクロ成形。口縁部、沈線2条、肩部に沈線2条残す。推定器高40cmを計り大形で、胴部は高い。	
88	2707	須恵器 大形甕	(37.8)・ — ・ — 頸部径・22.6 胴部径・64.4	石 室 内	①中砂含む②還元 ③灰白色④%	45mm前後の粘土紐巻き上げで中形甕の成形と類似する。口縁部は高く、沈線3条で3段に区画し波状文を3条施す。	
89	3059	土師器 碗	18.8・ 19.1・ (9.5)	石 室 前	①細砂。雲母含 む②酸化③橙色 ④%	直立に低い立ち上がり口辺で底部は丸底。口辺部は器高の%に位置する。粘土紐巻き上げ成形。口辺部はヨコナデ、底部多面は手持ちヘラケズリを施す。	

番号	遺物No.	器 種 形	法 量 (cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成形・調整の特徴	備 考
90	3060	土師器 壺	19.4・ 16.7・ (9.0)	石室内	①精選良好。細砂粒含む②酸化③橙色④½	No.3059と類似した成形。口辺部は大きく外反する。口辺部・底部内面はヨコナデ、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。	
91	3061	土師器 高杯	—・ —・ — 脚部高・ 5.2	Nトレ	①細粒の雲母・白色鉍物含む②酸化③橙色④½	脚部はラッパ状に開き、やや太い。杯部との接合にはホゾを用いる。内面上半分はしぼり痕残る。外面全体に縦方向のヘラミガキ、内面はヨコナデを施す。	
92	3062	須恵器 小形短頸壺	—・(朴.0)・ — 頸部径・ 6.8 体部径・ 9.6	各トレ	①中粒の白色鉍物含む②還元③灰色④½	非常に小形で、当遺跡では53号墳から類品が出土する。ロクロ成形で、体部の内外面には稜を残す。底部外面は手持ちヘラケズリを施す。	
93	3063	須恵器 壺	—・ (6.5)・ — 体部径・ (11.1)	石室前	①中粒の白色鉍物含む②還元③灰白色④½	ロクロ成形によって体部に引き出した稜を2条呈す。2条によって区画された中央にクシ状工具になる列点文を1条巡らす。	体部の円孔は確認出来ない
94	3064	須恵器 長頸壺	10.6・ —・ — 頸部径・ 3.5	石室前	①細粒の白色鉍物含む②還元③灰白色④½	粘土紐巻き上げの後ロクロ成形を施す。高い口縁部は頸部で細いが口唇部でラッパ状に大きく開き、口唇部で僅かに内傾する。	
95	3065	須恵器 小形短頸壺	9.7・ 3.8・ 11.0 頸部径・ 9.2 体部径・ 13.8	石室前	①細粒の白色鉍物含む②還元③灰白色④完形	なだらかな肩部から、直線的で僅かに外反する口縁部は器高の1:5に位置。肩部に最大径をもち、沈線を1条、体部～底部は回転伴うヘラケズリ。	
96	3066	須恵器 平瓶	9.0・ 8.0・ 16.3 頸部径・ 4.0 胴部径・ 16.4	石室前 9号墳前庭	①白色鉍物含む②還元③灰白色④½	粘土紐巻き上げの後ロクロ整形を施し、体部は稜線細かく呈す。天井部円形粘土板接合時に体部先端をしぼる。外面体下部～底部は手持ちヘラケズリ。	
97	3067	須恵器 長頸壺	—・ —・ — 頸部径・ 4.9	石室内 石室前	①細粒の白色・黒色鉍物含む②還元③暗灰色	口縁部½に沈線2条で区画し、その上下段に巾8mm、沈線5条のクシ状工具でヨコ方向にハケ目を施す。	④口縁部～肩部(口唇部欠損)
98	3068	須恵器 平瓶	—・ —・ — 頸部径・ 3.7 肩径・ (17.4)	石室前	①細粒の白色鉍物含む②還元③灰色④½	天井部は偏平で肩部に稜を呈す。天井の成形はNo.3066と同様でしぼる。口縁部は、肩部に大きく寄り接合。肩部～体部に回転を伴うハケ目を施す。	
99	3069	須恵器 長頸瓶	7.9・ —・ — 頸部径・ 5.0 胴部径・ (16.0)	石室内	①良好。白色鉍物含む②還元③暗灰色④¾	成形時の天井部が僅かに偏平。口縁部は成形時胴部中央に接合。口唇部は二段構成を呈す。中央部に沈線2条。体下部に支えの少破片付着。	緑色の自然釉がかかる。東海産? フラスコ形
100	3070	須恵器 提瓶	8.7・ —・ — 頸部径・ 6.3 胴部径・ 19.3	石室内	①中粒白色鉍物含む②還元・軟質③灰白色④完形	器形はNo.1414に近似するが把手は付かない。体部はハケ目調整。口縁部中央に沈線1条で区画し上下2段に巾10cm前後の波状文を各1条施す。	
101	3071	須恵器 長頸壺	—・ (10.6)・ — 体部最大径・ 21.4	石室内	①中粒の白色鉍物含む②還元③灰白色④½	体部中央に最大径を持つ。体部上半は沈線1～2条で4ヶ所、3段に区画し巾12mmの波状文各1条施す。体部下半はヨコ方向に手持ちによるヘラケズリ。	体部上半に他の破片付着。東海産?
102	3072	須恵器 中形甕	17.8・ —・ 32.8 頸部径12.8・ 胴径32.1 ・ 口縁高3.9	石室内 石室前庭	①精選良好。僅かに白色粒含む②還元やや軟質	40mm前後の粘土紐巻き上げ成形。器高と胴部最大径は1:1を呈す。口縁部に沈線で区画し8mm巾の波状文、胴部外面平行、内面同心円叩き目文施す。	③暗灰色 ④¾
103	3073	須恵器 中形甕	23.2・ —・ — 頸部径・ 16.2 口縁高・ 5.5	石室内	①細粒の白色鉍物含む②還元③暗灰色④¾	粘土紐巻き上げ成形。口縁部中央の沈線で区画し、上段に巾9mmの波状文を1条施す。胴部外面、平行叩き目文は自然釉が付着、内面は同心叩き目文。	
104	3074	須恵器 中形甕	(24.0)・ —・ — 頸部径・ (18.2) 口縁高・ 5.5	石室前庭南 墳丘 *23号墳	①細～粗い白色鉍物含む②還元③灰白色④½	36mm巾の粘土紐による巻き上げ成形。全体の器形は1:1を示す。口縁上部に1条、口唇部も1条波状文を施し、胴部調整はNo.3073と同様。	焼成後、底部中央に40mm前後の穴を穿つ

番号	遺物No	器 種 形	法 量 (cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
105	3075	須恵器 中形甕	(25.0)・ — ・ — 頸径(18.0)・胴径43.5 ・口縁高 4.4	石室前 23号墳 Nトレ	①中粒の白色鉾物少量含む②還元③灰白色④%	巾65mm前後の粘土紐巻き上げ成形。器形タテ・ヨコの地率は1:1を呈す。ヨコナデ調整の後、胴部外面平行、内面同心円叩き目文を施す。	
106	3076	須恵器 中形甕	25.8・ — ・ (45.3) 頸部径19.0・胴径48.9 ・口縁高 5.2	石室内 石室前 23号墳	①粗砂少量含む②還元・軟質③灰色④%	35mm巾の粘土紐巻き上げ成形。胴部最大径>器高を呈す。口縁部は不整形の波状文2条、口唇部1条の波状文。胴部外面平行叩き目文を施す。	焼成後、底部に100×65mm前後の穴を穿つ
107	3077	須恵器 中形甕	31.3・ — ・ 55.5 頸部径22.0・胴径55.1 ・口縁高12.1	石室前 9号・25号・64号	①精選良好。白色鉾物含む②還元③暗灰色④%	巾90mm前後の粘土紐巻き上げ成形。器形比率は1:1を呈す。口縁部は高く上部を2段に各1条不整形な列点文、胴部外面平行叩き目文を施す。外面はナデ消す	No3076と同様に100mm前後の穴を穿つ。緑色釉
108	3755	須恵器 杯	10.8・ 7.6・ 4.6	前庭	①良好。白色鉾物含む ②還元③灰白色 ④½	ロクロ成形による杯。ヨコナデ調整で底部外面は、手持ちによるヘラケズリ。	
109	3756	須恵器 中形甕	20.8・ — ・ 35.3 頸部径15.9・胴径35.0 ・口縁高 5.0	Eトレ 15号墳各 トレ	①細粒の白色鉾物含む②還元・軟質	器形比率1:1を呈す。口縁中央の沈線2条で2段に区画し、10mmの波状文を各1条施す。胴部外面タテ平行の後ヨコナデ、内面同心円叩き目文を施す。	③灰白色 ④%
110	3757	須恵器 中形甕	(21.0)・ — ・ — 頸部径・(13.4) 口縁高・ 3.8	前庭 中央トレ	①良好。少量の白色鉾物含む②還元③灰色④½	巾60mm前後の粘土紐巻き上げの後、回転を伴うヨコナデ調整。胴部外面、内面共に叩き目文を施す。	No3076と同様に40×60mm前後の穴を穿つ
111	4501	須恵器 大形甕	— ・ — ・ — 頸部径・21.5 口縁高・47.7	石室内 61号墳	①良好。中粒の白色鉾物含む②還元	胴部径がおおよそ1:1を呈す。胴部外面平行、内面同心円叩き目文を施す。	③灰白色 ④½ 頸部に凸帯巡る
112	4502	須恵器 小形甕	13.4・ — ・ 18.3 頸部径11.5・胴径20.3 ・口縁高2.7	石室内No 1 石室直上	①中～粗い白色鉾物含む②還元③暗灰色	器形比率は胴部最大径>器高を呈す。胴部は叩き目文を施した後口縁～胴上半をヨコナデ調整。外面肩部に沈線1条を2ヶ所施す。	④½強
113	4503	須恵器 中形甕	— ・ — ・ —	石室内	①細～中砂含む②還元③灰色④少破片	口縁上部外面、9mm巾前後の波状文1条、口唇部波状文1条。内面波状文1条。	
114	4504	須恵器 小形甕	— ・ — ・ — 頸部径・(13.0)	石室内 石室直上	①中砂僅かに含む②還元③灰白色④½	胴部外面タテ平行の後ヨコナデ、内面同心円叩き目文を施す。	
115	4505	須恵器 中形甕	(18.1)・ — ・ — 頸部径・13.5 口縁高・ 5.8	石室内 35号表探	①良好。細粒の白色鉾物を僅か含む ②還元	口縁中央部に沈線1条で区画し上下2段に巾8mm位の波状文を各1条。胴部外面平行、内面同心円叩き目文を施す。	③灰白色 ④½強
116	4506	須恵器 大形甕	(40.6)・ — ・ — 頸径28.2・胴径(58.0) ・口縁高15.0	石室内 石室直上 35号表探	①中砂含む②還元③灰白色④% 胴中央欠損	胴部径は1:1の比を呈す。口縁部は長く沈線3条で4段に区画し上3段に波状文各1条施し、頸部に段をもつ。胴部は平行、同心円叩き目文調整が残る。	底部付近に壘破片付着
117	4963	須恵器 蓋	(10.4)・ — ・ 3.5 つまみ径・2.0 かえり径・(8.3) かえり高・0.5	SEトレ 堀付近	①細砂含む。白色鉾物含む②還元③灰色 ④%	身受部かえりの立ちあがりを持つ蓋。天井部のケズリ範囲はせまい宝珠は変形せず形はよい。	
118	4964	須恵器 蓋	(12.4)・ — ・ — かえり径・(10.0) かえり高・ 0.3	前庭	①細砂含む②還元 ③灰色④% つまみ欠損	身受け部の立ちあがりは口唇部より短かく退化する。口縁部付近、かえりの天井側と段差をもつ。自然釉がかかり美しい。	
119	4965	須恵器 蓋	(17.4)・ — ・ — かえり径・(15.0) かえり高・ 0.4	前庭	①精選良好 細粒砂少量含む ②還元・軟質	中形の杯蓋。身受けの立ちあがりは口縁端部と同じ高さで、口縁部に寄り短く退化する。	③灰白色 ④½・ つまみ欠損

番号	遺物No	器 種 形	法 量(cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
120	4966	須恵器 蓋	(18.0)・ — ・ — かえり径・(15.4) かえり高・0.5	Sトレ拡 張	①中粒の白色鈹 物含む ②還元③灰白色	身受け部の立ちあがりは口縁端部と同じ高さ。天井 部つまみ部分の調整は平坦に仕上げる。	④天井 $\frac{1}{2}$ ～端部
121	4967	須恵器 蓋	— ・ — ・ — つまみ径・4.8	前 庭	①中粒の白色鈹 物を少量含む ②還元 ③灰色	天井部の丸い杯蓋つまみは高さの低い大形の輪状を 呈する。天井部全体に緑色の荒い釉がかぶる。	④ $\frac{1}{2}$ ・端部欠損
122	4968	須恵器 蓋	(17.2)・ — ・ 3.4 つまみ径・5.4 かえり径・(14.3) かえり高・0.5	Sトレ拡 張	①中砂。精粒の 白色鈹物含む ②還元・軟質	天井部のやや丸い大形の杯蓋。口縁部より短かめの 身受けを持つ。立ちあがりは鋭い。天井部の調整は 回転ヘラ削り。つまみは大きく輪状を呈する。	③灰白色 ④ $\frac{1}{2}$
123	4969	須恵器 蓋	16.6・ — ・ 3.8 つまみ径・7.4 かえり径・14.0 かえり高・0.4	石室No21	①中砂含む ②還元 ③灰白色④完形	天井甲丸で、口縁部は低平で終わる。立ちあがりは 鋭どく短い。天井部の調整は甲丸部のみに及ぶ。 大きな輪状のつまみがつく。	
124	4970	須恵器 蓋	— ・ — ・ — つまみ径・7.0	前 庭	①細砂含む ②還元③灰白色 ④ $\frac{1}{2}$ ・端部欠損	底く立ちあがるつまみ端部は丸く。径は大きい。	
125	4971	須恵器 蓋	— ・ — ・ — つまみ径・7.0	石室No21	①良好。精粒の 白色鈹物含む ②還元 ③灰色	大形の杯蓋のつまみである。低くて大きな端部の丸 いつまみである。	④つまみの完存
126	4972	須恵器 杯	(11.8)・(9.8)・ —	49号墳 53号墳S 区	①精選良好 ②還元 ③灰色 ④ $\frac{1}{2}$	蓋受け部の短かく立ち上がる杯。底部の調整は、少 範囲にとどまる。	
127	4973	須恵器 杯	(10.0)・(7.2)・(3.5)	前 庭	①精粒の白色鈹 物含む②還元③ 灰白色④ $\frac{1}{2}$	底部と口縁部の境の稜なく丸い杯、口唇部外面につ まんだ沈線めぐる。底部外面は手持ちヘラケズリ。	
128	4974	須恵器 杯	(9.3)・ 6.4・ 3.7	SEトレ 堀付近	①細砂。精粒の 白色鈹物含む② 還元 ③灰色	口縁部から底部へ丸く仕上がる杯、底部外面は一方 向の手持ちヘラ削り。	④ $\frac{1}{2}$
129	4975	須恵器 杯	(10.0)・(7.0)・ 3.1	前 庭	①細粒の白色鈹 物を多く含む。 ②還元③灰白色	外反気味の口縁部が丸い底部にうつる杯底部外面 は、不定方向の手持ちヘラ削り。	④ $\frac{1}{2}$
130	4976	土師器 杯	12.2・ 11.2・ 3.7	石室No21	①精選良好 ②酸化 ③橙色 ④ $\frac{1}{2}$	古墳群時代の須恵器蓋の伝統を残す杯、口縁部は外 反し、稜線でくびれて丸い底部となる。底部は手持 ちの不定方向のヘラ削り。	
131	4977	須恵器 杯	— ・ — ・ — 高台径・(9.0)	前 庭	①細砂含む②還 元③灰白色④口 辺部欠損 $\frac{1}{2}$	底部が大きく杯部は低い。高台部はつまみ出し成形。 高台は底部と平行または内側に施されている。口辺 下部はロクロによるヘラケズリを施す。	
132	4978	須恵器 杯	(16.2)・ — ・ (4.1) 高台径・(10.8)	Sトレ	①精選良好 ②還元 ③灰色 ④ $\frac{1}{2}$ ・底部欠損	No4977と類似。高台部を底部より内側に呈す。口辺 ～体部はロクロを伴うヨコナデ、口辺下部はヘラ ケズリを施す。	
133	4979	須恵器 杯	(16.6)・(11.8)・ 4.3 高台径・(12.2)	前 庭	①中粒の白色鈹 物含む②還元③ 暗灰色 ④ $\frac{1}{2}$	付け高台の杯である。高台端部はほぼ水平な成形。 口辺部はヨコナデを施す。	
134	4980	須恵器 杯	— ・ 10.6・ — 高台径・10.4	S拡張ト レ	①細粒の白色鈹 物少量含む ②還元・軟質	付け高台の杯。高台は低いが厚く、端部は外面に稜 を呈する。口辺部～底部はヨコナデを施す。	③灰色 ④ $\frac{1}{2}$ ・口 辺部欠損

番号	遺物No	器 種 形	法 量(cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
135	4981	須恵器 杯	—・(12.8)・— 高台径・(12.0)	S 拡張ト レ	①良好。精粒の 白色鈳物 ②還元	No4980と類似するが、ひとまわり大形。口辺下部に丸みを呈す。	③灰白色 ④½
136	4982	須恵器 高台付 碗	—・(11.4)・— 高台径・12.0	S 拡張ト レ	①精選良好 ②還元③灰白色 ④¼口辺部欠損	付け高台の碗。長い高台端部は外面に稜を呈す。口辺～体部はヨコナデで体下部はヨコ方向のヘラケズリを施す。	
137	4983	須恵器 高台付 碗	—・(8.0)・— 高台径・(11.0)	NEトレ Bスコ リア	①精粒の白色鈳 物含む②還元③ 灰白色④½	付け高台の杯。高台端部は僅かに斜めで外面に稜を呈する。口辺～底部はヨコナデ整形で内面にはロクロ整形による稜を細かく残す。	
138	4984	須恵器 平 瓶	—・—・— 頸部径・4.8 胴部径・(16.2)	前 庭	①精選良好 ②還元③暗灰色 ④¼口唇部欠損	粘土紐巻き上げ成形。胴部は天井部からなだらかで丸い底部を呈す。胴最大部に沈線を1条をヨコナデ整形を施す。肩部に他の平瓶口唇部を付着。	天井部～胴部に緑色自然釉を付着。東海産？
139	4985	須恵器 平 瓶	—・—・— 頸部径・5.5	前 庭	①良好。精粒の 白色鈳物 ②還元	巾25mm前後の粘土紐による巻き上げ成形。口辺～頸部はヨコナデ整形の後、巾10mm位のクシ状工具によるハケ目調整をヨコ方向に数回施す。	③暗灰色 ④¼
140	4986	須恵器 長頸瓶	—・—・— 頸部径・(5.4)	NEトレ Bスコ リア	①良好②還元③ 灰白色④¼口唇 部欠損	粘土紐巻き上げ成形で平瓶の胴部にあたる部分に穴を穿ち口縁部を接合。頸部内面に指頭圧痕。口辺・胴部はヨコナデを施す。	出土位置 SEトレ堀付近 フラスコ形
141	4987	須恵器 長頸瓶	—・—・(19.1) 頸部径・5.0 胴部径・(15.0)	SEトレ 堀付近	①良好②還元③ 灰白色④¼口唇 部欠損	粘土紐巻き上げ成形。器形はNo3069に類似する。器厚はほぼ均一。口縁中央部に沈線2条でヨコナデ調整。底部に焼成時の支えの痕残る。	緑色の自然釉一部残存。東海産？ フラスコ形
142	4988	須恵器 提 瓶	—・—・— 胴部径・13.0(狭) 18.0(広)	NEトレ SEトレ 堀 付 近	①精粒の白色鈳 物含む②還元③ 灰白色 ④½	巾40mmの粘土紐巻き上げ成形。平瓶の底部にあたる部分は平らで天井部は丸みをもつ。ヨコナデ調整の後、胴部にヘラケズリ。	
143	4989	須恵器 平 瓶	(7.3)・—・— 頸部径・(5.0)	石室埋没 土	①精粒の白色鈳 物含む②還元③ 灰白色 ④½	口唇部はまるく整えられ、直線的な口頸部となる。中央部に沈線を1条呈し、ヨコナデを施す。	
144	4990	須恵器 短頸壺	(10.9)・(12.6)・16.3 頸部径・(10.8) 胴部径・(21.6)	S区拡張 構埋土中 ES拡張	①精選良好。細 粒の白色鈳物含 む②還元・軟質	有蓋付短頸壺。口唇内側に稜を呈す。高台部は低い。肩部は沈線を3条施しヨコナデ調整。器厚は口縁部が薄く、胴下部～底部が厚い。	高台径(14.2) ③灰白色 ④¼
145	4991	須恵器 小形壺	(11.8)・—・— 頸部径・(11.8) 口縁高・2.6	石室No21 前 庭	①良好。精粒の 白色鈳物少量含 む ②還元	35mm前後の粘土紐巻き上げ成形。ヨコナデ調整で肩部に沈線1条が2ヶ所。	③灰白色 ④口縁 ～肩部½弱
146	4992	須恵器 大形壺	(36.0)・—・— 頸部径・(20.0) 口縁高・11.5	Sトレ拡 張 53号 墳Nトレ	①細砂を少量含 む②還元 ③灰白色④½	80mm前後の巾の粘土紐巻き上げ成形。肩部は丸みをもつ。口縁部に沈線で3段に区画、上2段に巾12mmのクシ状工具による不整形な波状文各1条施す。	
147	4993	須恵器 大形壺	52.4・—・— 頸部径・37.0 口縁高・19.0	前 庭 NSトレ	①細粒の白色鈳 物含む②還元 ③青灰色④½	巾80mm前後の粘土紐巻き上げ成形。頸部に段を呈す。口縁部に沈線4段に区画、上3段に巾20mmの波状文各1条、胴部外面は平行・内面同心円叩き目文。	50・53・63号墳と 接合。頸部に凸帯 巡る
148	4994	須恵器 大形壺	41.0・—・— 頸部径・29.2 口縁高・13.6	前 庭 ESトレ 拡張	①中～粗砂多く 含む②還元③灰 色④½	巾90mm前後の粘土紐巻き上げ成形。口縁部は沈線1～2条で4段に区画、タテのハケナデの後上3段に波状文。胴部外面は平行・内面同心円叩き目文。	53号・63号墳と接 合 頸部に凸帯巡 る
149	4995	須恵器 中形壺	(27.2)・—・— 頸部径・(17.0) 口縁高・5.6	前 庭	①精～細粒の白 色鈳物含む②還 元③灰色④½	巾40mmの粘土紐巻き上げ成形。頸部から大きく外反する口縁部。口縁部2段に沈線で区画、ロクロ成形による15mm巾の波状文を各1条施す。	

番号	遺物No	器 種 形	法 量(cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
150	4996	須恵器 中形甕	(25.6)・ — ・ — 頸部径・(18.8) 口縁高・ 7.2	石室埋没 土	①細粒の白色鈹 物を多く含む② 還元③灰色④½	頸部から直線的に立ち上がり、口縁上半部で外反し 口唇部で内傾する。口縁部2段に沈線で区画、ロク ロ成形による巾15mm位の波状文を2段各1条施す。	
151	4997	須恵器 中形甕	(26.8)・ — ・ — 頸部径・(20.0) 口縁高・ 9.1	E S 拡張 トレ 53号墳	①中砂少量含む ②還元③灰白色 ④½	巾40mm前後の粘土紐巻き上げ。口縁部は頸部から直 立し、口縁上部で外反。口縁上部を2段に区画し巾 10mmの波状文を各1条、胴部は叩き目文を施す。	
152	4998	須恵器 中形甕	26.0・ — ・ 40.3 頸部径・16.2 胴部径・37.3	S 拡張ト レ 53号墳	①細〜中砂多く 含む②還元③褐 灰色④½	巾35mmの粘土紐巻き上げで、口縁部は2段接合し大 きく外反。器径の比はほぼ1:1を呈す。胴部外面 は格子風・内面同心円叩き目文を施す。	
153	4999	須恵器 中形甕	23.6・ — ・ — 頸部径・17.8 胴部径・47.1	前庭・S 拡張トレ 53号墳	①精選良好 ②還元 ③灰色 ④½・底部欠損	粘土紐巻き上げ成形。器形の比率は1:1を呈す。 胴部外面は平行・内面同心円叩き目文を施す。	
154	49100	須恵器 中形甕	22.8・ — ・ — 頸部径・17.6 口縁高・ 5.8	S E トレ 堀付近53 号墳	①細〜中粒の白 色鈹物含む②還元 ③灰色 ④½	巾40mm前後の粘土紐巻き上げで、口縁部は2段接合 し頸部から外反する。口唇部は外に折り返す。胴部 外面は格子風・内面は同心円叩き目文を施す。	
155	49101	須恵器 中形甕	10.3・ — ・ — 頸部径・12.8 口縁高・ 4.8	S 拡張ト レ	①細砂多く含む ②還元 ③灰色 ④½	頸部は小さく低い口縁部。頸部は大きく外反する。 口縁部はヨコナデを施す。	53・63号の各古墳 出土の破片と接合 する
156	5020	須恵器 杯	12.6・ 14.5・ 3.9	前 庭	①精粒の白色鈹 物少量含む②還 元③灰色④½	たちあがりやが矮少化して、残く底部は偏平となる。 受部はほぼ水平で浅い沈線を廻す。ロクロ成形によ るヨコナデと底部は回転ヘラケズリを施す。	
157	5021	須恵器 台付皿	(14.6)・ (7.0)・ 1.9 高台径・ 7.6	表 土	①精選良好②還 元やや軟質③灰 白色 ④½	ロクロ成形による付け高台の皿。底部は回転糸切り 成形の後外に張った低い高台部を接合する。	
158	5022	須恵器 中形甕	(20.0)・ — ・ —	中央トレ 表 土	①良好。白色鈹 物含む②還元③ 灰白色④½	ロクロ成形によるヨコナデで内面には稜を呈す。口 縁上半部に巾10mm前後の波状文を1条施す。	
159	5023	須恵器 大形甕	(41.8)・ — ・ (95.6) 頸部径・(30.0) 口縁高・14.8	中央トレ 表 土	①中〜粗砂含む ②還元 ③灰色 ④½	水平の肩部に口縁部を接合。頸部に段を呈す。口縁 部は長く沈線で5段に区画し、巾15mmの波状文を各 1条施す。	頸部に凸帯巡る
160	5301	須恵器 蓋	9.8・ — ・ 2.9 かえり径・ 7.8 かえり高・ 0.5	前 庭	①細粒の白色・ 黒色鈹物含む② 還元③灰白色	天井部はやや偏平で、頂部に宝珠のくずれた形のつ まみを呈する。端部から細く短いかえりが出る。天 井部は手持ちヘラケズリを全面に施す。	Na5305に伴なう蓋 と考えられる④½
161	5302	須恵器 蓋	10.0・ — ・ — かえり径・ 8.4 かえり高・ 0.7	前 庭 No 2	①精〜中粒の白 色鈹物含む②還 元	天井部からなだらかに端部へつづき、かえりはほと んど端部の外につく。器厚は天井端部に厚みをもつ。 天井部は全面手持ちヘラケズリ。	③灰白色、④½・ つまみ欠損
162	5303	須恵器 蓋	10.7・ — ・ 2.7 かえり径・ 9.0 かえり高・ 0.5	前 庭	①細〜中砂含む ②還元 ③灰白色④½強	Na5301・5302よりも口径が大きい。つまみは頂部が 平らで宝珠変形式。短く細いかえりは端部の外につ く。天井部はヨコナデの後中央部をヘラケズリ。	Na5306に伴なう形 態の蓋と考えられ る
163	5304	須恵器 蓋	11.0・ — ・ 3.1 かえり径・ 9.2 かえり高・ 0.6	前 庭	①細〜中粒の白 色鈹物含む ②還元③灰白色	Na5303に類似するが器高もわずかに高く、端部は僅 かにそる。宝珠形を模したつまみが頂部につく。か えりは端部の外につく。内面に稜が細かく残る。	④ほぼ完形
164	5305	須恵器 杯	(9.6)・ (9.1)・ 4.0	前 庭	①細粒の白色鈹 物含む。 ②還元③灰白色	ヘラ切り離しの後に手持ちヘラケズリ調整。口辺部 は内湾ぎみ立ち上がる。器厚は底部に厚みをもつ。 口辺はヨコナデを施す。	Na5301に伴なう形 態の杯と考えられ る。④½弱

番号	遺物No	器 種 形	法 量 (cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
165	5306	須恵器 杯	10.3・ 9.6・ 3.8	前 庭	①中砂。細粒の 白色鈳物含む② 還元③灰白色	口径がNo5305より大きく、器形は僅かに低い。ヘラ 切り離しの後に手持ちヘラケズリ調整。口辺は外反 する。器厚は底部中央がわずかに厚みをもつ。	No5303に伴なう形 態の杯。 ④ほぼ完形
166	5307	土師器 杯	(13.2)・ 11.4・ 4.1	E S 拡張 トレ S トレ	①中砂。雲母含 む②酸化③橙色 ④%	外稜の広がり口辺で、口辺部の中央部に沈線をもつ 口辺部は器高の $\frac{1}{2}$ にあたる。口辺はヨコナデの後、 底部は手持ちヘラケズリ。	
167	5308	土師器 杯	12.8・ 11.3・ 3.7	E S トレ	①精選良好 ② 酸 化 ③ 橙 色 ④%	外稜の広がり口辺の杯口辺部の位置は、器高の $\frac{1}{2}$ に あたる。口辺部は回転に伴なうヨコナデを施す。	
168	5309	須恵器 蓋	(12.7)・(11.4)・ (3.6)	No 3	①細砂を僅かに 含む②還元③灰 色④%	外稜の広がり口辺の杯。底部は手持ちヘラケズリ。 口辺は回転に伴なうヨコナデを施す。	
169	5310	須恵器 蓋	10.6・ — ・ —	前 庭 E S トレ	①中粒の白色鈳 物を含む②還元 ③灰色 ④%	天井端部に稜を呈し、稜の位置は器高の $\frac{1}{2}$ にある。 口辺端部は僅かに外にひろがる。回転に伴なうヨコ ナデの後、天井部中央に手持ちヘラケズリを施す。	
170	5311	須恵器 杯	— ・(10.4)・ —	主体部ト レ 49号墳	①細粒の白色鈳 物含む②還元③ 暗灰色④%	口径が小型で深い。口辺の立ち上がりは内傾する。 口辺は器高の $\frac{1}{2}$ に位置する。底部は手持ちヘラケズ リによって丸みをもつ。	
171	5312	須恵器 杯	(9.2)・(11.0)・ —	主体部ト レ	①精選良好 ②還元③灰白色 ④%	口辺の立ち上がりは内傾。受部はやや上向きに外へ のびる。口辺は器高の $\frac{1}{2}$ に位置する。ヨコナデの後 に底部手持ちヘラケズリを施す。	
172	5313	須恵器 蓋	6.0・ — ・ 1.6 かえり径・ 4.0 かえり高・ 0.4	前庭部No 1	①精選良好②還 元 ③灰白色④完形	頂部が平らなボタン状つまみをもつ。かえり端部よ り内傾きみで短く出る。天井部はヨコナデの後、回 転ヘラケズリ。	
173	5314	須恵器 短頸壺	5.6・ 3.0・ 5.5 頸部径・ 5.8 肩 径・ 8.4	前 庭	①細～粗砂少 量。精粒の白色 鈳物含む	口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、口唇部で僅かに内 傾。肩部に沈線をもち、丸底につづく。回転を伴な うヨコナデの後底部は回転ヘラケズリを施す。	②還元 ③灰色 ④ほぼ完形
174	5315	須恵器 小形 短頸壺	— ・ 9.4・ — 頸部径・ 4.4 肩 径・ 10.4	S トレ 49号墳	①細～粗粒の白 色鈳物含②還元 ③灰色 ④%	回転を伴なうヨコナデ、内面は稜を呈す。底部は回 転ヘラケズリ調整で丸底。	
175	5316	須恵器 蓋	(18.3)・ — ・ 5.7 つまみ径・ (3.6)	前庭No 9	①粗粒の白色鈳 物 少量 含む ②還元	有蓋高杯の蓋、ゆるやかにふくらむ天井部は丸い稜 を持って口縁部に到る。稜線下、口縁部寄りに一条 の沈線が巡る。つまみは低平で小さい。	③灰白色 ④ほぼ 完形 No5317と セット
176	5317	須恵器 高 杯	16.2・ 5.4・(19.6) 脚部径・ 16.9 脚部高・ (14.5)	前庭No 9	同 上	長脚2段有蓋高杯の杯部蓋受部の立ちあがりは低く 内傾する。脚端部は鋭角な稜線で仕上がる。	③灰白色 ④ほぼ 完形
177	5318	須恵器 蓋	最大19.0・6.1 最小16.8 つまみ径・ 2.8	前庭No 9	同 上	有蓋高杯の蓋、ゆるやかにふくらむ天井部は丸い稜 を持って口縁部に到る。稜線より上、天井部に一条 の沈線が巡る。	③灰白色 ④ほぼ 完形 版組No5319 とセット
178	5319	須恵器 高 杯	15.3・ 4.7・ 19.5 脚部径・ 16.9 脚部高・ 14.2	前庭No 9 E S トレ	同 上	長脚2段有蓋高杯の杯部蓋受部の立ちあがりは低く 内傾、脚端部は鋭角な稜線で仕上がる。	③灰白色 ④ほぼ 完形
179	5322	須恵器 蓋	(16.0)・ — ・ 2.9 つまみ径・ (5.4) かえり高・ 0.4	前庭No 9	①良好。精～細 粒の白色鈳物含 ②還元 ③灰色	中くぼみのボタン状つまみがつく。天井部中央は僅 かに平らでゆるやかに端部へつづき、端部が垂直に 屈曲する。天井部回転ヘラケズリ。	④%

番号	遺物No.	器 種 形	法 量(cm) 口 径・底 径・器 高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
180	5323	須恵器 蓋	—・—・— つまみ径・4.3	前 庭	①細砂含む ② 還元 ③灰色 ④½	薄く中くぼみのボタン状つまみがつく。天井部は回 転ヘラケズリ。	
181	5324	須恵器 蓋	(18.2)・—・2.9 つまみ径・4.5 かえり高・0.5	E S 拡張 トレ	①良好。精粒の 白色鉱物含む ②還元 ③灰色	中くぼみのボタン状つまみ。天井部は偏平で端部は ほぼ垂直に屈曲する。ロクロ整形の後、天井部は回 転ヘラケズリを施す。	④½
182	5325	須恵器 杯	(16.4)・(11.9)・— 4.1	前庭No 2 50号墳表 土	①良好。細〜中 粒の白色鉱物を 少量含む	底部の内縁・外縁を削り出しによる高台をもつ。つ くり出し高台。器厚はほぼ均一。底部が高台より外 に出る。	②還元・やや軟質 ③灰色 ④½
183	5326	須恵器 小 形 短頸壺	(9.0)・(5.6)・— 頸部径・(8.2) 胴部径・(12.2)	前庭上層	①良好。精粒の 白色鉱物少量含 ②還元 ③灰色	短い口縁部は口唇部で大きく外反。ヨコナデ調整の 後、胴下半部外面は手持ちヘラケズリを施す。	④¾・胴部接合せ ず
184	5327	須恵器 短頸壺	10.7・9.9・11.5 頸部径・10.5 肩 径・15.4	前 庭	①中砂。細粒の 白色鉱物含む ②還元	頸部からわずかに外反する。内外面にロクロ成形に よる稜残る。胴下半部は手持ちヘラケズリを施す。	③灰色 ④¾
185	5328	須恵器 平 瓶	7.6・—・— 頸部径・4.5	S トレン チ	①良好。精〜細 粒の白色鉱物少 量含む	漏斗状の口縁部で、口唇部は平らで内面に稜をもつ。 ヨコナデ調整で口縁上部に沈線を1条巡る。	②還元 ③灰白色 ④口縁部のみ残存
186	5329	須恵器 平 瓶	—・6.4・— 頸部径・(5.0) 胴部径・15.6	E S トレ E S 拡張	①良好。精粒の 白色鉱物含む② 還元③灰色④¾	天井部は偏平で丸みをもつ肩部からほぼ平らな底部 へつづく。粘土紐巻き上げの後、ヨコナデ調整し、 胴下部〜底部は手持ちヘラケズリを施す。	天井部〜肩部に緑 色自然釉附着。 東海産?
187	5330	須恵器 平 瓶	—・7.0・— 頸部径・5.5 肩 径・(18.8)	前 庭 E S トレ E S 拡張	①良好 ②還元 やや軟質③灰色 ④口唇部欠損½	他の平瓶と同様の成形で、口縁部は天井部の¾の位 置に接合。天井部に把手を意識したボタン状のもの を接合。	
188	5331	須恵器 平 瓶	—・—・— 頸部径・5.1 肩 径・19.6	主体部ト レ 49号墳	①細粒の白色鉱 物 ②還元③灰白色	直線的な口縁部。天井部は偏平で、肩部が張り偏平 な底部へつづく。口縁部中央に沈線を1条、肩部に も沈線1条巡る。	④½・口辺部欠損
189	5332	須恵器 平 瓶	—・16.0・— 頸部径・10.6 肩 径・28.0	E トレ NEトレ 中央トレ	①精〜細砂含む ②還元 ③灰色 ④½	粘土紐巻き上げ、天井部円形粘土板を接合する時、 しぼり痕を残す。頸部は広く、天井部は偏平で肩部 に稜をもつ。胴部ヨコ方向の手持ちヘラケズリ。	WSトレ主上の破 片と接合。
190	5333	須恵器 提 瓶	—・—・— 頸部径・4.9	前庭東方 上部 前 庭	①精選良好 ②還元③灰白色 ④¾天井部欠損	粘土紐巻き上げ成形。胴部のほぼ中央に口縁部を接 合。口縁部中央に2ヶ所沈線を巡らす。成形時の底 部〜天井部までロクロ成形によるハケ目文を施す。	底径が小さくな り、フラスコ形に 近い形態となる。
191	5334	須恵器 提 瓶	6.8・—・(21.8) 頸部径・5.6	前庭 主 体部トレ Sトレ 37号前庭	①白色鉱物含む ②還元③灰白色 ④¾	底部の円形粘土板に35mm前後の粘土紐で巻き上げた 後、胴部に穴を穿ち口縁部を接合。ロクロ成形し、 ヨコナデ、胴下部は回転ヘラケズリを施す。	同 上
192	5335	須恵器 提 瓶	—・—・— 胴部径・(15.2)	S トレ 49号E S ト レ	①良好。白色鉱 物含む②還元③ 灰白色④½	粘土紐巻き上げの後、胴端部にしぼり痕を残し、円 形粘土板でふさぐ。底部〜天井部はロクロ成形によ るヨコナデを施す。	同 上
193	5336	須恵器 提 瓶	7.6・—・24.7 頸部径・4.0 胴部径・15.0	羨道右壁 下奥	①精選良好 ②還元 ③灰色 ④ほぼ完形	胴部に環状把手をもつ。巾50mm程の粘土紐巻き上げ の後ロクロ成形を施し天井部を塞ぐ。口縁部は直線 で胴部はほぼ球状。底部と天井部に列点文。	口縁部〜胴部全体 に緑色自然釉が厚 く附着。東海産?
194	5337	須恵器 長頸瓶	(10.0)・—・— 頸部径・4.7	前庭No 9	①良好。白色鉱 物少量含む②還 元③灰色④½	巾30mm程の粘土紐巻き上げ成形。天井部円形粘土板 の内面を除き、ロクロによるヨコナデ。口縁部中央 に沈線2条残る。口唇部は二段構成に近い器形。	緑色の自然釉は一 部残存。東海産? フラスコ形

番号	遺物No	器 種 形	法 量 (cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
195	5338	須恵器 長頸瓶	—・—・— 胴部径・12.6	S トレ 各トレ	①精選良好 ②還元 良好 ③灰白色 ④½	底部に巾55mm程の粘土紐2段巻き上げ、ロクロ成形を施した後天井部を塞ぐ。器厚は底部が厚みをもつ。胴下部外面はロクロによるヘラケズリ。	肩部に緑色自然釉が附着。東海産？ フラスコ形
196	5339	須恵器 長頸壺	—・—・— 頸部径・5.8	S トレ E トレ 中央トレ	①良好。精粒の白色鉱物を含む。②還元	巾20mm程の粘土紐巻き上げ。天井部中央に穴を穿ち長く直線的な口縁部を接合する。ロクロによるヨコナデを施す。	③灰色 ④½
197	5340	須恵器 中形甕	21.0・—・— 頸部径・13.6 口縁高・9.1	E S 拡張 トレ 各トレ	①黒色鉱物含む ②還元③白褐色 ④½・底部残る	肩部に環状の把手をもつ。底部は丸底。口縁部は沈線で4段に区画し上から2・1・1・0条の波状文を施す。胴部は外面平行内面同心円叩き目文	
198	5341	須恵器 中形甕	—・—・— 頸部径・22.0	各トレ 49号墳E S 拡張	①精選良好。白色鉱物含む②還元 ③暗灰色 ④½	巾50mm前後の粘土紐巻き上げ成形の後、ロクロによるヨコナデ。肩部は張る。	
199	5342	須恵器 小形甕	15.6・—・24.7 頸部径10.7・胴径21.2 ・口縁高4.1	前庭No.9 E S トレ	①中砂含む②還元③灰色④ほぼ 完形	胴部の比率は1:1。口縁部に1条、肩部に2条の沈線が巡る。胴部外面は平行の後ハケ目で帯状に消し、内面同心円叩き目文。胴上半部はハケナデ。	
200	5343	須恵器 中形甕	22.6・—・— 頸部径・(14.2) 口縁高・6.7	前庭No.9 No.2 主 体部トレ	①良好。精粒の白色鉱物含む② 還元③灰色④½	40mm前後の粘土紐による巻き上げ。口縁部中央の沈線1条で上下に区画し各1条の波状文を施す。胴部外面は平行・内面は同心円叩き目文を施す。	49号Eトレ・37号 墳前庭出土砂片と 接合
201	5344	須恵器 中形甕	29.0・—・— 頸部径・21.1 口縁高・5.2	前庭	①細〜中砂含む ②還元③灰褐色 ④½	口縁部中央の沈線で上下に区画して、上段に巾7mm程のクシ状工具で波状文を1条施す。	
202	5345	須恵器 大形甕	23.0・—・— 頸部径・33.2 口縁高・11.8	E S トレ E S 拡張 トレ	①中砂。白色鉱物含む②還元 ③灰白色 ④½	50mm前後の粘土紐巻き上げ成形。頸部に接合強化の為の粘土紐を巡らし、段をもつ形態の大形甕。口縁上半部を沈線3条で区画、波状文・列点を施す。	
203	5346	須恵器 大形甕	46.0・—・— 頸径31.4・胴径(71.2) ・口縁高14.0	N E トレ W S トレ E S トレ	①中砂含む ②還元 ③灰色 ④½・底部残る	口縁部は沈線2本で3段に区画し、列点文を巡らす。胴内面は同心円叩き目文。外面は叩き目を磨き消す。	
204	5347	須恵器 大形甕	37.0・—・— 頸部径・22.5 口縁高・10.5	前庭 N E トレ W S トレ	①細〜中砂含む ②還元 ③灰白色④½	ロクロによるヨコナデ調整。口縁上部は沈線3本施す。胴部外面は平行。内面は同心円叩き目文を施す。	
205	5348	須恵器 中形甕	22.0・—・— 頸部径・16.8 口縁高・5.5	前庭No.2 // No.9 37号墳	①細〜中砂少量 含む②還元 ③灰白色④½	粘土紐巻き上げ成形。口縁部はロクロによるヨコナデ調整で稜が内外面に残る。胴部外面は平行、内面同心円叩き目文を施す。	
206	6011	須恵器 蓋	18.6・—・2.7 つまみ径・3.4 かえり径・16.4 かえり高・0.3	表土	①良好。精粒の白色鉱物含む ②還元③灰白色	扁平な宝珠つまみをもつ。器高は低い。端部内側にはかえりをもつ。かえりの先端は端と水平。天井部はロクロによるヘラケズリを全体に施す。	④½
207	6012	須恵器 提瓶	—・—・—	No.2	①細粒の白色鉱物含む②還元 ③灰色 ④½	およそ30mm程の粘土紐による巻き上げ成形。天井部はクシ状工具で、ロクロ整形のハケ目文を施す。	
208	6013	須恵器 壺 高台部	—・—・— 高台径・11.6	表土	①精選良好②還元 ③灰白色 ④½	ロクロ整形で端部外面に沈線を2条施し稜を呈す。付高台の接合面で剝離する。	
209	6014	須恵器 小形甕	—・—・— 頸部径・10.4	表土	①細砂含む ② 還元 ③灰色 ④½	No.5342に類似するが小形。胴部外面は平行叩き目文をクシ状工具のヨコナデで上半部を消す。内面は上部をなで消し、下半部は同心円叩き目文施す。	

番号	遺物No	器 種 形	法 量(cm) 口 径・底 径・器 高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
210	6015	須恵器 大形甕	40.4・ — ・ — 頸部径・29.0 口縁高・15.0	No 2 中央トレ 表 土	①良好 ②還元 ③灰白色④½	口唇部は折り返して2段構成を模倣。口縁部は沈線 2・1・2条で4段に区画し、上3段に波状文を各1条施 す。胴部外面ヨコ方向平行・内面同心円叩き目文。	
211	6103	須恵器 平 瓶	— ・ — ・ — 頸部径・5.2	中央トレ 主 体 部	①良好 ②還元 ③灰色 ④%口唇部欠損	ロクロによるヨコナデを施す。	
212	6104	須恵器 瓶	— ・ 8.0・ —	石 碓	①細～中砂含む ②還元 ③灰色 ④%	粘土紐巻き上げによる成形。後に胴部ヨコナデを施 す。	
213	6105	須恵器 中形甕	23.4・ — ・ — 頸部径・17.5 口縁高・5.0	中央トレ	①良好②還元 ③灰色 ④口縁 部～頸部のみ	粘土紐巻き上げで口縁部を接合する。口唇部はつま み出し及び沈線で複雑な稜を呈す。内面はロクロに よるヨコナデで低い稜をもつ。	
214	6106	須恵器 小形甕	17.8・ — ・ — 頸部径・13.4 口縁高・2.8	E ト レ	①細砂。その他 含む②還元 ③灰色 ④%	50mm前後の粘土紐の巻き上げで成形。口縁部は大きく 外反し口唇部で僅かに内傾する。胴部は平行の後横 になでて帯状に消す。内面は同心円叩き目文を施す。	
215	6107	須恵器 中形甕	— ・ — ・ — 頸部径・14.0	中央トレ	①細砂。白色鉍 物含む②還元③ 灰白色④%	粘土紐の巻き上げ成形の後、口縁部はヨコナデ、胴 部は叩き目文を施す。	
216	6108	須恵器 中形甕	— ・ — ・ — 頸部径・17.0	E ト レ	①細砂含む ② 還元 ③灰白色 ④%	粘土紐巻き上げによる成形。口縁部はヨコナデ調整。 胴部は外面、平行叩き目文。内面、同心円叩き目文 を施した後ナゲ消している。	
217	6109	須恵器 大形甕	— ・ — ・ — 頸部径・14.7	石 碓 中央トレ 主 体 部	①中砂含む ②還元③灰白色 ④%口唇部欠損	粘土紐による巻き上げ成形。ロクロによって口縁部 中央に2条の沈線で2段に区画、各1条波状文を施 す。胴部外面は平行、内面は同心円叩き目文を施す。	
218	6110	須恵器 大形甕	39.8・ — ・ (71.0) 頸部径28.6・胴径60.9 ・口縁高15.4	石 碓 中央トレ 表 土	①細～中砂含む ②還元③灰色 ④%	60mm前後の粘土帯で巻き上げ。長い口縁部接合の為 頸部に細い粘土紐を付着。口縁部は沈線で5段に区 画、上4段に波状文。胴部は平行と同心円の叩き目。	焼成後、底部に穿 孔 頸部に凸帯巡 る
219	6201	須恵器 蓋	15.5・ — ・ 3.6 つまみ径・4.6 かえり高・0.65	前 庭	①精選良好 ②還元 ③灰色 ④%	中くぼみのボタン状つまみを接合。端部は垂直に屈 曲する。ロクロ成形の後、天井部をヘラケズリ。	
220	6202	須恵器 蓋	— ・ — ・ — つまみ径・6.3	中央トレ 表 土	①良好②還元③ 灰白色④つまみ ～体部½	中くぼみのボタン状つまみを接合。つまみの径はや や大きい。	
221	6303	須恵器 蓋	(16.4)・ — ・ 3.1 つまみ径・6.0 かえり径・(13.9) かえり高・0.4	中央トレ 表 土	①細砂含む②還 元 ③灰色 ④%	中くぼみのボタン状つまみを接合。細く短いかえり をもち、端部と水平の位置にある。天井部はロクロ によるヘラケズリを施す。	
222	6304	須恵器 杯	— ・ 8.4・ —	中央トレ 表 土	①細砂含む②還 元 ③灰色 ④%	ロクロ成形による杯。体部はヨコナデ、体下部～底 部はロクロによるヘラケズリ調整を施す。	
223	6305	須恵器 中形甕	— ・ — ・ — 頸部径・17.0	中央トレ 表 土	①良好②還元③ 灰黄色④頸部 ～肩部	口縁部はロクロによるヨコナデ調整を行う。口縁下 部は波状文を1条。胴部外面は平行の後、横になで 帯状に消す。内面は同心円叩き目文を施す。	頸部に凸帯巡る
224	6438	須恵器 蓋	10.8・ — ・ 2.8 つまみ径・1.5 かえり径・9.5 // 高・0.6	前庭No5 前庭No9	①細砂。白色鉍 物含む ②還元③灰白色	ほぼ垂直に立ち上がり短い口縁部をもつ。最大径は 器高の½にあり、沈線1条ヨコナデ調整で呈する。 底部は手持ちヘラケズリ。	④%

番号	遺物No	器 種 形	法 量 (cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
225	6433	須恵器 蓋	10.4・ — ・ — かえり径・8.4 かえり高・0.4	前 庭	①細砂。白色鉍 物含む ②還元③灰白色	No5301～5304に類似する器形。宝珠状つまみをもち、 天井部から突出するつまみを呈する。天井部は、ロ クロによるやや不整形なヘラケズリを施す。	④ $\frac{1}{2}$ ・つまみ欠損
226	6434	須恵器 蓋	10.0・ — ・ — かえり径・7.9 かえり高・0.5	前 庭	同 上	No5301～5304に類似する。器高が僅か扁平になる。 ロクロ成形で天井部より突出するかえりを呈す。 天井部は手持ちヘラケズリ。器厚は薄い。	④ $\frac{1}{4}$ ・つまみ欠損
227	6435	須恵器 蓋	10.2・ — ・ — かえり径・7.8 かえり高・0.6	前 庭	同 上	No5301～5304に類似する。更に扁平な器形。かえり は天井部より突出し、器厚はNo6434に比べ薄い。 天井部調整は手持ちヘラケズリ。	④ $\frac{1}{2}$ ・つまみ欠損
228	6436	須恵器 蓋	10.6・ — ・ 2.7 つまみ径・1.2 かえり径・8.4 かえり高・0.5	前 庭	同 上	No5301～5304に類似する。かえりは天井部から突 出する。天井部は手持ちヘラケズリ。	④ $\frac{1}{2}$
229	6437	須恵器 小形 短頸壺	7.4・ 7.8・ 5.1 頸部径・7.8 肩 径・9.2	前 庭	①細砂少量含む ②還元③灰白色 ④ $\frac{1}{2}$	No5301～5304に類似する。宝珠状つまみを天井部中 央部に接合。天井部部の内側にかえりをもち突出す る。天井部にロクロによるヘラケズリを施す。	
230	6439	須恵器 小形 短頸壺	— ・ — ・ — 頸部径・6.6 肩 径・8.9	前 庭	①細砂含む②還 元③灰白色④ $\frac{1}{2}$ 口縁部欠損	ロクロ成形によるヨコナデで肩部に沈線1条呈す。 胴部最大径は器高のほぼ $\frac{1}{2}$ にある。	
231	6440	須恵器 蓋	13.8・ — ・ 3.3 つまみ径・3.5 かえり高・0.6	前 庭	①精選良好②還 元③灰色 ④ $\frac{1}{4}$	中くぼみのボタン状つまみを扁平な天井部につく。 天井部はほぼ垂直に屈曲する。ロクロによるヨコ ナデにより細かな稜をもち天井部にヘラケズリ。	
232	6441	須恵器 杯	12.9・ 7.9・ 3.7	前庭No.7	①細砂多量に含 む ②還元③灰白色	ロクロによるヨコナデで細かな稜を、内外面にもつ 底部は回転ヘラ切り。底径は口径の $\frac{1}{2}$ よりやや広い。	④完形
233	6442	須恵器 平 瓶	(8.3)・ 6.6・(14.3) 頸部径・ 5.0 肩 径・(16.4)	前庭No.1 前庭No.2	①良好。細粒の 白色鉍物含む ②還元③灰白色	35mm前後の粘土紐の巻き上げて、端部は丸く調整し 円形粘土板を接合する。肩部より穴を穿ち口縁部 を接合。肩部に沈線、胴部はタテ方向にヘラケズリ。	④ $\frac{1}{2}$
234	6443	須恵器 小形 短頸壺	(5.4)・ 4.0・ 5.5 頸部径・(5.3) 肩 径・(7.6)	表 土	①良好。白色鉍 物含む ②還元 ③灰白色④ $\frac{1}{2}$	ロクロによるヨコナデで、短い口縁部をもつ。肩部 はロクロによるヘラケズリを施す。底部は厚みをもち 胴部は薄い。	
235	6444	須恵器 小形 短 壺	6.3・5.7・8.2 頸部径・6.6 肩径・11.4	表 土	①細～中砂含む 白色鉍物含む② 還元	ロクロによるヨコナデで、内面に稜を呈す。最大径 は器高の $\frac{1}{4}$ にある。張りのある肩部から短い口縁部 は内傾する。胴部外面はヨコ方向手持ちヘラケズリ。	③灰白色 ④ $\frac{1}{2}$
236	6445	須恵器 中形甕	(19.4)・ — ・ — 頸部径・15.3 口縁高・3.5	表 土	①良好 ②還元 ③灰白色 ④ $\frac{1}{4}$	ロクロ成形のヨコナデで、胴部内面には細かく稜を 呈する。	
237	6446	須恵器 中形甕	20.3・ — ・ — 頸部径・16.2 口縁高・6.3	中央トレ 表 土 各トレ	①細～中砂含む ②還元 ③灰色 ④ $\frac{1}{4}$	粘土紐巻き上げによる成形。胴部内面は同心円、外 面は平行叩き目文調整を施す。	
238	6447	須恵器 大形甕	(42.0)・ — ・ — 頸部径・(26.5) 口縁高・13.6	表 土	①良好 ②還元 ③灰色 ④ $\frac{1}{2}$	35mm前後の巻き上げ成形。ロクロによるヨコナデの 後に、口縁部外面に沈線2条で3段に区画、上段に 波状文は2条、中段に1条施す。	
239	6501	土師器 杯	12.6・ 12.7・(4.0)	石室埋没 土	①細砂含む ②酸化 ③橙色 ④ $\frac{1}{2}$	No1103に類似。口辺内外面及び底部内面、ヨコナデ。 底部外面、手持ちによるヘラケズリを施す。	

番号	遺物No	器 種 形	法 量 (cm) 口径・底径・器高	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	備 考
240	6502	須恵器 杯	(12.6)・ 7.2・ 3.5	墳丘表土	①良好 ②還元 ③灰色 ④½	ロクロ成形の杯。底径は口径の½より大きい。底部は回転糸切りの後、底部周辺及び口辺下部は回転によるヘラケズリ。	
241	6503	須恵器 長頸壺	(12.2)・ — ・ — 頸部径・ 8.8	墳丘表土	①細砂含む ②還元 ③灰色 ④口縁～肩部	天井部中央に穴を穿ち口縁部を接合、口縁部はロクロによるヨコナデ。	
242	6504	須恵器 台付壺	— ・ 15.0・ — 肩 径・ 27.2	墳丘表土	①良好 ②還元 ③灰色 ④¼口 縁部・底部欠損	35mm前後の粘土紐による巻き上げ成形。肩部に沈線2条で3段に区画。中段・下段に列点文を各1条施す。胴部ヨコナデの後、ヨコ方向ヘラケズリ。	
243	6505	須恵器 中形甕	24.2・ — ・ — 頸部径・ 15.4 口縁高・ 4.0	石室埋没 土 表 土	①細～中砂含む ②還元 ③灰白色 ④½	口縁部は肩部から大きく外反し、口唇部で僅かに内傾。胴部内面ヨコ方向の平行、外面タテ方向平行の叩き目文を施す。	
244	6506	須恵器 中形甕	(20.7)・ — ・ — 頸部径・ 17.0 口縁高・ 4.5	墳丘表土	①細～中砂含む ②還元 ③灰色 ④½	張った肩部から、口縁部は上部で外し、口唇部で内傾する。口縁部はヨコナデを施す。	

註 甕の分類について

横穴式石室を主体部にもつ本古墳群は、ほとんどの古墳からといってよいほど、須恵器の甕が出土している。出土位置については、墳丘の削平や石室の天井部が抜かれて主体部が攪乱をうけていたりして、原位置が確認できなかった。けれども現墳丘表面での破片の散乱状態などの分布範囲から墳丘頂上部に置かれていたと考えることができる。

これら、破碎された破片を復元すると、焼成後、甕の底部付近に器表面側から意図的な穿孔がみられるものが多い。底部穿孔の須恵器を墳頂に供献するといった葬送儀礼は、県内の後期古墳に共通にみられる。供献された須恵器の甕も器形の大小や成形、調整技法の多様さ、胎土や焼成の違いから考えられる生産地の問題など、画一的にはとらえられそうになかった。

そこで、土器観察表の作成段階において、これらの甕について類型化を試みようとする努力したが、結局成果はあがらないまま時間切れとなり、甕を大、中、小の区分といたきわめて主観的な表記にはならざるを得なかった。それでも、この問題にこだわり、類型化の見通しを若干のべておきたい。先づ甕の大きさは、貯蔵物の容量を規定すると考えた場合、口縁部を除いた胴部の高さや胴部の径の関係を分類してみた。すると、胴部高と胴部径の比は肩部に最大幅はあるものの1:1で、正方形が基準になっている事がわかる。また、大きさは、20cmから80cmまで間断なく続く。けれども、30cm、40cm、60cmクラスに分析資料の¾が集中している。

つぎに口縁部径と頸部径の関係は、その貯蔵物質の出し入れを規定すると考えた場合口縁部径20～25cmで頸部径10～20cmのグループが分析資料の¾を占めており、次に口縁部径40cm、頸部径30cmがその次に集中するグループとして認められる。

さらに口縁部の長さとその傾きの関係は、貯蔵物の種類と、その貯蔵方法を規定すると考えた場合、口縁部の長いものは、その立ち上がりは直立気味で、口縁部長さの短いものは、開きが急で外反する。

以上の3つの要素を組み合わせると、大まかに、3つの類型が抽出できる。

I類は、胴部径40cmで、口縁部径20～25cm、口縁部の短いもの。

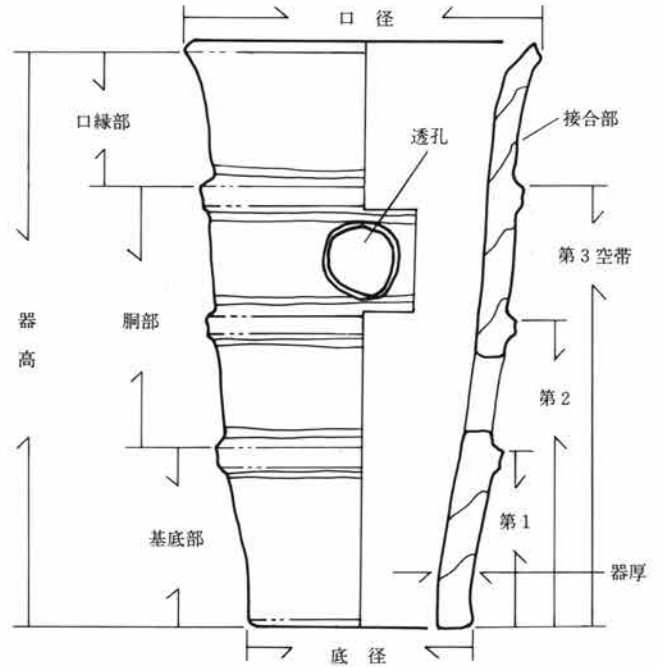
II類は、胴部径60cmで、口縁部径40cm、口縁部の長いもの。

III類は、胴部径80cmで、口縁部径40cm、口縁部は長く直立したもの。

これらの土器の形を基本としたもの他に、更に施文、口縁端部の変化及び製作技法などの要素を加えて細分する必要がある。技法の面からみるとIII類とした大形の甕の口縁部と胴部との外側屈曲部に凸帯を貼りつけたものが多い。直立した口縁部の接合力を強化するための補強帯と考えてよかろう。このグループは3～4条の沈線間をうめる波状文と受け口状の口縁端部など細部の調整技法までも共通している点で興味深い。

第5表 円筒埴輪

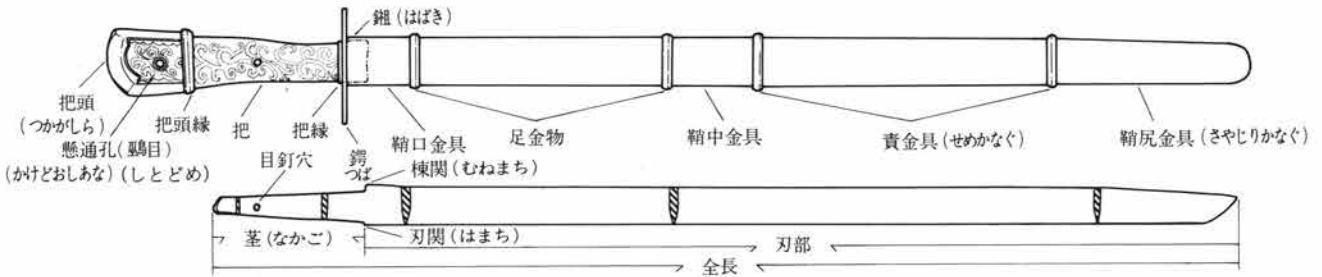
円筒埴輪観察表・基準



第158図 円筒埴輪部位名称

番号	版組No	形態	器高	口径	底径	器厚	透孔	突帯		刷毛目 本数 2cm	色調	胎土	焼成	粘土帯巾	摘要
								第1	第2						
245	2103	A	(5.6) (25.0)	30.1	14.1	1.1	有	8.6	20.2	11~12	明褐灰	細~粗粒砂	B-b	4.0	内面縦指撫で、外面縦刷毛目
246	2104	B	(8.9)	34.6	—	1.0	無	—	—	〃	橙	中・粗粒砂	A-a	3.5	内面縦・横、外面縦刷毛目
247	2105	B	(18.5)	—	—	1.2	無	—	—	〃	にぶい橙	細粒砂	A-b	3.0	内面横、外面縦・横刷毛目
248	2106	A	(15.3)	—	—	1.0	無	—	—	10~11	浅黄橙	粗粒砂	A-b	3.0	内面縦指撫で、外面縦刷毛目
249	2107	B	(20.4)	—	13.0	1.4	有	9.2	18.2	11	〃	〃	〃	2.8	〃
250	2108	A	(10.9)	—	—	1.3	有	—	—	12~13	〃	中・粗粒砂	A-a	2.0	内・外面縦刷目
251	2109	A	(25.7)	—	11.0	1.5	有	(10.0)	(16.8)	11~12	〃	粗粒砂	A-b	2.8	内面縦指撫で、外面縦刷毛目
252	2110	A	(16.0)	—	—	1.0	無	—	—	10~11	〃	〃	〃	1.6	内面斜め、外面縦刷毛目
253	2111	A	(4.5)	—	14.1	1.4	有	—	—	11	にぶい橙	細粒砂	〃	4.0	内面指撫で、外面縦刷毛目
254	2112	A	(4.7)	—	11.9	1.7	無	—	—	11~12	〃	〃	A-a	5.0	内面斜め、外面縦刷毛目
255	2113	A	(11.3)	24.2	—	1.0	無	—	—	7~8	橙	中粒砂	〃	3.0	内面縦指撫で、外面縦刷毛目
256	2114	A	(14.6)	—	—	1.5	有	—	—	8~9	にぶい橙	中・粗粒砂	A-b	1.5	〃
257	2307	A	(8.0)	—	13.7	1.4	無	—	—	10~11	浅黄橙	中粒砂	2.0	内面斜め、外面縦刷毛目	〃
258	2308	A	(13.6)	—	(10.0)	1.3	無	—	—	11~12	褐灰	細粒砂	B-a	—	内面縦指撫で、外面縦刷毛目

第6表 武器



第159図 直刀・付属品の各部名称模式図

刀類

単位 (cm)

No	遺物No	名称	残存状態	全長	刃部	茎部	目釘穴	備考
1	0501	大 刀	刃部のみ	(47.80)	(47.80)	—	—	
2	0701	〃	〃	(52.0)	(52.0)	—	—	
3	1321	〃	完 形	68.80	60.0	8.80	1	拵・鐔・目釘 1
4	1322	〃	刃部～茎部	(46.80)	(38.90)	(7.90)	—	拵・鐔
5	1323	小 刀	ほぼ完形	(40.75)	(32.15)	8.60	1	拵・鐔・足金物 2・目釘 2
6	1401	〃	刃部～茎部 $\frac{3}{4}$	(18.80)	(16.05)	(2.75)	1	
7	1512	大 刀	完 形	72.0	61.30	10.70	1	把頭・鴨目・把頭縁・把縁・責金具 4・鐔・拵・鞘尻
8	1513	〃	ほぼ完成	(69.50)	66.80	(2.70)	—	
9	1514	〃	〃	(63.40)	(59.20)	(4.20)	—	
10	1515	小 刀	刃部のみ	(13.65)	(13.65)	—	—	
11	2301	大 刀	刃部～茎部	(62.60)	(59.80)	(2.80)	—	拵・鐔
12	2801	〃	ほぼ完形	(65.60)	(58.20)	(7.40)	—	
13	3001	〃	完 形	91.10	80.70	10.40	1	拵・目釘 2
14	3002	〃	ほぼ完形	82.70	70.90	11.80	1	拵・鐔・目釘 2
15	3003	〃	〃	(72.60)	(58.60)	(14.0)	2	拵・鐔・目釘 2
16	3007	小 刀	刃部～茎部 $\frac{1}{2}$	(20.85)	(14.35)	(6.50)	—	
17	3008	〃	完 形	26.40	18.10	8.30	1	目釘 1
18	3009	〃	ほぼ完形	(21.65)	(15.0)	6.65	1	目釘 1
19	5001	〃	刃部～茎部	(33.90)	28.50	(5.40)	—	
20	5201	大 刀	ほぼ完形	(80.50)	(71.20)	(9.30)	—	拵・鐔・足金物 2
21	5901	〃	刃部のみ	(44.40)	(44.40)	—	—	鐔
22	6001	〃	刃部～茎部	(45.75)	(36.93)	8.82	1	目釘 1
23	6002	〃	ほぼ完形	(59.10)	(52.60)	6.50	1	
24	6003	小 刀	刃部のみ	(23.60)	(23.60)	—	—	

No	遺物No	名称	残存状態	全長	刃部	茎部	目釘穴	備考
25	6306	大刀	ほぼ完形	(75.80)	69.65	(6.15)	—	
26	6401	〃	〃	86.40	72.0	14.0	1	目釘1
27	6402	〃	〃	(79.20)	(70.30)	(8.90)	—	
28	6403	〃	〃	(76.45)	(66.0)	(10.45)	1	目釘1
29	6404	〃	〃	72.30	63.60	8.70	1	目釘1
30	6405	小刀	刃部～茎部	(7.60)	(3.60)	4.0	1	

刀 装 具 類

単位 (cm)

No	遺物No	把頭	鴨目	把頭縁	把縁	有脚環	黄金具	鍔	鍔	足金物	鞘尻	両金頭座具	備考
1	0705	—	—	—	—	—	—	(3.50)× (1.80)	—	—	—	—	
2	0706	—	—	—	3.40× 3.80	—	—	—	—	—	—	—	有脚環 挿入孔
3	0921	2.70× 2.65	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	目釘孔?
4	1321	—	—	—	—	—	—	3.50× 2.22	3.10× 1.65	—	—	—	鍔・鍔一体 物 銀製
5	1322	—	—	—	—	—	—	3.80× 2.50	3.05× 1.90	—	—	—	〃
6	1323	—	—	—	—	—	—	3.10× 2.05	2.70× 1.95	3.90× 2.0	—	—	〃
7	1324	2.20× (4.90)	1.0×1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
8	1325	3.0× 4.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	目釘孔?
9	1326	—	—	—	—	—	—	9.15× 7.05	—	—	—	—	
10	1327	—	1.0× 1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
11	1356	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2.80)× (0.80)	
12	1357	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(3.10)× (0.90)	
13	1512	4.60× 5.50	0.95× 1.05	4.50× 0.85	2.95× 0.30	—	4.15× 2.30	8.0× 5.90	3.05× 1.90	—	3.25× 13.95	—	蕨手文
14	1801	—	—	—	—	—	—	(10.20)× (8.75)	—	—	—	—	
15	2301	—	—	—	—	—	—	(5.60)× (4.20)	4.10× 2.60	—	—	—	
16	2510	—	—	4.38× 2.82	—	—	—	—	—	—	—	—	
17	2802	—	—	—	—	—	—	—	(3.80)× 2.60	—	—	—	
18	2803	—	—	—	—	—	—	(3.80)× (3.10)	—	—	—	—	
19	2804	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2.55)× (3.65)	—	底板
20	3001	—	—	—	—	—	—	—	3.75× (2.60)	—	—	—	
21	3002	—	—	—	—	—	—	7.40× 6.0	3.70× 2.60	—	—	—	鍔8窓
22	3003	—	—	—	—	—	—	5.20× 3.80	3.20× 2.0	—	—	—	
23	3004	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.0× 2.05	—	底板

No	遺物No	把頭	鴨目	把頭縁	把縁	有脚環	賣金具	鈎	鑷	足金物	鞘尻	両頭座金具	備考
24	3005	3.10× 3.30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
25	3006	—	—	—	—	—	—	—	3.95× (2.80)	—	—	—	
26	3301	—	—	—	—	—	—	7.03× 5.92	—	—	—	—	
27	3302	—	—	—	—	—	—	—	3.48× 1.50	—	—	—	破片
28	3747	—	1.38× 1.35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	金銅製
29	3748	—	1.35× 1.32	—	—	—	—	—	—	—	—	—	金銅製
30	3749	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.75× 4.75	—	
31	3750	—	—	—	—	—	2.80× 1.50	—	—	—	—	—	金銅製
32	3751	—	—	(4.0)× (2.65)	—	—	—	—	—	—	—	—	
33	3752	—	—	—	—	2.30× 5.0	—	—	—	—	—	—	金銅製
34	4923	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.95× 0.70	
35	4924	2.90× 5.60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
36	5201	—	—	—	—	—	—	5.0× 2.70	3.95× 1.70	5.52× 2.20	—	—	鞘口金具
37	5901	—	—	(6.40)× (3.80)	—	—	—	—	—	—	—	—	
38	6406	—	—	—	—	—	—	9.40× 8.10	—	—	—	—	8窓?
39	6407	—	—	—	—	—	—	(6.90)× (5.70)	—	—	—	—	
40	6408	—	—	—	—	—	—	(7.10)× 6.30	—	—	—	—	
41	6409	—	—	—	—	—	—	—	(6.55)× (4.40)	—	—	—	
42	6410	—	—	—	—	—	—	—	3.80× 2.85	—	—	—	
43	6411	—	—	—	—	—	—	—	(3.30)× 2.15	—	—	—	
44	6412	—	—	—	—	—	—	—	(2.20)× (2.50)	—	—	—	

刀 子

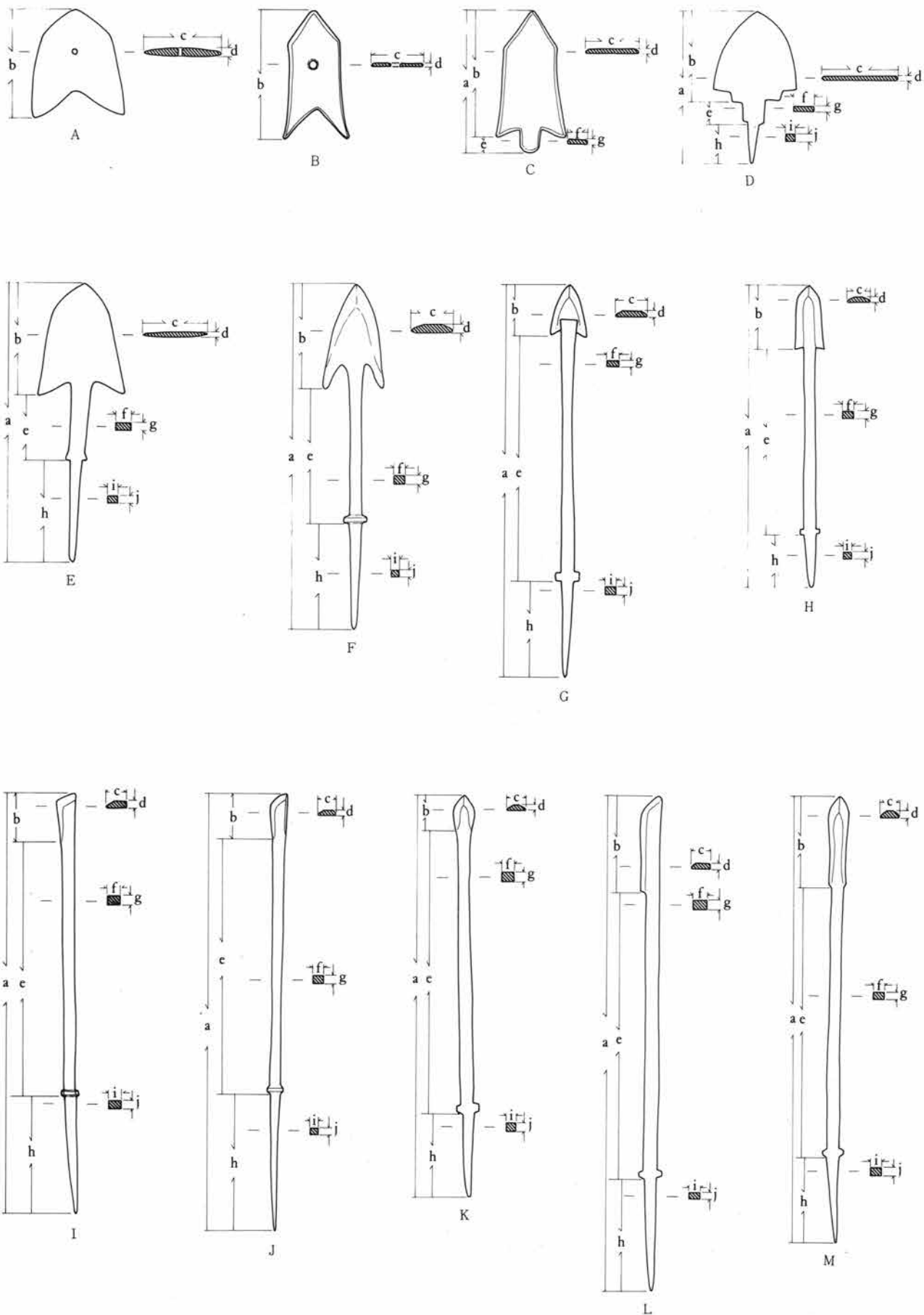
単位 (cm)

No	遺物No	残存状態	全長	刃部	茎部	備考
1	0606	刃~茎 $\frac{3}{4}$	(12.20)	(11.20)	(1.0)	
2	0803	刃~茎 $\frac{1}{4}$	(6.05)	(4.15)	(1.90)	
3	1102	刃部 $\frac{1}{2}$	(5.73)	(5.73)	—	
4	2509	ほぼ完形	11.50	8.70	2.80	
5	2805	〃	(10.0)	(6.75)	(3.25)	
6	3010	刃~茎 $\frac{3}{4}$	(9.15)	(7.65)	(1.50)	
7	5010	刃部 $\frac{1}{4}$	(6.70)	(6.70)	—	
8	5202	茎部 $\frac{1}{2}$	(9.0)	(2.0)	7.0	

鉄製工具

単位 (cm)

No	遺物No	残存状態	全長	備考
1	1355	刃~柄	(6.40)	
2	3011	刃~柄	(4.35)	



第160图 鉄鏃形態別模式图

有 無	茎	形 態	名 稱	分類
無	茎	有 孔	有孔広根腸扶三角形式	A
〃		〃	有孔狭根腸扶五角形式	B
有	茎-I	短 茎	狭根腸扶五角形式	C
〃		〃	椿葉式	D
〃		〃	広根両丸造腸扶三角形式	E
有	茎-II	棘篋被	狭根片切刃造腸扶三角形式	F
〃		〃	狭根片切刃造鑿箭式	G
〃		〃	狭根片切刃造腸扶鑿箭式	H
〃		〃	端片刃箭式 (1)	I
〃		〃	端片刃箭式 (2)	J
〃		〃	端刃鑿箭式	K
〃		〃	片関片切刃箭式	L
〃		〃	両関片切刃箭式	M

鉄鏃

単位 (cm)

No	遺物No	分類	残存状態	全長	鏃 身 部				篋 被 部			茎 部			備 考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
1	0702	H	刃~柄	(5.40)	3.30	2.13	0.37	(1.80)	0.75	0.40	—	—	—		
2	0703	—	柄~茎	(6.50)	—	—	—	(2.70)	0.45	0.35	(3.75)	0.32	0.28		
3	0704	—	茎部	(4.80)	—	—	—	—	—	—	(4.80)	0.40	0.30		
4	0801	D	刃~茎	(5.40)	3.25	(3.50)	0.13	0.80	0.25	0.20	(1.20)	0.30	0.24		
5	0802	〃	刃~茎	(5.10)	(4.0)	(3.40)	0.20	(0.70)	0.75	0.35	(0.40)	0.45	0.25		
6	0922	M	刃~茎	(4.65)	(3.0)	0.72	0.25	(1.20)	0.55	0.23	—	—	—		
7	0923	—	柄~茎	(5.80)	—	—	—	(3.60)	0.40	0.32	2.20	0.30	0.18		
8	1001	I	刃~柄	(9.80)	1.30	0.70	0.18	(7.70)	0.40	0.35	(0.70)	0.32	0.30		
9	1002	〃	刃~柄	(3.50)	1.0	0.50	0.20	(2.50)	(0.45)	0.35	—	—	—		
10	1003	M	刃~柄	(8.30)	(2.80)	0.55	0.14	(5.50)	0.40	0.32	—	—	—		
11	1004	—	柄~茎	(7.20)	—	—	—	(3.80)	0.40	0.35	(3.40)	0.25	0.20	口巻遺存	
12	1005	H	刃~茎	(10.30)	(2.60)	1.50	0.30	6.30	0.70	0.35	(1.40)	0.55	0.30		
13	1101	I	刃~柄	(2.70)	1.10	0.60	0.20	(1.50)	0.50	0.40	—	—	—		
14	1334	L	刃~茎	(15.90)	1.40	0.70	0.20	(11.80)	0.50	0.28	(2.70)	0.32	0.22		
15	1335	〃	刃~柄	(11.50)	(3.50)	0.80	(0.28)	(8.10)	0.38	0.25	—	—	—		
16	1336	〃	刃~柄	(11.70)	(3.80)	0.80	0.25	(7.95)	0.60	0.25	—	—	—		
17	1337	〃	刃~柄	(9.10)	(3.0)	0.60	0.20	(6.10)	0.50	0.40	—	—	—		

№	遺物№	分類	残存状態	全長				鐵身部			篋被部			茎部			備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j				
18	1338	L	刃～柄	(11.0)	(0.55)	0.60	0.18	(10.45)	0.58	0.30	—	—	—				
19	1339	//	刃～茎	(12.10)	2.10	0.70	0.20	(5.40)	0.58	0.25	4.60	0.55	0.40	口巻遺存			
20	1340	//	刃～柄	(10.50)	(3.0)	0.60	0.19	(7.70)	0.55	0.33	—	—	—				
21	1341	//	刃～柄	(4.80)	(1.10)	0.75	0.16	4.15	0.50	0.25	—	—	—				
22	1342	I	刃～柄	(11.15)	1.50	0.80	0.18	(9.65)	0.45	0.30	—	—	—				
23	1343	M	刃～柄	(7.30)	(1.14)	0.80	0.18	(6.23)	0.50	0.28	—	—	—				
24	1344	F	刃～柄	(7.70)	4.0	1.75	0.25	(4.40)	0.50	0.25	—	—	—				
25	1345	—	柄～茎	(12.20)	—	—	—	(11.60)	0.48	0.30	(0.70)	0.45	0.18				
26	1346	—	柄～茎	(8.60)	—	—	—	(6.80)	0.47	0.25	(1.80)	0.30	0.20				
27	1347	—	柄～茎	(10.30)	—	—	—	(9.20)	0.53	0.20	(1.10)	0.35	0.18				
28	1348	—	柄～茎	(12.0)	—	—	—	(6.36)	0.50	0.29	(5.65)	0.39	0.25	口巻遺存			
29	1349	—	柄～茎	(10.10)	—	—	—	(4.60)	0.40	0.30	(5.40)	0.43	0.28	口巻遺存			
30	1350	—	柄～茎	(9.30)	—	—	—	(4.20)	0.50	0.40	(5.10)	0.40	0.32				
31	1351	—	柄～茎	(8.0)	—	—	—	(3.15)	0.45	0.30	4.90	0.45	0.30				
32	1352	—	柄～茎	(6.40)	—	—	—	(2.40)	0.55	0.27	(4.0)	0.25	0.20	口巻遺存			
33	1353	—	柄～茎	(7.10)	—	—	—	(5.90)	0.50	0.25	(1.20)	0.50	0.25				
34	1354	—	柄～茎	(5.50)	—	—	—	(3.60)	0.60	0.40	(2.20)	0.40	0.29	口巻遺存			
35	1402	L	刃～茎	(9.80)	(2.10)	0.65	0.20	7.20	0.55	0.27	(0.55)	—	—	口巻遺存			
36	1403	//	刃～柄	(5.15)	3.30	0.90	0.20	(1.85)	0.60	0.32	—	—	—				
37	1404	F	刃～柄	(3.70)	(3.37)	2.10	0.18	(0.77)	0.77	0.15	—	—	—				
38	1501	L	刃～柄	(10.60)	(2.80)	0.85	0.30	(7.90)	0.50	0.40	—	—	—				
39	1502	//	刃～柄	(8.20)	3.65	0.75	0.25	(4.10)	0.65	0.40	—	—	—				
40	1503	//	刃～柄	(5.10)	(3.0)	0.70	0.28	(2.0)	0.52	0.30	—	—	—				
41	1504	//	刃～柄	(3.75)	(7.50)	0.70	0.18	(3.0)	0.60	0.20	—	—	—				
42	1505	//	刃～茎	(12.80)	(6.75)	0.95	0.28	(5.70)	0.70	0.30	(0.42)	—	—				
43	1506	M	刃～柄	(5.80)	(4.10)	0.90	0.20	(1.65)	—	—	—	—	—				
44	1507	//	刃～茎	(13.60)	(5.60)	0.85	0.20	6.15	0.55	0.35	(1.90)	0.35	0.25				
45	1508	—	柄～茎	(9.80)	—	—	—	(8.87)	0.50	0.20	(0.93)	0.19	0.13				
46	1509	—	柄～茎	(9.50)	—	—	—	(7.90)	0.45	0.35	(1.60)	0.50	0.30				
47	1510	—	柄～茎	(8.80)	—	—	—	(3.70)	0.45	0.27	(4.75)	0.30	0.25				
48	1511	—	柄	(12.60)	—	—	—	(11.03)	0.60	0.30	—	—	—				

No	遺物No	分類	残存状態	全長	鐵身部				篋被部			茎部			備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
49	2302	K	刃~茎	(12.50)	1.30	0.75	0.27	(8.70)	0.60	0.48	(2.50)	0.30	0.30		
50	2303	—	柄~茎	(5.40)	—	—	—	(3.25)	0.40	0.38	(1.65)	0.30	0.30		
51	2304	—	柄~茎	(8.50)	—	—	—	(2.70)	0.50	0.45	5.80	0.35	0.30		
52	2501	H	刃~茎	(14.63)	3.90	0.90	0.35	8.10	0.55	0.25	(2.45)	0.45	0.20		
53	2502	M	刃~柄	(9.32)	3.20	0.90	0.35	(6.10)	0.60	0.22	—	—	—		
54	2503	H	刃~茎	12.36	2.40	1.02	0.35	7.95	0.60	0.20	1.70	0.48	0.20		
55	2504	〃	刃~茎	(11.59)	(2.48)	1.05	0.25	7.15	0.50	0.30	(1.85)	0.40	0.25		
56	2505	M	刃~柄	(10.80)	1.30	0.60	0.20	(9.40)	0.55	0.40	—	—	—		
57	2506	—	柄~茎	(11.0)	—	—	—	(6.0)	0.70	0.40	(4.40)	0.40	0.30	口巻遺存	
58	2507	E	刃~茎	(10.77)	(4.30)	2.60	0.20	2.65	0.65	0.30	(3.95)	0.40	0.30	口巻遺存	
59	2508	A	刃	(3.92)	3.92	2.80	0.30	—	—	—	—	—	—		
60	2701	J	刃~茎	(14.60)	(1.35)	0.60	0.18	(9.75)	0.46	0.30	(3.80)	0.32	0.27		
61	2702	L	刃~柄	(5.80)	2.40	0.70	0.28	(3.40)	0.55	0.35	—	—	—		
62	2703	K	刃~柄	(7.0)	1.08	0.67	0.24	(5.92)	0.33	0.30	—	—	—		
63	2704	〃	刃~茎	(13.95)	(3.70)	0.70	(0.20)	9.40	0.50	0.40	(0.85)	0.35	0.30		
64	2806	L	刃~柄	(7.90)	1.60	0.56	0.25	(6.30)	0.45	0.30	—	—	—		
65	2807	—	柄~茎	(16.20)	—	—	—	(13.50)	0.50	0.45	(2.30)	0.30	0.30		
66	3012	L	刃~茎	(15.0)	(3.20)	0.80	0.25	7.0	0.60	0.30	(4.20)	0.45	0.30		
67	3013	M	刃~茎	(14.67)	2.60	0.67	0.19	9.25	0.44	0.30	2.82	0.30	0.19		
68	3014	〃	刃~茎	(17.60)	(1.30)	0.80	0.30	11.35	0.60	0.40	4.10	0.55	0.40		
69	3015	—	柄~茎	(10.20)	—	—	—	(6.60)	0.55	0.32	3.70	0.25	0.20	口巻遺存	
70	3016	E	刃~茎	(7.50)	1.90	2.50	0.34	3.90	0.50	0.35	(1.70)	0.55	0.30		
71	3017	L	刃~柄	(8.50)	(3.50)	0.80	0.38	(5.0)	0.55	0.35	—	—	—		
72	3018	I	刃~茎	(17.48)	1.56	0.90	0.35	10.15	0.60	0.42	(5.75)	0.40	0.25	口巻遺存	
73	3019	M	刃~柄	(7.90)	2.60	0.70	0.30	(4.60)	0.55	0.35	(0.20)	—	—		
74	3020	—	柄~茎	(6.23)	—	—	—	(1.30)	0.40	0.25	4.93	0.40	0.38		
75	3021	L	刃~柄	(9.50)	(1.70)	0.70	0.30	(7.80)	0.45	0.40	—	—	—		
76	3022	I	刃~柄	(5.25)	(3.90)	0.95	0.15	(1.45)	0.60	0.20	—	—	—		
77	3023	L	刃~柄	(12.0)	3.40	0.70	0.30	(8.60)	0.60	0.40	—	—	—		
78	3024	〃	刃~柄	(4.50)	(1.94)	0.63	0.20	(2.10)	0.50	0.20	—	—	—		
79	3025	G	刃~茎	(11.30)	(1.70)	1.20	0.20	9.30	0.50	0.20	(0.30)	0.45	0.25		

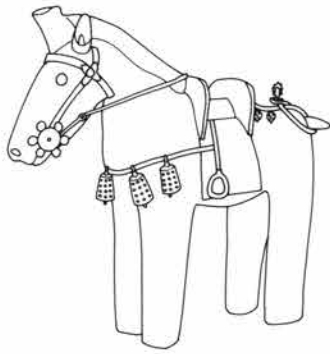
No	遺物No	分類	残存状態	全長	鎌身部				筥被部			茎部			備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
80	3026	L	刃～柄	(10.50)	(4.20)	0.68	0.21	(6.30)	0.45	0.37	—	—	—		
81	3027	M	刃～柄	(8.90)	(2.60)	0.71	0.15	(6.30)	0.45	0.28	—	—	—		
82	3028	J	刃～柄	(2.42)	1.42	0.70	0.13	(1.0)	—	—	—	—	—		
83	3029	L	刃～茎	(11.40)	(1.85)	—	—	7.65	0.65	0.35	(1.90)	0.25	0.15		
84	3030	〃	刃～茎	(11.0)	1.90	0.75	0.30	7.10	0.60	0.30	(2.05)	0.30	0.20		
85	3031	〃	刃～柄	(9.80)	2.80	0.60	0.20	(7.0)	0.60	0.30	—	—	—		
86	3032	M	刃～茎	(11.70)	2.10	0.80	0.20	7.60	0.60	0.30	(1.60)	0.40	0.25		
87	3033	I	刃～柄	(4.30)	2.0	0.65	0.15	(2.30)	0.65	0.15	—	—	—		
88	3034	M	刃～柄	(5.49)	(1.42)	0.71	0.13	(4.07)	0.40	0.27	—	—	—		
89	3035	〃	刃～柄	(9.90)	(1.80)	0.70	0.20	(8.10)	0.45	0.25	—	—	—		
90	3036	〃	刃～茎	(14.20)	(2.30)	0.80	0.30	9.10	0.55	0.35	(2.40)	0.35	0.30		
91	3037	B	刃	(4.60)	(4.60)	1.95	0.15	—	—	—	—	—	—		
92	3038	〃	刃	(4.70)	(4.70)	1.41	0.09	—	—	—	—	—	—		
93	3303	H	刃～茎	(11.20)	2.30	1.05	0.25	7.85	0.50	0.30	(1.05)	0.53	0.30		
94	3304	〃	刃～柄	(9.0)	(2.15)	1.15	0.35	(6.53)	0.55	0.30	—	—	—		
95	3305	〃	刃～柄	(5.65)	(2.65)	1.20	0.23	(3.10)	0.60	0.20	—	—	—		
96	3306	〃	刃～柄	(6.30)	(2.65)	1.17	0.25	(3.65)	0.67	0.20	—	—	—		
97	3307	F	刃～柄	(6.40)	(2.60)	1.10	0.24	(3.80)	0.50	0.22	—	—	—		
98	3701	J	刃～茎	(15.0)	2.10	0.73	0.30	9.70	0.45	0.38	(3.20)	0.21	0.20		
99	3702	L	刃～柄	(11.65)	2.50	0.70	0.30	9.0	0.42	0.35	—	—	—		
100	3703	I	刃～柄	(11.40)	2.10	0.65	0.18	(9.30)	0.55	0.25	—	—	—		
101	3704	J	刃～茎	(14.10)	1.78	0.65	0.20	9.40	0.40	0.30	(2.95)	0.30	0.23	口巻遺存	
102	3705	L	刃～柄	(4.90)	2.30	0.75	0.20	(2.60)	0.50	0.30	—	—	—		
103	3706	I	刃～茎	(10.0)	(1.35)	0.70	0.20	6.40	0.46	0.25	(2.25)	0.21	0.20	口巻遺存	
104	3707	〃	刃～茎	(13.50)	1.90	0.80	0.25	9.33	0.45	0.35	(2.27)	0.48	0.30		
105	3708	〃	刃～柄	(11.70)	2.20	0.60	0.24	(9.47)	0.40	0.35	—	—	—		
106	3709	〃	刃～柄	(9.60)	2.0	0.65	0.20	(7.60)	0.40	0.30	—	—	—		
107	3710	〃	刃～茎	(18.20)	(2.20)	0.60	0.20	9.80	0.40	0.35	(4.30)	0.30	0.28		
108	3711	〃	刃～柄	(5.30)	1.50	0.67	0.20	(3.80)	0.40	0.25	—	—	—		
109	3712	〃	刃～柄	(3.50)	2.20	0.70	0.20	(1.30)	0.50	0.30	—	—	—		
110	3713	〃	刃～柄	(4.90)	(0.90)	0.52	0.17	(4.0)	0.35	0.30	—	—	—		

No	遺物No	分類	残存状態	全長	鐵身部				篋被部			茎部			備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
111	3714	I	刃～茎	(13.60)	(1.70)	0.70	0.18	9.50	0.35	0.30	(2.40)	0.29	0.27		
112	3715	〃	刃～柄	(9.50)	2.70	0.60	0.25	(6.80)	0.40	0.25	—	—	—		
113	3716	〃	刃～柄	(4.20)	1.30	0.75	0.25	(3.90)	0.60	0.35	—	—	—		
114	3717	〃	刃～柄	(12.60)	2.30	0.82	0.20	(10.30)	0.40	0.40	—	—	—		
115	3718	〃	刃～柄	(11.40)	2.60	0.60	0.25	(8.80)	0.40	0.30	—	—	—		
116	3719	〃	刃～茎	(11.80)	(1.50)	0.75	0.35	9.40	0.45	0.30	(1.0)	0.40	0.33		
117	3720	〃	刃～柄	(10.20)	1.70	0.75	0.25	(8.50)	0.40	0.35	—	—	—		
118	3721	〃	刃～茎	(15.15)	(2.50)	0.70	0.30	(9.15)	0.47	0.40	(3.50)	0.30	0.25	口巻遺存	
119	3722	〃	刃～柄	(11.40)	(1.75)	(0.55)	(0.15)	(9.55)	(0.45)	0.45	—	—	—		
120	3723	〃	刃～茎	(11.20)	(1.20)	0.65	0.25	9.20	0.40	0.30	(0.80)	0.46	0.28		
121	3724	〃	刃～茎	(14.10)	1.0	0.68	0.17	9.30	0.50	0.25	(3.70)	0.35	0.34		
122	3725	K	刃～茎	(12.85)	2.80	0.73	0.23	9.0	0.43	0.37	(1.10)	0.40	0.31		
123	3726	M	刃～柄	(10.40)	(1.90)	0.60	0.30	(8.50)	0.45	0.30	—	—	—		
124	3727	K	刃～柄	(5.40)	(2.0)	0.62	0.26	(3.40)	—	—	—	—	—		
125	3728	〃	刃～柄	(5.40)	2.0	0.70	0.20	(3.50)	0.40	0.35	—	—	—		
126	3729	M	刃～茎	(12.0)	(2.40)	0.80	0.30	(6.0)	0.50	0.30	(3.50)	0.22	0.20	口巻遺存	
127	3730	—	柄～茎	(13.20)	—	—	—	(11.10)	0.40	0.30	(2.10)	0.28	0.25		
128	3731	—	柄～茎	(11.10)	—	—	—	(10.30)	0.38	0.40	(0.80)	0.37	0.33		
129	3732	—	柄～茎	(12.60)	—	—	—	(8.68)	0.40	0.26	3.92	0.25	0.20	口巻遺存	
130	3733	—	柄～茎	(12.10)	—	—	—	(10.60)	0.42	0.30	(1.50)	0.35	0.35	口巻遺存	
131	3734	—	柄～茎	(7.10)	—	—	—	(3.50)	0.50	0.40	(3.60)	0.25	0.20	口巻遺存	
132	3735	—	柄～茎	(9.40)	—	—	—	(5.80)	0.48	0.28	(3.60)	0.32	0.30	口巻遺存	
133	3736	—	柄～茎	(13.20)	—	—	—	(10.50)	0.45	0.30	(2.70)	0.35	0.25	口巻遺存	
134	3737	—	柄～茎	(7.10)	—	—	—	(3.05)	0.38	0.30	(4.05)	0.24	0.23	口巻遺存	
135	3738	—	柄～茎	(4.70)	—	—	—	(1.80)	0.50	0.40	(2.90)	0.35	0.30	口巻遺存	
136	3739	—	柄～茎	(8.40)	—	—	—	(4.40)	0.40	0.30	(4.0)	0.28	0.24		
137	3740	—	柄～茎	(7.95)	—	—	—	(4.0)	0.40	0.30	3.95	0.25	0.20	口巻遺存	
138	3741	—	柄～茎	(9.40)	—	—	—	(9.10)	0.40	0.30	(0.30)	—	—		
139	3742	—	柄～茎	(8.90)	—	—	—	(4.80)	0.40	0.30	(4.15)	0.20	0.20		
140	3743	—	柄～茎	(10.50)	—	—	—	(10.30)	0.40	0.35	(0.20)	—	—		
141	3744	—	柄～茎	(9.80)	—	—	—	(9.10)	0.38	0.28	(0.70)	0.28	0.20		

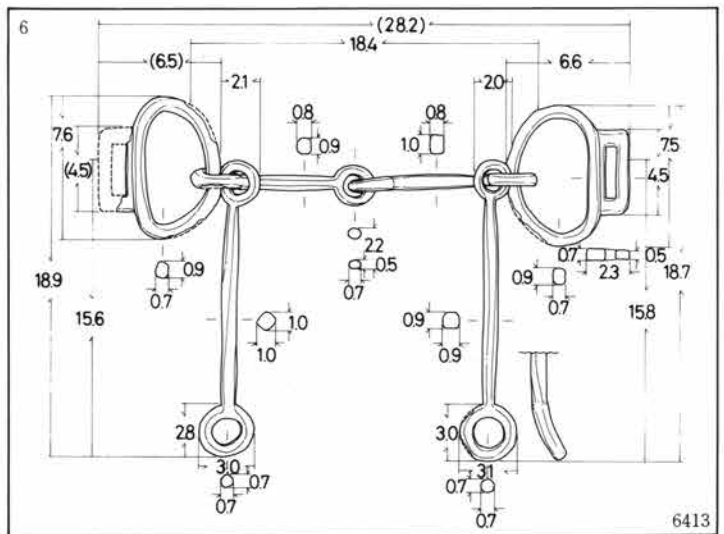
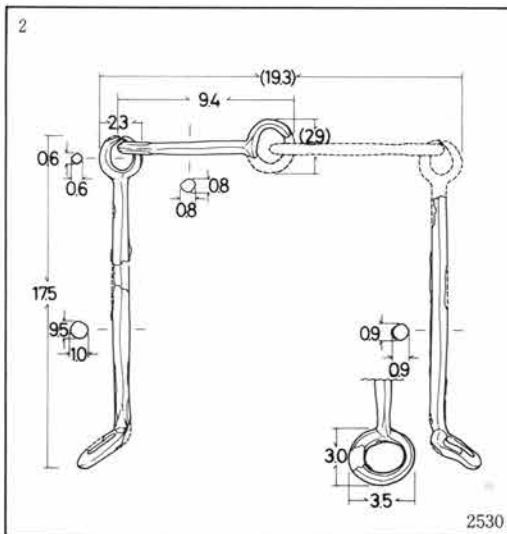
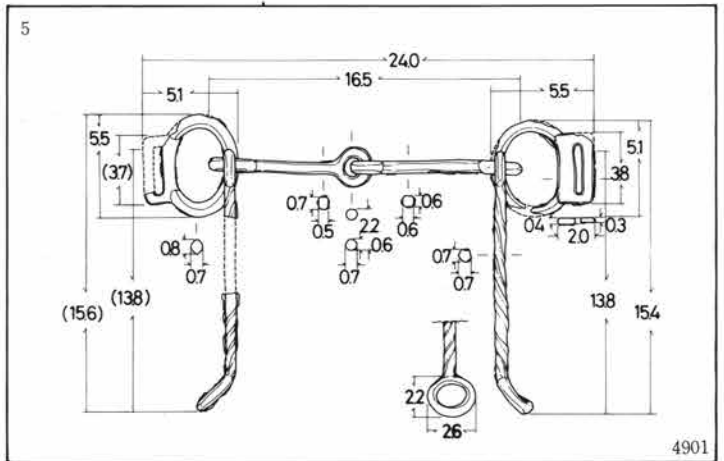
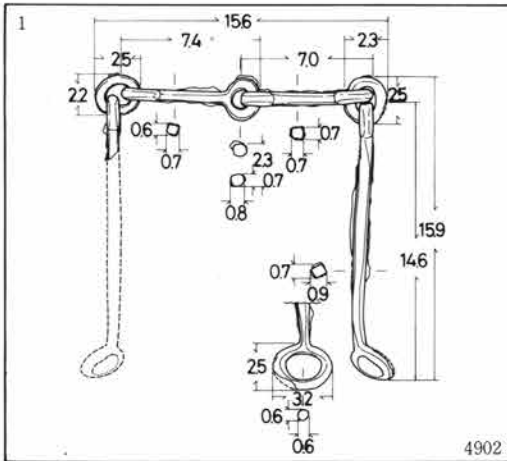
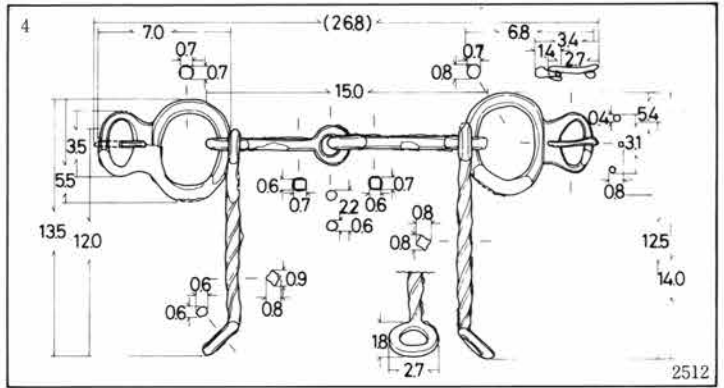
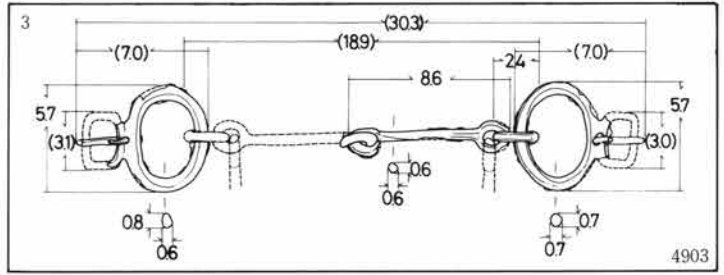
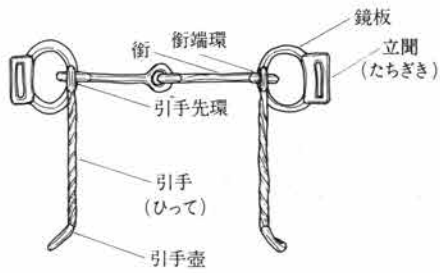
No	遺物No	分類	残存状態	全長	鍔身部				篋被部			茎部			備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
142	3745	—	柄～茎	(10.25)	—	—	—	(9.60)	—	—	(1.70)	0.30	0.30		
143	3746	—	柄～茎	(6.45)	—	—	—	(2.55)	0.50	0.45	(3.95)	0.35	0.30	口巻遺存	
144	4932	L	刃～柄	(9.65)	3.07	0.65	0.17	(6.58)	0.50	0.35	—	—	—		
145	4933	I	刃～茎	(13.80)	(2.50)	0.70	0.20	8.80	0.40	0.35	(2.60)	0.30	0.27	口巻遺存	
146	4934	L	刃～柄	(10.10)	(4.20)	0.70	0.19	(5.90)	0.50	0.26	—	—	—		
147	4935	K	刃～柄	(3.20)	2.60	0.75	0.30	(1.10)	0.48	0.38	—	—	—		
148	4936	〃	刃～柄	(4.90)	1.75	0.80	0.17	(3.25)	0.50	0.22	—	—	—		
149	4937	〃	刃～茎	(13.0)	1.90	0.70	0.20	9.30	0.40	0.33	(1.80)	0.22	0.25		
150	4938	〃	刃～柄	(11.45)	(1.90)	0.70	0.26	(9.55)	0.46	0.29	—	—	—		
151	4939	—	柄～茎	(14.40)	—	—	—	(12.40)	0.55	0.40	1.65	0.60	0.40		
152	4940	M	刃～柄	(4.70)	3.30	0.70	0.20	(1.20)	0.40	0.25	—	—	—		
153	4941	—	柄～茎	(5.40)	—	—	—	(1.60)	—	—	(3.55)	0.37	0.30		
154	4942	L	刃～茎	18.80	2.40	0.70	0.20	10.80	0.55	0.40	5.60	0.40	0.30		
155	4943	〃	刃～茎	(17.40)	2.80	0.70	0.20	10.50	0.45	0.30	(4.0)	0.35	0.30		
156	4944	I	刃～茎	(19.30)	(1.60)	0.70	0.17	11.80	0.50	0.30	(6.0)	0.30	0.25		
157	4945	L	刃～茎	(13.50)	(0.80)	0.65	0.25	11.35	0.40	0.30	(1.35)	0.28	0.25		
158	4946	—	柄～茎	(13.40)	—	—	—	(7.60)	0.55	0.40	(5.80)	0.33	0.28	口巻遺存	
159	4947	L	刃～柄	(10.20)	(3.60)	0.70	0.18	(6.60)	0.40	0.30	—	—	—		
160	4948	I	刃～柄	(5.65)	(1.80)	0.60	0.30	(3.85)	0.25	0.25	—	—	—		
161	4949	B	刃	4.20	4.20	2.05	0.35	—	—	—	—	—	—		
162	4950	L	刃～柄	(12.20)	2.0	0.60	0.20	10.30	0.35	0.30	—	—	—		
163	4951	I	刃～柄	(11.20)	2.0	0.50	0.22	(9.30)	0.38	0.30	—	—	—		
164	4952	J	刃～茎	(16.90)	1.80	0.55	0.22	12.60	0.35	0.28	(2.50)	0.23	0.22		
165	4953	I	刃～柄	(10.30)	(1.80)	0.60	0.17	(9.50)	0.38	0.30	—	—	—		
166	4954	〃	刃～茎	(12.90)	1.70)	0.70	0.20	11.30	0.45	0.30	(1.10)	0.45	0.30		
167	4955	L	刃～柄	(10.40)	3.60	0.70	0.20	6.80	0.45	0.30	—	—	—		
168	4956	〃	刃～柄	(6.20)	3.10	0.68	0.20	(3.10)	0.40	0.30	—	—	—		
169	4957	—	柄～茎	(8.60)	—	—	—	(2.60)	0.50	0.27	6.0	0.28	0.23		
170	4958	L	刃～柄	(12.40)	(2.80)	0.65	0.20	(9.60)	0.50	0.30	—	—	—		
171	4959	G	刃～茎	(10.40)	0.70	1.15	0.10	8.50	0.65	0.25	(1.20)	0.40	0.19		
172	4960	M	刃～柄	(10.0)	3.20	0.70	0.25	(6.80)	0.45	0.25	—	—	—		

No	遺物No	分類	残存状態	全長	鐵身部				筥被部			茎部			備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
173	4961	G	刃~柄	(8.50)	1.74	1.23	0.20	(6.75)	0.42	0.32	—	—	—		
174	4962	F	刃~茎	(11.70)	(3.55)	1.55	0.35	5.90	0.40	0.35	(3.10)	0.30	0.25		
175	5002	—	柄~茎	(7.50)	—	—	—	(6.60)	0.57	0.30	(0.90)	0.36	0.18		
176	5003	L	刃~茎	(13.20)	(3.0)	0.60	0.18	9.30	0.40	0.23	(0.90)	0.30	0.29		
177	5004	〃	刃~柄	(9.70)	(3.60)	0.73	0.20	(6.10)	0.47	0.20	—	—	—		
178	5005	〃	刀~柄	(4.73)	3.50	1.08	0.10	(1.30)	0.55	0.12	—	—	—		
179	5006	—	柄~茎	(7.0)	—	—	—	(4.53)	0.48	0.29	(1.47)	0.22	0.22		
180	5007	L	刃~柄	(5.40)	(2.60)	0.68	0.19	(2.80)	0.50	0.26	—	—	—		
181	5008	—	柄~茎	(7.50)	—	—	—	(4.70)	0.50	0.15	(2.80)	0.32	0.15		
182	5009	F	刃~茎	(15.40)	3.15	1.40	0.45	6.85	0.48	0.35	(5.70)	0.35	0.30		
183	5203	—	柄~茎	(9.50)	—	—	—	(4.30)	0.40	0.40	(5.20)	0.35	0.32		
184	5204	—	柄~茎	(7.20)	—	—	—	(2.65)	0.35	0.30	(4.50)	0.30	0.25		
185	5205	—	柄~茎	(5.05)	—	—	—	(1.75)	0.40	0.35	(3.25)	0.25	0.30		
186	5206	—	柄~茎	(7.0)	—	—	—	(1.0)	—	—	6.0	0.30	0.25	口巻遺存	
187	5207	—	柄~茎	(15.0)	—	—	—	(9.60)	0.45	0.35	5.40	0.30	0.30	口巻遺存	
188	6004	C	刃	(5.30)	(4.70)	1.95	0.20	(0.60)	0.75	0.18	—	—	—		
189	6005	K	刃~柄	(8.20)	0.80	0.55	0.34	(7.40)	0.50	0.35	—	—	—		
190	6006	—	柄~茎	(11.80)	—	—	—	(7.80)	0.55	0.35	4.0	0.25	0.25		
191	6420	H	刃~茎	(10.70)	(1.80)	0.95	0.25	6.0	0.45	0.25	(2.90)	0.25	0.28	口巻遺存	
192	6421	M	刃~柄	(8.50)	2.55	0.90	0.18	(5.95)	0.50	0.20	—	—	—		
193	6422	〃	刃~茎	(16.30)	2.30	0.80	0.24	(8.0)	0.43	0.26	6.0	0.38	0.30	口巻遺存	
194	6423	〃	刃	(2.0)	(2.0)	0.80	0.60	—	—	—	—	—	—		
195	6424	〃	刃~柄	(4.70)	(2.20)	0.78	0.32	(2.50)	0.44	0.28	—	—	—		
196	6425	I	刃~柄	(9.50)	1.20	0.55	0.13	(8.30)	0.30	0.25	—	—	—		
197	6426	—	柄~茎	(10.40)	—	—	—	(6.0)	0.40	0.29	(4.60)	0.25	0.27	口巻遺存	
198	6427	M	刃~柄	(3.90)	2.40	0.85	0.22	(1.50)	0.45	0.18	—	—	—		
199	6428	〃	刃~柄	(5.80)	2.50	0.80	0.20	(3.30)	0.50	0.30	—	—	—		
200	6429	〃	刃~柄	(6.20)	2.70	0.86	0.20	(3.50)	0.58	0.20	—	—	—		
201	6430	K	刃~柄	(4.30)	1.80	0.55	0.17	(2.50)	0.45	0.30	—	—	—		
202	6431	〃	刃~柄	(4.80)	2.10	0.70	0.22	(2.70)	0.60	0.30	—	—	—		
203	6432	〃	刃~柄	(8.40)	(1.60)	0.60	0.17	(6.80)	0.40	0.28	—	—	—		

第7表 馬具

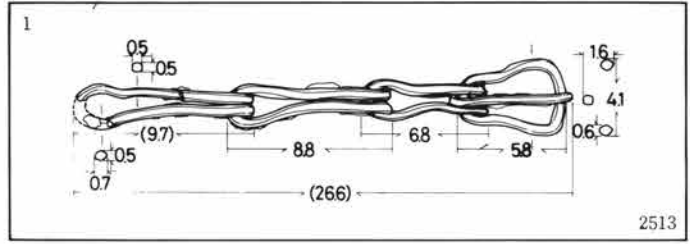


轡

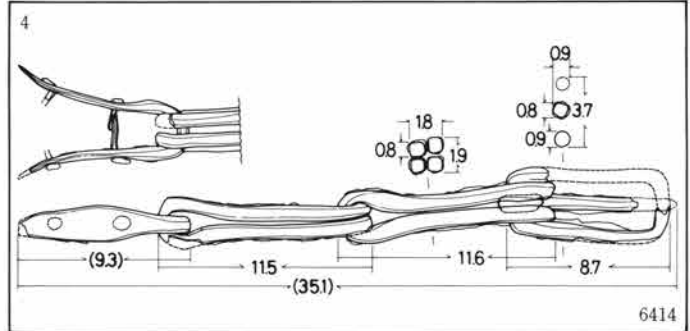
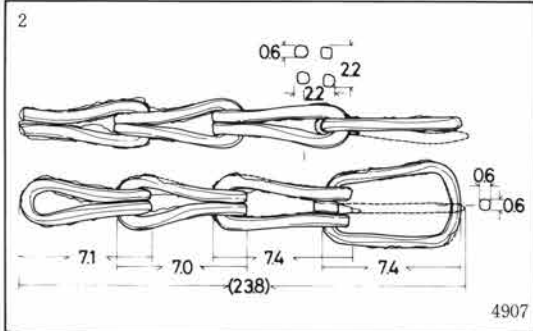


第161図 馬具(轡)計測表(1)

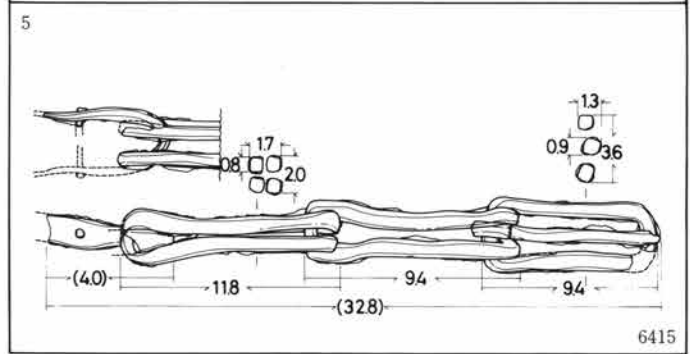
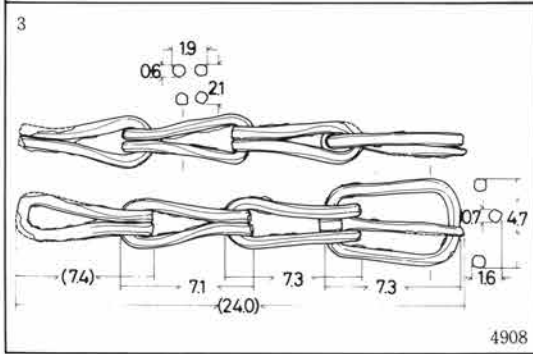
鐙



2513



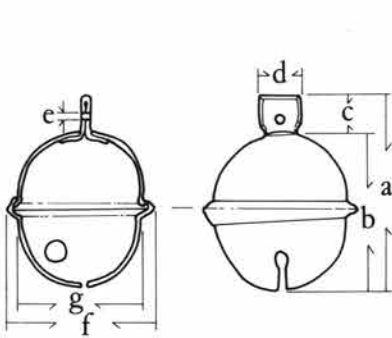
6414



6415

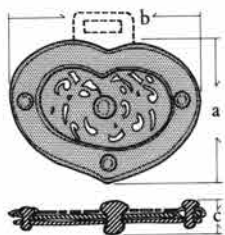
第162図 馬具(鐙)計測表(2)

単位 (cm)



第163図 馬具(鈴)模式図

No.	遺物No.	残存状態	a	b	c	d	e	f	g	備考
1	2514	3/4残存	(3.25)	(2.55)	0.70	0.90	0.18	2.80	2.40	
2	2515	1/2 "	(2.95)	(2.30)	0.72	0.70	0.13	2.68	2.30	
3	2516	3/8 "	3.35	2.55	0.80	(0.95)	0.27	2.80	2.40	
4	2517	ほぼ完形	(3.0)	(2.35)	0.65	0.80	0.27	2.70	2.35	
5	2518	完形	3.40	2.70	0.70	0.80	0.12	2.70	2.30	丸あり
6	2519	1/2残存	(3.15)	(2.40)	0.65	0.90	0.25	(3.0)	2.50	

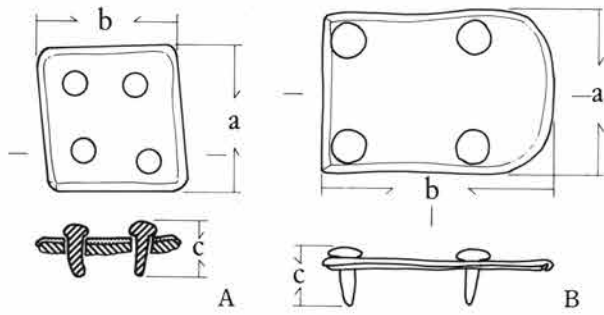


第164図 馬具(杏葉)模式図

杏葉

単位 (cm)

No.	遺物No.	残存状態	a	b	c	備考
1	4904	1部破片	(5.10)	(7.80)	(0.60)	金銅製
2	4905	"	(4.80)	(7.0)	(0.75)	"
3	4906	3/4残存	(5.30)	7.50	(1.25)	"



第165図 馬具(飾金具)模式図

飾金具

単位 (cm)

No	遺物No	形態	a	b	c	鈎数	備考
1	1359		2.45	(2.50)	(2.15)	(3)	辻金具(同) 金銅製
2	1359		(2.80)	2.25	(2.15)	(3)	金銅製
3	1360	B	2.60	(2.80)	(1.05)	3	〃
4	1361	B	2.15	(3.65)	1.20	(3)	〃
5	1362		2.50	(2.20)	(1.40)	(3)	〃
6	1363	B	(2.30)	(3.05)	(1.0)	(3)	〃

No	遺物No	形態	a	b	c	鈎数	備考
7	1516	B	2.30	3.90	1.0	3	
8	1517	A	(2.70)	(2.80)	(0.80)	4	
9	1518	〃	2.65	2.55	(0.70)	4	
10	4916	B	(3.0)	(4.10)	1.0	(4)	金銅製
11	4917	〃	3.0	4.10	0.60	3	〃
12	4918	〃	2.15	2.50	(1.10)	3	〃
13	4919	〃	1.90	2.70	(1.0)	3	〃
14	5015	〃	2.15	(3.30)	(1.75)	2	〃
15	5016		(2.20)	(2.15)	(1.0)	(2)	〃
16	5017	B	(2.0)	2.55	(0.90)	2	〃
17	5018		2.25	(2.50)	(1.20)	(4)	〃
18	5019		(2.45)	(2.55)	(1.25)	4	〃
19	6416		(4.40)	2.65	0.55	(4)	〃
20	6417		(4.30)	2.40	0.55	(4)	〃

その他付属品

単位 (cm)

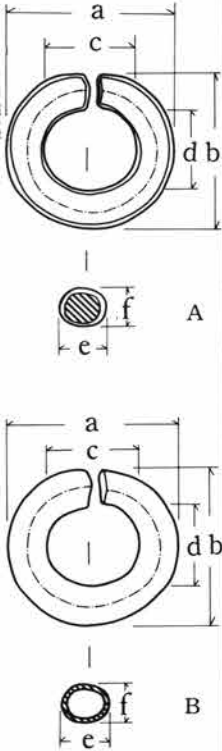
No	遺物No	部位名称	全長	幅	備考
1	1358	環状雲珠	(5.55)	(5.50)	
2	1359	辻金具	(7.78)	(7.35)	金銅製
3	2520	金銅製飾板	5.0	(4.25)	〃
4	2521	〃	(5.0)	(7.20)	〃
5	4909	鍔	(18.20)	2.70	
6	4910	鉸具	6.87	4.85	
7	4911	不明	3.0	4.05	
8	4912	不明	4.60	(2.60)	
9	4913	不明	6.70	(4.50)	
10	4914	鉸具	(7.40)	(5.50)	

No	遺物No	部位名称	全長	幅	備考
11	4915	不明	3.20	2.05	
12	4920	雲珠	(3.55)	3.40	中心部のみ
13	4921	不明	(1.95)	1.50	
14	4922	不明	(1.80)	1.47	
15	5011	不明	(5.70)	3.60	
16	5012	鍔	(4.0)	(4.40)	
17	5013	鍔	(5.40)	1.70	釘1
18	5014	引手	(2.35)	2.60	
19	5208	鍔	(3.80)	1.80	釘1
20	6418	留金具	(2.65)	(2.70)	鈎1
21	6419	〃	(2.50)	(2.60)	鈎1

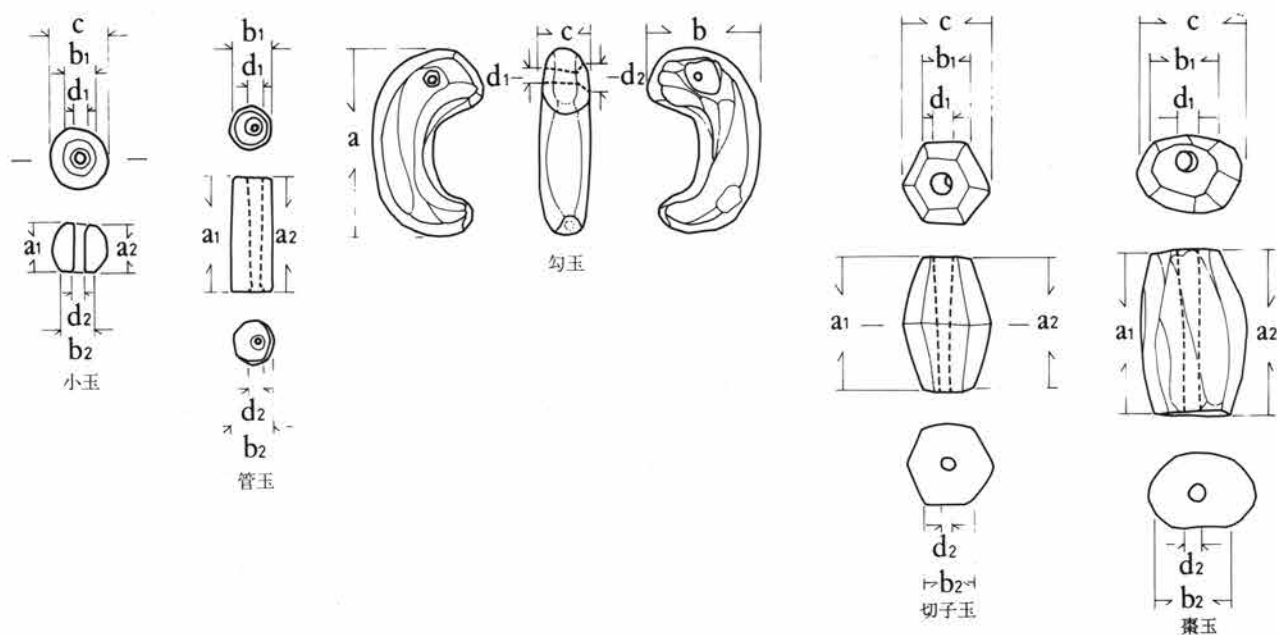
第8表 装身具

金環

No	遺物No	形態	残存状態	外径(cm)		内径(cm)		断面(cm)		重量(g)		備考
				a	b	c	d	e	f	処理前	処理後	
1	0915	A	完形	3.0	2.80	1.65	1.45	0.80	0.65	21.45	21.10	

No	遺物No	形態	残存状態	外径(cm)		内径(cm)		断面(cm)		重量(g)		備考
				a	b	c	d	e	f	処理前	処理後	
2	0916	A	完形	2.80	2.62	1.73	1.46	0.90	0.72	18.23	16.99	 <p>第166図 装身具 (金環) 模式図</p>
3	0917	B	完形	3.0	2.25	1.65	1.45	0.85	0.65	7.75	7.36	
4	0918	B	ほぼ完形	2.95	2.87	1.47	1.89	0.84	0.79	(6.05)	(5.96)	
5	0919	A	完形	1.70	1.65	1.05	1.0	0.45	0.30	2.87	2.65	
6	0920	A	完形	1.65	1.55	1.0	0.95	0.50	0.30	2.64	2.34	
7	1328	A	完形	1.90	1.82	1.05	0.95	0.70	0.40	8.08	8.04	
8	1329	A	完形	2.0	1.85	1.12	0.95	0.70	0.40	8.16	8.13	
9	1330	A	完形	2.70	2.12	1.55	1.30	0.95	0.51	20.86	20.44	
10	1331	A	完形	2.70	2.50	1.40	1.25	0.90	0.65	21.34	20.89	
11	1332	A	完形	2.95	2.80	1.60	1.50	0.80	0.65	19.37	18.75	
12	1333	A	完形	2.90	2.65	1.62	1.60	0.80	0.62	20.99	20.73	
13	1405	A	完形	2.05	1.85	1.17	1.05	0.73	0.47	9.25	9.18	
14	1406	A	完形	1.98	1.83	1.18	1.07	0.80	0.42	9.77	9.71	
15	1407	A	完形	1.98	1.90	1.05	1.08	0.68	0.48	8.98	8.95	
16	1408	A	完形	2.32	2.02	1.32	1.18	0.80	0.47	12.23	11.88	
17	1409	A	完形	3.03	2.78	1.65	1.40	0.85	0.75	24.09	23.95	
18	1561	A	完形	0.82	1.70	1.18	0.95	0.72	0.38	7.23	6.98	
19	1562	A	完形	1.87	1.68	1.15	1.02	0.72	0.35	6.34	6.08	
20	1563	A	完形	3.13	2.78	1.68	1.36	0.71	0.69	23.50	22.70	
21	1564	A	完形	3.07	2.85	1.67	1.55	0.78	0.69	24.74	24.38	
22	1565	A	完形	2.91	2.60	1.65	1.41	0.72	0.67	19.07	18.66	
23	1566	A	完形	3.13	2.76	1.78	1.50	0.70	0.70	16.80	15.50	
24	1567	A	完形	3.10	2.80	1.75	1.42	0.65	0.68	23.66	23.06	
25	1568	A	完形	3.03	2.77	1.63	1.42	0.71	0.70	23.22	21.96	
26	15569	B	破損	(2.98)	(2.90)	(1.57)	(1.55)	0.70	0.91	(4.12)	(4.06)	
27	2511	A	完形	3.04	2.62	1.87	1.43	0.87	0.54	23.11	22.64	
28	2808	A	完形	1.80	1.70	1.10	1.10	0.52	0.30	4.72	4.55	
29	2809	A	ほぼ完形	1.68	(1.70)	1.10	(1.18)	0.52	0.32	(2.61)	(2.48)	
30	2810	A	完形	2.68	2.50	1.48	1.30	0.85	0.64	19.14	19.14	
31	2811	A	完形	2.83	2.50	1.78	1.47	0.80	0.55	19.94	19.61	
32	3039	B	完形	1.72	1.60	1.08	0.97	0.60	0.33	5.53	5.51	

No	遺物No	形態	残存状態	外 径 (cm)		内 径 (cm)		断 面 (cm)		重 量 (g)		備 考
				a	b	c	d	e	f	処理前	処理後	
33	3040	A	完形	1.70	1.60	1.0	1.12	0.60	0.33	4.56	4.53	
34	3041	A	完形	1.84	1.64	1.16	0.95	0.65	0.39	5.63	5.50	
35	3042	A	完形	1.86	1.70	1.08	1.02	0.68	0.41	6.67	6.43	
36	3043	A	完形	1.96	1.81	1.18	1.06	0.58	0.42	5.84	5.74	
37	3044	A	完形	1.90	1.76	1.14	1.10	0.60	0.37	6.21	5.96	
38	3045	A	完形	2.60	2.25	1.50	1.20	0.75	0.50	12.03	11.76	
39	3046	A	完形	2.27	2.30	1.51	1.25	0.70	0.55	11.52	11.34	
40	3047	A	完形	2.33	2.12	1.37	1.26	0.60	0.50	9.41	9.02	
41	3048	A	完形	2.33	2.15	1.40	1.23	0.60	0.50	9.90	9.71	
42	3049	A	完形	2.76	2.46	1.55	1.38	0.81	0.68	19.26	19.01	
43	3050	A	完形	2.70	2.43	1.56	1.29	0.72	0.61	17.59	17.09	
44	3051	A	完形	2.65	2.55	1.45	1.40	0.80	0.59	18.45	17.92	
45	3052	A	完形	2.60	2.42	1.45	1.35	0.85	0.60	17.96	17.66	
46	3053	A	完形	2.80	2.52	1.54	1.44	0.84	0.62	21.68	20.91	
47	3054	A	完形	2.93	2.66	1.58	1.44	0.69	0.67	18.91	18.61	
48	3055	A	完形	2.73	2.57	1.50	1.48	0.84	0.61	20.91	20.64	
49	3056	A	完形	2.91	2.62	1.58	1.46	0.71	0.64	17.34	16.84	
50	3057	A	完形	3.40	3.07	1.74	1.58	0.90	0.87	34.40	33.81	
51	3058	A	完形	3.28	3.01	1.71	1.60	0.88	0.80	33.15	32.39	
52	3753	A	完形	1.90	1.80	0.95	0.95	0.60	0.45	6.60	6.60	
53	3754	A	完形	1.75	1.65	1.0	0.95	0.60	0.45	4.42	4.41	
54	4929	A	完形	2.30	2.0	1.46	1.10	0.83	0.51	11.0	10.53	
55	4930	A	完形	2.10	1.90	1.15	1.0	0.80	0.40	10.20	9.93	
56	4931	A	完形	1.95	2.10	1.10	1.10	0.75	0.50	9.90	9.73	
57	5902	A	完形	0.20	1.85	1.05	0.88	0.65	0.50	2.96	2.94	
58	6007	A	完形	3.32	3.0	1.60	1.55	0.90	0.80	29.21	28.82	
59	6008	A	完形	3.24	3.0	1.75	1.55	0.85	0.85	25.56	25.46	
60	6009	A	完形	3.40	3.0	1.80	1.46	0.85	0.80	29.89	29.82	
61	6010	A	完形	2.0	1.80	1.10	1.0	0.70	0.45	7.11	7.09	
62	6301	A	完形	3.18	2.90	1.60	1.40	0.90	0.80	25.37	25.29	
63	6302	A	完形	3.20	2.80	1.56	1.40	0.85	0.80	25.27	25.19	



第167図 玉類形態別模式図

玉類

名称	No	遺物No	残存状態	材質	計測値(cm)							重量(g)	色調
					a ₁	a ₂	b ₁	b ₂	c	d ₁	d ₂		
小玉	1	0901	完形	ガラス	0.35	0.33	0.50	0.50	0.60	0.20	0.20	0.18	青
〃	2	0902	完形	ガラス	0.45	0.40	0.40	0.35	0.65	0.15	0.12	0.28	青
〃	3	0903	完形	ガラス	0.55	0.50	0.40	0.42	0.65	0.15	0.18	0.38	青
〃	4	0904	完形	ガラス	0.55	0.45	0.52	0.58	0.78	0.18	0.15	0.47	青
〃	5	0905	完形	ガラス	0.62	0.58	0.55	0.52	0.85	0.18	0.15	0.63	青
〃	6	0906	完形	ガラス	0.60	0.50	0.60	0.50	0.90	0.30	0.23	0.60	黒
〃	7	0907	破損	ガラス	(0.66)	0.70	(0.75)	0.70	0.95	0.18	0.19	(0.47)	青
〃	8	0908	完形	ガラス	0.70	0.68	0.65	0.60	0.91	0.17	0.18	0.65	灰黄褐(銀化)
〃	9	0909	完形	ガラス	0.78	0.70	0.50	0.55	1.0	0.2	0.2	0.99	紺
〃	10	0910	完形	ガラス	0.85	0.80	0.45	0.40	1.0	0.2	0.2	1.30	紺
〃	11	0911	完形	ガラス	0.75	0.65	0.60	0.60	0.98	0.22	0.20	0.92	褐灰(銀化)
〃	12	1301	完形	ガラス	0.36	0.36	0.40	0.45	0.59	0.20	0.19	0.16	青
〃	13	1302	完形	ガラス	0.55	0.48	0.65	0.60	0.80	0.15	0.09	0.53	青
〃	14	1303	破損	ガラス	0.77	0.73	0.85	0.90	1.09	0.42	0.32	(1.66)	緑
〃	15	1304	完形	ガラス	0.80	0.73	0.75	0.75	1.08	0.32	0.21	2.26	緑
〃	16	1305	ほぼ完形	ガラス	0.68	0.67	0.48	(0.50)	0.84	0.17	0.19	(0.52)	赤灰(銀化)
〃	17	1306	ほぼ完形	ガラス	0.80	0.78	0.75	0.80	1.08	0.27	0.40	2.27	緑
〃	18	1519	完形	ガラス	0.54	0.50	0.43	0.40	0.60	0.16	0.17	0.32	紺

名 称	No.	遺物No.	残存状態	材 質	計 測 値 (cm)						重 量 (g)	色 調	
					a ₁	a ₂	b ₁	b ₂	c	d ₁			d ₂
小 玉	19	1520	完 形	ガ ラ ス	0.69	0.59	0.35	0.50	0.58	0.10	0.12	0.36	紺
〃	20	1521	ほぼ完形	ガ ラ ス	0.43	0.40	0.70	0.80	0.83	0.28	0.29	0.37	青
〃	21	1522	完 形	ガ ラ ス	0.60	0.60	0.40	0.50	0.78	0.19	0.13	0.38	褐灰 (銀化)
〃	22	1523	完 形	ガ ラ ス	0.46	0.39	0.62	0.65	0.92	0.20	0.22	0.39	紺
〃	23	1524	完 形	ガ ラ ス	0.40	0.36	0.58	0.58	0.72	0.20	0.21	0.31	青
〃	24	1525	完 形	ガ ラ ス	0.62	0.61	0.45	0.55	0.70	0.16	0.17	0.48	紺
〃	25	1526	完 形	ガ ラ ス	0.50	0.47	0.55	0.55	0.66	0.16	0.15	0.42	紺
〃	26	1527	完 形	ガ ラ ス	0.53	0.49	0.50	0.58	0.77	0.18	0.18	0.47	青
〃	27	1528	完 形	ガ ラ ス	0.76	0.62	0.55	0.55	0.83	0.28	0.24	0.68	青
〃	28	1529	完 形	ガ ラ ス	0.71	0.63	0.73	0.72	1.0	0.20	0.20	1.10	青
〃	29	1530	完 形	ガ ラ ス	0.60	0.54	0.63	0.65	0.93	0.24	0.27	0.81	青
〃	30	1531	完 形	ガ ラ ス	0.75	0.71	0.63	0.65	1.0	0.20	0.22	1.05	青
〃	31	1532	完 形	ガ ラ ス	0.74	0.70	0.65	0.60	0.90	0.21	0.22	0.98	青
〃	32	1533	完 形	ガ ラ ス	0.74	0.74	0.60	0.60	0.96	0.17	0.17	1.14	青
〃	33	1534	完 形	ガ ラ ス	0.74	0.67	0.70	0.68	0.98	0.25	0.24	1.03	青
〃	34	1535	完 形	ガ ラ ス	0.74	0.72	0.60	0.65	0.92	0.20	0.25	0.98	紺
〃	35	1536	完 形	ガ ラ ス	0.60	0.58	0.40	0.55	0.80	0.20	0.28	0.81	灰白 (銀化)
〃	36	1537	完 形	ガ ラ ス	0.84	0.80	0.85	0.80	1.19	0.20	0.20	1.41	青
〃	37	1538	破 損	ガ ラ ス	(0.65)	(0.70)	(0.80)	(0.80)	(1.19)	(0.30)	(0.31)	(0.65)	灰白 (銀化)
〃	38	1539	完 形	ガ ラ ス	0.98	0.80	0.85	0.90	1.13	0.35	0.35	1.82	青
〃	39	1540	完 形	ガ ラ ス	0.59	0.55	0.80	0.80	1.12	0.30	0.25	1.09	青
〃	40	1541	完 形	ガ ラ ス	1.10	1.07	0.80	0.70	1.29	0.48	0.41	2.10	青
〃	41	2812	完 形	ガ ラ ス	0.26	0.25	0.25	0.25	0.38	0.21	0.15	0.05	青
〃	42	2813	破 損	ガ ラ ス	0.30	0.28	(0.35)	(0.40)	(0.52)	(0.25)	(0.21)	(0.07)	青
〃	43	2814	完 形	ガ ラ ス	0.35	0.35	0.60	0.60	0.70	0.21	0.22	0.31	青
〃	44	2815	完 形	ガ ラ ス	0.56	0.50	0.48	0.58	0.80	0.15	0.16	0.52	青
〃	45	2816	完 形	ガ ラ ス	0.24	0.23	0.30	0.27	0.38	0.15	0.18	0.05	青
〃	46	2817	完 形	ガ ラ ス	0.42	0.40	0.40	0.45	0.60	0.18	0.20	0.20	紺
〃	47	2818	完 形	ガ ラ ス	0.70	0.68	0.35	0.40	0.73	0.19	0.23	0.78	白 (銀化)
〃	48	2819	完 形	ガ ラ ス	0.74	0.63	0.55	0.50	0.87	0.32	0.30	0.48	褐灰 (銀化)
〃	49	2820	完 形	ガ ラ ス	0.23	0.22	0.25	0.20	0.40	0.18	0.17	0.05	青

名 称	No	遺物No	残存状態	材 質	計 測 値(cm)						重 量 (g)	色 調	
					a ₁	a ₂	b ₁	b ₂	c	d ₁			d ₂
小 玉	50	2821	完 形	ガ ラ ス	0.46	0.40	0.55	0.60	0.80	0.17	0.21	0.43	紺
〃	51	2822	完 形	ガ ラ ス	0.54	0.47	0.40	0.60	0.78	0.34	0.24	0.82	白 (銀化)
〃	52	2823	完 形	ガ ラ ス	0.50	0.46	0.42	0.60	0.82	0.35	0.42	0.67	白 (銀化)
〃	53	2824	完 形	ガ ラ ス	0.65	0.61	0.55	0.52	0.83	0.21	0.23	0.67	灰 (銀化)
〃	54	2825	完 形	ガ ラ ス	0.65	0.57	0.58	0.63	0.80	0.24	0.25	0.51	灰 (銀化)
〃	55	2826	完 形	ガ ラ ス	0.60	0.60	0.58	0.58	0.87	0.20	0.21	0.77	青
〃	56	2827	完 形	ガ ラ ス	0.77	0.74	0.50	0.42	0.78	0.13	0.12	0.69	青
〃	57	2828	完 形	ガ ラ ス	0.66	0.66	0.45	0.55	0.88	0.33	0.43	1.44	白 (銀化)
〃	58	2829	完 形	ガ ラ ス	0.65	0.58	0.45	0.58	0.82	0.12	0.12	0.72	青
〃	59	2830	完 形	ガ ラ ス	0.60	0.53	0.55	0.50	0.80	0.19	0.19	0.62	紺
〃	60	2831	破 損	ガ ラ ス	(0.55)	0.55	(0.65)	(0.50)	(0.90)	(0.42)	(0.42)	(0.37)	白 (銀化)
〃	61	2832	完 形	ガ ラ ス	0.70	0.62	0.50	0.55	1.0	0.27	0.30	0.88	青
〃	62	2833	ほぼ完形	ガ ラ ス	0.60	0.60	0.45	0.60	0.92	0.34	0.30	1.15	青
〃	63	2834	完 形	ガ ラ ス	0.87	0.86	0.45	0.50	0.92	0.28	0.27	0.66	褐灰 (銀化)
〃	64	2835	破 損	ガ ラ ス	(0.69)	0.67	(0.45)	(0.60)	(1.01)	(0.39)	(0.34)	(0.69)	緑
〃	65	2836	完 形	ガ ラ ス	0.78	0.72	0.55	0.60	0.92	0.40	0.22	2.01	白 (銀化)
〃	66	2837	完 形	ガ ラ ス	0.77	0.74	0.45	0.60	1.0	0.38	0.32	2.02	白 (銀化)
〃	67	2838	完 形	ガ ラ ス	0.89	0.62	0.70	0.55	0.93	0.30	0.28	1.29	紺
〃	68	2839	完 形	ガ ラ ス	0.82	0.80	0.50	0.50	1.0	0.27	0.21	2.52	白 (銀化)
〃	69	2840	完 形	ガ ラ ス	0.70	0.64	0.47	0.70	0.94	0.36	0.38	1.65	白 (銀化)
〃	70	2841	完 形	ガ ラ ス	0.88	0.82	0.50	0.60	1.01	0.28	0.20	2.72	白 (銀化)
〃	71	2842	完 形	ガ ラ ス	0.82	0.73	0.75	0.65	1.14	0.30	0.30	1.31	褐灰 (銀化)
〃	72	2843	完 形	ガ ラ ス	1.23	1.20	0.55	0.40	1.0	0.25	0.21	1.36	青
〃	73	2844	完 形	ガ ラ ス	0.58	0.42	0.75	0.70	0.95	0.44	0.38	1.03	白 (銀化)
〃	74	2845	完 形	ガ ラ ス	1.05	0.90	0.80	0.80	1.26	0.35	0.35	2.29	緑
〃	75	6101	完 形	翡 翠	1.15	1.35	0.80	0.90	1.45	0.30	0.30	4.20	淡緑

名 称	No	遺物No	残存状態	材 質	計 測 値(cm)						重 量 (g)	色 調
					a ₁	a ₂	b ₁	b ₂	d ₁	d ₂		
管 玉	1	0912	破 損	頁 岩	(0.92)	(0.84)	0.46	(0.56)	0.13	(0.12)	(0.39)	黒
〃	2	1310	ほぼ完形	碧 玉	2.50	2.41	0.85	0.88	0.30	0.13	3.99	深緑

名称	No	遺物No	残存状態	材質	計測値(cm)						重量(g)	色調
					a ₁	a ₂	b ₁	b ₂	d ₁	d ₂		
管玉	3	1311	完形	碧玉	2.14	2.13	0.70	0.65	0.27	0.11	2.09	深緑
〃	4	1542	完形	碧玉	1.95	2.05	0.65	0.60	0.25	0.25	1.43	深緑
〃	5	1543	完形	碧玉	2.05	2.0	0.90	0.95	0.30	0.15	3.45	深緑
〃	6	2846	完形	碧玉	1.30	1.30	0.42	0.44	0.24	0.14	0.40	深緑
〃	7	2847	完形	碧玉	2.04	2.04	0.70	0.74	0.29	0.09	1.96	深緑
〃	8	2848	ほぼ完形	碧玉	2.33	2.33	0.82	0.82	0.22	0.11	2.56	深緑

名称	No	遺物No	残存状態	材質	計測値(cm)					重量(g)	色調
					a	b	c	d ₁	d ₂		
勾玉	1	1307	完形	ガラス	1.80	1.15	0.65	0.30	0.15	1.76	緑
〃	2	1308	完形	瑪瑙	2.80	1.70	0.88	0.13	0.30	4.66	にぶい赤褐
〃	3	1309	完形	瑪瑙	3.50	1.85	0.95	0.18	0.32	8.11	にぶい赤褐
〃	4	1552	完形	蛇紋岩	1.53	0.98	0.57	0.28	0.35	1.10	暗褐
〃	5	1553	完形	瑪瑙	2.61	1.52	0.74	0.20	0.35	4.31	にぶい赤褐
〃	6	1554	完形	瑪瑙	2.74	1.70	1.0	0.17	0.30	5.54	にぶい赤褐
〃	7	1555	完形	瑪瑙	2.80	1.51	0.73	0.30	0.15	4.15	にぶい赤褐
〃	8	1556	完形	瑪瑙	2.91	1.51	0.83	0.17	0.38	4.41	にぶい赤褐
〃	9	1557	完形	瑪瑙	2.80	1.79	0.92	0.15	0.32	5.64	にぶい赤褐
〃	10	1558	完形	瑪瑙	3.06	1.80	0.92	0.34	0.22	6.87	にぶい赤褐
〃	11	1559	完形	瑪瑙	3.36	1.95	0.95	0.10	0.27	7.15	にぶい赤褐
〃	12	1560	完形	瑪瑙	3.41	2.09	1.0	0.35	0.16	8.15	にぶい赤褐
〃	13	2525	完形	瑪瑙	3.05	2.05	0.90	0.25	0.30	6.12	にぶい赤褐
〃	14	2526	完形	瑪瑙	2.80	1.45	1.10	0.25	0.15	6.12	にぶい赤褐
〃	15	2849	完形	瑪瑙	2.38	1.45	0.70	0.30	0.30	3.56	にぶい赤褐
〃	16	2850	完形	瑪瑙	3.0	1.80	1.04	0.16	0.40	6.49	にぶい赤褐
〃	17	2851	完形	瑪瑙	2.70	1.75	0.80	0.15	0.28	3.97	にぶい赤褐
〃	18	2852	完形	瑪瑙	2.65	1.45	1.0	0.15	0.32	4.51	にぶい赤褐
〃	19	2853	完形	瑪瑙	2.75	1.70	0.85	0.34	0.16	5.22	にぶい赤褐
〃	20	2854	完形	瑪瑙	2.33	1.50	0.86	0.18	0.33	3.50	にぶい赤褐
〃	21	2855	完形	瑪瑙	2.80	1.90	1.0	0.25	0.15	6.23	にぶい赤褐
〃	22	2856	完形	瑪瑙	2.51	1.70	0.87	0.30	0.19	4.76	にぶい赤褐

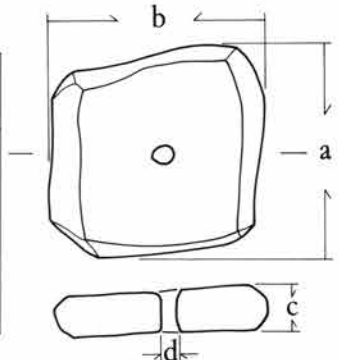
名称	No	遺物No	残存状態	材質	計測値(cm)					重量(g)	色調
					a	b	c	d ₁	d ₂		
勾玉	23	2857	完形	瑪瑙	2.25	1.65	0.90	0.14	0.27	5.44	にぶい赤褐
〃	24	2858	完形	瑪瑙	2.85	1.65	0.95	0.30	0.18	5.51	にぶい赤褐
〃	25	2859	完形	瑪瑙	3.0	1.75	0.87	0.31	0.16	5.89	にぶい赤褐
〃	26	2860	完形	瑪瑙	2.95	2.10	1.30	0.40	0.20	10.27	にぶい赤褐
〃	27	2861	完形	瑪瑙	3.30	2.0	0.95	0.30	0.15	6.96	にぶい赤褐
〃	28	2862	完形	碧玉	3.60	2.0	1.08	0.30	0.15	10.24	深緑

名称	No	遺物No	残存状態	材質	計測値(cm)						重量(g)	色調	
					a ₁	a ₂	b ₁	b ₂	c	d ₁			d ₂
切子玉	1	0913	完形	水晶	2.35	2.25	0.95	0.90	1.50	0.35	0.15	7.06	透明
〃	2	0914	完形	水晶	2.15	2.15	0.85	0.70	1.25	0.40	0.10	5.77	透明
〃	3	1312	完形	水晶	2.10	2.20	0.90	0.85	1.50	0.40	0.20	5.53	透明
〃	4	1313	完形	水晶	2.60	2.58	1.0	0.95	1.65	0.40	0.15	8.74	透明
〃	5	1544	完形	水晶	1.25	1.07	0.80	0.65	1.30	0.25	0.15	2.31	透明
〃	6	1545	完形	水晶	1.85	1.90	0.95	1.0	1.30	0.35	0.20	4.43	透明
〃	7	1546	完形	水晶	2.10	2.10	0.80	0.15	1.55	0.45	0.15	6.17	透明
〃	8	1547	完形	水晶	2.10	1.92	0.80	0.75	1.52	0.40	0.20	4.71	透明
〃	9	1548	完形	水晶	1.90	1.85	0.80	0.85	1.60	0.40	0.20	5.21	透明

名称	No	遺物No	残存状態	材質	計測値(cm)						重量(g)	色調	
					a ₁	a ₂	b ₁	b ₂	c	d ₁			d ₂
棗玉	1	1314	破損	琥珀	—	(1.30)	0.65	—	(1.30)	0.20	—	1.47	にぶい赤茶
〃	2	1315	破損	琥珀	(0.80)	(1.35)	0.70	—	1.0	0.20	—	(0.65)	にぶい赤茶
〃	3	1316	破損	琥珀	(0.83)	(0.40)	(0.65)	(0.68)	—	(0.18)	(0.19)	(0.25)	にぶい赤茶
〃	4	1317	破損	琥珀	(0.60)	(1.60)	(1.20)	—	(1.70)	(0.30)	—	(3.31)	にぶい赤茶
〃	5	1318	ほぼ完形	琥珀	(2.05)	2.0	0.98	—	1.38	0.30	0.30	(1.87)	にぶい赤茶
〃	6	1319	ほぼ完形	琥珀	2.0	1.75	0.90	0.85	1.30	0.35	0.20	1.63	にぶい赤茶
〃	7	1320	ほぼ完形	琥珀	1.85	1.85	0.75	0.85	1.40	0.25	0.25	1.53	にぶい赤茶
〃	8	1549	ほぼ完形	琥珀	3.20	3.15	1.40	0.90	1.75	0.30	0.30	4.84	にぶい赤茶
〃	9	1550	ほぼ完形	琥珀	2.80	2.90	1.20	1.30	1.90	0.30	0.30	4.95	にぶい赤茶
〃	10	1551	破損	琥珀	(2.10)	(2.60)	1.20	—	2.0	0.30	—	(5.41)	にぶい赤茶

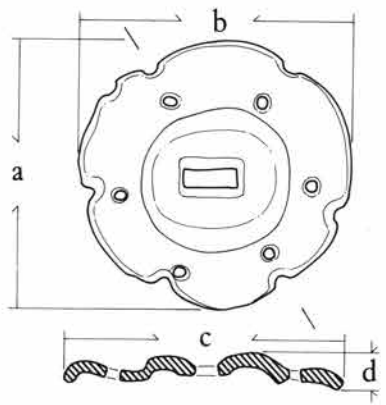
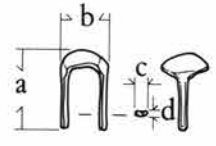
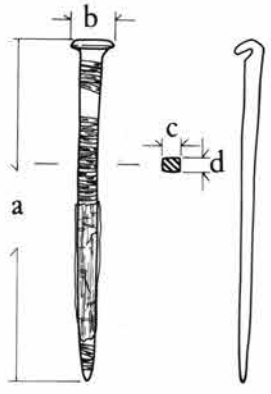
石製模造品

No.	遺物No.	残存状態	材質	計測値(cm)				重量(g)	備考
				a	b	c	d		
1	2522	ほぼ完形	滑石	(3.70)	(3.20)	0.80	0.30	(15.98)	
2	2523	〃	〃	(3.70)	3.25	0.85	0.40	(19.79)	
3	2524	〃	〃	3.80	3.85	0.80	0.40	22.46	



第168図 石製模造品模式図

第9表 金具



第169図 金具(釘・釘かくし・座金具)模式図

釘・釘かくし・座金具

単位 (cm)

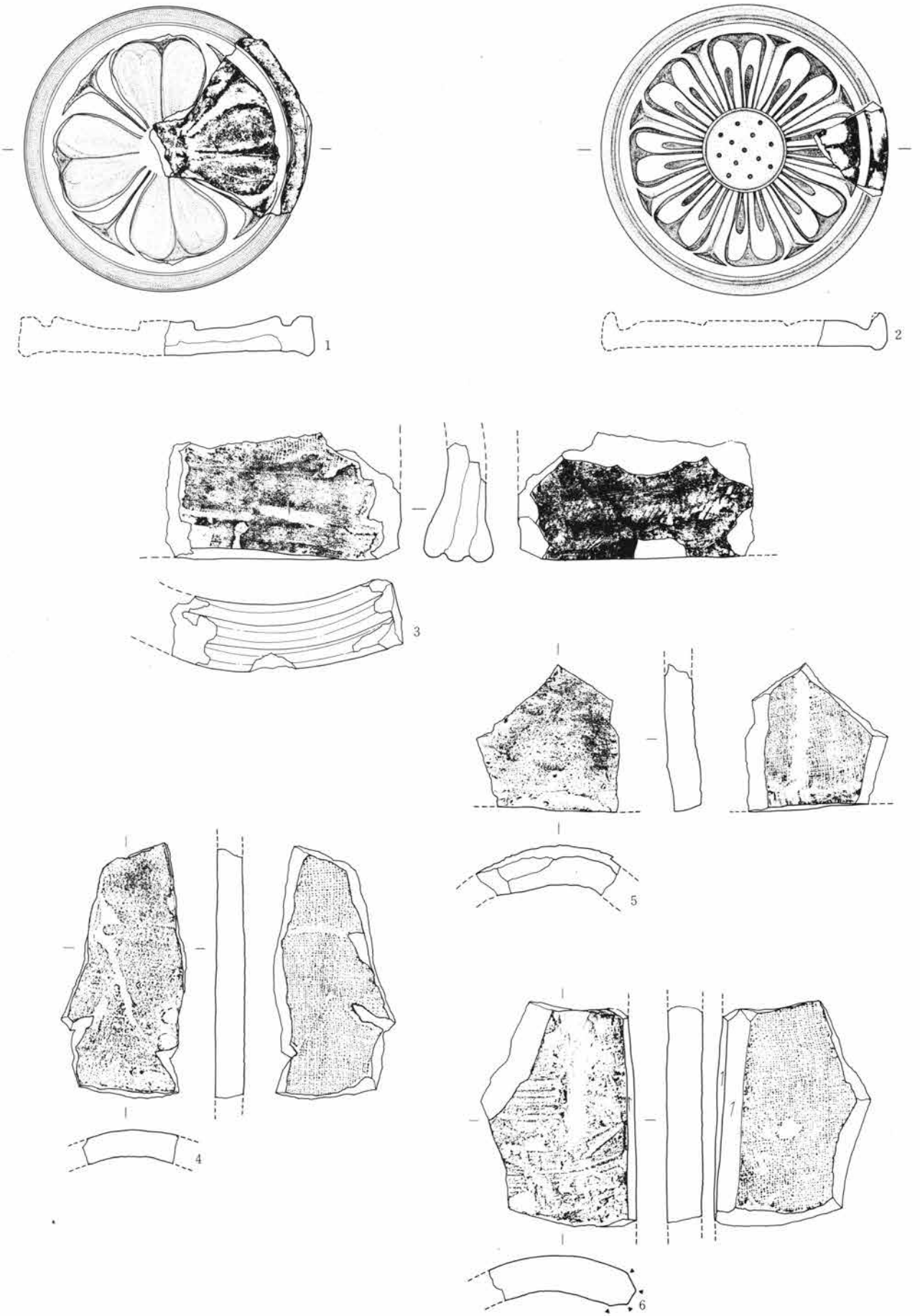
No.	版組No.	残存状態	a	b	c	d	備考
1	0605	ほぼ完形	5.20	1.0	0.40	0.35	釘 鉄 木質付着
2	0707	⅔	(3.85)	0.87	0.43	0.35	〃 〃 〃
3	0708	⅔	(3.90)	6.50	0.45	0.45	〃 〃 〃
4	0709	完形	3.95	6.0	0.22	0.22	〃 〃 〃
5	0710	ほぼ完形	(5.35)	6.50	0.35	0.35	〃 〃
6	0711	⅔	(4.50)	0.70	0.40	0.30	〃 〃
7	4925	⅔	(5.40)	(0.65)	0.32	0.27	〃 〃 木質付着
8	4926	⅓	(3.50)	0.80	0.35	0.30	〃 〃 〃
9	4927	⅓	(2.0)	0.80	0.30	0.25	〃 〃
10	4928	完形	1.45	0.90	0.15	0.20	釘かくし 青銅 半円球の座に両脚がつく
11	5320	ほぼ完形	3.50	3.52	3.50	0.50	座金具 〃 中央に方形の座 周縁は5つの花卉 割釘が入ると考えられる
12	5321	完形	4.80	4.80	4.25	0.60	〃 〃 中央に楕円形の座 周縁は6つの花卉 止め釘穴6ヶ所
13	6102	⅔	(6.20)	1.70	0.60	0.80	釘 鉄

Ⅳ 奥原遺跡

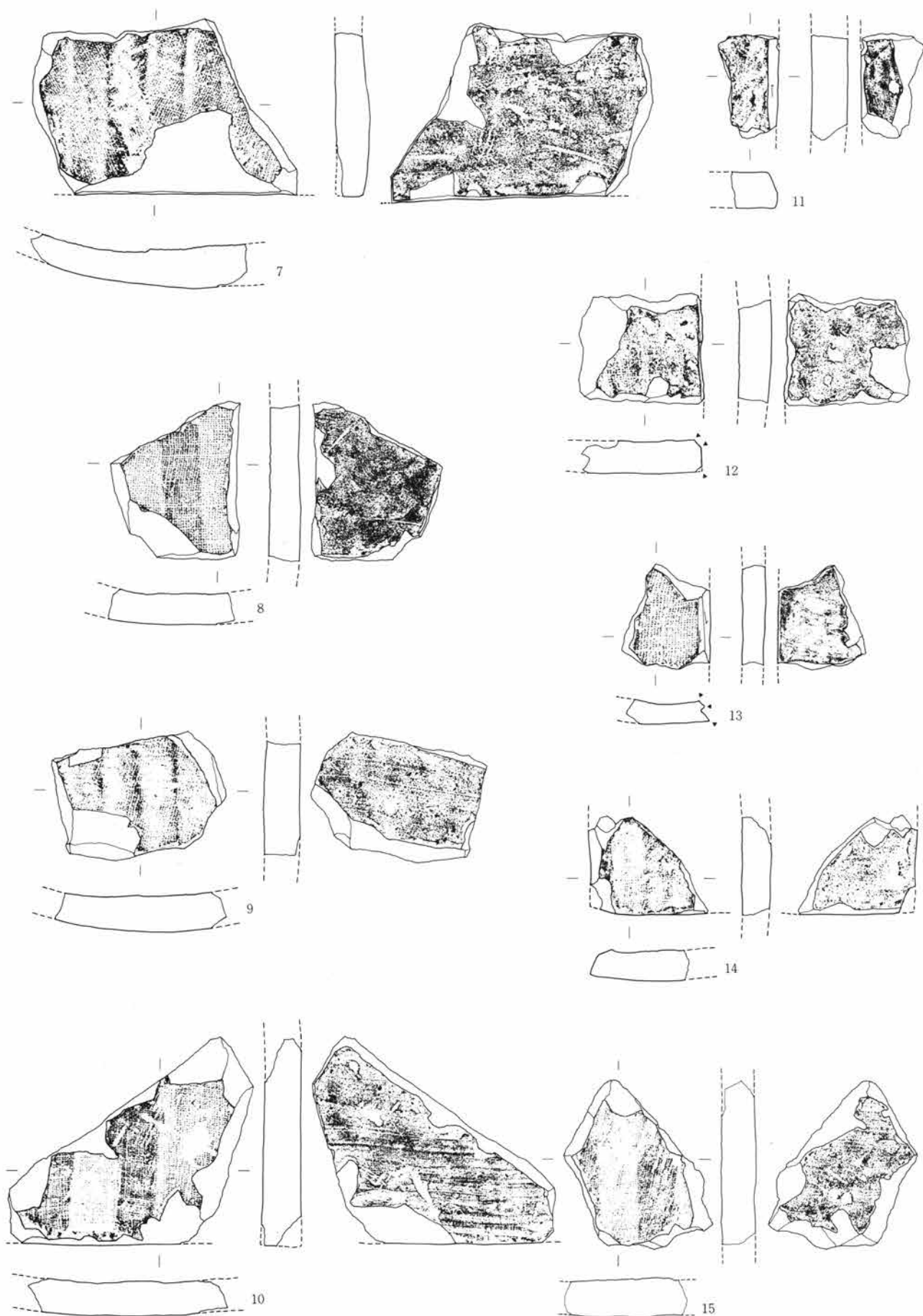
本郷奥原古墳群の占地する台地の最高地点、すなわち古墳群に北接して古瓦の集中的に散布する地域がある。調査中にも若干の資料が出土したので既出のものを合わせて紹介する。分布範囲は『上野国神明帳』に収録されている群馬郡西郡従四位上椋名木戸神社の鎮座する周辺である。紹介する瓦は総数26点の小破片ばかりである。軒丸瓦は2点2種類である。1つは素弁蓮花文(1)である。素文の周縁をめぐらせ、花卉は相互に接することなく弁間に楔形の間弁が覗く。花卉中央には稜線を隆起させて通す。弁端はやや尖る。小破片のため図上復元で花卉を四葉としたが、類例を探すと滋賀・南滋賀廃寺に求められようか。もう一つは複弁蓮花文(2)である。内区は細身の花卉に小さな中房が座る。弁中央に稜を立て子葉を入れる。弁端は丸く楔形の間弁が覗く。周縁は素文で幅は狭いが高く先端は丸い。類例としては七葉の山王廃寺や寺井廃寺に類例が求められよう。(破片のため復元を八葉とした)軒平瓦(3)は1点のみである。三重弧文で曲線類。瓦当の厚さは3.8cmで弧線断面はゆるやかな楕円を描き溝も浅くゆるい曲線が刻まれる。これらの軒瓦はいづれも色調は断面は赤褐色で表面は燻しにより黒灰色を呈する。焼成は良好で部分的に自然釉がかかる。丸瓦(4~6)は1例のみ模骨痕跡が認められる。胎土は白色と赤褐色の縞状の断面を呈している。側面は三面にヘラ削りを施す調整も観察される。平瓦の表面は全てに布目痕が残る。裏面は端面に平行のナデが残るものと、深い圧痕の縄目を残すものの2種類に分類できる。縄目痕を残すものには表面には模骨痕跡が認められず、平行ナデのものに模骨痕跡が認められるものが多い。断片的ではあるが出土瓦の編年的位置づけと本郷奥原遺跡の性格を考えてみたい。素弁蓮花文(1)は飛鳥寺の系譜の瓦に位置づけられる。更に複弁蓮花文は軒平瓦の三重弧文と組み山王廃寺の第二段階の組み合わせと考えるとよいものであろう。また、山王廃寺では奈良巨勢寺の系譜に連なる素弁蓮花文で素文縁の花卉の幾何学文様の瓦も出土しており飛鳥時代に連なるものもある。これらのことを合わせて考えると出土瓦は古式のを7世紀の第3四半紀、新しい組み合わせのものを7世紀の第4四半紀と考えると大過なからう。ここが秋間瓦窯と山王廃寺をつなぐ運搬ルートにあたるとすれば7世紀前半に急激に台頭してくる在地豪族の建築遺構としての性格づけを考えてもよいのではないだろうか。

第10表 奥原遺跡関連の瓦

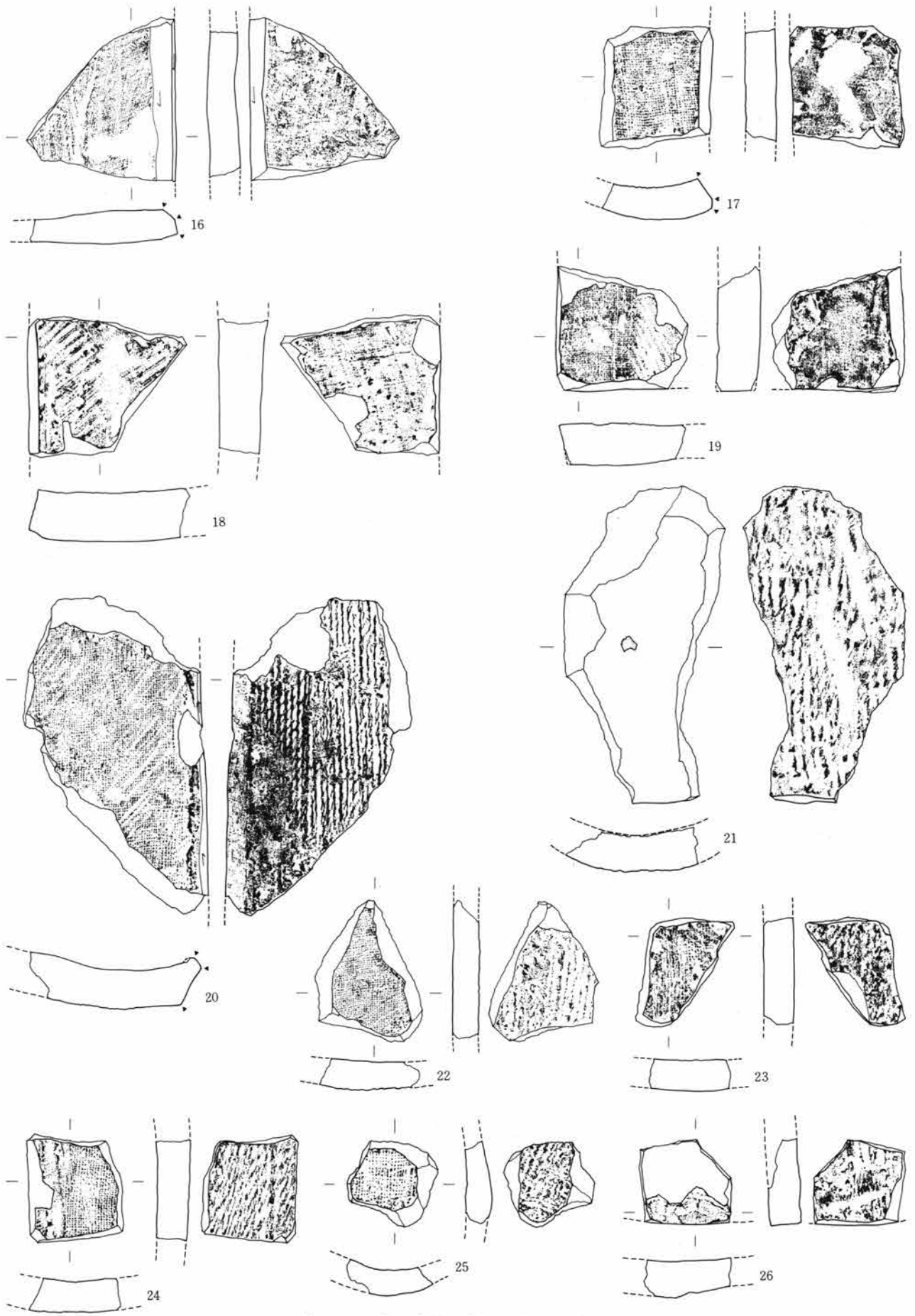
版組No	種類	出土地	表面・裏面	備考	版組No	種類	出土地	表面・裏面	備考
1	鏡瓦	正満コレクション	— —		14	平瓦	木戸神社表採	細布 ナデ	2.0cm巾模骨痕
2	〃	奥原9号墳表採	— —		15	〃	奥原3号墳表採	細布 ナデ	〃
3	字瓦	正満コレクション	細布 不明		16	〃	木戸神社表採	細布 ナデ	
4	丸瓦	木戸神社表採	ナデ 細布		17	〃	〃	細布 ナデ	
5	〃	奥原28号墳表採	ナデ 細布	(3.5)cm巾模骨痕	18	〃	〃	細布 ナデ	4.0cm巾に斜削状模骨痕
6	〃	奥原53号墳表採	ケズリ 細布		19	〃	奥原2号墳表採	細布 ナデ	〃
7	平瓦	奥原18号墳表採	細布 ナデ	2.0cm巾の模骨痕	20	〃	正満コレクション	細布 縄目	〃
8	〃	奥原49号墳表採	細布 ナデ	〃	21	〃	奥原9号墳表採	細布 縄目	
9	〃	木戸神社表採	細布 ナデ	〃	22	〃	木戸神社表採	細布 縄目	
10	〃	奥原49号墳表採	細布 ケズリ	3.0cm巾の模骨痕	23	〃	〃	細布 縄目	
11	〃	木戸神社表採	不明 ナデ		24	〃	〃	細布 縄目	
12	〃	〃	細布 ナデ	2.0cm巾の模骨痕	25	〃	奥原10号墳表採	細布 縄目	
13	〃	〃	細布 ナデ		26	〃	木戸神社表採	細布 縄目	



第170図 奥原古墳群関連瓦実測図(1)



第171図 奥原古墳群関連瓦実測図(2)



第172図 奥原古墳群関連瓦実測図(3)

V 奥原古墳群出土須恵器の胎土分析

群馬県工業試験場 花岡 紘一
群馬県埋蔵文化財調査事業団 石塚 久則

はじめに

1979年にはじめての胎土分析の試料数は約180点を数え、過去^{(1)~(7)}7回にわたる報告がある。その結果、県内10個所に存在する窯跡群のうち秋間・金山・中之条・月夜野・吉井・乗付について一傾向を知るとともに、製作地の同定も可能となってきた。

今回の分析は奥原古墳群出土の須恵器を扱い、製作地の同定を目的とする。

なお、本稿の化学的な記述を花岡が、考古学的な記述を石塚が分担した。

1. 試料の選択

今回の分析試料は、すべて奥原古墳群から出土した須恵器である。試料の選択については、須恵器自体から年代観の得られることを第一義と考え、さらに同一器種ないしは類似器種を選定し、比較上、差が生じないことを留意した。それは製作地が同定された場合、年代という基軸をもとにして須恵器流通の一端を知ることができるからである。

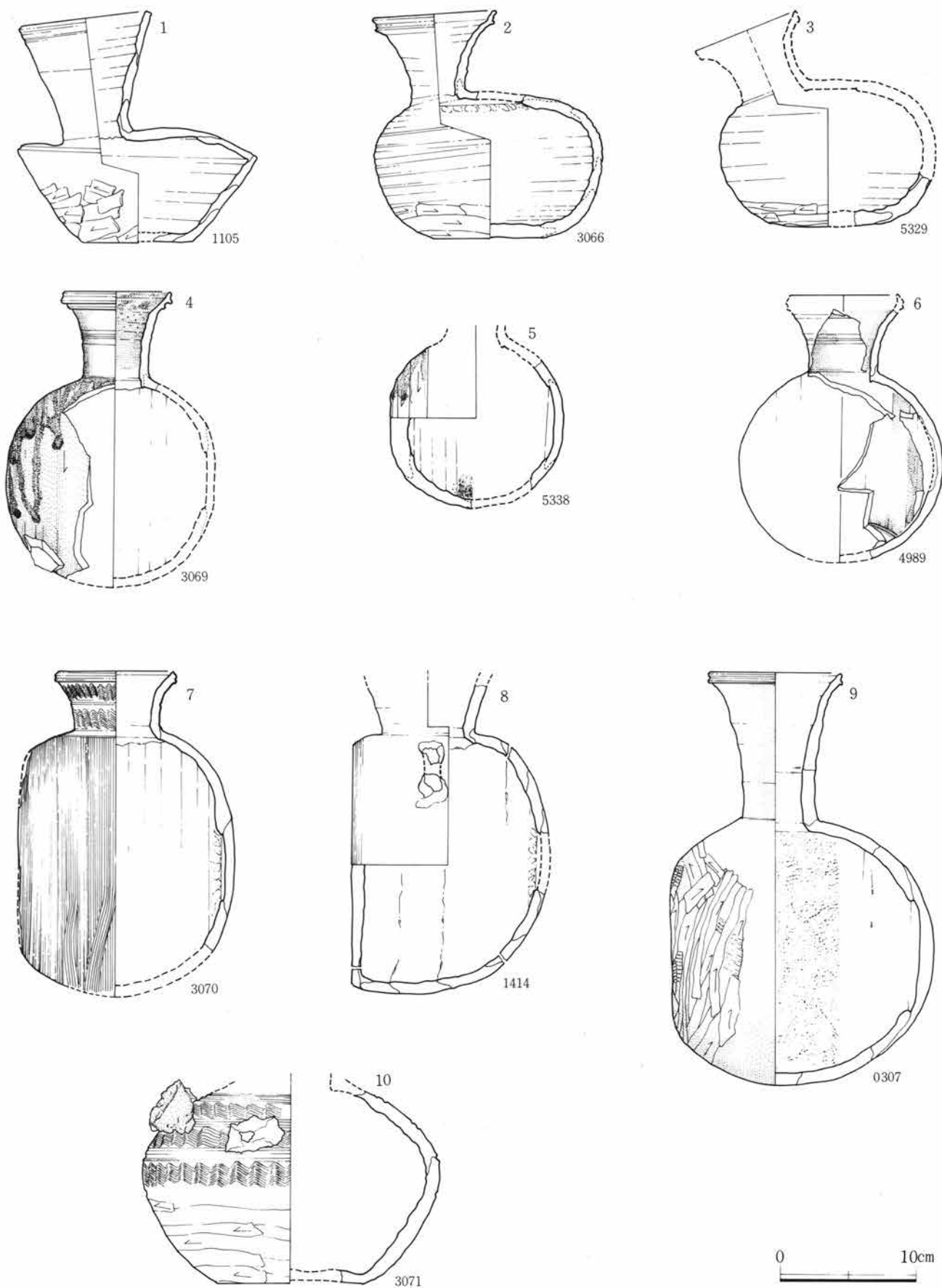
各古墳出土の須恵器は量、器種ともに豊富であった。その中で杯類の一群は、本遺跡が集落址と複合したり、古墳築造後の維持、管理が長期にわたるなど古墳との共存関係において不確定な要素を多分に伴っているため、試料選択から除外した。続いて多いのは甕類である。甕類の場合は古墳時代地方窯において焼成された甕類の時的な特徴が各窯跡群の単位でまちまちなため、これも除外した。次に多い器種は平瓶、球形瓶、提瓶、直口壺の順で、いわゆる袋物の類である。袋物類は製作時期、および盛期がある程度、短期であることから製作年代を想定できるので、この一群を今回の分析素材とした。

2. 分析の目的と意図

胎土分析の有効性は製作地の同定にあるため、今回の分析目的を製作地同定とした。

奥原古墳群出土の須恵器は製作地である窯跡から見れば供給先で、広義の消費地である。製作地の同定がなされることは、供給元の窯跡群、供給先の古墳間における流通の一端を明らかにしうるので、そのことを分析の意図とした。以下、具体的な内容に関しては下記のとおりである。

- (1) 胎土分析は過去^{(1)~(7)}7回にわたり分析結果が報告されており、その結果、県内10個所に存在する窯跡群のうち、6窯跡群の胎土傾向と奥原古墳群試料10点を比較したい。
- (2) 試料1・2・7・9・10は安中市秋間古窯跡群製品の特徴とされる Fe_3O_4 と SiO_2 の混合物の黒色鉱物粒⁽⁴⁾を多く含んでおり、秋間窯跡群製と見られるものである。これらの5試料が秋間窯跡群領域に入るかを知りたい。
- (3) 試料8は、胎土中に石英、長石などの白色鉱物粒を夾雑し、太田市金山窯跡群製と見られるものである。しかも、提瓶の体部天井の粘土板接合部分に金山窯跡群製の提瓶の特色でもある、粘土のしぼりによるちぢれが生じ



第173图 胎土分析遺物実測図

第11表 分析試料の肉眼観察表

試料 No.	推定年代	種別	胎土の肉眼観察	備考
1	8世紀初頭	平瓶	黒色の微鈹物粒をわずかに夾雑する。素地は緻密で、色調は灰色を呈し、焼成は焼締り、自然釉がおよぶ。	秋間古窯跡群製か
2	7世紀後半	平瓶	黒色鈹物粒を多く含み、白色鈹物粒も多く含む。素地は緻密で、色調は灰色を呈し、焼成は焼締る。	//
3	7世紀	平瓶	臙脂色の微鈹物粒を多く含み、白色微鈹物粒をわずかに含む。素地は緻密で、色調は灰色を呈し、焼成は焼締る。	東海産か
4	7世紀前半	フラスコ形細頸瓶	半透明な鈹物、白色微鈹物粒を含む。素地は緻密で縞状となる。色調は灰色を呈し、焼成は焼締り、自然釉がおよぶ。	東海産か、16の胎土に似る
5	7世紀前半	フラスコ形細頸瓶	黒色鈹物粒を含む。素地は緻密で白色の薄い素地がわずかではあるが縞状を呈す。色調は灰色を呈し、焼成は焼締り、自然釉がおよび釉溜りを生ずる。	東海産か
6	7世紀前半	フラスコ形細頸瓶	半透明な鈹物、白色鈹物を含む。素地は緻密で、色調は灰色を呈し、焼成は焼締り、自然釉がおよび釉溜りを生ずる。	東海産か、14の胎土に似る
7	6世紀終末 7世紀初頭	提瓶	黒色微鈹物粒をわずかに夾雑する。素地は緻密で、色調は灰色を呈し、焼成は甘い。	秋間古窯跡群製か
8	6世紀終末 7世紀初頭	提瓶	黒色鈹物粒はほとんど含まれず、白色の微鈹物粒を多く含む。素地は緻密で、色調は灰色を呈し、焼成は硬質である。	太田金山窯跡群製か
9	7世紀後半	フラスコ形細頸瓶	黒色微鈹物粒をわずかに含み、臙脂色の微鈹物粒もわずかに入る。白色微鈹物の夾雑は少ない。素地は緻密で、色調は灰色を呈し、焼成は硬質である。	秋間古窯跡群製か
10	7世紀後半	直口壺	黒色微鈹物粒をわずかに含み、白色鈹物粒の夾雑はほとんどない。素地は緻密で、色調は灰色を呈し、焼成は焼締る。	//

ていて製作上の特徴を見せる。要するに試料8が太田金山窯跡群領域に入るか知りたい。

- (4) 試料3～6は、胎土中の夾雑物が微細粒で、県内および隣接県にもそれほどの良土はないため遠地からの搬入製品と考えられる。7世紀代の搬入須恵器の主体は東海地方にあるため、東海製品の領域にそれら4点の試料が入るか知りたい。

3. 試験方法

分析用試料は各試料を10 μ 以下に粉碎し、5～10gを径4cmの円板に成形し、蛍光X線分析試料およびX線回析試料とした。

元素分析には、蛍光X線分析装置（理学電機製 KG-4型）を使用した。管球は銀対陰極、計数法はチャート方式（4°/min）を使用した。詳細な条件は付表2に示した。なおケイ素（Si）、アルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）は定時計数法によった。

また、蛍光X線分析値は、粘土標準試料（日本標準試料委員会認定、科学技術社発売）R-601、R-602、R-603、および埴輪前試料の3点（No.A、B、C）の湿式化学分析試料を標準として求めた。

なお、この値は付表3に示した。

第13表 標準試料の分析値

成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	SrO (%)	Rb ₂ O (%)	MnO (%)	Ca/K (%)	Sr/Rb (%)
R-601	50.3	33.0	1.16	0.56	0.15	0.29	1.71				0.11	0.24
R-602	45.9	37.3	0.69	0.12	1.41	0.37	0.58				3.06	51.08
R-603	46.1	37.0	0.66	0.09	1.66	0.29	0.40				5.24	25.58
A	66.7	18.6	6.00	0.94	1.09	1.29	1.39	0.028	0.007	0.09	1.08	2.29
B	64.4	17.1	6.03	0.61	0.86	0.55	2.63	0.024	0.012	0.17	0.46	1.16
C	68.0	17.6	1.65	0.49	0.94	0.58	2.77	0.034	0.016	0.10	0.48	1.21

4. 試験結果および考察

過去7回の報告によれば胎土中のCa/KとSr/Rbの間に地域特性があり、産地別の分類ができるのでCa/K、Sr/Rbの関係を付図2～6に示した。

- 過去に設定した各窯跡群領域は付図5に示したとおりであるが、(2)以下を検討するについての基本図とする。
- 試料1・2・7・9・10について秋間窯跡群との比較は付図3に示した。試料1・2・10はその領域内に入るが試料9は、Ca/K、Sr/Rbとの値が秋間窯跡群領域より低い値となった。また試料7については秋間窯跡群領域から大きくはずれ、別窯跡群からの供給を考える必要がある。

第12表 分析条件

分析元素	管電圧 電流	分光結晶	検出器	波高分析	時定数
Fe Sr Rb Mn Zr Zn Cu Ni Cr Ba	50KV } 20mA	LiF	S・C	積分方式	1
Ca K Ti Si Al	50KV } 20mA	EDDT	P・C	積分方式	1
Mg	50KV } 20mA	ADP	P・C	積分方式	1

第14表 分析値一覧表

試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/K	Sr/Rb
1	68.1	18.1	3.20	0.61	0.34	0.49	1.76	0.26	0.53
2	68.0	16.6	3.88	0.60	0.32	0.47	1.85	0.23	0.53
3	67.9	16.6	3.32	0.71	0.20	0.53	2.59	0.11	0.38
4	69.3	16.6	2.55	0.69	0.84	0.42	1.65	0.70	0.76
5	68.7	16.5	2.77	0.62	0.65	0.44	2.14	0.41	0.73
6	68.0	16.7	3.65	0.67	0.84	0.40	1.72	0.66	1.00
7	66.5	18.5	3.88	0.55	0.71	0.53	1.53	0.63	2.72
8	64.6	17.2	9.95	0.98	0.55	0.47	1.05	0.71	1.62
9	67.7	17.8	3.74	0.67	0.25	0.45	1.25	0.27	0.28
10	68.7	15.0	2.15	0.61	0.30	0.52	2.14	0.19	0.50

奥原古墳群試料

試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/K	Sr/Rb
11	66.9	23.0	4.48	1.09	0.46	1.69	1.19	0.53	0.78
12								0.55	0.77
13								0.35	0.40
14	68.9	13.9	5.24	1.00	0.35	1.20	1.57	0.31	0.56
15								0.79	0.71
16	68.9	20.0	0.76	0.89	0.30	1.14	1.75	0.24	0.46

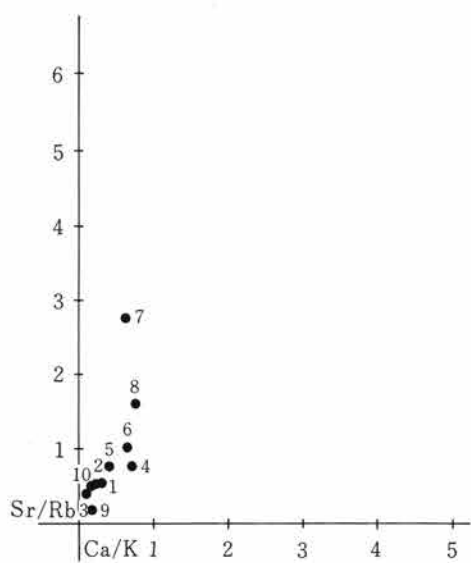
秋間窯址群試料 (註1による既値)

試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/K	Sr/Rb
17	69.7	18.4	3.93	0.70	0.26	1.00	2.61	0.14	1.30
18	66.5	21.0	5.05	0.89	0.84	0.77	1.36	0.85	1.77
19	67.1	20.1	5.66	1.09	0.90	2.23	1.94	0.65	1.59
20	69.3	19.2	3.58	0.70	0.40	0.91	2.34	0.24	1.41
21	64.3	21.7	7.64	1.09	0.74	2.75	1.91	0.54	1.51
22	67.0	18.5	6.91	0.96	0.85	2.03	2.19	0.54	1.10
23	68.0	18.9	6.51	0.87	0.53	0.94	1.42	0.51	1.69

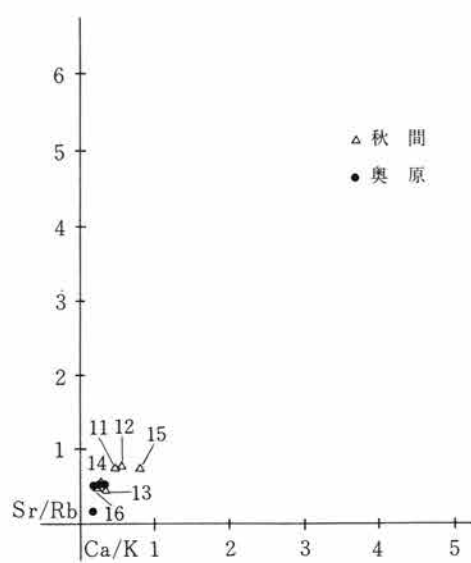
金山窯跡群試料 (註1による既値)

試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/K	Sr/Rb
24	70.5	17.9	3.11	0.75	0.14	0.57	1.68	0.11	0.73
25	70.8	17.3	3.14	0.74	0.17	0.64	1.64	0.14	0.65
26	73.2	15.7	2.43	0.65	0.19	0.32	1.75	0.14	0.59
27	70.2	19.5	2.85	0.63	0.29	0.71	1.76	0.22	0.90
28	72.8	19.3	2.19	0.70	0.16	0.47	2.16	0.14	0.62

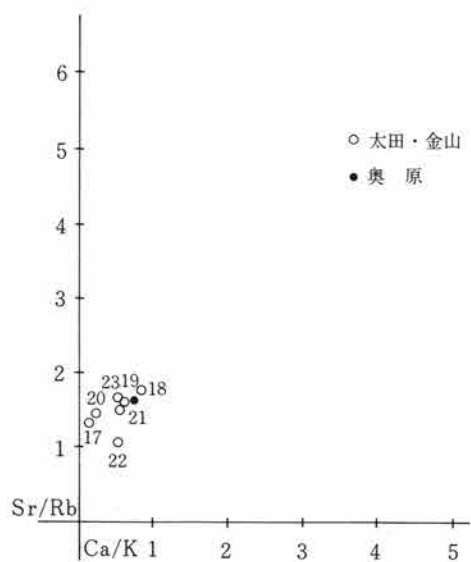
渥美・常滑焼試料 (註3・4による既値)



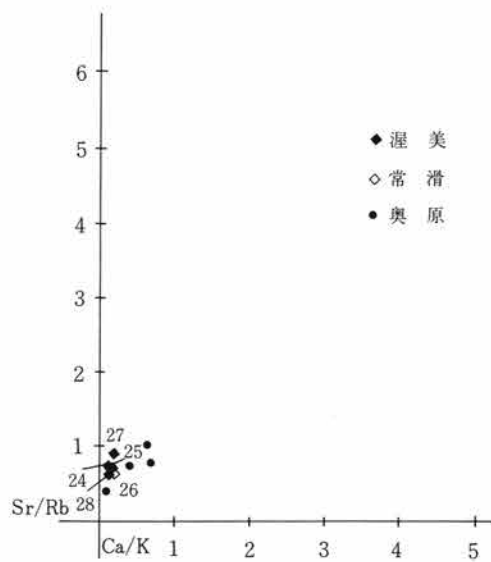
第174図 奥原古墳群試料



第175図 秋間窯跡群試料



第176図 太田・金山窯跡群試料

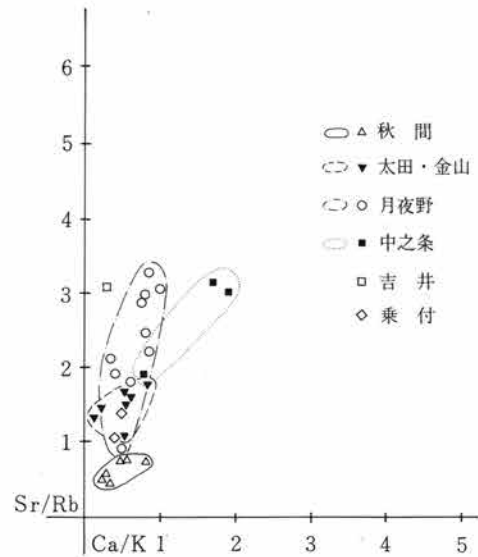


第177図 渥美・常滑焼試料

(3) 試料8について金山窯跡群との比較は付図4に示したとおり、金山窯跡群領域に入る。

(4) 試料3～6が東海地方から搬入されたものか否かであるが、過去に東海地方で製作された須恵器の分析蓄積がないので、ここでは付図5に示したとおり常滑、渥美焼と比較すると、いずれも近似の値が得られた。

さらに県内出土須恵器のCa/K、Sr/Rbとの関係では秋間窯跡群が最も低い値であり、試料3～6は、いずれも、秋間窯跡群に近接するか、それ以下の値となっているため、搬入製品の可能性が生じる。



第178図 県内窯跡群の領域

まとめ

今回の分析試料は、主として製作地の同定であったが、付図5のとおり県内窯跡群の各領域には重複部分が多く存在し、その領域内におさまるか否かでの同定は困難となってきたものの、過去における胎土分析結果をふまえたうえでの肉眼観察から、どの窯跡群で製作されたかある程度予測されるようになった。今回も肉眼観察から得た所見と胎土分析結果から齟齬をきたしたのは試料8の1点のみであった。このため、胎土分析の方向性としては、肉眼観察の所見と合せて別の分析方法と取り組む必要性を確認した。

註

- (1) 花岡紘一「土器の胎土分析」『塚廻り古墳群』(群馬県教育委員会) 1980
- (2) 花岡紘一・大江正行「瓦の胎土分析」『天代瓦窯遺跡』(中之条町教育委員会) 1982
- (3) 花岡紘一・真下高幸「温井遺跡出土須恵器の胎土分析」『温井遺跡』(群馬県教育委員会) 1981
- (4) 花岡紘一「瓦の胎土分析について」『山王廃寺跡第7次発掘調査報告書』(前橋市教育委員会) 1982
- (5) 花岡紘一・中沢 悟「土器の胎土分析について」『清里・陣場遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1982
- (6) 同上 「藪田東遺跡出土土器の胎土分析」『藪田東遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1983
- (7) 花岡紘一・大西雅広「大釜遺跡・金山古墳群出土土器の胎土分析」『大釜遺跡・金山古墳群』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1983
- (8) 相京建史「群馬県の高窯跡群の概観」『天代瓦窯遺跡』(中之条町教育委員会) 1982に詳しい。

VI 奥原古墳群出土人骨について

森本岩太郎 *

吉田俊爾 **

1. はじめに

群馬県榛名町所在の奥原古墳群において、人骨を出土したものは^註的場D号墳と奥原8・9・13・14・18・28・30・49・64号墳の合計10古墳にのぼる。出土人骨はいずれも7世紀ごろに属するという。群馬県埋蔵文化財調査事業団からの委嘱により、この人骨を調べたので、その所見を記載する。

II. 人骨所見

出土人骨は一般に保存状態が不良であり、断片的で、残量も少ないので、人骨の性別・年齢などに関して不詳のものが多い。

(1) 的場D号墳出土人骨

性別・年齢不詳の成人骨1個体分と思われる。若干の歯と上下肢の長骨片が残っているだけで、その総重量は約25gにすぎない。

歯の破片は4個あり、いずれも大白歯の歯冠片である。そのうち3個の歯は $\overline{6} \cdot \overline{6} \cdot \overline{7}$ である。歯の咬耗度はBrocaの第1度を示す。

長骨片は約8cm大のものを最大片として全部で4個ある。うち、2個は左右不詳の大腿骨体片で、1個は左右不詳の上腕骨体片ある。

(2) 奥原8号墳出土人骨

性別・年齢不詳の成人骨1個体分と思われる。約5cm大の骨片2個を筆頭に、3cm大以下の小片合計40個余りがあるが、その総重量は約30gにすぎない。いずれも上下肢の長骨々体片であるが、左右不詳の大腿骨体片5個と上腕骨体片3個のほかは、その所属部位を同定できない。

(3) 奥原9号墳出土人骨

性別・年齢不詳の成人骨で、1個体分と思われる。約6cm大の骨片2個を最大片とし、それ以下の小骨片が50個近く存在する。しかし、その総重量は約40gにすぎない。このうち、同定できるのは右側頭骨錐体、縫合縁をもつ頭蓋冠、後頭鱗などの各頭蓋片と、左右不詳の上腕骨体片などの上下肢の長骨々体片である。

(4) 奥原13号墳出土人骨

性別・年齢不詳の成人と幼児各1個体分と思われる。

成人骨は、約5cm大の破片を最大片とする頭蓋冠の骨片10個余りと歯の破片7個を主体とし、約3cm大以下の長骨々体片数個があるほかは、大きさ2cm以下の小骨片ばかりである。成人骨片の総重量は約90gである。骨片のうち、正確に部位を同定できるのは右側頭骨外耳道上部をもつ約2cm大の小片1個だけである。歯は $\overline{7} \cdot \overline{6}$ と $\overline{7} \cdot \overline{7}$ のほか、上顎小白歯の歯冠片が1個と歯種不明の歯冠片2個がある。

乳児1個体分については、 \overline{E} が1本あるだけである。

(5) 奥原14号墳出土人骨

保存状態の比較的良好な壮年期女性人骨1個体分のほか、成人男性人体2体・同女性人骨2・同性別不詳人骨1体を合わせて、全部で6個体分の成人骨が残っている。初めの保存良好な女性人骨1体を除く5個体分の人骨片は保存が悪く、個体識別の困難なものが多いので、これらは個体別でなく部位別に記すことにする。

* 聖マリアンナ医科大学 第2解剖学教室 教授
** // // 講師

(a) 保存良好な壮年期女性人骨 PL29・30 (写真1～3)

頭蓋のほか、上下肢骨が比較的良くそろっている。

頭蓋は左右の側頭部と顔面の右半などを大きく欠くほかは、かなり良く残っている。3主縫合は内外板とも開いている。主要計測値および示数は次のとおりである。

1. 頭蓋最大長	185mm
20. 耳プレグマ高	118
20/i. 頭蓋長耳プレグマ高示数	63.8
48. 上顔高	67
52. 眼窩高 (左)	35
54. 鼻幅	26
55. 鼻高	52
54/55鼻示数	50.0
61. 上顎歯槽幅	61
69 (3). 下顎体厚 (左)	12

ただし、項目番号は Martin による。頭蓋長耳プレグマ高示数は高頭型、鼻示数は中鼻型にそれぞれ属している。歯および歯槽の状況を次に示す。

8	7	6	5	4	3	○	○	1	2	3	4	5	6	7	8
×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	4	5	●	○	8

ただし、○印は歯槽開放、●印は歯槽閉鎖、×印は欠損のため状況不明であることをそれぞれ示す。歯槽性突顎が著しく、歯の咬合様式は鉗状咬合型で、咬耗度は Broca の第2度である。内側口蓋管骨橋・翼棘孔骨橋は左右とも存在しないが、鼓室骨裂孔・眼窩上縁孔は左右とも認められる。舌下神経管二分・副眼窩下孔・顎舌骨筋神経溝骨橋・副オトガイ孔は左側に無く、顎管欠如・頭頂切痕骨が左側に見られる。前頭縫合・インカ骨は存在しない。

椎骨としては、不完全な胸椎が1個あるだけである。

上肢については、左鎖骨・外科頸部の欠けた左上腕骨の各片がある。鎖骨は細い。上腕骨三角筋粗面の発達は良く、上腕骨の横断示数は83.3、その周径は67mmである。

下肢骨では、左右の寛骨・大腿骨・脛骨などが残っている。左大腿骨体の上部横断示数は75.0を示して広型に属し、中央横断示数は107.4を示してピラステルの形成度は弱い。大腿骨体中央周径は88mmである。(左大腿骨の最大長は408)mmで、これからPearson式によりこの女性の身長を算出すると152.2cmとなる。左脛骨体の横断示数は栄養孔部において75.0、中央部において80.6を示していずれも正脛型に属する。脛骨体の横断形は3角形 (Hrdlička I型) で、前縁も鋭い。脛骨体中央部の周径は87mmである。

(b) その他の5個体分の人骨片 (写真4)

主として頭蓋片および遊離歯からなり、これに若干の下肢骨片が加わったものである。石室内の比較的狭い範囲に頭蓋片が集中しているので、先にも述べたように個体識別の難しいものが多い。側頭骨の錐体片を集めると左右とも5個あるので、5個体の人骨が少なくとも存在すると推定された。前頭骨前頭鱗でプレグマをもつものを4個体分拾い出し、前頭鱗の形状と冠状ならびに矢状縫合の閉鎖度によって性別・年齢をみると、男性2体 (壮年期と熟年期) ・女性2体 (壮年期と熟年期) となる。したがって、錐体の数と前頭骨の所見を組み合わせると、残る1体が性別・年齢不詳の成人骨ということになる。ほかの人骨の部位で、これを上回る数を示すものはない。

さて、頭蓋片につき、以上の性別・個体数を念頭において、重複をいとわず、もう一度見てみると、男性頭蓋片としては、先に記したプレグマを含む約7×6cm大の熟年期男性の前頭鱗片があり、これには右側頭骨が伴う。これとは別に、左右の頭頂骨と前頭鱗からなる約11×9cm大の頭蓋冠片が壮年期男性のものである。これに対し、女性頭蓋

片としては、前頭鱗の右半、前頭鱗と右頭頂骨からなる頭蓋冠片の2片が女性2個体分として数えられる。後者には、さらに頭蓋冠の左後部・左上顔部・下顎骨が付属していると思われるが、保存があまり良くないので断定は避けたい。このほかに、個体識別の難しい頭蓋片として、外耳道をもつ側頭骨片が左右各2個ある。また、後頭骨・頭頂骨・蝶形骨・上顎骨・鼻骨などの小頭蓋片が数十片、合わせて約250gあるが、あまりにも細片なので記載を省略する。

歯は遊離したものの破片が42個ある。そのうち、30本が同定可能で、その内訳は次のとおりである。上顎左側が8本 ($\overline{6} \times 5$ 、 $\overline{7} \times 2$ 、 $\overline{8}$)、上顎右側が5本 ($\overline{8}$ 、 $\overline{7}$ 、 $\overline{6}$ 、 $\overline{4}$ 、 $\overline{3}$)、下顎左側が11本 ($\overline{1}$ 、 $\overline{2}$ 、 $\overline{4} \times 2$ 、 $\overline{5}$ 、 $\overline{6} \times 4$ 、 $\overline{7}$ 、 $\overline{8}$)、下顎右側が6本 ($\overline{7} \times 2$ 、 $\overline{6} \times 2$ 、 $\overline{4} \times 2$) の計30本。同定不能な歯片は12個で、上顎大白歯冠片3個、同歯根片2個、下顎小白歯冠片2個、下顎大白歯冠片3個、不詳の歯冠片2個の内訳である。

下肢骨としては、大腿骨体片が3個ある。そのうちの1個は太くて骨質が厚いので、男性のものと思われる。

(6) 奥原18号墳出土人骨

成人骨1個体分と思われるが、性別・年齢は不詳。左右不詳の小さな側頭骨錐体片1個と、約5cm大の左右不詳の脛骨体片が1個見られるだけである。

(7) 奥原28号墳出土人骨

性別・年齢不詳の成人1個体分の上下肢の比較的大きな骨体片が数個のほか、同細小片が30個余りある。主要なものは、右上腕骨体下半、左右の大腿骨体上部、左脛骨体などの破片である。左脛骨体の栄養孔部における横断示数は58.8を示して平脛型に属する。脛骨体の横断形は2等辺3角形 (Hrdlička II型) で、前縁は鋭い。

(8) 奥原30号墳出土人骨 (写真5)

壮年期女性1体と性別・年齢不詳の成人骨3体・合計4個体分の成人骨がある。保存状態が良くないので、頭蓋・歯・下肢骨などの各一部が破片として残っているにすぎない。頭蓋については、まず側頭骨錐体が左右各4個あり、少なくとも4個体分の人骨が埋納されていることが分かる。これに対する頭蓋冠片については、壮年期女性のものと思われるラムダ縫合で連結した後頭骨・左頭頂骨からなる破片1個だけが比較的大きな骨片であり、残りは6cm以下の数十個 (総重量約150g) の小片にすぎない。この小片には、前頭骨前頭鱗・頭頂骨・側頭骨側頭鱗などの部分が含まれているが、それらの個体識別は困難である。脛遊離歯片で歯類を同定できるものは11本分で、その内訳は上顎左側が3本 ($\overline{7} \times 3$)、上顎右側が2本 ($\overline{7} \times 2$)、下顎左側が4本 ($\overline{4}$ 、 $\overline{6}$ 、 $\overline{7} \times 2$)、下顎右側が2本 ($\overline{8}$ 、 $\overline{5}$) である。ほかに同定不能の歯冠または歯根の細片が15個前後ある。上下肢骨片としては、左右不詳の上腕骨体片と左大腿骨体上半がある。大腿骨体の上部横断示数は76.7で広型に属する。

(9) 奥原49号墳出土人骨

出土人骨の主体は成人の火葬骨1個体分で、そのほかに成人1個体分の非火葬骨が若干混ざっている。

火葬骨の保存状態は不良で、約8cm大のものを最大片とするが、骨片の多くは3cm以下の細片で、その総重量は約170gである。後頭骨・頭頂骨などの頭蓋片が数点あるほかは、上下肢の長骨々体片で占められる。長骨としては、上腕骨・前腕骨・大腿骨・脛骨の骨体片などがある。

非火葬人骨は小さな頭頂骨片4個と1本の歯 $\overline{7}$ のほか、約9cm大の左右不詳の大腿骨体片などからなる。歯 $\overline{7}$ の咬合面に齶蝕が認められる。

(10) 奥原64号墳出土人骨

成人男性1体・同女性1体・幼児1体・胎児1体・合計4個体分の人骨片がある。

まず、頭蓋片については、幼児のものと思われる薄い頭蓋冠の小破片が多数ある。そのほかに、女性のものと思われる頭蓋冠の小破片6個と左右の側頭骨錐体片と左外耳道片がある。また遊離歯が4本あり、その内訳は上顎左側が2本 ($\overline{4}$ 、 $\overline{6}$) と同左側が2本 ($\overline{7}$ 、 $\overline{6}$) である。このうち、 $\overline{6}$ は幼児の未萌出の歯冠で、他は成人の歯である。咬耗度は $\overline{4}$ が Broca の第1度、 $\overline{6}$ と $\overline{7}$ が同第2度である。

上下肢の長骨片としては、女性のものと思われる右上腕骨体片のほか、男性のものと思われる太い右上腕骨体片、

性別不詳の左大腿骨体片1個・右大腿骨体片2個、左右不詳の短い脛骨体片1個などがある。このうち、右大腿骨体1個の骨体上部横断示数は78.1を示し、広型に属する。

(II) 出土人骨数の総括

以上の10基の古墳から出土した人骨の性別、年齢別の個体数を次表にまとめる。

	成人			幼児	胎児
	男性	女性	性別不詳		
的場D号墳			1		
奥原8号墳			1		
奥原9号墳			1		
奥原13号墳			1	1	
奥原14号墳	2	3	1		
奥原18号墳			1		
奥原28号墳			1		
奥原30号墳		1	3		
奥原49号墳			2		
奥原64号墳	1	1		1	1
計	3	5	12	2	1
	20			3	

* 2個体のうち1個体は火葬骨

出土人骨総個体数は23個体で、そのうち成人が20体（87%）を占める。古墳10基のうち5基（50%）からは複数個体が出土している。また、1基の古墳からは火葬骨1個体分が出土した。

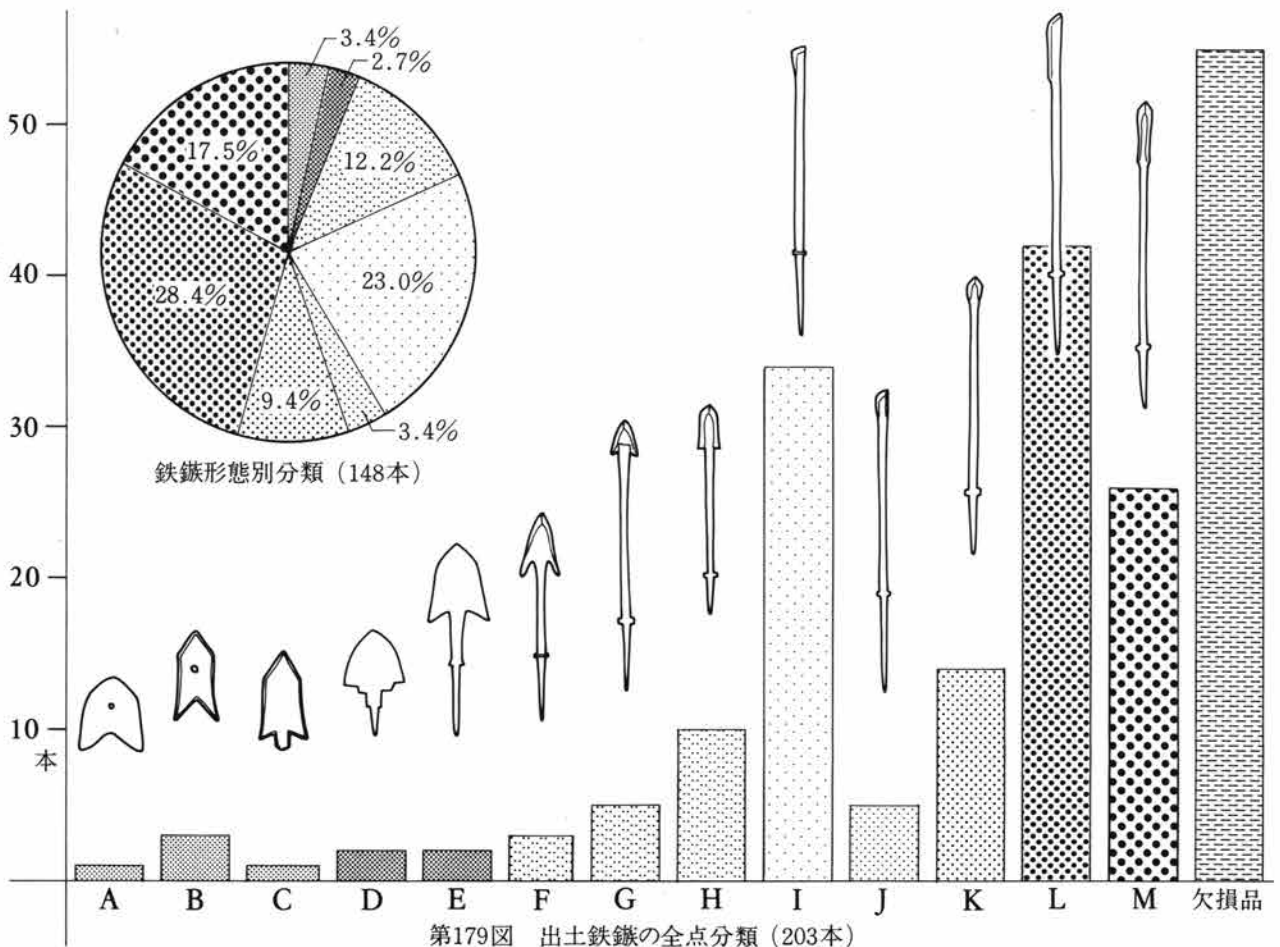
III. ま と め

奥原古墳群に所属する10基の古墳から、7世紀末に属する人骨成人20体（男性3・女性5・性別不詳12）・幼児2体・胎児1体・合計23体分の人骨片が出土した。10基の古墳のうち1基（奥原49号墳）に火葬人骨が見られた。

VII 出土遺物の検討

鉄鏃 鏃の出土率は調査古墳36基中の22基で60%以上を占める。古墳の後世の攪乱と材質からくる遺存度の低さから考えれば、ほとんどの古墳に副葬されていたと考えられる。鏃の出土量で20本以上を数えるのは13・30・37・49号墳などの比較的規模の大きな古墳が目立つ。型式の多様さは鏃の変遷を読みとることもでき、一古墳内での葬送期間の推定、更には各古墳間の編年作業と群構造の分析へとレベルを高めることができよう。本古墳群では資料点数の限界から出土した鏃の全てをまとめて型式分類し、大まかな時代区分の見通しをのべるにとどまった。

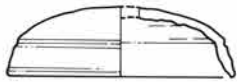

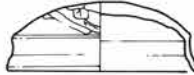

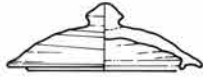

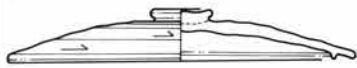



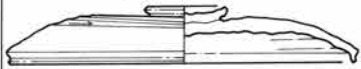

形態の判明した148本はA～Mの13種類に細分できる。これらは更にA、B類の無茎広根タイプのI類、C～Hタイプの有茎で短い筈被を有するII類、I～MタイプのIII類に区分できる。けれどもG、H、L、MグループとI、J、Kグループで共通する細根鏃で関の有無からの分類も可能ではあったが、ここでは採用していない。I類は全体の3%、II類は15%、III類は82%を占める。無茎鏃から有茎鏃へ、更に鏃形の広根式から細根式へ、細根鏃の有関から無関へなどの細部の点を加味して全体的な年代観を与えてみよう。総体としてはI、J、K類などの無関の鏃身長長の短い細根鏃の44%に対して有関の細根鏃の56%とやや古い様相をうかがうことができる。これらのことから鏃は6世紀後半代から7世紀の前半代のものであると考えることができる。またI、II、III類とも出土する古墳は25、30、49号墳で古墳群中でも大規模な古墳であることも注目される。



須恵器の編年 本県における後期古墳研究は遺構、とりわけ石室の構造論に重点が置かれて来た。東京国立博物館に戦前を中心に所蔵された膨大な古墳遺物の量は、ただ単に古代毛野の優位性を示すというだけのことではなく、いかに遺跡が耕地拡大のために破壊つくされたかという裏側の見方もできるのである。戦後、本県の考古学研究の基礎を確立された尾崎喜左雄氏を中心とした群馬大学の研究室もこれらの遺跡、特に古墳の残骸処理的な調査を余儀なくされたのである。その残された痕跡、特に普遍的に入手できる記録として石室平面形の変遷に着目された方法論が『横穴式古墳の研究』として結実したのであったともいえる。その後、古墳築造論として石室内構造と不可分の関係にある裏込め構造と一体化した研究方向とそのための発掘技術の向上と図化の精密化も強く意識されることになったのである。近年これらのデータに土木工学的な検討も加えられ成果が公表されつつある。けれども石室の編年研究も相対的な年代観は提示できるものの遺物との総合的な研究なくしては実年代の決定も含めたより、深化させた研究に発展しないことも事実である。遺物研究の立ち遅れは先述の理由だけでなく、県内の古墳時代の研究に新たな転換をせまっているといえよう。

古墳に年代観を与える時に現在最も有力な方法として用いられているのは須恵器による型式編年である。特に後期、終末期の実年代の比定作業は文献史学からの具体的な歴史事象との接近で不可避となっている。このため考古学による遺跡をととした方法論の限界を認めつつ、その接点をもとめて限りなく検証を続けてゆかねばならないのが現状であろう。現在、本県では7世紀を中心とした須恵器の編年は組まれていない。そこで陶器窯跡群を中心に全国的な編年体系を進めておられる田辺昭三氏の研究成果と、飛鳥・藤原宮跡を中心に編年観を提示した奈良国立文化財研究所の研究成果に依拠しつつ本古墳群の編年作業を進めることにする。2つの編年案には相互に関連し合っている点、本古墳群出土遺物の大まかな推移に矛盾がない点、実年代が付与されており、古墳の群構成を考えるのにより積極的な分析が可能になるであろう点が期待される。編年基準は須恵器の蓋、杯を中心とする。当然杯と蓋との相互関係をも考慮しなければならないが資料の限界から蓋を中心に組み立てなければならなかった。

先ず土器の編年(180図)について説明しておきたい。器形の決定的な変革期をもってA、Bの2つの期に分けた。更に器形の変化する時間的な画期をI、IIの段階とした。しかしそれぞれの画期のなかで器形の大小や、それほど個体差のみられない一群を細別して1、2、3とした。編年区分は7つの段階に分類され、上から下へ向って時間の変化を考えている。呼び方は例えばBI-1段階とした。A期は杯に蓋受けのたちあがりをもつ一群である。AI段階は次の段階よりも大ぶりの口径で蓋の天井を口縁の屈曲部分にきわめて形骸化した稜がめぐる。すなわち前代の明瞭な段差から一条の沈線をめぐらせることによって稜線を浮かび上がらせている。口縁端部はまるめてにぶい。杯は蓋受け部が内傾して短い。蓋受け部先端はまるめている。杯の底部：蓋の天井部とも範囲のせまい手持ち及び回転ヘラ削りの調整が残る。全体的に器高は低い感じがする。AII段階は蓋、杯とも口径は小さくなり、器高は前の段階より高くなり甲丸となる。蓋の天井部は口縁部近くまで手持ちヘラ削りが施こされる。口縁部端は丸く仕上げ、天井部との屈曲部はすでに痕跡さえも残さない。杯は底部が丸く、蓋受け部近くまで手持ちヘラ削りが施こされる。蓋受け部は短かく内傾し先端は丸く仕上げる。AII段階とBI-1段階の間には蓋、杯の変化にもう一段階置くことができる。A期に属するもので、蓋、杯とも口径10cm近くになり杯の蓋受け部のたちあがりとは形骸化してオリコミ手法のみられる段階を想定できる。この段階をa段階と呼んでおきたい。B期は蓋、杯の形態が全く逆転したものをいう。BI-1段階は蓋の内側に比較的長いかえりが出現し、天井部には宝珠状のつまみがつく。とくにこの段階のかえりは天井部外縁より下方に突出しており、オリコミ技法がみられ、明らかに前段階の杯の逆転した結果をみとることができる。杯は前段階で予測した蓋の流れをくむもので底部は丸みを持ち口縁部は名傾気味に直線的にひろがる。底部に手持ちヘラ削りの調整が残る。次のBI-2段階との間にbの段階を想定できる。本古墳群の東方1kmのししどめ塚古墳前庭出土の須恵器の一部がこの段階に相当する。蓋は10cm近くの小形で天井部中央にくずれた宝珠状のつまみを持つ。内面のかえりは口縁部より下方に突出することなく形骸化して短かく残る。BI-2段階は蓋杯の口径の大形化と器高の低平化が見られる。天井部のつまみは輪状を量し内面のかえりは退化しつつも口縁端部より突出する段階である。BI-3段階

A	I		0301	3号墳 53号墳	
			5312	49号墳 50号墳 53号墳	
	II		0303	3号墳	
			5311	53号墳	
B	1		4964	49号墳 53号墳 64号墳	
			4975	49号墳 53号墳	
	2		6011	60号墳	
			1364	6号墳 13号墳 49号墳 63号墳	
	3		4970	21号墳 27号墳 49号墳	
	I		6201	62号墳	
		II		5324	53号墳
			2		5322

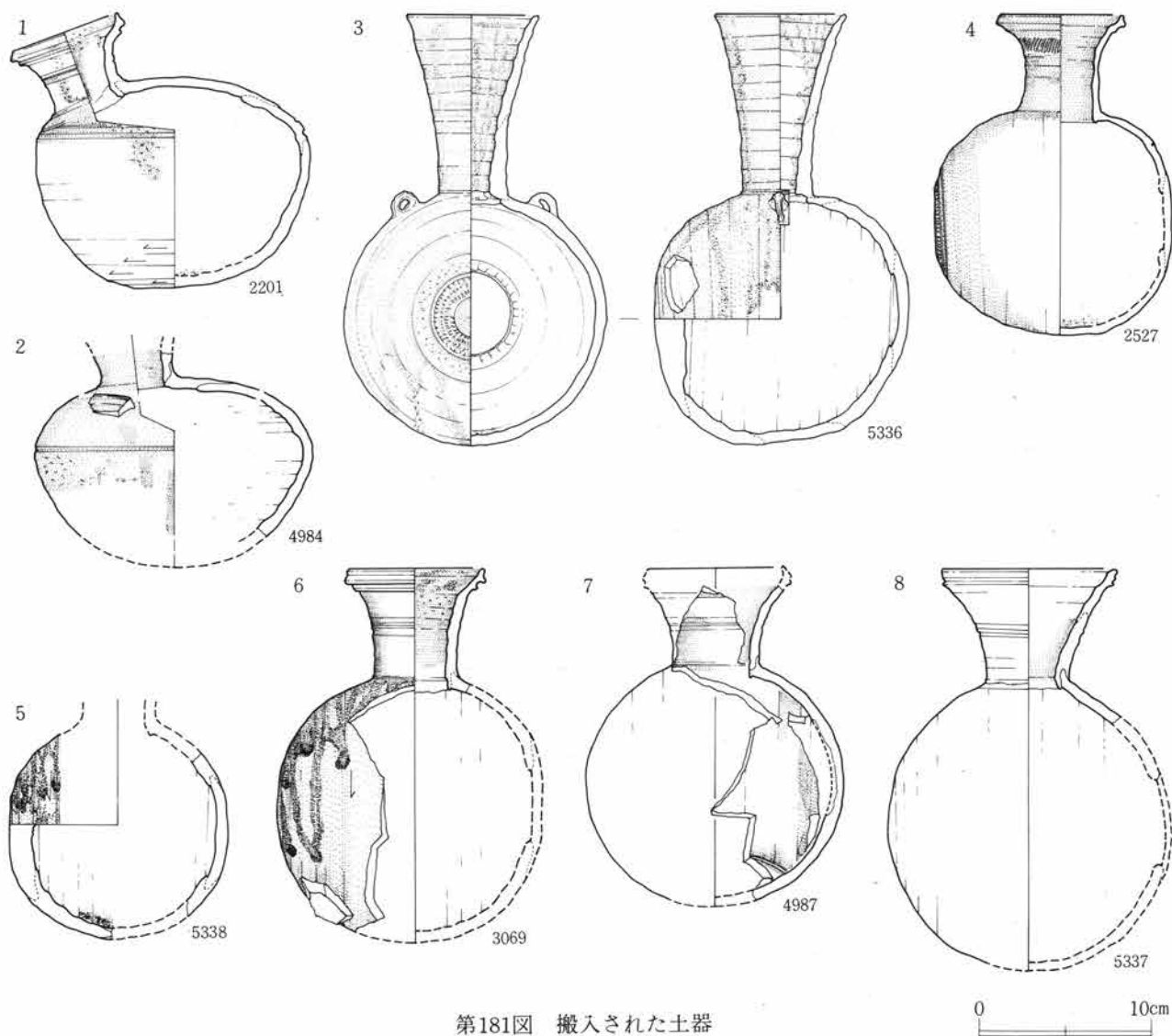
第180図 杯・蓋の変遷

は天井部のつまみの肥大化と器高が増える蓋である。内面のかえりは退化し口縁部内側に入る。B II段階は蓋の内側にみられたかえりの消失する段階である。天井部の丸みの変化や調整の回転ヘラ削り、口縁端部の形態など多様な変化がみられ、更に細分が可能かと考えられるが、ここでは2段階に細分するにとどめた。

以上のべてきた蓋、杯の変化をまとめると次のようになる。A I→A II→a→B I-1→b→B I-2→B I-3→B II-1→B II-2の9段階に細別できた。

搬入された須恵器 大量に出土した須恵器のうち肉眼的な観察で明らかに他の地方から搬入されたと考えられる一群の土器がある。(181図)。これらの土器の生産地を限定することができれば、古墳群の造営主体者の当時の流通ルート、後期古墳群の性格規定にまで及ぶことも可能であろうし、同一古墳群内での同一産地の製品の分有関係から群構成の問題にまで研究の進むこともできよう。

1、4、6の土器は深緑色の自然釉の流れ落ちた焼成、胎土の共通したものである。更に口縁部の端部は若干内傾気味で下段に一条の沈線がめぐると特徴をもち明らかに東海産であることがわかる。2の平瓶の器形の若干の違いや5、7の口縁部の欠損も気になるが3とともに1～7は同一地域から搬入したものといえよう。8は口縁端部の造りの手法は図示しなかったが3号墳の土器に近似しており良好な焼成、色調、胎土の共通性から更に他地方からの搬入の一群も想定できる。今後、科学的分析に裏打ちされた、需要と供給の問題を県内窯跡に限らず広域に比較検討をする必要性を感じる。



第181図 搬入された土器

古墳の編年 蓋、杯を中心に細別した9段階の須恵器編年に実年代をとりあえず付与して群構成の見通しをたててみたい。もちろんほとんど破壊されていた古墳のために出土位置からの復元データの共通性の欠落もあり、各古墳出土の一括須恵器（主に蓋、杯）のうちの最古の段階がその古墳の築造時に最も近いと考えることにした。先づB I段階は6世紀の第4四半期、A II段階は7世紀第1四半期、B I-1段階は7世紀第2四半期、B I-2、B I-3段階は7世紀の第3、第4四半期、B II段階は8世紀以降とした。それではこの各段階に該当する遺物を出土した古墳について造墓の時期区分を検討してみる。ここでは古い順から3期に分類するにとどめた。これ以降の段階については出土遺物の多少の条件が強く影響することと、すでに追葬段階の遺物が重複していると考えられ、いたずらな分類を避けたことによる。

第1期は3・49・50・53号墳、第2期は15・64号墳、第3期は6・13・60・63号墳となる。石室構造は第1期は前庭を持つ群中最大規模のグループで占地も中央部に集中する。第2期は石室規模の小さなもので占地は群の最南端に近接する。第3期も小規模な石室を持つが、占地も群中に拡散する傾向がうかがえる。以上、須恵器の蓋、杯のみで荒い編年を試みたが今後、他の遺物及び遺構との関連をふまえた慎重な検討が必要なことは十分承知するところである。

- 註(1) 『東京国立博物館 図版目録・古墳遺物篇(関東II)』1983
 (2) 田辺昭三『陶器古窯址群I』1965
 (3) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』1978
 (4) 尾崎喜左雄「しどめ塚古墳」『群馬県史 資料編3』1981

VIII 終末期古墳の石室形態

群馬県内の7世紀後半代、すなわち、終末期の古墳では、主体部である横穴式石室の中にいくつかの特色が認められる。一般的には、石室が小形化する傾向を示す一方で、手のこんだ構築法がとられ、より精巧な石室をつくらうとする意図がうかがえる⁽¹⁾。截石切組積の採用はその典型的なものであるが、他にも玄室入口部に柱状の石をたてた玄門の設置、円弧を活用した胴張りプランの採用、さらに石室前に石組みをもって構成した台形プランの前庭の設置等がある。奥原古墳群では、截石切組積の石室はないが、玄門や前庭を設置した石室、円弧利用の胴張りプランを採用した石室の例は数多くみられる。これらの諸要素に着目し、本古墳群の石室について紙数の許す範囲で多少の検討を加えてみたい。

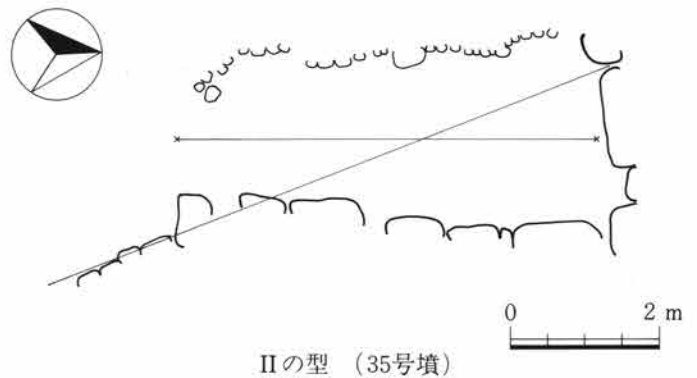
1 胴張りについて ここでいう胴張りとは、玄室平面形に円弧に合致する曲線が見られるものに限定する。県内の胴張りをもつ石室にあっては、石室全長を半径とした円弧に一致するものが多い⁽²⁾。本古墳群でもすべて石室全長を半径とする円弧に一致する。ただし、玄室の最大幅の位置、すなわち、円の中心の位置は、玄室中央部にあるとは限らず、奥壁寄りまたは玄室前半部にあるものもみられる。また、玄室の左右両側に円弧が認められる石室は少なく、左右いずれか一方にのみ認められるものが多い。本古墳群で胴張りを有するものは次のとおりである。

玄室中央に最大幅のある石室。7号墳(右壁)、9号墳(左右壁)、10号墳(左右壁)、28号墳(左右壁)、33号墳(左壁)、52号墳(左壁)、53号墳(左壁)、64号墳(左右壁)

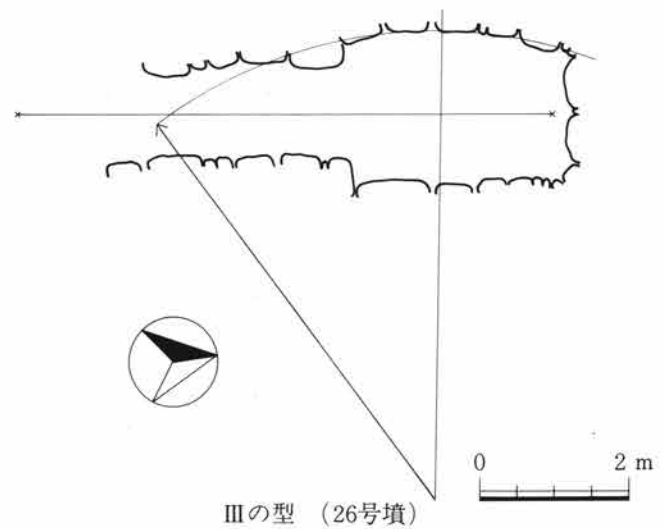
玄室奥寄りに最大幅のある石室。5号墳(右壁)
49号墳(左壁)

玄室前寄りに最大幅のある石室。11号墳(右壁)
25号墳(右壁)、26号墳(左壁)

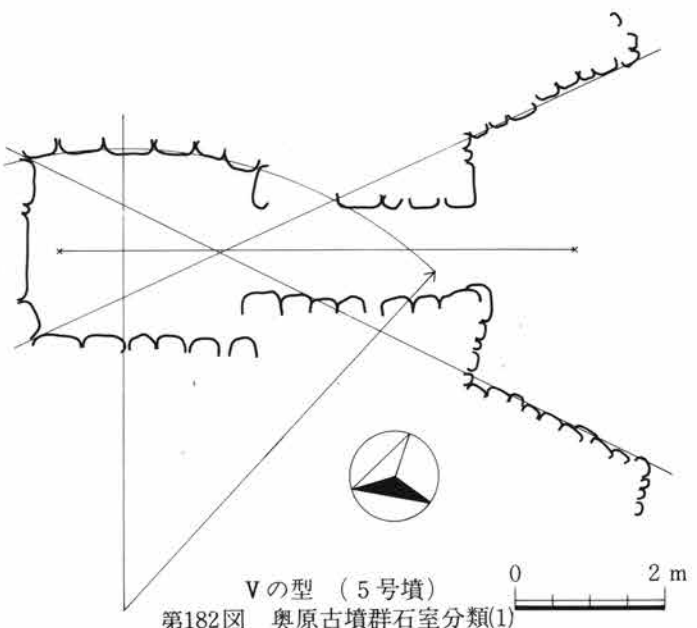
2 玄門について 県内の横穴式石室に設置された玄門をみると、截石の精巧な玄門、柱状の自然石を意図的にたてた玄門、いくつかの石をたて一列に積み上げた多石積の玄門等いくつかのタイプに分類



IIの型 (35号墳)

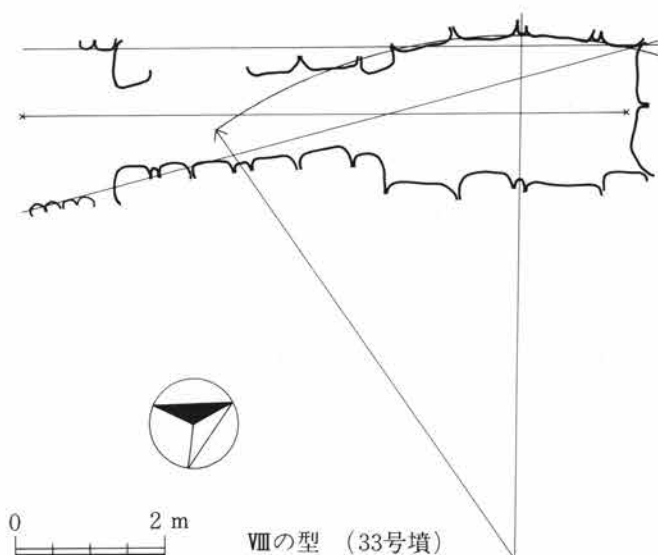


IIIの型 (26号墳)

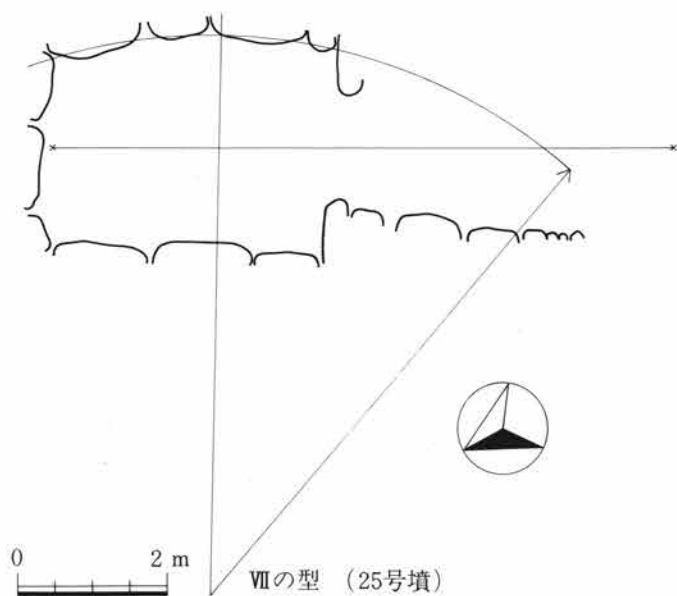


Vの型 (5号墳)

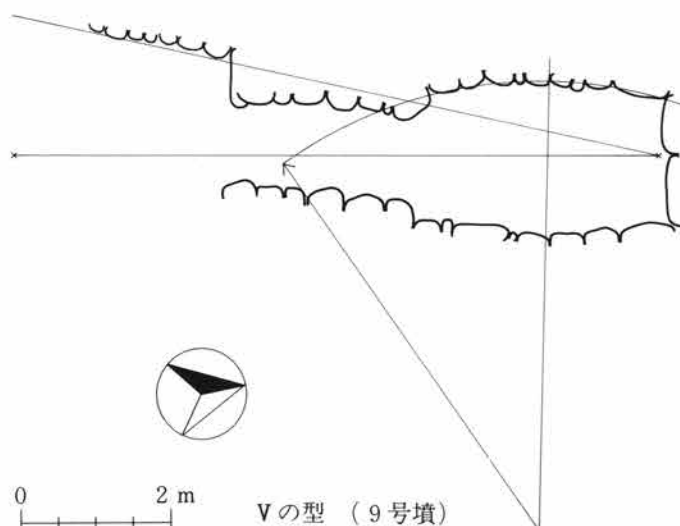
第182図 奥原古墳群石室分類(1)



VIIIの型 (33号墳)



VIIの型 (25号墳)



Vの型 (9号墳)

第183図 奥原古墳群石室分類(2)

することが可能であるが、本古墳群の場合截石の玄門を設置した例はなく、柱状の自然石をたてたものと自然石の多石積のものが認められる。

柱状の玄門を設置した石室。6号墳、8号墳、15号墳、25号墳、33号墳、53号墳(右のみ)、65号墳多石積の玄門を設置した石室。23号墳、49号墳。

3 前庭について 本古墳群の特色の一つは、石室前に台形プランの石組で構成した前庭をもつ古墳が多いことである。前庭の設置は、当然のことながら墳丘の構築と密接な関係をもつ。本古墳群の場合、墳丘との関係から前庭のあり方をみると、大きく次の四つに分けることができる。

- a 石室入口が墳丘裾部より内側にあり、入口前の墳丘を台形状に切り開いて設置したもの。7号墳、23号墳、28号墳、33号墳
- b 基段あるいは墳丘裾部にテラス状にまわる平坦面を台形状に切り開いて設置したもの。3号墳、5号墳、9号墳、11号墳、15号墳、35号墳、37号墳、49号墳、62号墳、64号墳
- c 2段の基段を設置し、その基段を台形状に切り開いて設置したもの。53号墳
- d 石室は墳丘先端に開口し、基段及びテラス状の施設もなく、墳丘内に前庭石組をすることができないため、石室入口前にのみ石組の高さまで盛土をした付け基段内に前庭を設置したもの。6号墳

当然のことながら、古墳構築に際して、主体部たる石室と墳丘とは不可分の関係にある。ここに前庭を設置する場合も、上記のa～cにあつては、石室入口部の位置、基段やテラスの規模と前庭の規模・形等について全体的な計画のもとに配置されたものである。すなわち、a～cの前庭は、古墳構築に際し、当初から石室と一体のものとして企画され、墳丘内に組み込まれたものである。これに対し、dの前庭は古墳構築当初から計画していなくとも、後から改めて付け加えることも可能なものである。なお、前庭については、図に見るように、台形状に開く両側石組の延長線と奥壁との交点が、奥壁隅にあるもの、奥幅の midpointにあるものがあり、この点からのタイプ分類も可能である。

以上、奥原古墳群の石室について、胴張り、玄門、前庭等に着目してその特色を概観したが、それぞれ二

つから四つのタイプに分類することができる。しかしこれらのタイプがただちに編年の基準とはなり得ない。この点についてはさらに検討を要するが、むしろ、これらのタイプはそれぞれ並行して同時期に存在していたものと見られ、この傾向は県内の他の古墳にあっては同様である。試みにこれら各タイプの組み合わせに着目して本古墳群の石室を分類してみると、次のようになる。

- I 前庭・胴張り・玄門いずれもない型。13号・14号・18号・22号・27号・30号・59号・60号・63号墳
- II 前庭のみある型。3号・35号・62号墳
- III 胴張りのみある型。10号・26号52号墳
- IV 玄門のみある型。8号・65号墳
- V 前庭・胴張りがセットになっている型。5号・7号・9号・11号25号・65号墳

VI 前庭・玄門がセットになっている型。6号・15号・23号墳

VII 胴張り・玄門がセットになっている型 25号墳

VIII 前庭・胴張り・玄門の三者がセットになっている型 33号・49号・53号墳

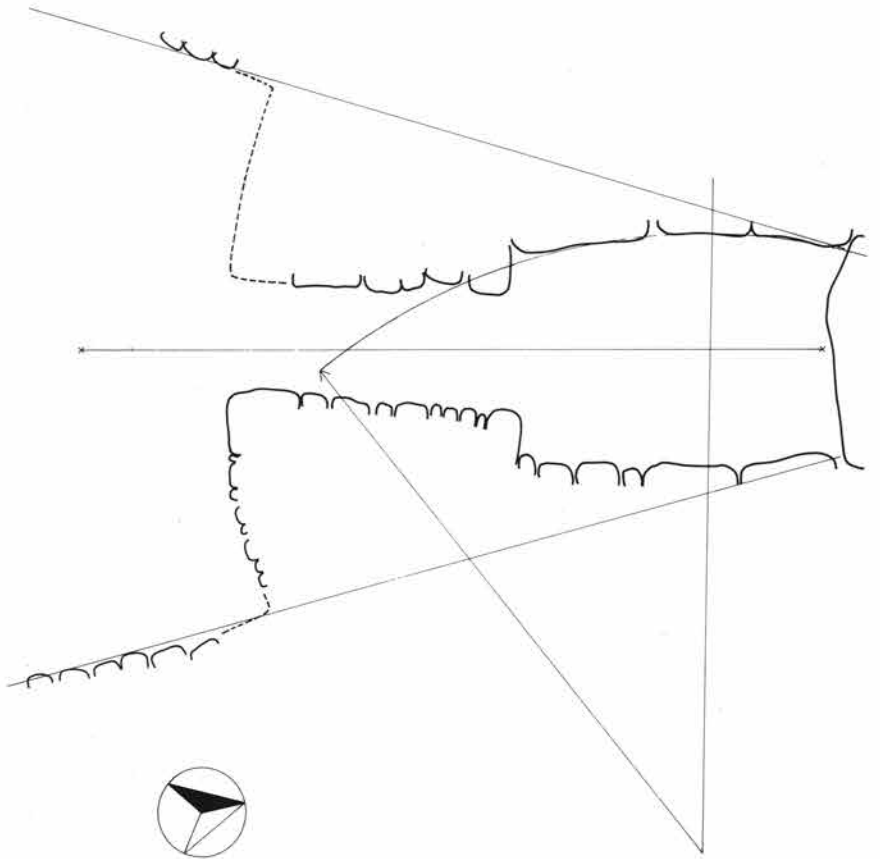
以上8つの型に分けられるが、このうち、Iの型が全体の30%であるのに対し、II～VIIIの型、すなわち、前庭・胴張り・玄門の諸要素を具備している石室が全体の70%を占めていることが注目される。しかし、現在のところ、これら8つの型を時間的変化で把握することには問題が残る。むしろ、30基足らずの石室を3つの要素の組み合わせで分類しただけでも、IIの型以下7つの型に分けられるということは、古墳構築の企画段階における構築者の意図するところの差があらわれているものと考えたほうが妥当であろう。

一方、冒頭にも記したように、玄門・前庭といった要素は、県内の終末期の古墳に特徴的にみられるものと考えてきた。この点からすると、奥原古墳群の大半は7世紀後半代とみられる。しかし、奥原古墳群にあっては、これら要素を具備する古墳出土の須恵器に7世紀初頭とみられるものが含まれており、玄門・前庭等が石室へ取り入れられた時期の再検討を要するにいたっている。出土した古いタイプの須恵器の大半は前庭部からであり、前庭の機能とそこに置かれた器の意味することの検討とともに、前方後円墳や埴輪の消滅の時期、そして、終末期古墳への移行過程等7世紀代の古墳編年の再検討も要する。

この意味で、奥原古墳群の調査は重要な問題を提起しているが、紙数の限られた本書での検討には限度がある。ここでは、一つの問題を提起してこの稿を終りとする。

註(1) 松本浩一「関東地方の終末期古墳」『考古学ジャーナル』No194 1981

(2) 松本浩一「横穴式石室における胴張りに関する一考察」『古代学研究』No53 1968



VIIIの型 (49号墳)
第184図 奥原古墳群石室分類(3)



IX 奥原古墳群の歴史的位罫

(1) 榛名山南麓丘陵地域の古墳分布と古墳群の形成

烏川流域地域の古墳の分布は、奥原古墳群を境にして、その上流は極端に少なくなる。奥原古墳群は、こうした烏川流域での上流域に位置する充実した群集墳であり、我々の調査時点の昭和45年当時、65基の円墳の存在が確認できた。しかし、昭和10年時の県内古墳調査による“上毛古墳綜覧”記載では9基、すでに昭和初期の段階で、墳丘部を平夷されていたようである。事実、我々の調査の段階でも、原形に近い形で、墳丘形態を残していたのは8基(15、24、29、32、36、44、49、53号溝)であった。他のほとんどは、主体部の横穴式石室部分を残して墳丘部分が地ならしされていた。このことは分布域の開墾が丹念に行われ、さらに大部分の古墳の墳丘規模が小形であったということをも物語っているようにも思われる。確認し得た古墳のうち、比較的大形の墳丘をもつものは、3、49、53号墳の3基であり、それらは古墳群のほぼ中央位を占めており、その周辺部に拡散するように小形の墳丘をもつ円墳が分布している。古墳分布のあり方から見て、奥原古墳群にあつては、中核的存在を示す古墳と、それを取りまく古墳とが有機的に結合して継起的に発展し、限定された地内に密度の高い群集墳を形成したと考えられる。

本古墳群の形成が、どのような契機をもってなされていったのであろうか。まず、榛名山南麓の丘陵地縁辺に分布する古墳について見るとしよう。奥原古墳群のある本郷地区は、烏川の左岸で、その支流の白川とに挟まれて終焉する丘陵地域の末端にある。東方には白川越しに、関東平野最奥部の榛名山南面に広がる沖積地を望んでいる。こうした本郷地域を中心に烏川沿いの南縁の地域では高浜、神戸と続く地域にも古墳の分布が見られるが、それは極端に少なくなっている。一方白川沿いの丘陵東縁の地域にあつては白川、和田山、富岡、善地にかけて密度の高い古墳の分布が認められる。“上毛古墳綜覧”によれば、これら榛名山南麓末端の丘陵地域では210基の古墳を数えており、その内訳は、本郷地区：30基、高浜地区：5基、神戸地区：2基、十文字地区：1基、宮沢地区：1基、三ツ子沢地区：3基、白川地区：26基、和田山地区：74基、富岡地区：64基、善地地区：3基であった。奥原古墳群において65基という実数が確認されている本郷地区が30基と記載されている例から見て、この地域の古墳分布は、綜覧の記載数を大巾に上廻ることは確実であるが、前方後円墳の存在は確認されない。綜覧では白川地区に1基の前方後円墳の存在を伝えているが、その存在は不明であり、前方後円墳の分布しない地域であったと思われる。しかし、“綜覧”に記載された古墳数が示すように、この地域において群集墳としての形成は、本郷地区、白川地区、和田山地区、富岡地区に顕著に進展したことは明らかで“綜覧”に記載のない金敷平地区でも榛名山二ツ岳噴出軽石層に埋没した円墳群の発見がある。この地域においては、6世紀前半頃から群集墳の形成がはじまったと推定される。

現在、榛名山南麓丘陵地域の古墳で、最も古式の様相をもつものとして知られているのは、奥原古墳群東方約700mの地にある本郷大塚古墳である。直径約45mを測る円墳で、主体部は竪穴式石室、副葬品には舶載内行花文鏡1面のほか管玉、ガラス小玉などがあつた。その主体部構造の特徴や副葬品の性格から見て、群馬県内における初期古墳の一つに数えられるものである。しかし、この本郷大塚古墳に連なる古墳の存在は、この地域内では明らかではない。5世紀後半から6世紀代にかけての大規模前方後円墳として、白川東方の沖積平野にある高崎市筑縄町、小星山古墳、同並榎町稲荷山古墳などが知られている。並榎町稲荷山古墳は、全長120mの墳丘を有し、この地域最大の古墳であった。主体部が舟形石棺で、出土品には大刀、短甲類の存在したことを伝えている。これは5世紀終末頃に位置づけられる古墳である。この古墳に後出する大形古墳には帆立貝形墳の小碓町稲荷神社古墳がある。径約50mで西北西方向に開口する袖無型横穴式石室を設けている。それは、6世紀の前半から中葉にかけてこの地域を包括する井野川水系地域に群馬町保渡田、井出の愛宕塚、八幡塚、薬師塚古墳という三前方後円墳が成立した時期に県内各地に盛行を見た大形帆立貝形墳の一つに数えられるものである。それが横穴式石室を導入しているという点で一つの契機をもって出

現した古墳であることがわかる。このことは本郷大塚古墳にはじまって、小星山古墳、並榎稻荷山古墳、小埜稻荷神社古墳という大形古墳が中心となって形成する古墳群の系譜が示す地域圏が5世紀代から6世紀前半にかけて、榛名山南麓丘陵地域の末端から東方の烏川北岸の沖積平野にかけて確立していったことを示している。6世紀前半頃になるとこのような地域圏の形成を基盤にして、この地域内の各地に群集墳形成への萌芽がはじまったのである。本郷地区、白川地区、和田山～富岡地区、そして金敷平地区などに分布する古墳群である。これらの地区において初現的な性格をもつ古墳は、いずれも6世紀前半から中葉に位置づけられる内容のもので、群集墳の中核となったものとするのが適しい。

そうした性格をもつものとして、まず注意されるのが、本郷稻荷塚古墳（綜覧久留馬村第18号墳）である。本郷稻荷塚古墳は、奥原古墳群の東方約600mの地にある帆立貝形古墳である。造り出し部を西方にして位置しており、全長34.5m、墳丘直径は22～23mで、墳丘部分を空堀で囲繞している。川原石の葺石、埴輪類は円筒列のほか、人物、馬、にわとり、器財類も存在した。特に人物を主体とする馬、にわとりなどの樹立された位置は、つくり出し部の基部に確認されており、それは古くは群馬郡箕郷町上芝古墳で発見された埴輪類配置や、最近の発見例である太田市竜舞塚廻り古墳群の埴輪類配置に共通するものがある。これらの古墳は、いずれも帆立貝形古墳であり、墳丘規模もきわだって大きくはない。むしろ小規模である。塚廻り古墳の主体部が小形竪穴式石室であるのにたいして、本郷稻荷山古墳は川原石互目積み袖無型の横穴式石室であり、それは、墳丘主軸方向で、つくり出し部に向って開口していた。壁面を赤色顔料で塗彩しており、副葬品には管玉、須恵器甕等が残存した。主体部は県内の初現の様相を伝える横穴式石室であり、須恵器甕はI式末に位置づけられるものである。更に、ここで注意したいのは横穴式石室を主体部とする帆立貝形古墳という点で小埜稻荷神社古墳にきわめて類似しているという点である。両古墳とも主体部の位置する部位が墳丘の頂部に近く、開口する方向と、その形態において同種である。地域を統轄する首長墓としての性格をもつ小埜稻荷神社古墳にならったものの一つが本郷稻荷山古墳として本郷地区に出現しているのである。

現在、榛名山南麓丘陵地域における帆立貝形古墳の存在は、この本郷稻荷山古墳を除いて明らかにされていないが、他の地区にあっても古墳群形成の契機となって出現したことが推定される。一方箕郷町和田山、桜塚古墳（車郷第49号墳）は和田山地区に分布する古墳群の中核を占める古墳である。墳丘は定かでないが、主体部は横穴式石室である。副葬品に仿製方格規矩四神四獣鏡1面のほか、大刀破片、槍、雲珠、棗玉、小玉、金銅環、銀環、須恵器提瓶、台付壺、高杯、甕、金板（金銅製大帯か、長さは7寸5分、6寸1分、4寸7分でいずれも幅2寸1分のもの3枚）等がある。6世紀後半期に位置づけられる。この桜塚古墳の北方、富岡地区には、二子塚古墳（車郷第34号墳、円墳横穴式石室？）があり、鏡、鈴杏葉が出土している。6世紀前半～中葉に位置づけられる。

本郷大塚古墳や、二子塚古墳が示すように、榛名山南麓丘陵地域に横穴式石室をともなう古墳が出現するのは、6世紀前半から中葉にかけての頃と思われ、それを採用した古墳のなかには帆立貝形墳が存在する。横穴式石室を主体部とする古墳群の形成の初期に帆立貝形墳が主導的な役割を担ったであろうことは明らかである。

ところで、奥原古墳群の1基とされた21号墳は、発掘調査の結果、径12.8m、高さ0.4mに満たない小規模な墳丘で埴輪円筒列を配置した円墳で、主体部も竪穴系と推定され、副葬品は明らかでない。これは奥原古墳群内最古の古墳である。6世紀前半期に位置づけられるものであり、その系譜にある古墳の分布が他にも推定されるのであるが、それは、横穴式石室をともなう奥原古墳群分布域の西南寄りの区外を中心に存在したらしい。白川流域の箕郷町金敷平地区からは、榛名山二ツ岳噴出軽石層下から街道東I、II号墳が発見され、いずれも墳丘は小規模で、竪穴式石室の主体部をもち、副葬品のない円墳であったことが確認されている。両墳とも6世紀前半期の構築になるものと推定される。主体部構造を異とするものの、奥原第21号墳、街道東I、II号墳との間には墳丘規模、副葬品の皆無という点で共通する様相がうかがえる。6世紀前半の段階で、すでに、榛名山南麓地域に竪穴系の主体部を持つ小規模墳丘の円墳からなる古墳群の形成が進んでいたことは明らかであり、本地域においてもその基盤にのっとなってそれを構成する成員の有力者層のなかに横穴式石室が採用されることになったと推定される。本郷稻荷山古墳は、そうした古墳の

一つであり、本郷地区における後期古墳群形成の初期にあって、中核となった古墳として位置づけられるものであろう。

(2) 本郷地区の古墳群と奥原古墳の形成

奥原古墳群の分布する榛名町本郷地区の烏川左岸沿いの丘陵性台地上には、ほぼ3地区に分れてまとまりのある古墳の分布がある。その一つは、本奥原古墳群とされるものであり、他は、本郷稲荷塚古墳の位置する的地場を中心に分布する一群と、その東方の下長を中心に分布する一群である。これらの古墳群については、かつて群馬用水地域埋蔵文化財発掘調査の時点で、奥原、的地場、大塚、下長の四地区の古墳群を本郷第1支群、本郷第2支群、本郷第3支群として扱っている。そして、これらの三つの支群間には相互に有機的に結びついた古墳群形成の展開が存在することを推定し、本郷第2支群内において調査した4基について、編年的位置づけを行った。そこで、本奥原古墳群(本郷第1支群)の形成について検討するために、まず、的地場・大塚地区古墳群(本郷第2支群)と、下長地区古墳群(本郷第3支群)についてとりあげてみたい。

① 的地場大塚地区古墳群(本郷第2支群) 奥原古墳群の東方約600mにある本郷稲荷塚古墳を西端に、その東方約350mの範囲に分布している。この地区には本郷大塚古墳も位置している。本郷稲荷塚古墳を中核として13基が確認され、そのうちA、C、D、E号墳の4基が調査された。ここから約350m離れた地に県指定史蹟の「しどめ塚古墳」がある。最大の規模をもつのはE号墳の本郷稲荷塚古墳(久留馬村第18号)で、その内容は前述している。6世紀前半から中葉に位置づけられる帆立貝形墳で、主体部は横穴式石室である。本郷地区古墳群の初現となった古墳である。

しどめ塚古墳(久留馬村第14号)は、径20mの円墳で、川原石積の両袖型横穴式石室である。主軸全長は8.60mで玄室は4.1mを計る。羨道部入口部は再構築され、前庭を施設している。副葬品には勾玉、切子玉、小玉、金環、金銅製透彫金具、刀、刀子、鉄鏃のほか、馬具類として、轡、鐙、金銅製杏葉、尾錠などがあり、前庭部から土師器碗、須恵器碗、高台付碗、蓋などが出土し、埴輪類も存在した。

A号墳は、径12mの円墳で、自然石乱石積の両袖型横穴式石室である。石室全長5.33mで、玄室長2.85mを計る。副葬品には勾玉、刀子等が残存した。埴輪はなく、墳丘部からは須恵器大甕破片が出土している。

C号墳は、径12~14mの円墳で、自然石乱石積の両袖型横穴式石室である。石室全長6.3m、玄室長は3.15mである。副葬品は、金環、大刀、刀子、鉄鏃、轡が残存した。埴輪はなく、墳丘部から須恵器甕が出土している。

D号墳は、径8mで、調査した第2支群内では最小規模である。自然石乱石積の両袖型横穴式石室は、原地表面を掘り込んで構築していたが、石室全長5.2m、玄室長2.3mで、前庭を設けた構造である。副葬品には、大刀、刀子、金銅製帯金具(巡方、丸柄)、須恵器大甕破片、長頸壺、杯等が人骨とともに残存した。

以上が、的地場、大塚地区古墳群内における内容の明らかな古墳であるが、それらに見る限り、まず、墳丘形態としてはE号墳のごとき帆立貝形墳が1基存在し、他は円墳であるが、しどめ塚古墳のごとく埴輪類をとまなうものと、A号墳、C号墳、D号墳のごとき埴輪類をとまなわないものとに類別できる。後者の場合、積土の墳丘内に主体部の横穴式石室が施設されたものと、原地表面を掘り込んで、主体部の横穴式石室の側壁根石を構築したもので、どちらかといえば小規模墳丘のものがあり、それは前庭を設けている。的地場、大塚地区古墳群にあっては(I類)袖無型横穴式石室、埴輪樹立の帆立貝形墳。(II類)両袖型横穴式石室、埴輪樹立円墳。(III類)両袖型横穴式石室、円墳。(IV類)前庭付両袖型横穴式石室、円墳。(V類)掘込み構設、前庭付両袖型横穴式石室、円墳。の5類型に分類できる。

② 下長地区古墳群(本郷第3支群) 的地場、大塚地区古墳群の東方で、丘陵性台地が終焉する地から烏川の下位段丘面にかけてほぼ東西300m、南北200mの範囲に分布する。いずれも横穴式石室をとまなう円墳を推定できるが、この地域での埴輪を樹立した古墳は、群馬用水地域埋蔵文化財調査の時点では確認されていない。総覧では、この地区での古墳数は22基を数えているが、その多くは、小規模な墳丘をもって残存している。的地場、大塚地区古墳群のものに比して、小規模墳が主体を占めているという傾向がうかがえる。それに見るかぎり、下長地区古墳群の形成は、的

場、大塚地区古墳群において類別した(Ⅲ類)～(Ⅴ類)に類推できるものが主体を占めていたと思われる。

③ 奥原地区古墳群(本郷第Ⅲ支群) 本調査の対象となった奥原古墳群で、調査時には57基が確認できた。そのうち36基を調査したが、それらに見られる分布の状況は、南北約320m、東西約230mの範囲に密集しており、なかでも群内最大の墳丘規模(直径25.3m)を誇る53号墳が、中央に近く位置し、2位の墳丘規模(直径22.5m)をもつ49号墳が、その東側に隣接し、第3位の墳丘規模(直径16.7m)の3号墳が、49号墳の東南位に隣接して位置している。この3基の古墳に囲まれた南側には分布の空白地区が存在する。その位置は、分布範囲のほぼ中央にあたり、意識的に確保された共有のスペースであった可能性も考えられるが、結論づける証拠を発掘調査によって得ている訳ではない。いずれにせよ、奥原古墳群の主要3古墳の南面に設けられているという点では意識的に構築を避けた区画であった可能性は考えられよう。とすると、奥原古墳群形成の初現に位置づけられるのは53、49、3号墳の可能性が強くなる。規模が抽きこんでいるということもさりながら、これらが奥原古墳群の中核となっていたことは間違いないであろう。奥原古墳群にあっては、その形成の初期にあっては規模の大きなものがつくられたが、時代を経るにしたがって墳丘規模の縮小が顕著にあらわれ、各古墳間の墳丘規模に等質的な方向をたどり、その構築数も増加するという傾向がうかがえる。その出現の時期を、他の地区の古墳群に対比してみれば、本郷第2支群として把握した的場～大塚地区で、5類型に分類されたうちの前半のⅠ類、Ⅱ類に対応する内容のものは存在しない。Ⅲ類の埴輪類の樹立の風習が衰退した以降の両袖型横穴式石室をもつ円墳である。基本的には、本郷第2支群におけるⅢ類の両袖型横穴式石室の円墳、Ⅳ類の前庭は両袖型横穴式石室の円墳、Ⅴ類の掘込み構設前庭付両袖型横穴式石室円墳の3形態を中心に、そのバリエーションをもって出現している。それらの古墳は、53、49、3号墳を中核に周囲に構築の輪をひろげ、確認された古墳の分布数でも65基という大群集墳に成長した様相がうかがえる。すなわち、奥原古墳群の出現に先き立って、本郷地区には、本古墳群内に発見された竪穴系主体部をもつ円筒列配設の小円墳の24号墳が形成する古墳群の出現を嚆矢として、次いで的場～大塚地区に横穴式石室を主体部とする古墳群の形成がはじまったが、それが展開する過程において奥原地区と下長地区とに新たな古墳群の出現を見るようになったことが推定できる。その3地区を中心に発展的に展開した古墳群の形成の時期は、53号墳等によって比定される7世紀初頭の頃にあったとすることが妥当であろう。

(3) 奥原古墳群の形成の編年

各古墳の特徴は、主体部の横穴式石室によく示される。その平面プランと構造の相違から、8類型に分類できた。

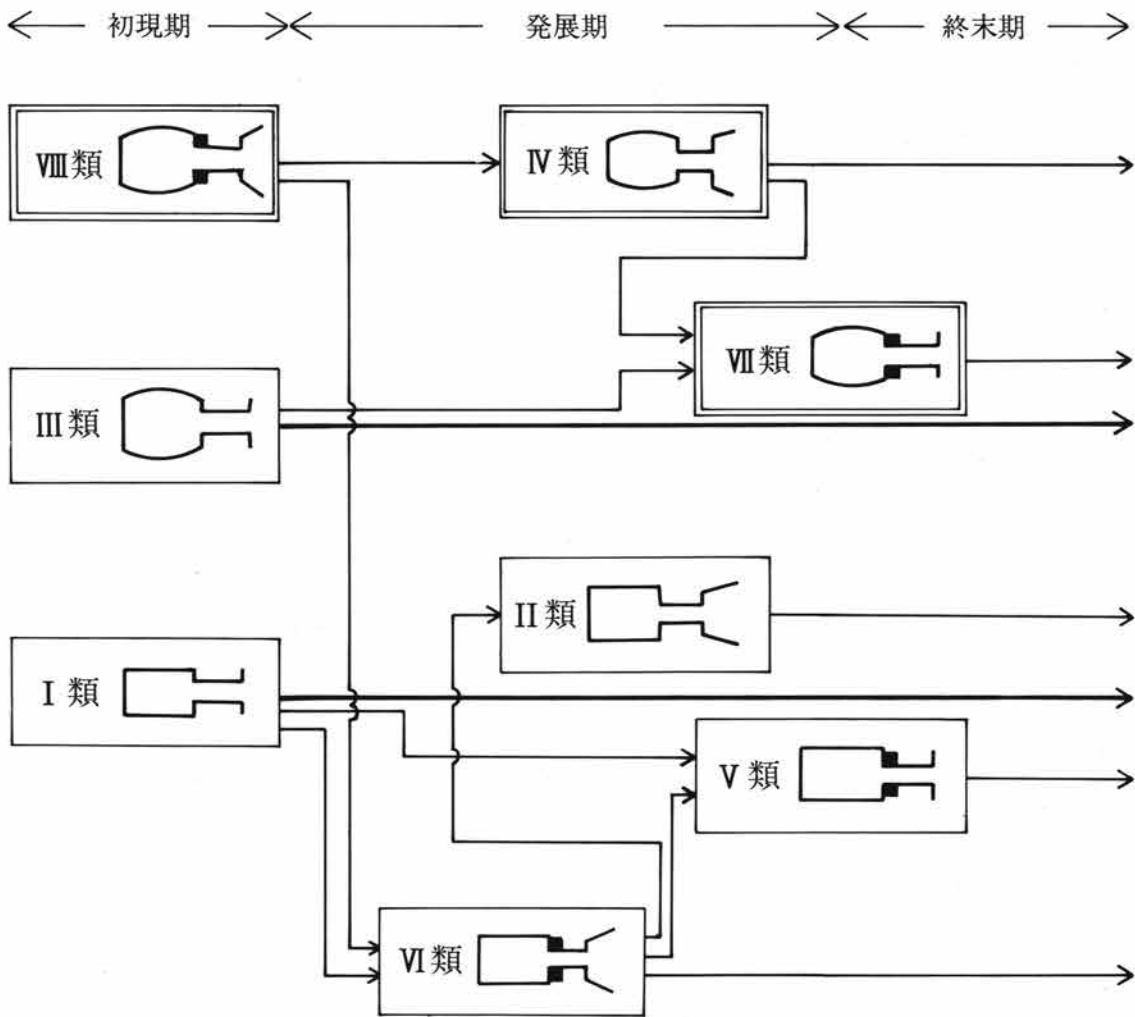
- ① 第Ⅰ類 ほぼ矩形プランの玄室をもつ両袖型横穴式石室。13、14、18、22、27、30、59、60、63号墳の9基である。それらの分布域は、西側半分の区域に存在したが、必ずしも一カ所に集中するものではない。
- ② 第Ⅱ類 ほぼ矩形プランの玄室をもつ両袖型横穴式石室、前庭を施設する。3、35、37、62号墳の4基である。その分布範囲は53号墳の西北に2基、南南東位に1基、東方に1基が存在し、あたかも53号墳を中心に分布する。
- ③ 第Ⅲ類 胴張矩形プランの玄室をもつ両袖型横穴式石室。10、26、52号墳の3基が確認された。
- ④ 第Ⅳ類 第Ⅲ類の胴張矩形プランの玄室をもつ両袖型横穴式石室で、前庭を施設する。5、7、9、11、38、64号墳の6基の存在が確認できた。いずれも53号墳の南方の地区に集中分布する。
- ⑤ 第Ⅴ類 第Ⅰ類に分類された矩形両袖型横穴式石室であるが、玄門を有するもの。8、65号墳の2基の存在が確認できた。その分布する位置は東南縁の地区で、最外縁の地を占めている。
- ⑥ 第Ⅵ類 第Ⅱ類に分類された前庭を施設する矩形両袖型横穴式石室であるが、その玄門を有するもの。6、15、23号墳の3基の存在が確認できた。それらの分布する位置は南部分に集中する。
- ⑦ 第Ⅶ類 第Ⅲ類の胴張矩形プランの玄室をもつ両袖型横穴式石室であるが、玄門を有するもの。25号墳の1基が確認されたが、その位置は西南寄りである。
- ⑧ 第Ⅷ類 第Ⅶ類に分類のものに、前庭が設けられたもの。33、49、53号墳の3基であるが、その分布する位置は中央で東西に並んで位置する。また、中核を占める49、53号墳の2基が、本類に属する点も注意される。

以上、8種類の横穴式石室は、玄室形態の相違から、まず、I類とIII類の胴張矩形プランの玄室をもつ横穴式石室とが基本的形態として位置づけられる。この2種の類型を踏えて分類すれば、I、II、V、VI類と、III、IV、VII、VIII類の二つのグループに系統づけられる。前者は58%、後者は42%を占めており、前者がやや優位を占めている。

一方、I、III、V、VII類の前庭部をともなわないグループにたいして、II、IV、VI、VIII類の前庭部を施設した二つのグループに系統づけられる。前者は48%、後者は52%を占めている。

また、I、II、III、IV類の玄門を構設しないグループにたいして、V、VI、VII、VIII類の玄門を構設している二つのグループに区分できる。前者は71%、後者は29%で、前者が圧倒的に多い。

このことは、本古墳群内において、8種類の横穴式石室の変遷が、形式発展的にとらえられるものではなかったことを示している。I類の占める割合は全体の29%と最多であり、小規模墳のものに多いという点では、奥原古墳群を生んだ地域社会においてより高い普及率を示し、その採用されていた期間も他のものに比べ長期にわたっていたものと推される。III類も小規模のもので10%を占めている。I類に比してその存在する率は低いが、I類とは共存する傾向をもって採用されたと思われる。ところで、VIII類の占める割合は10%であるが、その本古墳群における占地の状況から見て、それが中核的位置を占めている点から、古墳群形成の初期に位置づけられるものである。とすると、VIII類に従うかたちで、I、III類の出現があり、このVIII類とI、II類の存在を基本に踏えて、VIII類が主導する形をとって、次図に示すような古墳群形成の展開をみたものと考えられる。



第185図 奥原古墳群の横穴式石室の変遷

(4) 奥原古墳群の年代

奥原古墳群のうち、竪穴系主体部を有し、埴輪円筒列を樹立した21号墳からは、土師器碗が出土しており、その土器形式の分類から、6世紀前半から中葉に位置づけられるものであり、当該地域内最古の古墳である。この古墳が奥原古墳群の大多数を占めている53号墳にはじまる横穴式石室を有する古墳群に発展するものであるが、その関係は明らかにし得ない。しかし、この第21号墳と、奥原古墳群の中核を占める53号墳との間には、時間的なへだたりがあり、その成立にいたる過程には再形成があったとすべきであろう。古墳群を形成した地域社会の変貌が、その過程にあったと認められよう。そうしたなかで、53号墳の出現した時代がいつごろであったのか、同古墳から発見の須恵器類を見るかぎり、それは6世紀末～7世紀初期に位置づけられるものであり、本古墳群の出現の時期は、7世紀前半にあったものと推定してよいであろう。53号墳が前庭を施設した横穴式石室を有したものであることから、従来の群馬県内の横穴式石室の編年から見ると、時期的に古くなりすぎるきらいはまぬがれないが、53号墳の須恵器の編年からあえて、第53号墳には7世紀前半の年代を比定してみたい。

この53号墳と同じ時期に比定される須恵器類を出土した古墳には3、15、49号墳等があり、横穴式石室の形態が必ずしも一形式に類別できるものに限定されている訳でもない。このことは、奥原古墳群形成の比較的初期の段階で、古墳群形成のうえに、地域社会の成員である家族の間に一定の秩序が確立していたことを示しているといえてよいであろう。同一家系の家族は同一系譜に連なるタイプの横穴式石室を伝統的に採用した可能性が強い。地域社会を構成する家族の社会的、経済的な地位、実力を反映して個々の古墳が営なまれたことによると思われる。

このようにして構築された奥原古墳群の古墳には、明らかに時代を異とする須恵器類が二次的に供献されている例があり、それらのなかには、宝珠つまみのつく蓋杯や、高台付碗、葉壺形壺などを出土しているものがある。7世紀末から8世紀初期に位置づけられるものがあり、その古墳の構築の年代は別として、墳墓としては8世紀代まで営造されていたものであることの明らかなものが存在する。2、13、18号墳等である。これらの古墳のうち、供献された須恵器類の形式が単一的様相をもって出土している13号墳について見ると、その構築は7世紀末に位置づけてよいものである。

以上のごとき観点から奥原古墳群の形成された年代は、7世紀前半から7世紀末の約一世紀におよぶ時期にわたるものとして位置づけるのが妥当と考え本報告書の総括としたい。

- 参考文献 梅沢重昭ほか 『群馬用水事業地域埋蔵文化財分布調査報告書II』1970
// ほか 『群馬用水土地改良地域埋蔵文化財発掘調査報告書』1970
箕郷町誌編纂委員会 『箕郷町誌』1975
梅沢重昭 「解説」『群馬県史 資料編3』1981

追 記

「VII、VIII、IX章」の文章内容の一部に執筆者間の意見の不統一がみられる。この点については報告書作成中に数回の討論をくりかえしたものの統一見解が得られず結局、各々の意見を尊重し今後の研究にまつという形にならざるを得なかったことによる。(編集者)

写 真 图 版



29・53号墳 墳丘 (西から)

奥原古墳群全景



33号墳 墳丘 (南から)



22・23号墳 墳丘 (南から)



3号墳石室 (南から)



3号墳 墳丘 (北東から)



5号墳石室 (南から)



6号墳・閉塞状況 (南西から)



6号墳石室・羨門及び羨道 (南から)



7号墳石室 (南から)



6号墳石室・女室及び玄門 (北から)



7号墳玄室・遺物出土状況 (東から)



8号墳石室 (南から)



10号墳石室 (南から)



10号墳石室 (南西から)



13号墳石室 (南から)



11号墳石室 (南から)



13号墳 玄室より遺物出土状況 (南から)



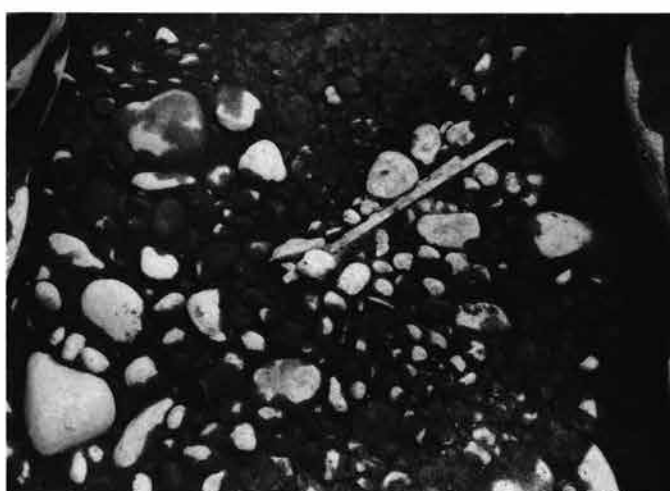
14号墳 墳丘 (南から)



15号墳玄室 (西から)



15号墳 墳頂・遺物出土状況



15号墳玄室・遺物出土状況 (北から)



22号墳石室・遺物出土状況 (右壁中央)



25号墳 墳丘 (南から)



25号墳玄室・遺物出土状況 (西から)



25号墳玄室及び玄門 (北から)



24・27・28・29・30・58・59号墳 墳丘 (南東から)



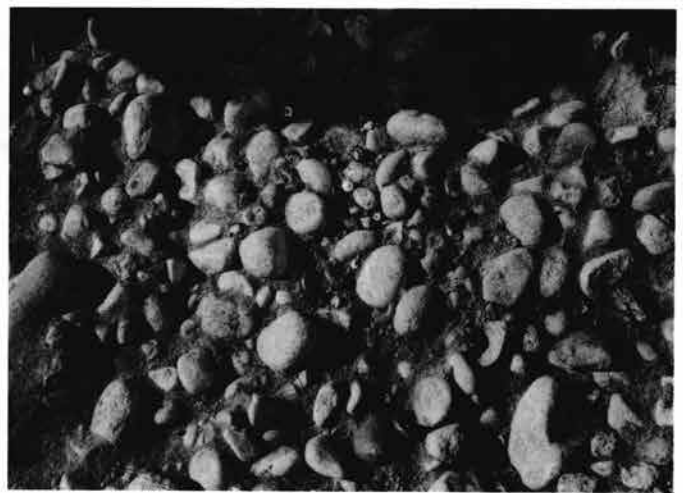
30号墳 墳丘 (南東から)



30号墳羨門・閉塞状況 (南から)



28号墳石室 (南東から)



28号墳玄室・遺物出土状況 (東から)



33号墳石室 (南から)



37号墳左壁裏込 (北から)



49号墳 墳丘 (南西から)



49号墳石室（南から）



49号墳葺石及び周堀（北東から）



49号墳玄門（北から）



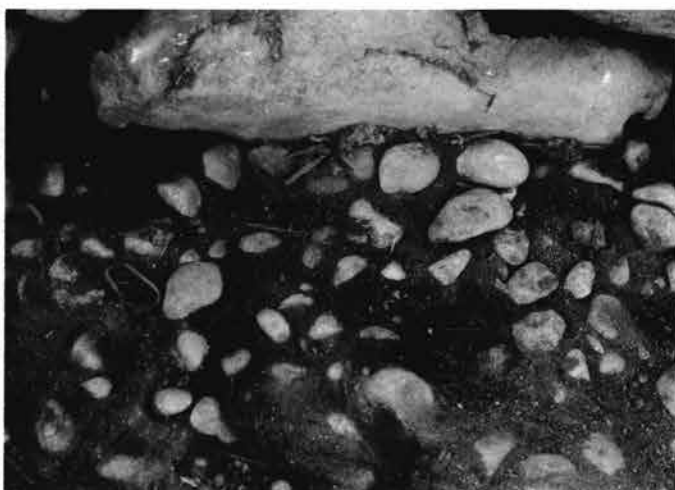
49号墳玄室・遺物出土状況（西から）



49号墳玄室・遺物出土状況（西から）



50号墳 墳丘 (南から)



50号墳玄室・遺物出土状況 (東から)



52号墳 墳丘 (南から)



52号墳石室 (南東から)



52号墳玄室・遺物出土状況 (西から)



53号墳前庭 (南から)



53号墳葬石 (南から)



53号墳 墳丘 (南西から)



53号墳女室



53号墳Nトレンチ (北西から)



60号墳 墳丘 (南東から)



60号墳玄室・閉塞状況 (東から)



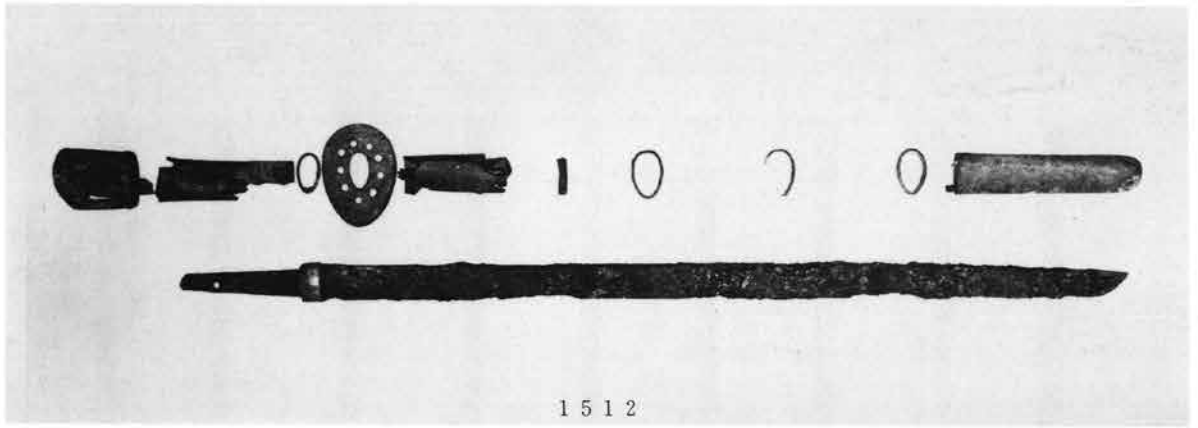
61号墳 墳丘 (南西から)



62号墳 墳丘 (南から)



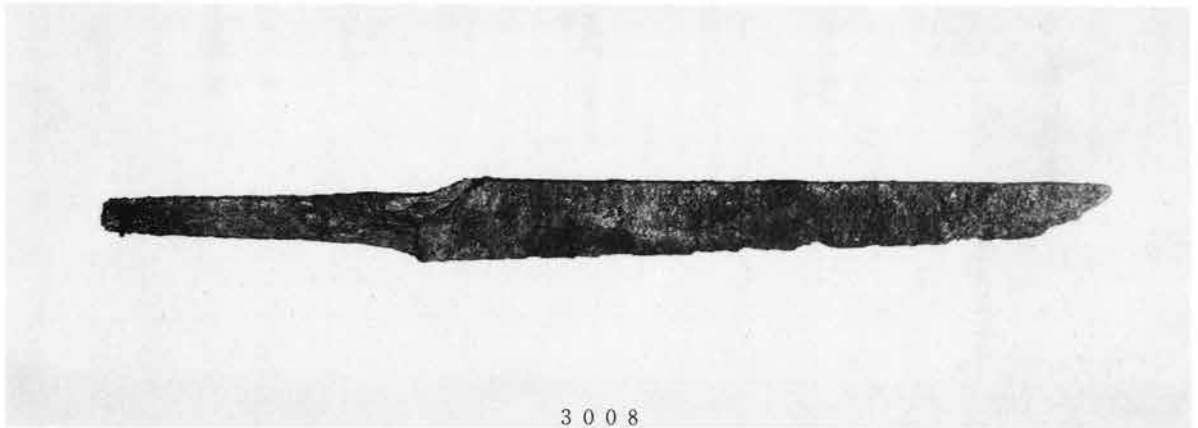
64号墳玄室・遺物出土状況
(西南西から)



1512

圭頭大刀

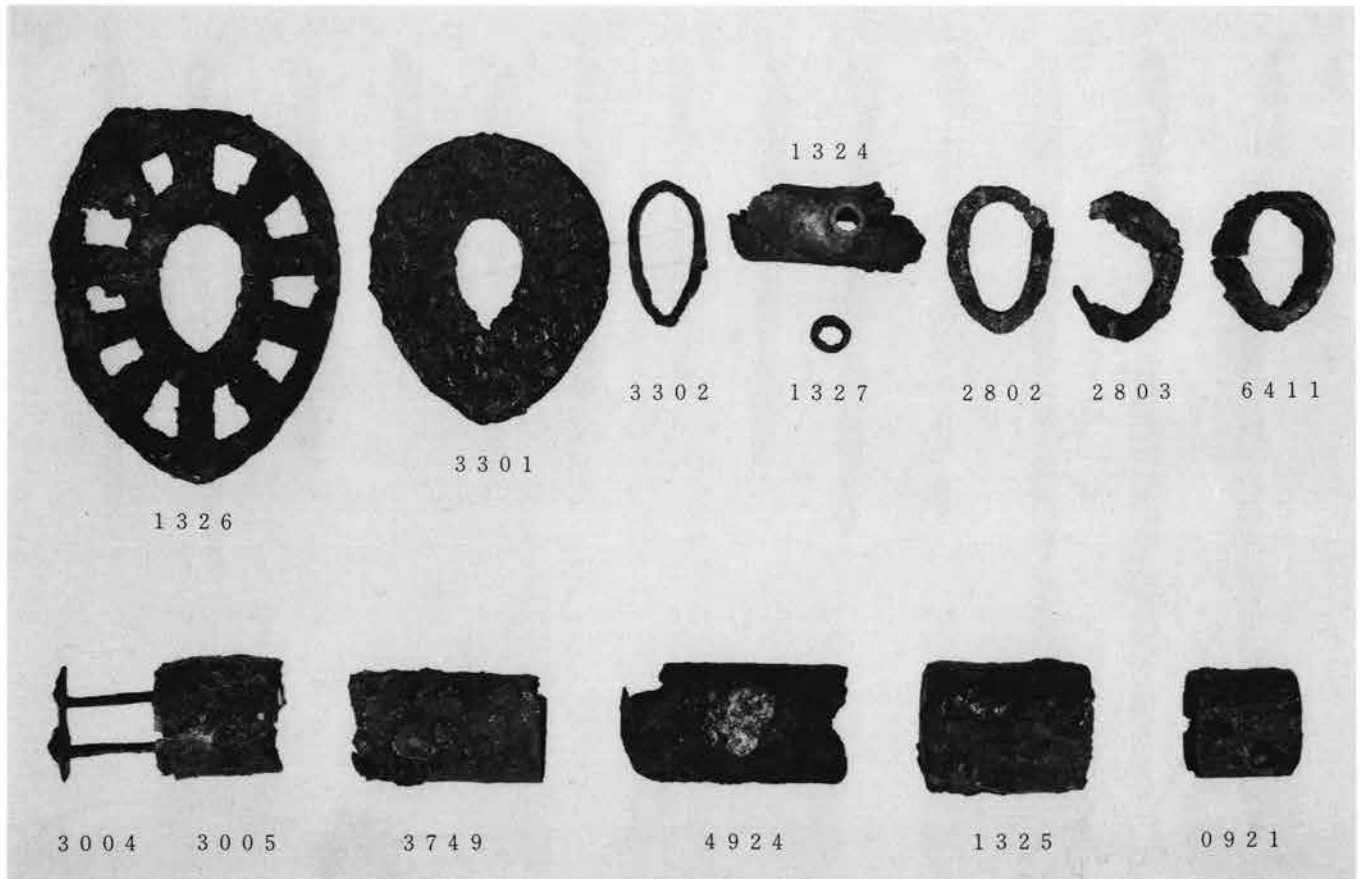
1



3008

小刀

2



1326

3301

3302

1324

1327

2802

2803

6411

3004

3005

3749

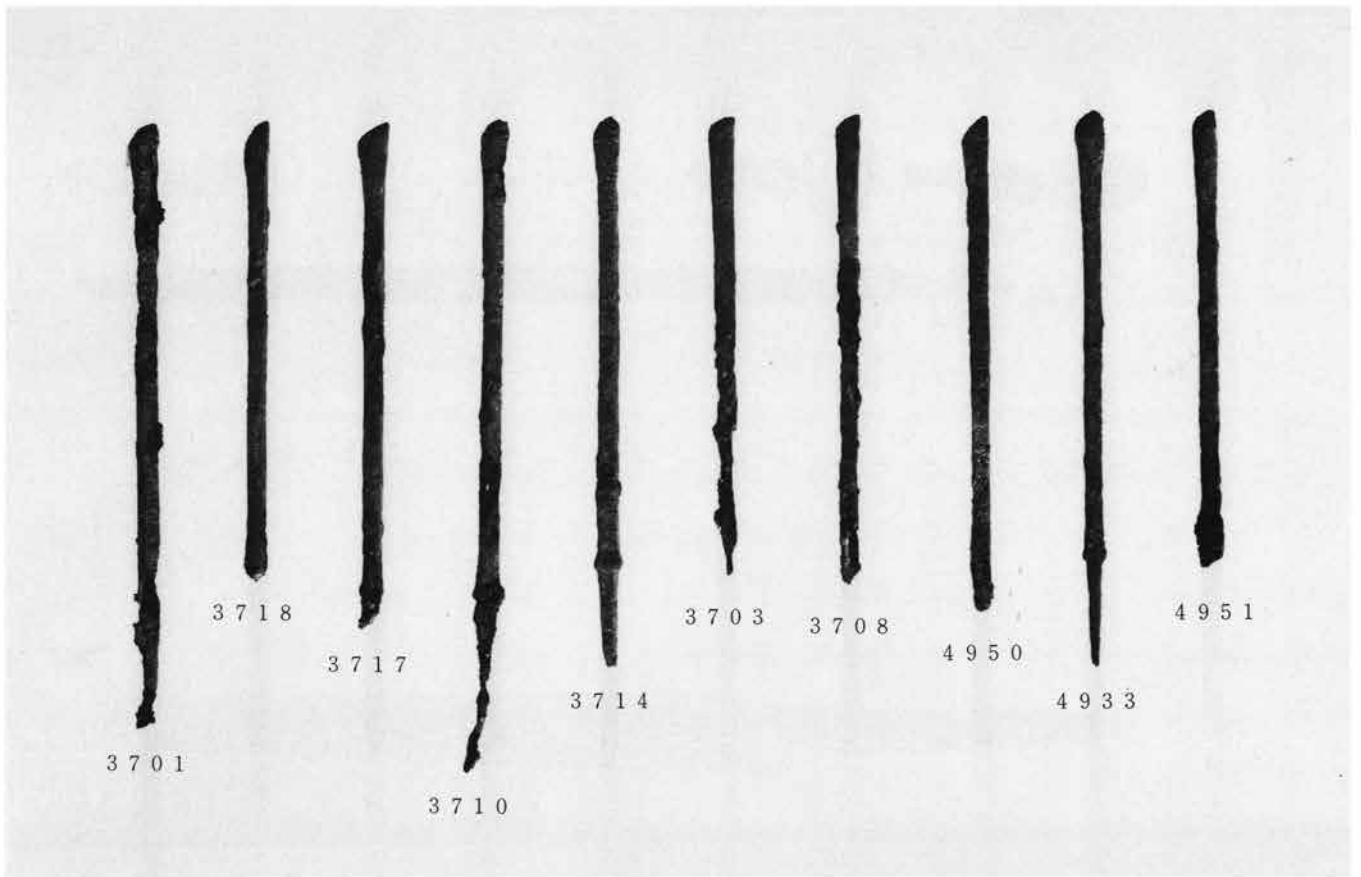
4924

1325

0921

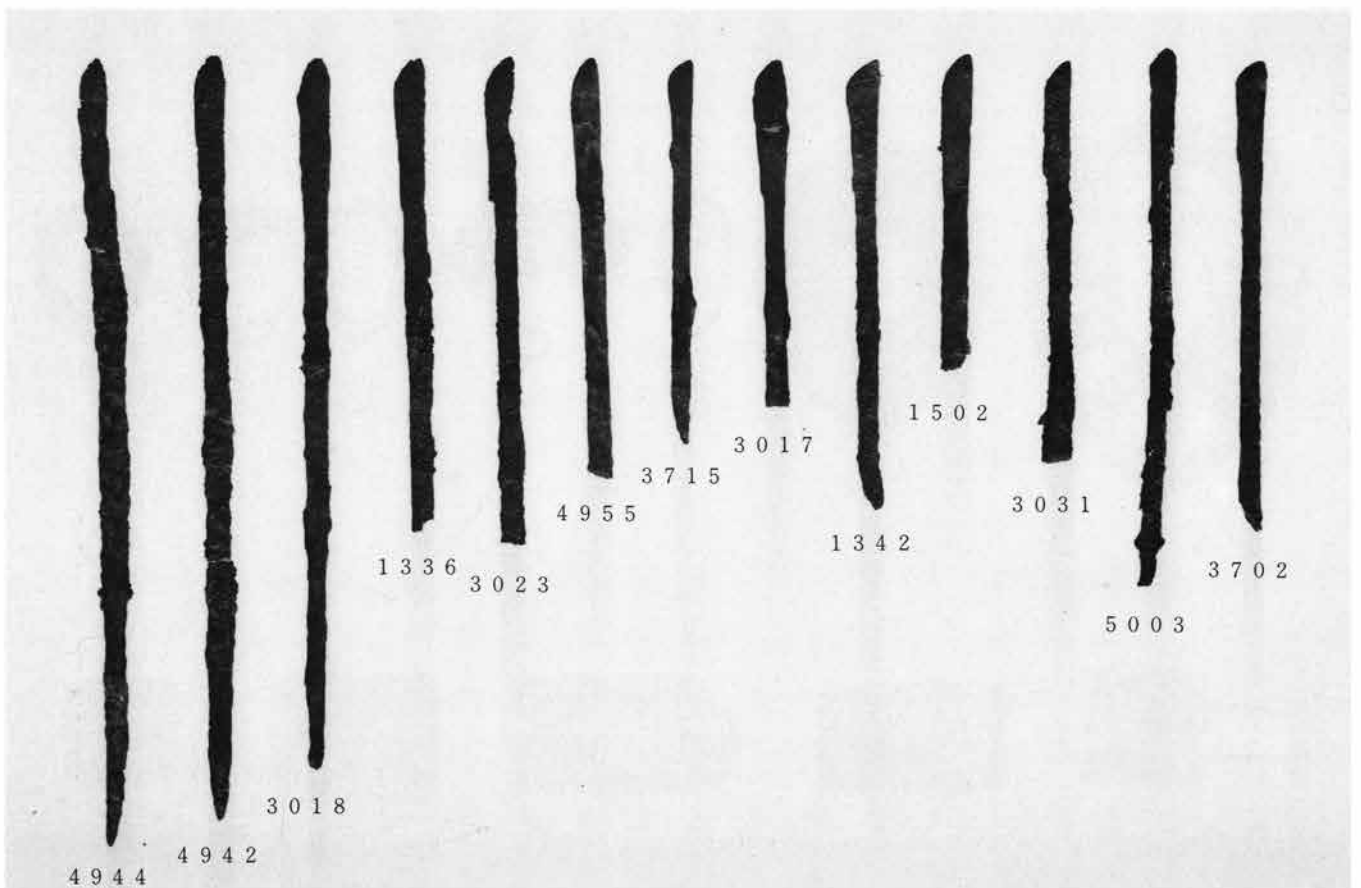
3

大刀 装具



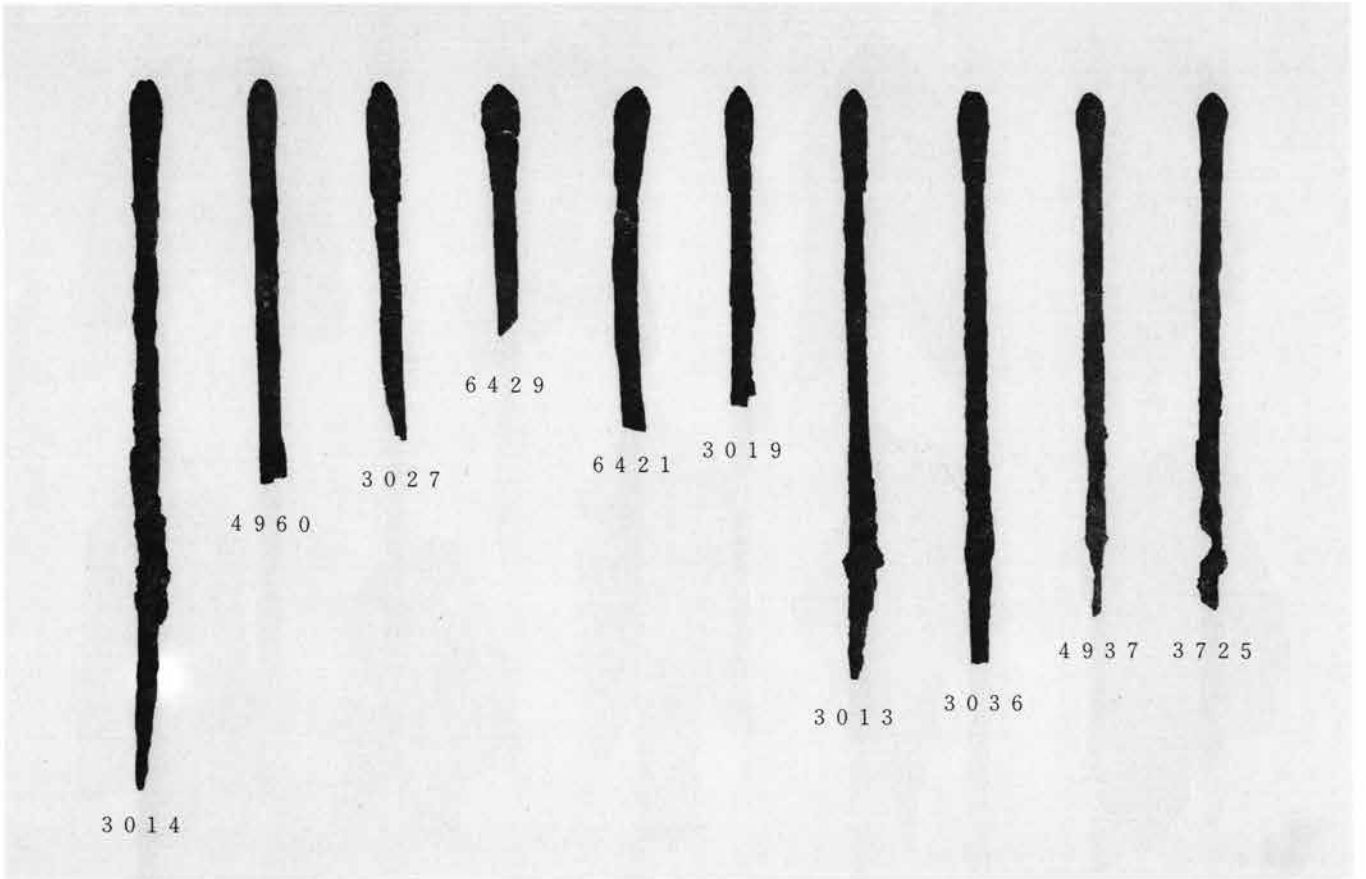
4

鉄鏃 I・J式



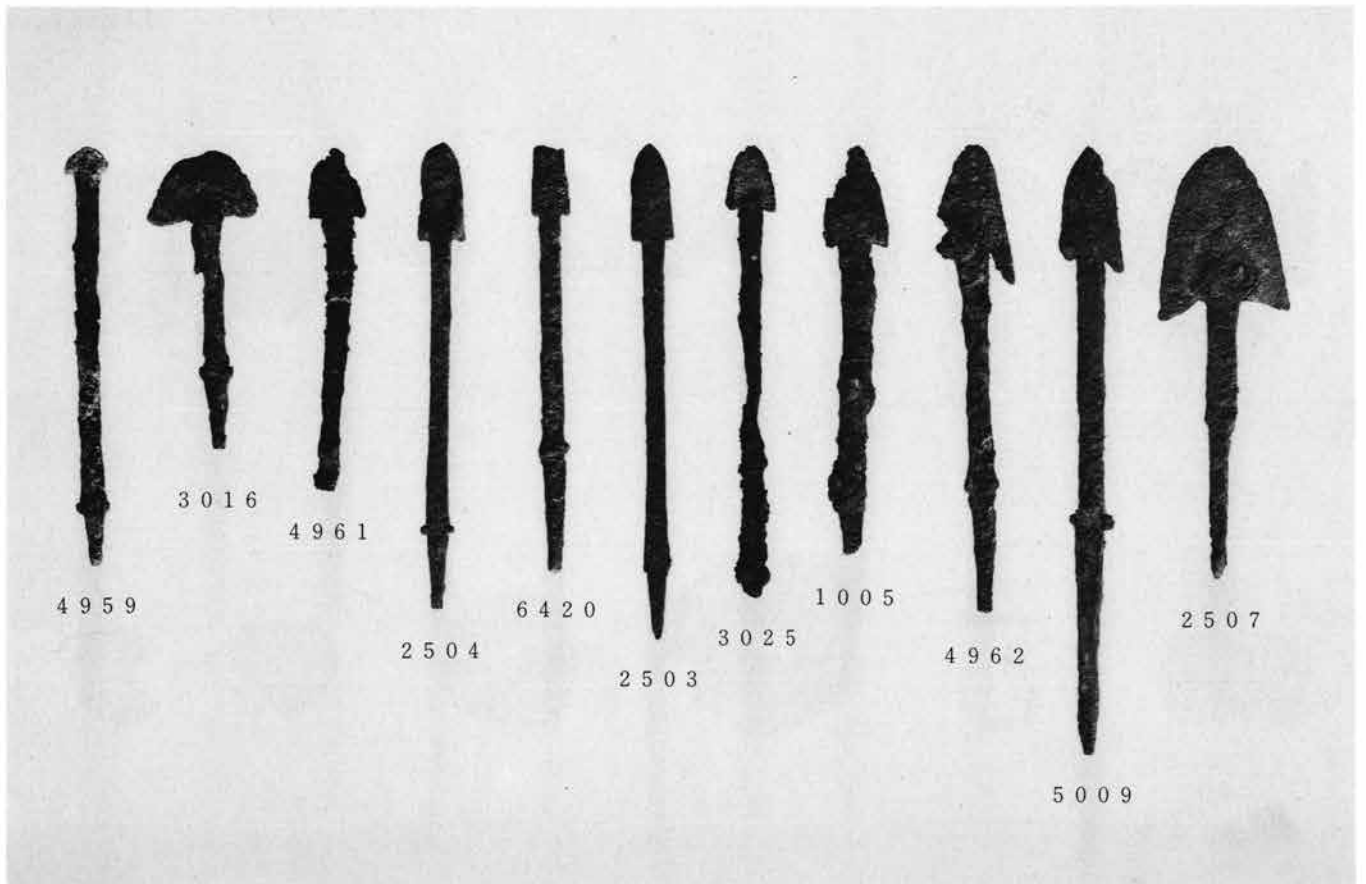
5

鉄鏃 L式



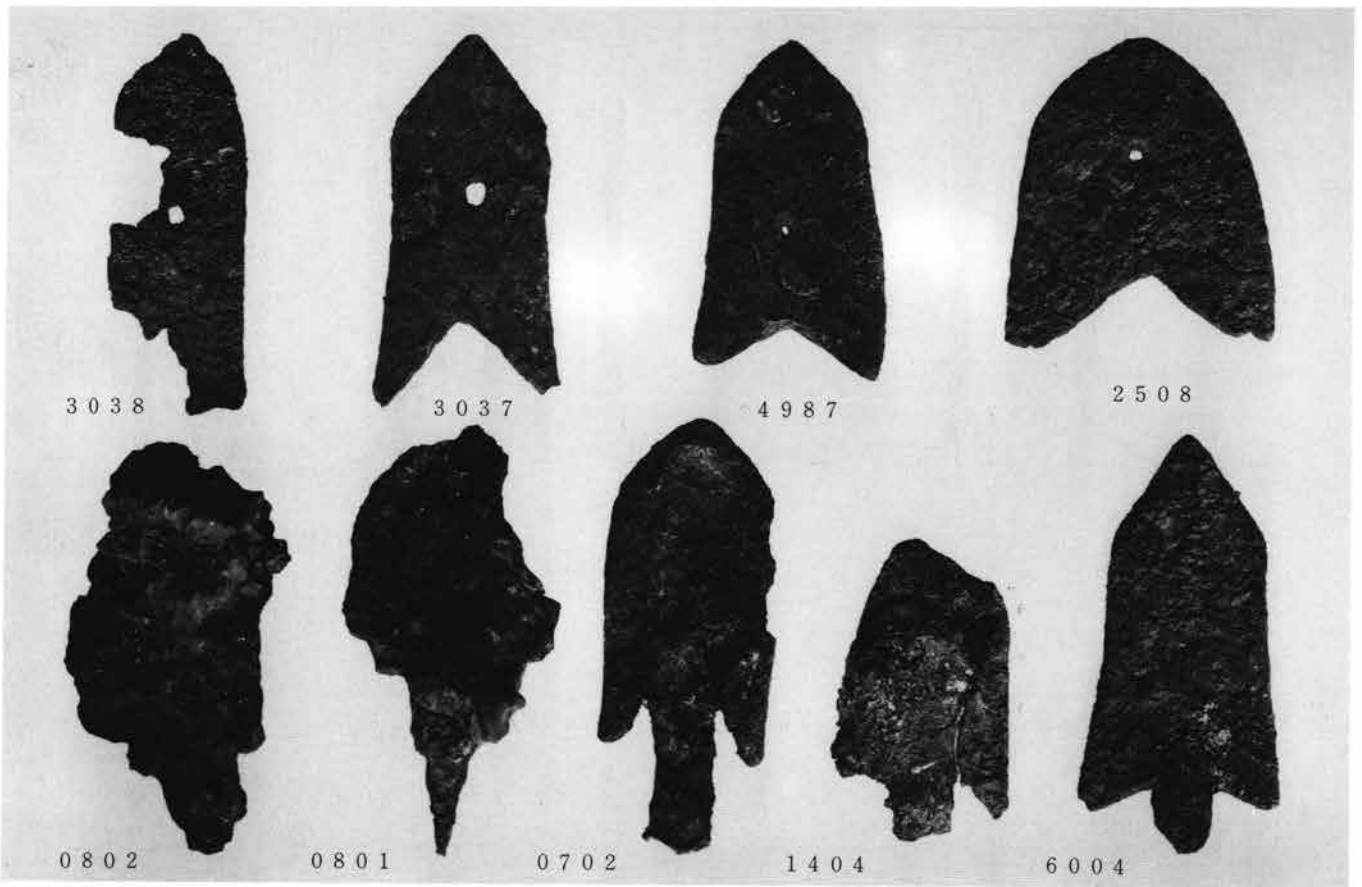
6

鉄鏃 M式



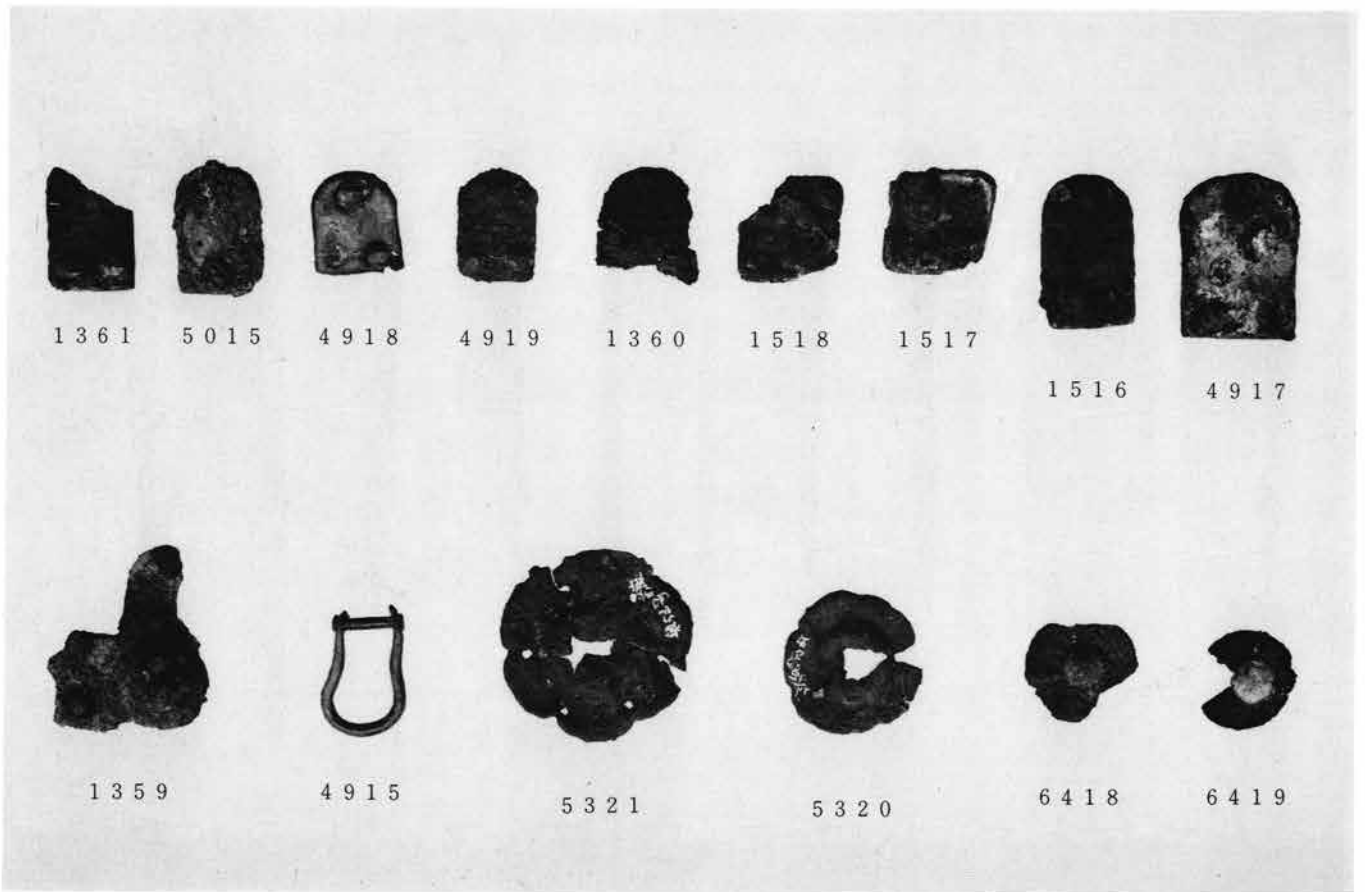
7

鉄鏃 E~H式



8

鉄鏃 A~D式



9

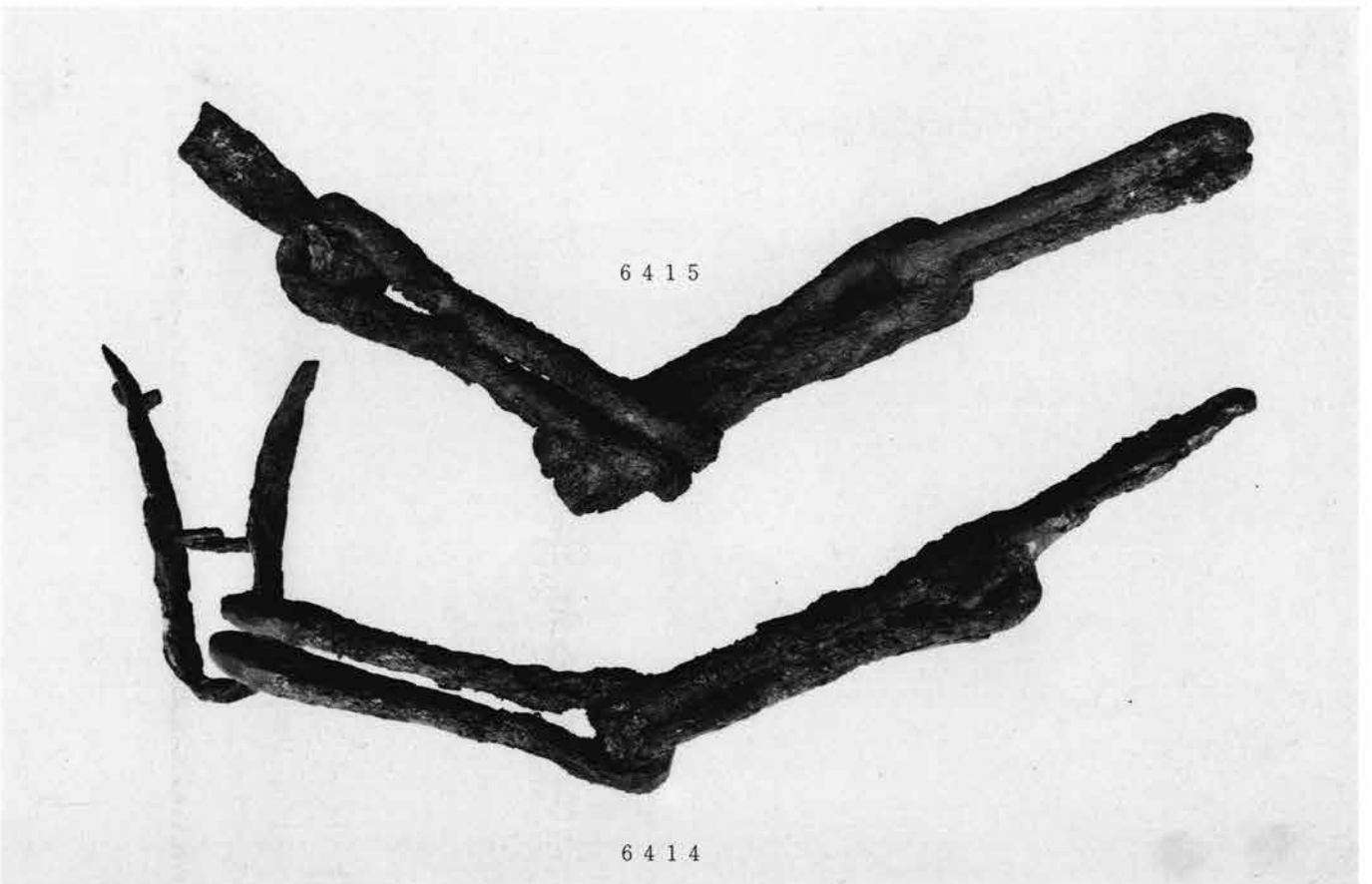
馬具・棺金具



6 4 1 3

10

馬具 轡

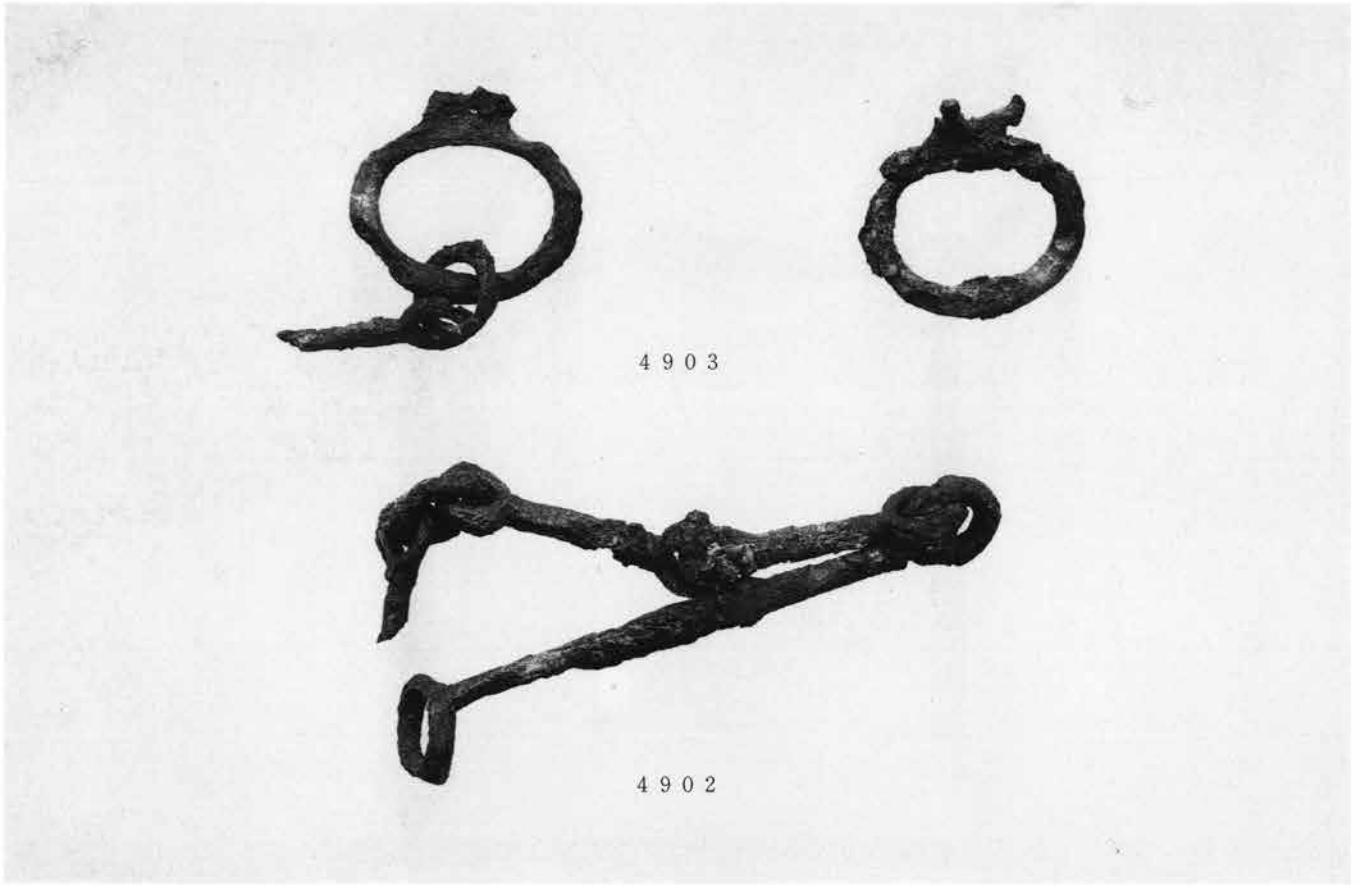


6 4 1 5

6 4 1 4

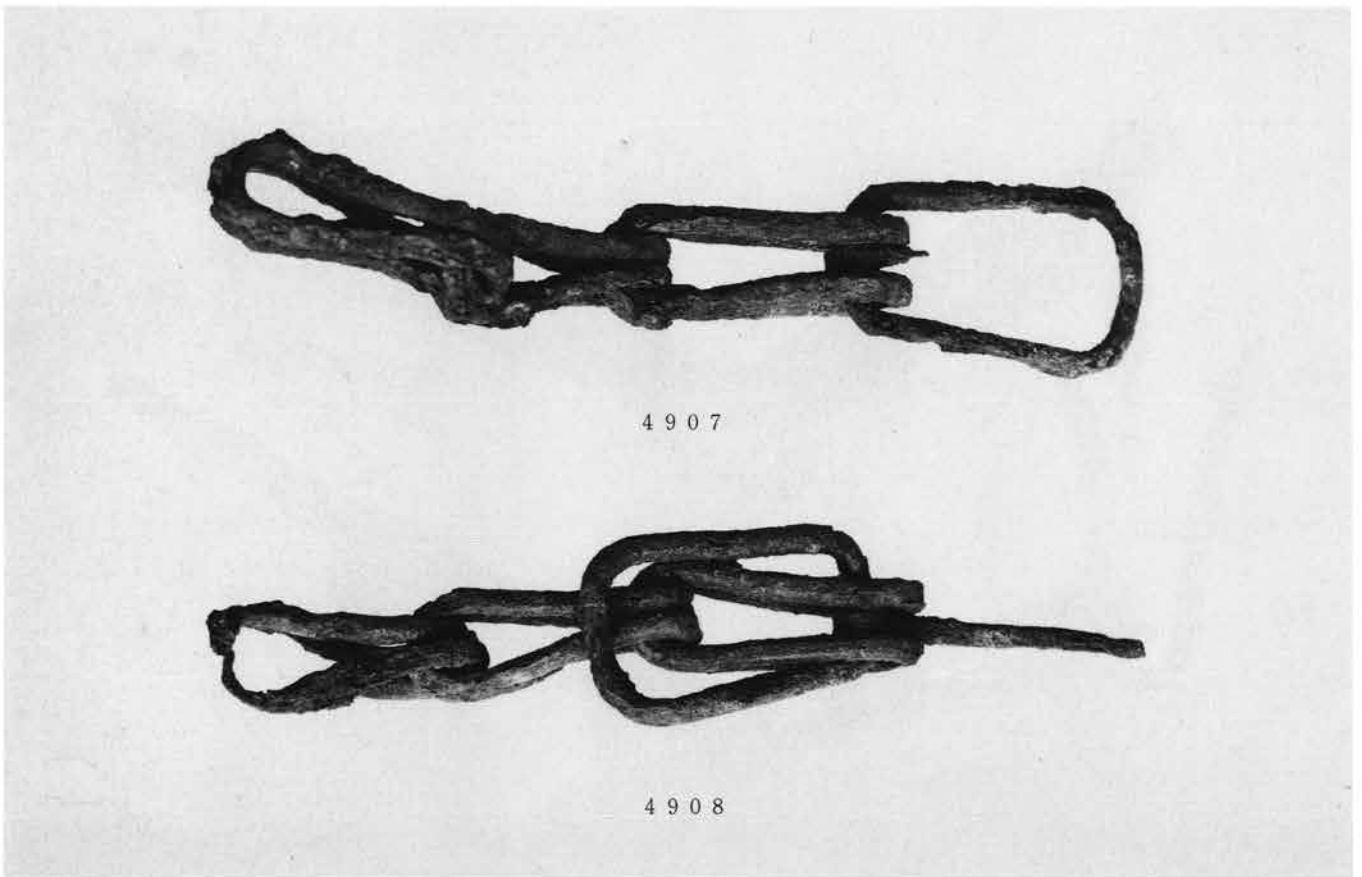
11

馬具 銜



12

馬具 轡



13

馬具 鐙



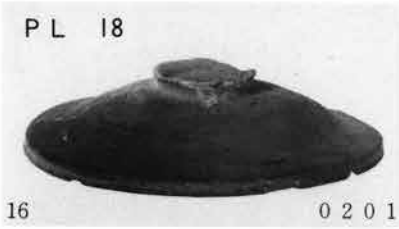
14

馬具 轡



15

馬具 轡



16

0 2 0 1



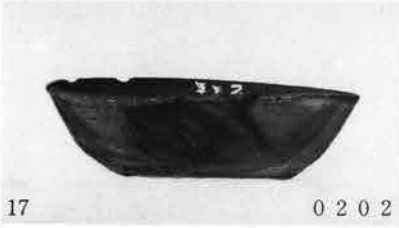
18

0 3 0 1



20

0 3 0 8



17

0 2 0 2



19

0 3 0 3



21



0 3 0 7



22

0 3 0 5



23

0 5 0 2



24

0 5 0 3



25

1 1 1 0



26

0 6 0 4

27



1105



28

1109



29

1106



30

1366



31

1367



32

1364



33

1371



34



1369



35

1575 36



1578



37

1570



38

1571 40



40



1574



39

1573



41

1576



42

2305



43

2102



44



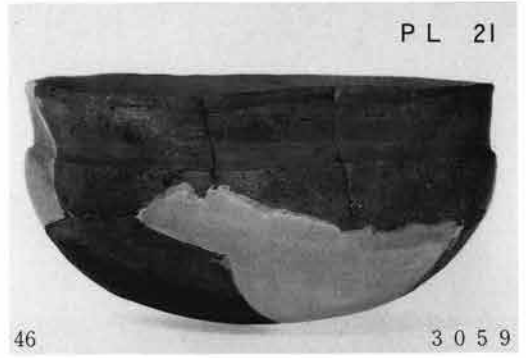
2201



45



2527 47



46

3059



3060



48



3066 49



3069



50



3070



51

3 0 6 5



52

3 0 7 2



53

3 0 7 1



54

3 0 7 6



56

3 0 7 3



55

3 0 7 7



57

3 0 7 5



58

3 7 5 5



59

3 7 5 6



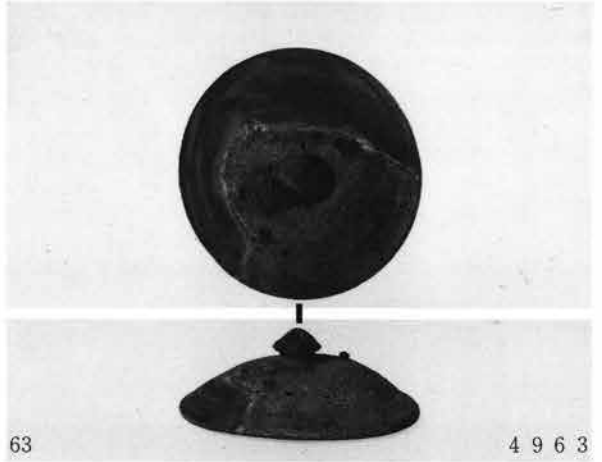
60

4501



62

4502



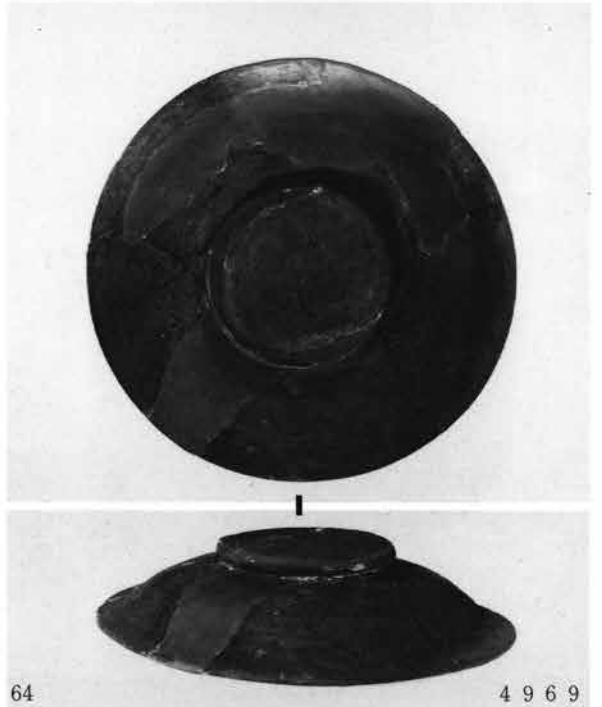
63

4963



61

4506



64

4969



65

4975



66

4990



67

4974



68

4979

P L 24



69

4 9 7 6



70

5 0 2 1



74

5 3 0 1



75

5 3 0 3



76

5 3 0 4



77

5 3 0 6



78

5 3 0 2



79

5 3 0 5



71

4 9 8 7



72

4 9 9 8



73

4 9 9 4



80

5 3 0 8



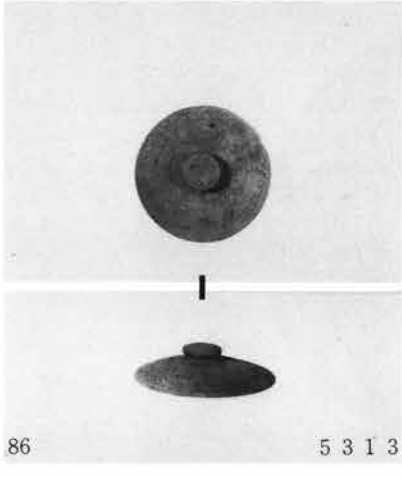
81

5 3 0 9



82

5 3 1 1

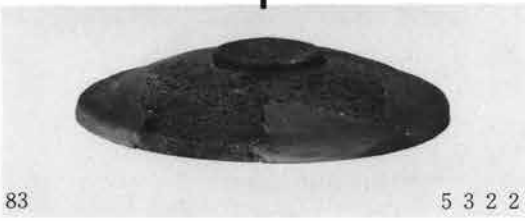


86

5 3 1 3

89

5 3 2 7



83

5 3 2 2

87

5 3 1 4

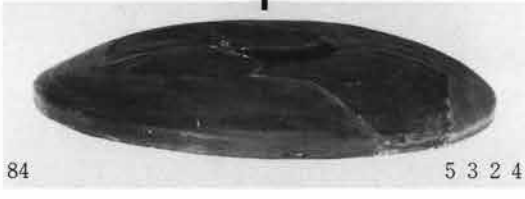


88

5 3 1 5

90

5 3 2 8



84

5 3 2 4

91

5 3 3 6



85

5 3 2 5



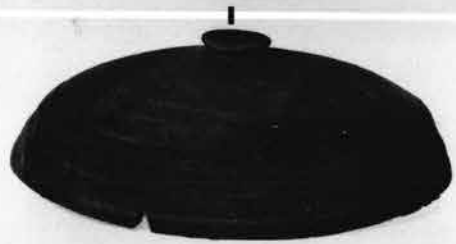
92

5 3 3 0



93

5 3 1 6



94

5 3 1 8



95

5 3 1 7



96

5 3 1 9



97

5 3 3 7



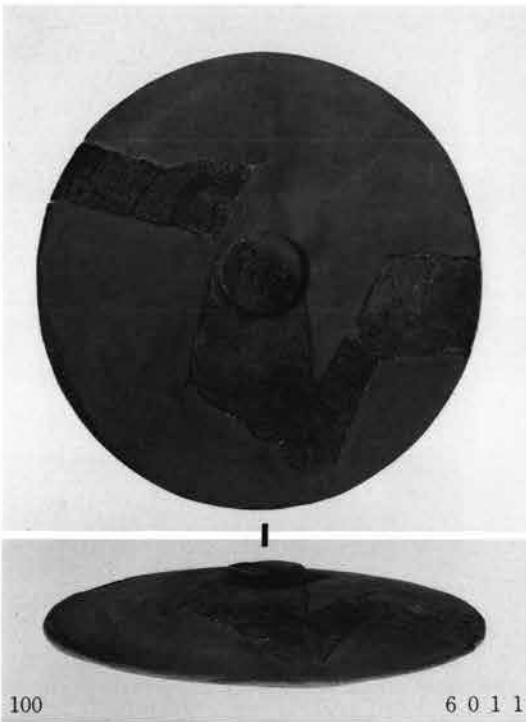
98

5 3 3 9



99

5 3 4 2



100

6 0 1 1



101

6 0 1 5



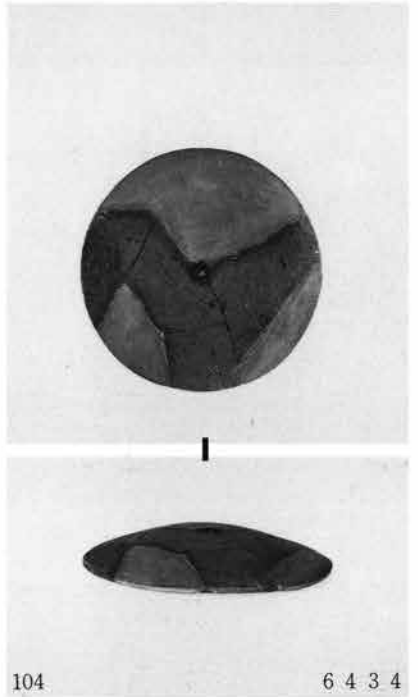
102

6 2 0 1



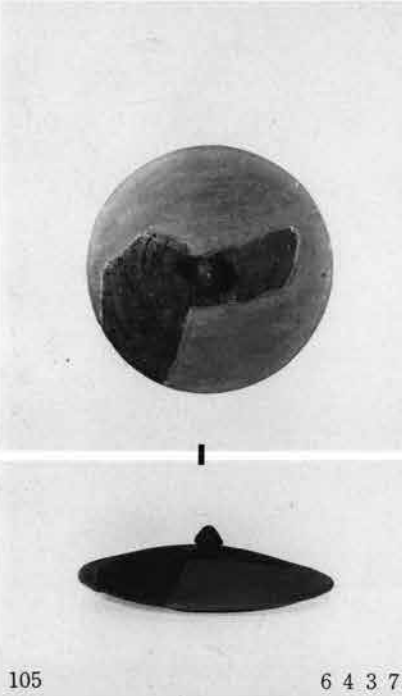
103

6 4 3 3



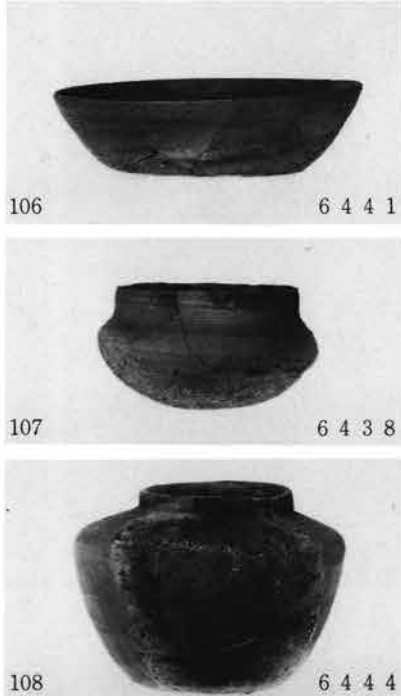
104

6 4 3 4



105

6 4 3 7



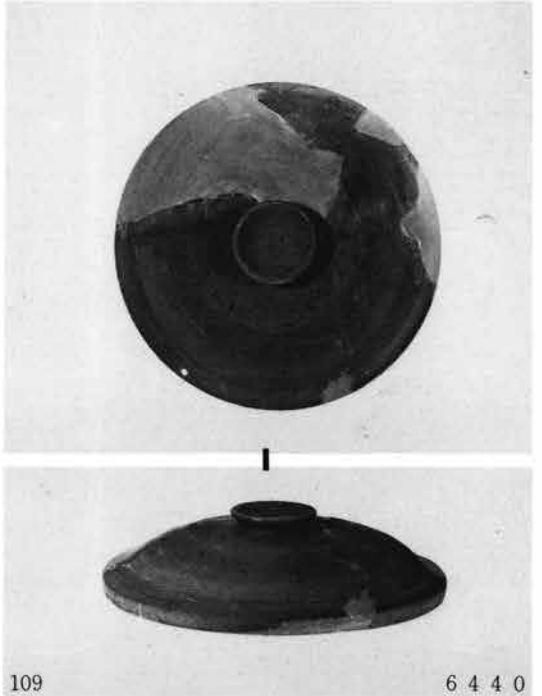
106

6 4 4 1



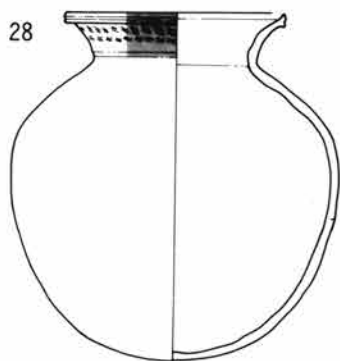
107

6 4 3 8



109

6 4 4 0

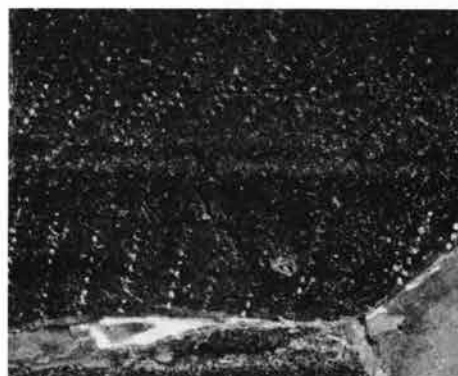


甕口縁文様模式図



1 刺突文 (1条)

1110



2 刺突文 (2条)

3077



3 波状文 (1条)

1575



4 波状文 (1条)

1576



5 波状文 (1条)

1578



6 口唇部 (1条)

3072

口縁部 (2条)



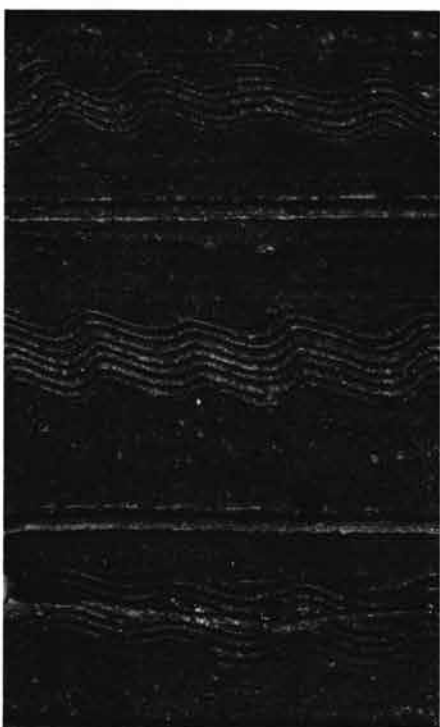
7 波状文 (2条)

3076



8 波状文 (8条)

3756



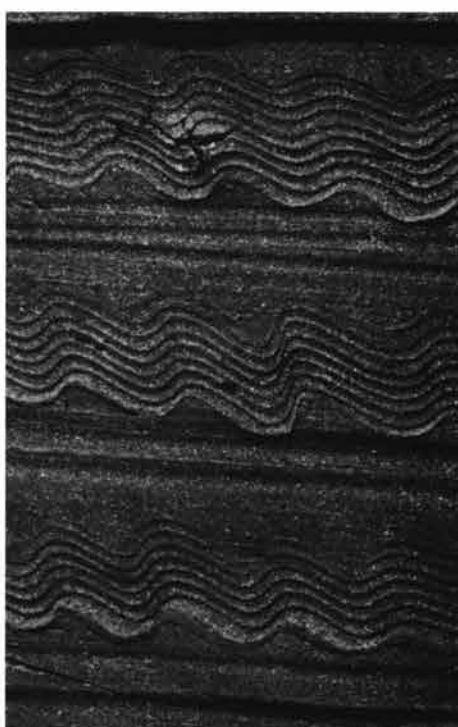
9 波状文 (3条)

4506



10 タテハケメ
波状文 (2条)

4991



11 波状文 (2条)

6015



写真1 奥原14号墳出土
壮年期女性頭蓋（前面）



写真2 奥原14号墳出土
壮年期女性頭蓋（左側面）

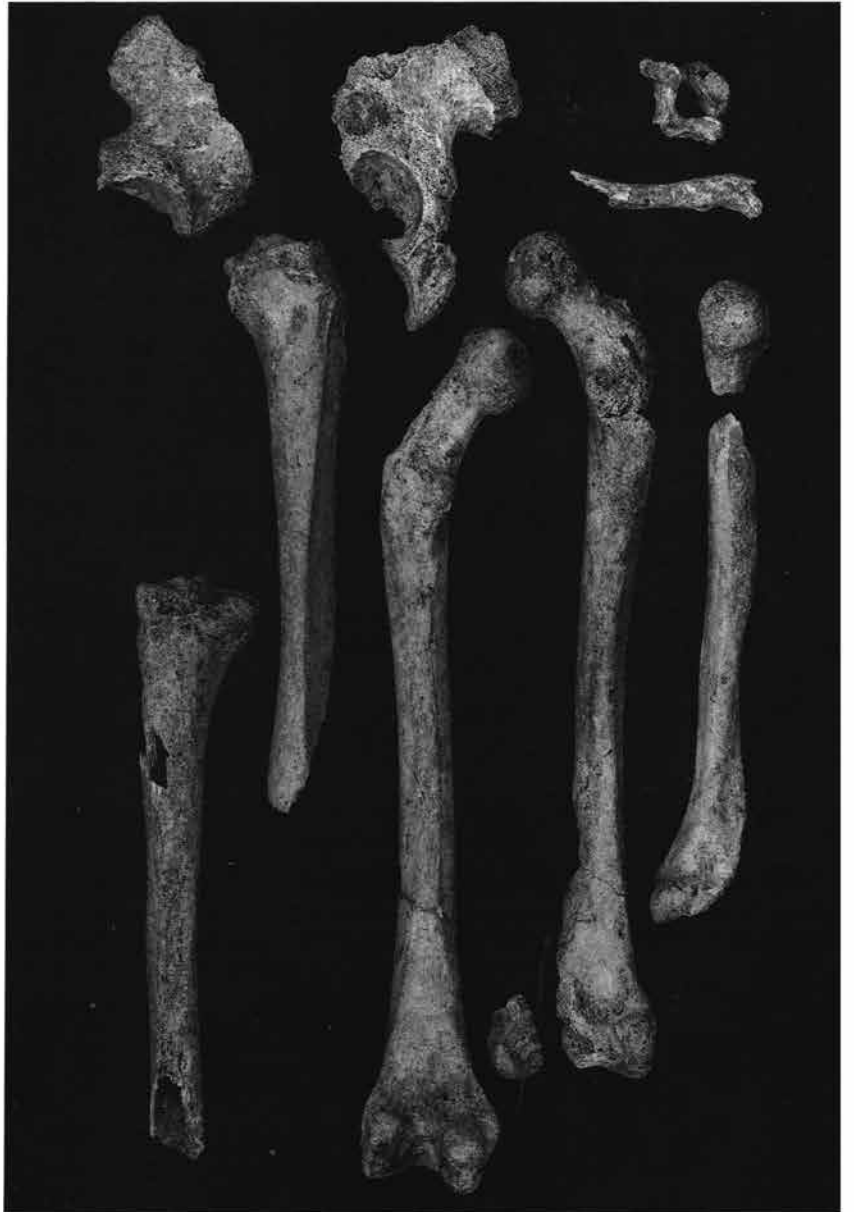


写真3 奥原14号墳出土
壮年期女性人骨（頭蓋以外）

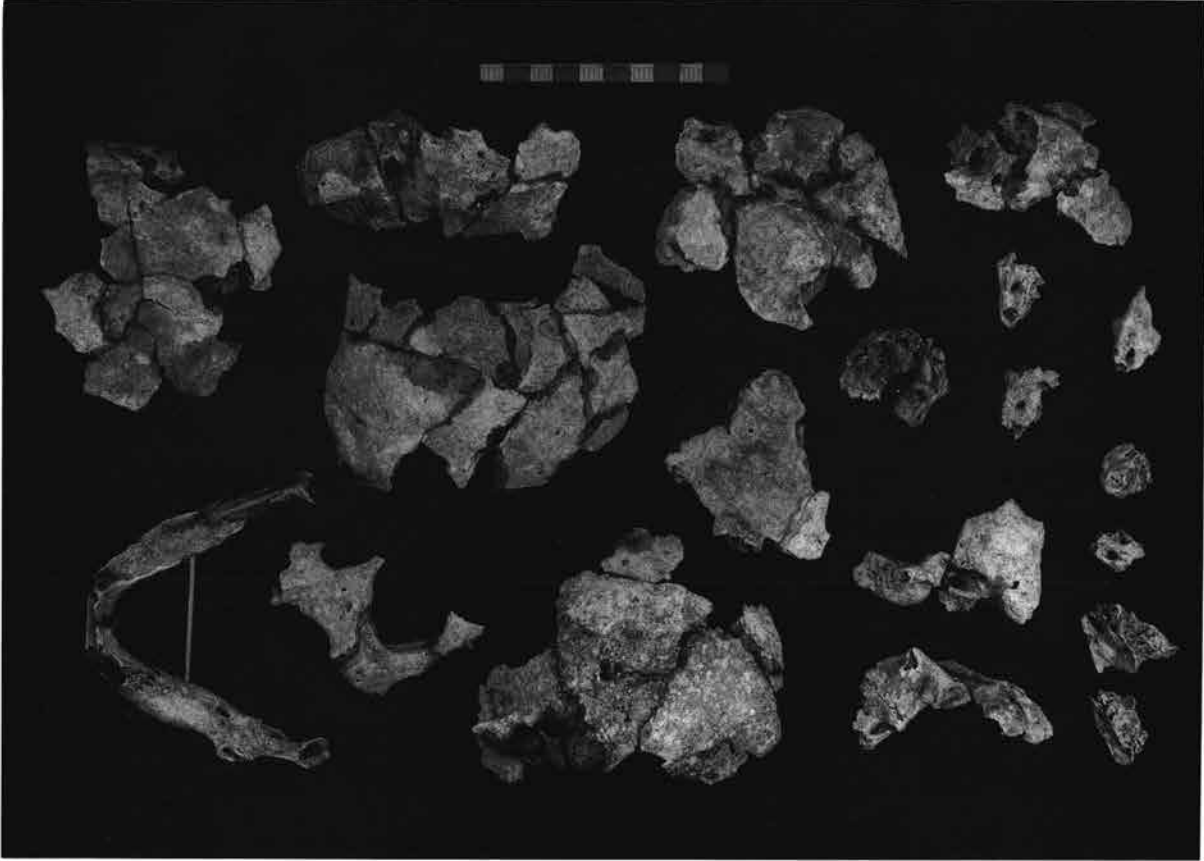


写真4 奥原14号墳出土の壮年期女性人骨(別掲)を除く5個体分の頭蓋骨。

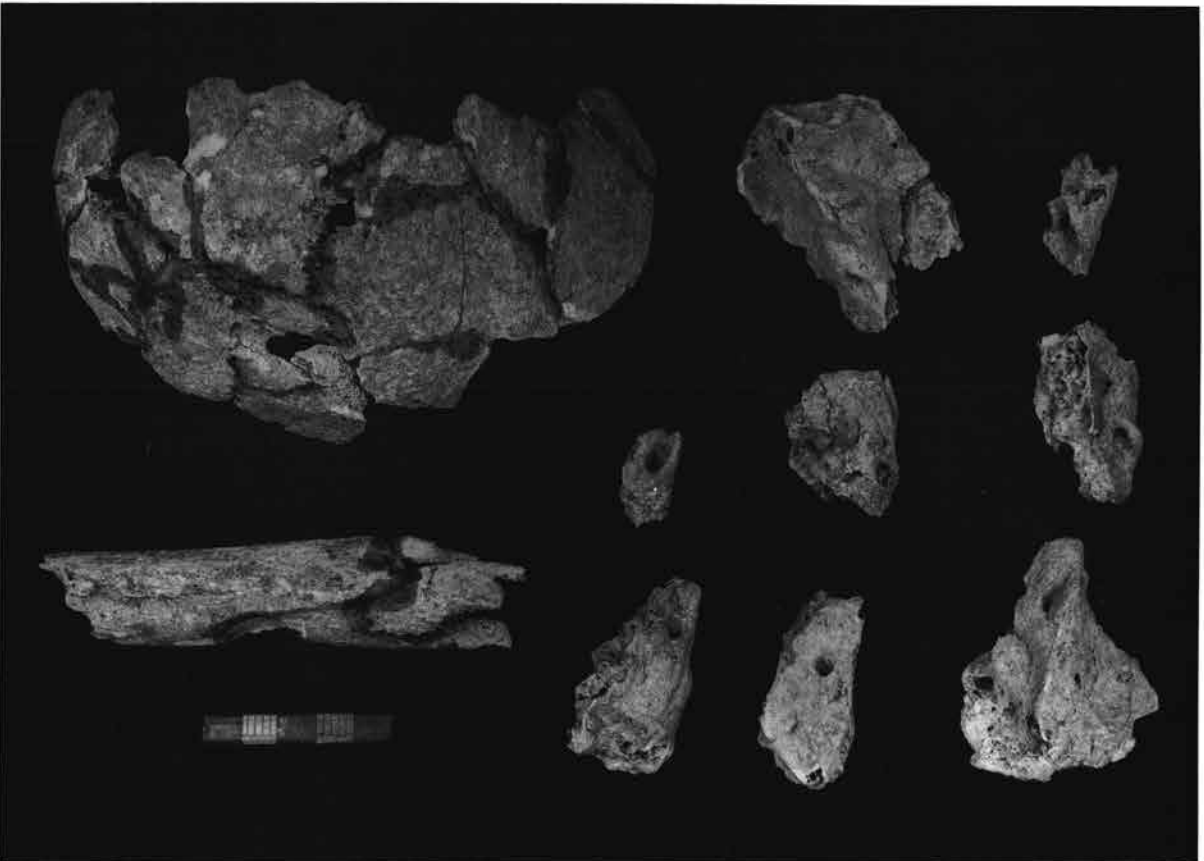


写真5 奥原30号墳出土の4個体分の頭蓋骨片と左大腿骨上部。

奥原古墳群

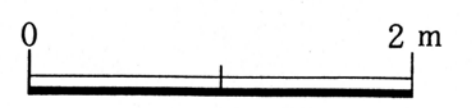
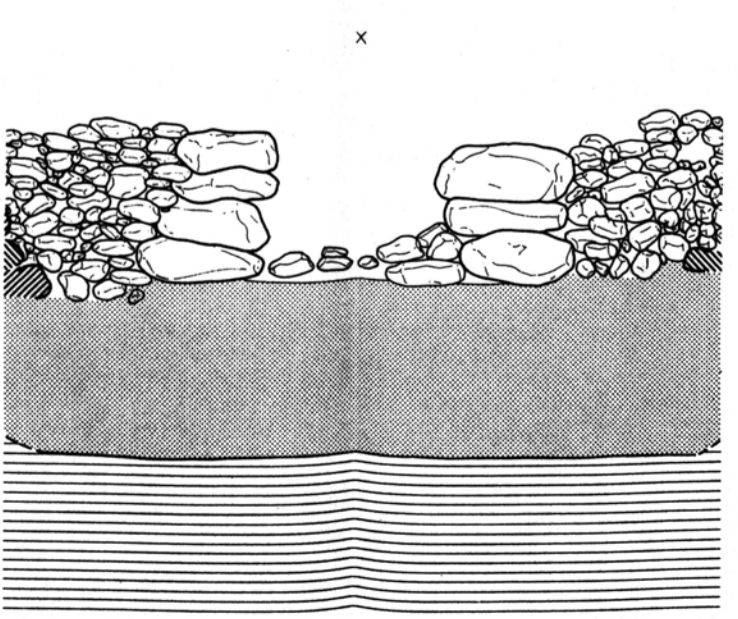
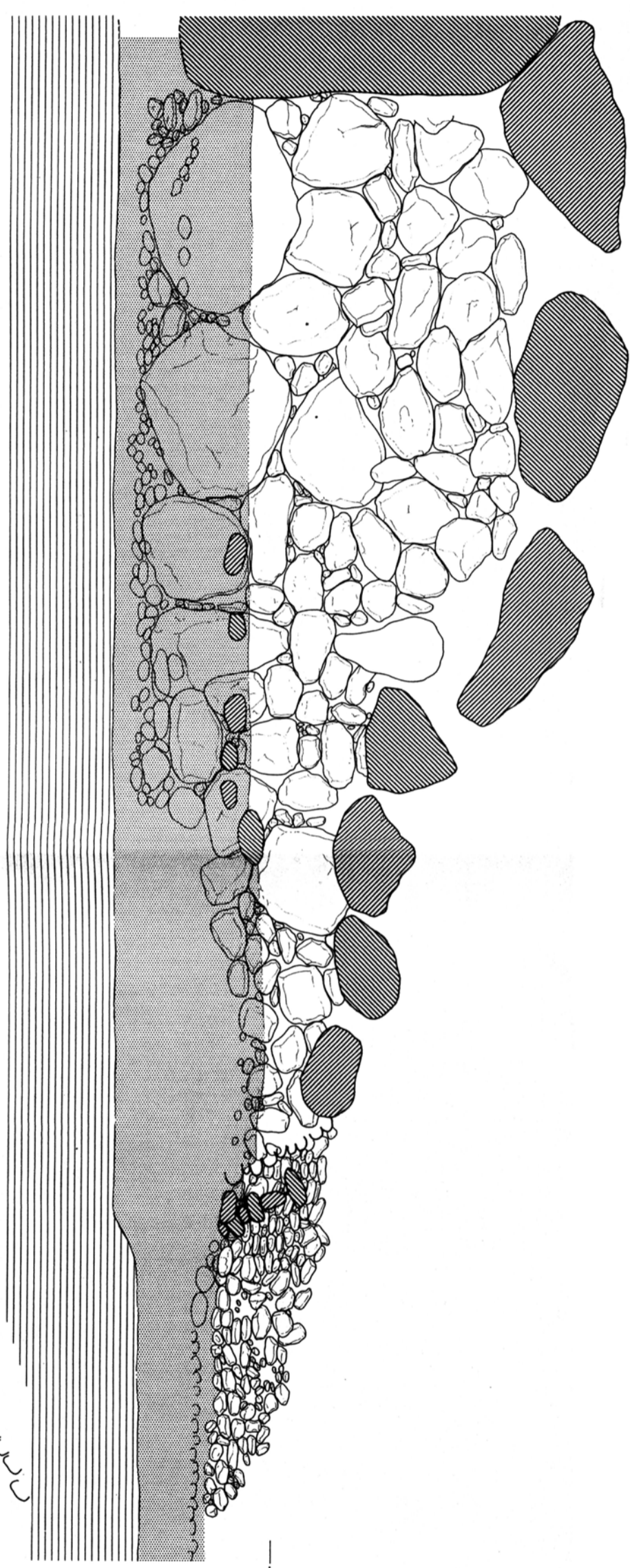
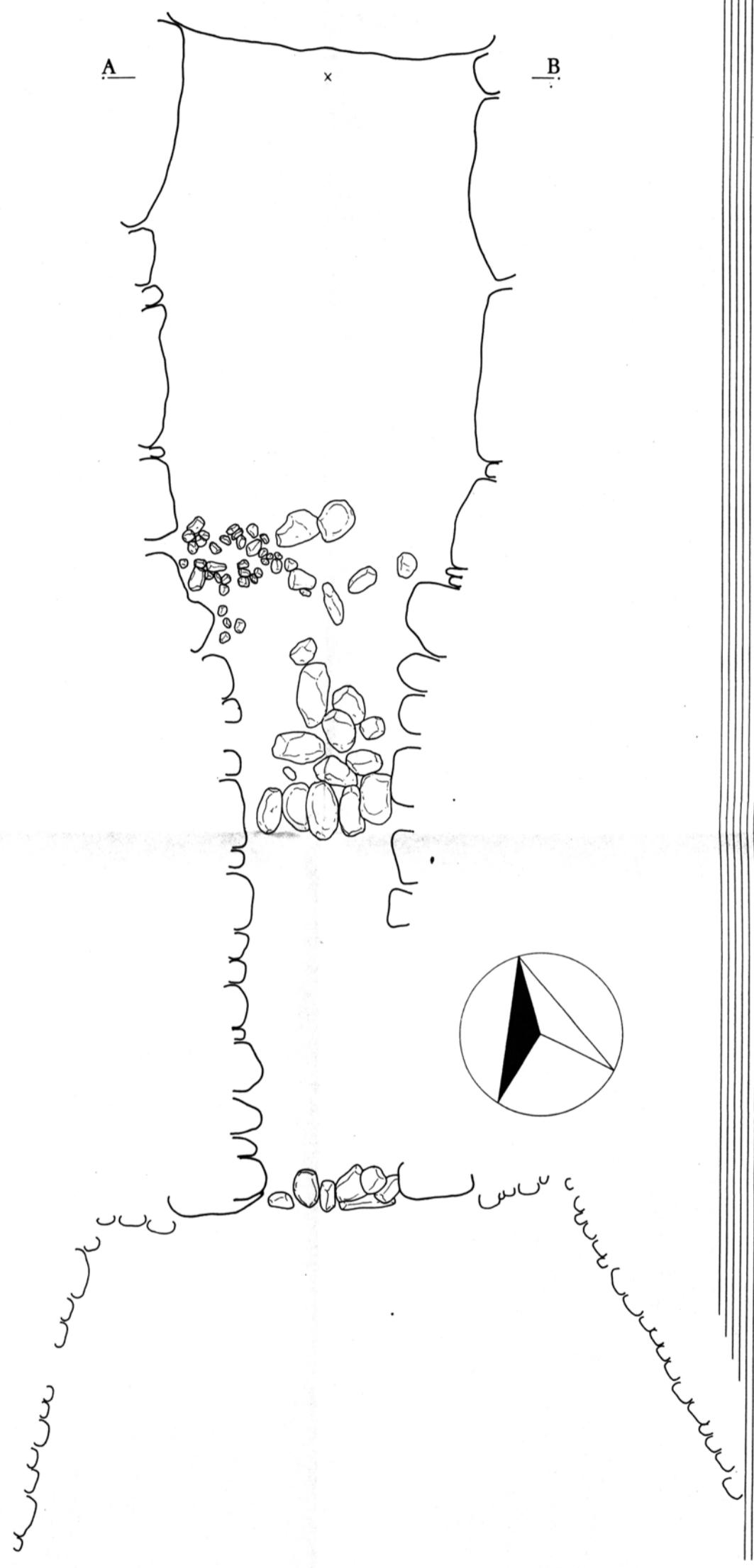
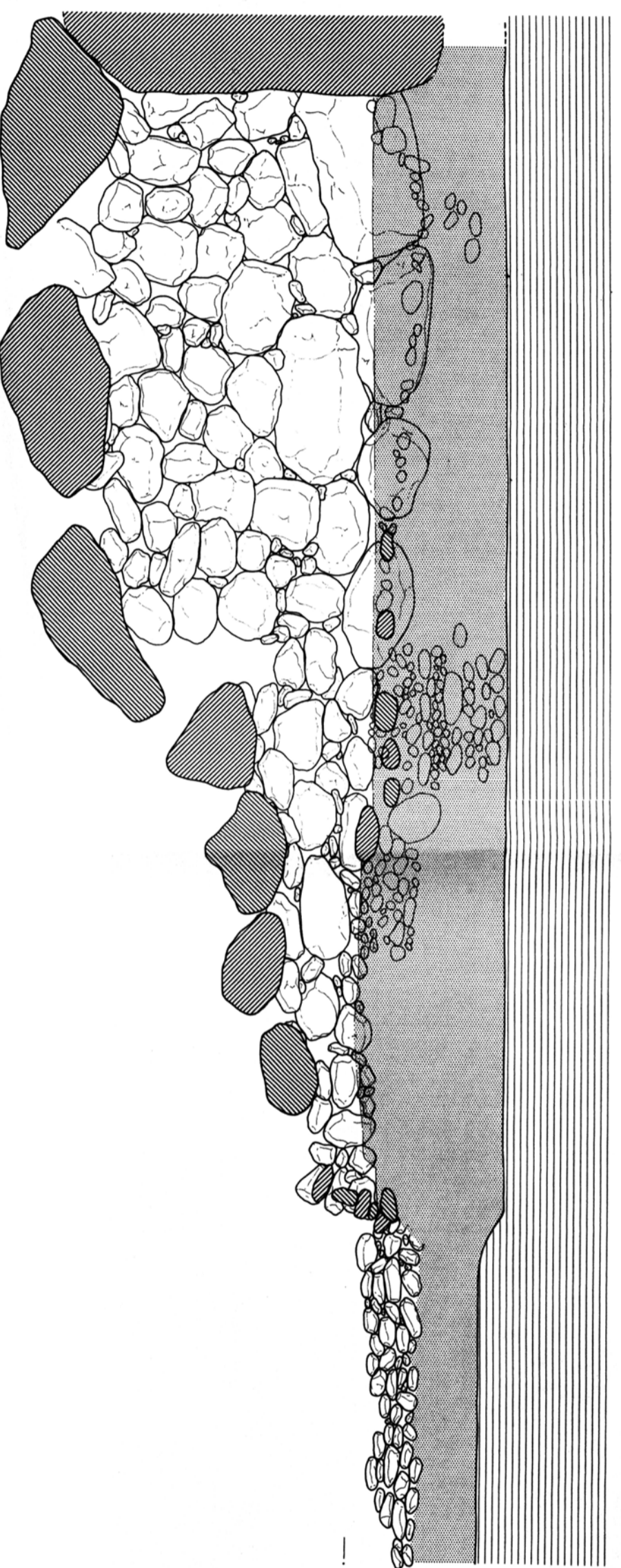
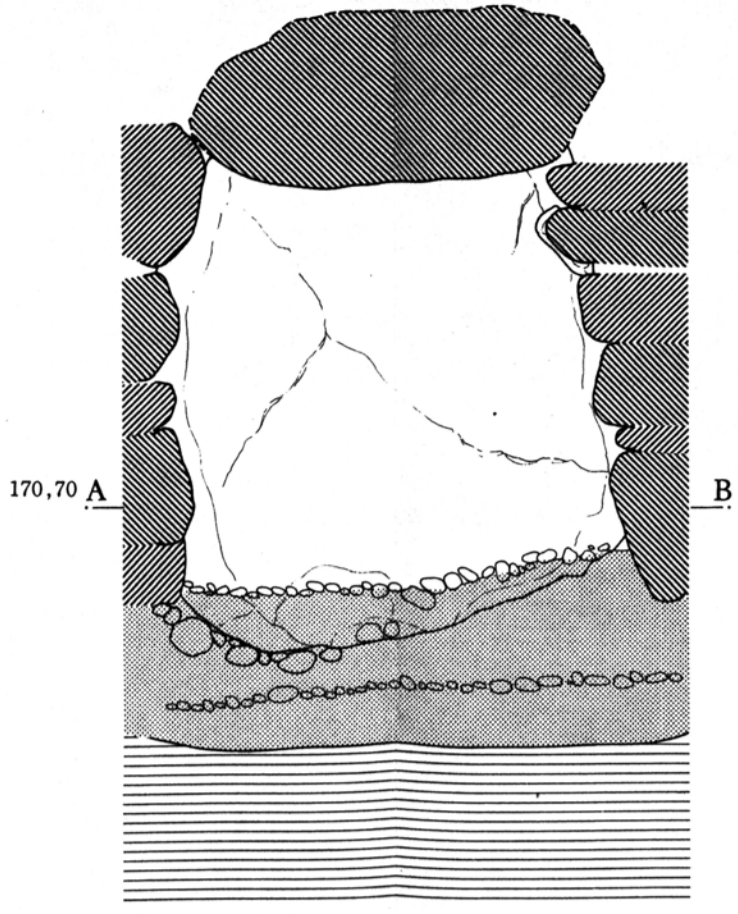
昭和58年3月20日 印刷

昭和58年3月31日 発行

編集者
発行者

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多群北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷者 朝日印刷工業株式会社



付図 I 53号墳石室実測図